取扱注意

放送大学開設予定授業科目講義内容案

昭和61年４月
第　４　版

放送大学学園
教務部教務課

目　　次

1. 基本科目

		頁	開設年次	作成年度	メディア
	（人文系）				
1	現代の人間観と世界観 ……	1	1	59(㊦)	TV
2	人間の歴史 ……	3	1	59(㊦)	R
3	文化の形成と普及 ……	5	2	60	TV
4	文学と芸術 ……	7	2	60	TV
5	生活と芸術 ……	9	1	59	TV
6	日本の教育 ……	11	2	60	TV
	（社会系）				
7	人間と社会 ……	14	1	59(㊦)	R
8	社会生活と法 ……	16	2	60	TV
9	比較政治Ⅰ ……	18	1	59	R
10	比較政治Ⅱ ……	20	1	59	R
11	比較経済・経営・社会 ……	22	2	60	R
12	日本経済と産業と企業 ……	24	1	58	TV
	（自然系）				
13	地球と宇宙 ……	26	1	58(㊦)	TV
14	物質とエネルギー ……	28	2	60	R
15	人間の生物学 ……	30	1	59(㊦)	TV
16	日本の自然 ……	32	2	60	TV
17	数学と人間生活 ……	34	1	59(㊦)	R

2. 基礎科目

	（人文系）				
18	哲学の基礎 ……	36	1	58(㊦)	R
19	古代中国の思想 ……	38	1	59(㊦)	R
20	近代の思想 ……	40	1	58	R
21	現代の思想 ……	42	1	58(㊦)	R
22	世界史と時代意識 ……	44	1	58	R
23	比較思想論 ……	46	2	60	TV

		頁	開設年次	作成年度	メディア
24	コミュニケーションと言語	48	1	58(㊦)	TV
25	思考と論理	50	2	60	R
26	人文地理学	52	1	59(㊦)	TV
27	行動科学	54	2	60	TV
28	心理学概論Ⅰ	58	1	59(㊦)	TV
29	心理学概論Ⅱ	60	1	58(㊦)	TV
30	教育学概論	62	2	60	R
31	日本語の基礎	66	2	60	R
32	作歌・作句	68	2	60(㊦)	TV
	（社 会 系）				
33	国家と法 Ⅰ	70	1	59	R
34	国家と法 Ⅱ	72	2	60	R
35	現代の経済と経済分析	74	1	58･59	TV
36	会 計 学	75	1	58･59	TV
37	社会科学の成立と発展	79	2	60(㊦)	R
38	現代社会論 Ⅰ	83	2	60	TV
39	現代社会論 Ⅱ	85	2	60	R
40	社会調査	87	1	58	TV
41	数理計画法入門	89	1	59(㊦)	TV
	（自 然 系）				R
42	基礎数学 Ⅰ	91	1	59	TV
43	基礎数学 Ⅱ	93	2	60	R
44	基礎数学 Ⅲ	95	2	60	R
45	基礎物理学Ⅰ	97	2	60	TV
46	基礎物理学Ⅱ	99	2	60	R
47	基 礎 化 学	101	2	60(㊦)	TV
48	基礎生物学	105	2	60	TV
49	基礎宇宙地球科学	109	1	59	TV
50	確率論・統計学	113	1	59	R
51	自然系実験	117	1	58	TV

3. 外国語

		頁	開設年度	作成年度	メディア
	（英　語）				
52	英語Ⅰ	119	1	58	TV
53	英語Ⅱ－A	123	1	59	R
54	英語Ⅱ－B1	125	2	60	R
55	英語Ⅱ－B2	127	2	60	R
	（独　語）				
56	独語Ⅰ	129	1	59	TV・R
57	独語Ⅱ－A	133	1	58（㊦）	R
58	独語Ⅱ－B1	135	2	60	R
59	独語Ⅱ－B2	137	2	60	R
	（仏　語）				
60	仏語Ⅰ	139	1	59	TV・R
61	仏語Ⅱ－A	143	1	58（㊦）	R
62	仏語Ⅱ－B1	145	2	60	R
63	仏語Ⅱ－B2	147	2	60	R
	（その他）				
64	ロシア語	149	1	58・59	R
65	中国語	153	1	（58・59㊦）	R
66	中国語Ⅲ			61	R
67	スペイン語	157	2	60	R

4. 保健体育

68	保健体育	161	1	59（㊦）	TV
69	体育実技		1		

5. 専門科目

	生活と福祉専攻				
70	生活史	163	2	60	R
71	家庭の本質	165	2	60	R
72	生活の社会学	167	1	58	R
73	衣服論	169	2	60	TV

		頁	開設年次	作成年度	メディア
74	食生活論	171	2	60	R
75	住 居 Ⅰ	173	1	59	TV
76	住 居 Ⅱ	175	2	60	TV
77	住 居 Ⅲ	177	3	61	TV
78	家庭経営学	179	1	59	R
79	家庭経済学	181	1	59 (㊦)	R
80	家族関係	183	3	61	R
81	生活福祉	187	3	61	R
82	母子保健	188	3	61	TV
83	成人の保健	192	4		TV
84	老人の保健	193	3	61	R
85	青少年の保健Ⅰ	197	2	60(㊦)	R
86	青少年の保健Ⅱ	199	3	61(㊦)	R
87	精 神 衛 生	201	3	61	R
88	人間の病気		4		R
89	衣生活概論	205	1	58 (㊦)	TV
90	衣生活の科学	207	3	59	TV
91	食 物 総 論	209	1	58	TV
92	食 物 各 論	211	1	58･59(㊦)	TV
93	余 暇 生 活	213	1	59	R
94	生活と福祉特論		4		
	発達と教育専攻				
95	教育思想	217	1	59	R
96	児 童 観	221	2	60	R
97	発達心理学Ⅰ	223	1	59	TV
98	発達心理学Ⅱ	225	2	60	TV
99	学習心理学Ⅰ	228	1	58	TV
100	学習心理学Ⅱ	235	1	59	TV
101	臨床心理学	237	3	61	R
102	深層心理学	239	3	61	R

		頁	開設年次	作成年度	メディア
103	教育社会学	241	2	60(㊦)	TV
104	教育の方法	245	3	61	TV
105	学習と指導		3	61	TV
106	道徳教育	247	3	61(㊦)	R
107	情操の教育	248	1	58	R
108	家庭教育	250	1	58(㊦)	R
109	学校教育	252	1	58(㊦)	TV
100	地域社会と学校	254	3	61	TV
111	言語と教育	256	3	61	R
112	文化と精神発達	258	3	61	R
113	青少年文化	260	1	59(㊦)	TV
114	青少年の指導	262	3	61	TV
115	カウンセリング	266	4		R
116	パーソナリティ論	267	3	61	TV
117	人間関係論	269	3	61	TV
118	知能と創造性	271	1	59	TV
119	認知と思考	273	4		TV
110	教育評価	274	3	61	R
121	乳幼児の健康と心理	276	2	60(㊦)	TV
122	児童の心理と教育	278	2	60(㊦)	R
123	青年の心理と教育	280	4		R
124	障害児の心理と教育	281	1	58(㊦)	R
125	生涯教育論	283	1	59(㊦)	R
126	言語障害	285	2	60(㊦)	R
127	発達と教育特論		4		
	社会と経済専攻				
128	犯罪と法	287	1	59(㊦)	R
129	現代の裁判	289	1	59(㊦)	TV
120	日常生活と法	291	2	60	TV
131	取引と企業の法	295	3	61	R

		頁	開設年次	作成年度	メディア
132	日本の社会と法	299	3	61	R
133	経済活動と法	301	3	61(㊦)	R
134	国際社会と法	303	2	60(㊦)	R
135	労働問題と法	305	3	61	R
136	政治思想Ⅰ	307	1	58	R
137	政治思想Ⅱ	309	1	59(㊦)	R
138	現代政治理論	311	1	58(㊦)	TV
139	現代の政治生活	313	3	61	TV
140	現代の国際政治	315	3	61(㊦)	R
141	日本の政治	317	2	60	TV
142	政治史Ⅰ	321	1	58	R
143	政治史Ⅱ	323	1	59(㊦)	R
144	政策科学	325	3	61(㊦)	R
145	近代経済思想	327	3	61	TV
146	経済発展論	328	3	61(㊦)	TV
147	産業組織論	330	3	60	TV
148	中小企業論	332	1	58(㊦)	R
149	国際経済学		4		R
150	日本経済史	334	1	59(㊦)	TV
151	欧米経済史	336	3	61(㊦)	TV
152	財政と金融	338	2	60	TV
153	社会学の理論Ⅰ	342	1	58(㊦)	R
154	社会学の理論Ⅱ	344	1	59(㊦)	R
155	社会構造と社会変動	346	3	61	R
156	地域社会学	350	3	61	TV
157	地域と生活	352	3	61	TV
158	マスコミュニケーション論Ⅰ	354	1	58(㊦)	TV
159	マスコミュニケーション論Ⅱ	356	1	58(㊦)	TV
160	社会と経済特論		4		

		頁	開設年度	作成年度	メディア
	産業と技術専攻				
161	技術史・技術論		2	60	TV
162	産業技術の動向Ⅰ	360	3	61 (㊦)	TV
163	産業技術の動向Ⅱ	362	4		TV
164	産業社会学		1	58	R
165	産業地理学	364	1	58 (㊦)	TV
166	産業と情報	367	1	58 (㊦)	R
167	産業と企業	369	1	59 (㊦)	TV
168	産業と資源	371	2	60	R
169	産業と環境	373	1	58 (㊦)	TV
170	経営管理Ⅰ	375	1	59	R
171	経営管理Ⅱ	377	2	60	TV
172	人事・労務管理	379	1	58	R
173	労働経済学	381	2	60	R
174	経営分析と財務管理	383	3	61	R
175	企業と会計Ⅰ	385	2	60	TV
176	企業と会計Ⅱ	387	2	60	R
177	マーケティング	389	1	58	R
178	経営組織論	391	3	61 (㊦)	R
179	経営戦略	393	3	61	R
180	生産管理とOR	395	1	58	TV
181	経営科学	397	3	61	R
182	システム工学	399	2	60	TV
183	人間工学	401	4		TV
184	情報工学	403	3		TV
185	計測と制御	405	1	58 (㊦)	TV
186	設計工学	407	2	60	TV
187	物質工学	409	3	61	TV
188	エネルギー工学	410	3	61	TV
189	流通と商業	412	1	58 (㊦)	R
190	サービス産業論	414	3	61	R

		頁	開設年次	作成年度	メディア
191	交通と通信	416	3		TV
192	産業と技術特論		4		
	人間の探究専攻				
193	哲学的人間学	418	1	59	TV
194	知識と学問の構造	420	1	58	R
195	行為と規範	422	1	58	R
196	美の本質と様態		4		R
197	文化人類学	424	2	60	TV
198	アメリカ論Ⅰ	426	2	60 (七)	TV
199	アメリカ論Ⅱ	428	3	61 (七)	TV
200	アジア論Ⅰ	430	1	59 (七)	R
201	アジア論Ⅱ	432	3	61 (七)	TV
202	ヨーロッパ論Ⅰ	434	3	61 (七)	TV
203	ヨーロッパ論Ⅱ		3		TV
204	アフリカ論	436	3	61	TV
205	日本文化論Ⅱ		3	61	R
206	哲学思想史	437	3	61	R
207	社会思想史	439	1	58 (七)	R
208	宗教理論と宗教史	441	1	59 (七)	TV
209	歴史の理論	443	1	58 (七)	R
210	記号と人間	445	1	58 (七)	TV
211	構造と解釈	447	4		TV
212	美術史と美術理論	448	3	61	TV
213	音楽史と音楽論	450	1	59	TV
214	演劇史と演劇理論		4		TV
215	文芸史と文芸理論	452	2	60	R
216	民族と音楽	454	3	61	R
217	日本言語文化論	456	1	58	R
218	和文古典Ⅰ	458	1	59 (七)	R

		頁	開設年度	作成年度	メディア
219	和文古典Ⅱ	460	2	60 (㊦)	R
220	和文古典Ⅲ	462	3	61	R
221	和文古典Ⅳ	464	4		R
222	漢文古典Ⅰ	465	3	61	TV
223	漢文古典Ⅱ	467	3	61	R
224	近代文芸Ⅰ	469	3	61 (㊦)	R
225	近代文芸Ⅱ		4		R
226	イギリスの言語文化	471	2	60	TV
227	アメリカの言語文化	473	2	60	TV
228	ドイツの言語文化	475	2	60	TV
229	フランスの言語文化	477	1	58 (㊦)	TV
230	ロシアの言語文化	479	1	58	TV
231	西洋古典	481	4		R
232	人間の探究特論		4		

自然の理解専攻

233	物理科学史	482	1	59	R
234	生命科学史	486	1	59	R
235	宇宙の構造と進化	490	2	60	TV
236	太陽系の科学	494	3	61	TV
237	宇宙像の変遷		3	61 (㊦)	TV
238	地球の科学Ⅰ	496	3	61	TV
239	地球の科学Ⅱ	498			
240	地球像の変遷	500	1	59 (㊦)	TV
241	大気と海洋	502	2	60	TV
242	生態学概論	504	2	60	R
243	現代資源論	508	2	60	R
244	現代物理学Ⅰ	512	3	61	R
245	現代物理学Ⅱ	514	3	61	TV
246	物質の科学Ⅰ	516	3	61	TV
247	物質の科学Ⅱ		4		R

		頁	開設年度	作成年度	メディア
248	脳と行動	520	1	58 (㊦)	TV
249	生命のしくみⅠ	522	1	59	TV
250	生命のしくみⅡ	524	1	58 (㊦)	TV
251	集団遺伝学	526	4		R
252	動物の行動	528	1	59 (㊦)	TV
253	植物の生理	530	4		TV
254	植物と菌の系統と進化	531	3	61	TV
255	動物の進化	533		61	TV
256	統計学特論	535	2	60	R
257	データ解析法	537	1	58	TV
258	数値計算とデータ処理	541	1	58	TV
259	現代数学特論Ⅰ	546	3	61	R
260	現代数学特論Ⅱ		3	61	R
261	現代応用数学	548	3	61	R
262	自然の理解特論		4		

6. 総合科目

263	生命論		4		R
264	心理と教育	552	4		TV
265	都市の研究	553	4		TV
266	生活と環境		4		R
267	情報化時代の産業・技術	556	4		TV
268	科学と宗教		4		R
269	文学の東西		4		TV

＝現代の人間観と世界観＝

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

私たちがいま生きている現代という時代には、人間と世界について、他の時代には見られない独特の考え方があるはずである。それを、科学・哲学・文学・芸術・宗教という5つの分野について、講義と対談によって考えてゆく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	まず「現代」とは何かを考え、「現代」の思想的・文化的な特質と、それにもとづいて形成された人間観と世界観の全般的な特徴を概括する。	中埜　肇（放送大学教授）
2	自然科学的世界像と人間Ⅰ	17世紀の西欧で遂行された「科学革命」は、科学的自然観を定着させ、世界像にも多大の影響を与え、さらに科学技術を基盤とする機械文明のもとで、人間観の変革をうながした。まず、この歴史的経緯を概観する。	中埜　肇 永井　博（東海大学教授）
3	自然科学的世界像と人間Ⅱ	20世紀になると、新物理学理論、特に量子論の形成によって、世界像は「古典的」から「現代的」へと変貌した。因果律に代って確率統計法則が科学の基本となり、新しい型の機械論が登場してくる。	同上
4	自然科学的世界像と人間Ⅲ	機械論の影響は生物科学に及び、生命の機械論的解明をおし進め、人間の科学的理解を深めるのに役立った。しかし、この傾向に全く何の問題もないかどうかを検討し、これからの人間像について考える。	同上
5	現代哲学から見た人間と世界Ⅰ	現代哲学を大別すると、「考える我」を中心に据えたドイツ・フランス系の超越論的哲学と、実証主義的発想を受け継ぐ英米の分析哲学とに分かれる。世界と人間の見方はこの二つの流れでどのようになるか。	中埜　肇 竹市明弘（京都大学教授）
6	現代哲学から見た人間と世界Ⅱ	「ことがら」に即して考えるという実証主義の精神を生かしつつ、同時に素朴で日常的なものの見方を徹底的に反省することから、現象学や解釈学という、新しい世界と人間の見方が成立する。	同上
7	現代哲学から見た人間と世界Ⅲ	現代思想の特徴は、これまでの実体的な見方を排して、物を機能や構造のなかにとけこませることである。しかし私たちの具体的な世界概念や人間経験は、むしろ逆に「物」や「個体」という見方の確立を求めはしないか。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代文学に現れた人間像と世界像Ⅰ	まず、文学は人間・世界をどのように捉えるかを考える。つぎに現代文学の<現代性>とは何か、を考える。そして現代文学を構成する主要な流れを、①心理主義的文学 ②マルクス主義的文学 ③キリスト教的文学に分類し、それぞれの人間観と世界観を考える。	中埜　肇 山形和美 （筑波大学教授）
9	現代文学に現れた人間像と世界像Ⅱ	上の三つの主要な流れを代表すると思われる作家・作品をあげながら、現代文学にあらわれた人間像・世界観を具体的に確認してゆく。	同　上
10	現代芸術から見た人間と世界Ⅰ	自分で直接に見ることのできる自分の顔かたちはごく限られており、それについて多くを知ろうとするとき、鏡や他人の眼のような媒介が必要となる。現代人と現代社会がいかなるものであるかを知ろうとするときは、われわれにとって事態は類似の構造をもっており、われわれは人間と世界を映す鏡やこれらを捉える他人の眼を必要とする。芸術作品はこのような意味での鏡のひとつであり、芸術家は同時代を客観視する鋭い眼である。 ―このような認識にもとづいて、ここでは主として造形芸術の具体例によって、現代の個人としての人間、人間関係、生態系としての社会の基盤である環境世界の特徴をさぐり、その意味を哲学的に考える。	中埜　肇 増成隆士 （筑波大学助教授）
11	現代芸術から見た人間と世界Ⅱ		同　上
12	現代芸術から見た人間と世界Ⅲ		同　上
13	現代宗教から見た人間と世界Ⅰ	宗教の性格と本質は、その崇拝の中心である神の内容によってきまる。神概念は、(A)非形態的、(B)形態的、(C)人格的の三つに分けられる。そのうち真の超越性は人格的独一神に求められる。	中埜　肇 小川圭治 （筑波大学教授）
14	現代宗教から見た人間と世界Ⅱ	人間を客観的に見る科学の立場に対して、哲学では主体としての人間そのものをとらえる。その主体の中心を人間の理性におく自律的・内在的・主観的な見方に対して、超越者としての神から見る超越的・客観的なとらえ方がある。	同　上
15	現代宗教から見た人間と世界Ⅲ	人間のとらえ方に二種類があったように、世界に対する見方にも、内在的・主観的なものと超越的・客観的なものがある。前者で世界は人間の活動の場所、利用する資源となる。それに対して世界を与えられたものとして、世界そのものとして見る立場があるはずである。	同　上

＝人間の歴史＝

― 宗教にみる日本女性史 ―

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本人の歴史的探究の中で最もおくれているのが、女性史の分野である。その理由として、日本の女性の社会・政治・文化等々の分野への参加が、時間的・量的におくれたことが考えられる。その点において、史料的にも若干恵まれているのが宗教の分野である。本講では日本女性史を宗教の面から具体的に探究するのがねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本史にみる女性	日本史上に登場する女性をかぞえあげ、日本女性の政治的・社会的等々の分野への進出のおくれを歴史的に概観する。それをふまえて、宗教の世界における日本女性解放史の概略を、古代から現代へと歴史的に辿って、本講の予備知識にあてる。	笠原一男（放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	古代仏教の聖域と女性	日本の古代仏教の大寺院＝聖域が女性の立ち入りを頑強に拒否し、女性の成仏・往生において男性と差別する実状を具体的にながめる。そしてそうした歴史的事実がなぜ生まれたかを史料によって探究する。	小栗純子
3	古代仏教と巷の女性	古代の巷で生活する女性と古代の仏教との関係を、往生伝や御利益説話を史料として探究する。それらの往生伝などにみえる女性は、極楽往生のために、どのような宗教的・人間的・倫理的条件が要求されたかを具体的に考える。	笠原一男
4	女人往生の諸条件	往生伝にみる巷の女性の極楽往生の伝承を整理すると、往生に必要な宗教的条件と人間的条件が知られる。ここでは往生伝を史料として古代の女性の往生の有様と条件を具体的に探究する。	同上
5	鎌倉仏教と女人往生	鎌倉仏教の誕生によって、仏教の救いが出家・在家を問わず、全日本人に開放された。ここでは鎌倉仏教の特質を古代仏教との比較のなかで考え、女人往生論誕生の必然性ともいうべきものを探究する。	同上
6	法然の女人往生論	鎌倉仏教の最初の開祖が法然である。ここでは法然の『御家人の妻への手紙』『無量寿経釈』『念仏往生要義鈔』『百四十五箇条問答』『法然上人行状画図』などを史料として、法然の女人往生論を探究する。	小栗純子
7	平家物語と女人往生	平家物語は全巻を通して仏教思想で貫ぬかれている。そこには平家の公達や平家にまつわる女性の生活がえがかれている。ここでは白拍子（祇王・祇女・とじ・仏）から皇后建礼門院にいたる女人往生について考えてみる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	親鸞の女人往生論	親鸞の思想は「悪人正機」と「不断煩悩・得涅槃」に象徴される。ここではそれらの親鸞の思想を『歎異抄』などで究明し、親鸞の思想における女人往生論誕生の必然性ともいうべきものを探究する。	笠原一男
9	道元の女人成仏論	道元は古代仏教の聖域における修行の男女平等論、女人成仏論を最も強烈に主張した人である。聖域の破壊こそ仏恩報謝になるとまでいっている。道元の修行における男女平等論と女人成仏論をその著『正法眼蔵』によって考えてみる。	同上
10	日蓮の女人成仏論	日蓮は『女人成仏鈔』『女人往生鈔』『日眼女釈迦仏供養事』『千日尼御前御返事』『月水御書』など多くの女人成仏論・女人往生論を書いている。日蓮の女人成仏論には「女人為本」の思想が見られる。ここで日蓮の女人成仏論・女人往生論を考えてみる。	同上
11	存覚の女人往生論	存覚は本願寺創始者覚如の長子で、鎌倉時代の真宗の碩学である。彼の『女人往生聞書』は、後世の女人往生論に大きな影響を与えている。存覚の女人往生論には「女人正機」の思想がみられる。以上の問題を『女人往生聞書』によって考える。	同上
12	蓮如の女人往生論	蓮如は本願寺の中興の祖といわれ、戦国乱世の民衆に念仏の救いをひろめた人である。蓮如は御文とよばれる数多くの手紙で布教している。ここでは御文を通じて、蓮如の女人往生論を考えてみる。	同上
13	近世の女人往生論	本願寺・高田専修寺・仏光寺は近世社会において、大幅な発展をとげた。ここでは本願寺法主の『消息』、高田専修寺の『高田御書』、仏光寺の『仏光寺御書』、それに巷の布教書としての『女人教化集』などによって、近世の女人往生論を探究する。	小栗純子
14	近世の女人往生伝	古代の巷における布教の手段としての往生伝は、近世に入って大幅に復活した。その数は尨大なものである。ここでは浄土宗系、仏光寺系、高田専修寺系などの往生伝と本願寺系の妙好人伝によって、近世における女人往生の諸条件を具体的に考えてみる。	同上
15	女人往生思想の回顧と展望	以上14回にわたって日本の女性が古代から近世にいたる間、宗教の世界において厳しい差別から解放されて来た歴史を探究して来た。ここでは、その流れをもう一度ふり返えり、更に近代から現代における女人往生思想の流れを展望する。	笠原一男 小栗純子

＝文化の形成と普及＝

― 日本仏教の形成と普及 ―

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本人は外国に学ぶことによって、数々の文化を形成して来た。そのなかで、最もながい歴史と普及度を誇っているのが仏教文化である。日本仏教の形成と普及の歴史のなかで、仏教界の宗祖＝英雄が果した役割に視点をむけて考える。なかでも、親鸞と蓮如を具体例として、文化の形成と普及という問題を考えてみる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本仏教の形成	インドに生まれた仏教は、中国・朝鮮を経て、6世紀の前半に日本に伝わった。そのインドの仏教は、飛鳥・白鳳、奈良、平安をへて、鎌倉時代にいたる約７００年の間に、仏教の日本化の道を辿った。その間の事情を、仏教伝来から鎌倉仏教の誕生の歴史のなかで考える。	笠原一男（放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	奈良時代の民衆と仏教	奈良時代の仏教は、どのようにして民衆に普及していったかを、布教の姿を通じて論ずる。そして、日本霊異記の世界によって奈良時代の仏教が、民衆や社会にたいして果した役割をのべる。そこに見られる奈良時代の仏教の救いは、悪人切り捨てであった。	同上
3	平安時代の日本人と仏教	平安時代の日本人のなかに、仏教がどのようにして浸透していったかを、数々の往生伝を用いて考える。平安時代の仏教が日本人に教える往生、成仏の条件は、正直・慈悲を実践することであった。平安時代の仏教が説いた仏の救いは、善人こそ救われるという「善人正機」であった。	同上
4	仏教の普及と鎌倉仏教	インドの仏教の日本仏教化の終着駅は鎌倉仏教の誕生であった。鎌倉仏教によって、仏教が日本人のすべてに普及して行く条件がととのったのである。その事情を、鎌倉仏教の特色、法然、親鸞の発見した救いの道と救いの条件などを例として論ずる。	同上
5	比叡山の親鸞	親鸞は叡山に登り、あらゆる修行の末に、人間の本質は煩悩の深い悪人であることを知った。そして、煩悩具足の悪人を優先して救ってくれるのが弥陀の本願の念仏であることを知った。親鸞は、２９歳までの叡山の生活のなかで、悪人正機の思想に到達した。	同上
6	悪人正機と本願ぼこり	親鸞の到達した思想は「悪人正機」の一語につきる。悪人正機の思想を最も端適に説いたのが『歎異抄』に収められている親鸞の言葉である。『歎異抄』を史料として、親鸞の悪人正機の思想を共に考える。そして、悪人正機と不可分の関係にある本願ぼこりを論ずる。	同上
7	親鸞の世界	親鸞をめぐる思想的・人間的等々の問題を、『歎異抄』を史料として、共に解読しながら考える。そこでは、親鸞における師と弟子、報恩の思想、慈悲などの問題を中心として論ずる。さらに、民衆への念仏の普及に大きな役割を果した『和讃』を読む。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	念仏の普及と弾圧	民衆のための宗教が普及する時、必ずおこるのが政治権力による弾圧である。親鸞による念仏の布教と、その成果の増大に比例しておこったのが政治権力からの念仏の弾圧であった。親鸞は政治権力と宗教とのあいだにおこった弾圧にたいして、どのような態度をとったか。	笠原一男 小栗純子
9	親鸞の流罪	親鸞の激しい布教は、親鸞の身に政治権力による流罪という事態を生んだ。親鸞は流罪についてどう考えたか。親鸞は配流の地越後で、どのような生活を送ったか。やがて流罪を解かれた親鸞は、新しい布教の地として関東を選んだ。関東の農民にたいして親鸞は何を与えようとしたか。	同　上
10	親鸞における政治権力と宗教	親鸞の念仏布教は京都で親鸞を流罪に追いこんだ。その後、親鸞は関東で２０年間にわたって、念仏の布教を弥陀への報恩と考えて、激しい布教にあった。その結果、関東における急激な念仏の普及がみられた。ここでも親鸞は、またまた権力による弾圧をうけた。	同　上
11	親鸞以後の真宗	日本の仏教界が生んだ英雄親鸞は、鎌倉時代の民衆に念仏の救いを大幅に普及させて世を去った。親鸞以後の真宗を、室町時代の民衆に普及させたのが仏光寺教団であった。仏光寺を真宗諸派の中の王座につかせた秘密とはなにか。それが名帳と絵系図であった。	同　上
12	戦国時代の真宗と蓮如	真宗の王座を仏光寺の手から本願寺に奪いとったのが、本願寺第八代法主蓮如であった。蓮如が生まれたころの本願寺は寒々としていて、参詣の人一人もなしといわれるほどであった。その本願寺を「あたかも仏国が如し」といわれるほどに中興したのが蓮如であった。	同　上
13	御文の世界	蓮如による念仏の普及には、いろいろの条件がそろっていた。蓮如がとった布教の特色は手紙、つまり御文の活用であった。ここでは御文を共に解読しながら、蓮如の思想の種々相を究明する。念仏者の理想像、乱世を生きる方法、念仏は現世利益の思想、女人往生などに論及する。	同　上
14	念仏の発展と蓮如	蓮如は戦国乱世の民衆に念仏を普及させるために、あらゆる努力を惜しまなかった。蓮如はまず民衆を身近かに引きつけることこそ、布教のための第一歩であるという。そのためには、布教者は「貴族ぶるな」といっている。民衆の心のつかみ方などを具体的に教える。	同　上
15	一向一揆～激励の世と仏教～	蓮如の努力によって戦国時代の民衆が、念仏によって救われ、本願寺によって大幅に組織された。本願寺教団の発展は、それぞれの地域に政治権力とのあいだに、武力闘争や反体制的動きを生んだ。これが一向一揆であった。	同　上

＝ 文 学 と 芸 術 ＝

〔主任講師：今道友信（放送大学客員教授）〕

全体のねらい

文学を世界文学の視野においてとらえることは、古今の文学者や哲学者の夢のひとつである。漱石の文学論もアリストテレースの詩学も、時と処とを異にしても、その夢を果たそうとした企てであった。本講義は、国文学と西洋文学とにわたって、テキスト研究を介し、文学を他の芸術との照応において、省察する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	西洋文学の起源ーホメーロスとヘーシオドス	• ギリシャ文化について • 文学の概念 • 叙事詩について	今 道 友 信 （放送大学客員教授）
2	古典ギリシャの文学 情詩と劇詩	• 情詩 • ギリシャ悲劇 • 喜 劇 • その後のギリシャ文学	同 上
3	ローマ古典文学	• ローマ文化とキケロー • 詩人たち • ローマの芸術	同 上
4	聖書の世界と超自然の光芒	• 聖 書 • 旧約聖書と芸術 • 新約聖書と芸術 • 超自然の光芒	同 上
5	ヒューマニズムの問題	• ルネサンス • 後期ルネサンスの文学 • 後期ルネサンスの芸術	同 上
6	黄 昏 と 死	• 黄昏（Le Crepusculaire） • L′ Insolite（異常なこと） • 死	橋 本 典 子 （放送大学助教授）
7	模 倣 と 批 評	• 近代人と批評の自立 • 『ラオコーン』 • 発想と批評 • 模倣と想像力 • 視点の多様性と時間	坂 部 恵 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	永遠と時間		今道友信
9	フィクションとイメージ		同上
10	日本文学の風土性		高橋良雄（東京女子大学短期大学部教授）
11	歌論一古今和歌集仮名序		藤平春男（早稲田大学教授）
12	物語論一源氏物語「蛍」巻		秋山虔（東京女子大学教授）
13	幽玄論		久保田淳（東京大学教授）
14	演劇戯曲論一近松・南北・黙阿弥		諏訪春雄（学習院大学教授）
15	現代文学		三好行雄（東京大学教授） 今道友信

＝ 生 活 と 芸 術 ＝

— 日本生活文化史 —

〔主任講師：熊倉功夫（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

日本の芸術は西洋の芸術にくらべて独自の性格を持っている。芸術が純粋にその美を目標として創造されるのではなく、日本では生活の道具として制作される。また喫茶の習慣が、古今東西の美術工芸を取り込んで、茶の湯という独自の生活文化も作っている。芸能と工芸を軸に日本人の生活と芸術が結びついた文化の歴史を論じる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本人の生活と芸術	生活文化とは何か。平安・鎌倉時代の貴族を中心とする生活の芸術化とその伝統。日本人の生活（衣・食・住）の基本的なスタイルが確立した室町時代以降における生活に即した新しい文化とその普及。茶の湯を具体的に見ながらその意義などを考えてみたい。	熊倉功夫（筑波大学助教授）
2	茶の文化の成立	人類がいつから茶を飲用したかわからないが、約二千年前の中国の文献には茶の記事が初めて現われる。中国の茶の文化は唐代に大きく成長し、日本にも九世紀に伝わっている。さらに鎌倉時代に再び茶の文化が禅宗とともに渡来し、日本的な展開をとげた。	熊倉功夫
3	供える花と飾る花	「花を瓶に挿す」ことは、まず、仏に供える供華として、とくに密教伝来の九世紀以降に盛んとなる。また平安時代の貴族は愛する草花を瓶に立てて楽しんでいた。鎌倉時代の絵巻などを例に、それらの供花や観賞花が生活空間に取り入れられてゆくさまを考える。	熊倉功夫 山根有三（群馬県立女子大学教授）
4	南北朝時代の美意識	鎌倉末以後、禅宗を背景に数多く輸入された中国宋元時代の書・画・工芸品は武家や公家によって唐物として珍重され茶寄合や花合せが盛んとなる。こうした転換期南北朝時代の美意識をバサラと呼ぶ。異風異体のバサラの現代的意義を考える。	熊倉功夫
5	書院造りと茶の湯	室町時代の武家文化の発達に伴い、武士の礼法、室礼、飲食などの面で新しい様式が完成される。そうした様式の一つの核となるのが書院造における茶の湯で、台子の茶といわれる規式正しい道具の扱いや点前法が行われたといわれる。書院の茶を再現しながら具体的に述べる。	熊倉功夫
6	室町時代のいけばな	「花を瓶に挿す」ことが、技術や方法となりはじめたのは、室町時代、十五世紀の中葉。その核となったのは、座敷飾りの中心をなす「三具足の花」。座敷飾りの普及は略式の飾りを生み、いけばなの役割が増大する。それらを初期の花伝書などにより述べる。	熊倉功夫 山根有三
7	わび茶の成立	京・堺などの都市には経済的に豊かな新興町衆が登場する。彼らは武家貴族の遊びであった茶を自らの生活のなかにあみなおし、“やつし”の美ともいうべき粗相の美をもって茶の湯の建築や道具を創造した。村田珠光と武野紹鷗の茶をとおしてわび茶の成立をみる。	熊倉功夫

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	千利休と桃山文化	わび茶の大成者千利休は堺の町衆として生まれ、17世紀すなわち下剋上の時代を生きぬいた茶人であった。桃山文化をいろどるわびと黄金の文化、豊臣秀吉と利休の葛藤、かぶく美へのあこがれ等、利休の茶の湯と生涯を通して下剋上の文化とその終焉をたどる。	熊倉功夫
9	茶室の世界	わび茶の発展とともに完成された茶室とはどのようなものであったのか。日常生活の様式を借りながら、非日常的な体験を創造するために、庭や茶室に新しい工夫をこらし主客の礼法を完成させたのがわび茶である。わび茶の茶室にみる特異な空間と造型を具体的に検討する。	熊倉功夫
10	池坊専好の立花	室町末から座敷飾りとしての花以外に花を立てること自体を楽しむ花会が行われた。江戸初期の後水尾天皇は寛永年間に宮中や仙洞御所でしばしば花の会を開かれたが、その花会を指導したのが池坊専好（二代）で、この専好によりいけばなの古典、立花様式が完成。	熊倉功夫 山根有三
11	桂離宮と寛永文化	16世紀末の桃山文化と18世紀初頭の元禄文化の間にはさまれた17世紀前期の文化を寛永文化と呼ぶ。社会が安定し、洗練度を増した京都の文化のなかに伝統の復活と新しい意匠の創造が見られる。桂離宮を主題にすえて、近世文化の出発をたどりたい。	熊倉功夫
12	町人文化と建築	元禄文化の時代を過ぎると、真の町人文化の隆盛をみる。経済の実権が町人に移り、町人の生活のうちにさまざまの美術工芸品があふれてくる。また町人の遊びの世界は遊郭や遊芸にひろがり、みごとな遊びの文化を作りあげた。	熊倉功夫
13	料理文化の系譜	日本料理は見る料理ともいわれる。日本料理が芸能的な性格をその源流に持っていたためであろう。まず作るところを見せる式包丁、あるいは器の美を誇る懐石料理。そうした日本料理の伝統を伝承と思想のうちにさぐってゆく。	熊倉功夫
14	近代の工芸運動 －民　芸－	江戸時代の民衆の工芸や、あるいは朝鮮半島の工芸の美に触発された近代の工芸運動に、柳宗悦の創始した民芸運動がある。そこには近代と反近代、西洋と東洋、都市と農村といった多様の問題を含み、日本人の生活文化を考えるユニークな論が隠されている。	熊倉功夫
15	近代と伝統文化	現代の日本人の生活は歴史上、かつて見ることがなかった大きな変革期を迎えている。伝統文化はますます現代人にとって理解が困難となる一方、日本文化に対する国際的関心は高まっている。こうした生活文化の現状を考え、将来への展望を得たい。	熊倉功夫

＝ 日 本 の 教 育 ＝

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本の教育の特色を、諸外国との対比を視野に置き、それと同時に、歴史的な系譜をふまえて掘り下げていきたい。１５回は、初等教育から高等教育への流れを追う形で構成してある。なお、巾の広い視野を必要とするテーマなので、放送教材作成にあたって、さまざまな専門家の協力を得た。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近代化と教育	日本の近代化を支えたのは教育の力だといわれる。たしかに、量的な普及という面で、日本の教育は、短期間に成果をあげた。しかし、質的な面では、急速な近代化のもたらした歪みが見受けられる。近代化の光と影は、現在、どのような姿を見せているのか。	深谷昌志
2	学 校	教育の中心は、なんといっても、学校教育であろう。そして、日本の学校は、社会的な期待に添った形で、多くの機能を果してきた。しかし、このところ、学校の機能を見直そうとする気運が強まっている。学校のどこに問題が潜んでいるのであろうか。	同 上
3	教 育 費	教育費については、伝統的に、受益者負担をめぐって論議が重ねられてきた。そして、公共による負担への働きが世界的な傾向であった。しかし、日本に限らず、欧米でも、教育費の公共負担をとの範囲にとどめるのかが社会問題になりつつある。	同 上
4	授 業	日本の教育のひとつの特色は、知識や技術を伝達するさいのたしかに見出しえよう。そうした成果が、学力の高さとなってあらわれるが、ここでは、一斉授業の系譜をたどりながら、日本の授業の持つ功罪を考察していきたい。	同 上
5	教 師	教職のあり方をめぐって、聖職論や労働者論、専門職論などが論じられてきた。全体として、教師たちの間に、専門職志向への動きが目につく。教師たちは、専門職のイメージの試に、教職がどのような形をとるのが望ましいと思っているのであろうか。	同 上
6	教 科 書	明治以後の教科書をみると、授業の形態に応じていろいろの種類のものがある。それらをみながら「教科書とは何か」を考えたい。また、外国の教科書のなかに私たちにとって参考となるものを探ってみたい。	天野正治（筑波大学教授）（国立教育研究所教授）
7	教 科	私たちは学校というと、すぐに国語・算数・社会といった教科を思い浮かべる。だが、教科というのは絶対不変のものではなく、歴史により、国によってさまざまの形をとる。今、わが国や世界において、教科の再編成がどのように進んでいるかを探る。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学力	入試は学力をはかることを目標にしているのだが、わが国の入試問題には知識・理解に関わる問題が多く、思考力、興味・関心、意欲などの側面が軽視されている。国際学力調査の結果なども含め、真の学力とは何かを探る。	天野正治
9	制服	今、大学では制服・制帽がほとんど姿を消したが、中学や高校の多くはそれを義務づけており、「服の乱れは非行のバロメーター」などと言われる。それは仮個性の型にはめる教育のあらわれではないのか。制服の歴史をさぐり、諸外国の様子などもみてみたい。	同上
10	非行	校内暴力やいじめなど社会問題化している現代の青少年非行について、その原因、背景、克服策などについて、実際にこの問題にとり組んできた人々の提言をもとに考える。現代の青少年の規範意識についても探ってみたい。	同上
11	国立と私立	我国の高校生の28％が、そして大学生の74％が、私立学校に在籍している。公立と私立の併存が、日本の中等教育、高等教育の一つの特徴といえよう。これまでの日本の教育拡大は、そのかなりの部分を私学に、依存してきた。しかし、その反面では、公私間の授業格差をもたらしており、こうした経済負担の格差を、いかに考えるべきかをめぐって、さまざまな議論がある。ここでは、こうした問題点の検討を行う。	潮木守一（名古屋大学教授）
12	入試選抜	高校入試、大学入試をめぐって、さまざまな議論がなされている。高校はいまや中卒者の95％が進学するところとなっているが、その入試選抜をめぐる競争は、依然として厳しいものとなっている。一体、こうした入試競争の背後には、いかなる背景がひかえているのであろうか。また、大学入試をめぐっても、さまざまな改革案が提出されているが、一体、日本以外の国々では、いかなる方法がとられているのであろうか。	同上
13	教育と産業	日本の産業の海外進出はめざましく、多くの国々はこうした日本の経済的成功に、きわめて強い関心を払っている。外国の関係者は、こうした日本の奇跡の原因を、日本人の教育水準の高さに求めたり、あるいは企業内訓練組織の充実に求めたりしている。しかし、その反面、日本の教育が余り職業教育を重視していない、という事実を指摘する見方もある日本では、一体、教育と産業とは、どのような関係にあるのであろうか。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
14	学　歴　社　会	日本は学歴社会だとして、さまざまな批判をあびているが、一体、学歴社会とはどんな特徴をもった社会のことをいうのであろうか。また、実際問題として、日本はどの程度まで、学歴社会としての特徴をもっているのであろうか。こうした特徴は、どのような歴史的な背景から生じてきたのであろうか。日本以外の国では、学歴とはどのような意味をもち、そこには、どのような変化が現れはじめているのであろうか。	潮　木　守　一
15	生　涯　教　育	人生一生涯が、学習の過程とする考え方が登場するとともに、生涯学習論が多くの論議を呼んでいる。社会生活の複雑化、職業生活の高度化は、これまでの教育のあり方、考え方に、新しい発想の転換を求めている。生涯学習とは、一体どのような考え方を意味しており、現実問題として、生涯学習はどうような形で、具体化されつつあるのであろうか。新なメデイアの登場とともに、人間の学習スタイルは、どのように変わりつつあるのか。	同　　上

＝ 人 間 と 社 会 ＝

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会と人間の関係を探究することは、社会学のもっとも中核的な課題であると同時に、その明確化はきわめてむずかしい。このコースの前半では、動物としての人間というわれわれの存在の根源にまでさかのぼり、社会と人間の関係の多様性を学習し、後半ではそれをふまえて、現代日本の社会の諸問題をとらえる手がかりを用意したい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	社会とは何か	「社会」ということばによって、どのようなことが意味されるのであろうか。この地球上に生きている百万以上の生物界全体を見わたし、「種」社会をそのなかでの個体の役割を、ひろく生物社会学の立場からとらえてみる。	加藤秀俊（放送大学教授） 今西錦司（京都大学名誉教授）
2	動物の社会 人間の社会	動物はかなり素朴な段階から社会を形成してきている。そうした動物社会の諸相を具体的事例によって紹介しながら動物社会と人間社会とが、どのような点で連続し、どのような点でちがうのか、についての問題点を整理する。	加藤秀俊 日高敏隆（京都大学教授）
3	メラネシアの人間と社会	メラネシアの大部分は、まず国家形式をとげる以前の部族社会である。ここでは、主としてニューギニア高地の人びとが形成する社会をとりあげ、はげしいリーダーシップの交替の背景にある諸要因をさぐることをこころみる。	加藤秀俊 畑中幸子（金沢大学教授）
4	アフリカの人間と社会	人類は、その初期の段階で、いわゆる狩猟・採集社会のなかで生活していたとおもわれる。そうした、定着社会以前の人びとの姿にちかいものがこんにちの世界にも存在する。それをアフリカの事例を中心にして考察する。	加藤秀俊 山口昌男（東京外国語大学教授）
5	ヨーロッパの人間と社会	「社会」と「個人」という二分法は、近代ヨーロッパからうまれた。このふたつの観念によって意味されるものを、北イタリアの村落の事例に即して検討し、その歴史的背景と現代における展開をあきらかにすることをこころみる。	加藤秀俊 谷泰（京都大学教授）
6	東南アジアの人間と社会	日本の稲作文化は東南アジアからつたわったものとされている。農業的に定着した社会のひとつの事例として、タイの農村をとりあげ、安定した村落社会と、そのなかでの人間の行動様式の諸特徴をとらえることをこころみる。	加藤秀俊 飯島茂（東京外国語大学教授）
7	インドの人間と社会	人間の社会は、大規模な定着化とともに分化をとげるようになってきた。そうした分化のひとつに階層分化がある。インドのカースト制度はその一例であろう。その事例をつうじて、階層社会での人間の生き方をさぐる。	加藤秀俊 佐々木高明（国立民族学博物館教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	アメリカの人間と社会	多くの社会は、たんなる階層分化のみならず、さまざまな人種と民族の混住によって成り立っている。そうしこ多民族国家の一例としてアメリカ合衆国がある。その多民族国家社会の諸問題と、将来への展望を考察する。	加藤秀俊 David Plath or J. Bailey （アイオア大学教授）
9	拘束としての社会	われわれの日常生活をふりかえってみても、社会はしばしば拘束的である。法律だの、制度、慣習、あるいはしきたりと呼ばれるものはどのようにして生まれそれらはひとりひとりの人間の行動とどうかわるのかを検討する。	加藤秀俊
10	近代の組織原理	かって、人間は地縁・血縁という原理によって生活していた。しかし、近代社会は、そのような人間関係の組み方を根底からくつがえすことによって成立したとかんがえてよい。その社会変化の過程を主題として考察する。	同上
11	シンボルと社会	人間は、社会への帰属意識をすくなくとも潜在的に抱いている。それを顕在させ、かつ強調するために、社会は、たとえばトーテムのような共同経験の対象としてのシンボルをつくってきた。そうしたシンボルと社会を考察する。	同上
12	ひき裂かれた自我	近代から現代にかけての人間は、複数の集団に所属し、それぞれの集団で特定の役割をうけもたなければならぬ。そこでは「自我」とはなにか、という問いが浮き上ってくるしまた、そこから社会病理的な問題も派生してくる。	加藤秀俊 小比木啓吾 （慶応義塾大学教授）
13	社会をかえる力	人間と社会とは相互刺激的な性質をもつ。社会は人間にたいして拘束的だが、同時に、人間こそが社会をかえる力の唯一の源泉だ。技術革新をも含めて、そもそも社会の「進歩」とはどのようにして生まれるのか、を問題とする。	高橋徹 （東京大学教授）
14	日本の人間と社会	まえにみた世界のさまざまな社会についての事例や、現代社会の特質に関する考察をふまえて、いまの日本社会で、ひとりひとりの人間がもっている行動様式や、それと関連する諸問題を整理して、生きた学問としての社会学を論ずる。	加藤秀俊
15	社会と社会学	これまでシリーズは、人間と社会のすべての問題をあきらかにしたわけではない。最終回では、これから受講者がみずからかんがえ、研究をつづけてゆくための問題領域を示唆し、主体的な学習のための手がかりをしめす。	青井和夫 （津田塾大学教授）

＝ 社 会 生 活 と 法 ＝

〔主任講師：山田卓生（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

国家のような大きな社会から会社・学校・同好会といった小さな社会にいたるまで、社会生活が秩序だって営まれていくためには、法による秩序維持が必要である。もっとも重要なのは、国家法であるが、慣習や習俗も重要である。本講座では、法の形態・役割、変動といった問題を考えながら、法律を学ぶ基礎を提供したい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	社会生活における法	「社会あるところに法あり」といわれるように、どんな社会にも法が存在する。法なくして社会は成り立たないともいえる。法は社会のルールであり、規範であるが、国家の法律に限られない。社会に存在する種々の社会規範－慣習、習俗－との関係で法を考える。	山田卓生（横浜国大教授）
2	法の存在形態	法のうち国家法がもっとも大規模で、包括的で、かつ強力なものである。そうした国家法は、どこに、どのようなかたちで存在しているかを、法の存在形態 ― 成文か不分か立法府によるものか、裁判所によるものか ― に分けて考えていく。	同 上
3	法と裁判	国家法は、第一次的には裁判所を名宛人としている（裁判規範）。しかし、裁判所において適用されることから、国民もこれを順守することになる（社会規範）。法と裁判のこうした関係を前提にして、裁判のもつ影響力（判例法）について考える。	同 上
4	法は誰がつくるか	法をつくるものは誰か。三権分立の考え方からいえば立法機関たる国会であるが、国会による法律のみならず、行政府による政令や裁判所による判例も、法の一種として重要である。法がどのようにしてつくられるかをつくり手との関係で考える。	同 上
5	法の種類(1) 民事法と刑事法	法は私人間の関係に適用される民事法と、国が刑罰を科するための刑事法に分けられる。民事は原則として、私人のイニシアチブによるが、刑事法は社会的利益を守るために国家的視点から適用される。両者の差異を比較検討しつつ法の機能を考える。	同 上
6	法の種類(2) 公法と私法	私人間の関係を規律する私法（民事法）に対して、国または公共団体を規律する公法がある。私法は、私的利益を調整するものであるが、公法は、公共的利益を目的とし、そのため私人とは別個の法規制がなされる。	同 上
7	法の種類(3) 実体法と手続法	法には、民事についても、刑事についても裁判の基準となる実体法と、裁判をなすにあたっての手続を定める手続法（訴訟法）がある。法律における手続は単なる形式ではなく、重要な人権保障的機能がある。こうした観点から手続の意義を検討する。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	法の種類(4) 国家法と自治法	国家により制定、運用される法のほかに、各種の自治団体により制定、運用される自治法がある。地方公共団体の条例、会社の定款、労働組合の規約などである。これらが裁判においてどのような意味をもつかは、自治をどこまで承認するかと関連して争いになる。	山田卓生
9	法の解釈	法は「ことば」で表現されるが、ことばが不明確な場合、あるいは法律が予測しなかったような事態が生じた場合、ことばの「解釈」が必要になる。類推解釈と反対解釈、体系的解釈、社会学的解釈などを中心に、法の解釈の手法と問題点を考える。	同上
10	法と法律家	法律を現実に運用しているのは法律家（法　）である。裁判官、検察官、弁護士の三者だけでなく、準法律家や行政官も含めて、法のにない手の現状、資格、職責、役割等を検討し、法の運用の人的側面を考える。	同上
11	法の順守	法は守られなければ意味がない。法をつくればあとは強制力で守らせるというわけにはいかない。一定の目的を達成するために必要にして十分な規制と、そのための有効な強制手段が必要である。どのようにしたら法が守られるようになるかについて考える。	同上
12	法の衝突	法はきわめて種々のレベルに、多様なかたちで存在しているため、相互の矛盾が出てくる。そうした場合衝突を解決する原理としては、上位法－下位法、前法－後法、一般法－特別法等があり、さらに外国法との衝突を含めて、矛盾解決のルールを考える。	同上
13	法と道徳	法は道徳と密接な関連があるが、必ずしも同じではない。そのため道徳的には非難さるべきことが法律上許されるとか、道徳的に正しいことが法律上禁止されることもある。法と道徳の関係を、「悪法」論と関連させて考える。	同上
14	法と常識	法や裁判は常識に合っていないという批判がなされることがある。また、法を歴史的にみたり、外国法と比較した場合、法の内容に普遍性とともに、多様性のあることがわかる。こうした多様性の中で、法と時代の常識の関係を考える。	同上
15	法と社会変動	急激にうつりかわる社会の中で、古い法が依然として行われ、時代おくれだと非難される。法を新たな情勢に合わせて改正していくことは急務であるが、必ずしも容易な作業ではない。法を時代の要求に合うようにするための手法と問題点を考える。	同上

＝ 比 較 政 治 Ⅰ ＝

― 先進工業諸国・普遍性と特殊化 ―

〔主任講師：斎藤　眞（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

国家を単位として、政治の比較研究を行う。国家は各々個性的であるが、「似たもの同士」で国家群を分類し、国家群間の比較、国家群内の比較を行う。このような比較を通じて、各国についての知識を得るだけでなく、政治という現象の多様な問題点をより深く理解するようにしたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序 論 (1) ―目的と方法―	この比較政治Ⅰで扱うのは、東欧を含めた欧米、つまり（日本を除く）先進工業諸国である。それはさらに自由民主主義国家群とソ連を中心とする社会主義国家とに分けることができる。このような国家を分類し比較することにどんな意味があるのかを、これまでの比較と尺度とを合わせて考える。比較の基準としては、国家の独立と統一という意味での国民主義、自由主義、民主主義、社会福祉を含めた社会主義の四つを選び、各国について、その四つがどう関連しているかを見る。	斎藤　眞（国際基督教大学教授） 河合秀和（学習院大学教授） 百瀬　宏（津田塾大学教授）
2	序 論 (2) ―尺度と基準―		河合秀和
3	イギリスの場合 ―島国と連続性― (1)	イギリスは早くに国家統一を実現し、世界最初の産業革命を体験した。革命や戦乱に見舞われることも少なく、いわゆる「不文憲法」のもと、社会は過去との連続性を保ちながら発展した。国民主義、自由主義、民主主義、社会主義は、その順序で順調に、先のものを含み込みながら発展した。この国について、政府機構、代表制（政党、圧力団体）の発展過程をたどり、国家別の比較政治研究にとっての1つのモデルを打ち出したい。イギリスの政治制度と理念は世界各地に拡がったが、イギリス連邦諸国についても展望しておきたい。	同　上
4	イギリスの場合 ―島国と連続性― (2)		同　上
5	アメリカ合衆国の場合 ―連邦制と権力分立― (1)	イギリスの植民地として、アメリカにはイギリス的制度が移植されたが、アメリカ的な風土の下で、その制度は大きく変容する。主として、イギリスと比較しつつ、アメリカの政治制度と機能とを学びたい。前半では、アメリカ人の政府観、憲法観を検討し、その憲法の下での連邦制及び三権分立制の構造を明らかにする。後半では、その制度を実際に動かすものとして、大統領のリーダシップ、政党の役割、圧力団体の活動、裁判所の政治的機能などを検討したい。	斎藤　眞
6	アメリカ合衆国の場合 ―連邦制と権力分立― (2)		同　上
7	フランスの場合 ―革命と伝統―	フランス革命の伝統は、フランス史の中に何度も再現してくる。フランスは、大革命以後16回も憲法を変えた。この革命的伝統とでもいうべき逆説を明らかにすることによって、イギリス、アメリカとの比較を進めたい。いくらかフランス史に立ち入ることになると思うが、それというのもこの国が「比較を絶した」独自性を有しているからである。	河合秀和

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	ドイツの場合 —先進と後進—	ドイツが統一国家になったのは、1871年、国家の形成には遅れたが経済発展、社会主義運動の発展ぶりを典型的に示している。今世紀二度の敗戦ファシズムの出現など、国際政治によって国の進路は大きく左右された。現在のドイツは東西に分割されており、そのことが現在の西欧世界の　安定の条件ともなっている。	河合秀和
9	北　　欧 —中立と福祉—	西欧外周に位置する後進的地域でありながら、列強紛争からの隔離に利せられた急速な工業化を通じて福祉国家を築いたスカンディナヴィア諸国における、多党政治とそれを機能させてきた「組織社会」について考察する。	百瀬　宏
10	日本の場合 —中間のまとめ—	これまで述べてきた比較政治論の方法と英米仏独北欧の事例のまとめを兼ねて、この章では日本を論じる。これまでの考え方と知識からすれば、日本はどのように把えられるかが、この章の課題である。	河合秀和
11	ソ　　連 —国際革命と一国社会主義—(1)	国際革命への期待を裏切られたソヴィエト政権は、ロシア帝国の多くの負の遺産をかかえながらかつ敵対的な国際環境のもとで社会主義を建設する課題に直面した。第2次世界大戦後の変化した内外条件のもとでもなお、「一国社会主義」時代の体質を脱却しえていない。ソ連憲法に示された理念と現実、ソ連共産党による一党支配がもつ機能、労働組合が果す役割、多民族国家としての問題点に注目しつつ考察する。	百瀬　宏
12	ソ　　連 —国際革命と一国社会主義—(2)		同　上
13	東　　欧 —団結と多元化— (1)	19世紀から20世紀にかけて多民族帝国の解体の結果独立し、かつ西欧の停滞した外周部分として位置づけられていた東欧諸国は、第2次世界大戦後、「社会主義共同体」としてソ連と強く結びつく反面、一元的な統御に抗して民族的伝統のうえにそれぞれの道を模索してもいる。この点を踏まえながら、ソ連政治との、また東欧諸国相互の異同を検討し、また「自主管理社会主義」の理念を掲げるユーゴスラヴィアについても考察する。	同　上
14	東　　欧 —団結と多元化— (2)		同　上
15	シンポジウム —総括と展望—	以上14回の講義の成果をふまえてもう一度、いわゆる欧米諸国の政治について、その共通性と各国との特殊性とに注目して、総括的に比較討論を行い、さらに比較政治Ⅱへの展望を行う。	斎藤　眞 河合秀和 百瀬　宏

＝ 比 較 政 治 Ⅱ ＝

― 第三世界の政治 ―

〔主任講師：小田英郎（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

本書では、発展途上地域（中国、東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカ）の政治について比較学的考察をおこなう。具体的には、各地域の歴史にも触れながら、主として独立期以後における国家建設と近代化の問題を取りあげ、それぞれの政治文化、イデオロギーと政治体制、国際政治への対応などを比較する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 比較の方法	伝統と近代化との緊張関係、国民的統合、イデオロギーと政治・社会体制、国際社会に対するイメージと対外行動から、各地域の特殊性と共通性を検討し、その総合的把握を試みる。	小田英郎 （慶応義塾大学教授）
2	中国 (1) 革命と近代化	西欧の衝撃の下で、伝統社会から近代国家への成長をめざして苦悶した中国の歴史的経験。	岡部達味 （東京都立大学教授）
3	中国 (2) 革命と近代化	社会主義的発展途上国である現代中国が、革命の完成、建設、独立の確保にあたって当面した諸問題を考察する。	岡部達味
4	東南アジア ASEANとインドシナの国ぐに	人種、宗教、言語 ― 世界のなかでもっとも多様性に富むこの地域の、国民的統合と近代化の努力のあとを、その複雑な国際環境にも触れながら考察する。	松本三郎 （慶応義塾大学教授）
5	南アジア 苦悩するインド亜大陸	九億の人口の圧力と、貧困にあえぐ南アジア諸国の前途はきびしい。イギリス植民地から解放されたのち、混合革命方式で国家建設をはかるインドを中心に考察する。	松本三郎
6	中東 (1) 古さと新しさのモザイク	現代中東の政治を考える出発点として、気候、地勢に触れながら歴史を概観する。古い中東の歴史のなかで生まれた伝統や文化に触れながら、中東諸国の独立達成までを考察する。	青木一能 （日本大学助教授）
7	中東 (2) 中東政治の展開軸	中東紛争と、それに対するアラブ諸国の団結と分裂について考察し、さらにサーダートのイスラエル訪問とそれ以後生じた変動を、中東政治の多元化に触れながら検討する。	青木一能

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中東(3) 変動と模索	社会主義から君主制にいたる様々な体制の現代中東諸国の政治を考察し、それぞれの道を模索する状況とそこでの変動要因について、国際社会との関係を考慮しつつ検討する。	青木一能
9	アフリカ(1) 歴史的復権の志向とナショナリズム	歴史的復権への志向が現代のアフリカにおいてなぜ強いのか、そうした志向はナショナリズムにどう反映しているか、といった問題を、植民地時代を振り返りながら考察する。	小田英郎
10	アフリカ(2) 近代化と政治体制	アフリカ的社会主義、一党支配体制、軍部支配体制など、国家建設や近代化の過程で出現したイデオロギーや政治体制を考察し、あわせて南部の白人人種主義支配体制にも論及する。	小田英郎
11	アフリカ(3) 団結と多元化	大陸の統一・団結をめざす反面、国家的自己主張で対立し、多元化の度合を高めるアフリカ圏内の国際関係、および非同盟主義を軸とした第三世界連帯運動への対応を考察する。	小田英郎
12	ラテン・アメリカ(1) 寡頭支配的政治体制	序論として、現代ラテンアメリカの政治現象の諸特徴を指摘したのち、それらの歴史的淵源である植民地時代以来の寡頭支配的、権威主義的政治体制を考察する。	加茂雄三（青山学院大学教授）
13	ラテン・アメリカ(2) 大衆の登場と政治の近代化	民衆の政治舞台への登場を契機とする現代国民国家の形成、近代化された権威主義政治体制、現代政治における軍部の役割などの諸問題について考察する。	加茂雄三
14	ラテン・アメリカ(3) 国際政治の展開	対米関係の歴史と現段階、ラテンアメリカの地域主義、第三世界主義、および非同盟主義運動との関係などに言及しつつ、ラテンアメリカの国際政治の展開について明らかにする。	加茂雄三
15	シンポジウム 総括と展望	これまでの講義の成果を踏まえて、もう一度、発展途上諸地域の政治について、それぞれの特殊性と共通性を整理しながら、総括的に比較討論を行う。	小田英郎

＝ 比較経済・経営・社会 ＝

―多様化する組織のなかで―

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）

全体のねらい

現代の世界は、多様な社会・経済体制の共存によって成り立っており、それはひろい意味での経営体制のなかに徴分化され、ないしは反映されている。本講義は、その多様な体制、システムを歴史的・同時代的に比較しつつ、ことなった組織原理によって形成されている諸社会の相互交渉にともなう問題点をも解明することとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	比較研究の意味と方法論	比較研究は、たとえば比較教育学、比較宗教学などさまざまな分野でおこなわれているし、そもそも、社会科学、人文科学のなかでは「比較」という視点が暗黙のうちに用意されているのがふつうだ。その意味と、主な方法論について考究する。	加藤秀俊（放送大学教授）
2	組織の諸形態	人間社会の組織の形態はきわめて多様である。トインビーやクロバーなどの文明史的視野をふまえて、現代の世界を横断的にとらえ、国家から個別企業にいたるさまざまな組織原理とその成果を論ずる。単系進化論はこのさい採用しない。	同上
3	経済・経営・社会	一般に、経済・経営・社会という諸学問領域は、学問の編成としては分割されているが、その対象とするところは同一であり、またこれら三つの領域ないし視点は、相互浸透的である。このトライオロジーについて、その意味を論ずる。	同上
4	さまざまな経済体制(1)	以下2回にわたって、比較経済体制論をこころみる。社会主義・資本主義、そして混合経済、などがおもな主題になろうけれども、発展途上国の経済体制・社会組織にも着目し、いわゆる近代化論にも言及する。また、こうした複数の体制には、	坂井素恩（放送大学助教授）
5	さまざまな経済体制(2)	それぞれに、それを生み出した歴史的・生態学的な背景があるわけだから、その由来についても論じる必要があろう。そして「共存論」の根拠をもここであきらかにする。	同上
6	さまざまな経済体制(3)		同上
7	経営とはなにか	経営ということばは、家庭経営、学校経営といったふうにひろく使われるが、ここでとりあげるのは、いうまでもなく企業経営だ。普通語としての「経営」の意味をふまえたうえで「企業経営」を定義し、その研究の意義を考察する。	堀内正博（東京工業大学助手）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営の進化と歴史	経営史は、通常、産業革命以後に限定されているし、おおむねその線で論じられるが、ここでは、家内工業段階、あるいは、遊牧的商業経営などにもさかのぼって、より広い視野で経営というものを見なおしてみる。それは11回以後の講義への伏線ともなる。	堀内正博
9	経営の条件(1) 政治・政策	以下3回にわたって、経営を規制する諸要素を考究する。 ここでは、政治体制、経済・経営政策などにふれ、いくつかの代表的事例を論ずる。	同上
10	比較経済政等論	経済をうごかすものとしての政等論の比較考察をおこなう。	坂井素恩
11	比較法制の立場から	ことなった社会のことなった法制、とりわけ商行為についての比較法制を考える。	堀内正博
12	女性の役わり	社会経済体制のなかでの女性の地位と役割を比較・考察する。	坂井素恩
13	文化摩擦論	こんにちの経済摩擦には文化摩擦という側面がつよくはたらいている。その観点を解明する。	堀内正博
14	ことなった組織の接触	対米貿易摩擦によって代表されるように、ことなった組織原理と慣行をもった国ぐにが接触するときには、すくなからず問題をともなう。とりわけ、世界的な相互依存性によって経済活動がおこなわれている現在、こうした接触にともなう問題	坂井素恩
15	世界のなかの組織問題	前回までに展開された議論をとりまとめ、同時に、これからの世界のなかでの企業経営、経済のありかた、とりわけ日本の企業人がどのような対処を要求されているか、を論じて結論とする。	加藤秀俊

＝日本経済と産業と企業＝

主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
黒澤一清（東京工業大学教授）

全体のねらい

本講は日本経済の全体の姿（国民経済の構造）を、国民所得勘定などを用いて構造的に把握する。次に日本経済を構成する産業と企業の構造的な相互関連を明らかにする。さらに産業組織や企業経営のレベルにおける歴史的、構造的な特徴をうきぼりにすることが本講のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本経済―産業―企業研究の一般的枠組み―	この講義の導入部として、本講義で論じられる内容がどのような一般的枠組みの中に位置づけられるか、どのような問題意識に従って取り上げられるかを明らかにする。	黒澤一清（東京工業大学教授）
2	日本経済と企業（国民所得勘定と企業）	最も単純な経済循環モデルから、国民所得勘定（企業部門、家計部門、政府部門、海外部門）の体系を示す。それは日本経済を構成する諸部門の構造的連関を統計的に示すものである。	磯部浩一（放送大学教授）
3	日本経済と産業（国民経済計算体系と産業）	国民経済計算体系の中に結合されている産業連関表を説明して、国民所得勘定では捨象される中間生産物の流れがどのように把握されているか。日本経済において産業はどのように位置づけられるか、を明らかにする。	同上
4	資金循環と産業・企業	現代経済にみる資金循環の重要性を明らかにし、その把握方法である資金循環表を説明して、産業と企業の位置づけを行なう。	同上
5	日本経済の発展と貿易	日本経済の発展において貿易の果してきた役割と、貿易と産業・企業の連関とを明らかにする。とくに、国際収支表によって、その特色を明らかにしたい。貿易摩擦や産業調整問題にもふれる。	同上
6	日本経済の発展と財政・金融政策	先進資本主義国へ追いつくために、中央銀行の信用創造による資金の調達と、政府主導下の大企業育成策がとられた。資本市場の発達が遅れたために、間接金融が企業の資金調達の方式となった。（資金循環表と国富表を示す）	同上
7	国民経済計算体系よりみた日本経済	本章では、まず国民経済循環におけるストック（資産の状態）を把握する国民貸借対照表勘定を説明する。これによって国民経済のフローとストックを把握する国民経済計算体系の５つの「物さし」を全部学習することになる。ついで、この５つの「物さし」で日本経済の現状をみることにしたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	産業構造の特徴	いろいろな産業が組み合わされる姿の歴史的変化の傾向にみられる日本経済の特徴を考察する。すなわち産業発達の形態学的特徴とそれをもたらした背後の根拠と条件を解明する。	黒澤一清
9	産業構造と生産性	産業とは、経済の、すぐれて形態的、かつ生産力的側面を指す。本章では、前章の形態学的側面の考察をさらに内容的に展開するために、日本経済 — 産業系を、生産性のタームで解明する。	同上
10	産業活動の効率と政策	産業活動が効率の観点から解明される。日本と米国との比較・分析によって、これが浮き彫りにされるだろう。最後に、日本産業の特徴をもたらすのにあづかった産業政策の特殊性が論ぜられる。	同上
11	日本経済における中小企業問題	相対的な蓄積資本不足と相対的な労働過剰の下で、急速な成長をした日本経済において、中小企業の問題性が国民経済の構造的矛盾としてあらわれた。中小企業問題の展開の特殊性と一般性を明らかにしたい。	磯部浩一
12	日本企業の経営史的特徴	戦前までの日本企業の歴史的特徴は、財閥本社を頂点とするピラミッド型で、かつ多角化された企業の資本的管理の展開、労働力の定着のための終身雇用と年功序列型賃金制度による労務管理、さらに先進国から導入された生産管理や予算管理が組織的に展開されたこと、また移植工業における中小企業の下請的利用の展開等があげられる。これらをできるかぎり具体的に把握する。	小林靖雄（放送大学副学長）
13	日本企業の国際競争力	日本企業は今日極めて高い国際競争力をもち、世界市場に進出している。それは高度の技術・製品開発力、近代的設備の装備、人材育成、経営管理力の強化を基盤としてえられる高い生産性に支えられている。その実態を具体的に明らかにする。	同上
14	日本的経営の特徴	日本企業の経営管理の特徴は、その歴史、社会的環境に大きく関係しているが、終身雇用と年功序列賃金制度に育まれた集団主義的経営が展開し成果をあげる基盤となっている。この点を先進国との比較において展開する。	同上
15	日本経済の特色と今後の課題	政府の軍事費支出の比重の低いこと、民間部門の設備投資が高度成長の促進要因であり、消費支出の増大が国内市場の拡大、日本産業の輸出競争力を高めた。石油ショック以降、低成長経済下の国際化の進展により貿易摩擦の回避、国内市場の開放、産業構造の技術集約化等の課題を示す。	磯部浩一

＝地　球　と　宇　宙＝

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
　　小尾信彌（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間の活動の場としての地球、1個の天体としての地球を取り巻く宇宙について、その全体像がどのように変遷してきたか、現在の地球や宇宙の観測や探査がいかに行われているか、それによって得られた成果にもとづく地球像や宇宙像がどのようなものであるかを学ぶ。人間とのかかわりを含めて広い視野から考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙観の歴史	古代から現代まで、人間の宇宙観がどのように変わってきたかを述べる。それは、文化一般の進展、周辺の科学や技術の発展と切りはなすことができないが、ここではさまざまな視点から宇宙観の変遷をながめ、考察する。	小尾信彌（放送大学教授）
2	現代の宇宙観測と探査	昔からの光学観測に加えて、近年は電波や赤外線観測、地球大気圏外からの紫外線やX線観測が宇宙の研究には欠かせない。さらに惑星などの直接探査も盛である。宇宙の観測と探査について、現状と展望を述べる。	同　上
3	宇宙の階層構造	現在の宇宙の特徴の一つは、物質が階層化し、多様化し分化していることである。銀河集団、銀河、星団、恒星、冷たい天体、生物という宇宙の階層構造を概観するとともに、その空間的、時間的な拡がりを認識する。	同　上
4	宇　宙　の　構　造	有限な天球に恒星がちりばめられていると考えられた昔から今日まで、宇宙全体の構造についていろいろなモデルが考えられてきた。現在一般に受け入れられている膨張宇宙について、理論的な基礎と観測的裏付けをもとに概説する。	同　上
5	宇　宙　の　進　化	およそ200億年前に爆発的に開闢したわれわれの宇宙では、膨張に伴って温度や密度が下がるのにつれて、元素が形成され、銀河や恒星がつくられてきた。その意味で膨張宇宙は、進化宇宙であるといえる。そのような宇宙を概観する。	同　上
6	宇宙進化と地球	地球が誕生したのは約46億年以前であるが、それまでには長い宇宙進化の歴史がある。ここでは、地球を含む太陽系の誕生に至る背景を述べるとともに、その形成の過程を概観し、われわれの地球が存在する宇宙的な意味を考える。	同　上
7	地球観の歴史	古代から現代にいたるまでの間の人々の地球観の変遷について述べる。例えばギリシャ時代すでに地球の大きさを測ったエラトステネスの業績などを紹介する。科学・技術の進歩とともに人類の地球観は最近飛躍的な進展をみせている。	奈須紀幸（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代の地球探査	地球についての観察や研究を行うに際して、現在どのような探査が実施されているのか、その内容について概説する。例えば、地球内部の構造の推定には主として地震波による測定が行われていることを紹介する。	奈須紀幸
9	地球の構造	地球は固体地球と、その表層に分布する水圏と、さらに高空までを覆う気圏によって構成されている。固体地球の内部を含めて地球は層状構造を形成している。この層状構造に注目して地球の構造を学ぶ。	同上
10	岩石と鉱物	固体地球の内部の構成物については種々推定はなされているが不明な点も多い。一方、固体地球の表層を構成するのは岩石であり、その最小単位の構成物が鉱物であることはよく知られている。これら岩石や鉱物の種類や特徴について学ぶ。	同上
11	大気と海洋	固体地球の表層を覆う大気と海洋はそれぞれ独特の性質と特徴を示す。一方、大気と海洋の間の相互作用も密接なものがある。大気および海洋の特性をそれぞれ学んだ上で、大気と海洋の相互関係まで立入って学ぶ。	同上
12	地球の歴史	地球はその創性からほぼ50億年に近い歴史を編み続けてきたといわれる。その間にどういう事柄が起ったのか、主として生物界の変遷と地球表層の変動の跡を辿って地球の歴史を学ぶ。地質時代の歴史に主眼を置いて学習する。	同上
13	プレートテクトニクス（現代の地球観）	1967年から68年にかけて提唱されたプレートテクトニクスは、固体地球の表層の変動に関する実体をほぼ解明したと云える。その内容と、そこにいたるまでの研究の足跡について、大陸移動説の提唱の時点から辿ってみる。	同上
14	火山と地震	地球の表層では火山と地震が生起する場所がある。これら火山や地震は主として火山帯と地震帯の中に集中している。何故、このように限定された地域に火山や地震が集中するのか、その原因を探りかつ火山や地震の実体について学ぶ。	同上
15	人間と地球・宇宙	地球・宇宙の中における人間の存在という事実をまず認識し、そのかかわりについて思考する。そのような基礎認識の上に立って、人間生活や科学・技術、さらに社会と、自然としての地球・宇宙の関係の深さを学ぶ。	奈須紀幸 小尾信彌

＝ 物質とエネルギー ＝

〔主任講師：池上雄作（東北大学教授）〕

全体のねらい

自然界を形づくっている物質とエネルギーの科学でもっとも基本となることがらを学習する。とくに物質と熱エネルギー、化学構造とエネルギー、光と物質がみせるスペクトルなどに焦点をあわせて化学の立場から解説し、エネルギーと物質とのかかわりあいを学ぶことによって、自然への理解を高めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	エネルギーの形態 ―序論として―	物質が形づくっている自然界や文明社会を動かしている原動力がエネルギーである。熱、化学、光エネルギーなど、エネルギーのいろいろな姿、エネルギーの変換、エネルギーと物質のかかわりあいを序論として解説する。ミクロの粒子がもつエネルギーを理解することの重要性を強調したい。	池上雄作（東北大学教授）
2	物質の理解	多様な物質の分類や構成をどう理解するかについて述べ、原子、分子、イオン、モルの概念を簡潔にまとめる。さらに、無機、有機物質のいくつかを化学式とともに解説し、最後に物質の状態変化および結合エネルギーに言及する。	同上
3	物質の状態と熱エネルギー	3～6章は化学熱力学の基本を取り扱うが、本章ではまず力学的エネルギーから入り、仕事と熱、内部エネルギー、そしてエネルギー不変則としての熱力学第一法則を解説する。さらに理想気体を取りあげ、可逆および非可逆的体積変化過程を述べ、熱、温度および熱容量に言及する。	関集三（大阪大学名誉教授）
4	状態変化・化学変化と熱エネルギー	物質の変化が起こるときは熱エネルギーの出入が伴う。反応熱の一般的性格、つづいて代表的化合物の生成エンタルピー、熱容量とその温度変化を説明、とくに熱測定、カロリメトリーを解説する。代表的な反応熱と緩学結合エネルギーにも言及する。	同上
5	物質変化の方向：エネルギーとエントロピー	自然に起こる物質変化には、主としてエネルギー変化で理解できるものとそうでないものがある。可逆変化と不可逆変化、変化と確率の関係を述べエントロピー概念の必要性に言及し、熱力学第二法則を示す。さらに、エネルギーとエントロピーから自由エネルギーを導く。	同上
6	自由エネルギーと化学平衡	エネルギーとエントロピーからギブズ自由エネルギーを導き、その性質と役割を解説したあと、化学ポテンシャルの概念を導入する。つづいて、代表的な化学反応系での反応の進行の可能性を予測するための熱力学量を与え、具体的に平衡条件を導く。	同上
7	エネルギー量子の概念	量子論のはじまりとなった物体の放射スペクトルの説明に関するプランクの量子の考え方、水素原子の電子の運動とスペクトルとを説明したボーアの原子模型、光と電子の粒子性と波動性の二元性について説明する。	米澤貞次郎（京都大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	電子の分布とエネルギー準位	電子の運動状態を明らかにする量子力学の基本方程式（波動方程式）について述べ、これから明らかにされる水素原子の電子状態にふれ、分子の結合に対する電子の役割について、いくつかの例を挙げて解説する。	米澤　貞次郎
9	分子軌道とフロンティア電子	エチレンを例にとって炭素－炭素二重結合にσ電子とπ電子がかかわっていること、ベンゼン、ナフタレンなどの化合物中のπ電子の挙動を説明する分子軌道法について述べ、これら化合物の化学反応の理論であるフロンティア軌道理論にふれる。	同　上
10	フロンティア軌道理論とその周辺	フロンティア軌道理論を提唱した福井謙一博士との対談形式により、フロンティア軌道の発端、その展開、有機反応への応用、創造への道がどうあるべきかなどに関する博士の意見を聴く。	福井　謙一（京都工芸繊維大学長） 米澤　貞次郎
11	電磁波とスペクトロスコピー	光や電波で代表される電磁波は宇宙線からラジオ波まで周波数が広い範囲に及び、$E=h\nu$ のエネルギーをもつ。電磁波の性質について、つづいて物質による光の吸収や発光が分子やイオンのエネルギー準位と密接な関係があることを説明し、スペクトロスコピーを概説する。	池上　雄作
12	紫外・可視光の吸収スペクトル	多くの物質は紫外線や可視光を吸収して、その物質に特有なスペクトルを見せ、吸収帯は電子エネルギー準位間の遷移に対応する。そして、可視光の吸収は物質の色と深い関係がある。分光法について述べ、スペクトルと化学構造の関係を代表的な例とともに解説する。	同　上
13	赤外線吸収スペクトル	2 μmから25 μm までの領域の電磁波は化学結合の振動や分子の回転運動と共鳴し、その吸収は赤外スペクトルとして便利に利用されている。 基本的な分子の振動や複雑な分子のスペクトルの例を挙げ、応用を含めて解説する	同　上
14	生体とエネルギー	物質エネルギーの科学にとって、「生体とエネルギー」の課題は重要な位置を占める。生体における同化、異化とエネルギーの流れのわくぐみ、またエネルギー交代の主役がATPであることを中心に、概括的に説明し、解糖・呼吸とそのエネルギー収支にもふれる。	同　上
15	光合成／まとめ	生物におけるエネルギー変換の代表的なものに光合成がある。緑色植物による光合成のしくみ、光エネルギーの捕足と電子伝達、CO_2の固定を中心に解説する。 最後に、本講のまとめを述べる。	同　上

＝ 人 間 の 生 物 学 ＝

〔主任講師：太田次郎（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

人間（ヒト）も生物の一種であることはいうまでもない。しかし、他の生物とは違ったいくつかの特徴を備えている。生物学の立場から、人間の形態や機能を調べ、人間とはどんな生物か、広く生物界に成り立つ法則性はどこまで人間に適用できるかなどを探り、科学的な人間像の理解をめざしたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生物としての人間	全体の講義の導入として、人間（ヒト）は生物界でどんな位置を占めているのか、人体の特徴は何か、人間の脳は他の動物の脳とどこが違っているのかなどを概説し、生物学の立場で人間をとらえる視点を明らかにする。	太 田 次 郎（お茶の水女子大学教授）
2	人類の誕生と進化	生物の進化の歴史で、人間はいつ、どこで誕生したか、それはいかなる証拠で裏づけられるかなどを説明する。また、化石人類から現代人に至る進化の道筋をたどり、人類の誕生以後の進化の歴史を明らかにする。	同 上
3	人体の成り立ち	人体は、いかなる成り立ちであるかを、形態の面を中心に説明する。構成の単位となっている細胞の形態と機能、組織と器官の成り立ちとそれらの特徴を調べ、他の生物と比較する。また、人間の一生や老化についてもふれる。	同 上
4	血液とその働き	人体内の細胞は血液に浸され、血液は細胞・組織・器官の働きを支えている。血液の組成とそれぞれの成分の働き、血液循環のしくみ、腎臓での排出作用などを調べ、人体の働きにおける血液の役割を明らかにする。	同 上
5	脳と神経	人体における情報の伝達と統御にあづかる神経と脳の構造と機能を説明する。神経系の単位となるニューロンの構造、感覚器から脳へと情報が伝達されるしくみ、脳のつくりなどを調べる。また、脳とコンピュータとを比較する。	同 上
6	ホ ル モ ン	神経と共に人体の働きの調節にあづかるホルモンとは何か、その働きの特徴などを説明する。人体の各内分泌器とそれから分泌されるホルモンの種類、ホルモンの相互作用も調べる。他の動物のホルモンにもふれる。	同 上
7	行 動	動物の行動としての本能、学習（刷り込みを含む）、知能の意義を、具体側を示しながら説明する。学習と知能を中心にして、他の動物の行動と比較しながら、人間の行動の特徴を、生物学の視点に立って考える。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	体内時計とバイオリズム	動物の行動に関して興味深い事柄の一つに、体内時計とそれに支配されるバイオリズムがある。人間を含めたいくつかの動物について、バイオリズムを調べ、それを支配している体内時計の特性を探っていく。	太田次郎
9	生殖と発生	人間を含めて多細胞動物は、1個の受精卵がもとになって発生し、成長する。代表的な動物の受精と発生の道筋を示し、それらと人間の発生との共通点や相違点を明らかにし、発生のしくみについての研究や成果を説明する。	同上
10	遺伝 I	遺伝の法則、遺伝のもとになる遺伝子と染色体の関係、遺伝子の本体であるDNAの構造や働きについて説明する。特に、一般の生物に関して成り立つ遺伝の法則性が人間にどこまで適用できるかを明らかにする。	同上
11	遺伝 II	双生児法を中心にして、人間のどの形質が遺伝し、どの形質が遺伝しないかを説明する。病気の遺伝、近親結婚の危険性、知能の遺伝に関する研究など、人間の遺伝の研究で特徴となる事柄をとり上げ、解説する。	同上
12	個と集団	集団生活をしている動物では、1個体で生活している場合とは異なる法則性に支配されることがある。いくつかの動物の集団生活を調べて、そのしくみを探ると共に、それらと比較して、人間の集団生活の特徴を調べる。	同上
13	自然と人間	自然界では、生物は自然環境と密接な関係を保ちながら生活している。そのような関係を説明し、その解析のしかたを明らかにすると共に、人間と自然との関係、生態系における人間の位置づけなどを明らかにする。	同上
14	健康と病気	人間の生物学の特有の問題として、健康と病気をとり上げ、病気とは何かについて考察する。また、感染と免疫を中心にして、病気とその予防、治療などについて調べ、人間の生活における健康の意義を考える。	同上
15	人間の未来	この講義のしめくくりとして、生物学の発達が未来の人間生活に与える問題点をとり上げる。体外受精、遺伝子工学、脳の機能の研究、人口問題などを例にして、人間の生物学の課題やそれに伴う問題点を説明する。	同上

＝ 日 本 の 自 然 ＝

主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
西川　治（元東京大学教授）

全体のねらい

日本の自然の姿を、いろいろな視点から眺めてみる。とくに、住民の地形・気候・水文・生物、ないし自然的環境とのかかわり方、日本人の自然観や自然保全等について生態的、歴史的、地域的に考察して、日本列島の自然的特色を総観する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	内外から見た日本の自然	世界の各地域を風土論的に比較しながら、日本の自然の特色を明らかにする。そのさい、外国人が日本人の風景から受ける印象、天然記念物や国立公園における自然の特徴、自然環境の地域的差異や対照性などについても言及する。	奈須紀幸（放送大学教授） 西川　治（元東京大学教授）
2	日本人の自然観とその変遷	富士山に対する態度や見方、庭園・風景論、農業・土木・防災などにおける日本人の自然観はどのように変わってきたか、各時代の人物、たとえば道元、熊沢蕃山、二宮尊徳、志賀重昂、寺田寅彦、辻村太郎、今西錦司などの自然論を顧みながら考察する。	西川　治
3	日本の地質	日本列島の東半は太平洋プレートが、西半はフィリピン海プレートが、アジアプレートの下へ潜没するところに位置し、環太平洋造山帯の北西部を占め、活発な動態を示す。このような状況を反映して日本の地質は複雑である。その全体像について概括する。	奈須紀幸
4	日本列島の地形的特色	人々の居住・生活の場として、生産活動の自然的基盤として、日本の地形はどのような環境論的特色をもっているか。また、自然観賞の対象、観光資源として日本の地形は世界の諸地域のそれと比較してどうか、各地の実例を紹介し、地形地域区分に即して解説する。	式　正英（お茶の水女子大学・教授）
5	日本の地域環境と生活	日本の地域環境は、きめこまかいジェオシステムを基盤にして成り立つこと、住民が社会組織と農業土木技術の発達につれて、どのように地域環境を改変しながら、集落を作り、土地を開発利用してきたか、各地の実例を示しながらその変遷過程を考察する。	西川　治
6	日本列島の気候の特色	熱帯と寒帯からの気団が作用する日本は、大陸東岸にあるため、同緯度地方より寒暑の差が大きく、降水も多いという特色をもつ。その特色を、北西季節風、温帯低気圧、台風、梅雨前線、ジェット気流などの因子について考察しながら説明する。	前島郁雄（東京都立大学教授）
7	日本の気候環境と生活	気候や季節変化に対する伝統的適応形態と現代文明と生活の仕方とを対比してみる。また、雪国における生活と文化の変化、豪雪に対策や利雪の工夫、レクリエーション、大都市の気候、ヒートアイランド、緑地の役割、気象災害など、いくつかのトピックを扱う。	前島郁雄（市川健夫、東京学芸大学教授、予定）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の水文環境	わが国の緑豊かな国土、古くからの稲作農業、戦後の急速な経済成長などは、いずれも豊富な水の存在に支えられている。わが国の水循環の実態を、河川、湖沼、湧泉、地下水などの視覚的教材を通して理解し、水を通してみた国土保全のあり方についても触れる。	槻根　勇（筑波大学教授）
9	日本の森林と文化	日本は、有数の森林国である。この森林を世界の植生分布の中で位置づけ、植生帯の特徴や2次林の成立を考える。また、ヨーロッパとの森林比較、都市住民の緑意識調査などを通じて、森林利用と森林観の差異とその背景となる文化的基盤をさぐる。	大沢雅彦（千葉大助教授） 竹内和彦（東京都立大学助手）
10	植生景観とその調査法	植生背観の特徴を把握するための調査法を解説する。富士山では森林帯を概観し、森林限界付近での植生園化と毎木調査を実施する。また、関東の丘陵地小流域を対象に微地形や土壌と植生の分布がどう対応しているかを調査する。	同上
11	日本の動物と生活	日本列島の動物を、気候・地形の特徴、第四紀における海面変動時の大陸との関係などに照らしてえがき出す。動物区（生物区）の境界とその意義について数例をあげて説明し、日本の"生きている化石"動物の実態や人社会とのつながりもとりあげる。	濱田隆士（東京大学教授）
12	日本の海岸	日本列島は造山帯としての島弧よりなる。そのため、海岸線は陸地の面積に比べて長い、また後背の平野はあっても規模が小さく、山地が迫るところも多い。このような日本の海岸も大別すると岩石海岸、砂浜海岸、内湾の海岸に分類される。海岸での営力も扱う。	奈須紀幸
13	日本の海	日本列島をめぐる海について、海流、海底地形、海底地質などのあり方について学ぶ。プレート潜没の場としての海溝やトラフが形成され、活動縁辺域としての特性を示す。また氷期、間氷期に対応する海水準変動の影響を受けて大陸棚が形成されていることも学ぶ。	同上
14	日本の自然災害と防災	日本列島は温帯多雨造山帯に属し、地形、地質が複雑で地震、豪雨により山地、火山では崩壊が発生しやすく、平野では洪水氾濫、地震による液状化が発生しやすい。これら災害は地形と密接な関係があり、地形分類図は自然に即した災害対策立案に有用である。	大矢雅彦（早稲田大学教授）
15	自然の利用と保全	自然に対する態度は、国民文化の水準を反映する。内外における自然保護思想と運動の展開、高度成長期の乱開発によって損われた自然の回生をはかり、自然に親しみ、自然と共に栄えるために自然から学び、自然を守る運動、ナショナルトラスト等について考える。	奈須紀幸 西川治

＝ 数 学 と 人 間 生 活 ＝

〔主任講師：赤　攝也（元放送大学教授）

全体のねらい

数学は、日常生活、科学、技術等々と密接に関連し、互いに強い影響をあたえあって来た。この様相を概観し、数学が人間にとって何であるのかを考える資料とするのが目標である。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	数　の　形　成	十進位取り記数法を他の種々の記数法と比較し、前者の特徴について考える。筆算との関連にとくに注目する。	赤　攝也（元放送大学教授）
2	代数学の効用	四則応用問題の算術的解法と代数的解法とを比較し、代数的解法が強力である所以を考える。また、記号化の他の意義についても考察する。	同　上
3	ギリシアの幾何学	ユークリッドの「原論」の成立の過程、およびその構成の概要を紹介する。	同　上
4	幾何学的精神	ユークリッドの「原論」は西欧の合理主義に強い影響をあたえてきた。パスカルの「幾何学的精神」その他を引きながら、このことを説明する。	同　上
5	解　析　幾　何　学	解析幾何は、幾何を代数的に研究しようというものである。その概要を紹介し、その意義について考える。	同　上
6	ニュートン力学	ニュートン力学は、のちに優勢となった機械論的自然観の基盤であるとともに、いわゆる解析学の発展を強力に促した要因でもある。ケプラーなどの業績からニュートン力学が生まれ出るまでのいきさつを明らかにする。	同　上
7	解析学とその基礎	ニュートン力学が解析学の発展をどのように促したか、他方、解析学がいかにしてその独自の課題をもつに至ったかを考察する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	射影幾何学 と理想的要素	数学では、例外をなくし、理論を単純化するために、「理想的要素」を導入することが多い。その典型的な例として射影幾何学を紹介する。	赤　　攝　也
9	非ユークリッド幾何学と公理主義	ユークリッド幾何学の平行線公準は、19世紀に至って非ユークリッド幾何学を生んだ。さらに、後者は、数学思想を公理主義へと根本的に変革する原因となった。これらのいきさつと意義とについて考察する。	同　　上
10	確　　率　　論	パスカルとフェルマによりはじめられ、ラプラスによって大幅に発展させられた確率論は、公理主義の誕生によってあざやかに衣がえをした。その概略を紹介する。	同　　上
11	構造主義と数理科学	構造主義は公理主義を深化したものである。構造の概念は、諸科学と数学との関係を明確にし、多くの科学に数理化するきっかけをあたえた。これらのことを解説する。	同　　上
12	コ　ン　ピ　ュ　ー　タ	電子計算機は、現今の社会を急速に変えつつある重大な存在である。これが、おおよそいかなる構造をもつものであるかを紹介する。	同　　上
13	数　　理　　統　　計	確率論の応用としての数理統計学は、電子計算機の登場によって、その適用範囲を一躍ひろげた。その数理統計学とはどのような原理にもとづくものであるかを解説する。	同　　上
14	計　　画　　数　　学	社会に大きな影響をあたえはじめた“New Math”の一つに計画数学がある。そのうちもっとも初歩的な線型計画法について、その原理を紹介する。	同　　上
15	数　学　と　社　会	電子計算機は巨大な存在であるが、あきらかな限界がある。それがどのようなものであるか、また、それを克服するためにどのような努力がなされているかを説明する。	同　　上

＝哲　学　の　基　礎＝

〔主任講師：山本　信（新潟大学教授）〕

全体のねらい

哲学は我々の日常生活に根ざし、人生観や世界観の問題に連なるものではあるけれども、学問として理論的にやってゆくためには、どうしても抽象的な概念や問題設定を扱うことができなければならない。そのための最も基礎的な道具立てを整えておきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学とは何か	「哲学」という言葉そのものの意味を考えることから始め、この学問がもっている独自の性格と、それを学ぶときの特殊事情について述べる。	山本　信（新潟大学教授）
2	哲学史の意義	他の諸学とは事情を異にして、哲学の研究は常にその歴史との内的な連関において行われなければならない。哲学を西洋から移入し、しかも自国の思想的伝統をもっている日本人には、この点でも特別の問題が課されている。	同　上
3	哲学の諸部門	普通哲学に属すると考えられている諸学問を列挙し、それぞれについて多少の説明を加え、それら全体にわたって見とおしをつける。	同　上
4	存在論の基本問題	「ある」ということをめぐる古来の論議をふまえ、「実体」「形相」「本質」など、歴史的にも体系的にも哲学にとって最も基本的な諸概念をとりあげる。	同　上
5	主　観　概　念	「主観」あるいは「主体」と訳される概念の形成過程をかえりみることによって、現代にいたるまでの近代的な思考体制の原点を究明する。	同　上
6	近世的二元論	近世における心と物、精神と物体の二元論は、それ自体が本質的に不安定なものであり、観念論と唯物論という対立的立場もそのことの所産にほかならない所以を論ずる。	同　上
7	認識論の系譜	近世以降の哲学を特徴づける認識論的問題設定について、その端緒における歴史的意義を明らかにし、その後の展開を跡づける。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	主体性の形而上学	認識し行為する主体としてのあり方をもって原理とする立場が、近代の合理性をになう一方の柱として、どのように展開されてきたかを考察する。	山本　信
9	近代科学の思想史的意味	現在われわれが「科学」とよんでいる知的形態が、近代の合理性をになうもう一方の柱として、思想史的に何を意味しているかを考察する。	同上
10	科学的思考の諸性格	科学的な思考法、それはまたわれわれが小学校以来の教育で叩きこまれてきて常識になっている考え方でもあるが、その特質と帰結とを、いくつかの項目にわけて露わにする。	同上
11	生命と人間性	科学の進歩は、生命現象をも物理的化学的な過程にひきもどし、また人間に対してはその尊厳を剝奪してゆくかのようにみえる。こうした事態に関してどう考えたらよいか。	同上
12	心身問題	からだとの関係において心とは何なのかということは、人類にとって古くからの関心事であり、哲学の主要問題の一つでもあった。特に近世的二元論の文脈のなかで現在どう考えたらよいか。	同上
13	自由と必然	人間の自由に対立するものとして、運命、自然因果性、社会的制約などが語られる。これらの必然的支配を説く決定論に対して、どう考えたらよいか。	同上
14	真理論	何を考え何を語るにせよ、それは真なのかという問が最後までつきまとう。ではそもそも真理とは何か。そして、何かが真であるということはどうやって確かめられるか。	同上
15	現代の哲学的状況	哲学の歴史から見てわれわれがどのような状況におかれ、いかなる問題に直面しているか、ということを知るために、現代の諸学説に現われている思想的動向を概観する。	同上

＝古代中国の思想＝

〔主任講師：戸川芳郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国古代中世に生れた思想の歴史を概観する。その源流を追って、発現のすがたと現実に果たした役割またその後世への影響をえがきつつ、中国思想のいとなみを把握したい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	“仁”と孔子	周代文化の基礎―古代宗族制の世界―が再編にさしかかった春秋後期、はじめて人間関係のあり方を自覚した孔子が出現する。この儒家の開祖の思想と行動を時代の様相とともに説明する	戸川芳郎（東京大学教授）
2	墨家集団の思想	礼楽文化に依拠した儒家の思想基盤をおびやかす墨家の、“兼愛・交利”の考えと党派的な結社集団の行動軌跡をたどる。“非行・節葬”の社会批判や“尚同・天志”の政体論にも言及する。	同上
3	孟子の王道論	戦国期の社会変動のただ中、聖人孔子を聖王の系列に加えた孟子は、その正統伝道者として王道政治の理想を遊説する。“仁義礼智”を支えた性善説を紹介し、その思想史上の評価を行う。	同上
4	荘子と老子	人為を排した「全性保真」の養生論と相対世界を脱して“斉同”の真実在をもとめた荘周の夢は、古代観念論の極致である。後続の『老子』の“無為而無不為”の政術をあわせ論ずる。	同上
5	“礼”と荀子	古代中国は、荀子の指示する方向に進んだ。天人の分離・後王思想・性悪説によって“礼法”秩序を支える根源を現実の実力者王者の権威に帰した。この、法家思想を導いた内容を伝える。	同上
6	諸子百家	儒墨二大集団のほかに戦国中・末期に活躍した遊説の士のうち、のちに名家―恵施・公孫龍―、法家―商鞅・申不害・慎到・韓非―、縦横家、兵家と称される思想家の行動をあつかう。	同上
7	陰陽思想と「易伝」	中国の生んだグローバルな思想とは、漢初の陰陽二元と五徳終始の説である。“変易”原則を説く「易伝」へも習合され、自然と人事を包括して、形而上の一者“太極”の概念を生む。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	司馬遷と歴史記録	叙事巨篇『史記』に現れた司馬遷の意図をその列伝を主軸に窺うとともに、周代伝来の政事記録—『尚書』と『春秋』を紹介する。加えて春秋学とその三伝を説明し史家の体例に論及する。	戸川芳郎
9	黄老思想と董仲舒	雑家の書『呂氏春秋』と『淮南子』を黄老思想を媒介にして説明する。一方、国教に立った儒学の教義、董仲舒の政治理論—天人相関の陰陽災異思想、春秋三統説、君権則天主義を述べる。	同上
10	儒教と経学	王朝支配の体制教学として前漢後期から清末に及んだ儒教について、その特徴を綱常倫理・修己治人・名分論・権威主義にわけて概観し、その学術の内容—経学—の史的展開を跡づける。	同上
11	漢学の復興	王莽新の簒奪政権をはさんで、当時の学術・文化を象徴する、劉向父子と班氏一族の事業を紹介する。前者の中秘書の総合整理、後者は劉漢受命説に立つ断代史『漢書』の編纂である。	同上
12	讖緯思想と王充	陰陽災異説から「以往知来」の予言化が進み、図讖の政術利用と緯書の出現に及ぶ。その批判者王充の唯物論的な気一元論と徹底した命定論を紹介し、その頌漢思想との関わりを述べる。	同上
13	許慎と鄭玄	学官と学制が整備された後漢礼教国家は、学術の分化と論争をよび、また総合解釈へと動く。漢唐訓詁学を代表する経学—許慎と鄭玄—を登場させその閲歴と学問のあらましを見る。	同上
14	生成論と"無"	「太極」「元気」の統合概念が成立すると、後漢期を通じて宇宙生成論が発達し魏晋期に三気五運へと展開する。その展開の様態を追究する一方「無」の存在論の深まりを王弼の所説に見る。	同上
15	人間史のこと	人間社会の歴史を遡って、その開闢に及び、宇宙生成と人間史とを継ぎ合わせたのは、魏晋期である。史体通史の創制とその盛行を通じて歴史意識を探る。末尾に、中国思想をまとめる。	同上

＝ 近 代 の 思 想 ＝

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

とくに西欧を中心とした近代思想の特質を、神・人間・自然という主題にもとづいて、ルネサンス（15～16世紀）、知性の時代（17世紀）、啓蒙の時代（18世紀）、ロマン主義の時代（19世紀）という時間的経過のなかでとらえる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「近代」の概念	「近代」という概念の由来と意味およびその妥当性について考え、その範囲を限定し、さらにいわゆる「近代化」の内容を検討する。	中埜　肇（放送大学教授）
2	中世と近代	近代の思想の特質を、その全般にわたって、それに先行する中世との対比において概括する。	同　上
3	神について(1)	近代初頭から17世紀までを中心に、キリスト教信仰が強く生き続けたことを、当時の哲学思想や自然科学との関連において述べる。	同　上
4	神について(2)	宗教改革、神秘思想、ピューリタニズム、ピエティズムなどの宗教運動を信仰の内面化としてとらえ、その思想的な意味について考える。	同　上
5	神について(3)	啓蒙思想によって知性化・合理化された信仰としての理神論や無神論の意味について述べる。	同　上
6	神について(4)	スピノザ的汎神論の19世紀における復権によってもたらされた、知性と信仰との再統合である哲学的な理性宗教とその破綻について考える。	同　上
7	人間について(1)	近代に入って生まれた新しい人間像を、ルネサンスのヒューマニズムやフランス・モラリストの思想を通して概観する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人間について(2)	近代哲学の全体にわたって「心」・「精神」・「自我」・「意識」が優越していたことの思想的な意味を考える。	中埜肇
9	人間について(3)	社会的に見た近代的人間像の象徴とも言うべき「近代市民社会」の思想について考察する。	同上
10	人間について(4)	「近代国家」の思想的な基礎ならびにロマン主義のもとでそれと結びついた「歴史」の思想を検討する。	同上
11	自然について(1)	近代的自然像としての「開かれた宇宙」が持つ世界観的・学問的な意味について考える。	同上
12	自然について(2)	「物質的自然」に関する新しい学問としての「自然科学」の思想的な基礎およびそれと「自然哲学」との関係を論ずる。	同上
13	自然について(3)	「人間的自然」（human nature）の意味の発見と結びついた「自然法」の思想について考える。	同上
14	自然について(4)	ロマン主義のもとにおける有機的（生命的）自然観や美的自然観と目的論的思考について述べる。	同上
15	近代と現代	近代の思想的特質を、それの原理的批判から生まれた現代の思想的なありかたとの対比において再考する。	同上

＝現　代　の　思　想＝

― 20 世紀後半の哲学 ―

〔主任講師：今道友信（放送大学客員教授）〕

全体のねらい

現代を20世紀後半と規定し、1983年現在の思想状況を哲学的に明らかにし、21世紀への展望を試みることにする。テーマには、常に問われている永遠の課題と特に現代で問われ始めたものとがあるが、前者では方法の新しさに、後者では問題内容に重点を置く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	現代の哲学的考察	時代区分として現代をいかなる理由で1950年前後とするかを明らかにするとともに、19世紀末から20世紀前半にかけての思想を現代思想への助走として論理的に反省する。	今道友信（放送大学客員教授）
2	過渡期の苦脳	実存主義、マルクシズム、プラグマティズム1930年代からしばらく、世界的な危機が全体主義の高揚となって具体化して来たが、この時期の思想的な運動として現象学の深化としての実存主義と社会思想の実践原理としてのマルクシズム、道具連関における認識方法としてのプラグマティズムをあげる。	同　上
3	科学哲学と論理学の変貌	新カント派の科学批判とは異なった別種の科学哲学と数学に接近した論理学の再編が大戦前後の世界に流行したが、その思想的背景と哲学的特色をのべる。	同　上
4	歴史の再考と比較研究	人間への反省が、神話や歴史への注目を呼ぶ。ここでは、考察の次元の拡大とともに成立しかけた本格的な比較研究への手がかりを探索する。	同　上
5	言　語　哲　学	相互伝達の可能性の根本に言語性があるからこそ、人間同士の理解が期待されるのである。それゆえ、言語の構造的省察を事とする言語哲学が成立する。	同　上
6	分析哲学の展開	分析哲学の自律的展開の過程の中で、初期には問われなかった諸問題が新たに探究されるようになって来た。そういう問題として、芸術や倫理に対する態度決定と方法上の試みを考える。	同　上
7	分　析　諸　相		同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	構　造　主　義	言語による意味指示の構造は一般化すれば文化全体をテキストとして構造的にとらえる考え方につらなる。歴史主義の相対性に対立する非時間的な考察方法として構造主義が抬頭した。	今　道　友　信
9	哲学的人間学	日本の思想界は特に現代世界の中でどのように位置づけられるのか、広い視野から公正に考えてみる必要がある。	同　上
10	修辞学・美学	立場や見解の差異に対する寛容が、共存（co-existence）の条件として新たに要求されるとき、説得の論理としての修辞学が見直されて来る。新たな再興を示した修辞学が見直されて来る。新たな再興を示した修辞学の哲学的検討を試みる。	同　上
11	解釈学と宗教哲学	1940年頃からの神学の動向は注目に値いするものがあり、これが哲学に及ぼした影響も見逃しえない。また、禅に集結する仏教哲学への西欧からの近接も見逃してはならない。イスラーム神秘思想も注目されている。	同　上
12	社　会　哲　学	都市が、巨大都市化するにつれて、国家の編限形態としてのcivitasとは違った新しい（urbs）についての学urbanicaが要求される。新しい都市哲学は国家哲学や法哲学とも違って、独特の社会哲学となる。	同　上
13	自然哲学・形而上学	自然だけが環境であった時代とは異って、技術が環境となった現代、人間は環境との対応の仕方としては、古代に回帰したも同然で、新しい哲学が要求される。それがmetatechnicaである。	同　上
14	超越的形而上学	人間の生態の変化とともに、新しい倫論学が要求されて来る。その必然性と新しい徳目や新しい人間関係、物質観や生命観について考えてみたい。	同　上
15	日本の現代哲学と哲学の将来	二十一世紀に向けて、どのように生くべきか、また思うべきか、を具体的に考えてゆく。	同　上

＝世　界　史　と　時　代　意　識＝

― 東アジアの紀年法と歴史記述法 ―

〔主任講師：和田久徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では、歴史を理解しやすくするため、その基礎となる紀年法と歴史書編纂の大要を説明する。さらに、この理解を通じて、歴史的な物の見方、歴史的センスを会得できるようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　説	世界諸民族の時代意識、とくに主要な紀年法（西暦・ヒジュラ暦など）。	和田久徳（放送大学教授）
2	中国の紀年法(1)年号の成立と発達	中国における紀年法、とくに元号の成立と発達。	同　上
3	中国の紀年法(2)年号制の展開	元号の展開と近接諸民族に対する影響。	同　上
4	朝鮮の紀年法と年号受容	東アジア文化圏内の有力な民族として、朝鮮における紀年法、とくに元号の受容と独特の展開。	同　上
5	ベトナム・日本の年号	ベトナムおよびわが国における紀年法、とくに元号の発達。	同　上
6	中国の歴史記述(1)紀伝体	中国における歴史書の編修の中で、紀伝体の成立と展開、とくに「史記」著作の意義など。	同　上
7	同　(2)編年体	中国における編年体史書の発達、とくに「資治通鑑」とその影響。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中国の歴史記述(3) 紀事本末体その他	中国における紀事本末体史書、その他の歴史的文献の発達とその意味。	和田久徳
9	朝鮮・ベトナムの歴史記述	朝鮮およびベトナムにおける史書編修、とくに中国的歴史記述の受容とその意味。	同上
10	日本の歴史記述(1) 六国史	わが国における史書編修、とくに六国史の成立とその特色。	同上
11	同 (2) かがみ物その他	いわゆる鏡物その他の成立、わが国の歴史記述の特性。	同上
12	南アジアの時代意識(1)	インドにおける伝統的な歴史意識のあらわれとして各種の紀年法の展開、歴史的文献の発生。	同上
13	同 (2)	インドにおける歴史記述の展開。	同上
14	東南アジアの時代意識	インド文化圏としての東南アジアの時代意識、とくに紀年法、歴史記述のあり方。	同上
15	まとめ 前近代東アジアの時代意識	日本および近隣諸民族における伝統的な年代観、歴史観とその意義。多様な紀年法、とくに元号と時代意識。特色ある歴史記述と時代意識。	同上

＝ 比 較 思 想 論 ＝

〔主任講師：中村　元（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間の思想の発展に関して、単に知識を伝えるというのではなく、世界が一つになり、万事がグローバルに考慮されねばならぬ時代になったので、＜思想＞そのものを取り上げて、東西を通して発展史的に述べて行きたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	比較思想論とは何か	思想は万人に承認され得るものである。この視点に立って、学問のセクショナリズムを打破し、普遍的思想確立のために諸文化圏の思想の比較考察が必要であると説く。	中　村　　元（東京大学名誉教授） 前　田　専　学（東京大学教授）
2	比較思想論の発展	「比較思想論」はアメリカやヨーロッパにおいて長い発展史があるが、インド・シナ・日本など東洋においても古い歴史を有している。こうした東西の比較思想の歴史を概観する	中　村　　元 松　本　照　敬（大東文化大学教授）
3	古代思想の特徴神々と究極のもの	どの文化圏においても最古代にはそれぞれに民族宗教が形成され、多くの神々が崇拝されていたが、やがて神々を超えた真の実在を探究する哲学的思惟が起こったことを考察する。	中　村　　元 上　村　勝　彦（国学院大学助教授）
4	自由思想家の出現	もろもろの文化圏のうちでも特にギリシャ・インド・シナにおいてそれぞれの伝統的な思想に反抗した唯物論・快楽論・道徳否定論・宿命論・懐疑論などの自由思想家を紹介する。	中　村　　元 丸　野　　稔（早稲田大学助教授）
5	人　間　の　反　省	人間が現実のすがたを直視し、現世の苦しみ、はかなさ、無常を自覚して、それらを超克することによって真の自己を探求する動きが起こったことを論じる。	中　村　　元 田　辺　和　子（名城大学講師）
6	普遍宗教の生活倫理	普遍ないし普遍宗教といわれるものは、互いに伝統を異にするにもかかわらず、人間の生き方について意外と共通性をもっている。併せてその相違点を考える。	中　村　　元 末　永　文美士（東京大学講師）
7	世界共同体の理想	都市国家から広域国家へすすむ中で、理想の政治・国家とは何かを宗教的思惟との関わりを中心に考察し、さらに世界国家をめざす動きによる世界共同体の理想に論をすすめる。	中　村　　元 三　友　景　順（立正大学短期大学部助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	普遍的国家の成立	普遍的宗教を政治の中に生かそうという理想をかかげて統一的国家が諸文化圏において形成された。それら国家の諸帝王の思想や宗教的な考えをさぐる。	中村　元 斉藤　敬 （埼玉大学講師）
9	中世社会の思想的特徴	中世には諸国家の社会を通じて封建制度が確立されるに至る。それに伴って身分的階位制が出現し、それを基礎づける思想体系として普遍的宗教が支配者によって権威づけられた。	中村　元 宮元啓一 （法政大学講師）
10	＜慈悲―愛＞の道	普遍宗教は人々をわけ隔てなく愛することを説いた。ここに＜慈悲―愛＞の道が成立する。その＜慈悲―愛＞がどのようなすがた・かたちをとったかを考察する。	中村　元 阿部慈園 （日本大学講師）
11	＜瞑想＞の道と哲学的思想	中世においては＜慈悲―愛＞の道と並んで＜瞑想＞の道が実践され、哲学的思索も深められたがそこから自力か他力かの二つの類型が論じられるようになった。	中村　元 津田真一 （日本大学講師）
12	自我の自覚と批判的精神	中世の伝統的権威を合理的主義をもって批判し、自我を自覚するところに近代的思惟が確立されてゆく。この点で徹底的であった東洋の思想家の所論へと考察をすすめる。	中村　元 丘山　新 （東京大学講師）
13	人間の平等	人間すべて平等であるという主張は近代において特に顕著になった。しかし国により、文化圏によって異なる点を考慮しつつ、平等思想による社会的連帯性の重要さを探る。	中村　元 吉野恵子 （東方学院講師）
14	宗教改革と近代思想	近世初期の宗教が職業倫理ないし資本主義精神を基礎づけたといわれるが、ここにも諸文化圏ごとに相違点があることを論じ、併せて主義や国家を離れた人類性の実現を説く。	中村　元 山口泰司 （工学院大学講師）
15	未来への展望	近代精神がもたらした種々の問題点を考察しながら、未来に向かっては、仏教でいうところの、「何人にとっても生命は最もいとしいものである」という自覚の重要性を論じる。	中村　元 前田専学

＝コミュニケーションと言語＝

〔主任講師：沢田允茂（慶応義塾大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間だけが生物の進化の過程で言語によるコミュニケーションという手段を獲得した。このことで人間は何ができるようになったのか、それは人間の生活にどのような特殊性をもたらしたのか、それは人間にたいしてどんな意味をもつか、などの問題を分析して言語の側面から人間への理解の途を探るのが本講座全体のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「生きること」とコミュニケーション	生きているということはその生物の内部やその環境との間に何らかの形のコミュニケーションが行われていることを意味する。それは人間だけでなくすべての生物にとって「コミュニケーション」がもっている意味の根源であることを明かにする。	沢田允茂（慶応義塾大学名誉教授）
2	環境世界とコミュニケーション	すべての生体はそれをとり巻く自然的、社会的環境と何らかの形のコミュニケーションを行っている。そしてそれぞれの生体にとってその環境世界とはコミュニケーションによって構成されて始めて存在するものだ、ということができるだろう。	同上
3	環境の風景	この章では「環境の風景」という概念を用いて人間のコミュニケーションの在り方の分析とその意味・特に人間の生活にどのような特性を変えているか、私たちが「心」とよんでいるような働きをどう理解すべきか、といった問題について述べる。	同上
4	言語とコミュニケーション	コミュニケーションは言語を通じてのみ行われるものではない。言語的コミュニケーションの他に多くの異なった形の非言語的コミュニケーションがある。コミュニケーションがどのような形で進化してきたかを考えながら、人間の言語について考える。	同上
5	言語と環境その1	言語は人間の存在をあまねく包み、物理的に与えられた環境世界と人間との間にあって、一種の中間世間を構成している。だが強いて言えば、与えられた環境に比較的よく対応する部分と、それを余り反映しない部分に分けることが出来る。	鈴木孝夫（慶応義塾大学教授）
6	言語と環境その2	牧畜を主とする人々の言語に、家畜を細かく分ける表現が多いといったことは、外的対応の好例であるが、反面、生物としての人間が共通に持つ新族関係が、民族により甚しく違って把握されるなどは極めて人間的な言語のしくみと言える。	同上
7	言語の構造その1	人間がことばを聞いて意味が理解できるのも物理的な音の流れの中には現れない不連続な単位や区切りなど抽象的な構造を知っているからにほかならない。文の要素間の統語構造に焦点を合わせてそのような構造や規則について明らかにする。	西山佑司（慶応義塾大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	言語の構造その2	文の意味は、その文を構成している語の意味や、文の統語構造と密接な関連をもつ。文の意味構造や規則を明らかにしたあとで、意味の曖昧性とは何か、それは意味解釈にまつわる不明瞭性と同一視してよいかといった問題について考える。	西山佑司
9	言語と論理	自然言語に内在するそれ固有の論理的推論には形式論理だけでなく、文の意味構造が重要な役割を果たす。「意味論的含意」や「前提」という概念を明らかにすることを通じて、論理的思考と言語構造との間の密接な関連について述べる。	同上
10	発話の解釈と推論	話し手が文を用いて聞き手に伝えようとしている内容は文の言語的意味と必ずしも一致しない。そこには話し手・聞き手の背景的知識や文脈的要因が介入してくるからである。言語を用いて現実に行っている推論を発語状況との関連で考える。	同上
11	言語による世界の形成(1)	言語は人間の環境に適応するように作られているが同時に言語の構造に合わせて世界を見、そのような世界を自から作りあげるという側面をもっている。この章では思想とか世界観というものがいかに言語に関係しているかを明かにする。	沢田允茂
12	言語による世界の形成(2)	前章で述べたことをより具体的に、言語の構造とか、言語の中に組込まれている論理的な構造が、どのような過程を経て新しい風景のイメージ、即ち人間にのみ独特な環境の風景を作り上げ、人間独自の生き方を創造したかについて述べる。	同上
13	概念の進化	人間が言語を通じて作りあげた世界は不変のものではなくて自然環境や社会環境の変化に応じて進化する。原始宗教の世界から今日の科学的に見られた世界への進化はどのような環境の変化との関連の下で生じたのかを探究してみる。	同上
14	言語と行為	言語とは単にある情報を受取るだけでなくて、それにもとづいて行動するときの仕方をも決定する。しかし我々の行動のすべてが言語的思考によって決定されているものでもない。私たちの行動の中で果す言語の役割と意義について考える。	同上
15	コミュニケーションの地球化	コミュニケーションの手段の発達を通じて人間の社会とその生活は次第に地球化(globalization)への方向に向っている。このような現在の新しい状況の中で解決を迫られる諸問題にとりくむための基本的な方向や知的態度について述べる。	同上

＝ 思 考 と 論 理 ＝

〔主任講師：大森荘蔵（放送大学教授）〕

全体のねらい

思考、論理という曖昧模糊とした二概念を明確にすることによって、両者の関聯が言語の場にあることを示そうとする。そして具体的に日常日本語の中から若干の語の意味規則を撰んでそれらの規則から現行市販されている教科書の論理学が導出されることを示すことによって論理の言語規則説の一般的証明を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	本章の目的　本題の誤解　「思考」の曖昧さ　「思い」も思考　「思い」の言語化　言語規則説　記号論理学　我が国での記号論理　思考と論理　規則説の述べ方	大森荘蔵（放送大学教授）
2	思考とは？	思考の意味の曖昧さ　「思い」としての思考　知覚(perception)に対しての思考(conception)　思考的理解の様々　知覚の中に篭った思考　四六時中常に思考	同上
3	思考と言語	経験は普通言語化されない　言語以前の経験という誤解　想起とは過去形の経験　思考が言葉になる　夢の場合　繰返して誤解を排する	同上
4	論理とは？	論理的正しさを手掛りにして「論理」を考える　排中律の形式の正しさ　言語規則説　出発点となる語を選ぶ―四つの接続詞　それら接続詞の意味規則　論理学の導出　結果の検定　日本語から論理学が導出される　言語規則と論理的正しさとの関係の実例　平面幾何学の語群　親戚名集団　等高線の意味により平面図から切断面図を導出する	同上
5	言語規則から論理を導く	言語規則説の証明の必要　局所的論理　全域的論理　非主題的な言葉から出発　非主題的な名詞・動詞　接続詞は非主題的　真理値表による接続詞の意味表現　真理値表を使って複合文の真理値を決める　恒真文型　接続詞間の依存関係	同上
6	述語論理	言語規則説を述語論理に及ぼす　主語―述語の表記法　関係を含む述語の表記法　「すべて」の表記(x)　「すべて」の範囲　話題世界を不定にしておく存在記号の導入　最大数に関する文例　束縛変項、自由変項述語文の簡単な表記法　真理値による述語の定義　n座述語（xi）H（$x_1, x_2 \cdots xn$）と（xi）H（$x_1, x_2 \cdots xn$）の真偽　述語論理の文型　回帰定義　妥当文型　公理系による公式的証明	同上
7	異なる言語に異なる論理？	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　総称詞の接続機能　論理は世界に相対的　E.T生物の論理	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	論理的必然性	必然性をとり上げる　論理的文は経験的検証と無縁　排中律の場合　規則に従う　規則に従わないと	大森荘蔵
9	古典的三段論法	古典的三段論法と記号論理学　三段論法各種　正しい三段論法　推論型と文型　推論型と文型の相互導出　接続詞　矛盾文型から任意の文が推論できる	同上
10	思考の論理性	二つの結論　思考は必ず論理的？　論理と言い換え　首尾一貫　はやり言葉の論理	同上
11	形式化とコンピュータ	形式性の必要　形式化と機械化　算盤　コンピュータ　接続詞に対応するスイッチ回路　・のスイッチ　Vのスイッチ　～のスイッチ　機械的解法　決定可能性	同上
12	人間・脳・コンピュータ	言い廻しの危険　§1コンピュータ　コンピュータは「計算する」　機能的同類化　§2脳　「脳が…する」　脳過程　重ね描き　キメラ命題　キメラ命題は無意味　脳には機能的同類化は及ばない	同上
13	言語と世界	言語表現という誤解　事物の輪郭　「家」の固定「家」の制作　言葉に生活が篭る　人の動作　カントの図式論も同様　時間順序　時間順序の制作　要約　人間的意味を世界に与える	同上
14	論理と世界	世界の法則としての論理　論理は経験法則ではない　論理は言語を通して世界に成り立つ　時間順序　カントと規則説　今一つの観点　命題論理の接続機能　古典物理と量子論　弁証法論理　有効性の観点　結論	同上

＝ 人 文 地 理 学 ＝

〔主任講師：西川　治（元 東京大学教授）〕

全体のねらい

人文地理学は、人間が風土に適応して生活環境を組織し、自然地域の上に人文地域を形成してきた過程と、その地域的差異の要因を究明する学問である。ここでは主として日本の国土を対象として、その風土的特色、国土観の変遷、および村落や都市、人口移動、農業や工業活動に関する地域システムなどについて考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の風土と国民性	導入部として人文地理学の考察法と風土論を取り上げる。日本列島の地形的・気候的条件、住民と生活様式の地域的差異、水田稲作などの関連において、日本人の性格や思考法の特徴について論じる。	西川　治（元東京大学教授） 鈴木秀夫（東京大学教授）
2	日本国論の変遷(1)	わが国では古来、小国論と大国論とが繰り返し現われてきた。それぞれの論拠を時代的背景、地理思想、外国人の日本論、日本地図・世界地図の発達などとの関連において考察する。	西川　治
3	日本国論の変遷(2)	明治以降、ナショナリズムのいきすぎを警告する小国論も現われたが、大国意識が強まった。戦後は資源小国論が流行したが、最近では経済大国論が復活した。これらの論拠を検討し、高度経済成長とその後の国土利用についても考える。	西川　治 高崎正義（日本地図センター）
4	日本の国土開発と景観の変化	文化景観を歴史的複合形態として把え、各時代における農地開発・土地改良・村作りの遺構が、現在における景観の地域的差異の形成にどのような役割を果しているか、野外調査の事例を用いて考察する。	山田安彦（千葉大学教授）
5	日本の農業地域	日本農業の特色と高度成長期につづく農業地域の変化について、農業政策、都市化、兼業化、機械化、国際市場などとの関係に即して、野外調査による具体例を示しながら考察する。	竹内啓一（一橋大学教授）
6	バングラデシュの農業開発の展開、農耕の変化	外国との対比によって日本農業の特色を鮮明にするために、バングラデシュの農業について、その伝統的農耕の特性を明確にし、近年の農業生産の動向と農業開発の実態をふまえながら農耕の変化の様相を明らかにする。	茂口善美（駒沢大学教授）
7	近代化による村落の変貌	ヨーロッパにおける村落の諸類型について概説し、村落共同体の解体に伴う農村の変貌、統合ヨーロッパの動きの中で実施された農村構造改善事業などについて紹介し、日本農村の近代化との差異についても言及する。	竹内啓一

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人口移動の趨勢と地域人口問題	わが国における明治中期以降の人口移動、大都市集中傾向を、都道府県別の転入・転出収支と人口密度順位モデルによって考察し、とくに1970年代の転換期の意義を指摘し、人口構造の地域的差異と問題点について論じる。	西川　治 濱　英彦 （西城大学教授）
9	日本の工業構造と地域的展開	わが国における工業の発達過程を地域的に概観し、とくに高度成長期とその後における工業立地の動向、基幹工業の立地による地域の変貌、工業立地が地域経済と生活環境に及ぼす影響についても論及する。	西川　治 高崎正義
10	日本の地場産業	わが国には多種多様な地場産業が存在し、世界市場や全国的市場に依存するものも多い。その中から諸事例、とくに東京の城東地区における生活活動を紹介し、地場産業の近代化、国際化と地方の時代におけるその在り方について考える。	西川　治 竹内淳彦 （日本工業大学教授）
11	都市の類型と都市システム	都市地理学の課題、都市の類型、ヨーロッパと日本の歴史的都市の差異について考察し、近代における都市の中心地機能と階層文化、都市群の配列、すなわち都市システムに関するW.クリスタラー理論について説明する。	西川　治
12	大都市地域の構造	大都市の成長は、都市化地域の拡大と地区別の住み分けと機能分化を伴い、中央業務地区(CBD)を中心とする同心円的及び扇形的地域構造などを生じる傾向がある。その理由を説明する古典的理論モデルと最近の研究法について紹介する。	山口岳志 （東京大学助教授）
13	日本の地域構造とメガロポリス論	最近における大都市化の諸相、ユナーベーション化やメガロポリス化の傾向について考察し、都市システムからみた日本の地域構造を把握する。さらに、大都市問題と大都市圏の行政、ニュータウンの意義等について論及する。	西川　治 井内　昇 （お茶の水女子大学教授）
14	都市化と自然災害	高度成長期には各地で工場用地・宅地・公共用地等の造成による大規模な地形改変が行われ、加えて大都市の過密化や地盤沈下など洪水・高潮・地震による災害激化要因がふえている。この問題について地理学の立場から考察する。	西川　治 大矢雅彦 （早稲田大学教授） 松田磐余 （都立大学助教授）
15	国際化時代における人文地理学の役割	人文地理学の啓蒙性と応用性について説明し、日本人による海外地域研究や世界的スケールの研究成果、さらに途上国の開発援助における地理学的貢献などの事例を紹介し、人文地理学の進むべき方向について考える。	西川　治 鈴木秀夫 大矢雅彦

＝行　動　科　学＝

主任講師：小川　隆（明星大学教授）
　　末永俊郎（日本大学教授）

全体のねらい

人間の行動に関する諸科学の概説ではなく、心理学としての行動科学を扱う。前半は個体の行動について生得的、習得的行動を扱い、後半は社会的行動を扱う。心理学概論、他の心理学関係の科目で多くは扱われないが、行動科学の視点からは大切な比較心理学、社会心理学の領域に重点が置かれる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行動科学の視点	心理学としての行動科学の方法論的な意味と内容・体系に関わる意味とについて論じ、本講がどのような構成に従って述べられるかを説明する。	小　川　　隆（明星大学教授）
2	生得的行動 ―環境と行動	生得的行動の系統を記述し、進化の過程に関し、種行動の一般性、特殊性について説明する。物理的世界に対し生体の環境の性質、環境と行動との比較行動学的関連について説明する。	同　　上
3	生得的行動― 行動の系統発生Ⅰ	生物の種々の行動の中で系統発生的に獲得されたものにどの様なものがあるか、又、どの様な筋道を通ってその様な行動が形成されたかを説明する。	渡　辺　　茂（慶応義塾大学・助教授）
4	生得的行動― 行動の系統発生Ⅱ	本能行動の一つの特徴である行動の自発性について説明し、更にいくつかの行動レパートリーの中で、どの行動がどの様な場合に発現するのか、又、その機構はどの様なものであるかを説明する。	同　　上
5	生得的行動― 行動の個体発生	生得的機構と習得的機構との関連、生得的行動の適応的変容としての発達的変化、初期経験の役割などについて説明する。	小　川　　隆
6	行動の神経機構 ―行動の生理学	動物の行動の背後にある知覚、認識、記憶判断などの認知機能に関する脳の情報処理のメカニズムを説明する。実例としてコウモリのこだま定位、サルの視覚系の色彩、形態、空間の知覚、前頭前野の行動的意味認知、ネズミ海馬の認知地図などを取り上げる。	酒　田　英　夫（東京都神経科学総合研究所生理学研究部長）
7	習得的行動 ―行動の分析	行動の科学的研究の系譜を辿り実験的行動分析の技法を説明する。行動の適応的変容の諸型を記述し、条件づけの基本事象、機制を説明する。	小　川　　隆

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	習得的行動 —認知機制	認知行動に関する基本的事象、刺激性制御、条件性強化、行動の連鎖機構などについて説明する。	小川　隆
9	習得的行動 —行動機制	行動の積極的・消極的結果としての強化、強化スケジュールの役割、対応法則、最大化法則などについて説明する。	同上
10	言語行動	言語行動の特徴は、反応であると同時に、それが刺激として作用するという点である。このことを説明したうえで、言語行動を規定する要因からみた言語行動の分類について述べ、つづいて、言語的刺激が非言語行動にどのような影響を及ぼすかについて述べる。	佐藤方哉 （慶応義塾大学教授）
11	選択行動 —意志決定	人間はたえず選択をし、決定をしている存在である。小はいま何をするかということから、大は結婚とか就職とかといった人生の大事まで、またそうした個人的決定から国の政策を決める政治家の決定まで、そうした選択決定に関する理論と研究について述べる。	戸田正直 （北海道大学教授）
12	行動修正Ⅰ —応用行動分析	人間の行動は環境条件を制御することによって、大きく修正されうる。本章では、教育的及び、社会的に重要な行動を確立するための、環境条件の分析・制御法を説明する。	出口光 （慶応義塾大学講師）
13	行動修正Ⅱ —教授工学	行動を修正するための技法をシステム化して、実際に利用した例を教育及び、病院場面から選び、それらの説明を通じ、環境条件の人間行動に対する重要性を述べる。	同上
14	行動薬理学	ラットおよびアカゲザルのオペラント行動の利用により、薬物の行動効果、薬物の強化効果および弁別刺激効果がどのように測定されるか、またこれらの動物実験の結果がヒトの日常生活にどのような意味をもつかについて論じる。	安東潔 （(財)実験動物中央研究所精神薬理部長）
15	行動工学	産業行動や視覚障害者の行動等を例にとって、人間の注意集中・配分を測度とした行動の評価法を説明する。あわせてその実用性についても触れる。	西岡昭 （労働科学研究所副所長）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	社会的行動とは	前半で取り上げた問題との関連を考慮しつつ、社会的行動とは何かについて述べる。	末永俊郎 （日本大学教授）
17	社会的学習と行動	社会的強化・観察学習などについて、具体的事例を題材にして説明する。	末永俊郎 山口勧 （放送大学助教授） 安藤清志 （東京女子大学講師）
18	社会的認知と行動（Ⅰ）	社会的環境をわれわれがどのようにとらえるかについて考える。	末永俊郎 山口勧 安藤清志
19	社会的認知と行動（Ⅱ）	社会的認知と行動との関連について、実験例などにもとづいて説明する。	同上
20	社会的行動と自己	人間の社会的行動を理解する上で必要となる自己の問題について考える。	末永俊郎 山口勧 安藤清志
21	対人場面における行動　Ⅰ	行動の社会的促進と抑制の過程について述べる。	中村陽吉 （学習院大学教授）
22	対人場面における行動　Ⅱ	他者との空間的関係（距離・場所など）が行動に及ぼす影響について考える。	同上
23	対人場面における行動　Ⅲ	他者との対人関係の成立の手がかりとしての魅力の問題などについて述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	集団内行動Ⅰ	行動の条件としての集団について説明し、さらに集団内における成員相互の働きかけの過程について述べる。	末永俊郎 古畑和孝 （東京大学教授）
25	集団内行動Ⅱ	集団内での意志決定と集団思考などの問題をとりあげる。	古畑和孝
26	集団内行動Ⅲ	集団内のコントロールシステム（リーダーシップなど）について考える。	同　上
27	集団間行動	集団と集団の間の葛藤と調整のプロセスについて考える。	同　上
28	集合行動とは	集合行動とは何であるかを述べ、集合場面におかれた人々の行動の特徴について考える。	岡部慶三 （東京大学教授）
29	集合行動の事例	災害状況において発生した集合行動の特徴（流言・避難など）について考える。	同　上
30	行動科学の展望	個体行動と社会的行動との関連性を中心に、行動科学全般のまとめを行なう。	末永俊郎

＝心理学概論Ⅰ＝

〔主任講師：大山　正（東京大学教授）
　　託摩武俊（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

人の心と行動のはたらきを理解するために、まず、人が環境の状態を感覚を通して知り、それによって得た情報を処理して、自分の要求の実現に役立てていく過程を考えてみる。つぎに、このような人の心と行動が、子供から大人へと発達していく過程において、いかに変化していくか、また個人個人によりどのように違うかについて述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心理学とは	心理学とは何かについて、2回以降の内容を説明しながら具体的に述べ、つぎに、心理学の課題、対象、方法などをめぐって、歴史的発展の過程と現況を述べる。	大山　正（東京大学教授） 託摩武俊（東京都立大学教授）
2	環境の認知Ⅰ 感覚	人間が環境の中で生活し行動し、環境に適応していくためには、まず環境の状況を把握する必要がある。その手段としての感覚の特性について考える。	大山　正
3	環境の認知Ⅱ 知覚	われわれが環境の状況を見、聞き、感じる場合、それは単なる感覚のよせあつめでも外界の忠実な反映でもない。この観点から、知覚の法則、錯覚、空間と運動の知覚について述べる。	同　上
4	情報の処理Ⅰ 注意と探索	われわれが日々接している情報の量はきわめて膨大であるが、われわれはその一部しか利用していない。この観点から、注意と知覚的探索について述べる。	大山　正 御領　謙（千葉大学教授）
5	情報の処理Ⅱ 記憶	人間が利用している情報のかなりの部分は記憶として保存されている過去の情報である。この記憶の成立、保持、検索、変容などについて述べる。	大山　正 小谷津孝明（慶応義塾大学教授）
6	情報の処理Ⅲ 思考と言語	選択され、検索された情報を用いて、ある目的のために、人が問題を解決していく過程が、思考である。その際には、人々が長年にわたり作り上げ、個人が幼時より習得してきた言語の体系が大きな役わりを演ずる。	大山　正 鹿取広人（東京大学教授）
7	経験の効果 学習	多くの生物とともに人間は、過去の多くの経験によって、行動の習慣を獲得し、変容している。この学習の過程を、条件づけの原理に基づいて考えてみる。	大山　正

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	要求と感情	人が行動を起こすのは何らかの要求にもとづいている。要求には、多くの動物と共通している生物的要求と、人間の社会生活にもとづく社会的要求がある。また、これらの要求が実現される過程にさまざまの感情と情動が生じる。	大山　正
9	心の発達Ⅰ 乳児期・幼児期	他の動物に比べて、人には本能的行動が少なく豊かな可塑性をもって生れてくる。赤ちゃんがまわりとのかかわり合いの中でどのように成長していくかを述べる。	詫摩武俊
10	心の発達Ⅱ 青年期から老年期	青年期から老人期にかけての心の変化、すなわち他人との関係、自分自身についての考え方や感じ方の変化の過程を述べる。	同上
11	個人差Ⅰ 知能	知能とは何か、どんな働きの知能があるのか、それの測定は可能か、天才とは何かなどについて述べる。	詫摩武俊 伊藤隆二 （横浜市立大学教授）
12	個人差Ⅱ 性格	性格の個人差の形成過程、性格の類型、性格の測定法、性格の認知、性格の好き嫌いなどについて述べる。	詫摩武俊
13	社会的行動	人はつねに他人とかかわりをもって生きている、個人と集団との関係、人と人との距離感、人間関係にみられる日本人の特徴などについて述べる。	詫摩武俊 加藤義明 （東京都立大学助教授）
14	心の異常	精神病、神経症、性的倒錯、非行、自殺などの実態、現在の特色、これらの原因、対策などを取り上げる。	詫摩武俊 斎藤茂太 （斎藤神経科病院長）
15	心理学の応用	現在の心理学は個人の生活とも社会の諸事象とも密接に関係している、心理学の研究成果や研究法が実際にどのように応用されているかを実例をあげながら述べる。	詫摩武俊 大山　正

＝心理学概論 II＝

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学概論Ⅰを土台として、心理学上の諸問題を各論的に述べる。これによって、心理学概論Ⅰとともに、心理学的なものの見方、考え方を豊かにし、同時に、心理学のみならず、隣接領域にかかわる諸事象に対しても、関心と興味とをもつことができるように配慮する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心の発達 I	幼少期の発達における脳細胞間の精密な連結化と神経繊維の髄鞘化の重要さにふれ、それを土台として、初期経験の問題を、動物実験の事例を中心に説明する。	中川大倫（放送大学教授）
2	心の発達 II	幼少期に人間的社会的接触をもたなかった野生児や、より豊かな人間的社会的環境を与えた場合の事例（施設児）をあげ、人の発達に及ぼす初期経験の重さを説く。	同上
3	環境の認知 I	知覚的世界の基本的な特性を、形の知覚（図ー地、群化、分節、枠組、輪郭線、知覚の場）と運動の知覚（実際運動、みかけの運動）を取り上げ説明する。	同上
4	環境の認知 II	空間知覚に重点をおき、奥行き視（単眼視と両眼視の場合）と恒常現象（大きさ、明るさ、形の場合）とを述べ、さらに、時空相対の問題にもふれる。	同上
5	環境の認知 III	知覚形成における主体的要員として、構え、文脈、図式、順応水準、動機、共通の期待などについて述べ、また、知覚と有機体の生活の問題にふれる。	同上
6	学習 I	古典的条件づけとオペラント条件づけの概要を述べ、とくに、オペラント条件づけにおける諸問題や最近のシェイピング、バイオフィードバックにもふれる。	同上
7	学習 II	学習に関する認知説を説明し、S－R理論との間の論議にふれる。さらに、技能学習、社会的学習（モデリング、不安回避の模倣）について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	記憶のシステムⅠ	最近の情報理論の影響による記憶モデルを土台として、感覚的記憶の基本的な特質、ならびに、感覚的記憶と短期記憶の関係や短期記憶の情報処理過程につき述べる。	中川大倫
9	記憶のシステムⅡ	短期記憶と長期記憶の関係、長期記憶の構造の問題、記憶におけるリハーサルと忘却の問題、記憶研究と日常生活の関係、などの事項につき説明をする。	同上
10	認知	認知における特徴抽出の理論（心理学的理論と生理学的理論）、ならびに、認知における情報処理の方略として、刺激駆動型処理と概念駆動型処理について説明をする。	中川大倫 星薫 （放送大学助教諭）
11	個人差	知的個人差に焦点をしぼり、知能の因子構造を述べ、また、知能と学力の特性を、測定法との関連において説明し、測定結果の意味の理解に役立てる。	中川大倫
12	社会的行動Ⅰ	人の行動を社会的背景において捉える。まず、対人関係として対人魅力、ついで、集団形成にふれ、集団凝集性を説き、さらに、集団規範と同調の問題を取り上げる。	中川大倫 山口勧 （放送大学非常勤講師）
13	社会的行動Ⅱ	集団内の個人行動（社会的促進と手抜き）や集団行動（集団の生産性、リーダーシップ、集団決定など）を説き、最後に、危機的場面と人の行動にふれる。	同上
14	要求（動機）と阻止現象	要求（動機）の構造、要求の充足と阻止を土台として、とくに、阻止に伴う非合理的な反応の諸タイプについて説明を加え、人の行動の理解と予測に役立てる。	中川大倫
15	指導と治療	不適応の指導と治療における各種の方法の特性について述べる。カウンセリング、心理療法、行動療法、内観法、集団療法などを紹介する。	同上

＝ 教 育 学 概 論 ＝

〔主任講師：田浦武雄（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

教育学は、教育現象を学問的に研究し、理論体系化したものである。教育は、文化・社会の動態と、人間の成長・発達との接する面で、文化と人間との現実構造や変化過程を探究し、よりよい未来を創出するのを助ける営みである。多くの教育問題との関わりを含め、教育の基本問題を研究し、それらの改善の方向を究明する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教育学の意義	1～7の7回にわたって、教育学及び教育の意義を検討する。 教育学の概念、教育論と教育思想、教育学の動向、日本における戦前と戦後の教育学の変遷等について考察する。	田浦武雄（愛知学院大学教授）
2	教育の構造	人間形成には、すくなくとも素質と環境と教育との要素が含まれている。これら三つの要素の関連のダイナミズムの基本構造について、検討を行う。併せて、ＩＱをめぐる論争及び野生児記録が示すもの等についても考察する。	同上
3	教育の機能	教育という用語を吟味し、意図的教育と無意図的教育との関連について考察し、教育の社会的機能－文化伝達、社会統制、文化改造－の類型に関して、検討を行う。	同上
4	成長と教育	教育は人間の成長と発達をめざしている。成長の概念を重視したジョン・デューイの教育学の中心的主張と、かれが批判した諸学説－準備説・開発説・形式陶冶説等－の問題点について考察する。併せて、デューイの成長観について検討する。	同上
5	発達と社会化・文化化	人間の成長と発達とは類似した概念であるが、この他に、社会化・文化化等の過程の研究からも、参考とすべきものを考える必要がある。人間の成長・発達の過程の実態を捉えるとともに、いかに改善していくかの処方を的確に行う点について検討する。	同上
6	発達と教育の理論	人間の成長・発達の過程の把握とその処方をめざすものとして、成長・発達の教育学を志向する必要がある。そのための学際的研究の必要性、成長・発達の考察の視座として文化内存在の概念を吟味し、全人的成長の構造を検討する。	同上
7	現代教育の動向 ―教育の人間化	現代教育の動向のうちで、注目すべきものは教育の人間化の追究であり、人間的教育の確立である。その構成要素として、民主的価値観、確かな知識、豊かな感情・情操、不屈の意志、逞しい健康、道徳的実践力、創造的態度等が考えられる点について検討する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	現代教育学の類型 Ⅰ 進歩主義・伝統主義	8～11の4回にわたって、現代教育学の類型について検討する。 戦後わが国の教育に影響を与えた進歩主義と、それと対立する伝統主義とについて、それぞれの理論的特色を類型的に考察する。	田浦武雄
9	現代教育学の類型 Ⅱ 改造主義・実存主義	プラグマティズムの立場にたちながら、進歩主義とちがった歩みをした改造主義、および人間存在の問題を重視した実存主義について、理論的特色を検討する。	同　上
10	現代教育学の類型 Ⅲ 教育の現象学・教育人類学・教育社会学	現代教育学の新しい動きとして、教育の現象学と教育人類学について検討する。教育の現象学は、実証主義のゆきづまりに対処して台頭し、実存主義の傾向をもった点、教育人類学は、教育現象についての文化人類学的研究として注目されている点を考察する。教育社会学の特色も検討する。	同　上
11	現代教育学の類型 Ⅳ 社会科学的教育学・分析哲学・教育人間学	社会科学的教育学、とくにマルクス主義教育学は、社会主義圏の拡大とともに勢力を増しているが、その理論的特色を考察する。他方、イデオロギー的には中立であるが、哲学的分析を重視した教育学、いわゆる分析哲学の検討を行う。近年台頭している教育人間学について考察する。	同　上
12	教育の文化的基礎	12～15の4回にわたって、現代社会と教育との関連構造について検討する。 教育は文化と密接に関連している点を、能力と文化的多様性、文化的産物としての能力、文化的相対主義、文化と人間形成、教育における文化研究等の側面に分けて考察する。	同　上
13	地域社会と教育	教育をめぐる地域社会の問題、地域社会における学校の役割について検討し、学校の人間化と社会の教育化との関連について、教師の指導力の向上、非行問題への対応、地域社会のもつ教育力の向上等の側面にわたって、考察を行う。	同　上
14	情報化社会と教育	情報化社会とマス・コミュニケーションの関係について考察し、併せて、情報化社会における教育のありかたについて、判断力の育成、学び方の学習、教養の向上、人生のビジョン、民主的価値への献身、生涯学習の必要性等の側面にわけて、検討する。	同　上
15	家族・仲間集団と教育	幼少期から青年期にかけて、人間形成に影響を与える家族集団・青少年集団と教育との関係について検討する。家族と教育との関連については、家族集団の構造、機能の変遷、教育的機能の面から考察し、仲間集団と教育については、発達段階に応じた構造を考える。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	学校の機能と課題	16～27の12回にわたって、学校教育の基本問題を広い視野から検討する。 学校の概念、近代社会と学校、第二次大戦後の学校、公教育と学校、教育過程と学校の機能、学校の課題等の面から考察を行う。	田浦武雄
17	学力観の動向	学力観の変遷と学力のありかたについて検討する。とくに学力の概念、基礎学力論争を三期に分けて考察し、さらに、人間的教育のフレームワークの中で、基礎学力をいかに考えたらよいかの考察を行う。	同上
18	教育的価値と目的	教育目的は、教育実践を方向づけるものとして、重要な位置をしめている。教育目的の概念、教育基本法の教育目的、教育目的をめぐる論争を整理し、教育目的の構造について、顕在的目的と潜在的目的、規制と逆規制の関係を究明し、併せて教育目的の基準を考える。	同上
19	知識論	確かな知識は、情報化社会ではますます必要となる。知識の意義を理論的に反省し、知識の捉えかたについての諸立場を比較検討し、併せて教育の人間化の観点から、知識教育の課題が何かを究明する。	同上
20	教育課程	何を教えるかは、学校教育の基本問題の一つである。教育内容と教育課程との関係、教育課程の構成要素、教育課程の類型を検討し、学問中心教育課程、および人間中心教育課程の特色を考察する。	同上
21	教育方法	いかに教えるかは、学校教育の基本問題の一つである。教育方法について、その意義を考え、その諸理論を整理し、五段階教授法、問題解決学習、発見学習、制御による学習等の諸説について考察し、学習指導の最適化の必要性について検討する。	同上
22	生徒指導	生徒指導は教科指導と並んで重要な領域である。生徒指導の必要性、現代社会のインパクト、生徒指導と自己実現、生活指導の伝統の反省、生徒指導の課題等について、検討する。	同上
23	道徳教育 (1) 道徳と教育との関連	道徳教育の概念を吟味し、道徳教育を重視すべき理由について考察し、道徳と教育との関連について、価値観の指導、民主主義の理解、人間生活の核、主体的倫理と人類的倫理、社会的環境との対応等の面から、検討を行う。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	道徳教育　(2) 道徳教育の構造	先進諸国における道徳教育の体制を比較検討し、併せて、近年重視されている価値教育について、価値教育の類型を整理、分析し、価値教育のありかたについて考察する。	田浦武雄
25	情意的領域の教育	教育においては、認知的領域と並んで、情意的領域が重視される必要性を究明し、芸術教育の動向を考察し、芸術教育・情操教育の現実を分析し、それらの課題について検討する。	同上
26	創造性の教育	創造的教育の必要性を考察し、創造性とは何かについて、その構成要素、創造性と倫理との関連、創造性の人間学の面から探究し、併せて、創造性教育の基礎的視点について、問題意識の明確化、ステレオタイプの打破、具体化能力の育成、枠組の明確化を検討する。	同上
27	教育評価	教育評価が、人間的教育においてしめる意義について検討し、教育評価の重要な側面として、達成度の評価、形成的評価、創造性の評価等について考察する。	同上
28	教育経営	28～30の3回にわたって、教育制度と教育との関連を広い視野から検討する。学校経営・学級経営等を包含する教育経営の意義を明らかにし、学校経営が課題とすべき領域、学校経営の活性化の方途，教育経営と学級経営の関連について考察する。	同上
29	教育制度・行政	教育制度・行政の意義を考察し、学校制度の現状と課題、学校体系の改革、教育行政の動向について、検討する。歴史的反省とともに、他の国の教育制度・行政の動向との比較研究を行い、教育制度・行政の課題を究明する。	同上
30	教師論	教育の質を左右するものとして、教師の役割は大きい。ILO・ユネスコの「教員の地位に関する勧告」(1966年）は、専門職としての教師を主張したが、その意義を吟味し、教職観の類型に考察を加え、併せて教員養成の課題について検討する。	同上

＝ 日 本 語 の 基 礎 ＝

〔主任講師：阪倉篤義（甲南女子大学教授）〕

全体のねらい

母国語である日本語は、われわれが“言語”というものについて考えるための、最適の材料である。ここでは、特に日本語における特徴的な事実を取上げて、その意味を解明しつつ、実際的な問題にも触れて、日本語の基礎的な問題について、ひとわたり述べたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語とは何か	何を指して日本語というか。世界の諸言語の中で、日本語は、どういう位置をしめているか。また、それはどういう系統の言語か、などの問題について述べる。	阪倉篤義（甲南女子大学教授）
2	日本語のさまざま	日本語と言われるものの中には、地方的な違い、歴史的な違いがあり、「話しことば」と「書きことば」との違いがある。そういう日本語の種々相について述べる。	同上
3	日本語のコミュニケーション	一般に、ことばによるコミュニケーションは、どのようにして成立するか。特に日本語のコミュニケーションの特色は何か。それが日本語の構造とどう関係するか、などについて述べる。	同上
4	敬語について	日本語の特色の一つとして問題にされる、敬語の本質は何か。「読んでやる」「見てもらう」などとともに、こういう物言いの生れてくる理由はどこにあるのか、について考える。	同上
5	「は」と「が」の使い分け	「は」と「が」との使い分けは、実践的には容易であるが、両者の違いを説明することは、むずかしい。これの解明は、日本語の構文論（シンタックス）の基本的な課題の1つである。	同上
6	語順の問題	日本語は、語順の比較的ゆるやかな言語であると言われるが、そこにある一つの法則とはどういうものか。また、日本文の句読点は語順とどのように関係するか、などについて述べる。	阪倉篤義 樺島忠夫（大阪府立大学教授）
7	日本語の語彙	語彙とは何か。語の種類には、どういうものがあるか。特に使用率の大きい語と小さい語との性格・機能はどう違うかなどの点を考え、日本語の語彙の特色を述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	和語・漢語・外来語	和語の、文章の中での役割、漢語が日本語において果す役割はどういうものか。特に造語という面から考えた場合の両者の特色。さらに、いわゆる外来語の役割などについて述べる。	阪倉篤義 樺島忠夫
9	語の意味と辞書	語の意味は、どのように記述されるか。また、それを集めた“辞書”というものについて、その種類と、利用法について述べる。	阪倉篤義
10	日本語の文字と表現	漢字・ひらがな・カタカナ・Rōmazi と4種類の文字を使う日本文の表記には特異な問題がある。その役割の分担、分かち書きの問題、更には外来語の表記やワードプロセッサーなどとの関係から考えられる、将来の日本語表記について。	阪倉篤義 樺島忠夫
11	日本語の発音	日本語の音韻組織は比較的簡単で、アクセントも、他の言語に比較して意義弁別の役割が軽い。その体系の概略と、方言的・歴史的な差異について述べる。	阪倉篤義
12	かなづかい・送りがな	仮名遣いとは何か。特に現代仮名遣いにおける“とお”と“とう”との遣い分け、“こうし”は格子か子牛かなどという問題を考え、また、送り仮名の問題点などを述べる。	阪倉篤義 樺島忠夫
13	語史と慣用句	現代日本語は、過去の日本語の変遷の結果として生れてきたものである。現代語の単語が、かつてはどのような形や意味を持っていたかを、二三の例によって説明し、併せて慣用句の発生について説く。	阪倉篤義
14	日本語の過去	日本語の歴史が始まって以来、今日まで千数百年の間に、内発的な原因、また外国語との接触による外発的な原因で、日本語はどのような方向に変化してきたか。その大要を述べる。	同　　上
15	日本語の将来	日本語は、将来、発音・語彙・文字など、どのような面で変化する可能性があるか。それは日本人の言葉に対する態度によるが、将来の日本語はどうあるべきかという点をも含めて、語りあいたい。	阪倉篤義 樺島忠夫

＝ 作 歌 ・ 作 句 ＝

〔主任講師：井本農一（実践女子大学長）〕

全体のねらい

短歌・俳句を知的に理解するだけでなく、それらを創作する試みによって、文学に対する共感と理解を深める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	短歌と俳句の成り立ち	古典和歌・俳諧から現代短歌・現代俳句までの歴史的展望を述べ、短歌と俳句の文学的特質について論ずる。	井本農一（実践女子大学長）
2	風雅への共感	短詩形文学における作者と読者の同一性の問題を論じ、何等かの意味において風雅への共感が必要であることを述べ、いわば国民詩ともいうべき短詩形文学創作への導入を計る。	同上
3	なぜ歌をつくるか	現代に生きる日本最古の詩形である短歌の特性と、短歌をつくることの意味を述べる。	岡野弘彦（国学院大学教授）
4	抒情の源流	現代短歌にさまざまな傾向が見られるが、おのおのの作歌思潮を、具体的な作例によって示す。	同上
5	近代短歌の流れ	作歌の根本は感動であるが、感動の把握は言葉によってなされ、言葉が短歌の韻律をつくる。短歌の言葉とは何か。	同上
6	現代短歌の動向	作歌技法のおもなものが写生であるが、写生とは生を写すことであって、たんなる模写ではない。写生の歌とはどのようなものか。	同上
7	歌のしらべと写生	現代短歌における比喩の技法とその重要性とを実作に即して述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	批評と推敲	作品のよさを感じとる力を養うことが作歌上必要であり、一歩進んだ批評の態度を確立することがさらに重要である。関連して推敲の添削等を述べる。	岡野弘彦
9	なぜ俳句を作るか	芭蕉の「古池や」の句をめぐって「俳」の意味を探り、俳句の特性を考えるとともに、現代人が俳句を作ることの意義について考える。	川崎展宏（明治大学教授）
10	近代俳句の出発	子規の俳句革新運動とそれによって切り捨てられたものの意味を、芭蕉の句を例にして考え、句作の「場」の問題、先行の文芸との関係などを考える。	同上
11	写生	明治という時代の中で子規が文学や俳句をどう考えたかを明らかにしながら、子規の写生について述べ、さらに写生の現代俳句における意義を論ずる。	同上
12	花鳥諷詠と季語	虚子が俳句と俳人の在り方を規定した「花鳥諷詠」と、その方法としての「客観写生」について述べ、さらに季語について考える。	同上
13	対話の世界	挨拶の句は、連句の第一句目としての発句のはたらきが、近代の社交の場に生かされているものだが、挨拶句を鑑賞して俳句の対話性に着目する。	同上
14	俳句の近代化の過程	子規の俳句革新の試みが、その後いかに継承され、俳句の近代化がいかに推進されたかを具体的に考える。	同上
15	創作の根源にあるものとその形象化	この講座の結びとして、短歌・俳句の根源にあるものと、その形象化について話し合い、短詩形文学の未来についても展望する。	岡野弘彦 川崎展宏

＝国　家　と　法　Ⅰ＝

―　憲　　法　―

〔主任講師：芦部信喜（学習院大学教授）〕

全体のねらい

憲法は、近代型から現代型へ大きく変化したが、人権を保障する法であることに本質がある点は、変わりない。この歴史の流れと憲法の本質を明確にし、明治憲法とも比較しながら、日本国憲法の原理と仕組みの大要を検討する。また、それを通じて、国家と法との関係についても考えてみることにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	憲法と立憲主義	1. 憲法の意味 2. 憲法の分類 3. 立憲主義と現代国家―法の支配	芦部信喜（学習院大学教授）
2	日本憲法史	1. 明治憲法の特色 2. 日本国憲法の成立経過 3. 日本国憲法成立の法理	同　上
3	国民主権の原理	1. 日本国憲法の基本原理 2. 国民主権 3. 天皇制	同　上
4	平和主義の原理	1. 憲法第9条成立の経緯と特色 2. 戦争の放棄と戦力の不保持 3. 日米安保体制	同　上
5	基本的人権の原理	1. 人権宣言の歴史 2. 人権の概念 3. 人権享有の主体 4. 人権の内容・分類	同　上
6	基本的人権の限界	1. 公共の福祉―二重の基準 2. 特別権力関係における人権 3. 私人間における人権規定の効力	同　上
7	包括的基本権と法の下の平等	1. 生命・自由・幸福追求権 2. 法の下の平等 3. 参政権（特に選挙権の平等）	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	自　由　権　(1)	1. 思想・良心の自由 2. 宗教の自由 3. 学問の自由	芦　部　信　喜
9	自　由　権　(2)	1. 表現の自由の意義 2. 報道の自由・広告の自由 3. 表現の自由の限界	同　　上
10	自　由　権　(3)	1. 職業の自由 2. 居住・移転の自由 3. 財産権 4. 人身の自由―法の適正手続	同　　上
11	参政権と社会権	1. 生存権（環境権） 2. 教育を受ける権利 3. 労働基本権	同　　上
12	統治の機構 (1) ―国　会―	1. 権力分立の原理と制度 2. 国会の憲法上の地位 3. 国会の組織と活動 4. 国会（議院）の権能	同　　上
13	統　治　機　構　(2) ―内　閣―	1. 内閣制度の特色 2. 行政権の意味 3. 内閣の組織と総理大臣の首長性 4. 議院内閣制	同　　上
14	統　治　機　構　(3) ―裁判所―	1. 司法制度の特色 2. 司法権の意味 3. 裁判所の組織と最高裁の特色 4. 司法権独立の原則	同　　上
15	憲　法　の　保　障	1. 憲法保障の諸方式 2. 違憲審査制 3. 憲法改正とその限界	同　　上

＝国家と法 II＝

〔主任講師：南　博方（一橋大学教授）〕

全体のねらい

国家権力の担い手の一つである行政権が法律関係の一方当事者となる場合には、多かれ少なかれ民事関係とはちがった特殊固有の法原理の適用をうけることになる。このような行政に特有な法(行政法)を認識し、現実の行政において生起する法律上の問題を解決するのに必要な知識を身につけるようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行政法とは何か	1　行政とは何か。行政にどのような種類があるか。 2　行政と法とのかかわり。 3　行政法にはどのようなものがあるか。	南　博方 （一橋大学教授）
2	行政は誰が行うか	1　行政権のもち主は誰か。 2　行政機関とは何か。行政機関相互の関係はどうなっているのか。 3　公務員とは何か。公務員は、どのような地位をもつか。	同　上
3	行政はどんなことをするのか	1　行政は、目的・内容からみてどんな作用を行うか。 2　秩序行政作用とはどんな作用か。 3　給付行政作用とはどんな作用か。 4　行政は、どのような形式で行われるか。	同　上
4	行政行為とは何か	1　行政行為とは何か。 2　行政行為にはどんな種類があるか。 3　行政裁量とは何か。 4　行政行為の附款とは何か。	同　上
5	行政行為はどんな効力をもつか	1　行政行為の効力とはどんなものか。 2　行政行為はどのような場合に無効になるか。 3　行政行為の取消しとは何か。 4　行政行為の撤回とは何か。	同　上
6	行政行為以外にどんな作用があるか	1　行政立法とは何か。 2　行政計画とは何か。 3　行政契約とは何か。 4　行政指導とは何か。	同　上
7	行政上の法律関係とは何か	1　公法関係と私法関係について。 2　行政法関係で私人はどのような地位に立つか。 3　行政法関係に私法が適用されるか。 4　特別権力関係とは。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	行政はどのような手続で行われるか	1　行政手続法とは何か。 2　行政手続法は、なぜ必要か。 3　行政手続法には、どのような法理が支配するか。	南　　博　方
9	行政の実効性はどのようにして確保されるか	1　行政罰とは何か。 2　行政執行とは何か。 3　即時強制とは何か。	同　　上
10	行政によって損害をうけたときどうするか	1　国家賠償とは何か。 2　国家賠償法とはどんな法律か。 3　その他の国家補償。	同　　上
11	行政によってうけた損失はどのようにして償われるか	1　損失補償とは何か。 2　損失補償は、どのような場合に請求できるか。 3　損失補償は、どのような内容をもつか。	同　　上
12	行政庁に対してどのような不服申立てがあるか	1　行政不服申立てとは何か。 2　行政不服審査法とはどんな法律か。 3　行政審判とは何か。 4　苦情処理手続とは何か。 5　行政機関による紛争処理。	同　　上
13	行政事件訴訟とは何か	1　行政事件訴訟とは何か。 2　行政事件訴訟にはどんな種類があるか。 3　抗告訴訟・当事者訴訟・民衆訴訟・機関訴訟について。	同　　上
14	行政事件訴訟はどういう場合に提起できるか	1　司法権の限界とは。 2　統治行為と行政裁量。 3　特別権力関係と司法審査。 4　無名抗告訴訟とは何か。	同　　上
15	行政事件訴訟はどんな手続で審理されるか	1　抗告訴訟の提起について。 2　抗告訴訟の審理について。 3　抗告訴訟の終結について。	同　　上

＝ 現代の経済と経済分析 ＝

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

経済学者は、自らの生きている経済社会を的確にとらえる理論を作り、できればそこに存在する問題を解決する方策を提示するという努力をしてきた。ここでは、その成果である現代経済理論の概要を今日の経済と関連づけて説明する。

主な項目

(1) 経済生活と経済学
(2) 家計 ── 所得とその処分
(3) 消費者行動
(4) 企業行動
(5) 市場機能　1. 部分均衡
(6) 〃　2. 一般均衡
(7) 市場の失敗
(8) 所得分配
(9) 独占
(10) 価格と経済政策
(11) 国民経済の構造
(12) 国民所得勘定
(13) 消費
(14) 投資
(15) 国民所得の決定
(16) 景気循環
(17) 長期波動
(18) 経済成長
(19) 貨幣
(20) インフレーション
(21) 金融
(22) 財政
(23) 租税と公債
(24) 経済政策
(25) 国際収支
(26) 国際貿易
(27) 国際金融
(28) 外国為替
(29) 国際資本移動
(30) 現代の経済問題

＝会　　計　　学＝

〔主任講師：江村　稔（放送大学教授）〕

全体のねらい

会計学の講義は、企業会計（とくに財務会計）の「しくみ」と「はたらき」を明らかにすることを目的として、体系的かつ構造的な説明を行うように企図されている。会計学の講義の前半においては、企業会計における会計処理、すなわち、複式簿記の技法による経済活動の記録についての説明に、相当の時間があてられることとなる。また、会計学の講義の後半では、主要な財務諸表項目につき、その会計処理とくに期間損益計算における取り扱いを詳述する。したがって、固定資産の減価償却や繰延経理と引当経理のような高度の問題につき説明が加えられる。そして、最後のまとめとして、財務諸表による財務状況の開示、および財務諸表監査、さらには、企業会計の国際化などの諸問題を解説する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	決算書とその役割	企業会計の所産である貸借対照表と損益計算書は定時株主総会に提出され、会社の財産と損益の状況（財政状態と経営成績）を報告する役割をもっている。そこで、まず、決算書としての貸借対照表と損益計算書について述べる。	江　村　　稔（放送大学教授）
2	複式簿記と複式記帳	複式簿記は左右両欄式の2つの勘定の間で行われる借方（左側）と貸方（右側）の同額記入としての複式記帳によって特色づけられる。この複式記帳を、経済活動のもつ二面性に注目して説明する。	同　　上
3	複式記帳の法則	複式記帳は一定のルールに従って行われる。このルールは必ずしも理論的に設定されたものではないが、ぜひとも記憶しておかねばならないものである。	同　　上
4	決算のしくみ（その1）	各勘定の残高を借方・貸方の別に従って1つの勘定にまとめると、その借方と貸方の合計額は一致する。この特徴を用いて、記帳と計算の検証がなされるほか、勘定の締め切りとしての決算が完了し、決算書が作成されるのである。	同　　上
5	決算のしくみ（その2）		同　　上
6	決算書の様式（その1）	損益計算書に設けられている各種の区分、および、その区分ごとに示される各種の損益につき説明し、また、損益計算書の末尾に記載される当期未処分利益を明らかにする。	同　　上
7	決算書の様式（その2）	貸借対照表に設けられる各種の区分について述べるが、この場合、もっとも重要な問題として、流動・固定分類につき詳説しよう。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	利益の処分と留保	わが国では、損益計算書の末尾に当期未処分利益が記載されることになっている。当期未処分利益は株主に対する配当など、会社が処分することができる利潤を示すものであるが、同時に、この未処分利益の増減計算を知る必要がある。	江村　稔 （放送大学教授）
9	企業会計の法的規制	株式会社の会計については、商法と証券取引法による規制を問題としてとりあげる必要がある。これに関連して、企業会計原則についても述べることにしよう。	同　上
10	期間損益の計算方法	ある期間の損益は、その期間の収益からこれに対応する期間費用をさしひくことによって計算される。この計算のもつ理論的な意味について考えてみよう。	同　上
11	発生主義と現金主義	期間収益と期間費用の決定にあたっては、発生主義と呼ばれる考え方がとられるが、現金主義との差を明らかにしながら、その意味につき、適当な例示により説明を加える。	同　上
12	商製品の売上高	商品と製品の販売によって得られる収益は売上高として表示される。この売上高の計上にあたっては、種々の販売形態に応じた適当な基準が存在しているので、これにつき述べよう。	同　上
13	役務提供による営業収益	役務の給付を目的とする事業をいとなむ企業における収益計上基準を明らかにしていくことにしよう。	同　上
14	資産の取得価額と払出価額（その１）	ここでは、取得価額と払出価額につき考察を加える。とくに、払出価額の算定につき用いられる個別原価法、平均原価法、先入先出法などを説明する。	同　上
15	資産の取得価額と払出価額（その２）		同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	商製品の売上原価	売上高に対応する売上原価の意味、表示計算の方法、および、種々の問題点を明らかにする。	江村　稔 （放送大学教授）
17	商製品の貸借対照表価額	商製品の取得価額から払出価額をさしひいて求められた取得原価は期末に修正されることがある。これにつき解説しよう。	同　上
18	製造費用と製造原価	製造費用は、材料費・労務費・経費より成るが、ある期間中に製造を完了した製品の原価は、製造方法の差などにより、異なった計算方法が適用される。このような原価計算の方法について簡単な説明を加える。	同　上
19	有価証券の貸借対照表価額	有価証券たる株式と社債につき、その貸借対照表記載価額を明らかにする。	同　上
20	固定資産の減価償却（その１）	固定資産の取得価額は、当該資産の耐用期間にわたり費用として配分される。この手続きを減価償却と呼ぶが、この減価償却と呼ぶが、この減価償却について説明する。	同　上
21	固定資産の減価償却（その２）		同　上
22	繰延資産とその償却（その１）	企業による支出には、その効果が将来の数週間におよぶものがある。期間損益計算では、このような金額は数期間にわたる費用として扱われるが、このための会計技法として繰延資産の計上と償却が行われる。	同　上
23	繰延資産とその償却（その２）		同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	引当金の設定	企業会計では、将来に生じる事象の金額を、あらかじめ期間費用として計上する処理としての引当経理が、例外的に認められている。引当経理が行われる条件は、きわめてきびしいが、この章では、これらの問題を論述する。	江村　稔（放送大学教授）
25	資本金上資本項目	資本にぞくする諸項目の諸問題をとりあげ、あわせて資本と利益の区別につき述べよう。	同上
26	利益配当の法的規制	わが商法による利益配当の規制をとりあげて、その内容を解説する。	同上
27	連結財務諸表の作成	個別財務諸表の連結によって、企業集団の財務諸状況を報告する連結財務諸表につき、あらましを述べる。	同上
28	企業内容の開示と財務報告	有価証券報告書の主要部分をなす財務諸表については大蔵省令である財務諸表等規則が適用される。そこで、いわゆるディスクロージャーの諸問題を説明しよう。	同上
29	株式会社の監査制度	会社が作成し公表する決算書もしくは財務諸表については、監査役による監査が行われる。この章では、商法特例法と証券取引法による規制を説明する。	同上
30	制度会計の諸課題	株式会社の会計については、「企業会計原則」が指針を示している。これらの関係を明らかにすることは制度会計の理解にとり、きわめて重要であるので、この章では、この企業会計原則をとりあげよう。	同上

＝ 社会科学の成立と発展 ＝

〔主任講師：松田智雄（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間の社会集団に関する法則性 ― という問題がこの講義の中心の主題である。人間の社会集団のなかにはある構造があり、その構造を歴史の流れでみれば発展のみちを進んでゆく。ここで法則性というのは、ひとりひとりの人間が、社会集団の構造と発展のなかで動いてゆくとき、その在り方を定める力を法則性と呼ぶのである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会科学について(I)	社会科学とは何か。社会集団は、政治経済、文化などを結合の軸として、歴史的な序列において編成される。その社会集団を正確に、科学的に把握すること、従って、その発展の動きの法則性を捉えようとする。	松田智雄（東京大学名誉教授）
2	社会科学について(II)	社会的現実を組織的な法則体系のなかで把握する。従って発展してきたものとして歴史的に捉える。先ず自然法則の下にあるものと仮定し、次いで固有の社会法則の下に在るという認識論的な意味で社会科学の方法の成立史を述べる。	同上
3	社会科学について(III)	社会的現実の実態を認識し、さらにその未来像を描くことによって現代批判が生まれ、批判的科学として成立するに至る。ユートピアの諸説から、社会理想の提案を追い、最後にマックス・ウエーバーの理念型に及ぶ。	同上
4	ドイツ思想	思想的前提を明らかにするために、まずドイツ思潮を辿る。カント、新カント派としてのウィンデルバント、リッケルト、マックス・ウエーバーへ。さらに、ヘーゲルとマルクスを対比し、歴史学派とカール・メンガーに至る。	同上
5	啓蒙期の思想	啓蒙期に、はじめて社会に対する法則的認識が始まる。自然法の光りのもとに自然と人間社会とを観察し、社会に対する最初の科学的見地をうち立てる。	同上
6	科学の成立	Natural History ― という概念は、自然史などという訳語は誤訳の惧れがある。自然についての歴史または叙述をいみするもので、生物学、物理学、地質学、鉱物学など自然を全体として把握する。	同上
7	自然科学の意義	Natural Philosophyは、自然全体を研究し、とくに物理学を中心として学問を確立する。さらにNatural Scienceが成立し、自然を観察し把握するのであるが、自然のなかに人間が含まれ、人間の社会が考察される。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	カール・マルクス	人間は自然に従属するものとして、人間論が科学的思考の対象となる。念のため、Karl Marxの「経済学批判」は経済の対象をnalur-geschichtlicker Prozessとするが、これが自然史的過程を誤訳された。社会科学とは人間と人間社会の科学である。	松田智雄
9	哲学思想と社会科学	社会科学。科学としての成立。プラトン、アリストテレスの思想を前史とする。ダンテの社会批判とデカルトの人間論、人間の意味と人間に関する批判の基準として「社会的正義」とくに配分的正義論が再生する。	同　上
10	市民社会の研	社会に関する思想 — イギリス近代社会における市民的社会の自己認識が進められ、ベイコン、ホッブス、ロックによって、自然法の社会生活を貫徹する意義を発見する。社会批判と、社会改革、社会進歩の思想が生み出される。	同　上
11	経済学の父、スミス	市民社会の経済的組織を科学的に把握したのが、アダム・スミスであり、社会科学としての経済学が成立する。経済学は、すべてスミスを源泉とする。これに続くマルサス、リカードウ、J.S.ミル。ついに経済学は、憂鬱な科学となる。	同　上
12	フランス啓蒙思想	フランス啓蒙思想のもとにおいては、ルソー、モンテスキュー、ヴォルテール、ケネーに至る個人的自由、近代国家論、自然法則のもとにある経済社会が、科学として形成される。	同　上
13	社会科学と社会主義	社会思想の発展の系譜について。ベンサムからJ.S.ミルへの功利主義は、最大多数の最大幸福を理想とした。しかし、その結果は社会主義に接近する。ヘンリー・ジョージ、ラスキン、モーリス。フランスでは、サン・シモン、プルードン。	同　上
14	新カント派	カントは経験科学をあとづけ、次いで新カント派は、ウインデルバントが歴史科学を、リッケルトが経済科学を基礎づける。カール・マルクスは、古典主義経済学とヘーゲルを前提として、基本的には人間的科学としての社会科学を提起。	同　上
15	マックス・ウェーバー	市民社会への批判的科学として、マックス・ウェーバーは、社会法則を理念型によって、発展法則を具体的因果帰属として把握する。資本主義を「鉄の如き外衣」として表現したことは、その批判の集約であった。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	歴史派経済学	リストに於ける歴史派経済学は、その主著「経済学の国民的体系」Das rationale Sgotem der Polifischen Oekonomie 1841のなかで、そのねらいは、「祖国（ドイツ）の実情」と「ドイツの利害」を把握して、必要なものはドイツの国民的市場と国民的工業を指摘した。	松田智雄
17	新歴史学派	ロッシャー、ヒルデブラント、クニースなどの「旧歴史学派」の成果は、次にシュモーラーやビュッヒャーなどの「新歴史学派」へと継承された。いずれも共通するのは、国民経済の「発展段階」を歴史的方法によって構成した、点にある。	同上
18	マルクス経済学の発展	マルクスの学説は資本主義社会の形成を前提として体系化されたが、現実の資本主義社会は「自由競争」の原則から、更に「独占」の組織へと進んだ。これに対応する「修正主義」が、ベルンシュタイン、カウッキーなどの学説として現れてきた。	同上
19	限界効用学派 (I)	古典学派とマルクス学派は経済学でいう価値の本質を、価値の客観的・歴史的根拠に求めたのに対して、現界効用学派は主観的・個人的判断に置き変えた。これを理論経済学の体系の基礎とし、ゴッセン、メンガー、フルラスなどが、築きあげた。	同上
20	限界効用学派 (II)	その発展は、オーストリアにウィーザー、ボェーム＝バヴェルクによって分配論について、ミーゼス、ハイエクによって貨幣論・景気変動論に至るまで展開された。アメリカにはクラーク、フィッシャー、カーヴァー、タウシッカ、セログマンなど。	同上
21	メンガーの学問的課題	歴史の発展とともに社会も転換してゆくときに限界効用原理は、社会の総体を一局部の「小宇宙」microcosmosによって理解する。経済現象を先ず「小宇宙」として探究し、それを通って世界全体を国民経済現象として、「大宇宙」として把握する。	同上
22	ワルラス人	かれの主著は「純粋経済学要論」であり、そのなかには純粋経済学、応用経済学、社会経済学の三部門が組織的に体系化される。その体系の特徴は一般均衡体系であり、数学的方法を駆使して、合理的方法によるより豊かな社会的富の生産と分配を扱う。	同上
23	新古典学派・マーシャル	ケンブリッジ学派を創立したのはマーシャルであり、新古典派経済学へ方向づけ、近代経済学のアダム・スミスである。社会観における自然法則でなく、有機的成長と進化を基礎的視点とし、数理解析的方法の摂取により、積密理論を展開した。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	マーシャル理論・均衡理論	経済社会の有機的成長過程の解明は究極の課題であるが、その前提として先ず果すべき部門は均衡理論と国民所得論である。この二つの礎柱の上に、「経済学原理」は、特殊均衡論、寡占と独占の問題、さらに長期・短期均衡の導入により体系化した。	松田智雄
25	ピグーと厚生経済学	厚生Welfareはいかにして増大されるか。測定用具を貨幣として、社会的厚生を測定すれば、それはとくに経済的厚生と呼ばれる。経済的原因によって、国民所得が形成されると、その平均量が大きければ大きいほど、厚生は増大する。	同上
26	ケインズと近代経済学の革新	現代の経済学において、ケインズ「一般理論」は、国民所得を中心とする巨視的分析によって、国民経済の総体把握を単純化し、かつ可能とした。いわゆる「ケインズ革命」の名は、経済学の一画期を示し、それは経済の理論と政策とに影響した。	同上
27	ケンブリッチ学派	マーシャル、ピグー、ケインズなど、いずれもケンブリッジ大学の講壇に立ち、しかも、イギリスが直面している政治・経済・社会問題について理論と政策を提起した。社会科学が時代を反映し、それに対して積極的な照明を与える関係の適例である。	同上
28	シュンペーターと「新結合」	シュンペーターの経済学の特質は、あの「新結合」（＝革新）の概念は、驚くべき妙味を発揮しうるので、かれに「革新の社会経済学者」の名を与えることは正当であろう。「経済発展の理論」は、資本主義の発展を「新結合」として把握する。	同上
29	毛沢東理論とその後の展回	中華人民共和国の社会主義体制は中国の全領域と全人民に展開されたが、そのうちに「文化大革命」における挫折と損失をいかにすべきか。この問いへの答えが、「社会主義体制と商品流通」という両者の矛盾なき結合を肯定する理論的提起（馬洪）である。	同上
30	要約の意味で	ギリシア哲学、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに始まり、カント学派の認識論および社会科学方法論への帰結。そして、イギリス社会思想、経済学の流れの画却はマルクス経済学であり、更に近代経済学が社会科学の精密化へと至る。	同上

＝ 現 代 社 会 論 Ⅰ ＝

〔主任講師：辻村　明（放送大学客員教授）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅰでは、現代社会を基本的に規定している諸条件を、世界的視野のなかで眺め、現代社会が歴史的にどのように位置づけられるかを検討する。そのためには、資本主義か社会主義かといった社会体制という条件と、近代化という条件との絡み合いのなかでみていく必要がある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会のとらえ方	人類の発展過程を5つの社会類型でとらえるマルクスとロストウの理論を紹介し、両者の比較を通して、現社会のとらえ方の典型を検討する。	辻　村　　明（放送大学客員教授）
2	現代社会と大衆社会	現代社会を階級社会とみるか大衆社会とみるかで、意見は大きく成立するが、日本での大衆社会論とアメリカでの大衆社会論を比較しながら、コーンハウザーの大衆社会論を検討する。	同　上
3	社会体制と近代化	現代社会を規定している最も基本的な条件である「社会体制」と「近代化」について、それぞれの定義をおこなったのち、両者の絡み合いのなかで、現代社会を分析することの必要性を説明していく。	同　上
4	初期の資本主義	そのまず初めとして、資本主義社会を動かしている根本的なメカニズムを明らかにする。ウェーバーの初期資本主義のエートスやマルクス・エンゲルスの説を紹介する。	同　上
5	現代の資本主義	その資本主義社会が、「機械化」と「民主化」を内包とした「近代化」が進展することによって、どのように変貌してきたかを検討する。	同　上
6	初期の社会主義社会	次いで、資本主義社会の対極をなす社会主義社会の基本的メカニズムを明らかにする必要があり、具体的にはソ連をとりあげて、国家機構、経済機構、党機構、言論機関などの現状を報告する。	同　上
7	現代の社会主義（その1）	その社会主義社会も、資本主義社会と競争していかなければならず、「機械化」という「近代化」は大いに推進されてきた。それが社会全体にどのようなインパクトを与えているか、主として経済や階級の面での可能性を検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代の社会主義 （その２）	「近代化」によって、社会主義社会も「豊かな主会主義」になっていくわけで、その結果余暇、家族、宗教などの面で、イデオロギーに抵触しかねない現象が発生する。	辻　村　　明
9	収斂理論と拡散理論	その結果、資本主義社会と社会主義社会とは、類似した社会に接近していくであろうとみる収斂理論と、両社会は根本的に対立し続けるとみる拡散理論とを比較検討する必要がでてくる。	同　上
10	現代社会と官僚制	以上の他、大規模組織には不可欠の官僚制というメカニズムが、資本主義社会にも社会主義社会にも出現してくるのでその病理現象を検討することが、最終的な体制選択をするために必要な参考となるであろう。	同　上
11	発展途上国の近代化	これまでは、両社会体制の先進国間での比較ということになるが、近代化の遅れている発展途上国も近代化を指向しているので、その近代化途上におけるさまざまな難問も検討しておく必要がある。	同　上
12	高速社会と人間	機械技術のうちでも、特に交通機関の発達はめざましく、その総合的な結果として、「高速社会」とも呼ばれるべき状況が出現し、それが人間にどのようなインパクトを与えているかをみる。	同　上
13	情報社会と人間	機械技術の発達は、単に交通機関においてばかりでなく、最近は通信機関や情報処理機関での発達がめざましく、「情報社会」が人間にどのようなインパクトを与えているかも検討しておく必要がある。	同　上
14	機械技術発達の功罪 （その１）	その機械技術の発達は、人類に多くの利益をもたらした反面、過度の発達から逆に最近は不利益をもたらしている面があり、ここでは「高速社会」の功罪の両面を検討する。	同　上
15	機械技術発達の功罪 （その２）	同じように、「情報社会」の功罪も検討する必要があり、特にＩＮＳ（高度情報通信システム）の実現する高度情報社会の問題を検討する。	同　上

＝ 現 代 社 会 論 Ⅱ ＝

〔主任講師：辻村　明（放送大学客員教授）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅱは、Ⅰのマクロな視点にたいして、ミクロな視点にたった現代社会の現象的な諸問題をとりあげる。Ⅰが社会学的なマクロな視点とすれば、Ⅱは社会心理学なミクロな視点といえる。内容的には、自我の発生から対人関係、全国的レベルでの大衆現象、そして国際レベルでの文化摩擦に説き及ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	選択的接触といいわけの論理	現代社会には、あらゆる情報が氾濫している。しかしわれわれは、それらをすべてうけいれているわけではなく、選択しながら接触している。そのメカニズムについて、フェスティンガーとハイダーの理論を考察しながら、いいわけの理論の分析を試みる。	辻村　明（放送大学客員教授）
2	自己成就予言と自己破壊予言	人間は自己暗示によって、その後の行動が変わるという心理的特性をもっている。そこに生じる現象として、自己成就予言と自己破壊予言をとりあげ、予言が人間の行動にどのような影響を与えるかを検討する。	同　上
3	匿名の無責任と責任の分散	現代社会は大衆社会ともいわれているが、大衆という大勢の集まりのなかで、個人は匿名の存在になりがちである。そうした匿名性がひき起こす無責任な行動について分析する。	同　上
4	縄張りと空間距離	動物には縄張りがあるが、人間にもそれに似たようなものがあって、他人と一定の空間距離をとりながら生活している。その諸相について考察するとともに、非言語的コミュニケーションにも言及する。	同　上
5	流行と物の普及	個性をもつ個人も、大衆の一員という側面があり、大衆現象のメカニズムに規定される。そのようなものとして、流行や物の普及といった現象がどのように発生していくかを検討する。	同　上
6	情報不足と流言	大衆現象の一つとして、流言や　話などの情報の伝播現象も重要であり、それをマス・コミュニケーションの物理的な機能および政治的な機能との関連で分析していく。	同　上
7	パニックとゲームの理論	現代社会はパニックをひき起こしやすいさまざまな条件をそろえている。そのメカニズムについて、ゲームの理論を参考にしながら考察する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	文化摩擦と誤解のレベル	国際化が進むにつれ、文化や価値観の異なる国民同士の接触が増大して、そこに誤解やコミュニケーション・ギャップが生じている。それを解消するにはどうしたらよいか。その対策を考える。	辻村　明
9	対外国イメージの研究	一衣帯水の隣国同士であるにもかかわらず、日韓両国は相互に偏見と悪いイメージを保持してきた。この日韓のコミュニケーション・ギャップを考察する前に、まず世界各国における対外国イメージの研究についてみておく。	同上
10	日韓のコミュニケーション・ギャップ	前章での考察をふまえて、日韓のコミュニケーション・ギャップの分析を試み、そこにみられる偏見や否定的イメージの実態と、それを解消するための方策を考えていく。	同上
11	日本人の国民性	われわれ日本人はどのような特徴をもっているのか。まず代表的な日本人論をとりあげ、さらに客観的な調査によるその実態を把握しながら、日本人の国民性を総合的に検討する。	同上
12	戦後日本の大衆心理・1	大衆心理は国民性とは多少異なり、ある特定の時代にあらわれる大衆の心理的特性を意味する。戦後日本の大衆心理を分析するに先立ち、その歴史的背景について考察しておく。	同上
13	戦後日本の大衆心理・2	大衆心理をとらえる方法として、ベストセラーの本をとりあげ、戦後40年間のベストセラーについて、特に「日本に対する肯定と否定」という観点に立って、年代別に分析を試みる。	同上
14	地域社会の復権	現代社会では、さまざまな要因から社会全体の画一化現象が多発し、地域社会や地方文化が破壊されていきつつある。その諸相をとらえながら、それを阻止するための方策を考える。	同上
15	地方文化の多様性	現代社会の危険性に対処するためには、地域社会の活性化が望まれるが、それは必ずしも容易ではない。ここでは、実際にそうした努力をしているさまざまなケースを紹介しながら、現代社会の今後の在り方について考察する。	同上

＝社　会　調　査＝

〔主任教授：甲田　和衛（放送大学副学長）〕

全体のねらい

社会調査は i)歴史、ii) 方法、iii) 経験社会学の成立という3つの側面をもっている。社会調査の範囲は、センサスから個人の日記書簡に及ぶ。ここではわれわれの日常生活に社会調査がかゝわる問題を通して、この3つの側面をできるだけ同時にとりあげていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会調査の展開 日本 (1)	群馬県村落調査を実例として、社会調査の方法とその限界について解説する。	甲田和衛（放送大学副学長）
2	社会調査の展開 日本 (2)	戦前日本の社会調査の典型として戸田貞三「家族構成」を検討する。	同上
3	国勢調査	国勢調査の実施、集計、結果の利用から基本的統計調査としての国勢調査の歴史に及ぶ。	井出満 総務庁統計局 総務課長
4	人口と社会 (1)人口データと人口指標	1) 人口と社会の相互関係、2) 人口研究の観察資料、3) 人口現象の測定方法について解説する。	阿藤誠 厚生省人口問題研究所 人口資質部長
5	人口と社会 (2)近代日本の人口変動	1) 人口変動の一般モデル 2) 近代日本の人口変動に及ぶ	同上
6	社会調査の展開 ヨーロッパ	社会調査の創始者としての1) Booth の貧困調査、2) Durkheim の自殺論をとりあげる。	甲田和衛
7	社会調査の展開 アメリカ	3つの業績、Panel 調査として、Layarsgeld ほかの投票行動調査、社会心理学的要因の事例として、Stouffer ほかのアメリカの兵士、定量的方法の限界についてMurdock の社会構造をとりあげる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会調査と経験社会学	統計的データと現実の社会、文化の測定、データの国際・比較等の諸問題について論談する。	甲田和衛 辻村明 （東京大学教授） 直井優 （大阪大学助教授）
9	世論調査	世論調査は、社会調査に大きな技術上の革新をもたらした。ここでは、世論調査の沿革を辿りつつ、無作為標本抽出や構造化された質問票の意義を明らかにする。そして指数化された情報が、人々の行動の予測や公共政策へ反映することを示す。	直井優
10	産業・労働調査	近代の工業化は、新たな社会問題をもたらしただけでなく、オートメーションなどの技術革新は、勤労者の仕事や労使関係にたえず影響を及ぼしている。勤労者の仕事や動機づけの測定法を紹介することにより、社会調査の応用を明らかにする。	同上
11	社会階層と社会移動	近代社会は、機会の均等と現実の不平等が両立している社会である。そのため、社会全体に、不平等がどのように分布しているか、そしてどれだけ機会の均等が達成されているか、という問題に関して、縦断調査の方法と測定法を説明する。	同上
12	集団・組織調査	近代社会は、多元的な社会といわれるように、たんに家族の一員であるだけでなく、各種の集団や組織に属している。こうした集団や組織の社会的なネットワークや集団・組織が人々に及ぼす集合効果を測定する方法を説明する。	同上
13	地域調査	地域調査は、一地域に関する調査から、地域間の相互連関を明らかにする調査へと発展してきた。ここでは、地域を調査単位として、集計量による指数を作成し、それによって、地域間格差の是正をはかろうとする社会指標運動について説明する。	同上
14	国際比較調査	社会調査による結果の妥当性と信頼性は、たえず他の調査結果との比較によってのみ評価することができる。こうした比較調査の最も大きい設計が、国際比較調査である。具体的な調査事例をもとに、日本社会の普通性と個別性を説明する。	同上
15	社会調査の課題	社会調査の課題としてdata bankの問題をとりあげ、社会調査における方法上の問題について説明する。	甲田和衛 直井優

＝数理計画法入門＝

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

現行の各種数理計画法のうち最も一般的で、しかも実際に顕著な成果を収めつつあるリニア・プログラミング（ＬＰ）につき、簡単な例を挙げながら平易に解説する。それらの具体的解法の理解を通して、さらに高度の数理計画法へ挑むための足掛りを提供しようとするものである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	数理計画法概説	一般計画問題への数理的アプローチの手法から説き起し、数理計画法の大要に言及する。数理計画法の具体的内容として、ＬＰ、ＱＰ、ＮＬＰ、ＩＰ、ＤＰにふれ、なかんずくＬＰの重要性と汎用性を強調する。	加瀬滋男（放送大学教授）
2	ＬＰの具体例	ＬＰにもそれなりの問題点があるので、それらに関して注意を喚起したのち、ＬＰの中心的な若干の例題を列挙する。生産計画問題、混合問題、輸送問題、産業構造問題、倉庫問題等について、それらの定式化とモデルを例示する。	同上
3	ＬＰの構造	ＬＰにおける基本形・標準形の最大化問題および最小化問題の普遍的な数学モデルを講述する。またＬＰでの種々の解を概観するとともに、ＬＰ問題の図解を詳説し、より一層ＬＰへの関心を高め理解を深めるようにする。	同上
4	シンプレクス法(1)	シンプレクス法の初歩すなわちシンプレクス表の作成と意味を手掛りとし、ＬＰ問題の実際的解法を順次解説する。後半では基底解の改良を行う方法に関し、適宜比喩を混じえながら理解しやすいように述べていく。	同上
5	シンプレクス法(2)	シンプレクス法の核心ともいえる可能基底解改良の操作を意味付け、同法の有効な意義を明確にする。その理解に基づいて、さらにシンプレクス法についての一般論を展開し、思考の柔軟性の涵養を目指す。	同上
6	各種の特殊解法	初めに前回の末尾との関連から、簡易シンプレクス法の概要を講述し、続いて特別な場合における解法を示す。すなわち、可能域が非有界・不存在の場合や、解が一意でないとか退化するとかの場合について考える。	同上
7	２段階シンプレクス法	２段階法の必要性と有用性を述べてから、その実際手法を既出の若干の例題に基づいて明示する。そのほか留意すべき事項を詳述し、特に第１１回で再説される２段階法応用の展開に備えるとともに、ＬＰの妙味を伝授する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	実施上の検討(1)	最適解を現実の意思決定の基礎資料とするときの留意点を検討し、ついで条件の変動下における解の安定域を考察する。さらに安定域を越えた場合にも、シンプレクス表に少々手を加えるだけで直ちに対処しうる利便を明かす。	加瀬滋男
9	実施上の検討(2)	いわゆる感度分析をさらに展開したある局面について述べる。具体的には、最適解を積極的に変更した場合を取り上げ、その際の処置を例示する。その他シャドウプライスに論及するほか、摂動法についても付言する。	同上
10	モデルの改変	変転極わりない現実問題に時を移さず追従しうるよう、モデルの改変とそれに即応する手段を考える。実際には変数や制約式の追加・削除を対象に論じ、それらの一端につき既述の例題を用いて検証する。	同上
11	双対問題と整数解問題	双対性に基づく最小化問題の解法、および双対シンプレクス表または2段階法による最小化問題の解法を解説する。さらに双対シンプレクス法との関連から、整数解問題の解法にも論を進め、ついでに割当・輸送問題の予備知識を用意する。	同上
12	特殊問題の解法	主－双対法における双対変数の定め方を改良した方式による輸送問題の解法を紹介する。引き続き、ネットワーク問題全般の概略および特にＬＰと最も深い関連をもつＣＰＭの考え方を講じ、後述のＣＰＭ解法への導入部とする。	同上
13	ＣＰＭの解法	多くの書にしばしば見られる簡単な例題を援用し、ＣＰＭ問題の実際的解法を教示する。最後に、ダミーアクティビティや多段コストスロープのアクティビティを含む問題にも、その解法を適用しうる伸展性を示唆する。	同上
14	数理計画法利用の実際(1)	これまでの応用例はいずれも簡易化されたもので、現実の経営面で利用するにはさらに種々の配慮が必要である。そのような問題点につき、実践的な立場からより具体的に論じ、理論と実際の関連を追求する。	加瀬滋男 高井英造 （三菱石油㈱数理計画部）
15	数理計画法利用の実際(2)	前回に引き続き、種々の企業における数理計画法の利用の諸例を概説する。またより広範な応用を志向するについて、コンピュータの活用の現状を参考までに陳べる。最後に全体の趣旨をまとめて、聴講者各位の将来の勉学と発展に資する。	加瀬滋男 高井英造 大槻健 （三菱石油㈱需給部）

＝ 基 礎 数 学 Ⅰ ＝

〔主任講師：田村二郎（元東京大学教授）〕

全体のねらい

現代の数学は厳密な論理体系として構成されているために、われわれの経験に基づく具体的な直観が表面に現れない。多くの学習者にとって、数学がむずかしいのは、このような理由によると思われる。そこで、この講義では、微分積分学と力学の境界をたどりながら、具体的な現象と正確な理論の橋渡しをする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	導関数と原始関数	高等学校で学ぶ数学のなかから、今後必要と思われる最小限の知識を整理しておく。内容は初等的な微分積分法の基礎概念だけである。	田村二郎（元東京大学教授）
2	時刻と位置	すべての自然現象は空間のなかで起こり、時間とともに推移する。それゆえ、われわれはまず時刻と位置を数によって表さねばならない。その手続きを考えてみる。	同上
3	ベクトルとベクトル量	最終的にはすべての量を数で表すとしても、いくつかの量はひとまずベクトルで表す方がはるかにわかりやすい。ここでは、ベクトル量とベクトルそのものを明確に区別し、後者を前者の数学的表現とみなすのがよいと思われる。	同上
4	速さと速度	小学校で学習した速さを考え直す。これによって、新しい量の単位を定める手続きがわかる。さらに、ベクトル量としての速度を導入する。数学から見れば、ベクトル値関数の微分法である。	同上
5	加速度と運動の方程式	速度がわかれば、加速度の理解に困難はない。そこで質量と力の概念を導入すると、ニュートンの第2法則は数とベクトルによって表現される。同時に、古典物理学における三つの基本量（長さ、質量、時間）が出そろうことになる。	同上
6	数による量の表現	ベクトルを三つの数で表せば、古典物理量はすべて数に翻訳される。この際、座標系とともに単位系を固定しなければならない。この前提のもとに、はじめて量と数の同一視が意味をもつであろう。	同上
7	回転と円運動	いわゆる一般角は、平面上の回転という量を角によって測ったものである。さらに、等速円運動を考えると、三角関数の微分法について、具体的なイメージが得られる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	無限小と微分	実際の現象をとり扱うときには、極限としての変化率（微分係数）よりも、微小変化を用いる方が有効である。ただこの際、物理学の考え方と数学の理論とのあいだに、微妙な相違が現れる。このギャップを数学の側から埋める。	田村二郎
9	道のりと積分	がんらい、積分とは微小変化の集積（の極限）である。ここでは、運動の概念から出発して、積分と原始関数の関係、曲線の長さなどに言及したい。	同上
10	仕事と線積分	力学にもどって、仕事とエネルギーの概念を明らかにする。これによって、ベクトルの内積と線積分の意味が自然に理解されるであろう。	同上
11	テイラーの定理	1変数の関数の微分積分学を締めくくるにあたって、テイラーの定理を取り上げる。この際、“多項式近似”から見たこの定理の意味と、使用上の注意を明らかにしたい。また、できるだけ自然な初等的証明をくふうしたいと思う。	同上
12	スカラー場の変化	時刻の関数から位置の関数に移ると、多変数（3変数、2変数）の関数が現れる。これは物理学でいう場である。いわゆる偏微分法は、場の変化を計算するための手段と考えられよう。	同上
13	重力の法則	第2法則とともに、重力の法則は力学におけるもっとも基本的な原理である。またこれから導かれる重力場とニュートン・ポテンシャルは、ベクトル場とスカラー場の典型である。	同上
14	複素数	平面ベクトルの変換とみなせば、複素数も決して“仮想的な数”ではない。それどころか、物理現象を記述し、処理するためにしばしば有効な手段を提供する。数学における複素数の役割はさらに重要である。	同上
15	惑星の運動	惑星は太陽を焦点とする楕円の軌道を描く。この事実を発見したのはケプラーである。さらに、ニュートンは彼の第2法則と重力の法則から、ケプラーの法則を導いた。この業績を紹介する。	同上

＝ 基 礎 数 学 Ⅱ ＝

〔主任講師：前原昭二（東工大教授）〕

全体のねらい

線型代数学について講述する。しかし、線型代数学の詳論に立入ることはせず、連立1次方程式の解法と2次曲線・2次曲面の分類という古典的な問題に線型代数の方法を適用することによって、線型代数の方法の直観的性格と線型代数における諸概念の幾何学的な意味とを明らかにしたいと思う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	n 次 元 数 空 間	n次元数空間の概念を説明し、2次元・3次元の図形的なベクトル空間からの類推によって、n次元数空間の初等的な性質を解説する。また、連立同次1次方程式との関連において、ベクトルの1次独立性と次元との関係に言及する。	前 原 昭 二（東京工業大学教授）
2	行 列 式	平行4辺形の面積と平行6面体の体積を利用して2次と3次の行列式の定義を与え、それを一般化することによって一般の行列式を定義する。また、行および列についての展開法にも触れる。	同 上
3	1 次 変 換	n次元数空間からm次元数空間の中への1次変換の定義を与え、1次変換を行列によって表現する方法を説明し、行列の演算を1次変換の演算によって定義する。また、行列式の積の計算法を、行列式の基本性質と1次変換の考えを利用して説明する。	同 上
4	行 列 式 の 応 用	正方行列が逆行列をもつ条件とか連立1次方程式のクラメルの解法を含め、行列式を用いると表現が簡潔になる事例のいくつかを初等数学の範囲から選び、それについて解説する。	同 上
5	部分ベクトル空間	数空間の部分ベクトル空間とその次元について説明する。それとは独立に行列の階数の定義を与え、行列の階数と部分空間の次元との関係を明らかにすることを目標とする。	同 上
6	連立 1 次 方 程 式	一般の連立1次方程式に対し、解が存在するための1つの必要十分条件を与え、解が存在するときの一般的解法について述べる。	同 上
7	対称行列と2次形式	転置行列の基本的な性質を述べ、対称行列を用いて2次形式を表現する方法を説明する。また、原点を中心とする2次曲線の標準形を求める方法を例にとり、2次の対称行列の固有値と固有ベクトルの幾何学的な意味を解説する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	正規直交基底と2次形式	正規直交基底と直交行列について説明し、2次形式を表わす対称行列が正規直交基底の変換によってどのように変形されるかを説明する。とくに3次の対称行列について、直交変換による対角化の方法を述べる。	前原昭二
9	2次曲線の分類	これまでに得た知識を用い、2次曲線の方程式の標準形を求める方法を述べる。	同　上
10	2次曲面の分類（その1）	前章と同様な方法により、2次曲面の方程式の標準形について述べる。	同　上
11	2次曲面の分類（その2）	前章で得た標準形をもとに、個々の2次曲面の形状や名称について述べる。	同　上
12	ベクトル空間	スカラーが実数である場合に限定し、ベクトル空間の一般的定義を与え、その基本的な性質について説明する。また、n次元ベクトル空間がn次元数空間と同形であることにも言及する。	同　上
13	n次元ユークリッド空間	n次元アフィン空間、n次元ユークリッド空間について説明する。	同　上
14	複　素　数	複素数に関する基本的事項について説明する。代数学の基本定理にも、証明なしで言及する。	同　上
15	ユニタリ空間	スカラーを複素数とするベクトル空間の一例としてユニタリ空間の定義を与え、ユニタリ変換による正規行列の対角化について説明する。	同　上

＝ 基 礎 数 学 III ＝

〔主任講師：廣瀬　健（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

集合と位相の概念について講述する。

これらは、いずれも現代数学の基礎となる極めて重要な概念である。現代数学の諸分野を構成する各概念、手法は、これらの概念を用いて記述されるといってよい。

本講では、具体的な例をあげつつ、なるべく平易に、これらの解説を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	集合とその演算	集合概念の説明から、用語の導入、歴史的経緯、その有用性について解説する。 集合論における基本概念、集合の上の演算とその意味、論理との関連などについて述べる。	廣瀬　健 （早稲田大学教授）
2	写像とグラフ	関数概念の説明、それを集合間の写像としてとらえることなどについて述べ、写像についての基本概念、すなわち単射、全射、一対一対応、写像写像の合成などについて説明し、さらに、それを集合の直積の部分集合として表現することなどを解説する。	同　上
3	同値美	現代数学の1つの特徴は、対象の"ある性質"に着目し、その性質について同じであるものは、これをひとまとめにして同一視し、"1つのもの"と考えるところにある。この考え方を集合を用いて表現する同値関係、同値類などについて述べる。	同　上
4	集合の濃度	"数"についての基本概念は、それによって個数を表現する濃度（基数）および順序を表現する順序数に関わるものが中心である。ここでは、集合の"個数"の概念を一般化した濃度について説明し、濃度についての代表的結果について解説する。	同　上
5	濃度と次元	一対一対応によって類別された各集合では、例えば、1次元の直線上の実数全体と二次元の平面上の点全体とは同じ濃度をもつ、次元を区別するのは位相的概念であって、これらの対応は連続にならないこと、ペアノ曲線などについて述べる。	同　上
6	順序集合	自然数全体の集合や実数全体の集合では、集合の要素の間に順序が定義されている。数学で扱われる集合の多くは、なんらかの順序関係が定義されているのが普通である。 ここでは順序をもった集合、すなわち、順序集合とその基本的性質を明らかにする。	同　上
7	ツォルンの補題	集合論を建設したカントルは、集合に適当な順序を導入すれば整列集合になることを仮定した。この仮定は後に選択公理やツォルンの補題という形で表現されることになった。ここでは、それらの意味についてなるべく平易な解説をしたい。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	実数の集合とユークリッド空間	実数の集合と自然に対応する直線の上の距離の概念を拡張してユークリッド空間を定義し、ユークリッド空間の"距離"の概念を用いて、関数の連続性の概念を定義し吟味する。また、集合に"構造を入れる"ことの意味について解説する。	廣瀬　健（早稲田大学教授）
9	距離空間	ユークリッド空間を、空間としてさらに抽象化し、"距離"の概念を一般化して距離空間を定義する。距離空間における閉集合、開集合、閉包、収束などを定義し、実例には、なるべくやさしい関数空間をとりあげる。	同上
10	位相空間	距離空間をさらに一般化して、位相空間を定義する。 近傍系、開集合系、閉集合系を定義し、その相互関係を論じ、位相空間における連続写像、位相写像、収束などについて考察する。	同上
11	位相写像と連続写像	定義された写像の定義域に構造が与えられているとき、その写像が定義域の構造をどの程度保存するかが問題になる。 連続写像、位相写像が保存する性質、つまり位相的性質について解説し、実例をなるべく多数挙げる。	同上
12	コンパクト集合	位相空間に関わる議論の代表的な手法を考察すると、コンパクト性と呼ばれる性質が浮かびあがる。 コンパクト集合の定義、基本的性質について述べ、収束の概念などとの関係を説明し、その有用性を示す。	同上
13	連結集合	位相空間における部分集合同志の連結、分離の概念について考察し、連結集合に関わる諸性質、実例などを示す。 コンパクト性、連結性が位相的性質であることに注意し、直観的イメージとの関連を重視する。	同上
14	位相空間の点の分離条件	位相空間の概念は、きわめて一般的であるから、位相空間の点の間の関係を導入し、内容を豊富にすることを考える。コルモゴルフ、フレシェ、ハウスドルフ、ヴィエトリス、ティエツェの分離公理などを解説し、正規空間によって、再び、実数にめぐりあう。	同上
15	距離空間と完備集合	再び距離空間に戻り、可分、全有界、コンパクトなどの概念と共に、完備性について考察する。 完備化定理などから、有理数から実数などを構成する方法などを見なおし、位相的性質などとの関連を考える。	同上

＝ 基礎物理学 Ⅰ ＝

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

自然現象をできるだけ少数の基本概念と法則によって理解しようとするのが物理学の立場である。Ⅰでは重要な概念と法則を明かにする。Ⅱではさらに深く物理学の基礎と人間の思考方法との関わりを考える。なぜ科学は常識をはなれなければならないか。数学はどの程度必要か。物質の科学と技術の関係は？。空間と時間の概念の変遷。物質と重力と宇宙の関係などの本質的な問題を古典物理学の範囲で明かにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科学のはじまり	自然現象を理解しようとする知的な努力から科学が生まれた。エジプトのピラミッドに代表される技術、ユークリッド幾何学、アルキメデスによるがこの釣り合いの静力学の研究は数量的な科学のはじまりを物語っている。	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	浮力と水の圧力	アルキメデスは風呂の中で浮力の原理を発見したと伝えられる。パスカルは大気の圧力が空気の重さによるものであることを明らかにした。これにより自然には真空が存在することが明らかにされたが、これは自然を理解する上で大きな発見であった。	同上
3	落下運動	ガリレイは落体の運動を研究し、速度が変化する場合の運動を明確に把えた。実験と数理的な推論を組み合わせて自然現象を理解する方法がはじめられた。放物体の運動、振り子の等時性についても触れる。	同上
4	地球	ガリレイは望遠鏡によって木星の衛星や太陽の黒点などを発見し、地球もこれらと同じように天体であることを明らかにした。地球が球形であることは古代ギリシャ時代にも考えられたが、この時代にこれが確認された。コペルニクスの地動説が提出される。	同上
5	太陽系	ケプラーの法則の発見について述べる。月までの距離、太陽までの距離はどのようにして知られたか。	同上
6	運動の法則	ニュートンは運動の法則、それを有効に扱う数学、それに万有引力の法則をもって太陽系の問題と取り組んだ。地球をまわる月の運動はそのテストケースであった。	同上
7	力と運動	力に対する身近かな例といろいろの運動の具体的な例。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	回　転　運　動	多くの日常的な運動は回転を含んでいる。玉の衝突、円板の回転、潮汐、体操などにおける身体の回転、ネコの空中における回転、コマの運動。	戸　田　盛　和
9	仕事とエネルギー	ワットは蒸気機を発明し、馬力という単位を作った。エネルギーの概念は力学においても重要である。永久機関の夢にも触れる。	同　上
10	熱　　量	熱はエネルギーの一つの現れであることがわかってきたのは19世紀半ばである。熱現象に関する学問、低温の物理学も19世紀後半にはじまった。	同　上
11	物　質　と　分　子	物質の分子的構造は今世紀になってから明らかにされたものであるが、ここでは原子分子に対する理解の進歩、気体・液体・固体のちがい結晶の構造などについて述べる。	同　上
12	流　体　の　運　動	飛行機の翼やヨットの帆に働く揚力をはじめ流体の運動は大変興味深い現象が多い。台風などの運動には地球の回転もからんでくる。	同　上
13	波　　動	波は重要な運動の形態である。音の波光の波、水の波、ドップラー効果などについて述べる。	同　上
14	電　流　と　磁　気	電流は磁気的な作用がある。その研究は独特な歴史をもち、ファラデーを経てマクスウェルによって完成された。	同　上
15	電　波　と　光	マクスウェルの研究は電波の存在を予言した。一方で光速度の測定と熱放射の研究は物理学の２０世紀における大きな変革につながるものであった。	同　上

＝ 基 礎 物 理 学 Ⅱ ＝

〔主任講師：戸田盛和（東京都教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

物理学の基礎と人間の思考方法との関係を中心にしたい。なぜ科学へ導かれるのか、なぜ科学は常識をはなれていくのか、数学はなぜ必要なのか。空間と時間に対する考え方の変遷、物質と重力と宇宙に対する考え方の深まり、心と科学、科学と技術や社会の関わりなどについて、古典物理学の範囲で考察を加えたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	常識と科学	自然に対する人間の対応。神話、ギリシャなどの自然哲学、ルネッサンス、デカルト、近代科学の方法。わかるとはどういうことか。 科学とその他の知的活動との関係。 ◎（話題）デカルト。	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	空間と時間	上と下。地表近くの空間。絶対時間。地動説と太陽系。回転に対するニュートンの考え。マッハの批判。相対性理論。物理学の基本的課題 ◎鏡の中の世界。時計の発達。遠心分離器。	同上
3	数学と物理学	ユークリッド幾何学。ガリレイ・ニュートンの力学。微積分学。ガウスの測量。非ユークリッド幾何学。数学と物理学のちがい。非数学的科学。 ◎ピタゴラス。	同上
4	物質変化と原子	ギリシャの物質観。化学的原子。目にみえない存在。大きさの階層。化学変化と原子・分子・化学結合。巨大分子。 ◎モデル（シンボル、模型）、メンデレーエフ。表面張力。	同上
5	温度と状態変化	温度。物質のマクロ的性質（体質・圧力・温度）。気体の性質。液体と固体。臨界現象。気体の液化。マクロ的性質とミクロ的性質。 ◎水の特性。液体空気。極低温物理学。超伝導。クーラーと冷蔵庫。気象。バイメタル。	同上
6	エネルギーと熱量	熱。熱のする仕事。熱機関の発達。熱の仕事等量。熱機関の効率。熱力学。熱力学の第2法則。エントロピー。 ◎永久機関。マイヤーとジュール。カルノー。温室効果。太陽熱利用。水飲み鳥。まほうびん。	同上
7	決定論・確率・非可逆現象	力学と熱現象。決定論。熱現象の現象論と分子論。エントロピーの確率論的解釈。生物とエントロピー。巨視的構造。 ◎マクスウエルの魔。ボルツマン。統計力学。ギブス。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	電　磁　気　学	電気的現象。電磁誘導。場の概念。電磁場と変位電流。電磁気学。光と電波。無線通信。ラジオ。 ◎電池。ファラデー。マクスウェル。電子レンジ。偏光フィルター。レーダ。X線。	戸田盛和 （東京教育大学名誉教授）
9	物質の電磁気的性質	電子と電流。金属の電気低抗。真空間。半導体ダイオードとトランジスター。磁性と電子。磁性体。 ◎電話。マイクロホン。テープレコーダー。テレビ。	同　上
10	光　と　物　質	光の速さ。光の波長。反射と屈折。幾何光学。波動光学。光の散乱。熱放射。発光と光の吸収。電子・イオンと光。色。 ◎光ファイバー。空の色。朝日と夕日。星の温度。レーザー。ホログラフィー。	同　上
11	地　球　と　太　陽	太陽系。惑星。太陽系の力学。太陽系の歴史。地球の歴史。 ◎天体までの距離の測定。惑星の質量。地球の温度。地磁気。オーロラ。時間の測定。	同　上
12	光と相対性理論	エーテルと光の速度。ローレンツの短縮。光速度一定の原理。時間と空間の相対性。 ◎マイケルソン。ローレンツ。アインシュタイン。双子のパラドックス。	同　上
13	宇宙と一般相対性理論	遠隔作用と近接作用。場の概念。重力と慣性力の等価原理。一般相対性理論。宇宙。 ◎宇宙の曲率。宇宙の歴史。ブラックホール。	同　上
14	科　学　と　創　造	科学の方法。研究者の心理。創造とに何か。 ◎　ニュートン。パスツール。ダーウィン。アインシュタイン。ポアンカレー。	戸田盛和 江沢　洋 （学習院大学教授）
15	個　と　全　体	科学と分析的方法。非自然的自然。科学の方法に対する反省。感覚。自己認識。生命。全体論。物理学と他の諸科学と文化。	同　上

＝ 基 礎 化 学 ＝

〔主任講師：伊能　敬（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

前半では化学という学問の対象である物質（その性質と変化）を究めるために必要な基礎知識を平易に述べる。

後半では応用面として化学がわれわれの日常生活や現代社会とどのようにかかわっているか。いくつかの角度から興味ある話題を取り上げる。初学者にも理解しやすいように、しかも可能な限り新しい情報を含め解説する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	化学とは (1) ～身のまわりの化学～	台所、自動車など、われわれの周辺にある親しみやすいものが、いかに化学とかかわっているか、実物と対応させながら化学におけるミクロな見方、考え方にはいりこんで行く。	綿抜邦彦（東京大学教授） 出演 （伊能、綿抜、務台）
2	化学とは (2) ～自然界に見られる化学変化～	自然界において、化学変化がどのような形で見い出せるか。化学変化イコール実験室、白衣、ビーカー、試薬瓶といったイメージを、ここで改めて見直す。	綿抜邦彦 出演 （伊能、綿抜）
3	物質の構造 ～物質は何からできているか～	固体物質の構造から発展させて、エネルギーと物質の不連続の問題、さらに原子の構造へとつないで行く。	同　上
4	原子の構造 ～陽子・中性子と電子のふるまい～	原子を構成している電子、陽子、中性子の本性を調べ、さらに水素原子の構造、同位体、原子の電子構造などを明らかにする。電子の殻構造、価電子の数などの知識は、次章化学結合の理解に生かされる。	伊能　敬（武蔵大学教授） 出演　伊能 小谷正博 （学習院大教授）
5	化学結合 ～価電子のはたらき～	いろいろな化合物の結合、特に結合のエネルギーや結合距離など、そこに認められる規則性などを概観したあと、結合はなぜできるかを考える。ここでは共有結合に重点をおいて話を進める。この理解が他の結合様式すべてを理解する上で必要だからである。	小谷正博（学習院大学教授） 出演（伊能、小谷）
6	物質の三態 ～物質の状態変化はどのようにして起こるか～	気体の性質からはいって、液体、固体の特徴を明らかにし、それらの状態の相互変換について調べる。	綿抜邦彦 出演（伊能、綿抜）
7	溶　液 (1) ～水のはたらき～	とくにすぐれた溶媒である水の性質から説き始めて、溶けるという現象、溶液の性質、純物質の液体との違いなどを学ぶ。	伊能　敬 出演（伊能、務台）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	溶　液　(2) ～溶液からの分離～	前章に続いて溶解と沈殿、蒸留、再結晶などに伴う諸現象を検討する。	伊能　敬 出演（伊能、未定）
9	コロイド状態 ～中途はんぱな粒子～	物質の三態、正常な溶液から見れば、いろいろな意味ではんぱな状態にあるのがコロイドである。ところが、われわれを取り囲む自然界、衣食住を支える多くの物質が、実はそのコロイドの状態にある。	同　上
10	化学反応　(1) ～反応のはやさとつり合い～	水素と酸素を一定割合に混合しただけでは反応しないが、点火すると一瞬にして爆発して反応が終る。鉄でもさびやすいもの、さびにくいものがある。いろいろな反応が、さまざまの反応速度を示す。その仕組みを調べてみよう。	田丸謹二 （東京理科大学教授） 出演（伊能、田丸）
11	化学反応　(2) ～連鎖反応と触媒反応～	水素と塩素との光化学反応は、ひとつの連鎖反応とは何かを調べ、これに関連した反応として触媒反応を説明する。	同　上
12	化学反応　(3) ～陽子や電子などのやりとり～	酸と塩基、酸化・還元などの化学反応を、陽子、電子などのとり合いと平衡の立場から考える。	同　上
13	有機化学　(1) ～アルコールを中心として～	基礎化学の後半において活躍する有機化学関連の諸分野の話を理解するためにも、知っておかなければならない有機化学の基礎のうちこの章ではアルコールを中心に学ぶ。	務台　潔 （東京大学助教授） 出演（伊能、務台）
14	有機化学　(2) ～カルボン酸を中心として～	前章に引き続き、カルボン酸とその誘導体を中心に学ぶ。	同　上
15	核化学 ～放射能とはどんなものか～	放射能とは何か。から始まって、核反応の表し方、人工核転換、核融合、原子力利用、放射性同位体など、核反応という他の化学分野と違う特異な領域について学ぶ。	綿抜邦彦 出演（伊能、綿抜）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	生命の化学 (1) ～生命は分子機械である～	生命は分子を部品とする機械である。細胞の主要部品としての核酸、タンパク質は、また何からできているのか。酵素の役割は何か。	大島泰郎 （東京工業大学教授） 出演（伊能 敬、務台 潔、大島泰郎）
17	生命の化学 (2) ～生命の歴史～	生命の起源から説き起こし、先カンブリア代における生命の歴史、酸素の歴史、分子進化という生物進化研究の新しい手段に至るまで、生命の歴史を追求する。	大島泰郎 出演（伊能、大島）
18	食物と化学 (1) ～食物のエネルギー価～	生物が生命を保ち、生活現象を続けて行くためには、外界から物質を取り込み、生体に役立つように変化させるいわゆる栄養現象が不可欠である。五大栄養素とは何かを述べ、またエネルギー源食品のエネルギー値について考察する。	福場博保 （お茶の水女子大学教授） 出演（伊能、福場）
19	食物と化学 (2) ～食物の色と味と香り～	私たちの食生活は、エネルギー源食品をカロリー計算の勘定合わせだけで与えられて満足するものではない。多くの食品の配合の妙を生かして、よりおいしく食べるのが私たち人類の特色ある食生活である。日常の食卓における色・味・香りを化学の面から解説する。	同上
20	生物のコントロール(1) ～天然物化学と生物活性物質～	天然物化学は、人類が昔から利用してきた「生物のつくる物質」を調べることから始まり、有機化合物の合成へと進む。日本における天然物研究者の足跡をたどる。生物活性物質の研究の現状と、植物の生活に関与するホルモンに触れる。	森謙治 （東京大学教授） 出演（伊能、務台、森）
21	生物のコントロール(2) ～生物活性物質研究の進歩～	天然有機化合物の構造決定法の進歩は、分析の微量化と切り離せない。生物活性物質研究の進歩について昆虫の生活に関与するホルモン、昆虫相互の通信を制御するフェロモン、鏡像異性の問題、幻のオーキシンaなどの例によって解説する。	森謙治 出演（伊能、森）
22	化学と産業 (1) ～転換期にある化学工業～	化学は化学工業を成立させたと同時に、材料を媒介として他の産業分野にも貢献してきた。いま転換期にある化学工業を中心に、その歴史と現状を概観し、化学技術開発における指導原理の展開を探る。	平澤冷 （東京大学助教授） 出演（伊能、平澤）
23	化学と産業 (2) ～高分子を例として～	素材や材料としての物質の開発には、その組成分子構造のみならず、ミクロ、マクロな物質の構造、集合状態まで考慮する必要がある。合成高分子を例にしてニーズに適合する素材設計を考える。	平澤冷 出演（伊能、務台、平澤、戸嶋直樹） （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	化学と産業 (3) ～どんなつくり方があるか～	材料の開発はまたその合成法の開発でもある。設計された「物質の構成」を実現するためにどうアプローチするか。その指導原理を探る。	平澤　泠 出演（伊能、平澤）
25	化学と産業 (4) ～極限を追求する～	物質の極限状態、または極限条件下における物質の性質を追求する過程で、画期的な新素材が生み出されている。新素材開発の動向と、それが産業に与える衝撃を予測し、化学工業の将来を展望する。	平澤　泠 出演（伊能、平澤、務台）
26	エネルギー資源 (1) ～人類が利用したエネルギー～	人類は火を利用することを知って、他の動物と異なる生活をするようになった。人類がこれまで利用してきたエネルギー資源を化学の立場から論述する。	綿抜邦彦 出演（伊能、綿抜）
27	エネルギー資源 (2) ～将来のエネルギー～	前章の化石エネルギーに替わるべき今後のエネルギーは何かを求め、原子力、地熱エネルギーについて解説する。	同　上
28	化学と環境 (1) ～地球環境はどのように変遷してきたのか～	太陽系の特異な一惑星としての美しい地球の環境の特色とくに水の果たす役割、大気の変遷、海水組成変動の歴史について述べる。	同　上
29	化学と環境 (2) ～人類の活動と地球環境～	人類が膨大な資源を消費し、膨大なエネルギーを使用するようになって、大自然の流れ、地球環境に影響がおよぶようになってきた。主として大気汚染を中心に、この問題を考えてみよう。	同　上
30	再び化学とは ～分ける・つくる・考える～	基礎化学の締めくくりとして、再び化学とは何かを問いかけ、化学における方法論を説明すると共に、今後の化学は専門家のみのものではなく、広く皆のものであることを説く。	伊能　敬 出演（伊能、綿抜、務台）

＝ 基 礎 生 物 学 ＝

（主任講師：毛利秀雄（東京大学教授）
平本幸男（東京工業大学教授））

全体のねらい

生物学の分野では日々新たな発見が行われ、新しい概念が提出されている。また医学、農学、工学など応用分野との関係も深まっており、人類の将来に大きな影響を与えつつある。本講では、生物学の基本となる一般的事実や概念をできるだけ分り易く述べ、生命の探求がきわめて魅力に富んだものであることを伝えたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生物とは何か	生物の特徴である「生きている」とはどういうことか。生物と無生物の違いはどこにあるか。本講座のいとぐちとして、さまざまな生物が示す生命現象をフィルムなどで追いながら、この問題を担当者全員によって考えていく。	平本幸男（東工大教授）、毛利秀雄（東大教授）、山田晃弘（東大教授）、石川統（東大助教授）
2	生物のつくり	生物の基本単位は細胞であり、多細胞生物では形態的・機能的に分化した細胞群が組織・器官を形成し、それらの統合によって個体が作られている。形態的、機能的な面から生物体のつくりについて解説する。	平本幸男
3	生命の単位としての細胞	細胞の基本的な構造、物理・化学的性質および細胞の機能について解説する。また細胞分裂のしくみや、増殖と分化についても述べる。	同上
4	細胞小器官	細胞膜や核をはじめ、ミトコンドリア・葉緑体・小胞体・リボソーム・ゴルジー装置・中心体など、さまざまな細胞小器官の構造と機能について概説する。	同上
5	生体を構築する分子	生体構成物質のタンパク質、核酸、脂質、炭水化物はどのような性質のものか。また、細胞小器官などを構成する生体膜はどのような特徴をもち、生物のはたらきにどのように役立っているかを解説する。	山田晃弘
6	物質交代と酵素	生体内のはたらきの基礎となる物質交代はどのようなものか。物質交代を司どる酵素のはたらきおよびエネルギー運搬体のATPに注目する。細胞内に散在する物質交代（反応系）の調節のしくみも知る。	同上
7	光合成	光エネルギーは緑色植物の行う光合成により生物に捕捉される。光合成のしくみを実験を含めて解説。トウモロコシやサトウキビ、さらに多肉植物の行うC_4-型の光合成についても学ぶ。光合成に伴う光呼吸にも目を向ける。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発酵と解糖	発酵の反応系の解明を歴史的に考察する。それは生化学の発達史でもあるからである。筋肉運動の際に行われる解糖反応と発酵との共通性とその役割を学ぶ。実験を組みあわせて理解を高める。	山田晃弘
9	呼吸	生物になぜ呼吸が必要か。呼吸を行うための体のつくりと血液のはたらきを学ぶ。呼吸の内容を物質交代の面から明らかにし、他の物質交代との関連にも注目する。	同上
10	太陽エネルギーと生物	太陽エネルギーに依存して生きる地球上の生物を、エネルギーの流れと物質（炭素、窒素、リンの化合物）循環の面から考察し、その流れを分担する重要な反応系とそれを担う生物について、野外観察のフィルムと共に学ぶ。	同上
11	神経	多細胞動物の多くは、神経系によって個体内の情報伝達を行っている。神経系の基本単位であるニューロンの構造と興奮（活動電位発生）、興奮の伝導と伝達、神経情報の統合と処理などについて述べる。	平本幸男
12	受容器	動物は受容器によって外界の変化および体内の状態を感知してその情報を神経系に伝える。さまざまな型の受容器の感覚受容機構について解説する。	同上
13	運動	筋肉の構造とその収縮機構について、脊椎動物の骨格筋を中心として解説する。また平滑筋の構造と機能や神経による筋収縮の制御についても述べる。筋収縮による個体のさまざまな運動様式についても解説する。	同上
14	運動、発電、発光	筋収縮以外の生体運動、すなわち原形質流動、アメーバ運動、繊毛・鞭毛の運動のしくみについても解説する。これらの運動による生物体全体としての運動や、個体内における物質輸送などについても述べる。また生物発光や発電の機構についても解説する。	同上
15	ホルモン	神経系とともに生体機能の調節に与っている内分泌系について述べる。脊椎動物や無脊椎動物の内分泌器官から分泌されるホルモンの種類と働きを実例を示しながら概説し、さらにホルモンの作用機構についてもふれる。	毛利秀雄

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	ホメオスタシス	生物には外界や内部環境の変化に対して、その形態や生理的状態をできるだけ一定に保とうとする性質がある。これをホメオスタシス（恒常性の維持）と呼ぶ。血糖値・体温・浸透圧の調節などにおける神経系と内分泌系の関与について学ぶ。	毛利秀雄
17	免　　疫	外来性の病原菌や体内に生じた異常細胞などの異物を排除し、生体の恒常性を維持するしくみとしての免疫現象について説明する。血液型や臓器移植の問題などについても述べる。	同　　上
18	染色体と遺伝	染色体、遺伝子、DNAの関係を説明し、親から子へ形質の遺伝するメカニズムを減数分裂の機構とともに解説する。染色体地図、染色体外遺伝子、染色体突然変異についてもふれる。	石川　　統
19	遺伝の法則	優劣の法則、分離の法則、独立の法則について述べるとともに、複対立遺伝子、伴性遺伝、従性遺伝に関してもふれる。とくに、遺伝現象における対立形質の意味を正しく理解することに重点を置く。	同　　上
20	遺　伝　子	遺伝子の本体がDNAである事実はどのようにして明かになったかを述べ、DNAの化学的構造について解説する。遺伝子であるDNAと遺伝子でないDNAについても述べ、DNA複製の機構および遺伝子突然変異に簡単に言及する。	同　　上
21	遺伝情報の発現Ⅰ	DNA上の遺伝情報をRNAへ転写するのに必要な構造、プロモーター、RNAポリメラーゼなどについて説明するとともに、転写を調節する機構とその因子に関して述べる。mRNAの加工と成熟およびその構造上の特徴についても解説する。	同　　上
22	遺伝情報の発現Ⅱ	tRNA、リボソームの構造について解説し、遺伝コードがどのようなメカニズムでタンパク質に翻説されるかを、開始、伸長、終止の3段階に分けて説明する。翻訳後にタンパク質分子が受ける加工と運搬のしくみにも簡単にふれる。	同　　上
23	遺伝子操作	プラスミドベクター、制限酵素などについて述べ、組換DNAをつくる基本操作を解説する。遺伝子操作には大きく分けて2つの目的があることを紹介し、ウィルス、可動遺伝因子などをベクターとした高等生物の遺伝子操作にもふれ、その未来像を探る。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	性　と　生　殖	子孫を残すための生殖は、生物のもつ特質の一つであり、従ってきわめて重要な現象である。動・植物にみられる生殖方法、両性生殖における性の決定機構、生活環などについて具体的な例をあげながら解説する。	毛利秀雄
25	受　　精	配偶子の形成から卵と精子の相互作用、さらに両核の融合に至る一連の受精現象を、実験をまじえながら説明し、その意義について考察する。細菌の受精や単細胞生物の接合についても言及し、また体外受精や着床の問題にもふれる。	同　　上
26	初　期　発　生	受精した卵は発生を開始する。卵割（細胞分裂）胞胚およびのう胚形成、外・中・内三胚葉の分化に至るいろいろな動物の初期発生過程を、フィルムで追いながら解説する。個体発生と系統発生の関係についても述べる。	同　　上
27	分化と形態形成Ⅰ	動物の発生のしくみに関する前成説と後成説、モザイク卵と調整卵、誘導と極性などの概念を解説した後、細胞・組織の分化と形態形成についての最近の知見を、分子生物学や細胞生物学の成果をおりまぜながら紹介する。	同　　上
28	分化と形態形成Ⅱ	植物の体のつくりをみると、一つとして同じつくりのものはない。しかし、巨木でも盆栽でもアカマツはアカマツである。植物の体はどのようにして発達するのであろうか。実験（フィルム）を混えながら考えてみる。	同　　上
29	分化と形態形成Ⅲ	植物の細胞および動物の細胞核の全能性について述べ、遺伝情報の時間および空間に関する選択的発現が分化の根幹をなすことを解説する。また、昆虫の発生と変態などを例として、形態形成を制御する因子についても考察を加える。	石川　　統
30	生命科学の展望	この講義のしめくくりとして、生物学とその周辺の分野が今後解明していかなければならない問題について話し合う。主な問題としては、発生のしくみ、脳の機能、遺伝子操作と細胞工学およびその応用としての品種改良、体外受精などがとり上げられる。	平本幸男 毛利秀雄 山田晃弘 石川　統

＝基礎宇宙地球科学＝

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
小尾信弥（放送大学教授）〕

全体のねらい

基本科目としての「地球と宇宙」を既に履修していることを前提として基礎科目としての「基礎宇宙地球科学」を学ぶ。自然科学としての宇宙地球科学の内容は膨大なものがあり、その学問的発展も近年著るしいものがある。その中で、基礎となる事項を選んで履修する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙と地球の概観	宇宙と地球についての理解は、近年急速に深まっている。そのような学問的成果をふまえて、宇宙と地球についての概観を述べる。この科目全般にわたっての学習のガイダンスなども行なう。	奈須紀幸（放送大学教授） 小尾信弥（放送大学教授）
2	宇宙科学の発展Ⅰ	「地球と宇宙」において、古代から現代にいたる人間の宇宙観の変遷を学んだが、ここでは、宇宙探求の歴史の古典的な部分を、他の科学や技術の発展と関連させつつ学ぶ。	小尾信弥
3	宇宙科学の発展Ⅱ	量子物理学と相対性理論という新しい物理学の出現により、宇宙の科学は急速に進展した。さらに１９５０年代からの電波天文学や大気圏外観測は、宇宙の理解を根底から変えている。これら今世紀における発展を学ぶ。	同上
4	天体の観測	天体観測の基本は、天体の位置、明るさ、光の性質（色やスペクトルなど）や、それらの時間的な変化を測定することである。光による観測を中心に、これらが具体的にどのようなものであるかを学ぶ。	同上
5	太陽系ー惑星の運動	太陽や月、惑星など太陽系の天体は、恒星と違い、天球上で相互の位置が時間とともに変わる。ここでは、万有引力の法則にもとずいて、惑星の運動についてのケプラーの法則が説明できることや、ケプラーの法則の応用などについて学ぶ。	同上
6	太陽系の構成	太陽を中心にして、地球をはじめ無数の天体が集まっている。この太陽系にはどんな特徴がみられるのか、について学ぶ。最近の直接探査はわれわれの太陽系像を大きく変えたが、その成果にもとずいて太陽系の天体についても学ぶ。	同上
7	太陽系の天体	太陽は地球上に住むわれわれにとって欠かせない天体であるばかりでなく、表面の模様や活動を直接観測できる唯一つの恒星でもある。太陽とはどのような天体であるかを概観し、表面や大気、そこに見られる活動などについて学ぶ	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	太陽	星座の星すなわち恒星は、いずれも太陽と同様に自から輝いている。ここでは、その距離の測定、それをもとに知られる本当の明るさ（光度）など、恒星の基本的な性質について、太陽と比較しながら学ぶ。	小尾信弥
9	恒星 I	恒星はさまざまな色をして見える。これは、その表面温度の違いによる。これらを熱放射にもとづいて学ぶ。さらに、その光を祥しく調べると、表面の化学組成などについても知ることができるが、それの原理ま結果などを学ぶ。	同上
10	恒星 II	恒星の表面の色（温度）はいろいろであり、また光度もさまざまである。質量もいろいろである。これらの性質の間には特定な関連が見られる。HR図はその代表的なものであり、それについて学ぶ。	同上
11	恒星の進化	恒星は太陽と同様に、一般には水素の熱融合反応をエネルギー源としている。この反応の進行について、恒星が色や光度などの特徴を変えつつ進化することについて学ぶ。超新星の爆発など、進化の最終段階に見られる現象についても学ぶ。	同上
12	銀河系の天体	われわれの周りには、恒室のほかにさまざまな天体が見られる。ガス星雲や暗黒星雲のように古くから知られていた天体もあれば、パルサーやブラックホールのように最近発見された天体も少くない、これらの諸天体について学ぶ。	同上
13	銀河系の構造	多数の恒星とガス星雲などは、巨大な円盤状の集団をつくっている。これがわれわれの銀河系であるが、ここでは銀河系の構造や運動について学ぶ。また、銀河系の天体の種類についても学ぶ。	同上
14	銀河の世界	銀河系の外には、大望遠鏡の視界のとどく限り、銀汗系と対等な別の銀河が無数に見られる。これらの銀河について、その形態や分布、運動などについて学ぶ。電波銀河やクエーサーなど、銀河の世界に見られる特異な天体にもふれる。	同上
15	宇宙の構造と進化	無数の銀河が観測されている宇宙全体がどのようなものであるかを、研究の歴史にふれながら、最近の成果にもとずいて学ぶ。さらに、ビックバンで誕生して以来の宇宙の進化について、その道筋を学ぶ。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	地球科学の発展－20世紀中葉まで－	「地球と宇宙」の中で既に「地球観の歴史」を学んでいるが、その内容を更に詳細にわたって学ぶとともに、その中では触れなかった地球科学の学問的発展の内容についても学ぶ。20世紀中葉までをとり上げる。	奈須紀幸
17	地球科学の発展－20世紀中葉以降－	20世紀中葉以降の地球科学研究の進展はとくに著るしいものがある。そのような進展の経過を追って、人々の地球についての理解が深化していった過程を学ぶ。	同　上
18	地　　層	岩石が火成岩・堆積岩・変成岩に3大別できることは「地球と宇宙」の中の「岩石と鉱物」の章で既に学んだ。これらの岩石が、地層を構成している状態について学ぶ。とくに堆積岩が地層を構成する主体であることを学ぶ。	同　上
19	地　質　調　査	地質図や地質柱状図の作製は、目標とする地域の地質を理解するうえで必須の資料である。このような地質図や地質柱状図をいかにして作製するのか、その過程となる地質調査の実施のあり方について学ぶ。	同　上
20	地質時代の区分	「地球と宇宙」の中の「地球の歴史」の章で、地質時代の区分については既に学んだ。その点、さらに一歩を進めて、化石等にもとづく地質時代の区分と、岩石の絶対年代にもとづくその精度の向上の経過について学ぶ。	同　上
21	プレートの変動	「地球と宇宙」の中の「プレートテクトニクス」の章で、プレートの動態については既に学んだ。ここでは、その内容をさらに詳細にわたって学ぶこととする。プレートの概念の登場によって地球科学は目覚ましい進展を遂げつつあることに理解する。	同　上
22	地球と生物の進化	「地球と宇宙」の中の「地球の歴史」の章で、地球の進化と生物の進化については、その概ほうを学んだ。ここでは、その基本的な学習の上に積み重ねて、さらに詳細にそれらの内容を学ぶ。	同　上
23	日本列島の地質と地史	日本列島は、太平洋プレートがユーラシア大陸プレートの下へ潜没するところに位置する。この日本列島の地質を学び、その成立の地史を学ぶ。日本列島の一部はプレートの移動につれて他所から移動してきたものとの最近の学説も紹介する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	地下資源	われわれの日常生活に欠くことのできない物質には、食糧の他にも様々なものがある。例えば石油や金属の類である。これらの物質の多くが地下資源として採取される。このように生活と深くかかわる資源の分布状態について学ぶ。	奈須紀幸
25	地表の変化	地表は風化・浸食などの作用によって絶えず変化する。その態様としての地形の変化を学ぶ。また、風化の過程、流体による堆積物の運搬・堆積の過程についても学ぶ。陸上の地表の変化に加えて海底の地形の変化にも触れる。	同上
26	海水の性質と運動	「地球と宇宙」の中の「大気と海洋」の章で海洋の特性について既に学んだ。ここではさらに詳しく、海水のもつ性質について学び、また、海水の大循環に重点をおいて海水の運動のあり方を学ぶ。エルニーニョ現象にも触れる。	同上
27	海の波	上記のように海洋の特性の中で海の波の性質についても学んだ。ここでは、それに加えて、より詳細に波の性質を学ぶ。とくに沿岸および海岸における波の性質と種類、堆積物の運動とのかかわり合いなどについて学ぶ。	同上
28	大気の運動	「地球と宇宙」の中の「大気と海洋」の中で大気について学んだ。ここではその基本の上に立って、さらに詳しく大気の運動のあり方について学ぶ。大気の大循環のあり方に重点をおいて学ぶが、加えて地球の熱収支にも触れる。	同上
29	天気と気候の変化	上記のように大気についてはその中で天気のことも学んだ。ここではその基本の上に立って天気の変化、気候の変化について学ぶ。加えて気候の変化と大陸氷河の消長の関係にも触れ、これが海水準変動にも影響することを学ぶ。	同上
30	宇宙・地球と人類	われわれ人類はまさに宇宙の中に存在し地球上で生活を営んでいる。そのことは自然環境と人類との深いかかわり合いをも生む。こうした諸点について学ぶ。また将来、人類は宇宙コロニーを建設する可能性もある。そのような点についての見通しについても学ぶ。	奈須紀幸 小尾信弥

＝確率論・統計学＝

――のうち確率論――

〔主任講師：林知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

不確実な現象を記述し、将来を予測するための手段としての確率論の入門である。個々の事象の確率を数値的に計算するのが目的ではなく、現象のモデル化を通して、いろいろな場面に適用できる数学的理論を構成することを目標とする。統計学の講義にスムーズにつながるような内容としたい。また、数学的な厳密性は追求しない。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	偶然現象の記述	同じ条件下で繰り返して観測されるような偶然現象が議論の対象である。不確実でとらえどころのない現象も、適当なモデルを作ることによって記述することができる。	清水良一（統計数理研究所教授）
2	確率モデル	偶然を記述するためには、まずどういう現象が起こりうるのか、あるいはどういう現象を考察の対象とするのかを明らかにしておく必要がある。「事象」という概念を導入し、さいころなげのような簡単な場合について確率モデルの構成法を述べる	同上
3	つぼのモデル	偶然現象を記述するのに、つぼのモデルは簡単で理解しやすく、しかも応用が広い。最も単純な復元抽出と非復元抽出を説明し、これに対応する確率分布として2項分布と超幾何分布を導入する。	同上
4	ベルヌウイの定理	確率pで起こることが期待される事象を考える。多数回（n回）の観察を通してこの事象の起こる回数（n_1回）の比率n_1/nの行動を考察する。nを大きくするとn_1/nはpの近いところで変動するようになる（ベルヌウイの定理）ことを示し、さらにその精密化を行う。	同上
5	条件つき確率	ある事象の起こる確率は情況に応じて変わるべきものである。偶然現象を観察して得られる情報は偶然についてより確実な知識をもたらす。この章と次の章では情報の利用に関する一つの定式化を、「条件つき確率」という概念を導入することによって行う。	同上
6	事象の独立	前章からの直接の続きである。このあとさらに確率論で最も基本的な概念の一つである「独立性」を導入する。ある事象が起こったことを知ったことによって、他のある事象の確率が変わらないとき、これら二つの事象は互いに独立であるというのである。	同上
7	独立試行	「事象の独立」をさらに発展させて「試行の独立」という概念を導く。相互に影響を及ぼし合わないような試行を、互いに独立であるという。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	確　率　変　数	特定の偶然現象を観察した結果で決まる数量を確率変数という。これは一定の分布法則に従って変動する偶然量である。分布法則について幾つかの簡単な例をあげる。	清　水　良　一
9	期　待　値	確率変数の行動は分布法則によって完全に規定される。期待値は、これを部分的に特徴づけるものである。「平均値」、「分散」など基本的な量を導入する。データから計算される「標本平均」が分布の平均値に収束するという大数の弱法則を述べる	同　上
10	ポアソン分布とその周辺	2項分布は最も簡単な分布法則の一つであるがパラメータの値によっては別の分布で近似するほうが自然であり、計算も容易である。ポアソン分布による近似がその一つ。この章では、ポアソン分布と負の2項分布について述べる。	同　上
11	多変量の確率変数・Ⅰ	二つまたはそれ以上の確率変数を同時に考えることによって多変量（多次元）の変数が定義される。この章では主として2次元の変数について、その行動を記述する確率分布と期待値、とくに、変数の間の関係を表す相関などの概念を導入する。	同　上
12	多変量の確率変数・Ⅱ	2次元の分布に関連して、条件つき分布を導入し、それを正規分布についてやや詳しく述べる。また、独立な確率変数の和の分布（たたみ込み）の計算法を与える。	同　上
13	母関数とその応用	母関数や特性関数を導入することによって、期待値の計算やたたみ込みを求めることは容易になる。さらに極限定理の証明に利用できるなど、これらの関数が強力な解析的手段を与えてくれることを幾つかの例によって示す。	同　上
14	正　規　分　布	確率分布としての正規分布は最小2乗法とともにガウスによって発見され、彼の誤差論の中で重要な役割を果たした。中心極限定理との関連もあってその重要性は今日でも変わっていない。この分布の意味、確率モデルとしての用途の広さ、その限界などについて述べる。	同　上
15	独立でない変数の系例	講義の中であまり述べることのできなかった独立でない試行列の問題を取り上げ、マルコフ性について簡単に触れる。最後に、このあとに続く統計学に言及し、偶然を扱うこの二つの学問の相互の関係と役割を述べて終わる。	同　上

＝確率論・統計学＝

――のうち統計学――

全体のねらい

確率論を踏え、統計学の基礎概念及び基本的諸理論を説明し、統計学の基本を習得させることを第一の眼目とする。これとあわせて、統計学の発展を示すいくつかの例をあげる。ここで統計学の役に立つ応用例を知ることができる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	確率論と統計学	確率論と統計学の関連性について述べ、統計学において確率論がいかに活用されるかについて考察する。また、統計学とは何かについて説明し、今後の講義のバックボーンを与える。	林　知己夫（放送大学教授）
17	統計学の基礎概念	統計学は集団を取り扱うことに始まる。この集団とは何か、について説明する。母集団の考え、集団の要素を表す標識、算術平均や分散のもつ意味、チェビシェフの不等式に基づく推論の仕方について説明を加える。	同　上
18	統計的分布	度数分布の実例を幾つか示し、モード、メディアン、レインジ、平均、分散、標準偏差、対称度、歪度など基礎統計量について説明する。	石田正次（統計数理研究所教授）
19	相関係数と相関比	最小２乗法の初歩的な説明をし、これを用いて回帰直線を求める。さらに多項式の当てはめ、相関係数についての話をする。	同　上
20	測定誤差	調査や実験における測定誤差の性質とその統計的処理法について述べる。 系統誤差と偶然誤差の問題	同　上
21	統計的推定と検定	統計的推定と検定の基本的な考え方を簡単な実例によって説明する。 統計学での信頼性の問題	同　上
22	標本調査法	世論調査や品質検査などで使われる標本調査のやり方と、どうすれば調査精度を上げることができるかということについて説明する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
23	調査の計画と統計的考え方（Ⅰ）	社会の実証的研究に利用される社会調査の企画を例にとり、調査の計画にあたって利用される標本抽出の方法の基礎となる単純ランダムサンプリングの方法について概要を述べる。	鈴木達三（統計数理研究所教授）
24	調査の計画と統計的考え方（Ⅱ）	調査の計画のうち、調査対象者の選び方については幾つかの手法がある。各種の補助的情報を利用することにより、効率のよい標本抽出計画を実行することができる。実際に行われている大規模な全国調査の標本抽出計画にもふれる。	同上
25	調査データの見方	調査から得られる情報（データ）は、情報収集の手法の選択、標本抽出の計画調査データの整理の仕方等、調査に利用した手法に関連している。ここでは標本調査によるサンプリング誤差について、具体的な実例を中心に述べる。	同上
26	工学への応用	不規則に変動する現象を統計的に解析するための基礎概念として、定常時系列の自己相関関数ならびにスペクトル密度関数について説明する。その応用として統計的システムの制御の問題を取り上げ、工学的実用例について概説する。	赤池弘次（統計数理研究所教授）
27	ソフトサイエンスへの応用	広く人間的・社会的事象の解明に携わるソフトサイエンスでは、人の意識や態度など、内容が多義的で変動しがちのデータから、有効な情報をどう取り出すかの工夫が常に優先する。この領域の統計的考え方や分析法の特徴を解説する。	水野欽司（統計数理研究所教授）
28	ライフサイエンスへの応用―計量診断	からだの種々の計測データについて似たものをグループ化し、これらグループに同じ医学的意味を見いだし、病名、病状の度合い、予後の見通しなどの判断を行う計量診断に用いられる多次元的統計解析について講義する。	駒澤勉（統計数理研究所教授）
29	ライフサイエンスへの応用―自然保護の統計	野生動物の数を知ることは、自然生態系の中における野生動物のバランスを考えるうえで貴重な基本事項である。統計学の最も難しい問題の一つであるが、確率論・コンピュータ・標本調査理論を活用して、生息数を推定する方法を述べる。	林知巳夫
30	質を測る統計的方法	質的なものを量的に表すことは、現象を統計的に取り扱おうとするとき、不可欠のことである。この数量化の問題に対して、統計学の立場からどう考えてよいかを説明する。根本概念を明らかにするとともに、その具体化について述べる。	同上

＝自然系実験＝

―科学的な考え方と進め方―

〔主任講師：宮代彰一（放送大学教授）〕

全体のねらい

多くの自然科学（ひろく理工学ととらえる）における実験というものをとりあげ これらを横断して眺め、そこに共通した考え方や手法を抜き出してきて勉強してみたい。各テーマ(章)において、それぞれの趣旨に沿って、できるだけ色々な科学の分野からの実験や実例を引用、提示する。なお本科目の面接授業ではいくつかの実験を学生が自ら行えるようにする。

◇は放送番組における主な実験や見学　Ⓖ＝ゲスト

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論（科学と実験）	• 科学における実験の意義 • 実証科学のおこり；物理、化学、生物学の歴史における例 • 実験（科学）の限界；再現性 • 実験の分野；基礎科学と応用科学	宮代彰一（放送大学教授）
2	企画・計画	• 問題の発見、把握がまず最初 • その手法；大局を見渡す、ブレインストーミング、ＫＪ法 • 研究における計画性 • 計画の手法；フローチャートやPERT法 • 計画をすすめる上での二、三の問題 ◇ KJ法の実習状況の見学	宮代彰一 Ⓖ宮尾亘（東芝技術管理部／慶応大学講師）
3	情報・文献	• 科学は情報の拡大再生産 • 情報のありか、その形 • 文献の種類、その膨大な量 • 研究の各段階と調査のあり方 • 検索の方法、機械検索 ◇ 国会図書館、ＪICSTの見学	宮代彰一
4	実験の心得（実験の準備）	• 現象をうけとめる人間の感覚 • 学習実験と研究実験 • 機器の理解 • 実験ノート • 装置の作製、工作、材料 ◇ 感覚に関する実験（横浜国大ほか） ◇ 機械工作などの見学（東大海洋研）	宮代彰一 遠山紘司（放送大学助教授）
5	実験の心得（安全性）	• 危険は実験と背中合わせ • 危険の分類、素因と誘因 • 化学、生物、物理的な危険 • 安全のための基本的注意とマナー • 応急処置、防災指針 ◇ 化学実験室（東大理）の見学ほか	宮代彰一 渡部徳子（放送大学助教授）
6	整理と分類	• 整理は事物の把握の基本 • データの整理、周期律表、グラフ表示 • 試料の整理；各種標本などの例 • 考え方の整理 • 分類；分類学、自然分類、人為分類 ◇ 神奈川県立博物館	宮代彰一 遠山紘司
7	単位・標準	• 単位と標準は定量化の基盤 • 物理量と単位、次元 • のぞましい単位系；国際単位系（SI） • 物理定数・７つの基本単位と標準 • 慣用の単位とSI ◇ 標準とその研究の実際（計量研）	宮代彰一 大井みさほ（通産省工技院計量研究所）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	観察と測定	• 自然をよく観ることと測ること • 観察の例、野外観察 • 道具による観察力の強化；顕微鏡 • 直接測定と間接測定 • 測定結果のグラフ化、実験式 ◇ 自然教育園ほか	宮代彰一 遠山紘司
9	誤差と精度	• 測定には不確かさが伴う • 絶対誤差と相対誤差 • 測定精度のバランス • 系統誤差と偶然誤差 • データの処理、最小自乗法 • 妥当な測定；真の値とは？ ◇ 学生実験、測定の状況（お茶の水女子大）	宮代彰一 冨永靖徳 （お茶の水女子大学助教授）
10	測定とゆらぎ	• 測定対象自体のあいまいさについて • 放射線測定におけるばらつき • 情報と雑音；熱雑音 • 目にみえる量子的なゆらぎ • ゆらぎの中にも法則性をみる ◇ いくつかのゆらぎの実験 ◇ ヤリイカの神経のゆらぎ（電総研）	宮代彰一 冨永靖徳 Ⓖ松本元 （通産省工技院電子技術総合研究所）
11	電気計測	• 実験にかかせない電気・電子的手法 • 電気的な量と測定 • 偏位法と零位法 • 指示計器・測定点のとり方 • 受動素子と能動素子 • 変化する量の測定；オシロスコープ ◇ 基本的な電気測定の実際	宮代彰一 田中清臣 （電気通信大学助教授）
12	数値計算とシミュレーション	• 実測と数値計算的方法 • πの実測と計算；モンテカルロ法ほか • 電算機による計算上の理念 • シミュレーション • モデル化：計算実験 ◇ 数値計算の実演 ◇ 風向分布のアニメーション（気象研）	同上
13	電子計算機の応用	• 電算機の実験研究への利用，そしてとくに，観測・制御への応用 • 実験システムにおける電算機 • 量子化と標本化 • インターフェース；センサなど ◇ 音声解析の実験（電通大） ◇ 数種のセンサの演示など	同上
14	報告	• 研究や実験は報告で仕上がる • 学習（学生）実験でのレポート • 報告書（論文）の組立て方 • よい報告のあり方；内容上で注意すべきこと、表現上での心得ごと • 各種の技術報告、特許という形の報告	宮代彰一
15	しめくくり	• 今まで勉強したことと実際の研究 • 創造活動；その技法、その成否 ◇ 実際の研究の典型的な例としてポジトロンCTの研究を見学（放医研）	宮代彰一 Ⓖ田中栄一 （科学技術庁放射線医学総合研究所）

＝ 英　　語 Ⅰ ＝

An Introduction to Living English Speech

―ドラマの英語―

〔主任講師：鈴木　博（東京大学教授）
　　國吉丈夫（千葉大学教授）〕

全体のねらい

副題にLiving English Speech とあるように、話されている英語のありのままの姿を学習の対象とする。教材としては主として標準的な英語のテレビドラマを使い、ことばが使われている場面や身体的動きなどの非言語情報と関連させながら聴解力の養成を目指す。話す練習は聴解力養成の一環として行うことになる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	＜入門講座１＞ コース紹介	生きた話しことばとしての英語の例としてインタビュー、ニュース、演説を取り上げて学習用に作られた英語との差を示す。そのあと本講座で使う作品を一覧し、授業の一部を紹介する。最後に、毎回設ける「音声コーナー」の第１回で母音図の見方を解説する。	鈴木　博 （東京大学教授）
2	＜入門講座２＞ The Computer 第　１　回	生きた話しことばに本格的に取り組む前の準備として英国放送協会（ＢＢＣ）が英語学習用に制作したフィルムを２本使うが、今回はその１本の前半を利用する。 「発音コーナー」では母音図上での個々の英語音の位置を確認する。	同　上
3	＜入門講座３＞ The Computer 第　２　回	前回のフィルムの後半を使って学習したあと、前半後半を通して視聴する。 「発音コーナー」では二重母音について解説する。	同　上
4	＜入門講座４＞ In the Park 第　１　回	準備段階としてＢＢＣが制作した英語学習用フィルムをもう一本使って音声英語に慣れる練習を行う。今回はその前半を使う。 「発音コーナーでは英語の子音のうち、破裂音、破擦音、摩擦音を取り上げる。	同　上
5	＜入門講座５＞ In the Park 第　２　回	前回のフィルムの後半を使って学習したあと、前半後半を通して視聴する。 「発音コーナー」では英語の子音のうち、鼻音、〔ｌ〕、〔ｒ〕、〔ｗ〕、〔ｊ〕を取り上げる。	同　上
6	The Necklace 第　１　回	生きた話しことばに本格的に取り組む最初の教材はモーパッサンの短編小説「首飾り」を現代のアメリカに場面をおきかえてドラマ化したフィルムである。今回は５分40秒分。 「発音コーナー」では前置詞、代名詞、助動詞、接続詞等の「弱形」を取り上げる。	同　上
7	The Necklace 第　２　回	前回のフィルムの続きを使う。全体で20分の作品のうち今回は３分35秒分。 「発音コーコー」は「弱形」の続きで、音が省略される場合を取り上げる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Necklace 第　3　回	前回のフィルムの続きを使う。今回は6分30秒分。 「発音コーナー」では「音の連結」を取り上げる。	鈴　木　　博
9	The Necklace 第　4　回	「首飾り」の最終回で、約1分の最後の結末部を使っての学習のあと、この作品を通して視聴する。最後の重要なせりふはこの通しの視聴で初めて聴くことになる。 「発音コーナー」では破裂音が連続した場合に起きる。「不完全破裂」を取り上げる。	同　　上
10	A Point of Departure 第　1　回	米国で制作放映されたテレビドラマシリーズ Family の中のエピソードを6回に分けて学習する。中流階級の家庭の長男が抱く自立の悩みとそれに寄せる家族の思いやりがテーマである。今回は約6分分。 「発音コーナー」では「同化」を解説する。	同　　上
11	A Point of Departure 第　2　回	前回のフィルムの続きを使う。全体で約36分のうち今回は7分30秒分。 「発音コーナー」ではフィルムに頻出する gonna（going to）と wanna（want to）を取り上げる。	同　　上
12	A Point of Departure 第　3　回	前回のフィルムの続きを使う。今回は約6分30秒分。 「発音コーナー」では「強勢（ストレス）」を取り上げる。	同　　上
13	A Point of Departure 第　4　回	前回のフィルムの続きを使う。今回は約4分30秒分。 「発音コーナー」では「リズム」を取り上げる。	同　　上
14	A Point of Departure 第　5　回	前回のフィルムの続きを使う。今回は約5分10秒分。 「発音コーナー」ではイントネーションの4つの基本型を取り上げる。	同　　上
15	A Point of Departure 第　6　回	前回のフィルムの続きを使う。今回は約5分30秒分。 「発音コーナー」では前回の基本型に入らないイントネーションの型と意味について解説する。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	A Point of Departure 第　7　回	「出発点」の最終回で、約36分の作品を前半と後半に分けてそれぞれ解説したあと視聴する。	鈴　木　　博
17	“An Eye to the Future” — 1 —	☆効果的に学習を進めるための留意事項 ◎アメリカのＴＶドラマFAMILYのシリーズの一つを七つの部分に分けて使うが、その最初のLawrence一家の朝食の場面 ☆PHONETICS Corner：日本語と英語の音声の流れの違い、発音練習	國　吉　丈　夫 （千葉大学教授）
18	“An Eye to the Future” — 2 —	☆前回の復習と英語表現テスト ◎Lawrence一家の夕食の後、夫婦が話し合っている。妻のKateは夫のDougに就職したいという決意を打ち明ける。 ☆PHONETICS Corner：英語の強勢アクセントとその発音練習	同　　上
19	“An Eye to the Future” — 3 —	☆前回の復習と英語表現テスト ◎Kateは前の晩に夫のDougにすすめられたように知人のSandy Prattの音楽事務所に行って就職の相談をする。Sandyは又大学生になって勉強したらどうかという。 ☆PHONETICS Corner：文表現の強勢と発音練習	同　　上
20	“An Eye to the Future” — 4 —	☆前回の復習と英語表現テスト ◎夫のDougは最初驚くがKateの大学行きに賛成する。電話で連絡を受けたKateは次の日auditionを受けに大学に出かける。そこで自分の力のなさを思い知らされ断念する。 ☆PHONETICS Corner：英語文表現の強調と強勢	同　　上
21	“An Eye to the Future” — 5 —	☆前回の復習と英語表現テスト ◎断念したKateが働く音楽事務所にDr. Stylesがやって来る。前日のauditionの先生である。非礼をわびていろいろいうKateに先生は諭すように話しかけるのであった。 ☆PHONETICS Corner：英語くリズムと発音練習	同　　上
22	“An Eye to the Future” — 6 —	☆前回の復習と英語表現テスト ◎音楽事務所の単調な仕事に飽き足らなくなって辞めたKateは夫に会って打ち明ける。そして、「大学も、職もやめてしまうとはどうしたのだ」と強く励まされるのであった。 ☆PHONETICS Corner：英語のイントネーション	同　　上
23	“An Eye to the Future” — 7 —	☆前回の復習と英語表現テスト ◎意を決してKateは大学のDr. Stylesのところに行きauditionを受け入学を許可される。Kateは希望に胸をふくらませて猛然とピアノの練習に励むのであった。 ☆PHONETICS Corner：イントネーションの型	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	“An Eye to the Future” — 8 —	☆七回に分けて扱ってきたこのＴＶドラマを出来るだけ通して見る。ことばを意識しないで英語の世界に浸ることを目標とする。ことばが使われている場面、文化的背景。 ☆PHONETICS Corner：英語のイントネーションとその発音練習	國吉丈夫
25	“The Ingenious Reporter” — 1 —	☆前回までの総復習とディクテーション・テスト ◎ＴＶドラマ“The Ingenious Reporter”を五つの部分に分けて扱うがその最初の場面である。青年記者Harry Langleyが身元不明の死体を利用し大スクープとする考えを編集長にいう。 ☆PHONETICS Corner：英語のテンポとポーズ	同　上
26	“The Ingenious Reporter” — 2 —	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎犯人を装って逮捕され、計画通り監獄に入ったHarryは検察官の取り調べを受けている。検察官の話す事件の顛末をHarryは最初は半分茶化し気味に聞くのであった。 ☆PHONETICS Corner：英語表現の音量の変化	同　上
27	“The Ingenious Reporter” — 3 —	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎殺された恋人のHenriettaだと聞かされ、Harryにとって予想もしなかった事態となる。公判にどう対処するか弁護士のDupresと話し合うが意見が全く合わない。 ☆PHONETICS Corner：英語表現の音質の変化	同　上
28	“The Ingenious Reporter” — 4 —	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎重要な証拠のないこの件には打ち勝つ自身があるという弁護人のDupresには耳を貸さず、Harryは法廷の場で事実をそのまま述べるのであった。 ☆PHONETICS Corner：音声分析と総合的効果	同　上
29	“The Ingenious Reporter” — 5 —	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎Harryに急き立てられるようにして編集長を証人に立てるが、検事Lefargeの巧みな尋問に形勢は逆転する。法廷から出てきたHarryは怒り狂った群集に命を絶たれる。 ☆PHONETICS Corner：英語表現のスタイル	同　上
30	“The Ingenious Reporter” — 6 —	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎五回に分けて扱ってきたこのＴＶドラマを通してみる。出来るだけことばを意識しないで英語の世界に浸ることが目標である。 ☆講師とゲストとの話し合いを聞く。 ☆PHONETICS Corner：いろいろな英語	同　上

＝ 英 語 Ⅱ － A ＝

〔主任講師：山内久明（東京大学助教授）〕

全体のねらい

英語ⅡAでは、大学の一般教養課程における英語講読に相当する程度の英文を読むことになっている。さまざまの文体に慣れるために、(Ⅰ)事実についての論述、(Ⅱ)文学作品の想像的散文、(Ⅲ)論述的要素と想像的要素とを兼ね備えた散文を選んで読む。英語の修練と同時に、新知識を得たり、想像的世界を垣間見るのがねらい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ.The British Life and Institution: Walter Perry, Open Univarsity (1).	英国の社会・教育制度の中で、「放送大学」がいかにして生成発展して来たかを探る。①成人教育の必要性、②教育放送の発達、③教育における機会均等主義の三つの要因のうち、まず成人教育の実態が られる。	山内久明（東京大学助教授）
2	The British Life and Institution: Walter Perry, Qpen University (2).	①の話題を続けて、英国における成人教育のための機関が、正規の教育機関に比して不充分であったこと、また従来の教育機関がこの目的のために有効でないことを論ずる。	同 上
3	The Birtish Life and Institution: Walter Perry, Open University (3).	②英国における従来からあった教育放送番組が、放送大学発足の機運にいかに関わったかを論ずる。	同 上
4	The British Life and Institution: Walter Perry, Open University (4).	③エリート主義に対する機会均等主義の理念が、「放送大学」の発足にいかに結びついたかを論ずる。	同 上
5	Ⅱ.Thc Work of Imagination: E.M. Forster, "The Story of a Panic" (1)	経済学者Maynard Keynes らとともにThe Bloomsbury Group の一員であったE.M.Forster の初期の短編"The Story of a Panic"を読む、イタリアに滞在中の慣習的な英国人観光客の一行に混じって、躾や慣習から逸脱した少年Eustace が登場する。	同 上
6	The Work of Imagination: E.M.Forster, "The Story of a Panic" (2).	散策に出かけた山中で、突如得体の知れない「恐怖」（Panic）に襲われてわれ先にと山を駆け下りる、慣習に凝り固まって鼻持ちならない英国人観光客の俗悪さと、不合理な恐怖心から遁走する愚かしさとの皮肉な対照性。	同 上
7	The Work of Imagination: E.M.Forster, "The Story of a Panic" (3).	山を駆け下りる途中、Eustaceがいないのに気付いた大人たちは、元の場所へと引き返す。大人たちの恐怖と不安をよそに、ひとり山中で平然として、山羊の足跡の上を転げ廻るEustaceの姿には、大人たちの理解を絶する何かがある。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	The Work of Imagination：E.M. Forster，“The Story of a Panic”(4)	帰る途々、喜々として山中を跳びはね自然界と一体化したかに見えるEustaceの姿は、大人たちには不可解である。さらに、ホテルのイタリア人使用人に馴れ馴れしく振舞おうとするEustaceは、階級意識にとられた大人たちのを買う。	山内久明
9	The Work of Imagination：E.M. Forster，“The Story of a Panic”(5)	その日の真夜中、ひとり闇の中でホテルの庭を徘徊するEustaceに再び狼狽する大人たちは、室内に監禁しようと、使用人Gennaroを買収して、Eustaceを連れ戻す。	同上
10	The Work of Imagination：E.M. Forster，“The Story of a Panic”(6).	二階に閉じ込められた筈のEustaceとGennaroは、窓から庭に飛び下りる。Gennaroの死。あとには、庭の塀を跳び越えて逃げ延びたEustaceの笑いが、下方の谷間からこだまして響いて来るのだった。	同上
11	Ⅲ.Civilization：Kenneth Clark，“The Worship of Nature” from Civilisation (1).	原著は、英国を代表する著名な美術史家によるＢＢＣの連続テレビ番組で、わが国でも放映された。十八世紀後半から十九世紀前半にかけて生じた自然に対する興味の覚醒を、文学と美術に即して論じた一章。第一回は十八世紀詩人の場合。	同上
12	Civilization：Kenneth Clark，“The Worship of Nature from Civilisation(2).	自然崇拝の諸相をJean-Jacques Rousseau，Johann Wolfgang von Goethe，Samuel Taylor Coleridgeに即して辿る。	同上
13	Civilizbtion：Kenneth Clark，“The Worship of Nature”form Civilisation(3).	英国の湖水地方に生まれ、生涯の大半をその地で過ごしたWilliam Wordsworthの場合を、代表的な詩の一部を手がかりにして論ずる。	同上
14	Civilization：Kenneth Clark，“The Worship of Nature”form Civilisation(4).	Wordsorthの自然詩の素朴な写実性は同時代の風景画家John Constableに通ずる反面、Wordsworthの詩のもうひとつの側面である自然に宿る崇高性の発見は、もうひとりの画家J.M.W.Turnerに通ずる。自然崇拝をめぐっての詩と絵画との並行が辿られる。	同上
15	Civilization：Kenneth Clark，“The Worship of Nature”from Civilisation(5).	１９世紀後半のフランス画家の場合―Constableの写実性の伝統は例えばCourbetにみられるのに対し、Turnerの主観的幻想性は、Van GoghやMonetのような印象派の絵画に通ずる。	同上

＝ 英 語 Ⅱ － B 1 ＝

［主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
Nicholas A. Teele
（放送教育開発センター助教授）］

全体のねらい

この科目の目的は(1)構造の複雑な英文を読めるようになることと、(2)日本の政治、社会、文化などについて英語で読み、英語で語れるようになることである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	科 目 紹 介	構造が複雑なため解釈の難しい英文の読み方や大意の取り方などと、この科目における予習、復習、練習の方法などを説明する。また、この科目で取り上げる日本に関する題目を紹介する。	比 喜 正 範（放送大学教授）Nicholas A. Teele（放送教育開発センター助教授）
2	The Ideology of the Saniu—rai	江戸時代の武士階級の政治・社会思想を儒教との関係を論じている。	同 上
3	Modern Burea—ucracy	日本の官僚制の特徴を述べ、政治家と官僚との関係を論じている。	同 上
4	Japan's Two Constifitions	明治憲法と戦後の新憲法の特徴を紹介している。	同 上
5	Government and Polifics	明治維新後における日本政府の成立および議会政治と政党政治の発達と問題点を説明している。	同 上
6	Industrial Revolution	１９世紀末に始まった日本の産業革命がどのようにして明治政府によって推進されたかを説明し日本の産業化が成功した要因を論じている。	同 上
7	The Motoriza—tion of Japan	日本の自動車化の歴史と自動車社会の問題などを紹介している。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Home	戦前と戦後の日本人の家庭を比較し、日本人の生活様式がいかに変化し、生活が物質的にいかに豊かになっているかを述べている。	比嘉正範 Nicholas A. Teele
9	Leisure	日本人にとって余暇とは何か、趣味とは何かを論じている。	同　上
10	Educating the Nation	日本の寺小屋教育の発達、特徴、問題点などを説明している。	同　上
11	Imitators or Innovators ?	日本人は模倣能力に優れ、創造力に欠けていると一般にいわれているが、人類の文化を発達させるのに模倣が重要な役割を果してきたことを論じている。	同　上
12	The Family System	明治時代に法制化された日本の家族制度を説明し、これが戦後どのように変化したか、今後どう変化し得るかを論じている。	同　上
13	Police and Crime	交番に代表される日本の警察は、外国の警察に比べて犯罪の阻止と犯人の検挙に良い成績をあげているが、これの要因が何であるかを探っている。	同　上
14	Sex	性に対する日本人の考え方や態度を歴史的に説明し、これが戦後どのように変化しているかを述べている。	同　上
15	An Ageing Society	日本も高齢者の数が増え、欧米並みに社会が高齢化してきているので、高齢化した日本人社会における人口問題、出生率と育児の問題、老人の福祉の問題などを検討している。	同　上

＝ 英 語 Ⅱ － B 2 ＝

主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
Nicholas A. Teele
（放送教育開発センター助教授）

全体のねらい

この科目の基本的な目的は、受講者が学術的な内容の英文を読めるようになることである。そのための入門的な教材として、学問分野の紹介文を使うことにした。このような英文に慣れることによって論文調の文章を読む能力を養っていきたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	科 目 紹 介	論文調の英文を読む能力を養うために、この科目の教材をどのように扱ったらよいか、またこの科目でどのような予習、復習、練習をしたらよいかなどを説明する。	比 嘉 正 範（放送大学教授）Nicholas A. Teele（放送教育開発センター助教授）
2	Philosophy	哲学の分野を紹介。	同 上
3	Anthropology	人類学の分野を紹介。	同 上
4	Archaeology	考古学の分野を紹介。	同 上
5	Sociology	社会学の分野を紹介。	同 上
6	Psychology	心理学の分野を紹介。	同 上
7	Learning	学習心理学の分野を紹介。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Physics	物理学の分野を紹介。	比嘉正範 Nicholas A. Teele
9	Astronomy	天文学の分野を紹介。	同　上
10	Home Economics	家庭経営学の紹介。	同　上
11	Health	保健の分野を紹介。	同　上
12	Ecology	環境科学の分野を紹介。	同　上
13	Business	企業の分野を紹介。	同　上
14	Industry	産業の分野を紹介。	同　上
15	Statistics	統計学の分野を紹介。	同　上

＝ドイツ語Ⅰ（その１）＝

主任講師：辻　　瑾（放送大学教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）

全体のねらい

このレベルでは、語学能力の基盤となる文法知識と、その活用方法の習得を目指す。また単に、語形変化を理解するだけではなく、思想的・文化的背景を把握するために、「ドイツの文化」に対する批判的アプローチを試みる。テレビというメディアの特性を考慮に入れて、発音やイントネーション等、発話レベルの事項も注意する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	学習にあたって 発音 人称変化 人称代名詞	学習に関する注意事項 ドイツ語とは、どのような言語か。 現代ドイツ語の位置づけ。 発音、動詞の現在人称変化。 人称代名詞の種類。	辻　瑾（放送大学教授） 中山　純（明治学院大学助教授） （他ゲスト２－３名）
2	名詞の性格／変化／冠詞	名詞の性別、格変化 動詞の格支配 冠詞の種類、格変化	辻　瑾 中山　純 （他ゲスト２名）
3	名詞の複数形／不規則動詞	名詞の複数形のタイプ 不規則動詞の人称変化	同上
4	動詞の再帰的表現 人称代名詞の格変化	再帰動詞、再帰代名詞等について 人称代名詞の格変化	中山　純 （他ゲスト２名）
5	前置詞	前置詞の種類、格支配 動詞や名詞と前置詞	中山　純
6	形容詞の用法	形容詞の付加語的用法と述語的用法 格変化、比較変化	同上
7	代名詞	所有代名詞、指示代名詞、疑問代名詞等について	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	数詞 副詞	数の概念、数詞 副詞の種類と用法	中山　純 （他ゲスト2名）
9	接続詞 配語	接続詞の種類 動詞の副文における位置について	中山　純
10	関係代名詞	関係代名詞の格変化、呼応 関係文における動詞の位置	同上
11	動詞の前つづり 分離動詞	分離動詞の用法等について	同上
12	話法の助動詞	話法の助動詞の種類、用法	同上
13	動詞の三要形	動詞の三要形について 単一・複合時称	同上
14	能動態／受動態	態について 受動態の時称と人称変化	同上
15	話法 命令法 接続法	話法について 動詞の命令形について 接続法Ⅰ・Ⅱの時称と人称変化	辻　理 中山　純 （他ゲスト2名）

＝ドイツ語Ⅰ（その２）＝

主任講師：辻　　瑾（放放大学教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）

全体のねらい

このレベルでは、ドイツ語Ⅰ（その１）で習得した文法知識をさらに深め、確実に身につけさせる。また（そのⅠ）では主として語レベルの問題が中心であったが、ここでは文レベルでの問題を考察する。また「ドイツの文化」を批判的にみる目を養うために、文学作品だけではなく、様々な種類のテキストを読んでいく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	大学／学生生活 語の短縮・略語	ドイツ人学生の学生生活を見ながら、若い世代の生活様式や意識を考察する。 語の短縮の方法について 略語について	辻　瑾 中山　純 （他ゲスト２名）
2	住宅 直接説話 間接説話	生活様式から、さらに一歩踏み込んで「住文化」や都市のあり方、また政策面での裏付け等について考える。 直接説話、間接説話について	同上
3	家族	家族、あるいは家庭を取りまく諸問題について考える。	同上
4	宗教 (1)	ドイツだけではなく、ヨーロッパ文化を理解する上で、不可欠な要素である宗教問題について考える。	同上
5	政治／法 造語法 (1)	西ドイツの政治制度や法秩序について考察する。また東西ドイツ問題に関しても一考を試みたい。 合成語の作り方、派生語、接合素等の造語法について	同上
6	宗教 (2) 社会／社会保障 造語法 (2)	宗教、特に「キリスト教文化」と、その影響について、文化的側面、社会的側面等から考えてみる。 接頭辞、接尾辞等について	同上
7	経済	西ドイツの経済事情、また他のヨーロッパ諸国との関係、日本との関係について考えてみたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	仕事／職業 文の構成	職業と教育のかかわり方、職の歴史、ドイツ人の職業観、若い人の就職状況等について考えてみる。 ここから各課にわたって、文の構成について論じる。	辻　瑾 中山　純 （他ゲスト2名）
9	休暇	ドイツの言わゆる“Urlaub”の歴史的背景や、現在のドイツ人の休暇の過ごし方等について考察する。また、ドイツ人と外国文化のかかわり方についても見てみたい。	同上
10	異文化／日本	西ドイツ社会の中の外国文化、ドイツ人の異文化の受容等について論じる。	同上
11	習慣／歳時	ドイツ人の様々な生活習慣を通して、もう一度、社会全体を見なおしている。また歳時を通して、宗教と日常生活との関係を、再度考察する。	同上
12	食生活 慣用語法	ドイツ人の食生活を通して、「食文化」について考察する。 成句、ことわざ、慣用語法について	同上
13	ドイツの外国語教育	西ドイツの中・高校での外国語教育や大学での外国語教育の在り方を見て、ドイツ人の言語観について考えてみたい。	同上
14	文学／文化活動	現代のドイツ人作家の作品等を見ながら現代西ドイツの文化活動の状況を見てみる。	同上
15	まとめ	初級Ⅰ（その1）、（その2）を通じて習得した文法知識の総まとめをして、合わせて、次のステップへの接続を試みる。	同上

＝ドイツ語Ⅱ－A＝

〔主任講師：辻　　瑾（放送大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰにつづく講義である。若いドイツ人夫婦クラオスとガービの日本体験を枠としながら、現代のすぐれた作家・思想家のさまざまな文体に触れていく。文章の構造を分析的・理知的に解明していくことと、言葉をきっかけとして想像力を駆使することが、実は同じ根拠に立つものであることを体得していきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	手　紙 －町に見る人々－	両親にあてたガービの手紙。日本に無事到着したことを知らせて、その目に映った日本人の姿、女性、男性、子供たちを描写していく。カルチァ・ショックの始まり？	辻　　瑾 （放送大学教授） ニゲシュ テイヒ夫人
2	対　話 －日本の先生－	日本の先生とクラオス、ガービの若夫婦。「何でも好きなように教えてほしい」という日本の先生。一定の目標やカリキュラムがあるはずだと思って怒るクラオス、なだめるガービ。	同　上
3	対　話 －何を教えたら－	テキストだのドイツ語だのと言っても、実に千差万別。その内容はまた必ず形式にあらわれる。日本人のロマンチックなドイツ像に困惑しながら、テキスト選びをする若夫婦。	同　上
4	日記について （エリアス・カネッティ）	クラオスとガービは、自分たちの変化の足跡を書きとめるために日記をつけようとする。カネッティの日記についての一文が想起される。あくまで言葉による意識化を要求した文章。	同　上
5	『出発』 （カフカ）	カフカの小品「出発」の解読。言葉が分っても、内容が分るとは限らない。想像力を駆使して、自分で文学を完結させることが必要。	同　上
6	本当の平和への道 （フリードリヒ・ニーチェ）	哲学者ニーチェが正当防衛を論拠にする軍事力保有を攻撃。 クラオスとガビは日本語で夢を見た？	同　上
7	生き残るため？ （ホイマール・フォン・ディトフルト）	西独のすぐれた科学評論家ディトフルト教授の論文の一節。私たちの脳は、自然を客観的に認識するためでなく、私たちが生き残るためにできているのであろうか？	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	なぜ独々辞典か？（ヴァーリヒ他）	T教授登場して、なぜ独々辞典かの長広舌。ゲルハルト・ヴァーリヒ著「現代独々辞典」の序文の一節を読み、他の辞典からいくつかの項目を紹介。	辻　　瑆 ニゲシュ ティヒ夫人
9	言語と社会 I －糊塗と美化－	ある新聞のインターヴュ記事から。たとえば核廃棄物処理場をめぐる言葉の使用について。いったい言葉は、嘘をつく道具なのだろうか。	同　上
10	言語と社会 II －アメリカニズム－	ドイツ語にもアメリカ語は非常に多く流れこんでいる。その原因を探り、一見矛盾して見える社会と言語の相互作用を解明しようとする。公開討論の一部。	同　上
11	ユーモアとドイツ人（ブレヒト）	どうもドイツ人の短い作品は、まじめくさってばかりいる、と嘆くガービ。そこでブレヒトに登場していただき「形式の素材」の訓話を一つ。	同　上
12	カルチュア・ショック（コンラート・ローレンツ）	クラオスもガービも時に日本で体験するカルチュア・ショックに耐えられない。「あひるの博士」ローレンツが、「慣れたもの」への憧れを解明。	同　上
13	『ロマーン』（ペーター・ビクセル）	現代スイスの作家ペーター・ビクセルの「ロマーン（長編小説）」という超短篇小説。そこに見られる現代性についてクラオスとガービが議論。	同　上
14	『受け継いだもの』（ライナー・クンツェ）	ドイツ語圏での流行語の一つ、「批判的」という言葉でも、実に千差万別に用いられ、意図し意味するところが正反対になりかねない。今は西ドイツに暮らすクンツェのわさびの利いた小品。	同　上
15	都市について（ベンヤミン）	クラオスとガービは、都市の姿こそ、ヨーロッパの歴史を如実に物語るものと考え、　情とファンタジーのあふれるベンヤミンのベルリン描写を想起する。	同　上

＝ ドイツ語 Ⅱ － B_1 ＝

〔主任講師：辻　　理（放送大学教授）〕

全体のねらい

「ドイツ語Ⅱ－A」で抽象的な思考への糸口を把握し得たものと考え、「Ⅱ－B 1」ではテキスト量をふやしていきたい。テキストを reflexiv に扱い、解釈する態度が求められる。世紀の転換期にミュンヘンに活躍した作家たちの作品を取上げるが、１９４５年のTh．マンの発言までをも視野に収めつつ、政治的状況が文学に複雑な影を落しているさまを言語表現の中に見ていく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Brief aus Japan	7年間の日本滞在を終えて、ドイツに帰国したユゲシェティヒ夫人にあてた手紙。南のミュンヘンで暮らす北ドイツ人は、何を感じているだろうか？	辻　　理（放送大学教授）
2	Brief aus München	かつての芸術家居住区シュヴァービングは、今はただ不動産屋が跳梁するところ。かつての面影は全然ないとのむごいご託宣。	同　　上
3	Simpl　(1)	シュヴァービングの現在がそういうことであるなら、残された作品によって、私たちはこれを再生させなくてはならない。Ringelnatz が描く芸術家酒場ジンプル。	同　　上
4	Simpl　(2)	芸術家酒場ジンプルの続き。Ringelnatz はついにこのジンプルの座付詩人に昇格する。	同　　上
5	Gedichte von Ringelnatz und Mühsam	そのRingelnatz のひりりと皮肉の利いた可愛らしい詩と、ぐさりぐさりと人を刺すアナーキストMühsamの詩。	同　　上
6	Die Schutzimpfung　(1)	Wedekind は当時のシュヴァービングの大御所。芝居の自作自演もしばしば。そのWedekind がめっぽう不道徳な不倫物語って聞かせる。	同　　上
7	Die Schutzimpfung　(2)	こんな予防接種を女房にされたら、世の亭主たるもの生きた心地もしまいという、奇妙な話の続き。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Der Herr Fischötter (1)	伯爵家の生まれでミュンヘンのボヘミアンになった女流作家、Franziska Gräfinzu Reventlowの作品。	辻　　瑆 （放送大学教授）
9	Der Herr Fischötter (2)	この作品、やはり世紀末の特徴をそなえていると言えそう。女性と死と動かすことのできない運命がその主題。	同　　上
10	Der Herr Fischötter (3)	かわうそ氏のせいで恋人を失った方もかわいそうだし、罪もないのに決闘で殺されるかわうそ氏もかわいそう。かわいそうな人がいて初めて物語ができ上がるのだろうか。	同　　上
11	Kriegserklärung	不遇な女流作家Lena Christの作品。第1次世界大戦が勃発したとき、なぜミュンヘンの人々はインテリを含めて、あんなに喜んだのであろう。	辻　　瑆 大貫敦子
12	Räterepublik	１９１９年、たったの一か月足らずのことであるが、ミュンヘンにはレーテ共和国の政府が誕生した。その首班となったErnst Tollerの語る思い出。すごい混乱。	同　　上
13	Flucht und Verhaftung	レーテ共和国の首班であったTollerは、今は厳しく追われる身。ようやくかくまってもらった家でも、裏切り者の女に密告されてしまう。	同　　上
14	Ohrfeigen und Hausverkauf	これはKarl Valentinの二つの作品。いやでも笑っていただかないと、ミュンヘンから化けて出そう。どこか氷りつくようなValentinの笑い。	辻　　瑆
15	Mit Thomas Mann	Thomas Mannはミュンヘンに住み、ミュンヘンを愛し、ミュンヘンで傑作を書きあげた人。そのMannがいかにミュンヘンをまもり、またドイツ文化をまもろうとしたか。	同　　上

＝ ドイツ語 Ⅱ － B_2 ＝

〔主任講師：岩崎英二郎（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

現在、ドイツの新聞や小説などでごくふつうに用いられている文章語が楽に読めるような実力をつけること。それを目標としてテキストの読解、「ドイツ語Ⅰ」では扱われなかった文法事項の解説、それと関連した独作文の練習を行う。単にドイツ語を受動的に理解するだけでなく、ドイツ語で自分の考えを発表する力をつけることの重要さを強調したいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Die elektronische Gesellschaft (1)	マイクロエレクトロニクスの未来社会に及ぼす影響に関するローマクラブの報告書をテキストに用いる。 文法：　話法の副詞 独作文	岩崎　英二郎 （慶応義塾大学教授）
2	Die elektronische Gesellschaft (2)	テキストは第1回の続き 文法：　語構成(1) 独作文	同　上
3	Die elektronische Gesellschaft (3)	テキストは第2回の続き 文法：　語構成(2) 独作文	同　上
4	Die elektronische Gesellschaft (4)	テキストは第3回の続き 文法：　語構成(3) 独作文	同　上
5	Die elektronische Gesellschaft (5)	テキストは第4回の続き 文法：　文の種類 独作文	同　上
6	Die elektronische Gesellschaft (6)	テキストは第5回の続き 文法：　文の構成成分 独作文	同　上
7	Die elektronische Gesellschaft (7)	テキストは第6回の続き 文法：　補足成分と添加成分(1) 独作文	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Die elektronische Gesellschaft (8)	テキストは第７回の続き 文法：　補足成分と添加成分(2) 独作文	岩　崎　英二郎
9	Die elektronische Gesellschaft (9)	テキストは第８回の続き 文法：　付加語 独作文	同　　上
10	Die elektronische Gesellschaft (10)	テキストは第９回の続き 文法：　配語法(1) 独作文	同　　上
11	Die elektronische Gesellschaft (11)	テキストは第１０回の続き 文法：　配語法(2) 独作文	同　　上
12	Die elektronische Gesellschaft (12)	テキストは第１１回の続き 文法：　心態詞 独作文	同　　上
13	Begegnungen mit Fritz W　(1)	ペーター・ヴァイスの自伝的小説 「両親との別れ」からの一節をテキストに用いる。 独作文	同　　上
14	Begegnungen mit Fritz W　(2)	テキストは第１３回の続き 独作文	同　　上
15	Begegnungen mit Fritz W　(3)	テキストは第１４回の続き 独作文	同　　上

＝フランス語Ⅰ（その１）＝

― 生きた会話表現 ―

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

視覚による状況の把握とフランス語の音との結びつきが、自然に行なわれるよう、アニメ、ロケーションなどによる素材を使い、発音練習、構文練習を併用して、聴き、話し、理解する能力を涵養する。よい発音習慣と少数の文法　　の運用能力をつけて、フランス語の入門とする、特に構文感覚の養成を重視する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	発音と会話	まず、発音の基礎を習得して、簡単な会話を学ぶ。 〔文法項目〕 名詞の性と冠詞	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	動詞の変化	－er 動詞の変化を学び、動詞の習得の第一歩とする。 〔文法〕 －er 動詞の現在形、不定用、疑問。	同上
3	動詞être　形容詞	〔文法〕 動詞être の現在形、形容詞の女性形、形容詞の位置、導入詞	同上
4	動詞avoirと数詞	〔文法〕 動詞avoirの現在形　avoirを用いた慣用句、数詞と日づけ	同上
5	復習 文法補遺	１－４課までの復習 発音・イントネーション解読 名詞標識語（冠詞ほか）などの文法事項補遺	同上
6	非人称構文 動詞faireとaller	〔文法〕 非人称構文ー時間、天候、 ie fant ti	同上
7	複合過去形	〔文法〕 複合過去形ー助動詞にはavoirとetreが使われること。過去分詞の形。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	半過去形とその用法・代名動詞	〔文法〕 独自な半過去というもの一形と用法、代名動詞とその変化形。	福井芳男
9	動詞allerと不定形・構文と人称代名詞	〔文法〕 動詞allerの活用 aller＋不定形、構文の問題と代名詞 代名詞の位置	同上
10	復習 動詞の活用	6－9課までの復習、動詞のさまざまな活用形（アニメの本文に出てくる動詞にかぎる）とその動詞の使いかた。	同上
11	中性代名詞enとy 動詞句（動詞＋不定形）	〔文法〕 中性代名詞enとyの用法、動詞句（動詞＋不定形）の問題	同上
12	単純未来形・命令形と代名詞	〔文法〕 未来形とその使い方（近接未来との関係）、命令形における代名詞の位置	同上
13	形容詞副詞の比較級 文型の問題	〔文法〕 比較・最上級のつくり方 動詞の種類による基本文型の問題	同上
14	簡単な名詞節副詞節複文の導入	〔文法〕 複文導入への第一歩としての簡単な名詞節と副詞節を学ぶ。	同上
15	復習 文の構造と時制の問題	総復習をして進歩の度合いを学生に自分ではかってもらうとともに文法の補足として時制と文の構造について簡単に述べ、中級への橋渡しとする。	同上

＝フランス語Ⅰ（その２）＝

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

ラジオというメディアの特性を考え、音の直接把握と学生の反応の敏速化をねらう。同時に文法項目をこまかに、体系立てて解説することにより、フランス語の理解を深め、聞き、読み、話すという能力の基礎を与える。テレビ（フランス語Ⅰ－１）と関連させ、発表能力と構文知識をより深めて行く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	会話と発音	簡単な基礎会話によって発音の基礎を学ぶとともに、綴り字との関係を学ぶ、特にイントネーションを重視する。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	動詞の変化と否定文・疑問文	－er 動詞の現在形を学んで、すぐに使ってみることを可能にしたい。否定・疑問という基本的変換の訓練も行なう。	同上
3	名詞と名詞グループ	名詞の性・数と、それを指示するのに不可欠な冠詞類を学び、あわせて若干の形容詞も勉強する。	同上
4	avoir と être	もっとも重要な avoir と etre という二つの動詞の現在形とその２つを使った表現を学ぶ。	同上
5	復習と応用（付）形容詞	１－４までの文法項目の復習をし、またそれを展開させて応用力を養なう。文法の補遺として形容詞を学ぶ。	同上
6	非人称構文：時の表現と数	非人称構文を学び、つづいて数詞を勉強して、時間、天候などの基礎的な言い方を学ぶ。	同上
7	疑問文：動詞の現在形 (1)	さまざまの疑問詞を学び、同時に不規則動詞の現在形を学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	否定文 動詞の現在形 (2)	否定のさまざまな型を学ぶとともに、不規則動詞の現在形をさらに習得する。	福井芳男
9	動詞と動詞句 （動詞＋不定形）	フランス語の文の型として重要な動詞＋不定形のさまざまな構造を学ぶ。	同上
10	復習と応用 付・文型と代名詞	5－9まで復習と展開、さらに文法補遺として基本文型並びにそれと関連して代名詞を学ぶ。	同上
11	比較級－代名動詞	比較級（最上級）の勉強とともに、代名詞とその使い方を学ぶ。	同上
12	過去の問題：複合過去形と半過去形	フランス語の過去時制の体系を学習するか、特にむずかしい複合過去と半過去を比べて学習する。	同上
13	単純未来形：命令文と感嘆文	動詞の単純未来形を学ぶとともに、命令文、感嘆文、あるいはそれに関連する表現を学ぶ。	同上
14	基本的な文の構造	名詞節、副詞節、形容詞節の関単な導入を行ない、次の段階への橋渡しとする。	同上
15	復習 文の構造展開と変形	1－14までの復習と展開。文の構造とそれがいかに展開、変形して文の構造となるかについて説明する。	同上

＝フランス語Ⅱ－A＝

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

複文構造をまず把握することによって、読み、理解するという方向に前進する。それもラジオというメディアを通じて、フランス語のイントネーションの理解を深め文のみならず思考のリズムをつかまえるようにする。さらにさまざまの型の文章に接し、フランス語の文章に慣れるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	副詞節と条件法：現在分詞とジェロンディク 会話 (1)	まず副詞節・特に仮定節を学び、それとの関連で条件語を勉強する。あわせて副詞節の代わりとなる現在分詞、ジェロンディフを勉強する。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	間接話法と時制の一致：関係代名詞 会話 (2)	名詞節の一環として間接話法を学ぶか、必然的に時制の一致の問題に触れる。さらに関係代名詞について勉強し、形容詞節を学ぶ	同上
3	接続法 (1) 会話 (3)	名詞節内における接続法（現在形・過去形）を学ぶとともに、その形を習得する。	同上
4	接続法 (2) 会話 (4)	副詞節を中心に接続法の用法を勉強する。また複文構造を全体的に考えて、フランス語による思考のあり方を考える。	同上
5	復習と応用：単純過去の体系 復習まとめ	1－4までの復習、並びに単純過去を用いる文における過去の体系を学び、歴史、小説などの記述文への導入部とする。	同上
6	文章読解 (1)	手紙文の読みかた。書きかた。	同上
7	文章読解 (2)	天気予報、事実の報道。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	文章読解(3)	簡単な伝記文、軽い笑い話。	福井芳男
9	文章読解(4)	軽い笑い話、インタビュー記事。	同上
10	文章読解・まとめ	書き言葉への移行、各詞の名詞化、フランス人ゲストとの対話。	同上
11	フランスと日本(1)（文章読解）	パリについての簡単な紹介文、それをめぐっての会話文。	同上
12	フランスと日本(2)	フランス事情についての文、それをめぐっての会話文	同上
13	フランスと日本(3)	日本紹介の文、それをめぐっての会話文。	同上
14	フランスと日本(4)	日本紹介の文、それをめぐっての会話文。	同上
15	フランスと日本復習とまとめ	フランス語の詩と日本語訳（永井荷風）、ゲスト：フランスにおける日本紹介の現状	同上

＝フランス語Ⅱ－B_1＝

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

Ⅱ－Aまでに習得した文法知識と語彙力の基礎的な部分によって、かなり高度のコミュニケーション能力が発揮できることを示すため、Ⅱ－B－1においては会話力、発表力の開発に重点を置く。特に重要な状況を想定して、相手の意見を聞き、自分の考えも述べられる。知的なコミュニケーションができるようになることを目標とするすべての課にフランス人、日本人ゲストによる実習をも含む。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	自己紹介	まず自分が何者であるかを相手に知らせること、ついではある人物を別の人にこまかく紹介する術を学ぶ。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	情報の求め方	相手にいろいろと情報をたずねる場合の言いかた。この場合聞きとり練習も兼ねることが必要であろう。	同上
3	指示、命令	仕事の上でいろいろな指示を出し、また命令を出す場合の言い回し、答えかたを学ぶ。	同上
4	情報の与え方	フランス流に適確な情報を与える場合、特にニュース、コメント、日常生活情報などの与え方を学ぶ	同上
5	復習と応用	1－4までのパターンを復習するとともに応用会話を通じて短かい応答に必要な合の手、成句などを学ぶ。	同上
6	意見、判断の述べかた	まず自分の考え、意見を述べるための表現を学ぶ。	同上
7	賛意支持の表現法	相手、あるいは第三者の意見に賛意を表し、あるいはそれを支持する言いかたをさまざまのニュアンスで表現できるように訓練する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	反論の言いかた	議論においては必らず反論が必要となる。時に西欧の人たちとの議論では反論の技術が必要となる。	福井芳男
9	疑い、保留の表現法	6, 7, 8課においてニュアンスをつける練習をするがそれをふえんして疑いなどの表現を加え、さらに論理立ての問題に触れる。	同　上
10	復習と応用	6－9までのパターンを復習するとともに応用会話を通じて議論などに必要な合の手、成句、書き言導的な言い回しを学ぶ。	同　上
11	感嘆文	11－14までは感情をこめた言い回しの練習になる。まずは感嘆文について学ぶ。	同　上
12	喜び、悲しみの表現	感情表現基本的なものは喜び悲しみである。1－10までに学んだ平常の情報伝達、議論などの場合にもこれらの表現をいかに生かすかも考える。	同　上
13	怒り、憎しみ、楽しさの表現	ここでは以上の感情表現のほかに単語の使用法によってどう感情を表わすかという語彙論的な側面も検討する。	同　上
14	皮肉、優しさ誇張	すでに会話における修確率な面は何度かとりあげていると思うが、ここでは特に皮肉、からかい、誇張などの面を中心にしていわば会話のテクニックについて考えてみる。	同　上
15	復習と応用	11－14までの復習とともに俗な表現、上品な表現という位相の問題に触れる。	同　上

＝フランス語Ⅱ－B2＝

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

書き言葉を中心として、社会、人文系のフランス語文献を読むよすがを作るための清読をおこなう。これは文学作品を読むために十分役立つであろう。特に新聞、雑誌での記事を読むための入門とし、フランス社会での重要事項『日常生活』『女性の（地位の）問題』『教育問題』をとりあげてフランス社会へのアプローチの鍵をそこに見出そうと考える。そして書き言葉への入門となればよいと考えている。現実の事象について考える力をつけることがフランス語の力をつけることになるのである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	食事：新しい食うこと	フランス人の生活で最も重要なもののひとつが食事である。しかし、現代生活ではどう変わってきているのだろうか。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授）
2	食通の天国	現代のあらゆる変化にもかかわらず、フランス料理は依然としてフランス文明の最も重要な産物のひとつである。その中心にリヨンがある。	同上
3	フランス人の金銭感覚	「毛糸の靴下の中に」金貨をひそかに貯めているというのは、フランスについて一般的にもたれているイメージであるが、現代社会では、それがどうなっているであろうか。	同上
4	家族の変化	家族はしばしば糾弾されてきたが、多くの人がまだ執着しているものでもある。現代社会の中でフランスの家族はどうなっているのだろうか。	同上
5	バカンスによる大いなる断絶	バカンスはフランスでは大切な制度になっている。バカンスがどのようにフランス人の中に入りこんでいるか。この問題を考えることはますます発達するレジャー文明を考えることになる。	同上
6	生命を与える女性	女性の地位向上は20世紀後半、全世界での重要問題である。先進的な役割をしてきたフランスだが、どういうふうに問題をとらえているのだろうか。まず母性と女性の解放の問題がある。	同上
7	働く女性の問題	女性が働くときどういった問題があるのか。特に過労、心労は並たいていのものではない。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	女性の戦い(1)	女性解放の重要な担い手であり、女性問題省の大臣もやった、フランソワーズ・ジルーの手記から、まず女性の解放の基本問題に触れている部分をとりあげる。	福井芳男 井戸桂子
9	女性の戦い(2)	女性解放問題で、ジルーはシモーヌ・ド・ボーヴワールの立場を批判しているが、これは、問題のむずかしさをさらに明確化する。	同上
10	女性の労働	総括として、女性の労働の状況を、働く女性たちがどう見ているか、という問題をとりあげる。	同上
11	学校：人生についてのある種の概念	社会の根幹は教育にある。まずフランス人と学校との関連についての記事を見る。	同上
12	秘かな選別	公式の選別（バカロレア）の他に、バカロレア内での格づけ、そして重要なリセへの優秀な生徒の集中化現象が見られる。	同上
13	私学の新たな成功	フランスの公立絶対化がどうくずれているか、日本の現状とくらべて、たいへん興味ある現象が起っている。	同上
14	エナ（E.N.A.）に入ること	フランスの高等教育で最も特徴ある、グランドゼコルの問題を見ていく。	同上
15	5月の事件とその影響	68年5月、大学を吹き荒れた騒動とは何であったか。それはどういう影響を与えたかを見る。	同上

＝ロシア語（前半）＝

〔主任講師：浅岡宣彦（大阪市立大学助教授）〕

全体のねらい

ロシア語前半では名詞の格変化と動詞の人称変化に的を絞り、基本的文型、文例をえらんで分かり易い内容のものにしたい。そのために最少限必要な文法の基本的事項を厳選し、使用語彙を制限し、ロシア人に吹き込みをお願いして、耳からの学習の利点を生かしていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	文字と発音(1)	アルファベット、母音、アクセント、有声子音と無声子音、子音の同化、硬子音と軟子音、分臨符としての ъ と b、特殊な子音結合の発音、正書法の規則。	浅岡宣彦（大阪市立文学部助教授）
2	文字と発音(2)	動詞を含まない文、疑問文、肯定文、否定文、否定の小詞 He の位置、イントネーション、接続詞 ц、а、но。	同上
3	第1課 簡単な文章	名詞の性（男性、女性、中性）、数（単数、複数）、格（主格、生格、与格、対格、造格、前置格）、人称代名詞、所有代名詞(1)	同上
4	第2課 名詞の性・数・格	動詞の不定形、不定形の用法、直接法現在(1)第一正則変化、(2)第一特殊変化、語結合(1)動詞の格支配、Где ? Куда? をもつ疑問文とそれに答える副詞。	同上
5	第3課 動詞の人称変化(1) 名詞の対格	直接法現在(3)第二変化、(4)歯音変化、唇音変化；命令法、動詞 хотеть、уметь、 rnosumo のあとの動詞の不定形、個数詞１～１０。	同上
6	第4課 動詞の人称変化(2) 名詞の前置格	形容詞の長語尾形、形容詞の定語的用法と述語的用法、疑問代名詞 Какой、чей、指示代名詞 Этот、тот、 順序数詞、所有代名詞(2)、語結合(2)性、数、格の一致。	同上
7	第5課 形容詞の長語尾形	形容詞の短語尾形、短語尾形の用法、短語尾形 Должен（ねばならない）、－о に終る副詞述語的副詞、無人称文(1)	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第6課 動詞の過去、命令法	動詞の過去時制、動詞の過去形、動詞 Sormo の過去と未来、場所を示す前置格、前置詞Bと Ha、時の表現(1)、月の表現（8月に）；思考、発言の内容を示す前置格、前置詞0；Где の構文。	浅岡宣彦
9	第7課 名詞の生格	名詞の硬変化、軟変化；男性、中性名詞硬変化、人称代名詞の格変化、接続詞uとHo、否定の小詞Ни。	同上
10	第8課 動詞の体	男性、中性名詞軟変化、疑問代名詞 Кто、Что の格変化、過去時制の述語と Kmo、Ymo の主語との一致、Кто、Что の構文、不定人称文。	同上
11	第9課 動詞の未来、－ся の動詞	属性を示す生格、数量生格、数詞と用いられる生格、否定生格、部分生格、所有を表わす生格、Нет、Не Было、Не Будет の表現時の表現(2)、行為の対象を示す対格、方向を示す対格、時の表現(3)、曜日、Kyga の構文。	同上
12	第10課 名詞の与格	女性名詞の硬変化と軟変化、個数詞11～100、iHSumo と Нравцтбс 、接続詞 Который の構文。	同上
13	第11課 名詞の造格	定動詞、不定動詞、－ 動詞、方向を示す表現、前置詞B、Ha＋対格、K＋与格（Куда?）場所を示す表現、前置詞B、Ha＋前置格、y＋生格（Где?）、逆方向を示す表現、前置詞из、от＋生路（Откуда?）	同上
14	第12課 運動の動詞	－ь に終る女性名詞、－M に終る中性名詞の格変化、間接補語を示す与格、年令を表わす構文、無人称文(2)と与格、述語としての造格、手段を表わす造格、共同行為を示す造格、Kak の構文。	同上
15	第13課 復習編・名詞の格変化	動詞の人称変化、名詞の格変化、簡単な読み物。	同上

＝ロシア語（後半）＝

〔主任講師：浅岡宣彦（大阪市立大学助教授）〕

全体のねらい

前半は文法事項の説明が煩雑にすぎた点に留意し、後半では文法事項を絞り、文章の読みを多くしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	第14課 名詞複数の格変化(1)	男性名詞の複数変化 女性名詞の複数変化 中性名詞の複数変化 数量を示す性格	浅岡宣彦 (大阪市立大学助教授)
17	第15課 名詞複数の格変化(2)・数詞(1)	-ьに終わる女性名詞 男性名詞 数詞と名詞との結合 集合数詞 個数詞(1)　個数詞(2)	同上
18	第16課 形容詞の格変化	疑問代名詞 какой 指示代名詞 этот，тот の格変化 個数詞と形容詞・名詞との結合	同上
19	第17課 形容詞的代名詞の格変化	再帰所有代名詞 свой 定代名詞 весь，сам，самый	同上
20	第18課 形容詞の短語尾形	男性単数形における母音の挿入 短語尾形の用法 рад，до жен（ねばならない）	同上
21	第19課 体の形成(続)ー接頭辞のある運動の動詞	特殊な接頭辞 по-，за- 接頭辞のある運動の動詞の主な用法 1人称、3人称の命令法	同上
22	第20課 形容詞の比較級・副詞の比較級	形容詞の比較級 副詞の比較級 比較級とともに用いられる副詞・副詞句 比較級を含む表現 普遍人称文	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
23	第 21 課 形容詞の最上級・副詞の最上級	形容詞の最上級 副詞の最上級 順序数詞 年月日の表現	浅岡宣彦
24	第 22 課 数詞(2) ― 個数詞の格変化	概数の表現 時間の表現 前置詞を用いる時の表現	同上
25	第 23 課 仮定法	条件の従属文 目的の従属文 譲歩の従属文 ロシア人の姓名と父称 年齢の表現	同上
26	第 24 課 否定代名詞・否定副詞　不定代名詞・不定副詞	疑問代名詞・疑問副詞	同上
27	第 25 課 関係代名詞・関係副詞	関係代名詞 кто, что, который, какой, чей 関係副詞　場所の従属文 時の従属文　原因の従属文 結果の従属文　様態の従属文 接続詞 что と чтобы の用法	同上
28	第 26 課 副動詞・形動詞(1)	副動詞の形成 副動詞の用法 形動詞(1) ― 能動形動詞（現在と過去） 形動詞の位置	同上
29	第 27 課 形動詞 (2)	被動形動詞（現在と過去） 被動形動詞短語尾形 形動詞をもつ名詞・形容詞 受動相	同上
30	第 28 課 話法	読み物	同上

＝中国語（入門編）＝

〔主任講師：頼　惟勤（お茶の水女子大学教授）
平松圭子（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

漢字は表意文字であるから、表音文字を利用しつつ前半では発音練習に重点をおき、かつやさしい文型を通して中国語のリズムを習得できるようにする。後半では動詞を中心とした慣用句型に初歩的な文法の説明を加える。全体を通じ、語順が大切なので、基本表現の文例をできるだけ多くして語順の習得をめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課　発音Ⅰ	はじめに、普通話（標準語）について 拼音字母（発音記号） 母音（その1、単母音） 声調 母音（その2、複合母音、鼻母音、特別母音）	頼　惟勤 （お茶の水女子大学教授） 平松圭子 （大東文化大学教授）
2	第2課　発音Ⅱ	子音 発音標記のまとめ 声調の変化	平松圭子 中国人講師 欧陽可強
3	第3課　請多帮忙 （どうぞよろしく）	人称代名詞 動詞〝是〟（主語＋是＋名詞） 疑問文①〝吗〟	同上
4	第4課 这本書很好 （この本はとてもよい）	形容詞述語文 造句助詞　〝的〟 疑問文②反復疑問文	同上
5	第5課 今天几月几号？ （今日は何月何日ですか）	数のいい方 年、月、日 疑問文③疑問詞のいろいろ 声調の変化④〝一〟	同上
6	第6課 我有两个中国朋友 （中国の友人が二人いる）	量詞（助数詞） 動詞と目的語の位置 動詞の否定①　〝不〟 声調の変化⑤〝心〟	同上
7	第7課 画得很象我 （わたしにそっくりに画けている）	程度補語造句助詞〝得〟 程度補語の否定と疑問文 目的語の前置 造句助詞〝地〟	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第８課 正在听音楽 （いま音楽を聞いている）	進行、持続の表現 〝正在〟 〝着〟 〝呢〟 疑問文④選択疑問 動詞の否定② 〝没〟	平松圭子 中国人講師 欧陽可強
9	第９課 看过中国电影 （中国の映画を見たことがある）	経験を表わす 〝过〟 完了を表わす 〝了〟 経験、完了表現の否定 語気助詞 〝了〟 動量詞	同上
10	第１０課 我能看中文報 （中国の新聞を読むことができる）	能願動詞 〝能〟 〝会〟 〝可以〟 〝要〟 〝应該〟 簡単方向補語 〝来〟〝去〟 方向補語と目的語の位置	同上
11	第１１課 什么时候看完了？ （いつ読み終りますか）	結果補語 結果補語を伴う動詞の否定 処置式 〝把〟	同上
12	第１２課 你一个人搬得动搬不动? （君一人で動かせますか）	可能補語 〝得〟 可能補語を伴う動詞の否定と疑問文 複合方向補語① 複合方向補語と目的語の位置	同上
13	第１３課 比以前好多了 （以前よりずっとよくなった）	比較表現① 〝比〟 比較表現② 〝象〟……—〝样〟 〝跟〟 —〝样〟 比較表現③ 〝有〟 介詞のはたらき	同上
14	第１４課 刚学了两个多月 (ちょうど二ケ月余り勉強したところだ)	時間補語 時間補語と目的語の位置 複合方向補語②	同上
15	第１５課 請朋友去吃飯 （友人を食事にさそう）	兼語式構文 使役表現 〝叫〟 〝让〟 〝使〟 受身表現 〝叫〟 〝让〟 〝被〟	同上

＝ 中 国 語（講読編） ＝

〔主任講師：頼　惟勤（お茶の水女子大学教授）
　　平松圭子（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

入門編では平易な話しことばを学習した。今回はそれに続いてやや程度の高い文章を読みながら慣用句型、文法を学び、複雑な構文を解読する。テキストの内容には、少年向けの易しい文章、比較的平易な筆調の随筆、論文調の文章、新聞記事など異る文体の文章を集めた。解読を通して中国語の特長について基本的な常識を学ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	変　戯　法（手品をつかう）	①　中国語の句読点について ②　副詞“再”“又”“还”の用法上のちがい	頼　惟勤（お茶の水女子大学教授） 平松圭子（大東文化大学教授） ゲスト　中国人講師 魏　鍾　祺
17	東嶺朝霞　(一) Dongling Zhaoxia （東嶺と朝霞）	桂林の麗しい朝景色にちなむ民話風の連還画（劇画）である。二回に分けて放送する。 文法上の主な説明事項 1.　ことばのはばについて。接続詞のはたらきもする“好”hao 2.　四字句と成語	平松圭子（放送大学助教授） 中国人講師 魏　鍾　祺
18	東嶺朝霞　(二) Dongling Zhaoxia （東嶺と朝霞）		同　上
19	我的伯父　(一) （私の伯父さん）	魯迅の姪が少女時代に接した伯父魯迅の思い出の記である。わかりやすい文体で書かれ、伯父魯迅に対するやさしい敬愛の情にあふれている。一部分を四回に分けて放送する。 文法上の主な説明事項 1.　離合動詞　　2.　疑問詞の特殊な用法 3.　反語の表現① 4.　慣用文型　①接続詞“而”　②介詞“把”	同　上
20	我的伯父　(二) （私の伯父さん）		同　上
21	我的伯父　(三) （私の伯父さん）		同　上
22	我的伯父　(四) （私の伯父さん）		同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
23	養　　花（一） （鉢植えの楽しみ）	北京に生れ育った作家、老舎は草花が好きで、たくさん花を鉢植えし、庭に並べて手入れするのを楽しみにしていた。その楽しさを書いた随筆である。二回に分けて放送する。	平松圭子 中国人講師 魏　鍾　祺
24	養　　花（二） （鉢植えの楽しみ）	文法上の主な説明事項。 1. 反語の表現② 2. 慣用文型 ①“不是～、就是～” ②“既～、又～”	同　上
25	從札幌到長崎(一) 求知之行 (札幌から長崎まで 一新知識を求めて)	胡耀邦総書記の日本訪問記事のうち、北海道を訪れた記事と神戸、長崎に出かけた時の活動の模様を伝える記事である。光明日報（１９８３年１２月１日）に掲載された記事の一節である。	同　上
26	從札幌到長崎(二) 求知之行 (札幌から長崎まで 一新知識を求めて)		同　上
27	“朝潮朝落”和 “長漲長消”（一） （一語多義と多音多義）	「一語多義」一つの単語が複数の意味をもっている。「多義多音」同一の漢字でありながら意味によって発音が異る。これは中国語の特長でもある。また軽読、重読によって生ずる意味の違いなども軽視することはできない。これらの問題をテーマにした論文調の随筆である。四回に分けて放送する。 中国語の単語の特長について、常識を学ぶ。	同　上
28	“朝潮朝落”和 “長漲長消”（二） （一語多義と多音多義）		同　上
29	“朝潮朝落”和 “長漲長消”（三） （一語多義と多音多義）		同　上
30	“朝潮朝落”和 “長漲長消”（四） （一語多義と多音多義）		同　上

＝ スペイン語 ＝

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本授業は初級者に向けであるので、まずはスペイン語に慣れるために平易な文を用いて、頻度の高い単語と基礎文法の学習をすることを主眼とする。そのため、できる限りの練習を行うが、その中心となるのが動詞の活用で、これをマスターすることがスペイン語初級学習の第一の主要課題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	発音（その１）	アルファベット；母音の発音練習、子音＋母音の発音練習、子音の単語による発音練習；あいさつ等のきまり文句（その１）	山口羔正（放送大学助教授）
2	発音（その２）	子音の発音練習（続き）、２重母音・３重母音の発音練習、２重子音の発音練習、注意すべきつづり字、音節の切り方、アクセント；あいさつ等のきまり文句（その２）	同上
3	名詞 冠詞 形容詞	男性名詞・女性名詞、単数形・複数形；定冠詞・不定冠詞（性、数による変化）；品質形容詞（性、数の変化）	同上
4	固有名詞 人称代名詞の主格 直説法現在－ 動詞Ser 前置詞De	人名、地名、国名などの固有名詞；人称代名詞の主格：主格の人称・数による動詞 ser の直説法現在活用変化、ser の用法；肯定文・否定文の練習、疑問文と応答練習；前置詞 de を用いる表現。	同上
5	直説法現在－ Estar 及び 規則活用－AR動詞 場所の副詞	estar の直説法現在の活用、場所・状態を表わす用法、応答練習；場所の副詞、前置詞 en 及び場所を示す前置詞句；－ＡＲ動詞の直説法現在規則活用、主な動詞について基本的な文による練習；直接・関接補語を示す前置詞 a。	同上
6	直説法現在－ 規則活用－ER動詞 及び－IR動詞 様態・量の副詞 基数（その１） 時間	－ＥＲ動詞及び－ＩＲ動詞の直説法現在規則活用、主な動詞について基本的な文による練習；様態・量の副詞；基数１から30まで；時間の表わし方。	同上
7	直説法現在－ Haberの特殊形Hay Tener の活用 所有形容詞 指示語	haber の特別な形 hay の用法・練習；不規則動詞 tener の直接法現在の活用及び用法・練習；所有形容詞、人称代名詞の所有格、指示代名詞、指示形容詞。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	直説法現在 - 不規則活用動詞（その１） 接続詞（その１） 時の副詞	直説法現在１人称単数の活用形が－go で終る動詞及び dar 、ir、ver の活用、基本的な文による練習；接続詞 y 、o、pero、sino 、porque ；時の副詞 ahora、después、hoy、mañana 、etc.	山口羔正
9	直説法現在 - 不規則活用動詞（その２） 人称代名詞対格 形容詞の名詞化	直説法現在で語根の母音が ue、ie、i となる動詞の活用、基本的な文による練習；人称代名詞の対格（直接補語の形）；冠詞＋形容詞による名詞化。	同　上
10	直説法現在 - 不規則活用動詞（その３） 人称代名詞与格 中性人称代名詞	直説法現在で１人称単数の活用形が－zco で終る動詞、saber 及び不定詞の語尾が－uir、－iar、－uar である動詞の活用、基本的な文による練習；人称代名詞の与格（関接補語の形）；人称代名詞の対格と与格の併用；中性人称代名詞の主な用法。	同　上
11	人称代名詞与格・対格（続き） 主な前置詞 人称代名詞前置詞格 基　数（その２）	人称代名詞与格・対格と名詞の直接・関接補語の重複表現；主要前置詞の主な用法；人称代名詞の前置詞格（前置詞の後に来る形）；３０以上の基数。	同　上
12	不定詞（その１） －mente のつく副詞	不定詞の用法：動詞の補語及び動詞句で用いる場合、ser の構文に用いる場合、不定詞につく人称代名詞の対格・与格；形容詞＋－mente により作る副詞。	同　上
13	Gustar 及び類似の動詞 序　数 無人称文	gustar、parecer、faltar、doler、etc. の用法、基本的な文による練習；序数の用法；無人称文：自然現象を表わす動詞、天候の表現、３人称複数の活用形による表現。	同　上
14	命　令（その１） 感　嘆　文	２人称（tú、vosotros）、３人称（usted、ustedes）に対する肯定及び否定命令の動詞の活用形、人称代名詞対格・与格と共に用いる場合；qué と cómo を用いる感嘆の表現。	同　上
15	再帰動詞（その１）	再帰代名詞，再帰代名詞の対格的用法、与格的用法、強意・特別のニュアンスを加える用法、再帰動詞としてのみ用いられる動詞。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	再帰動詞（その２）	相互的用法、無人称的用法、受身的用法；復習 ser･estar、estar･haber･tener	山口羔正
17	命　令（その２） 形容詞及び副詞の比較（その１）	１人称複数 nosotros への命令、再帰動詞の命令；形容詞の比較級及び最上級、特別な形の比較級、絶対最上級；優等比較、劣等比較、同等比較；副詞の比較	同　上
18	直説法完了過去（その１） 不定語 否定語	直説法完了過去の規則活用、主な動詞の基本的な文による練習；不定語のうち特に否定・肯定で対応する不定形容詞・不定代名詞及び否定副詞等の用法。	同　上
19	直説法完了過去（その２） 疑問詞	直説法完了過去の不規則活用動詞、主な動詞の基本的な文による練習；疑問詞のまとめ（ qúe、quién、a quién、de quién、cuándo、dónde、adonde、de donde、cuanto、como、cual ）	同　上
20	直説法不完了過去 接続詞（その２）	直説法不完了過去の活用（規則・不規則活用）及び用法；完了過去と不完了過去；接続詞（ porque、como、ya que、aunque、cuando 等）で結ばれる文。	同　上
21	過去分詞 直説法現在完了 受動態	過去分詞の規則・不規則形、過去分詞の用法；直説法現在完了（ haber の現在形＋過去分詞）、その用法及び主な動詞による練習；動詞 ser の受動態。	同　上
22	直説法未来 不定詞（その２） 接続詞 Que	直説法未来の規則・不規則活用形、主な動詞による練習；前置詞等につながる不定詞の用法、不定詞の完了形；接続詞 que による名詞節の用法（主語、補語の場合）	同　上
23	直説法過去完了 関係代名詞 関係副詞	直説法過去完了の形及び用法、主な動詞・基本的文による練習；主に que による関係代名詞の用法（その他、 quien、cuyo など）、行為者を表わす冠詞＋ que の表現；関係副詞 donde 等の用法。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	直説法可能 中性冠詞 lo 現在分詞	直説法可能の規則・不規則形及び主な動詞と基的な文による練習；中性冠詞 lo＋形容詞（句）、lo que …の用法；現在分詞の規則・不規則形及び完了形、現在分詞と共に用いられる人称代名詞対格・与格、現在分詞の用法。	山口羔正
25	直説法未来完了 直説法可能完了 形容詞・副詞の 比較（その２） 縮少辞・増大辞	直説法未来完了及び直説法可能完了の形と用法、主な動詞と基本的な文による練習；関係代名詞 que を用いる比較の表現；名詞・形容詞・副詞等につける縮少辞と増大辞。	同　上
26	接続法現在 （その１） 知覚・放任の動詞	接続法現在の規則・不規則活用、名詞従属節での用法：従属節が主動詞（形容詞）の補語節の場合及び主文の主語節の場合、従属動詞を接続法の活用にする主な動詞（述部）と基本的な文による練習；不定詞・分詞を伴う知覚・放任動詞の表現。	同　上
27	接続法現在 （その２） 命　令（その３）	接続法現在の副詞従属節での用法、関係代名詞・関係副詞の形容詞節での用法、独立文での用法；que＋接続法現在の構文による命令。	同　上
28	接続法過去 直接話法・ 関接話法	接続法過去の活用、用法及び練習；decir を用いる直接話法・関接話法、その時制・人称等の一致の練習。	同　上
29	接続法現在完了 条件文（その１） 直接疑問・関接疑問 不定詞（その３）	接続法現在完了の形、用法及び練習；si を用いる現実的条件文；preguntar を用いる直接疑問と関接疑問の表現；疑問詞・si の後に不定詞を用いる表現。	同　上
30	接続法過去完了 Como si の表現 条件文（その２） 直説法と接続法	接続法過去完了の形、用法及び練習；接続法過去・過去完了を用いる como si の表現；現実の逆を仮定する非現実的条件文；似た構文で用いられる直説法と接続法。	同　上

＝ 保 健 体 育 ＝

― 新しい人体論 ―

主任講師：平沢弼一郎（放送大学教授）

全体のねらい

人は２本の足のうらで立つ。そこで、その足のうらに関与するさまざまな因子から、すべての動作の基本である直立能力を定量的に評価する。これをスタシオロジー（身体静止学）という。本講義はこのスタシオロジーの観点に立って「人」と「からだ」の関わりを解説する。なお毎回自己診断と調整のための基礎体操Medico physical Therapyを紹介する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	見る人聴く人別の人	美しい人を見たり、美しい音楽を聞くと心のときめきを感ずる。ここでは知覚の内省的把握が、健康の自己管理の基礎条件であることを中心課題とし、視覚と聴覚の分析能力の比較から、「見る人」から「聴く人」への転換について考える。	平沢弼一郎（放送大学教授）
2	息 こ ら え	「息こらえ」の時間の長短は、その人の、その時の身体的および精神的能力の総和である。これは心身の持久力を知るための最も簡便な方法である。運動負荷や姿勢変化にともなう実験結果と、長期間継続して測定した資料に基づいて解説する。	同 上
3	偉 人 と 健 康	健全な精神ははたして健全な身体にのみ宿り、健全な身体には必ず健全な精神が宿るのだろうか。ユベナリスの言葉を出発点として、いわゆる偉人と呼ばれた２６数人の体格や健康について考察しながら心身の「健康」・「不健康」を考える。	同 上
4	か ら だ の 形	人のからだの形はなぜこのようになったのだろうか。ここではJ・Sobottaの体表の地理図、A.Vesaliusの解剖図によって骨格の仕組みを学習する。また、カバラの思想によるセフィーロスのからだの部分の意味づけについて言及する。	同 上
5	膝 小 僧	「膝小僧」とは膝関節のこと。この関節を中心に、脚の筋肉の起始部と停止部、神経支配とそのはたらきについて、実際に解剖をしている画面によって学習を展開してゆく。「膝小僧」は前方には曲がるが後方には曲がらないのはなぜか。	同 上
6	直立人の歩む道	ヒトはいつどのようなきっかけで、またどのような道のりをたどって「直立人」になったのだろうか。ヒト化hominizationにおける「直立人」への進化の過程を系統発生学的見地から考察する。我々は直立姿勢に完全に適応しきっているのか。	同 上
7	新 生 児 の 反 抗	人は出生後約１０カ月で誰からも手ほどきをうけないでひとりで立つことができる。その機序（要因と過程）の解明はいまだに明らかではない。ここでは出生直後の新生児の姿勢制御と神経発達との関連について解説をする。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	か　ら　だ　ち	「からだ」の語源は、人が大地に両足を踏まえて立つさまを表わす「軀立ち」（からだち）というやまとことばに由来する。「からだ」に関連する文字や言葉から、「からだ」の価値観の変遷について解説する。	平　沢　彌一郎
9	ス タ シ オ ロ ジ ー	アリストテレスの「動物運動論」から、からだの「静止」（Steady settingの機序）について解説する。スタシオロジーの原論、評価の方法、装置、応用面（平衡神経科学・整形外科学・神経内科学・神経眼科）の現況について述べる。	同　上
10	日本人の直立能力	両足をきちんとそろえて立つロンベルグの姿勢を２０秒間とらせた時の重心図（重心動揺面積）から、日本人の直立能力について、年令差、性差、環境差（地理的・社会的）、病経別、民族差を解説する。	同　上
11	左　足　と　右　足	左足と右足のあいだには、機能的な一側優位性（ラテラリゼーション）が存在する。左足は前進の方向性と全身の安定の支持作用、右足はスピードのコントロールと器用性の役割分担がある。また、左足は遺伝因子、右足は環境因子による。	同　上
12	はだしとすあし	近ごろ全国各地で「はだし教育」がはじめられている。「はだし」と「すあし」の相異から、ここでは「足のうらをはかる」目的、方法、解析法、評価法について解説する。また、「足とはきもの」の問題についてふれてゆく。	同　上
13	立つことと歩くこと	人は立つことができてはじめて歩くことができる。人は片足歩行である。正常な歩行はその重心軌跡がゆるやかなサインカーブを描く。脳性マヒ患者の歩容から、「立つこと」と「歩くこと」の関連を解説する。	同　上
14	ふんぞりかえった日本人	昭和５２年から日本各地の遺跡から沢山の古代人の足跡が発見された。この足跡から日本人の立ち構え（身構えと気構え）を考察したところ、平安時代あたりから変ったことが推定される。縄文晩期から年代を追ってその変化を解説する。	同　上
15	現　代　人　の　足	この２０年くらいの間に、現代人の踵が丸くて大きくなっている。これは重心位置の後退現象を物語る。もしこのことが直立能力の衰退であると考えることができるとすれば、ことは重大である。人類の存亡の危機について論説を試みる。	同　上

＝ 生　　活　　史 ＝

〔主任講師：中鉢正美（元慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

現代の生活史をそのミクロとマクロの視点から明らかにして生活をめぐる諸問題が直面している転換点を討論する為の素材を提供したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活史、生活構造論、生活学	生活史は個人の自伝及び個人誌（狭義）と、手紙や日記・写真・作文・文芸作品等（広義）を扱う。生活構造論は特定の社会階級（近代的労働者階級）の発達と変動を扱う。生活学は日本の急速な近代化過程に於ける主要な生活問題の生成とその永定化への動向を検討する。	中鉢正美（元慶応義塾大学教授）
2	マクロとミクロの生活史	生活学は日本の近代化過程に於ける生活の発展及び安定化に就いての学際的研究であるが生活史は特定の個人を典型とした生活近代化の追跡である。両者はそれぞれ密接な関わり合いをもってその問題点が明らかにされなければならない。	同　上
3	共同体の生活史	生活史の原点は先づ家族、或いは職場といった人々が直接関わり合う共同体的な集団にある。とりわけ夫婦や親子がその生活を共有するために、一定の対話や相互行動を繰り返す過程が重要視されなければならない。	同　上
4	文書記録の生活史	共同体は生活の直接的経験を相互に伝達し合って生活を続けるが、これを第三者に伝達し合う為には文書による記録の必要がおこる。関接的な伝達手段による生活史は近代社会に於ける生活史研究の基本型を構成するものといえる。	同　上
5	都市の生活史	共同体の生活史が村落を基礎とするのに対して、都市は相対的に新しい生活様式を構成するものである。この都市の生活様式に就いては川添登著「裏側から見た都市～生活史的に～」（NHKブックス）をあげることができる。	同　上
6	産業化における生活史	十九世紀産業都市の発達によって近代社会は全く新しい様相を呈するに至った。産業都市は都市生活のみならず生活一般についてもこれに対する新しい対応をせまることとなった。この複雑で多様な問題に就いてなるべく要約して述べることにしたい。	副田義也 同　上
7	諸文化の生活史	二十世紀の開始と第一次世界大戦とによって近代社会は新しい現代社会への様相を呈し、第二次大戦以降に於ては更に、経済成長の時代に直面することとなった。これに対する生活の側に於ては、一方に現代社会の爆発的に拡大する生活の諸手段を受け容れながら、生活それ自体の多様な文化的諸様式を創造して行く必要性が痛感されるようになった。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	意識と無意識のかかわり	人間は無意識的に繰り返される日常的生活の中で一定の生活構造を形造るがやがて産業化による社会的変化に直面して新しい文化の諸関係を創造するように模索を始める。この無意識的な日常生活と意識的な非日常的模索との関わりを精神分析学的諸研究を手がかりとして解明してゆきたい。	中鉢正美
9	衣食住の生活史	近代社会に於ける日常生活は産業社会によって供給される膨大な消費財の集積を処理することによってその本源的な生産要素である労働力を再生産するのであるが、この再生産を行う主体は紛れもない個々の人間である。この人間の近代的生活がどのように発生し展開されて行ったかに就いて考えたい。	同　上
10	医療・教育・住居・福祉の社会化	現代社会の発達につれて生活の社会的共同消費の部分がとりわけ第二次大戦以降に於て発達をし、今や国民総生産の半ばに達しようとしている。これは又生活の居住空間に密着して拡大し、生活空間に於けるマクロとミクロの接点となっていることにも注意したい。	同　上
11	日本の生活史(1)	幕末から明治初年に於ける日本の生活史は、食糧の生産がその生活水準の略々半分に達していた。第一次大戦による日本の近代化と共にこの水準は約三割に変化した後、第二次大戦と共に再び嘗ての水準に迄転落した過程を概説する。	同　上
12	日本の生活史（1―続き）	第二次大戦後略々十年の間に生活水準は戦前の高さに回復し、その後二十年間のいわゆる戦後日本経済の高度生長と共に現在のヨーロッパ並みの高さに迄回復し食糧生産はその二割内外にまで低減したことを概説する。	同　上
13	日本の生活史(2)	幕末から明治初期の日本の人口は三千七百万人前後であったが、千九百三十年代には八千万人台を超え第二次大戦の敗戦によって七千二百万人に迄縮少をした。これは第二次大戦後のベビーブーム以後、人口のピラミッドが拡大から縮少に転換する迄を一つの時期として説明する。	同　上
14	日本の生活史（2―続き）	ベビーブーム以後の年齢別自然増加率は拡大から縮少に転化するが、人口の高齢化による人口ピラミッドの高さそのものの上昇によって人口総数は現在の一億二千万人に達して、やがてその絶対数が減少の過程に入ろうとしている状態を説明する。	同　上
15	日本に於ける生活の文化的特質	日本の生活水準が上昇し人口の増加が頂点に達した現状に於て、現代生活の再構成がせまられている事情を参加者を交えて討論したい。	同　上

＝ 家 庭 の 本 質 ＝

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会の最小単位集団である家族、そして、その周縁概念である「家庭」を、歴史的、同時的にとらえ、きわめて今日的な課題としての家族、家庭の諸問題を考察する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	家族の発生と進化(1)	この2回の講義で、生物進化のなかでの家族の発生と進化を、とりわけ霊長類の行動をつうじて検討し、生物社会のなかでの人間の「家族」の特性を位置づける。	伊谷純一郎（京都大学教授）
2	家族の発生と進化(2)		同上
3	家族の構成と構造 家族とはなにか(1)	人類の諸文化のなかで、「家族」の観念はきわめて多様な意味をもち、また、家族構造じたいも、相対的な性質のものである。この3回の講義をつうじて、さまざまな文化のなかでの家族の類型、その社会的機能などについての基礎概念を学習する	中根千枝（東京大学教授）
4	家族内の人間関係 家族とはなにか(2)		同上
5	配偶者と親子関係 家族とはなにか(3)		同上
6	家から家庭へ 家族から家庭へ(1)	主として日本の近代史のなかで「家」をめぐる観念の変化に着目し、イエ→家族→家庭という「家」の進化ないし変貌を考察し、現代「家庭」の意味と可能性を位置づける。	米山俊直（京都大学教授）
7	家族の析出 家族から家庭へ(2)		同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭の未来 家族から家庭へ(3)	主として日本の近代史のなかで「家」をめぐる観念の変化に着目し、イエ→家族→家庭という「家」の進化ないし変貌を考察し、現代「家庭」の意味と可能性を位置づける。	米山俊直
9	近代化の秩序モデル 日本の近代化と家庭(1)	家族の中核にある「結婚」の問題、そして、そこから派生する結婚観、家族観を日本の近代のなかでさぐり、家族をめぐる思想史を学習する。	神島二郎 （立教大学教授）
10	家族主義の由来 日本の近代化と家庭(2)		同上
11	家庭と婦人教育 家庭の誕生 (1)	「家庭」ということばは、英語のhomeを福沢諭吉が翻訳したものといわれている。ここでは明治以降の婦人雑誌や生活運動をつうじて「家庭」が誕生し機能しはじめた経緯と現状をとらえる。	加藤秀俊 （放送大学教授）
12	家庭内の緊張関係 家庭の誕生 (2)		同上
13	近代日本の「家」と文学(1)	近代文学は、ある意味で、イエをめぐる個人の心理的葛藤の歴史であったといえる。この講義では、近代日本の文学作品のなかに「家」や「家庭」がどのようにえがかれてきたかを探求する。	多田道太郎 （京都大学教授）
14	近代日本の「家」と文学(2)		同上
15	家族の将来	都市化の進行、人口移動の加速化、さらに人口の高齢化などによって家庭は変貌しつつある。これまでの14週にわたる講義をふまえながら、家族と家庭の将来を展望する。	加藤秀俊

＝ 生 活 の 社 会 学 ＝

〔主任講師：副田義也（筑波大学教授）〕

全体のねらい

Ⅰ.生活構造論は、生命の日日の創造として、人間の生活の本質をとらえ、その人間らしいありかたを考える。Ⅱ.生活問題論は、生活の人間らしさが失われる問題状況を学問的にとらえる工夫をする。Ⅲ.生活保障論は、生活の人間らしさを維持・回復する政策・制度・運動・実践を論じて、福祉国家・福祉社会のありかたまでを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活構造	生活の本質を人間の生命の日日の生産過程として把握する。また、それは、労働者のばあい、労働力の生産→労働力の販売→労働力の消費→生活手段などの生産→生活手段などの購買→生活手段などの消費→…という循環となるのを示す。	副田武也（筑波大学教授）
2	生活水準	生活水準は賃金水準、貨幣消費水準、物量消費水準に区分される。第2のものに注目して、最低生活費研究の現状を結介し、生活費目の分類を論じる。また、生活機会、生活資源などの新しい概念を紹介する。	同上
3	生活関係	夫婦関係は具体的には分業関係であり、たがいの労働力、性的成熟、愛によって成立する。親子関係は具体的には扶養関係であり、子の無力性、愛、その他によって成立する。あわせて、世帯の概念にふれる。	同上
4	生活時間	生活構造の時間的形式としての生活時間を、生活周期、家族周期、日常の生活時間などで論じる。日常の生活時間では、生活主体の性別、年齢、職業などによる構成の変化にとくに力点をおきたい。	同上
5	生活空間	生活構造の空間的形式としての生活空間を、活動空間、資源空間、意識空間などで論じる。資源空間からシビル・ミニマム論をみちびき、意識空間からコミュニティ論、地方自治論をみちびきたい。	同上
6	生活問題	社会問題、生活問題の概念規定をする。生活問題とは、人びの生活のうち、社会が解決、予防が必要な問題として指定するものである。その指定は一定の価値意識にもとづいておこなわれる。あわせて、生活問題の担い手の類型を論じる。	同上
7	諸範疇の関係	生活問題の政策的範疇、実践的範疇、運動的範疇、科学的範疇を規定したうえで、それらの関係を論じる。政策的範疇は、抽象的・統計的であるが、実践的範疇は具体的・個別的である。また、運動的範疇、科学的範疇の限界にもふれる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	貧困問題	貧困問題の政策、運動、科学の三範疇の関係を分析して、科学的範疇のうち、欧米の相対的剝奪の概念や日本の不安定階層の理論多少くわしく述べる。貧困の多元的把握をめざしながら、それを無限定に拡大してゆく一部の動向は批判する。	副田武也
9	非貨幣的問題	保育問題、老人問題などを例にとり、非貨幣的問題の政策、運動、科学の三範疇の関係を分析する。この問題はニーズと扶養の函数であることを示し、家族形態、婦人労働などとの関連をあきらかにする。	同上
10	諸類型と原因	生活問題を階級問題、階層問題、地域問題、家族問題、個人の問題などとして把握する見方を紹介し、それぞれのばあいで、成立過程を理解する枠組が異なることを指摘する。	同上
11	生活保障	生活保障の体系を紹介し、福祉国家の条件のひとつに位置づける。生活保障と英国でいう社会政策、米国でいう社会保障の異同にもふれる。福祉国家への批判、生活の自助責任などをも論じる。	同上
12	所得保障	社会保険、公的扶助、家族手当、資金貸付、損害補償などについて、原理的性格をあきらかにし、前の三者について、日本での現状を紹介し、問題点、改良の方向・試案を提示する。	同上
13	医療保障	医療、の領域を概観し、その原理的性格、日本での現状を紹介し、問題点、改良の方向・試案などを論じる。	同上
14	サービス保障	児童福祉、老人福祉、身体障害者福祉、精神薄弱者福祉、母子福祉の五領域で原理的性格をあきらかにし、コミュニティ・ケア・専門的処遇などに焦点をあわせつつ、現状を分析する。	同上
15	生活保障運動	生活保障の政策、実践の向上を要求・期待する運動、その実践に参加する運動を論じる。それらが、生活問題、生活保障について学習する運動＝教育運動であり、また、研究する運動＝科学運動である可能性を追求したい。	同上

＝衣　　服　　論＝

〔主任講師：谷田閲次（お茶の水女子大学名誉教授）
徳井淑子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

日本、西洋の服飾の歴史の中から具体的な事象をとりあげて服飾表現の諸相をみる。前半で表現の担い手である形態・色彩・文様の問題を扱い、後半で服飾の美感をとりあげる。実物資料、絵画・彫刻等美術資料、服飾についての記録、考証等の文献、文学作品の資料を引用しながら、服飾研究の一つのあり方を示す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	形態と表現	衣服の形態について懸衣、寛衣、窄衣の類型を概観し、形態における表現の場としての衣褶、対比、面および表面装飾の問題を考える。	谷田閲次（お茶の水女子大学名誉教授）
2	中世西欧の社会と服飾表現 (1) －騎士と宮廷生活－	12・13世紀のフランスにおける服飾を、その主人公たる騎士を律した封建制度と騎士制度との関係の中でとらえる。	徳井淑子（放送大学助教授）
3	中世西欧の社会と服飾表現 (2) －衣服のヒエラルキー－	中世フランスでは、社会階層の差異は自ずから服飾の差異となってあらわれた。服飾のヒエラルキーを考える。	同上
4	中世西欧の社会と服飾表現 (3) －紋章と衣服－	中世末期、紋章は貴族の宮廷生活を飾ったばかりでなく、都市に誕生し、都市を象徴するそろいの衣服が現われた。紋章を表わした衣服をとりあげる。	同上
5	色彩の寓意と象徴	服飾における色彩は単純な感覚の問題に止まらず、宗教上の意味を寓したり、服飾制度の主な要素となるなどし、更には寓意の域を超えて気分象徴を成す。	谷田閲次
6	中世西欧の色彩の象徴	12～15世紀のフランスにおいて世俗服飾に現われた色彩の流行をとりあげ、それを支えた色彩感情を明らかにする。	徳井淑子
7	文様の意想	文様は構図・取材・意想を三つの要素とする構造を持つが、文様の生命はその意想にある。ここでは意想（意味統一）に重点を置いて解明したい。	谷田閲次

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近世日本の 服飾文様　(1) －小袖文様を読む－	江戸時代の服飾文様の中から特に見る人に意味を読み解かせる例をとりあげ、それらが当時のひとびとの生活にどのように関わっていたかについてのべる。	小池三枝 （お茶の水女子 大学助教授）
9	近世日本の 服飾文様　(2) －歌舞伎文様の発生・ 展開－	近世後期の服飾には歌舞伎との関連が見られる。その具体例としての文様や色彩をとりあげ、浮世絵や草双紙を見ながら流行を支えたものは何かを考える。	同　上
10	流　行	流行の構造をその歴史のいくこまかに触れながら明らかにし、その意義を論じる。またモード（時世粧）を伝統と新風の観点でとらえ論じる。	谷田閲次
11	「だ　て」	わが国近世の好尚の中で「だて」は中世以来の「ばさら」を受けて町人社会の中に浸透し多くの変容をも示した。その源流と変化の諸相をたどる。	同　上
12	「い　き」	「だて」とともに「いき」好みは近世以来、独自の美意識を展開する。その成立と意識の構造について、服飾を中心としながら周辺の考察を含めて論じたい。	同　上
13	「ダンディスム」	18世紀末イギリス宮廷に生まれた「ダンディ」の風俗は、19世紀のフランス市民社会で「ダンディスム」の美意識を確立した。フランスにおけるその展開を追う。	徳井淑子
14	「ハイカラ」	明治30年代から使われはじめた「ハイカラ」の語を中心に、当時の新聞記事や小説等を手がかりにして服飾における欧風化の様相を考える。	小池三枝
15	服飾と人間	服飾の主人公は当然のことながら人間であり、服飾を理解することは人間を理解することである。これまでの講義を振り返って人間理解の途としての探究を確かめたい。	谷田閲次

＝ 食 生 活 論 ＝

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）
　　鈴木継美（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代はわが国では飽食の時代といわれるが、世界には飢餓地域も存在する。人間がたどってきた食べる事を歴史的な視点から、また文化の発展の過程から追究してみたい。狩猟民、牧畜民、農耕民の食事から現代の食事に至る変化を考え、食の根源に存在する嗜好の心理について触れる。また近年におけるわが国の食生活に及ぼしている要因のなかから、都市化の問題と家族生活の問題をとりあげ、食の近代化とは何かを考えてみたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	食 の 文 化	人類は生存するために、食物を求めて数百万年ものあいだ努力してきた。その食にかかわる営みである「食の文化」について概観する。	宮崎基嘉（放送大学教授） 鈴木継美（東京大学教授）
2	人間の食事とサルの食事	食物を摂取するという活動は、根本的には飢えと渇きを癒すためのものである。その摂食行動の様式について、まずサルの食事に焦点をあて、次いでヒトへの進化の過程に言及する。	鈴木継美
3	採集・狩猟民の食事	採集・狩猟による食物獲得は、ホモ・エレクトウスの段階にまでさかのぼることができる。現存の数少ない採集・狩猟民の食生活を観察し、その実態を探る。	同上
4	牧畜民の食事	牧畜民とは、放牧家畜を飼育して生計をたてている人々のことをいう。彼らの食生活は当然、畜産物を中心としたものとなるが、アフリカのレンディーレ族の事例をみながら検討する。	同上
5	農耕民の食事・1	今からおよそ1万年前に発生した農耕は、急速に世界各地に広がり、さまざまに進行していった。農耕民の食物・食事の原型を知るために、パプア低地・ギデラ族を考察する。	同上
6	農耕民の食事・2	世界中に広がる農耕民のなかで、穀物を主産物とする人々に焦点をあて、穀物依存型の食生活の実態と問題点について考察する。	同上
7	世界の食事	大航海時代直前の世界は、主作物によって色分けすることができるが、国際交流の盛んな現代において、それがどのように変化してきたかを探る。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の食事文化	古代から現代に至るまで、日本の食事文化はどのような変遷をたどってきたのだろうか。それらをふまえた上で、今後の日本人の食生活における課題を検討する。	宮崎基嘉
9	嗜好の心理	味覚や嗜好は先天的に決められるのではなく、後天的なもの、環境・生活等により変化し、形成されていくものである。嗜好に関する民族的な伝統と変化について解明する。	祖父江孝男
10	米食の文化	稲の発生と日本への伝播・普及の歴史をたどり現代日本の米食文化に焦点をあて、その実態と問題点について考察を加える。	宮崎基嘉
11	豆食の文化	豆類は農耕の初期において、すでに世界中に広がっていった。豆はどのように食べられてきたのだろうか。豆食文化の起源と発展の経緯を探る。	同上
12	魚食、肉食の文化	魚食か、それとも肉食か。貯蔵技術や輸送手段が未発達であった時代においては、風土条件がそれを規定した。日本の場合を中心に、魚食、肉食文化の足跡をたどる。	同上
13	都市化と食生活	食生活の変化の度合いは地域により異なるが、その重要な要因は都市化にある。日本人の食生活パターンに及ぼす都市化の影響を考察し、今後の課題を検討する。	内野澄子
14	家族と食生活	家族がそろって食事をすることの重要性について、さまざまな角度から検討を加え、家族と食生活とのかかわりあいを考える。	足立己幸
15	食の近代化	高度成長時代の昭和３５年以降、日本人の食生活は著しい変化をみせてきた。現代日本人の食生活を見直し、食の近代化とは何かを考える課題を提供する。	宮崎基嘉

＝　住　　居　　Ⅰ　＝

―　住　　生　　活　―

主任講師：清家　清（東京工業大学名誉教授）
　　：本間博文（放送大学助教授）

全体のねらい

住居1では住生活の問題を中心に講義する。住生活は家族生活の基本であるが、異なった自然環境や社会環境のもとで住生活がどのように営まれているか、様々な実例を紹介し、その本質について考える。ついで、我国における住生活の変遷を考察し、その特徴を明らかにする。あわせて、現代の住生活上の問題点を検討し、将来の課題と展望について考える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住居学のめざすもの	住居学の授業を開講するにあたって、住居学の目的、内容、範囲について建築学との違い、他の生活諸科学との関連について概説し、合せて、住居Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの夫々の講義計画について述べる。	清家　清（東京工業大学名誉教授） 東　修三（京都府立大学教授） 本間博文（放送大学助教授）
2	風土と住居－1 ＜乾燥地の住まい＞	日本とは異なった社会環境や自然環境において、住居がどのような材料で構成され、どのような構法や形態を取っているか、生活と関連づけて分析し住居とは何かを考える。主に乾燥地帯の住居について検討する。	八木幸二（東京工業大学助手）
3	風土と住居－2 ＜寒冷地の住まい＞	第2回の講義に引き続いて、主に湿潤地帯の住居について考察を行い、風土と住居が如何に密接なかかわり合いを持っているかを考え、現在の我々の住居のあり方を見直してみる。	同　上
4	風土と住居－3 ＜湿潤地の住まい＞	中国黄河流域に点在する穴居住居をケーススタディとして取り上げ、住居形態、住環境、生活様式を様々な角度から分析し、住居が気候風土といかに密接な関係を持って造られてきたかを学ぶ。	同　上
5	住まいの歴史－1 ＜竪穴住居から寝殿造まで＞	日本人の住生活の歴史を4回にわたって講義する。第1回は弥生時代の竪穴式住居における住生活のようすを概観し、一方、奈良時代、平安時代の貴族と庶民の住生活の様子を当時の遺構や文献を元に対比させながら探る。	本間博文
6	住まいの歴史－2 ＜主殿造から書院造へ＞	書院造りや数寄屋造りといったいわゆる「日本的な住い」の原型は鎌倉時代から室町時代にかけて日本人の住居に起こり江戸時代に完成する。こういった住居形式がどのような経緯を経て我々の生活の中に定着していくのか　主に支配階級の住宅を中心にその変遷を考察する。	同　上
7	住まいの歴史－3 ＜中世・近世の庶民住宅＞	中世・近世における庶民生活の歴史は、適切な資料が少ないために良く分っていない。しかし、庶民の住生活を知ることは、現代における我々の住まいのあり方を理解する上で大切である。当時の遺構や絵巻物を手がかりに、この時代の庶民の住生活のようすを探る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	住まいの歴史－4 ＜明治・大正時代の住宅＞	明治時代に入って我々日本人の住生活は大きく変化する。洋風建築、洋風の生活の導入と普及である。明治から大正にかけて、こういった西欧的な物と日本風な物とがお互いに入りまじり、透けあって現在の我々の住生活に至る。この過程をたどりながら、我々の住生活のあり方を考える。	本間博文
9	住まいの構成原理－1 ＜建具と床仕上げ＞	襖、障子、畳といった建築材料は日本的な住まいの構成要素としていずれも欠かせないものである。しかしながら、我々の住まいの中に何時ごろ、どのような経緯で定着したのか、意外に知られていない。その経緯をたどりながら、日本の住まいの構成原理を学ぶ。	同上
10	住まいの構成原理－2 ＜空間の転用性と室礼＞	我国の住まいは、履き替え1つを取ってみても世界にあまり類例をみない独特のものである。第5回から第9回の講義のまとめとして「間」の概念や「空間の転用性」あるいは「室礼」といった我国に独特な空間の使い分けをもとに、日本の住まいの構成原理を明らかにする。	同上
11	現代の住まい－1 ＜独立住宅の住生活＞	現代社会における家族生活と住生活の関係について考える。具体的な独立住宅の間取りをもとに住生活上の問題点をコミュニケーションとプライバシーの関係を軸に分析し、独立住宅における住生活からみた家族関係のあり方を考える。	同上
12	現代の住まい－2 ＜集合住宅の住生活＞	集合住居における住生活は独立住宅におけるそれとは異なった点が多い。集合住宅における様々な住生活上の問題点を取り上げ、その問題解決の為のいくつかの試みを紹介し、望ましい集合住宅のあり方を検討する。	同上
13	社会と住まい－1 ＜海外の住宅事情＞	欧米における住宅問題の発生とその進展、及び問題解決の為に打ち出された様々な住宅政策の推移をたどり、日本人と彼ら西欧人との住宅に対する基本的な考え方の違いを述べる。	同上
14	社会と住まい－2 ＜国内の住宅事情＞	日本における住宅問題の発生とその経緯を述べ、合わせて問題解決のために政府が行ってきた住宅政策を検討し、我国の住宅政策のあり方について考え、住宅問題解決の手掛りを探る。	同上
15	社会と住まい－3 ＜住生活の現状と課題＞	14回の講義を通して見てきたように、我々日本人の住生活は急速に変りつつあり、しかもその変化の方向は必ずしも望ましい方向に向っているとは言いがたい側面も多く見られる。住生活とは一体何なのか、住生活の将来像は如何にあるべきか、いくつかの提案を具体的に検討しながら考える。	同上

＝ 住　居　Ⅱ ＝

― 住環境論 ―

主任講師：東　修三（京都府立大学教授）
　　：本間博文（放送大学助教授）

全体のねらい

住居は住生活の場である。健康で快適な住生活を営む前提として、住居の室内環境、敷地環境および地域の住環境、ならびに関連事項などについて、科学的理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	住環境とは何か	良い住居とはどのようなものか。はじめに住居の室内環境、敷地環境ならびに地域の住環境などに注目して保健性、快適性、安全性、利便性の観点から考える。	東　修三（京都府立大学教授）
2	住居の敷地環境－1－自然的条件－	まず住居の敷地の選定にあたって留意すべき敷地の自然的条件、すなわち、地形、地質などの土地の性状、ならびに微気候について述べる。	同　上
3	住居の敷地環境－2－日照－	住居の日照は敷地の南側の建物や樹木などで障害を受ける。日影曲線、太陽位置図などを解説して、日照時間と隣棟間隔、日照障害などについて述べる。	同　上
4	地域の住環境－1－大気汚染と騒音－	都市は大気汚染、騒音などによってその住環境が悪化しており、多くの公害問題が発生している。これらの公害の実態と対策を中心に述べる。	同　上
5	地域の住環境－2－社会的条件－	居住地の選択には、教育、医療などの公共施設の配置状況や公害、交通事情などの社会的条件が問題になる。都市計画区域内の用途地域区分などに注目して考える。	本間博文（放送大学助教授）
6	室内環境－1－自然気候調節－	―室内気候と自然気候調節―住居の内部は屋根や外壁などの住居構造体によって外気と隔てられているため、外部の一般の気候と違った気候状態を呈しており、これを室内気候という。室内気候の成立機構、さらに住居の自然気候調節機能を中心に述べる。	東　修三
7	室内環境－2－人工気候調節－	―人工気候調節―冷暖房などの設備によって快適な室内気候を実現しようとするのが人工気候調節である。熱貫流に関する基礎事項、冷暖房理論に基づき、住居構造体の断熱設計などについて述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	室内環境－3 －通風と換気－	―通風と換気― 通風は夏季在室者に涼感を与え、換気は冷暖房時の室内空気の汚染を排除し、ともに室内気候の改良に役だつ。通風計画および換気設計について述べる。	東　修三
9	室内環境－4 －採光と照明－	―採光と照明― 室内に適度の照度を確保するのに昼間は窓その他の開口部から採光する。採光が不十分なときや夜間は照明を行なう。採光計画および照明設計について述べる。	同上
10	室内環境－5 －騒音の防止－	―騒音の防止― 外部騒音などを防止するには、住居構造体、特に外壁などの隔壁、窓、扉などの遮音性を高める必要がある。騒音に関する基礎事項、構造体材料の遮音性能などに関する事項を概説して騒音防止対策に役だてる。	同上
11	室内環境－6 －結露の防止－	―結露の防止― 冬季暖房時などに、室内の壁、天井および床、さらに押入の内部などに結露が発生し、その表面に汚損を受けることが多い。結露の発生機構を探り、その防止対策について述べる。	同上
12	住居設備－1 －太陽熱利用－	省エネルギー時代における住居の設備計画のあり方について考える。まず、太陽熱利用の設備システムを使ったいわゆるソーラハウスなどの研究を紹介する。	本間博文
13	住居設備－2 －省エネルギー手法－	冷暖房設備、照明設備などの住居設備計画における省エネルギー手法について述べる。	東　修三
14	廃棄物処理	廃棄物の発生と処理のバランスがくずれると、住環境の悪化を招く。廃棄物の排出、その収集・処理の実状などを述べる。	本間博文
15	これからの住環境	講義内容を総括し、住居の室内環境、敷地環境ならびに地域の住環境などに関する重要課題を取り上げ、将来の方向を提起する。	東　修三

＝　住　　居　　Ⅲ　＝

―　住　計　画　論　―

〔主任講師：清家　清（東京工業大学名誉教授）
本間博文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

住居は住むための機械であると言われている。人間の行動に支障なくかつその行動を快適に安全に営むことを可能とすることが最大の役割であると言って良いだろう。また、外部の環境を適切に調整して人間の生命活動に最適なように環境を調整することも重要な機能である。住居Ⅲでは住居Ⅰ、Ⅱで学習した内容をふまえて、物としての住居が快適で利便性に富む住生活を可能とするための計画課題を様々な角度から検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住　計　画　論	住計画の目的・住空間の評価	清家　清（東京工業大学名誉教授） 本間博文（放送大学助教授）
2	気候・風土と住計画－1	寒冷地の住まい・熱帯地の住まい	同　上
3	気候・風土と住計画－2	関東、中部地域の住まい	同　上
4	規模計画－1	人体寸法と室内空間	同　上
5	規模計画－2	人間の行動や家具配置と適正規模	同　上
6	平面計画－1	第2次大戦後の住宅平面の変遷	同　上
7	平面計画－2	解放型平面と閉鎖型平面	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	構造計画－1	材料の強度と住宅の強度	清家　清 本間博文
9	構造計画－2	住宅における構造方式	同上
10	構造計画－3	住宅工法、一般構造	同上
11	安全計画	住宅における怪我の実態とその防止対策	同上
12	防災計画	住宅に関連した各種の災害の実態とその防止対策	同上
13	住居の維持管理計画	住宅の耐久性、保守・修繕、住宅の管理、防犯共同住宅における維持・管理の問題	同上
14	高齢化社会と住計画	高齢化社会における住生活の問題を指摘して高齢者の住宅の今後の方向を考える。	同上
15	これからの住まい	今後の住宅の方向をいくつかの事例をもとに検討する。	同上

＝家　庭　経　営　学＝

―これからの社会と家庭経営―

〔主任講師：今井光映（金城学院大学学長）〕

全体のねらい

家庭経営はそれをめぐる生活環境から影響をうけ、適応を迫られるとともに、他方では、そのあり方が生活環境を醸成し、変えていく。これからの社会の動きの中で、家庭経営が考えておかなければならない内在的、外在的諸問題をとりあげ、家庭経営がその本来の目的を実現するための問題解決のすじ道を考えることとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家庭経営の本質と目的	家庭経営は、最も根源的にして中核的なエコシステムである。それは何を本質とし、何を目的とするか、企業・国・自治体などの派生的なエコシステムとの関係はどうかなど、家庭経営の根本問題を考える。	今井光映（金城学院大学長）
2	家庭経営のシステム	家庭経営はインプット、プロセス、アウトプット、フィードバックの4つのマネジメント要素から成る。それら4要素の内容と関連を、具体的な例で考え、合理的な家庭経営行動の基礎とする。	同上
3	家庭経営の意思決定の過程	新しい家庭経営において「家庭経営とは意思決定のことなり」と考えられ、意思決定こそ家庭経営の中核とされる。家政の意思決定のプロセスを具体的な例をあげながら考える。	同上
4	家庭経営における価値とライフスタイルの設計	家庭経営のシステムにおいて、価値は最も中核的なインプットとして意思決定のプロセスを方向づけ、それぞれにライフスタイルを形成する源となる。価値の意義とその家庭経営への影響の過程を考える。	山口久子（椙山女学園大学教授）
5	家庭経営と経済生活の設計	家庭経営の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった家庭の経済生活の設計を考える。	同上
6	家庭経営と食生活の設計	食物・栄養の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった食生活の設計を考える。	同上
7	家庭経営と衣生活の設計	繊維・衣料の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった衣生活の設計を考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭経営と住生活の設計	「住まう」ことに視点をおいた、家族・個人のライフサイクルにそった住生活の設計を考える。	小沢紀美子（東京学芸大学 助教授）
9	家庭経営と生活時間の設計	家庭や個人の生活時間の構造がどのような変化をたどっているか、またその変化の中で家庭経営はどのような問題に迫られているかを考える。またその有効な活用のためのマネージメントの方法を考える。	同上
10	家庭経営と家事労働の設計	家事労働は、従来、時間的要素と身体的要素によって、労働生理学的に把握されてきたが、それに加えて、情感的と認知的の二つの要素を加えて、トータルにとらえられる必要がある。それとともに、それを経済的に評価する方法も考えておく必要がある。	同上
11	高齢化社会と家庭経営	世界に類をみない早やさと水準ですすんでいるわが国社会の高齢化によって、家庭経営がどのような影響を受けるかを自覚し、それに対応する方策を家庭経営の立場で考える。	山口久子
12	情報化社会と家庭経営	従来、家政の意思決定は経験的に行われてきたが、ハウスホールドコンピュータの開発によって、それを科学的に行うことができるようになった。ニューメディアの時代を迎えるに当たって、おこりうる家政の問題を考える。	小沢紀美子
13	家庭経営と消費者問題	家庭経営がその目的を達成するうえで問題としなければならないものに消費者問題がある。その背景構造を明らかにし、問題を解決するための生活環境醸成的な家庭経営を考える。	今井光映
14	家庭経営と消費者教育	今日の家庭経営をめぐる外部環境条件の大きな問題として消費者問題があるが、その問題解決の担い手として消費者教育を位地づけ、その考え方と方法を考える。	同上
15	これからの家庭経営を考える		今井光映 山口久子 小沢紀美子

＝ 家 庭 経 済 学 ＝

〔主任講師：今井光映（金城学院大学学長）〕

全体のねらい

家庭は家族・個人が自己実現するために最も根源的なエコシステムである。その家庭の経済が現代の経済社会の全体のシステムの中で、どのように関連しているか、また、個別経済としてどのような行為法則をもっているかを認識する。さらに、キャッシュレス社会・高齢化社会といった新しい環境条件に対応する家庭経済を考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	現代経済の構造と家庭経済	経済の安定と福祉の向上を図るためにとられるいわゆる混合経済のメカニズムを理解し、家庭経済が政府や企業とともに、どのように国民経済の循環と成長にかかわるかを認識する。家庭経済を、経済の循環の中でシステム的にとらえることの必要性と重要性を考える。	今 井 光 映（金城学院大学長）
2	賃金・租税と家庭経済	家庭経済、とくに勤労者のそれの源である賃金は、どのようなメカニズムや政策によって決まるのか、また、高負担社会を迎えて、そこから差し引かれる税のシステムと政策は、国民経済と家庭経済にどのような意味をもつのかを理解する。	山 口 久 子（椙山女学園大学教授）
3	物価・価格・料金と家庭経済	現代のインフレーションの発生原因とそのメカニズムを一般的に、また公共料金や一般商品の価格の決定のメカニズムを理解し、企業・政府がそれぞれ、物価・価格・料金安定のために何をすべきかを考える。	同 上
4	産業組織・マーケティングと家庭経済	競争的、寡占的、独占的な市場構造など、市場構造や市場行動の違いが家庭経済に与える影響について考え、独禁政策を含む競争促進対策の役割を理解するとともに、広告・宣伝などの機能について家庭経済の立場で考える。	小 木 紀 之（名古屋経済大学教授）
5	流通機構と家庭経済	複雑かつ多様化した流通機構の特性と問題点を解明し、流通組織、および自由公正な取引き制度が家庭経済に及ぼす影響関係とその対策を考える。	同 上
6	家庭経済の構造と推移	家庭経済を組み立てる収入と支出にはそれぞれどのようなものがあるか、この両者のフローの構造関係、その移り変わりを理解する。また、収支というフローだけでなく、資産というストック関係についても認識する。	今 村 幸 生（奈良女子大学教授）
7	家庭経済の分析手法	家庭経済を分析する手法、その分析の基礎資料にどのようなものがあるか、さらに分析に必要な基本的な概念を認識する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	家庭経済の諸法則	家計の支出のメカニズムおよび消費者行動にどのような定律性・法則性が認められるかを、支出全体、ならびに費目別に認識し、生活設計への資料とする。	今　井　光　映
9	家庭経済の理論	家計における支出の決定メカニズムと消費者行動を解明する古典的、ならびに新しい理論を認識し、合理的家計支出行動の資料とする。	今　村　幸　生
10	家庭経済と家計簿記	家庭経済の計数的把握の用具として家計簿を位置づけ、その基本的な記入のシステムと手法を学ぶ。とくにキャッシュレス社会に向けての新しい家計簿を考える。	三　東　純　子
11	家庭経済の診断	家計簿を記入するのは、記入のためではなく、家庭経済の改善のためである。そのためには診断が必要である。家庭診断の原則、目のつけどころ、ポイントを認識する。	三　東　純　子 （横浜国立大学教授）
12	家庭経済と生活設計ポリシー	ライフ・サイクルのステージに沿った私的個別的生活設計の考え方と方法を理解するとともに、社会の責任による公的社会的生活設計、すなわち生活設計ポリシーの必要性を認識する。	今　井　光　映
13	資源・エネルギー制約社会と家庭経済	今後ますます厳しさを増す国際経済社会にあって、わが国経済の根幹の問題であり、国民的課題である資源・エネルギー問題が家庭経済に及ぼす影響を認識するとともに、個々の家庭経済が資源とエネルギーを有効に活用する方策を考える。	小　木　紀　之
14	キャッシュレス社会と家庭経済	消費者信用制度の発達や銀行振替システムの定着化は、キャッシュレス社会の到来を思わせる。それらの制度が家庭経済に及ぼす影響を認識し、それに対応する家計管理方法を考える。	山　口　久　子
15	高齢化社会と家庭経済	高齢化社会の到来を目前に、この高齢化社会が家庭経済にどのような影響を及ぼすか、それに対して家庭経済はどのような生活設計をたてておくべきかを考える。	今　井　光　映

＝ 家 族 関 係 ＝

〔主任講師：森岡清美（成城大学教授）〕

全体のねらい

1. 戦前から戦後をへて現在に至るまでの、日本家族の構造と機能にみられる変化を明らかにする。
2. 日本の家族関係の現状を、外国の家族関係と比較して考察し、その特色を明らかにする。
3. 高齢化社会における家族関係の問題点を探り、それへの対策を検討する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	家 族 と は	家族とは何か。その定義を述べ、家族関係の解説に及ぶ。	森 岡 清 美（成城大学教授）
2	家族・家庭・世帯	家族・家庭・世帯、以上の3用語がどのようにして成立したかを、「家」の解体とのかかわりにおいて考察する。	同 上
3	核 家 族	家族の基礎単位としての核家族の概念を検討し核家族の2面性、核家族の世代関係を論ずる。	同 上
4	家族の類型と分類	核家族の異なる組み合せから、家族形成パターンである類型と、現実の家族構成を示す分類とを構築し、両者の関連に説き及ぶ。	同 上
5	小 家 族 化	家族規模（平均家族員数）縮小の傾向とその要因を指摘し、外国との比較のなかでわが国を位置づける。	同 上
6	核 家 族 化	核家族化の意義を論じ、核家族率の上昇傾向とその要因を考える。	同 上
7	家族のライフサイクル	ライフサイクルの概念、段階設定の推移、家族類型ごとの段階設定を論ずる。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ライフサイクルの変化	戦前から現代へかけてのライフサイクルの変化、およびその影響を論じ、ライフコースの概念の登場に説き及ぶ。	森岡清美
9	異性交際	成長に伴う異性交際の発達、デイトの機能・逆機能、異性交際の実態、について論ずる。	望月崇（大正大学教授）
10	配偶者選択	配偶者選択のメカニズム、配偶者選択の過程、について考察する。	同上
11	結婚	結婚の意味、結婚の機能、次代日本の結婚について論ずる。	同上
12	離婚・再婚	離婚の意味、離婚に対する社会の態度、日本の離婚の動向、離婚の社会的背景、再婚の状況、を論ずる。	同上
13	家族の危機	家族危機理解のためのＡＢＣ－Ｘモデル、二重ＡＢＣ－Ｘモデル、マリジ・カウンセリング、について論ずる。	同上
14	子どもの社会化	親子関係と社会化、社会化としつけ、社会化の過程、次代家族の問題点、について述べる。	同上
15	共働き夫婦	女子就労の動向、とくに共働き夫婦の増加傾向を指摘し、家族関係に対する主婦就労の影響を考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	老親の扶養	老人の諸欲求とその充足、老親扶養の2類型、老親扶養の動向、社会的扶養の問題を説く。	森岡清美
17	家族と住宅	DKの出現、居間の確立、座敷の消滅、住宅の小型化。洋風化に代表される住宅の現代的変貌を説き、家族生活との関連を考える。	同上
18	家族と食生活	冷蔵庫の普及、冷凍食品・インスタント食品等の普及、外食の頻度上昇等の傾向を指摘し、家族生活とのかかわりを考察する。	同上
19	家族と家計	就労形態と家計、収入階層と家計、家計にかかわる役割分担、家計と生活設計などを論ずる。	望月嵩
20	家族と余暇活動	余暇の増加、余暇に対する意識、余暇活動の動向を指摘し、家族生活とのかかわりを論ずる。	同上
21	家族の役割構造	家族における地位と役割、役割期待・認知・遂行、役割配分の規定要因、役割構造の変化を論ずる。	森岡清美
22	家族の勢力構造	家族における権力と勢力、勢力構造の実態、勢力関係の規定要因、勢力構造の変化を論ずる。	同上
23	家族の情緒構造	“情緒とは”家族の情緒構造、夫婦の伴侶性、親子の情緒関係、を論ずる。	望月嵩

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	家族と先祖	「家」の先祖、先祖観の変化、先祖祭祝の変化家族の宗教性の衰亡、などを説く。	森岡清美
25	親族関係	親族関係、親族集団、同族と親類、親族関係の変化、を考える。	同　上
26	家族と地域社会	村落的社会と家族、都市的社会と家族、家族の変化と地域社会、住民運動の意義、を論ずる。	同　上
27	家族機能の縮小	産業化・都市化に伴う家族機能の衰退傾向を説き、衰退への社会的対応に論及する。	同　上
28	新しい家族機能	衰退の一方で新しい家族機能が出現している点を指摘し、人間にとっての家族の意義を考察する。	同　上
29	家族意識の変化	「家」意識の衰退と新しい家族意識の明確化、規範拘束性から状況拘束性への転換に注目する。	同　上
30	家族の未来	かつての未来家族論“家族は消滅するか”、“家族はどこへ”などについて考察する。	同　上

＝ 生 活 福 祉 ＝

〔主任講師：仲村優一（日本社会事業大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、人間が社会生活を営む際に直面する生活上の諸問題にどんなものがあるか、そして、それらに対処して問題解決を図ることを目的とする社会的諸施策はどうなっているか、また、その問題点は何か、についての基本的理解をえさせることを目的とする。中でも、社会福祉の制度と施策を中心に、一個の市民として当然にもっていってよいと思われる知識を身につけてもらうことをねらいとしたい。

主な項目

(1) 人間の社会生活と生活上の諸問題(1)
(2) 人間の社会生活と生活上の諸問題(2)
(3) 社会福祉の意味
(4) 社会福祉と関連諸施策
(5) 社会福祉の展開(1) 欧米
(6) 社会福祉の展開(2) 欧米（つづき）
(7) 社会福祉の展開(3) 日本
(8) 社会福祉の展開(4) 日本（つづき）
(9) 社会福祉の制度と仕組(1) 法制のあらまし(i)
(10) 社会福祉の制度と仕組(2) 法制のあらまし(ii)
(11) 社会福祉の制度と仕組(3) 行財政の仕組(i)
(12) 社会福祉の制度と仕組(4) 行財政の仕組(ii)
(13) 社会福祉の主な分野(1) 概要について
(14) 社会福祉の主な分野(2) 公的扶助(i)
(15) 社会福祉の主な分野(3) 公的扶助(ii)
(16) 社会福祉の主な分野(4) 児童福祉(i)
(17) 社会福祉の主な分野(5) 児童福祉(ii)
(18) 社会福祉の主な分野(6) 老人福祉(i)
(19) 社会福祉の主な分野(7) 老人福祉(ii)
(20) 社会福祉の主な分野(8) 障害者福祉(i)
(21) 社会福祉の主な分野(9) 障害者福祉(ii)
(22) 社会福祉の方法(1) ケースワーク(i)
(23) 社会福祉の方法(2) ケースワーク(ii)
(24) 社会福祉の方法(3) グループワーク
(25) 社会福祉の方法(4) コミュニティ・オーガニゼーション
(26) 社会福祉の従事者問題(1)
(27) 社会福祉の従事者問題(2)
(28) 社会福祉施設の問題(1)
(29) 社会福祉施設の問題(2)
(30) 社会福祉と国際化

＝　母　子　保　健　＝

〔主任講師：古谷　博（順天堂大学教授）〕

全体のねらい

ヒトの出生は母の体内における卵細胞の受精という生物学的現象にはじまり、これに遺伝と環境がからんで胎児の発育、分娩、授乳、育児という一連の過程を経て、人間としての完成の第一歩となるものである。この過程は内外の要因によってその安定が維持されているが、ここではそのメカニズムについてのべたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	母と子の健康科学のねらい	母と子の健康は人間の要点であり、この健康が維持されるには多くの要因が複雑にからみあっている。この微妙で巧みな仕組みを理解することによって人間誕生が祝福されることも意義も明らかにされよう。	古谷　博（順天堂大学教授）
2	生命のはじまり ―精子と卵子― 排卵、受精	生殖細胞の起源、減数分裂、卵子の成熟と卵胞の発達、精子の成熟、卵子数の推移、ホルモンと排卵、受精のメカニズム、精子のキャパシテュション、多精子受精防禦メカニズム	鈴木秋悦（慶応義塾大学助教授）
3	受精卵の分割と分化 卵管、着床	受精卵の分割と分化、受精卵と卵管環境、着床前後の受精卵、子宮内膜と妊娠準備状態、胞胚の形とはたらき、着床のメカニズム	同　上
4	胎盤の発生と働き 羊　水	胎盤の初期発生学、胎盤の構造とはたらき、羊水のはたらきと組成、妊娠期間における胎盤と羊水、胎盤とホルモン、ヒトの胎盤の特徴。	同　上
5	母体・胎盤・胎児の相互関係	胎児は胎盤を通じて母体との間に物質交換を行いながら成長する。また胎盤から産生されるホルモンは母児にさまざまな変化を及ぼしている。それらの相互関係を述べる。	太田孝夫（帝京大学教授）
6	胎児の発育と自律性	胎児の体は三胚葉がまず形成され、次第に各臓器に分化し、それぞれが機能を発揮しはじめ、胎外生活への適応のための準備を行っている。	同　上
7	妊婦のからだと心の変化	妊婦の全身的並びに局所的変化、妊娠中の生理的変化の個人差、心の変化、妊娠を安定維持させるメカニズム。	伊藤博之（聖路加国際病院産婦人科医長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	妊婦と環境	妊婦をめぐる諸々の環境因子（くすり、放射線嗜好品、ウィルス、細菌など）… 人間社会とのかかわりあい（里帰り分娩、夫立会い分娩、ラマーズ法、座位分娩など）	伊藤博之
9	妊婦と生活	妊娠中のスポーツ、食事、性生活。高年婦人の妊娠、若年婦人の妊娠、勤労婦人の妊娠。	同上
10	分娩のメカニズム	分娩はどのようにしてはじまり、胎児はどの様にして分娩されるかを述べる。	太田孝夫
11	妊娠・分娩とそれに伴うリスク	妊娠、分娩は生理的な現象ではあるが、かならずしもすべて正常に進行するものではなく、正常から逸脱することがある。それを妊娠から分娩までにあらわれるものについて述べる。	同上
12	分娩後の母体の心身の回復	妊婦から褥婦、授乳婦へのうつりかわり、全身局所の身体的な回復、ホルモンの変化、母性のめばえなどについてのべる。	古谷博
13	乳汁分泌	乳腺の発生と発達、構造と機能、ホルモンの作用と乳腺の機能、母乳の生成と分泌、乳汁分泌の調節などについてのべる。	同上
14	母乳哺育	子どもにとって母乳がいかに優れているか、母乳栄養のすすめ方、母乳哺育と母子結合。	奥山和男 （昭和大学教授）
15	こどもとは	ライフサイクルにおける乳幼児期の位置づけ。2～3歳頃までは環境因子が大きく影響し、2～3歳頃までの心身の成熟とともにその頃から社会への参加としてのしつけや教育が始まる。総論として乳幼児を理解する。	巷野悟郎 （東京家政大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	胎児から新生児へ	出生に伴うからだの生理的変化と新生児の身体的特徴。それに応じた新生児の養護のあり方について。未熟児についても触れる。	奥山和男
17	母と子のふれ合い	母と子のふれ合いと心の発達。早期接触の重要性。母子結合を促進する育児のあり方、愛情遮断症候群など現在の母子関係の問題点。	同上
18	子どもの栄養	新生児期をはじめその後の栄養（母乳栄養、人工栄養、および離乳から幼食）の問題にふれるその中で特に肥満、ヤセ、牛乳嫌い、小食などの点をとり上げる。	川崎富作（日赤医療センター小児科部長）
19	子どもの身体発育	身体の形態的成熟過程とその評価の意義及び評価の具体的方法について述べる。肥満、ヤセなどについても述べる。	高野陽（国立公衆衛生院母性小児衛生学部長）
20	こどもの運動機能	乳幼児期の運動機能の発達過程とその評価判定について述べる。 運動機能を順調に発達させる養育のあり方を考える。	同上
21	泣き声と言葉	産声から喃語、その後言葉へと発達していく段階を、母と子、環境などとのかかわりで考える。言葉の発達のおくれ、どもりなどにもふれる。	巷野悟郎
22	こどもの生理機能	乳幼児の生理の主なものについて、特に体温、すい眠、排泄などについて述べる。	同上
23	子どもと個人差	子どもの身体には、顔が各々違うように一人一人にそれぞれ個人差があり、その個人差により罹患傾向や疾病の重いか軽いかが違ってくる。この点を体質と併せて述べる。	川崎富作

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	子どもの発育と病気	子どもは新生児、乳児、幼児と発育していくがその発育に応じて病気の種類、現れ方とも違いがでてくる。この点を免疫の発達、また予防注射による病気の予防につき述べる。	川崎富作
25	子どもの健康と環境	子どもの健康が環境と大いに関係する。この中で、遊びの問題、事故の問題などについて述べる。	同　上
26	子どもの健康増進	環境に適応するための日常生活における問題点を考え、健康増進にふれる。ことに自律神経系の働きの年齢的推移の解説と、生活とのかかわりにふれる。具体的にはうす着、乾布まさつなどがある。	巷野悟郎
27	こどもと生活	こどもが社会生活に適応し順応していくための日常生活のあり方、いわゆる「しつけ」についてのべる。	同　上
28	こどもと社会	現在実施されている各種健康診査・保健指導をはじめ、こどもの健康のために社会がいかに係っているかを述べる。子どものための施設などの紹介。	高野　陽
29	集団保育	乳幼児の集団保育の意義とあり方について述べる（特に、集団保育における健康管理・事故防止）また、保育の具体的内容や家庭保育での関連についても考える。	同　上
30	母とこどもの健康を考える	全体の項目についての補足、まとめをする。	古谷　博

＝ 成　人　の　保　健 ＝

（→成人健康科学）

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）〕

全体のねらい

母子健康科学と同じ。母子・青少年の健康科学にひきつづき、同じ目標の下に一貫した内容とする。成人から壮年へかけての問題に重点をおく。

主な項目

(1) 健康の指標としての正常値の読み方
(2) バイオリズムについて 1（時差ボケとは）
(3) 〃 2
(4) 〃 3
(5) 脳のはたらき
(6) 環境と生体反応
(7) 運動と生体反応
(8) 安静と生体反応
(9) ストレスと生体反応
(10) 肥満の生理
(11) 外傷と生体反応
(12) 薬剤と生体反応
(13) 日常生活における生体反応 1）睡眠
(14) 〃 2）疲労
(15) 〃 3）不安・怒り
(16) 日常生活における生体反応 4）食事・飲酒・便通
(17) 〃 5）入浴
(18) 〃 6）家族関係
(19) 喫煙と生体反応 1）
(20) 〃 2）
(21) 〃 3）
(22) 高地・高温・低温と生体反応
(23) 汚染大気と生体反応
(24) 生体反応統御のメカニズム 1）細胞
(25) 〃 2）神経系
(26) 〃 3）内分泌系
(27) 〃 4）心循環系
(28) 〃 5）呼吸器系
(29) 〃 6）防御・免疫機構
(30) ま と め

＝　老人の保健　＝

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）〕

－老年期の健康科学－

全体のねらい

健康に関する本学の講座は母と子の健康科学、少青年期の健康科学、成人壮年期の健康科学、老年期の健康科学からなり、受精卵の分裂から高齢末期までの加令変化　各年代の生体反応を一貫した基本理念に基いて解説する。一人の個性の確立、自己同一性の完成の時期に相当するこの年代の健康について科学的総合的理解を目指す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	老年期の健康科学序論 小講義のねらい	本学の一連の健康科学講座の構成からすれば、老年期の変化も、乳幼児、少青年、成壮年と続いてきた加令変化の一部であり終着像であるが、老化が特に関心を呼ぶのは、からだの衰滅へつながる直接の前段階であるためであろう。本講義作製の基本方針と順序を説明。	本間日臣（放送大学教授）
2	老化とは －老化の諸学説	老化のメカニズムは現在でも未知であり、昔から多くの学説である、大きくわけて内因性の遺伝子説、ホルモン説などと外因性のストレス説、放射線説などである。これらにつき解説し、それを現代科学の進歩から批判し、老化研究の現状について述べる。	朝長正徳（東大教授）
3	老化度の測定について －検査値のよみ方	老化度測定の基礎となる老化のパラメーターにつき列挙し、その意識につき解説する。また、種々な臨床検査値のよみ方で、老人と若年者ではどの様に異なるかについて述べ、老年者での代謝機能についてもふれる。	同上
4	臓器・組織の変化(1) 細胞の変化	細胞はからだの細小構成成分であるが、すべての臓器組織の細胞が同じ速度や同じ様式で変化するわけではない。神経細胞は生後分裂を停止し数は増加しない。血液細胞は一生分裂をくり返し産生され続ける。肝細胞は損傷後再生修復される。この多様性を中心に解説。	本間日臣
5	臓器・組織の変化(2) 神経系の変化１）	夜眼が覚める。短時間記憶力（物忘れ）の低下、運動機能の低下などを糸口として運動神経を中心に解説する。	朝長正徳
6	臓器・組織の変化(3) 神経系の変化2）	老人のドライブ事故の多発を糸口として、視野の狭窄、難聴の原因、味覚や臭覚の低下、足のしびれなど知覚の低下を中心に解説する。	同上
7	臓器・組織の変化(4) 呼吸・循環系の変化	階段や坂の上昇時の息切れ、足のむくみ、夜入眼時のせき・たん、夜尿など日常の変化を導入部として呼吸循環系の加令変化と反応を解説する。	本間日臣

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	臓器・組織の変化(5) 内分泌代謝機能の変化	一寸したはずみで骨折する（骨粗鬆症）現象から、一般の代謝機能、内分泌機能の老化の解説に入っていく。	朝長正徳
9	臓器・組織の変化(6) 消化機能・腎機能の変化	肝毒性、腎毒性のある薬剤投服用時の注意から肝細胞、腎機能の変化の解説に入る。栄養についてもふれる。（8.9にはFrolkis,V.Vの Physiology of Call Aging Kerger 1984 James OFWの Gastrointestinal and Fiver function in lot Age Clihics in Gastro enterolgy vol 12 No.3 P671）という参考書があります。	同　上
10	臓器・組織の変化(7) 防御・免疫機能の変化	高令者の死因の第1は、抗生物質の発達した現在でも肺炎である。このことは何を意味するか。これを中心に老年期の防御・免疫機能がどのように変化しているかを考える。	本間日臣
11	外見の変化	顔つき、しわの部位とでき方、しみ、爪の変化身長の短縮、姿勢、皮下脂肪の減少など外見の変化をもたらすメカニズムを中心に外見のみならずからだの内部　どのような変化が生ずるかを、これまで解説してきた諸臓器組織の変化をまとめつつ考える。	同　上
12	知能の老化とボケ(1) －知能老化の特徴	高令になると“もの忘れ”がひどくなり認知機能は低下してくる。いわば知能の老化である。そこで年をとると終局的にはすべての人がボケになってしまうのか、という設問がおこる。本項ではまず知能の老化の要因にふれボケとの差違を論ずる。	長谷川和夫 （聖マリアンナ大教授）
13	知能の老化とボケ(2) “ボケとは？”	ボケ（痴呆）とは成人におこる知能障害である。通常脳器質病因を基礎にしておこる。痴呆の診断基準を明らかにして、ボケと類似の症候を呈する意識障害やうつ状態との鑑別点を指摘する。またボケの客観的評価スケールを紹介する。	同　上
14	知能の老化とボケ(3) －対応と予防－	痴呆は、多様な原因疾患によっておこるので、個別的な原因疾患の治療が条一の対応である。このなかでアルツハイマー型痴呆は原因不詳のため医学的対応がむずかしい。主体となる介護の原則について述べる。社会的対策と予防についてもふれる。	同　上
15	老年期の光と影 －自己同一性の完成とその栄光	人の肉体は有限であり、肉体諸機能は思春期前後を頂点として弱化して行くが、精神活動は60才以後まで上昇を続け、老年期において高揚する。自己同一性の完成それが老年期の栄光である。上手に美しく老いる為には、それ迄の各年代の健康的な生命の燃焼が必要である。	本間日臣

（参　考）

＝人間のからだと健康＝

（保健シリーズ）

全体のねらい

胎生期から老年末期までの生体の形態学的、生物学的、心理学的経済変化の理解を基礎として、家庭、社会、職場、都市、自然現象の環境における多種多様の刺激因子と生体との不断の反応のメカニズムについての判断力を養成する（付図参照）。それによって日常の健康管理、食事、栄養、習慣、運動、病気・外傷などの際の対応について、理性的かつ理論的な行動がとりうる教養人の育成を目指す。

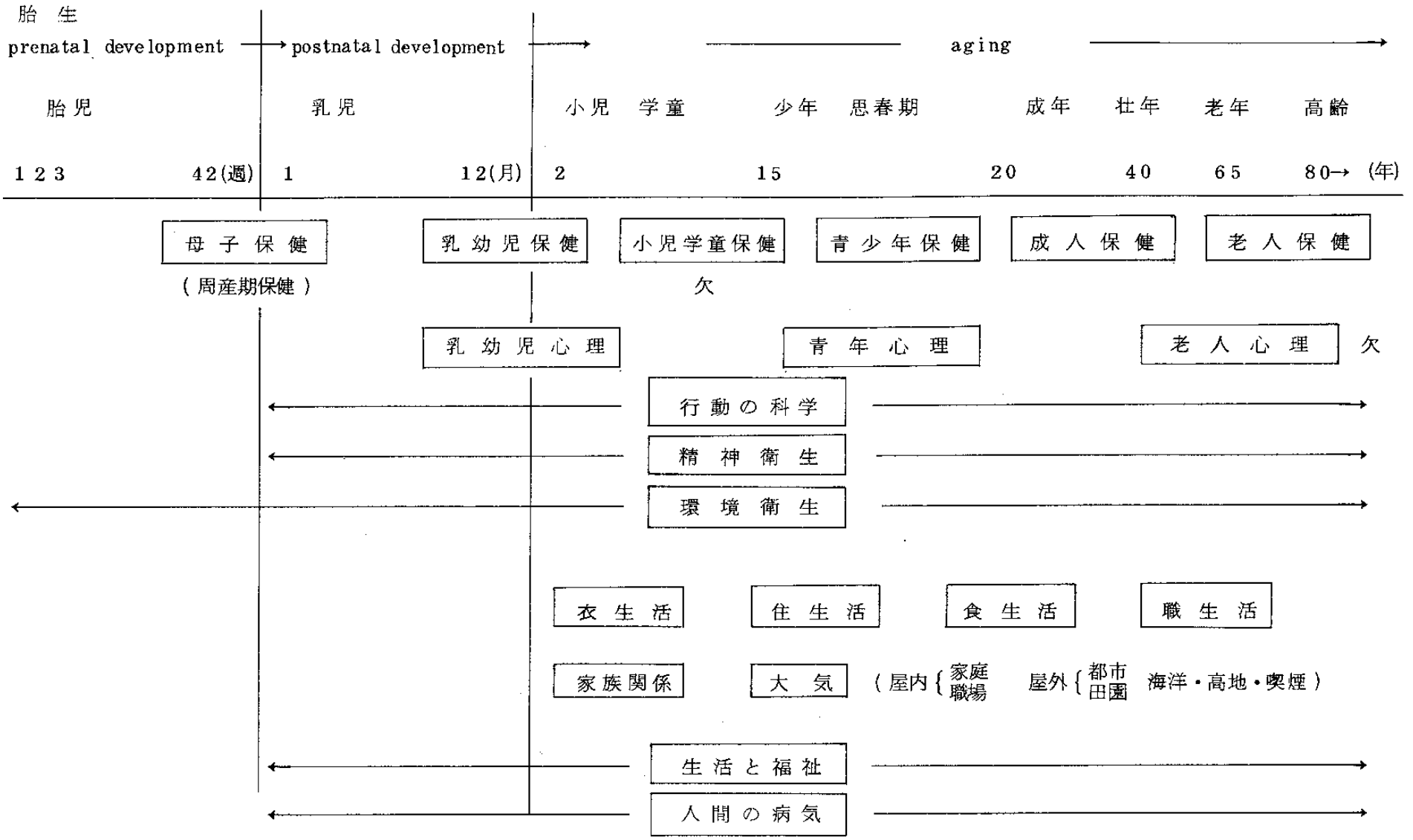
主な項目

母子保健（周産期保健）、乳幼児保健、小児学童保健（欠）、青少年保健、成人保健、老人保健、
〔乳幼児心理〕〔青年心理〕〔老人心理（欠）〕、加令（欠）
〔環境衛生〕、〔精神衛生〕　　（保健の用語は将来健康科学となる。）

〔　〕内は関連科目

欠：設置審申請時項目中欠の意

人間のからだと健康（生活健康科学）



（保健の用語は将来健康科学Health Scienceと変更する）

＝青少年の保健Ⅰ＝

―学令期の保健―

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）
丸井英二（東京大学講師）〕

全体のねらい

健康科学に関連する講座には、母子保健・成人保健・老人保健とともに、少青年期保健がある。年令の順に、健康について考える構成になっている。この項では、学令期から成人するまでの、成育期の健康について、肉体的に精神的に、調和のとれた成長・成育とは何かについての理解を深めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	少年期の健康科学	放送大学における、生涯にわたる健康科学に関する講義の一環として少年期の健康科学を位置づけ、その内容について主任講師の立場から講義を行う。	本間日臣（放送大学教授） 丸井英二（東京大学講師）
2	学齢期の心身の特徴	少年期は学校で生活をする学童期でもある。この時期の身体と心について、概括的に展望し、今後の講義の前提となる知識を整理する。	高石昌弘（東京大学教授）
3	少年期のからだの変化(1) ―消化器、呼吸器を中心に―	少年期は消化器や呼吸器についての質的変化は少ない。しかし、身体全体の発育に伴い、その量的変化は著しい。これについて構造と機能の両面からみていく。	馬場一雄（日本大学教授）
4	少年期のからだの変化(2) ―神経系、感覚器、歯など―	幼児期に出来上がった器官の機能的変化について講義する。特に、いくつかの運動機能を中心にその発達をたどる。また、感覚器および歯の発達にもふれる。	同上
5	少年期のからだの変化(3) ―循環器を中心に―	循環系に関する基礎的な知識について解説し、循環系および腎機能の変化と、この時期にみられる病的変化についての講義をおこなう。	阿波彰一（東京大学講師）
6	少年期のからだの変化(4) ―少年期の性的発育―	人間に男女の性差があるのはなぜか、性はいかにして決定されるか。その結果、思春期はどのようなメカニズムで発現するのか。生物学的な基礎知識を紹介する。	玉田太朗（自治医科大学教授）
7	少年期のからだの変化(5) ―運動器を中心に―	学童の骨折が話題になることが多いが、その根拠はあるのか。人体の構造から、骨折はいかにして生ずるか、またその予防策について述べる。	杉浦勲（名古屋大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	少年期のこころの変化	少年期には身体上の変化に比べ、こころの変化は著しい。乳幼児期から学童期まで、それぞれの時期に特有の精神的課題を抱えている。子どもにとっての環境の変化と対応させて考えていく。	小倉　清（関東中央病院精神科部長）
9	身体の右と左	身体は一見すると左右対称のように見えるが、よく観察すると決してそうではないことが理解できる。脳の左右両半球の機能差から幼少年期の環境、言語、文化に言及する。	角田忠信（東京医科歯科大学教授）
10	保健環境としての家庭	家庭は子どもにとって最も重要かつ身近な環境である。健康問題発生の場、健康保持増進の場、健康問題解決の場としての家庭の重要性について考える。	江口篤寿（筑波大学教授）
11	子どもの食事と栄養	学童期は身体の量的変化の著しい時期であり、それを支えるための栄養について考える。さらに、こどもの生活のなかでの食生活の役割についてふれる。	金子佳代子（女子栄養大学講師）
12	学校における保健	学校保健は保健管理と保健教育とに分けられる。ここでは、それにとどまらず、学校という場における健康問題、さらに、子どもたちの生活、成績との関連のなかで心身の健康について調査結果を交えて考えていく。	小倉　学（茨城大学教授）
13	学校給食	学校での生活のなかで学校給食はいかなる意義を持つか、またその内容はどうか。子どもの食環境の変化と併せて、「食」について考える。	茂木専枝（実践女子大学教授）
14	青少年期の健康と社会環境	子どもの健康は生物学的に理解されるだけでなく、ひろく社会的存在としてとらえなければならない。青少年の健康問題は同時におとなの問題でもある。広い視野から健康を見直していく。	中江公裕（独協医科大学助教授）
15	青年期への移行	少年期から青年期への移行期として思春期をとり上げ、身体的成熟の側面と健康についてふれる。成熟の男女差もトピックとなる。	高石昌弘

＝ 青 少 年 の 保 健 Ⅱ ＝

〔 主任講師：本間日臣（放送大学教授）
丸井英二（東京大学講師） 〕

全体のねらい

この科目では、青少年の保健(1)に引き続き、一生にわたる健康科学の一環としての青年期を扱う。この時期は、身体的にほとんど成人と変わらないほどに成長している。しかし、環境が拡大していくにつれ、精神的な問題が様々な形で生じてくる。従って、生物学的な側面だけでなく、心理的、社会的な側面にも注目していく。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期のからだ(1) 諸機能の成熟と諸問題	身体的にみると、質的な変化は少ない時期であるが、成熟に向かう上での問題がある。また、遺伝的な要因が環境との相互関係の中で、青年期の個体の健康に与える影響についても、身体の全般的特徴に触れながら解説する。	本間日臣（放送大学教授） 丸井英二（東京大学講師）
2	青年期のからだ(2) 男性を中心に	青年期には男性と女性との差が様々な面で目立ち始める。ここでは男性の身体的な成長のこの時期の特徴について解説する。	白井将文（東邦大学教授）
3	青年期のからだ(3) 女性を中心に	女性では１０代後半から２０代前半にかけて、女性特有のからだの変化が見られる。この時期を中心に確説する。	林 謙治（公衆衛生院 学校衛生室長）
4	青年期のからだ(4) 思春期発現のメカニズム	青年期の身体的特徴は、ホルモンによって支配されるところが多い。第二次性徴、第三次性徴をもたらす仕組みについて、身体の機能の側面から解説を加える。	玉田太朗（自治医科大学教授）
5	青年期のこころ(1)	青年期は、からだ以上に、こころの問題の多い時期である。さまざまな環境に適応し、その中で自己の確立を図らなければならない。このような時期のこころの変化について解説する。	小倉 清（関東中央病院 精神科部長）
6	青年期のこころ(2)	前回に続いて青年期のこころについて、いくつかのトピックを中心にさらに理解を深める。	同 上
7	青年期のこころとからだ その相関に注目して	からだとこころは、別のものであり無関係に機能すると考えられることがある。しかし、実際には、この両者は密接に関係を持っており、互いに影響を与え合い、一体であるということさえできる。その相関について、ダイナミズムが特に顕著な青年期を対象に考えていく。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	青年期の体力とスポーツ	青年期には体力の伸長が著しい。からだの変化とスポーツの役割とを、あわせて考えていく。	武藤芳照 （東京大学助教授）
9	思春期の問題行動と相談	思春期には非行、いじめをはじめとするさまざまな問題行動がある。こうした問題についての相談はどのような場面で、どの様な内容で、どのような解決がありうるのかについて、多面的に扱う。	江幡玲子 （思春期問題研究所研究員）
10	青年期の栄養と食事	この時期は男女共に成人とほぼ同様の生活となって行く。しかし、その後の人生の健康を左右していく食生活習慣のあり方を考えていく。	金子佳代子 （女子栄養大学講師）
11	学生生活と性の問題	学生生活においても様々な問題がある。それらを検討し、中でもこの時期に問題となる性の問題について、学校という場の特殊性を考慮して考えていく。	武田敏夫 （千葉大学教授）
12	青年と労働環境	青年が職を得ていくことは、新たな物理的、化学的あるいは生物学的環境に入ると共に、それまでに経験しない人間環境にも触れることになる。そうした環境の変化にどのように対応し、適応して行くか、その過程を解説する。	滝川寛 （三重大学助教授）
13	青年期のライフスタイル 酒とタバコを中心に	いわゆる成人病は加齢にともなって発生するがそれにはライフスタイルが大きく影響する。このライフスタイルは成人期になる以前に出来上がることが多い。そうした習慣形成について、酒とタバコを中心に論ずる。	片本哲郎 （東京大学助手） 本間日臣
14	青年の健康と社会環境	健康は身体内の現象であるのみならず、様々な環境との不断の相互関係の上に成立している。その中でも、社会環境はきわめて広い範囲で青年を取り囲み、生活の中で健康を考えていくために益々重要となる。	中江公裕 （独協医科大学助教授）
15	少青年期の健康科学（まとめ）	これまで、少青年期の健康について考えてきた。この時期を一生を通じての健康科学の中に改めて位置づけ、青年期の意義について再考する。	本間日臣 丸井英二

＝ 精 神 衛 生 ＝

〔 主任講師：挾間秀文（鳥取大学教授）
織田尚生（放送大学助教授） 〕

全体のねらい

精神医学および臨床心理学の応用科学である精神衛生学を、主に精神力動的立場から講義する、心の健康増進についての科学である精神衛生の基礎および応用の各方面に亘って、検討を加える。その際、人文諸科学特に文化人類学や宗教史学等との学際的領域にも留意する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	心の健康とは	心が健康であるとはどのような状態をさすのかを検討し、精神衛生の全体像を概観する。	挾間秀文（鳥取大学教授）
2	正常と異常	正常が異常と切り離されるものでなく、両者の関わりの下にはじめて健康な生活を送ることが可能になる。この点について、精神力動的な見地から述べる。	河合 雄（京都大学教授）
3	現代社会と精神衛生	精神衛生の歴史について述べ、現代社会の諸特性についても触れる。	織田尚生（放送大学助教授）
4	心の障害と人間の生き方(I)	心因性の心の障害を通して、人間の健康な生き方を考える。	挾間秀文
5	心の障害と人間の生き方(II)	内因性の心の障害を通して、人間の健康な生き方を考える。	同上
6	現代の家族	現代の家族の人間関係とその問題点を取り上げ、対策について検討する。	吉本千鶴子（国立京都病院非常勤医師）
7	父性と母性	人間の心に内在する父性と母性について述べ、それらがどのように子どもの心の発達に影響を及ぼすかについて検討する。	織田尚生

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	乳児期・幼児前期の心の健康	この段階の心の発達とその問題点について論じる。	山中康裕 （京都大学助教授）
9	幼児後期・学童期の心の健康(I)	この段階の心の発達とその問題点について論じる。	同　上
10	幼児後期・学童期の心の健康(II)	事例について検討する。	同　上
11	思春期・青年期の心の健康(I)	この段階の心の健康とその問題点について論じる。	村瀬孝雄 （立教大学教授）
12	思春期・青年期の心の健康(II)	事例について検討する。	同　上
13	成人期の心の健康(I)	成人期の心の諸課題をいかに達成するかについて、またその困難について述べる。	小川捷之 （横浜国立大学教授）
14	成人期の心の健康(II)	事例について検討する。	同　上
15	老年期の心の健康(I)	老年期をいかに生き抜くかについて、精神力動的な立場から述べる。心の異常についても触れる。	小川捷之 織田尚生

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	老年期の心の健康(III)	事例について検討する。	小川捷之
17	職場の人間関係	人間関係論から見た職場での人と人との関わりについて検討を加える。	三隅二不二（大阪大学教授）
18	海外生活と心の健康	事例を取り上げながら、異文化の中に暮す場合の心の健康を考える。	稲村博（筑波大学助教授）
19	睡眠と心の健康	睡眠や夢と心の健康との関わりについて検討する。	川原隆造（鳥取大学助教授）
20	アルコールと人間	アルコールとの関わりから見た人間の心について検討する。	斉藤学（東京都精神医学研究所）
21	薬物乱用と人間の心	薬物乱用者の心理と現代社会との関連性について論じる。生理学的側面についても触れる。	佐藤光源（岡山大学教授）
22	文化と心の健康	文化と心の健康との関係を文化人類学の立場から述べる。	祖父江孝男（放送大教授）
23	宗教と危機の心理学	心的危機において宗教の果す役割とその両義的価値について述べる。	織田尚生

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	自殺と人間性	自殺と人間の心との関わりについて検討する。	稲村　博
25	精神薬物と人間の心	精神薬物が人間の心に与える影響を通して、心について考える。	小椋　力 （琉球大学教授）
26	心理療法から見た人間	力動的心理療法学の立場から見た人間の心について検討する。	織田尚生
27	行動と人間の心	行動療法学から見た人間の心理について検討する。	山上敏子 （国立肥前療養所行動科学センター所長）
28	精神の健康と責任能力	人間の責任能力について心理学的立場から述べる。	狭間秀文 織田尚生
29	地域社会と心の健康	心の衛生と地域社会との関連について触れ、精神衛生センターや児童相談所など関係諸機関について述べる。	増野　肇 （栃木県精神衛生センター所長）
30	ま　と　め	まとめと今後の展望について述べる。	織田尚生

＝衣生活概論＝

〔主任講師：矢部章彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

"生活の中の衣服"という視点から、今日の衣生活にかかわる諸問題を、多くの事例をあげて通観する。

流れの筋を、衣服が語る人間（2～5回）、衣生活を支える科学（6～14回）に大別し、それぞれの立場から概説し、さらに高度な専門への橋渡しとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活の中の衣服	衣服は人体を覆い隠すとか、寒暑を防ぐという単純な道具立てではない。むしろ着る人間がその根源にある。衣生活のもつ意味を、原点に立帰って吟味してゆく筋立てを、種々の観点から予告的に論じ合う。	矢部章彦（放送大学教授） 酒井豊子（都立立川短大教授） 小池三枝（お茶の水女子大学助教授）
2	衣服の意味	人間にとって衣服とはどのような役割を果すものなのか。われわれは衣服を着ることによって、どのように自己を他人に示しているのだろうか。衣服を着ることの意味を考える。	矢部章彦 小池三枝
3	衣服のかたち	特に礼服や制服のように、社会の慣習や制度によって定められた衣服を着るとき、堅固しく窮屈と感じる人もあれば、逆に心地よく思う人もある。衣服のかたちとそれを着る人間の心情のさまざまな関係を考える。	同上
4	衣服の色(1)	衣服から受ける印象の中で、色の果す役割はきわめて大きい。日本独特の色、季節をあらわす色、官職や地位を示す色、時々の流行の色などをとりあげ、衣服の色に托される心情について考える。	同上
5	衣服の文様	衣服につけられた文様は、見る人にどのような働きかけをするだろうか。衣服のかたちとその中に置かれる文様の場所、文様表現の技法、文様のかたちと意味、などをとりあげ、それらが訴えるものについて述べる。	同上
6	衣服と人体	衣服は体温調節や運動性などの人体の機能をどのように助けているか、また妨げとなるのはどのような場合かを、衣服の素材、かたち、着方などの面から考察する。	矢部章彦 酒井豊子
7	衣服の素材(1)	絹・毛など天然繊維からポリエステル・アクリルなど合成繊維までの各種繊維の特質を、衣服の実用上の諸特性との関係をとらえ、それらの改良の工夫、また一そう天然繊維に近づけようとする化学繊維の改質の方向について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣服の素材(2)	衣服を構成する代表的素材である織物と編物について、それぞれの特徴と相違点を認識し、衣服の丈夫さ、形の安定性、取扱いやすさ、着心地のよさ、などの性能の上に、それらの特質がどのようにかかわっているかをしらべる。	矢部章彦 酒井豊子
9	衣服の色(2)	色の感覚と知覚とをどのように区分するかは、ニュートン、ゲーテの時代からの課題である。ここでは、先ず、色票や表色系による色の客観的なあらわし方について述べ、次いで各種繊維の染色法の原理につき略説する。	矢部章彦
10	衣服の色(3)	染織物の色は、うつろいあせてゆく宿命をもつ。天然染料、合成染料を問わず、それらで染めた染色品の堅ロウ度（日光・洗濯・汗・マサツなど）は、衣服にとって大切な特性である。その判定法と表示法について解説する。	同上
11	衣服の製作(1)	衣服デザインに対し、人体の体型・サイズに応じて衣服パターンが作られるまでの過程の諸問題を扱う。素材の伸縮性のちがいによるゆとり量の相違、剛軟性のちがいによる衣服の形の演出効果の相違などについてもしらべてみる。	矢部章彦 酒井豊子
12	衣服の製作(2)	衣服はいくつかの布片を、縫い合わせ、貼り合わせ、とじ合わせなどして作り上げられる。ここでは各種の縫製条件、接着条件などにおける出来上りの丈夫さ、美しさなどについて考える	同上
13	衣服の手入れといたみ	新しい衣服を長持ちさせる手だてについては、生活者の主体性によって研究が進められねばならぬ。損傷の種類（変形・風合の劣化・変退色・強度低下など）について考え、それぞれに対策を講ずる必要があろう。	矢部章彦
14	衣生活と環境	不要となった衣服の廃棄・再利用の問題、手入れの過程で用いる洗剤排液のゆくえ、など資源・環境にかかわる衣生活の側面を考えたい。	同上
15	衣生活の総合的考察	衣服のもつ内面的なものと、流行などの社会的なもの、さらに技術の進歩による科学的なもの、はそれぞれ独立に論じても自づと限界があろう。これらの総合されたものが衣服であり衣生活であることを、まとめとして論じ合う。	矢部章彦 酒井豊子 小池三枝

＝衣生活の科学＝

〔主任講師：矢部章彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

衣生活と衣服の機能との関係に焦点をあてて、快適な衣生活の科学的側面を考えてゆきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	衣服の科学的機能	総合科学としてとらえられる衣生活の科学の組立てとその流れにつき概説する。 衣服の機能の自然科学的側面（物理・化学・生理学・衛生学）を、素材の科学と対応させて考えてゆく組立てである。	矢部章彦 （放送大学教授）
2	ヒトの体温調節と衣服	衣服の機能をまずヒトの側から考えてゆくための基本事項について解説する。 ヒトの体温調節のしくみとその限界、衣服による気候調節（衣服気候）、ヒトの環境への適応、馴化などが主題となる。	矢部章彦 田村照子 （文化女子大学助教授）
3	冬を暖かく夏を涼しく	衣服による保温と放熱の機構を、物理と衛生の両面から考察する。水分の吸収と放散も重要な課題であり、これら諸性能と素材の物理的、化学的性質との関連に多くの問題が隠されている。	同上
4	拘束性とゆとり	着衣のシルエットと、からだの運動や動作その他、矛盾した関係を、衣服の拘束性とゆとり量としてとらえ、衣服圧の許容限界や快適域を、衣服の形と素材の伸縮性とも併せ考えてゆきたい。	同上
5	水にかかわる性質	肌着の吸湿、吸水性。レインコートの撥水性など、種々のかたちで要求される衣服と水とのかかわりを、繊維の化学的性質にさかのぼって考える。ぬれやすさ、乾きやすさが主題となろう。	矢部章彦 中島利誠 （お茶の水女子大学教授）
6	熱にかかわる性質	合成繊維は熱により収縮、融解しやすい反面、熱固定によるプリーツ加工ができるなどの利点もある。これら衣服の熱的な性質と繊維を構成する高分子の物理的性質との関係を述べる。	矢部章彦 酒井豊子 （都立立川短大教授）
7	型くずれ、寸法変化	収縮、伸長、型くずれの原因となる繊維の性質や、織物、編物などの構造的特徴を知り、防縮加工、形態固定加工などの原理を、羊毛の防縮加工や、パーマネントプレスとして著名な樹脂加工を例に解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣服と色（染色）		駒城素子（お茶の水女子大学講師）
9	衣服と色（側色）		矢部章彦
10	布から衣服へ	布から衣服への造形過程で用いる、縫う、かがる、刺す、いせるなど種々の仕立ての技法について、解析的な概観を試みたい。またこれら単位技術の機械化の意義についても考える。	酒井豊子
11	既製服の利用	自家製作、注文服から既製服活用へ、衣生活の転換は、満足度の高い既製服の供給が課題であった。日本人の体格調査の諸数値をもとにした既製服寸法のJIS化と国際規格への同調の方向を述べる。	同上
12	衣服の手入れ(1) 洗浄理論	新しい衣服を、いかに長もちさせるかという衣生活の大切な課題を洗濯を中心に、3回にわたって解説する。 洗浄理論は、汚れる→汚れを落とす、過程の界面化学的考察を中心とする。	矢部章彦
13	衣服の手入れ(2) 洗濯の条件	洗浄温度、洗浴濃度、洗浄時間、などの基本的条件と洗浄理論との対応から、一般的な洗濯に有利な条件を考える。 洗浴の疲労やすすぎなど、洗濯に関係深い応用作業の解析も試みたい。	前島雅子（千葉大学教授）
14	衣服のいたみ	衣服の入手から廃棄までの過程を考え、衣服の損傷の原因を分類検討する。 廃棄の理由は必ずしもいたみによるばかりではない。使用実態調査からのややくわしい解析を試みたい。	駒城素子
15	衣服と環境		矢部章彦

＝食　物　総　論＝

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物の種類は極めて多く、また関係する学問の分野も広い範囲にわたっている。ここでは食物についての共通する重要なことを理解し、食物を食べる人間の側にたって成分、栄養、衛生、嗜好の問題を理解し、さらに食生活の基本知識である栄養のバランス、食事構成について学ぶ。食物各論を理解するために必要な科目でもある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	食　物　と　は	生活の中での食物の持つ意味、食物の果たす機能と役割を説明する。食物の物質的内容としての栄養素を解説し、食べる側の人間の体成分に触れ、栄養バランスの重要性を説く。食物生産の方式、食物流通の経路、食物生産の新技術にも触れる。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	食物のエネルギー	食物の機能のうち、人間の生活エネルギーの給源であることを解説し、食物の有するエネルギーと摂取した場合のエネルギーの相異、食物の消化吸収実験例を見せ、食品のエネルギー換算係数を　説する。エネルギーの多い食事、少い食事の例を示す。	同　上
3	炭水化物と食物繊維	食物成分のうち炭水化物について解説する。炭水化物の種類、利用される炭水化物、利用不能炭水化物に触れ、炭水化物の化学構造と消化吸収、代謝の基礎知識を解説する。最近研寄の発展した食物繊維について、その内容、栄養や健康との関連を解説する。	同　上
4	脂　質　の　役　割	食物成分のうち脂質について解説する。食用油脂、食品中に含まれる脂質の化学的解説、脂質の栄養に果たす役割、脂質の代謝とコレステロールの代謝、健康との関係について触れる。最近研究の発展した魚油の栄養についても解説する。	同　上
5	たんぱく質とアミノ酸の栄養	食物成分のうちたんぱく質について解説する。たんぱく質はアミノ酸によって　成され、その　成が栄養質に影響することをよく理解させる。たんぱく質、アミノ酸の化学、代謝、栄養価の表わし方など、たんぱく質の組合せの問題についても触れる。	同　上
6	無　機　質　と　水	食物成分のうち無機質について解説する。無機質の種類、食事中の存在状態、無機質の代謝、栄養、他の栄養素との関係などに触れる。また微量のトレースエレメントの研究が進んでいるのでそれを解説する。また水の重要性についても触れる。	同　上
7	脂溶性のビタミン	食物成分のうちビタミン全体について解説し、脂溶性ビタミンの各々について種類、化学、栄養効果、欠乏症、また必要量、食品への応用などについて解説する。調理、加工時のビタミンの損失についても触れる。	宮崎基嘉 稲垣長典（共立女子大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	水溶性のビタミン	7回に続き、水溶性ビタミンの各々について同様の解説をする。	宮崎基嘉 稲垣長典
9	食物の嗜好適性	食物の機能のうち嗜好適性について解説する。食欲とはどのようなことか、美味とはどういうことか。食物の嗜好性に関係する、色、味、香気成分にはどのようなものがあるか。嗜好に関係する食物の物理的性質についても解説する。	宮崎基嘉 小林彰夫 （お茶の水女子大学教授）
10	食物の組成と特性	植物性食品、動物性食品など食品素材中に各種の成分がいかなる状態で存在し、それが加工によってどのように変化し、どのような物性変化を生ずるかなど、例示的にいくつかの食品を選んで解説する。	同上
11	食品の品質と保蔵	食品の品質に関係する化学的基礎知識、食品の品質保持技術などを解説する。また食品の保蔵中に生ずる化学的変化、物理的変化を解説し、貯蔵方法が食品の価値にどのような影響をもたらすかを考察する。	宮崎基嘉
12	食物の調理科学	食物の調理に際しては種々の材料が混合され、また加水、湿熱、乾熱などの物理的条件が加わる。これら様々な調理による食物の成分的変化、嗜好的変化を解説し、好ましい調理とはどのようなことかを解説する。	同上
13	食物の衛生と安全性	食物は必ずしも安全なものとは限らない。食品衛生の知識が重要であり、それによって食物の安全性を確保することができる。また食品に添加される物質の規制、正しい使用法などに触れる。	同上
14	栄養所要量と食事構成	食事はわれわれの健康を守り、生活活動を営む上に欠くことのできないものであるが、食品成分表と栄養所要量に関する知識を解説し、食事構成のための知識を述べ、日常生活と食物の摂り方について理解する。	同上
15	食物の資源と将来	食物総論のしめくくりとして、食物の資源的な面からの知識を解説する。歴史的な経過を述べ、現状を解説し、さらに将来の展望についても触れる。	同上

＝食　物　各　論＝

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物総論における知識を土台として、日本における日常食品について、その生産、流通方式、含有成分、栄養価、品質、調理加工適性、貯蔵法、家庭における利用方法などにつき各論的に教える。食品をめぐる諸情勢、とくに法規制についても触れる。ねらいは食品についての科学的教育にある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の食品	わが国の食品全般の供給システム、日常食品の種類、種別特色の解説などを通じ、食品全体についての概念を教える。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	農産食品1 穀類	米、小麦、大麦、そば、とうもろこしなど穀類の原料、一次加工品、二次加工品を中心に教育する。特に食生活における穀類食品の位置づけについても教育する。	同上
3	農産食品2 いも、でん粉類	各種いも類、同加工品、各種でん粉類、でん粉を原料とする食品について教育し、栄養価の面からの見直しを述べる。	同上
4	農産食品3 豆類、種実類	大豆、小豆等豆類の種類は多く、近年この面の知識が欠けてきているので、その特色、利用法、栄養価などにつき教育する。種実類についても解説する。	同上
5	農産食品4 野菜、きのこ類	野菜の実態を明らかにし、流通問題、栄養価の正しい認識、新しく出回っている新規野菜についても教育する。きのこ類については名称等が混乱しており、知識を整理する。	同上
6	農産食品5 果実類	果実の種類は極めて多く、新規出回りのものを含めて、生産実態、栄養的特色、品質などを重点に教育する。また果実類の加工、貯蔵についても触れる。	同上
7	畜産食品1 肉類	肉類の消費は増大しているが、その実態はよく知られていない。食肉の種類、部位別調理、部位による栄養価の違い、肉の品質など教育する。また肉類の加工食品についても教育する。	宮崎基嘉 荒川信彦（お茶の水女大教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	畜産食品2 乳類、卵類	乳類、乳製品は多様化のはげしい部門で、従来の知識では対応できない。現状の認識をめざして多様化の実態、内容の実態を教育する。卵類についてはとくに加工品を中心に解説する。	宮崎基嘉
9	水産食品 魚介類藻類	魚類、貝類等多種類に及ぶが、近年、新品種も出回り、名称なども混乱している。また天然もの、養殖ものの差異など教育すべき内容は極めて多い。鮮度、調理の問題にも触れる、藻類もこの時間において含める。	同上
10	甘味食品、し好食品	砂糖及び各種でん粉糖、甘味料の製造法、化学構造、甘味度、栄養価を解説し、菓子類、し好飲料、茶の成分についても述べる。	宮崎基嘉 加藤博通
11	醸造食品	みそ、しょうゆ、す及びアルコール飲料など微生物を利用する醸造食品について、微生物の解説と製造法、その成分について述べる。	宮崎基嘉
12	調味食品	調味料、香辛料の種類は激増している。現在の実態を知り、利用上の知識を教育する。また食用油、油脂利用食品を便宜上この時間に含めて解説する。	同上
13	加工食品	乾燥食品、調理済加工食品、レトルトパウチ食品、冷凍食品など最も現代的な加工食品がどのように製造されるのかを解説し、その成分、利用上の注意を述べる。	同上
14	特殊食品	栄養強化食品、特別用途食品、医療用食品、等特殊な食品について教育する。わが国における食品の表示について述べる。	同上
15	食品のまとめ	食生活の変化要因をさぐり、食事の実例を検証した上で、食品の特色を食品群別にとらえて食物各論のまとめとする。	同上

＝ 余 暇 生 活 （ その１ ） ＝
――日本人の余暇――

〔 **主任講師** ：一番ヶ瀬康子（ 日本女子大学教授 ）〕

全体のねらい

いまや余暇生活問題は、国民の大きな生活課題としてうかびあがってきている。寿命が延び、生涯のなかで余暇生活の時間が増加したことや、労働時間短縮などで余暇時間がふえたことなどが、その理由であろう。その中で、ただ受け身の余暇生活ではなく、自発的な余暇活動をもつよう、その探求のための視点と視座を明らかにする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	1. 余暇とは何か	余暇とは何か。その概念、語源などについて述べる。また、現在の日本においては、いかなる範囲の生活行為を余暇生活ととらえているかにふれる。そして、この講義の目的をのべ、講義全体の導入とする。	一番ヶ瀬 康子（日本女子大学教授）
2	2. 余暇生活の歴史 ① 歴史的展開	ある社会の余暇生活のありようは、その社会の歴史的特質を反映する。近代以前の社会から現代社会に至るまで、余暇の意味内容がどのように変化してきたかを、それぞれの社会の特質とのかかわりで検討する。	牧 野 暢 男（日本女子大学教授）
3	② 戦後の推移	余暇生活が戦後、どのように変化してきたかについて検討する。余暇生活を昭和３０年以降の高度成長時代の「大衆レジャー時代」と昭和４８年以降の第一次石油危機以降の「多様で個性的レジャー時代」に分けて、その背景と特質について探る。	松 山 美保子（機械振興会経済研究所・調査役）
4	3. 余暇生活の条件	余暇生活を規定する条件は、歴史的・社会的にさまざまである。現代日本人の余暇生活を条件づけている諸要因を検討するとともに、余暇生活の内容との関係について考察する。	牧 野 暢 男
5	4. 余暇生活の構造 ①時間・空間・手段	余暇時間を、まず共同体における「時間の共有制」から「時間の私有制」への移行の視点からとらえる。次に余暇活動を可能にする余暇空間のひろがり（モータリゼーション）とパーソナル化（テレビ）との両面から余暇の実態をみる。	岩 崎 隆 治（社会評論家）
6	② 階 層	余暇生活は、労働時間と関連する余暇時間、家計のなかでのレジャー・教養費など経済階層的条件によって影響される。経済階層的条件がどのように余暇生活に影響を及ぼしているか、各階層の余暇生活にどのような特徴があるか検討する。	山 手 茂（茨城大学教授）
7	③ 余 暇 歴	余暇生活に大きく影響を及ぼす余暇歴、つまり、人々が過去にどのような余暇活動を行ってきたかが、いかに現在の余暇活動の豊かさ、あるいは貧弱さを左右しているかについて検討する。	松 山 美保子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	5. 余暇生活の実態 ①子ども	子ども時代の余暇生活は、生涯における余暇生活の在り方に影響する。その子ども時代の余暇生活の中心である「遊び」が、現在どのような状態であるか、時間「場」仲間との関係で現状をとらえ、そのあり方を検討・考察する。	一番ヶ瀬　康子
9	②青年	青年の余暇実態を生活意識の変化－労働中心から生活中心へ、オカネ重視から時間重視へ、職域から地域、または第三の空間へーを中心にみていく。とくに夫婦中心型のレジャーの登場にスポットをあてる。	岩崎　隆治
10	③勤労者	中高年サラリーマンが、週末、夏期休暇、年次有給休暇をどう活用しているか。勤労観やレジャー観の変化をあとづけながら、余暇の実態をみていく。とくに「レクリエーション」から「ホビー」への移行を中心に考える。	同上
11	④主婦	主婦は、核家族化・少産化・寿命の延長・家事労働軽減化など生活周期と生活構造の変化によって余暇時間が増加し、多様な余暇活動を行っている。ライフ・ステージ別分析をふまえて、中年期主婦の活動タイプ別分析を試みる。	山手　茂
12	⑤高齢者	高齢者の余暇生活の実態調査から、その特徴と問題点について検討する。また高齢者は、ライフ・ステージのなかで余暇がもっとも重要になるという点に着眼し、高齢者の余暇生活を豊かにするための条件について探る。	松山　美保子
13	⑥家族	人びとの余暇生活は、個人単位および家族単位に営まれている。家族の生活条件がどのように個人の余暇生活に影響しているかを考察し、さらに家族単位の余暇活動の実態を、①家族内活動、②家族そろっての外出、③家族旅行に分け探る。	山手　茂
14	6. 国際比較	世界各国の余暇生活の実態を紹介するとともに、国際比較調査の結果にもとづき、日本人の余暇生活の特質をあきらかにする。	牧野　暢男
15	7. 余暇生活を高めるために	以上述べてきた日本人の余暇生活の歴史、実態や問題点をふまえ、さいしょに述べたこの講座の目的との関係で、自らの課題として、どのように余暇生活を高めるか。その検討課題について述べ、〝まとめ〟とする。	一番ヶ瀬　康子

＝ 余暇生活（その2）＝
――これからの余暇――

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

前回では、日本人の余暇の実態およびその改善のための、視点と視座を明らかにした。その視点と視座ににもとづき、さらに具体的な課題を検討するために、余暇をめぐる社会的諸局面においての課題を展開し、どのような政策的展開が必要とされるかについて検討する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	人権としての余暇	余暇の確立を、基本的人権のひとつとしてとらえ、「余暇権」確立へのあゆみが、国際的にすすめられてきている状況を説明する。そして、日本の場合はどうであるか、諸法との関連で把握する。	一番ヶ瀬 康子（日本女子大学教授）
17	余暇生活の動向 ①余暇活動の特徴	日本人の余暇活動を部門別・ライフスタイル別に分析し、その特徴と問題点について述べる。さらに高齢化社会の到来による「生きがい」の重要性という観点から、余暇と労働の関係、余暇機会の拡大、余暇学習などについて述べる。	松山 美保子（機械振興協会経済研究所調査役）
18	②余暇産業の推移	需要と供給という経済原則の観点から余暇をとらえ、余暇産業の特性、近年における余暇市場の推移について述べるとともに、今後、成長が期待される余暇市場の部門、特徴および問題点について述べる。	同上
19	③企業の対策	企業の余暇対策は、戦前の労務管理施策のなかにみられる。戦後は福利厚生として行われてきたが、所得水準の下昇、レジャー産業の発達レジャーの多様化の波を受けて、企業の余暇対策は曲り角にある。その実情と方向について述べる。	岩崎 隆治（社会評論家）
20	④労働組合の対応	労働組合の余暇対策は、企業に比べて遅れをとっている。しかし、最近では高齢化社会への対応策の1つとして、生涯教育に力を入れる組合が増加してきた。その動向をふまえ、今後の方向について検討する。	同上
21	余暇生活の展開方向 ①多様化する情報とその選択	余暇生活へ今や影響の大きい余暇情報が、歴史的にどのように変ってきたかについて述べ、さらに来たるべきニューメディア時代における余暇情報の多様化、その余暇生活へのインパクトおよび問題点について述べる。	松山 美保子
22	②余暇施設の確保と共有化	余暇生活を高めるためには、まず住宅がそれにふさわしいものであることが重要である。しかし余暇の集団性・社会性の必要を考えるとき、地域における余暇施設が重要である。その余暇施設のあり方を多面的に探究する。	一番ヶ瀬 康子

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
23	③組織づくりの必要と課題	余暇推進のための組織づくりは、レジャー意識の普及に比べて大幅に遅れているが、余暇開発センターの設立を機に、企業中心から地方自治体中心へと移行しつつある。その意義と課題について述べる。	岩崎隆治
24	余暇生活の主体形成 ①家庭教育の重要性	親は、子どもとともに豊かな余暇活動を行なうことを通じて、子どもが余暇生活を主体的に充実させる人間として育つよう努力する必要がある。この課題を達成するために、どのような考え方と方法を、親は学習すべきかを考える。	山手茂 （茨城大学教授）
25	②学校教育の検討	学校生活が、青少年の余暇生活のあり方やその後の余暇行動にどのような影響を及ぼすかを考える。そして、余暇生活の主体形成の視点から、学校教育の現状を検討し、今後の余暇教育の方向を探る。	牧野暢男 （日本女子大学教授）
26	③社会教育の変革	社会教育は、余暇生活の条件の1つであると同時に、余暇教育の場でもある。学習、スポーツ、レクリエーションなどの社会教育活動を中心に、住民が主体的な余暇生活を営むための社会教育のあり方を検討する。	同上
27	④余暇指導者の必要	団体・グループの活動、社会教育、福祉、保健活動、コミュニティ活動など、多くの分野で余暇活動の指導者が求められている。これら様々な分野の指導者の地位、役割と養成、研修の実態および今後の課題について考える。	山手茂
28	余暇政策への政策転換 ①地方自治体の方向	県や市町村における余暇施策の推移と現状を、まず明らかにする。次に、まちづくりや地域づくりなどとの関連で、余暇環境の整備と充実のための地方自治体の課題や施策の方向を検討する。	牧野暢男
29	②国の政策の推進	国の余暇政策がどのように発展してきたかをふりかえり、今後の政策課題とその推進方策を考えるための余暇活動の基礎的条件の整備、情報の収集、提供システムの整備、指導者の養成、研修など多くの政策を検討する。	山手茂
30	「余暇権」確立のための視点と視座	余暇生活を充実していくためには、何よりも生活者自らの認識と努力が肝要であり、とくにその社会的努力が重要である。講義全体を総括し、余暇権確立のための原則を探究し、まとめとする。	一番ケ瀬康子

＝教　育　思　想＝

〔主任講師：村井　実（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

どうしたら子どもたちを善くすることができるか、についてのさまざまの考え ―― 教育思想 ―― を、歴史的な発生と発展の順を追って吟味したい。ある時代に、ある思想を、どういう人物が代表的に表明したかという、列伝体の形式によって講義を展開する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育思想のはじまり（一） ―教育ということば―	教育ということばが作られるということは、教育が問題として人々の意識に上ることを意味する。それは、人間の歴史の上で、いつごろ、どのようにして起ったか。	村　井　　実 （大東文化大学教授）
2	教育思想のはじまり（二） ―子どもを善くする―	子どもを善くしたいということから、そもそも何が善いか、また、どうしたら善くすることができるか。さらにまた、いったい善くすること自体ができるのかなどが問題として生ずる。これが、教育思想のはじまりである。	同　上
3	ソ　ク　ラ　テ　ス	「善さ」とは何か、「善くする」とは何か、などの問題を生涯かけて問うと同時に、人々にその問いをすすめ、またその問い方について、「産婆術」「問答法」などの主張を行ったソクラテスの歴史的意味は何か。	同　上
4	プ　ラ　ト　ン	ソクラテスの弟子として、プラトンは、ソクラテスの思想を理論的に整えることに力を注いだ。だが、その思想はソクラテスのそれに対して、対極ともいうべき特徴をもつに至った。その吟味。	同　上
5	イ ソ ク ラ テ ス	イソクラテスは、ソクラテス、プラトンとほぼ同時代のアテナイの町で、さらにまた独自の修辞学校を開くことによって、教育思想の第三の原型ともいうべきものを展開してみせた。それは何か。	同　上
6	人間主義・理想主義・現実主義	子どもたちを善くしたいという、教育の思想に、子どもたち、および善さをどう考えるかに応じて、教育思想の三つの原型が生まれた。ソクラテスの人間主義、プラトンの理想主義、イソクラテスの現実主義である。	同　上
7	クインティリアヌス	ローマの共和制社会では、討議と説得の教養としての雄弁をもって教育の理想とするに至った。その思想の集大成としてのクインティリアヌスの「雄弁家の教育」の特色。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アウグスティヌス	キリスト教が社会に力を強めるに至って、そのキリスト教的「神」との関わりにおいて人間の教育が考えられる。ギリシア・ローマの時代の教育思想との比較を試みたい。	村井　実
9	中世の教育思想 (一) －教会の教育－	子どもたちを善くしたいという、その善さが、理想として神とされ、その神に向って子どもたちを形成することが教育と考えられた。しかし、理想を求めるよりも、理想に基づいての形成が強調された。	同　上
10	中世の教育思想 (二) －世俗の教育－	教会が掲げる神の理想の下で、世俗の世界では、宮廷は宮廷なりに、商人は商人なりに、職人は職人なりに、社会階層毎に現実主義的な教育を展開した。思想上、いわば理想主義と現実主義との癒着が発生したのである。	同　上
11	ルネサンスの教育思想	久しい中世の教会による桎梏からの解放を求める動きが、ギリシア・ローマ時代の人間像を理想に掲げる人文主義の教育思想を産んだ。代表的な人物にエラスムス、トーマス・モアなどが挙げられる。	同　上
12	宗教改革の教育思想 －ルターと カルヴァン－	中世は、人間にとっての「善さ」＝神が教会によって独占された時代といえる。それを教会から解放して、聖書を通しての人間との直接の関係に置こうとしたのが、ルターとカルヴァン、宗教改革の思想家たちであった。だが、その教育上の意味は何か。	同　上
13	ラブレーと モンテーニュ	人文主義の教育が形式化して「キケロ主義」と評されるようになるのに対して、形式よりも内容、ことばよりも感覚や理性、知識よりも経験を重んじようとする実学主義が抬頭した。中世以来の理想主義的な大勢に対しては、久しぶりの現実主義的な関心の再現である。	同　上
14	コメニウス	「知る」という働きの普遍的な重要性、万人にとっての可能性への着眼を中心として、それを現実化するための方法と組織がどう考えられたか。近代を支配するに至った教育思想のスタート。	同　上
15	思想の系譜（一） －ロック－	現実主義的な思想の中、社会的実学主義と呼ぶにふさわしい、イギリス紳士階級の教育思想の代弁者がロックである。この原理が、「健全な身体に宿る健全な精神」として表現される。もちろん健全というのは、ロックとその階層にとっての「善さ」であったのである。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	思想の系譜（二）―子ども観と絶対主義の教育思想―	ロックは子どもの心はあらゆる知識や善悪の考えに対して「白紙」であると考えた。そこから、教育上においても、経験と訓練を重んずるという原則が生れた。だが、この子ども観が絶対主義国家において、強制教育の推進を支える。	村井　実
17	ルソー	「造物主の手を出るときはすべてが善いのだが、人間の手にかかってすべてが駄目にされている」という革命的な宣言……その教育思想的意味は何か。	同上
18	汎愛派の人々	ルソーの影響下に、人間の教育、自然の教育、感覚と身体との関心等をもとにドイツに汎愛派の運動が生じた。バゼドウ、ザルツマンなどを代表とするが、とくにザルツマンについてその特色を見てみたい。	同上
19	カント	人間と自然を重んずるというルソーの系譜に立ち、同時に実践上では汎愛派に同調したが、カントは、両者の現実主義的な関心をはるかに越えうる、いわば理念主義的思想を抱いた。これは、人間性理念の完成という、その意味での新らしい理想主義思想の力強い宣言であった。	同上
20	コンドルセ―フランス革命の教育思想―	フランス革命は、教育上歴史的な二つの問題を提起した。一つは、圧制への抵抗としての自由と平等の強調であり、第二は、国家による公教育という考えである。この二つの、ほとんど矛盾的といってよい要求の、最初の調停者として、コンドルセが出現した。	同上
21	ペスタロッチー	政府への関心、経済への関心と教育への関心との関係、したがって、政治思想、経済思想と教育思想との関係、こうした関係がペスタロッチーの思想としてどう把握されていたか。	同上
22	フレーベル	アウグスティヌスやルターの場合の教育思想の中心にあった「神」が新しい意味をもって出現する。子どもの中の「神」、それが教育の歴史にどういう新しい動きを作り出したか。	同上
23	オーウェン―産業革命と教育―	産業革命の進展と共に、社会が労働者の子弟の啓蒙を必要とし、そこから社会の側からの労働者階級への教育的関心が生じた。こうして社会主義の教育思想が生れる。その代表者としてのロバート・オーウェンの思想を吟味する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	ホーレス・マン ーアメリカの 教育思想ー	フランス革命によって提出された、自由と平等と公教育との緊張の解決への道が、新大陸の新国家アメリカにおいて、デモクラシーの理念の下に拓かれることになった。その代表的教育行政・思想家として、ホーレス・マンが出現した。	村井　実
25	ヘルバルト ー思想と科学ー	近代に入って、教育に科学の成果としての知識技術をとり入れると同時に、教育の思想を科学化する関心が高まっていった。その最初の積極的な試みがヘルバルトによって企てられた。ここでは、その意味と限界とを考察する。	同　上
26	デュー イ	国家と知識技術と市民と人間と、この四者の必然的なもつれ合いをどういう方向に解決して理想の教育を実現するか。この視点から、デューイの教育的民主主義の思想を吟味する。	同　上
27	森　有　礼	日本における国家と教育との関係をどう考えどう調整するか。森有礼の国家主義的教育思想の誕生を吟味する。	同　上
28	福　沢　諭　吉	森有礼と同時に、同じ意図をもってスタートした福沢諭吉の教育思想がどういう異った主張に結晶していったか。その両者の相異の意味。	同　上
29	教育の民主主義 (一) ー新しい出発ー	明治以来百年にわたる日本での教育思想の流れ。敗戦。米国教育使節団報告書。教育基本法と新教育の運命。現在の日本の教育思想上の問題としてそれが何を意味するか。	同　上
30	教育の民主主義 (二) ー現実の歩みー	日本の戦後の教育は民主主義を旗印として進められたが、いつのまにか、自由の理想にも平等の理想にもかえって遠ざかる方向に進んでいる。これは何を意味するのか。これを、明治以来の潜在的な国家主義の問題として吟味する。	同　上

＝ 児　　童　　観 ＝

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

子どもについての見方を概観しようというのが、本講義の目標である。全体は三部構成をとっており、まず4回までで、欧米の児童観をさぐる。次いで、5～9回で、日本の児童観を歴史的に掘り下げた後、10～14回で、臨床心理学の立場からの児童観をまとめる。そして、最後に、未来の児童観にもふれてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子　羊　た　ち	初めの4回は、西洋の児童観について、教育学の視点から解説する。すべての伝統社会において、成人すなわち人ならざる子供は、基本的な生産物の投影を受ける。キリスト教圏にして、牧畜をよくする西洋では、それは鞭打ち、追いたてるべき子羊に他ならない。	舘　　昭（放送教育開発センター助教授）
2	タ ブ ラ ・ ラ サ	工業化の波が、西洋に起こった。印刷術が、教育に投影され、ロックがしたように、子供は文字を刷りこまれるべき白紙（タブラ・ラサ）とみなされるようになる。コメニウス以来、工場に見立てられた学校で、一斉教授が確立する。	同　　上
3	子　供　の　発　見	植物栽培モデルの教育が、西洋にも存在する。植物は、鞭打たれると凋み、適切な環境を与るだけで育つ。これが、人権思想と結びついたとき、「子供の発見」がなされた。ルーソにはじまる、子供を世に毒された大人以上のものと見る児童観が、ここに確立する。	同　　上
4	内　的　世　界	脱工業化の開始とともに、人間を人間自体として見ることが可能となった。深層心理学は、まず小児性欲の発見によって、大人の夢想の子供への投影を打ち破った。ユング派、特にウィクスによる子供の内的世界の把握は、西洋児童観の投影からの脱却を示す。	同　　上
5	児　　童　　観	子どものとらえ方に、西欧と日本との間にかなりの開きが認められる。そこで、前回までの経過をふまえ、西洋教育史の専門家・志村鏡一郎静岡大学教授を招いて、日本の児童観の特色を、欧米との対比の中でとらえていきたい。	深　谷　昌　志（放送大学教授）
6	児 童 観 の 成 立	子どもをいつくしむのが、日本の伝統だといわれる。この回では、藩学や寺子屋の時代にさかのぼって、日本の児童観の源をたしかめてみたい。放送教材のゲストは、日本教育史の専門家で、児童観にくわしい石川松太郎日本女子大学教授である。	同　　上
7	日本の近代と児童観	日本の近代化につれて、学校で学ぶ子どもたちが増加してくる。それだけに、学校関係者が、子どもをどうとらえていたのかが重要になる。そこで、児童規則などを素材として児童観をとらえてみたい。ゲストは、石川松太郎教授。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	児童観の転換	大正時代の新教育運動は童心礼讃とよばれるような児童観を生み出した。そこで、新教育運動の児童観を紹介すると同時に、児童文学にあらわれた児童観の分析を、児童文学者の西本鶏介氏とともに掘り下げてみたいと思っている。	深谷昌志 （放送大学教授）
9	情報化社会の中で育つ	現代の子どもを特徴づけているものは、マス・メディアとのふれ合いであろう。そしてテレビ育ちとよばれるような成長のスタイルをたどる子が多い。そこで、マンガなども素材としながら、情報化社会の到来が児童観に与えた影響を考えていきたい。	同上
10	現代の子どもをどう理解するか —母子関係を中心に—	母子関係に問題のある具体的事例をあげて、その問題の背後にある心理力動を中心に、現代の子どもをどう理解したらよいのか、について述べる。	小川捷之 （横浜国立大学教授）
11	現代の子どもをどう理解するか —父子関係を中心に—	父子関係に起因する実際の治療事例を紹介する。そして、その子どもの治療過程を論じながら、現代の子どものもつ特徴をあげ、子どもをどう理解したらよいか考えを述べる。	同上
12	現代の子どもをどう理解するか —兄弟関係を中心に—	或る具体的な治療事例を紹介する。そして、その事例を中心に、現代の子どもの兄弟関係について述べ、彼等をどのように理解したらよいのか考察する。	同上
13	現代の子どもをどう理解するか —児童期と思春期—	思春期前期の治療事例をあげ、現代の子どもの児童期から青年期に到る問題点を浮彫りにする。そして、この時期の子どもたちをどう理解したらよいのか、述べる。	同上
14	現代の子どもたち	心理臨床の場で接する子どもたちを通して、現代の子どもたちの特徴についてまとめ、我々大人は、今後どのようにして子どもたちを理解していったらよいのか考察する。	同上
15	未来の子どもたち	これまで、①欧米の児童観から始まって、②日本の児童観を概観し、最後に、③臨床心理学の立場から、子どもをどう見るのかを考察してきた。今日は、それらの立場をふまえ未来の子どもたちについて、考察を進めたいと思う。	深谷昌志 小川捷之 舘昭

＝発達心理学Ⅰ＝

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

人生の各時期の精神発達の状況、現象を概観したあとで、発達心理学とはどのような科学であるのか、精神発達はどのような方法で研究されているか、「発達」についてどのような見方、考え方があるのかといったより抽象的な問題について考えてみることにする。つまり具体的な現象から理論的な問題へと考察をすすめていこう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乳児	乳児は、一般に母親との相互の社会的関係を通して成長・発達をとげる。本章では、胎生期の成長に続き、乳児期の身体・運動、知的機能、情動や性格などの発達的特徴を指摘し、それをふまえて初期経験の意義と養育のあり方を考える。	宮川知彰（放送大学教授） 寺田晃（東北大学） （対談）
2	幼児	幼児期の身体と運動、思考や言語などの知的機能の発達、自我や自立心・道徳性の芽ばえ、性役割の学習、性格、遊びを中心とした対人関係の形成を述べ、幼児期とはどんな段階かを検討し、家庭・保育所・幼稚園での指導問題を考える。	同上
3	学童	学童期における身体と運動機能、知的機能（とくに論理的思考と知識、言語）の発達、仲間との相互交渉を通じての行動空間の拡大、性役割と道徳性・自我意識の発達などについて考え、あわせて家庭、小学校の指導の問題点を指摘する。	
4	青年	青年期とは、いつからいつまでのことをいうのか、また青年期の「発達課題」は何かについて概述する。	宮川知彰
5	壮年	「精神発達」の過程では、新しい「能力」が獲得されていくと同時にこれまであった「能力」が失われたり減衰したりする。壮年期では若き日の何が失われ、何が新たに獲得されるのだろうか。壮年の社会的責任との関連でこの問題を考えてみよう。	同上
6	老年	20代以降、70～80才代に到るまでに、我々の記憶力、知能テストで測る知力等はどう変化するのだろうか。記憶力は年と共に衰えると言われるが、具体的にどのような変化があるのか。多くの実験結果を概観する中で、考察してみたい。	宮川知彰 星薫（放送大学助教授） （対談）
7	人間と人生	これまで6回にわたって人生各期の特徴を概説してきたが、今回は人生経過を全体として概観し、年齢の推移と共に変化する社会的な地位と関係づけながら、人生経過における人格特性の形成・変化の過程を考えてみよう。	宮川知彰

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発達心理学とは	発達心理学について、ヨーロッパ特にドイツとアメリカとでは、異なった視野・観点をもっているように思われる。この点を紹介するとともに、発達心理学はいかなる科学であるべきかについて考えてみる。	宮川知彰
9	動物における心理発達	進化の過程において、いかにして心理が発生し、また要素的感覚心理の段階から知覚的心理の段階へと発展していったかを考察する。その際動物の生活条件とそこにおける動物の活動に留意してその心理発達を分析する。	宮川知彰 松野豊 (東北大学) （対談）
10	動物と人間	人間に固有の心理は社会的起源をもち、媒介的構造をもち、意識性をもって働く、このような人間心理の生物学的前提は何であろうか、また人間の心理はどのような新たな生活条件と活動の下に生まれたのかを考察する。	同上
11	発達心理学のあゆみ	哲学、教育学、心理学、さらに生物学や医学など、隣接する人文・社会および自然諸科学の発展とあわせて、発達心理学が科学としていかに台頭し、その体系を整えるにいたったか、今日までのあゆみと問題点について具体的に検討する。	宮川知彰 寺田晃 （対談）
12	精神発達の研究法	一つの問題を解決するのには、その問題を解決するのに最も適当した方法を創案しなければならない場合が多い。それで発達心理学の領域でも幾多の独特な方法が考案されてきた。本構では、それらのうち基本的なものについて概説しょう。	宮川知彰
13	発達の理論	精神が発達するとはいったいどのようなことを指すのであろうか。そもそも「発達」は何か。この問題について諸家の考え方を概観し、できうれば首肯しうる発達理論を選択するとともに、新しい発達理論の建設の可能性をも考えてみたい。	同上
14	発達と学習	今日の子ども達には、「どうせダメだ」という悲観的な「発達観」に囚われている者が多いのではなかろうか。本講では、発達と学習との関連についての諸家の見解を概観して、「やればできる」という積極的な発達観の形成に寄与したい。	宮川知彰 野呂正 (宮城教育大学教授) （対談）
15	発達と障害	障害児とはどのような子どもか、その定義と類型、診断・判断の技法を、医学・生理学、社会学、教育学などの知見を含めて総合的に解説すると共に、発達に対し障害とは科学としていかなる位置づけをもつのか、その意義につき考える。	宮川知彰 大山正博 (東北大学) （対談）

＝発達心理学Ⅱ＝

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間の心理－行動は、一般心理学では、感覚・知覚・記憶・思考・言語等々というふうに、要素的な領域にわけて考察されている。発達心理学Ⅱでは、これにならって、人の心理－行動の発達を、上記のような要素ないし領域ごとにみてゆき、教育において発達心理学の果すべき役割について考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	身体の発達	人の身体とその運動能力の発達過程や性的成熟の過程を概観し、あわせて「発達加速現象」について考えてみる。	宮川知彰（放送大学教授）
2	知覚と記憶の発達	人間の知覚や記憶の機能がいかに形成され、その後それがいかに変化していくのかについて考えてみたい。	星薫（放送大学助教授）
3	思考の発達	動作を伴うことなしには困難な問題解決から視点が「中心化」してしまう表象での思考、具体的状況に拘束される論理的思考を経て純粋に抽象的、演繹的に展開できる思考へと発展する思考の発達特徴を概観する。	野呂正（宮城教育大学教授）
4	言語の発達	信号体系の中での言語、話しことばと書きことばの発達、言語と思考との関係、言語の行動調整機能の諸問題について発達的に考える。	同上
5	感情の発達	感情・情緒・情操とよばれる心理－行動の形態が発達するとはどういうことかについて検討して「情操教育」のあり方を考えてみたい。	宮川知彰（放送大学教授）
6	動機づけと教授学習	動機づけとは精神的諸活動がどんな状態にあることをさすのかを説明すると共に、特に教授＝学習が発達的にいかなる動機づけの過程で成立するのか、ならびに内発的ないし外発的な動機づけの手だてを中心として、教授＝学習の有効なあり方について検討する。	寺田晃（東北大学教授・放送大学客員教授）
7	物との交渉の発達	人間は、基本的には、物の世界と人の世界という交差する2つの世界の中で発達していく。ここでは、とくに、物の世界との関わりに焦点をあて、子どもが、それをどのように支配していくかということを発達的に考える。	野呂正（宮城教育大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会性の発達	「社会性」とは何か、また「社会性」の発達とはどういうことかを検討して、その発達過程のあるべきすがたを考えてみよう。	宮川知彰（放送大学教授）
9	愛着と分離	人の世界、とくに、ここでは、「愛着と分離」ということで特徴づけられる母子相互交渉に焦点をあて、動物研究の新しい知見をも参考にしながら、その世界の中で、子どもが、どのように発達していくか、また、発達のつまずきについて考える。	野呂正（宮城教育大学教授）
10	遊びと精神発達	物と人とが交差する典型的な世界としての遊びの中で、子どもたちは、何を、どのように発達させていくかについて、今日の子どもたちをとりまく遊び状況との関連で考える。	同上
11	知能と創造性	•知能とは何か ：現代人の知能観 知能概念の歴史的・理論的変遷 •知能テスト ：知能をどう捉えるか 知能測定のさまざまな試み 知能テストの有効性と限界 •知能の発達 ：さまざまな認知の働きとその発達 知能と文化 •創造性とは何か ：“創造的であること”とは？ •知能と創造性との関係 ：独立か異質なものか？ 以上の諸問題について考えてみよう。	柏木恵子（東京女子大学教授）
12	成熟と学習	学習の適期の問題を、とくに、ここでは、成熟と学習との関係という点からとらえ、その中で、伝統的なレディネス観のとらえ直し、そして新しいレディネス観の創造について考えてみる。	野呂正（宮城教育大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
13	自己意識の発達 と性格形成	• 自己の発見 ：鏡像の自己認知の成立 自己と他者の分化－物理的、心理的－ 自己像の拡大と深まり • 自己概念の発達 ：他者から見た自己の認識の成立 現実の自己と理想の自己 自己概念による人格形成 • 行動統制機能の獲得 ：他律から自律への道すじ • 性格形成と社会・文化 ：家庭環境の規定性 文化規範とのかかわり 以上の諸点について概述する。	柏　木　恵　子 （東京女子大学教授）
14	発　達　診　断	発達診断とは何かの定義と発達診断に関する諸理論を説明すると共に、具体的に身体と運動機能知的能力・人格・学力・適性などの精神的諸機能の発達に関する測定と評価、ならびに発達障害の臨床的な診断・判断の方法と技術、問題点などについて解説する。	寺　田　　晃 （東北大学教授・ 放送大学客員 教授）
15	発達心理学と教育	発達心理学ないし発達理論が「教育」にいかなる点でどのような貢献をなしうるのか、また「教育」に貢献しうる発達心理学ないし発達理論とはいかなる学問であり理論であるのかについて考えてみたい。	宮　川　知　彰 （放送大学教授）

＝ 学習心理学 I ＝

― 学習理論の基礎 ―

〔**主任講師**：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

学習は、人間の場合、模倣による問題解決や、創造による問題解決などの経験がつみ重ねられて、「人間らしさ」、「国民性」などが形成されることがある。が、望ましい方向とは限らない。ゆがんだ方向へ進むこともあり、エラーを直すのも、神経症・非行からの回復のための心理療法なども、学習にふくまれる。

主な項目

1. はじめに

学習心理学とは

学習とは、現実の環境のもとで、生活体（人間）が、経験を通じて、適応の仕方を変化させること。

学習心理学は、この学習に関係する心理現象について研究する科学である。

(1) どこまでも学習しつづける心理現象

(2) 慣れた段階のところで停滞する心理現象

(3) ゆがんだ方向へ進行する心理現象

(4) ゆがんだ方向から回復する心理現象

(5) 学習指導法の研究

環境　経験　適応　学習意欲　記憶力　思考力　応用力　協力　人間性　自己実現　心理療法

2. 学習と発達

経験と成熟

(1) 野生児の事例

アベロンの野生児、狐少女など、経験の役割

(2) 発達の最近接領域

経験によって、成熟が変化する。

(3) 経験による特殊性

国民性 …… 文化の型と性格

役割性格 …… 職業と性格

性役割 …… 男らしさ・女らしさ

(4) 成熟による普遍性

エリクソン（Erikson, E.H.）の「人生周期」

(5) 経験と成熟の相互補完性

3. 学習と勉強

いわゆる「勉強」をめぐって

(1) 学校教育の場合

学習指導要領（義務教育の段階）

(A) 教　　科

(B) 道　　徳

(C) 特別活動

勉強とは、(A)が中心である。

(B)・(C)は、勉強とはよばれていない。

(2) 意図的学習と偶然的学習

勉強は、意図的学習であるが、学習には、偶然時学習もふくまれる。予想もしないことをおぼえるのは、偶然的学習。

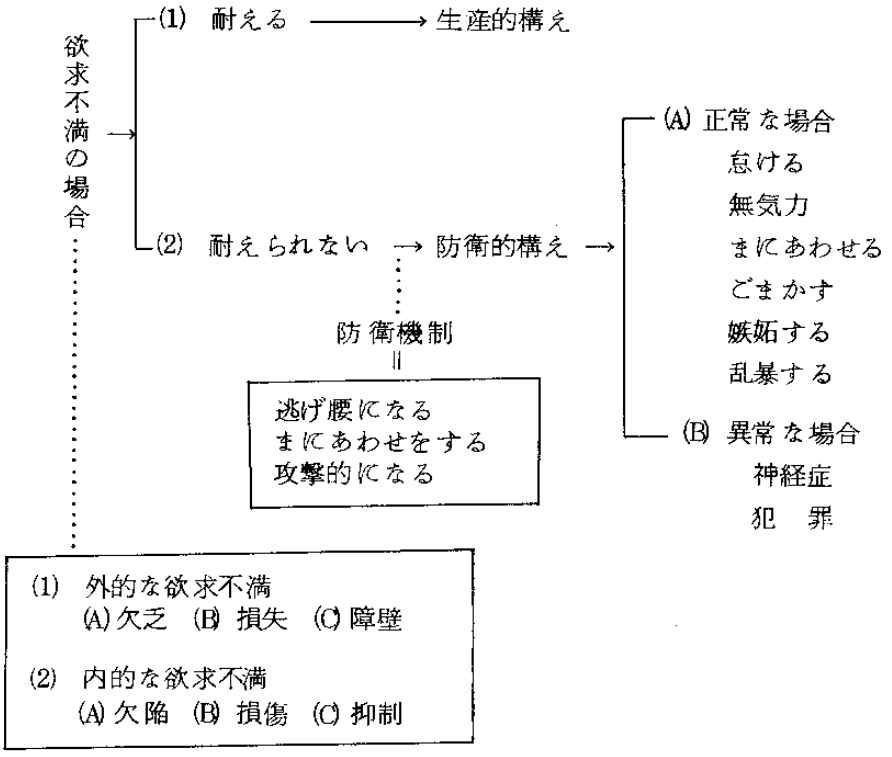
(3) 学習と勉強との一致

自分から進んで、自分を、当面している場合に打ち込むこと、つまり、自分自身への挑戦という点では、学習と勉強とは、一致する。

4. 学習の方向

望ましい方向の学習・ゆがんだ方向の学習

学習には、ゆがんだ方向の学習もある。



5. 学習の成立 (1)

条件づけ(I)

スキナー箱(Skinner Box) ⟶ テコを押すと、餌が出てきて、食べることができるようになっている。

(テコ) 条件刺激 Sc ⟶ (押す) 条件反応 Rc

Rc ……「強化」の随伴性

Su ⟶ Ru

無条件刺激 (餌) 無条件反応 (食べる)

特定の条件のもとで、特定の反応が形成される。

経験を通じて形成されるので、学習されることになる。

スキナー(Skinner,B. F.)		パブロフ(Pavlov,I.P.)
道具的条件づけ	――――	古典的条件づけ
オペラント条件づけ	――――	レスポンデント条件づけ
R型条件づけ	――――	S型条件づけ

正しい反応(期待されている特定の反応)ならば、欲求の充足につながっており、このために、正しい反応が形成されることになる。

動物の「調教」の原理でもある。

6. 学習の成立 (2)

条件づけ(II)

(1) プログラム学習(programmed learning)

Sc ⟶ Rc

Rc ⟶ Su ⟶ Ru

(C) 即時フィードバック
正しい反応かどうか、反応の直後に分かるようにする。

(A) 連続的漸進
小刻みに進めるようにする。
(自分のペースで進めるようにする。)

(B) 反応形成(シェーピング)
正しい反応をまとめるようにして、進める。

〔問題点〕

(2) 水路づけ（canalization）

最初の充足、反復、消去されない。

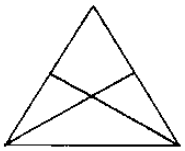
(3) 刻印づけ（imprinting）

初期学習（early leaning）、消去されない。

7. 学習の成立 (3)

認知構造の変化

環境がどのように認知されるか、その認知のされかたには、それなりの構造がある。その構造が認知構造である。



この図形に、三角形はいくつあるか。（正解　8つ）

3つとか、4つとか答える場合にしても、8つと答える場合にしても、それなりの認知構造が成立している。

認知構造は、認知地図ともよばれ、この地図によって行動が選択される。すなわち、認知構造によって、学習の成立は左右されるのであり、適切な学習の成立には、適切な認知構造が必要になる。

8. 学習と外発的動機づけ

生活体（人間）が、特定の方向へ行動するように、その生活体の外部から働きかけること。

代表的なのは、「賞と罰」である。

賞は、行動を促進させ、罰は、行動を禁止させ、回避させる。

しかし、賞の場合、ほめる、報酬を与えるだけでなく、「承認」の欲求の充足にかかわるような条件ならば、ふくめる必要がある。同様に、罰の場合、叱る、体罰などだけでなく、承認の欲求の否定にかかわるような条件ならば、ふくめる必要がある。

希望のもてるような環境ならば、賞に屈することになり、希望のもてないような環境ならば、罰に屈すことになり、要は、こうした点にある。

9. 学習と内発的動機づけ

生活体（人間）が、特定の方向へ行動するように、自分の内部において、自分に働きかけること。

興味、関心、解決の喜び、発見の喜び。

これらの他に、「認知的葛藤」も、注目されている。

驚　き …… 確信している知識に「ずれ」を生じる状態

当　惑 …… 答えがいくつもある状態

矛　盾 …… 両立できない状態

認知的不協和 …… 信じていたことが信じられなくなった状態

混　乱 …… 混沌としてつかみどころのない状態

不適切 …… 答えの出しようのない状態

しかし、内発的動機づけが、必要で、かつ十分な効果を示すには、「自信」の裏づけを欠くわけにはいかない。

10. 学習と模倣

問題解決（Ⅰ）

問題解決過程には、次の四つの段階がふくまれている。

(1) 問題場面

(2) 試行錯誤

(3) 手がかりの選択

(4) 見通しの成立

しかし、問題解決過程ではあるが、問題解決とはいっても、問題の提出者には、すでにして、問題は解決されている。すなわち、この問題解決過程をたどっても、問題の提出者の水準以上に出ることは難かしい。「模倣」以上に出ることは難かしいのである。

系統学習の限界性。

11. 学習と創造

問題解決（Ⅱ）

問題解決といっても、創造ということになると、与えられた問題の解決ではなく、問題そのものをつくり、その問題の解決をすることが必要になる。

発明、発見、創作などは、このような問題解決である。問題解決学習の必要性。

ブレインーストーミング（brain storming）とよばれている方法には、独創的な新しいアイディアをつくり出す際の必要条件がおりこまれている。

(A) 5－10 名程度のグループ

(B) 40−60分程度の時間

(C) ルール　1. 批判禁止

2. 自由奔放

3. 質より量

4. 改　良

(D) 課　題　（例）新聞紙の活用法

12. 学習と練習

学 → 学ぶ → 覚える → 習得

習 → 習う → 慣れる → 習熟

(1) 覚える

(A) 機械的に覚える

(B) 図式的に覚える

(C) 論理的に覚える

(A) → (C) は、暗記 → 理解になっている。

(2) 忘れる

(A) 理解(分かる)すると、忘れない。

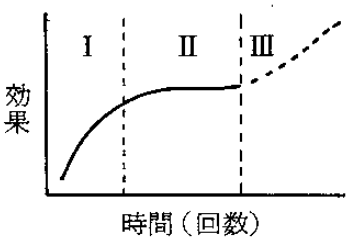
(B) 干渉 …… 順向抑制・逆向抑制

(C) 抑圧 …… 不快なことは無意識化されやすい。

(3) 慣れる

(A) ドリル学習、過剰学習

(B) 練習曲線 ……



(C) 練習の分配

全習法　分習法　直接反復法

漸進反復法　集中法　分散法

(4) 身につく(自己拡大)

13. 学習の転移

(1) 正の転移

(2) 負の転移

に大別され、「応用」が効くというのは、正の転移の場合。

その転移の条件について。

(A) 構成要素の一致

(B) 一般化(般化)

(C) 構造の等価

(D) 学習方法の学習

14. 学習と個人

(1) 個 人 差

(A) 個人間差異

(B) 個人内差異

(2) 個　　性

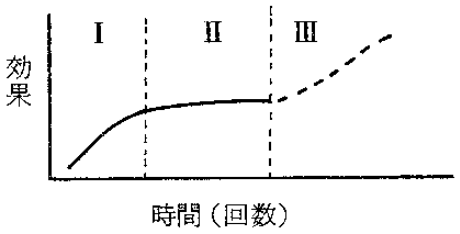
(A) 全体性としての個性

(B) 独自性としての個性

(3) 個別学習

(A) 時間制限法

(B) 作業制限法 …… （どこまで可能か）



第Ⅲ段階は、必ず成立する、とは限らない。

(4) 自己実現

価値の多様性

15. 学習指導

(1) 学　習　＝　（内的条件）～（外的条件）

⋮　　⋮

生活体（人間）の側面　　環境の側面

(2) 教　授　－　学習過程

(3) 教　授　－　学習理論

＝ 学習心理学 II ＝

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

この「学習心理学Ⅱ」では、「学習心理学Ⅰ」で中心とした基本的・一般的な原理を土台にし、「学習指導法」との関連をつけつつ、学習心理学全般にわたる重要問題の考察を試みる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人間の思考	集中的思考と拡散的思考、分析的思考と直観的思考を総合的にまとめ、「解決」、「理解」などとよばれていることをめぐって、「考える」とはどういうことかについて考察する。	小口忠彦（放送大学教授）
2	論理的思考	ピアジェの研究を中心にして展開する。 発生的には、「らせん的構造」になっている、という点と、「可逆性」という概念とに重点をおいて考察する。	同上
3	自己認知	思考の対象が自分自身である場合の思考過程を取り上げる。 そして、自己意識、自己評価、自己洞察などの概念との関連のもとで、問題にする。	同上
4	創造的思考(1) ―促進する条件―	アナロジー（類推）を中心にし、インダクション（帰納）、ディダクション（演繹）に対する、アブダクション（発想）とよばれている論理の基礎を考察する。 ゲストとの対談形式の導入。	小口忠彦 ゲスト 恩田彰（東洋大学教授）
5	創造的思考(2) ―妨害する条件―	慣れた側面にこだわる機能的固着性から、文化的条件にいたるまで、創造活動を妨げる条件を、はば広い範囲で考察する。 ゲストとの対談形式の導入。	同上
6	受容学習と発見学習	知識の「系統化」に基づく学習方法と、「学習方法」についての発見を中心とした学習方法との関連を問題にする。 受容学習の長所・短所を通じて、発見学習の長所・短所について指摘する。	同上
7	生活綴方と集団主義	集団における「個人」が中心の学習方法と、「集団」の在り方のほうに重点がかけられる学習方法との関連を問題にする。 生活綴方的方法の長所・短所を通じて、集団主義的方法の長所・短所について指摘する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	役割演技	仮にではあっても、「指導者」としての役割を演技する場合、本来（実際）の学習者としての役割の場合と比較して、学習は、より効果的に進む傾向がある。 このメカニズムをめぐって、考察する。	小口忠彦
9	学習意欲	学習意欲が低下し、その原因について診断することが必要になるような場合の分析を通じて、学習意欲とは何か、学習意欲を高めるにはどうすればよいか、について考察する。 ゲストとの対談形式の導入。	小口忠彦 ゲスト 本明寛 （早大教授）
10	人生周期	エリクソンの「人生周期」を俎上にのせ、経験と成熟、すなわち、学習と発達の関係について考察する。 ゲストとの対談形式の導入。	同上
11	ヒントの活用	ヒントも、依存する場合には、解決過程（思考過程）をゆがめる。では、依存するのではなしに、ヒントを活用するには、どのような条件が必要になるか。 こうした点を問題にする。	同上
12	エラーの訂正	誤りであることに気づくのも、学習である。そして、誤りであることに気づき、これを訂正するのも、学習である。 こうした点を問題にする。	同上
13	学習と心理療法	心理療法に、療法としての効果が成立する根拠を吟味すれば、経験によって適応の仕方を変化させる、という学習の機能であり、この点について考察する。 ゲストとの対談形式の導入。	小口忠彦 ゲスト 内山喜久雄 （新潟大学教授）
14	学習と行動療法	スキナーの「道具的条件づけ」を理論的根拠とする行動療法は、学習心理学では、新しい、しかも、重要な研究課題になっており、この行動療法について考察する。 ゲストとの対談形式の導入。	同上
15	学習指導法のまとめ	学習の根源を「創造」に求める立場をとり、したがって、学習指導法の基礎も、この創造に求めることになる。	同上

＝ 臨 床 心 理 学 ＝

〔 主任講師：村瀬孝雄（立教大学教授）
山口　勧（放送大学助教授） 〕

全体のねらい

1. 異常心理学の全体像、基本的考え方、およびそれらとの関連においてとらえられた代表的病理と現代的病理について述べる。2. 上述のような諸病理に対して、心理学的な援助・介入の考え方と技法およびその成果について紹介と考察を行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	異常心理学の全体像と基本的な考え方	異常心理学の対象は、創造性、宗教現象などをも含むが、ここでは焦点を病的現象に限定し、とりわけ心因性の病理と「いわゆる」内因性の病理および病的性格の3者をこの領域の中で位置づけた上で、基本的な接近法、異常性の価値、この領域の意義について述べる。	村瀬孝夫（立教大学教授）
2	a　神経症圏の中心的病理 b　犯罪心理学	1.神経症の定義と下位分類、2.診断と治癒の実際について…対人恐怖とヒステリー患者を例に用いて解説、3.不安、防衛、自我の強さ、4.性格障害の概念と反社会的性格、精神鑑定の実際	福島　章（上智大学教授）
3	精神病圏の代表的精神病理とくに精神分裂病と躁うつ病の心理	1. 精神病についてのもっとも基本的理解 2. 精神分裂病と躁うつ病の精神病理 3. 分裂病者、躁うつ病者への対応に際して留意すべき心理学的配慮	吉松和哉（東京都精神医学総合研究所）
4	心理学的な援助と介入 (1)　アセスメント ①目的、技法および過程	臨床心理学の立場から上述のような病理的現象と病者に対して行う援助的介入を展望しあわせてアセスメント（評価、査定）について、その目的と過程を中心に、総論的考察を示す。	村瀬孝夫
5	アセスメント ②面接の心理学	1.アセスメント面接の目的と特異性、2.面接にあたっての留意点、3.初回面接の重要性と実例解説、4.臨床面接の信頼性と妥当性。	同　上
6	アセスメント ③臨床心理検査総説	1.心理検査の歴史と指導、2.臨床心理検査の特殊性、3.検査法の分類と評価、4.活用上の留意点と戦略。	同　上
7	アセスメント ④代表的諸検査 Ⓐ知能の検査と質問紙法	a　ウェクスラー式知能尺度の基本的考え方と特性、この検査の解説と実用性 b　質問紙の一般的特質、効用と限界、代表的な質問紙検査3つ（YG、MPI、GHQ）	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アセスメント Ⓑ投映諸法	1.投映法の特質と分類、2.ロールシャッハ法および樹木描画法（バウムテスト）の説明と実例	村瀬孝夫
9	アセスメント ⑤解釈、総合伝達	「解釈」とは何か、仮説をつくり上げる力。仮説と現実との交流、総合的所見の重要性と困難性検査報告について。	同　上
10	心理学的援助、介入 (2)心理療法的接近 ①一般的特質	1.原点としての精神分析療法を粗描した後、心理療法の一般的条件と諸種の立場を、4つの流れに大別して概観する。2.心理療法の典型的過程について、一つのモデルを示して解説を行なう。	同　上
11	②第一の流れ 分析的認知的立場	不適応状態や病的心理は、基本的に、自他についての認知の不適切さに由来するとし、この是正を直接目指す立場、精神分析的洞察療法と「理性・情動」療法など、患者の知的理解を重視する諸流について、基本的な考え方と過程や技法を概観し、その長短にふれる。	同　上
12	③第2の流れ 関係中心的立場と体験的立場	1.アメリカ生まれのいくつかの立場では、治療者、患者関係を生きることそれ自体をもって治療的とみなした。治療者の提供する成長促進的態度について述べる。2.関係に加えて、個人が自己の内的な「体験過程」にフォーカスする技法を用いる立場を解説する。	同　上
13	④第3の流れ 行為・行動主義的立場	行動主義心理学の立場からは、完全に客観的にとらえられる行動（例・不登校）を、学習心理学の成果にもとづき、強化やモデリング等の技法を用いて変容しようとする。	小林重雄 （筑波大学教授）
14	⑤日本的心理療法 内観法と森田療法	日本で産まれ発展してきた全く独自の治療法が二つある。両者によって立つ人間観や、目指す治癒像は、基本的共通性をもつが、具体的手続きは全く対照的である。内観法は、回想的、倫理的、内省的であり、森田療法は行動中心的・集団療法的。	村瀬孝夫
15	⑥社会心理学的接近 Ⓐ集団内成員の病的態度改善 Ⓑ治療的ネットワークの心理学	異常心理の改善には、治療者と患者間の一対一の関係を活用するだけでなく、集団が成員におよぼす強力な影響力を活用する立場や技法が近年急速に発展してきた。これとは別に、生態心理学的観点からの環境調整などにも触れる。	山口　勤 村瀬孝夫

＝ 深 層 心 理 学 ＝

〔主任講師：織田尚生（放送大学助教授）〕

全体のねらい

無意識の構造に関する講義をおこなう。この際講義内容が単なる知識としてでなく、生きた体験として身につくように配慮する。深層心理学の二大潮流であるフロイトとユングのうちで、主としてユングの学説に従って話を進めるが、フロイトの説との関連性にも留意する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	意識と無意識	フロイトとユングがいかにして無意識の存在に気づくようになったか。その研究史について述べる。	織田尚生（放送大学助教授）
2	無意識の心理学	一般の意識心理学とは異なる無意識の心理学の特殊性に触れ、研究方法の違いについて論じる。	同 上
3	自我とコンプレックス	自我の機能、さらには自我がコンプレックスの存在によっていかに強く影響を受けるかを考える。	同 上
4	コンプレックスの解消	コンプレックスが解消される過程について、心理療法の実際に触れながら解説する。	同 上
5	イメージと象徴	深層心理の内容と密接に関係し、また重要な機能をもつイメージと象徴について、例をあげて考える。	同 上
6	夢とは何か	無意識の産み出したものである夢を取り上げ、そのさまざまな特徴について検討する。	同 上
7	夢分析について	心理療法の技法としての夢分析について、わかりやすく解説する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	親のイメージと元型	親のイメージを検討することによって、普遍的無意識とその内容である元型について述べる。	織田尚生
9	影とは何か	個人の心理のみならず集団の心理を理解する場合の鍵概念になる、影（shadow）の問題を論じる。	同　上
10	ペルソナとこころ	ユングのペルソナという概念を取り上げて、人間の外的および内的適応について検討する。	同　上
11	心の中の異性像	人間の心理的な成長のために、心の中の異性（アニマとアニムス）の発達が大切であることを述べる。	同　上
12	自我と自己	意識の中心をなす自我が、無意識の深層から自己によって統禦されている点を論じる。	同　上
13	現代社会と象徴	深層心理学から見た現代社会の特徴について検討する。	同　上
14	日本人心性と西洋	日本人の無意識の構造の特徴と、西洋人のそれとの比較について述べる。	同　上
15	発達論と全体のまとめ	全体のまとめと、相互の関連性を解説する。また発達論についても触れる。	同　上

＝教　育　社　会　学＝

〔主任講師：河野重雄（お茶の水女子大学教授）
新井郁男（上越教育大学教授）〕

全体のねらい

教育と社会の関係は一方向的ではなく、相互的なものである。教育は社会のあり方や発展をきめる重要な役割を果たすが、同時に教育のあり方や発展は社会の影響を受ける。このような社会の発展を規定しながらも、逆に社会の発展によって規定される教育を、人間の成長発達の過程とかかわらせて、ダイナミックに考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	社会現象としての教育(1) ～教育とは～	教育は、社会によってその内容、方法、形態、目的などは異るにしても、すべての社会に共通にみられる現象である。それは一体何故であろうか。このように教育の本質を社会との関連において考えてみる。	新井郁男 （上越教育大学教授）
2	社会現象としての教育(2) ～人間の発達と社会～	人間の発達は、単に生物学的・心理学的現象ではなく、人間が人間として発達するためには、人間社会、人間文化の働きかけが不可欠だという意味で、すぐれて、社会的現象であるということについて考える。	同　上
3	社会現象としての教育(3) ～実証性・科学性～	理念としての教育あるいは教育技術を志向する教育学ではなく、教育を社会的事実として、実証的に分析する。科学としての教育社会学の特性を明らかにする。教育社会学研究の歴史を概観し、さらにそこで用いられる研究手法について学ぶ。	岡崎友典 （放送大学助教授）
4	社会現象としての教育(4) ～色々な調査法～	教育の具体的な事象を、客観的に記述・分析するための、各種の調査法について、調査目的、調査対象などその特性別に考察する。統計的調査、事例的調査、集団実験などの手法についても示す。	同　上
5	学校の発達と社会の変化	教育を最も計画的、組織的に行う社会的制度として発達してきた学校は、長い歴史の中では、その目的・体系・機能などに変遷がみられるが、近年は急速な社会変化との間に大きなギャップを生んでいる。このような近況について考えるのが本講のねらいである。	新井郁男
6	学校の近代化と外国教育の受容	わが国の学校は、外国の教育をモデルとして近代化をとげたが、それのもつ社会的意義は何であったのか。世界でも最高水準に普及した今日の日本の学校教育は、もはや外国に学ぶところはなくなったのか。このような問題について考える。	同　上
7	学校の役割と機能	学校が社会から期待されている役割は何なのか、また、学校が現実に果たしている機能は何なのか。その役割と機能との間にどのようなギャップが生じているのか。このような問題を塾の発達と関連させて考えてみたい。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	職業としての教師	教職の性格をめぐって、これまで多くの議論がなされてきた。専門職論、聖職論、労働者論などを素描しつつ、ここではとくに「職業」として教師が果たす社会的役割を、多様な職種との対比をとおしてその特性を明らかにする。	岡崎友典
9	教師の養成と資格	教師養成の歴史を概観し、さらに高等教育機関で養成される「教員の資格」を、カリキュラムおよび教育実習の具体的内容によって示す。とくに近年注目されている、教員の再教育・研修の実態について、教育現場、教育機関の関係者から伝えてもらう。	同　上
10	生活者としての教師	新卒の青年教師から半世紀近い教職経験をもつベテラン教師まで、同じ教師でも、生活の体験はさまざまである。社会人としての生活体験が教育実践に反映される過程を、学校組織内の教師集団といった視点から明らかにする。	同　上
11	教育内容と社会	社会の中に存在するさまざまの知識の中から、教育の目的の観点から選択された教育的知識としての教育内容が、いかに社会と深くかかわっているかを、歴史的に、また、外国との比較によって考察する。	新井郁男
12	学校の文化	学校には、社会一般の文化を反映しながらも、教師の文化と生徒の文化という二つの文化によって構造化された独自の文化がみられ、これが学校の教育的働きを、促進したり阻害したりしている。この問題を新しい文化の創造という観点から考えてみる。	同　上
13	学校組織の機能	学校は教育を目的とする組織体（オーガニゼーション）であるが、やはりそれは社会の構造と無関係ではない。組織体としての学校は社会に規定されながら、一方、社会の構造を強化する働きをしていることについて考える。	同　上
14	教育と政治	教育は社会的機能のひとつとして、社会統制機能を有する。この意味では政治と類似しているが、教育がこの統制を内的に行うのに対して、政治ではこれが外的である点で、両者は相対的に独自な関係にある。この両者の関係を、今日の具体的事例に即して考察する。	同　上
15	教育と産業	近代社会の成立以降、産業の発展にとって教育は不可欠な条件となった。それは質的に高い労働力を産業に提供することはもとより、産業の構造の転換を促進するにたるだけの科学技術の進歩を教育が保障するからである。この点を歴史的に考察する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	教育計画	教育は百年の大計であるといわれるが、それだけに、社会の将来を予測し教育計画を立案することは難しい。したがってここでは未来社会論的にではなく、次世代を担う子どもたちの教育が、かれらをとりまく生活現実の中で、いかに計画的になされるべきか考える。	河野重男（お茶の水女子大学教授）
17	社会化とは何か	人間の発達の過程を、「社会化」及びそれと類似の概念である「文化化」などの観点から整理し、日本人の社会化の特徴について考える。	新井郁男
18	社会化 ～親の役割～	社会化は人間の一生にかかわる課題であるが、なんといっても、子どもの社会化は最も重要である。その子どもの社会化に、親はどのような役割を果たすべきなのか、という問題を現実の状況に照らしながら考えていく。	同上
19	社会化 ～職場・学校の役割～	基礎的集団である家庭から、機能的集団である学校・職場に社会化の機関が移行するにともない、社会化の機能は分化・深化する。ここでは、政治的社会化、職業的社会化、そして性的社会化など、学校・職場で展開される社会化の実態を把握する。	岡崎友典
20	社会化 ～地域社会の役割～	生活の場としての地域社会は、近年急激に変化しており、かつてのように個人の生活を全人格的に包括するわけではないが、その重要性は家族同様むしろ高まっているといえよう。現代社会の地域社会が社会化に果たす役割について、各種事例を通して考える。	同上
21	学歴社会の成立	学歴とは、個人が生涯で得た学校教育の経歴の全体をさすが、学歴主業イデオロギーが支配する「学歴社会」では、最終学校の社会的価値（評価）の序列化が、人々の最大関心事となる。学歴が物言う社会がどのようにして成立し、いかなる問題をもつか考察する。	同上
22	学歴と職業	学歴が一定の職業資格と相関関係をもつとしても、学歴が職業を決定するわけではない。むしろ職業が新たな学歴を要請するのが現代社会であるといえよう。ここでは学歴と職業との間のダイナミックな関係を、職業教育、職業的社会化、企業内教育などからとらえる。	同上
23	試験	義務教育後の教育機関への進学には、何らかの入学試験がともなう。資格試験、競争試験のいずれにおいても、そこで測られる学力の養成・習得をめぐってさまざまな教育問題が生じている。受験地獄に代表されるわが国の試験の状況を、学校段階別にとらえる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	社会の病理と教育の病理	社会と教育の関係はいうまでもなく相互規定的である。社会の病理現象が教育に反映されるだけでなく、教育の病理の進行は社会の進歩・発展を阻害する。両者の病理現象の実態を診断するとともに、いかなる処方箋が考えられるかについて考察する。	河野重男
25	問題行動 ～発達の病理～	近年、青少年の問題行動は枚挙にいとまがない。これらはいずれも、青少年が望ましい発達を阻まれているという意味で、まさに発達の病理にほかならない。ここではとくに、青少年の非行をとりあげ、非行を生み出す諸条件、非行の推移と現況の特質など考察する。	高橋均（武蔵大学教授）
26	学校の病理	登校拒否、校内暴力、教師のノイローゼなど教育実践にかかわる病理や、入学試験や就職などの学校制度や教育内容にかかわる病理について、その歴史的・社会的背景についてさぐるとともに、新しい形の学校教育についても検討する。	同上
27	学校の改革	第3の教育改革の必要性が主張されて久しいが、明確なものはいまだ出されていない。ここでは戦後新教育制度が、教育基本法の理念を、現実社会のなかにどのような形で実現させたかを明らかにすることにより、新たな教育改革の社会学を展望する。	児島邦宏（東京学芸大学助教授）
28	生涯教育論と学校	わが国の教育水準の高さは、教育機会の全国民的規模での普及によって示されるが、教育人口の爆発は、さまざまな教育病理を発生させている。高齢化社会が到来するなかで、教育人口をいかに適正配置するか、教育の質と量の両面から考えたい。	河野重男
29	情報化社会と学校	現代社会は、大量の情報が氾濫し人々を圧倒し、はては人間がその中に巻き込まれ、引き回され翻弄されて、あたかも人間が機材に使われるような状態を生み出している。ここでは「学習と経験による確かめ」の論理の浸透といった観点から教育の課題を提示する。	同上
30	国際化と教育	海外生活や旅行はもとより、直接出かけなくとも、他の国の人々や文化に接する機会が増大しているが、日本人のこれへの適応の仕方はきわめて消極的である。「国際理解の教育」や「海外子女の教育」を素材として、国際化時代の教育について考える。	新井郁男

＝ 教 育 の 方 法 ＝

〔主任講師：東　　洋（白百合女子大学教授）〕

全体のねらい

学習および発達に関する心理学的知見と教授の過程に関する実践的検討とをあわせ、単に既存の教育方法についての知識を得るのみでなく、新しい教育方法の開発、理解、評価の能力を獲得してもらいたいと思う。心理学、教育学、教育工学の諸分野から、数名の講師が分担して講述にあたる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教えるという仕事	社会化 文化の伝達と創造 教えのルート（賞罰、言語伝達、doing、モデリング、媒体） 発達と教育	東　洋 （白百合女子大学教授）
2	教えのスタイル	対決指導型と包みこみ参透型 日本の子育ての伝統 変動の時代に向って	同　上
3	家庭と学校	子どもの発達における家庭と学校の役割 変りゆく家庭のすがた 学校のすがた 子どもの理解	同　上
4	日本の学校と欧米の学校	日本の方が集団的、非言語的 日米幼児教育研究より	同　上
5	日本の学校とアジアの学校	日本よりも集団的、同時に言語的教育における重点の置き所の比較	同　上
6	いろいろな教育(1)	オープンエデケーション	加藤幸次 （国立教育研究所第四研究部第二研究室長）
7	いろいろな教育(2)	プログラム学習 完全習得学習 応答する環境	菅井勝雄 （大阪大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	いろいろな教育(3)	視聴覚教育・ニューメディア放送教育	高桑康雄 （上智大学教授）
9	いろいろな教育(4)	コンピュータと教育 CAI コンピュータ・リテラジー LOGO	東洋 鈴木靖子 (白百合女子大学助手)
10	いろいろな教育(5)	学習における理解と構造 仮説実験授業 極地方式 水道方式	
11	障害児の教育		森永良子 (日本電信電話株式会社伊豆通信小児リハビリテーション科副長)
12	人格の生長と教育	カウンセリングアプローチ 自我と自己認識 道徳について	東洋 繁田進 （横浜国立大学助教授）
13	よい教師はこのように育つ(1)		稲垣忠彦 （東京大学教授）
14	よい教師はこのように育つ(2)		同上
15	これからの時代と教育方法	情報化は教育をどう変えるか 国際化は教育に何を求めるか 主体性と柔軟性	東洋

＝　道　徳　教　育　＝

〔主任講師：宇佐美寛（千葉大学教授）〕

全体のねらい

道徳という事実の中心的部分は、社会的問題状況における個人の意志決定である。そして、どんな教育でも、この意志決定の能力に何らかの影響を与えている。その意味では、およそ教育というものは、道徳教育である。被教育者の道徳に影響しない教育などというものはあり得ないのである。だから、学校で行なわれている道徳教育一般を論じたのでは、学校で行なわれる教育の全てを扱うことになり、あまりに広くなりすぎる。そこで、この科目では、特に「道徳教育」を意識して計画的に特定の内容・方法で行なっている教育実践を論ずる。具体的には、いわゆる「道徳」の時間の問題を中心に論ずる。

主な項目

1. 個人の自由と道徳教育
2. 道徳における知識
3. 「道徳」授業の条件
4. 価値と徳目
5. 言葉と経験
6. 心　情
7. 形　象
8. 補充・深化・統合
9. 「道徳」授業の限界
10. 今後の道徳教育

＝情　操　の　教　育＝

主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）
　　：高萩保治（東京学芸大学教授）

全体のねらい

情操を育てる教育は、人間が人間であることを確める教育である。それはまた、現代の人間社会の危機を克服する一つの道でもある。今までの芸術教育とは異なる視点から、情操教育を考える。すなわち、人間の想像力や表現力を育てることを出発点とした、美的価値への感情や態度を築いてゆく意義と方法を、多くの事例に即して考えてみよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	情操とは －価値への感情－	情操とはなにか。人間の感情の働き、前頭葉の働き、の中で考える。 情操の中でもとりわけ、表現美の価値に対する感情を、根本に見定める。	片岡徳雄 (広島大学教授)
2	情操教育とは －表現し想像することから－	美的な価値に触れさせ、教えこんで、情操を育ててゆくのではない。情操教育は、表現し想像することから出発する。 ドイツのシュタイナー学校やその他の多くの事例で、このことを考えたい。	野村幸治 (広島大学助教授)
3	科学と情操と	情操教育は、科学の研究や道徳の教育と重なりあう。創造の喜び、創造の苦しみ、イメージの働きなどにおいて、である。 なお、最近の科学文明の問題に情操教育が果す役割についても考える。	片岡徳雄
4	芸術教育でなく	芸術教育は、情操教育の一部であっても、そのすべてではない。情操教育で大事なのは、その技術性ではなく、表現としての体験である。 美的とは、技術とは、そして芸術とは。	同　上
5	いま情操教育では	現在の日本の学校教育では、芸術教育はあっても、情操教育は弱い。四つの問題点－美術と音楽、文学、映像と総合、社会性、のそれぞれのゆがみ－について考える。	同　上
6	文学教育では	幼児から大人に至るまで、人は多くの物語や詩に接する。情操教育としての問題は？ 幼児の読み物、学校の文学教育、そして成人の読書、の実情に即して考える。	同　上
7	文学教育とは	人間にとって、文学とはなにか。そしてまた、文学教育はどうあるべきか。 様々な理論を検討した上で、人間性の理解と想像性の伸長、という目標をつきとめる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	音楽教育とは	音楽教育は、人間の情操教育にとって、重要な領域を占める。そこでまず最初に、音楽と人間のかかわり合いを幅広く考察する。次に音楽的な感動と表現の関係について触れ、それに関連して音楽教育への示唆についても考える。	高萩保治 （東京学芸大学教授）
9	いま音楽教育では	日本の学校音楽教育は、指導要領で鑑賞と表現の二大領域で指導するよう規定されているが、現状は教科書の歌の指導ということに片寄っている。そこで総合的な音楽指導の実践や、米国の包括的アプローチなどに触れ、情操教育としての音楽教育のねらいを考える。	同　上
10	これからの音楽教育	これからの音楽教育には、抜本的な発想の転換が必要である。音楽がコミュニケーションとしてあることに眼をつけ、音楽を「動き」のほかに、即興的に、五線譜から自立して、生き生きと表現することも含め末広がりな表現学を念頭に音楽教育を考える。	同　上
11	美術教育では	子どもはなぜ絵を描くか。好んで描いていたのが、なぜ急に描かなくなるのか。「自由画教育」派の考えに対する「技術指導」派の考え。絵の鑑賞など。美術教育の諸問題に触れる。	片岡徳雄
12	マスコミと映像の中で	現代は、映画やテレビやラジオなど、映像的・電波的マスコミの時代である。その中で、情操はどう育てられているか。 マスコミの強烈な影響の事実と、おくれがちな映像教育、について論じる。	同　上
13	総合の活動の中で	情操は、様々なからみの中で、総合的に開発される。 仲間の中から生れ、仲間を結びつける、表現活動－劇表現と祭りに焦点をあてたい。	野村幸治
14	社会の人間化として	現代社会の問題は、あまりにも科学技術化され、遊び的表現を見失なっているところにある。現代社会の人間化のために、遊びと芸術をどう育てるか。つまり情操教育への期待は大きい。	片岡徳雄
15	自己実現として	情操教育はまた、人間それぞれが自己実現してゆくための教育でもある。 自己実現とは、自己実現的人間とは、そしてまた、美的自己実現のもつ深さ・厳しさ・自由とは。	同　上

＝家　庭　教　育＝

〔主任講師：山村賢明（立教大学教授）〕

全体のねらい

家庭内のあれこれの場面で、子どもをどうしつけるかといった単なる技術論としてではなく、より広い視野に立って、家庭教育の本質的機能をとらえたい。そのために、家庭教育を人間の社会化過程の一環として位置づけ、そこにみられる問題を、日本の文化や現代社会のあり方との関連で考えてゆく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ家庭教育の考え方 (1)子どもの発達と家庭	子どもはどのようにして、一人前の大人へと社会化されてゆくのかを述べる。とくに人間が最初に遭遇する集団としての家族の役割をとりあげ、家庭教育が個々の家族の日常生活の現実に即して考えられなければならないことを示す。	山村賢明（立教大学教授）
2	(2)日本人の形成と家庭	親が意図すると否とにかかわりなく、日本の家庭においては、子どもは極めて幼時から日本人として形成されることを述べる。とくに基本的生活習慣や日本語の獲得を通して、日本の文化の本質的な部分が伝えられることを指摘する。	同　上
3	(3)家庭の教育・学校の教育	家庭や村落社会における自然な教育から、学校という専門的教育機関への移行という歴史的変化をふまえて、学校教育とは異なる家庭教育本来の機能は何か両者の関係はどうあるべきかを明らかにする。	同　上
4	Ⅱ家庭における人間形成 (1)母親の役割 －　愛の原体験	乳幼児期から青年期へという子どもの発達に対応した、母親の役割の変化を考える。そして母親の役割の中心が、将来様々な対象に拡大してゆく愛の感情を原初的に形成する点にあることを述べる。	同　上
5	(2)父親の役割 －　権威の原体験	子どもにとって、母親とは異った関わりをもつ父親の役割の諸相をとりあげる。そして結局父親の重要な役割は、規範や道徳意識の基礎にある権威の感覚を、子どもに最初に与えるところにあることを示す。	同　上
6	(3)性別役割としつけ	男女の性別役割が、まず家庭の中で父親・母親をモデルにして子どもに獲得されることを示す。さらに性別役割が社会や時代を通して不変のものでないこと。これからの男の子・女の子のしつけのあり方について考える。	同　上
7	(4)きょうだい関係の意義	親のもとでの親和と競争、対等と庇護といった微妙な関係を経験するところに、きょうだい関係の重要性をみる。同時に、そのような経験の乏しい、今日の「一人っ子的状況」のもつ問題点を考える。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	Ⅲしつけの日本的特質 (1)子ども観の問題	しつけの基礎にある子ども観を考える。日本の性善説的子ども観のもとでは、子どものコントロールにむずかしい点が出てくることを、とくに現代の状況から論じ、子どもに対する明確な言葉による要求の必要性を指摘する。	山村賢明
9	(2)母子関係への偏り	日本の親子関係においては、とくに母子の関係が濃密であることを示し、それが結果として、子どもの甘えを助長し、父親の影響を弱めて、規範意識をうすくさせるように作用することを論じる。	同上
10	(3)家庭からの集団主義	日本的集団主義の行動様式が、まず家庭生活の中でつくられることを示し、他方で、いかにして個人の自律性や主体性をのばすようなしつけを行うかについて考える。	同上
11	Ⅳ現代家庭のひずみ (1)育児不安と過保護	核家族化と情報過多は育児不安を、さらに子ども数の減少と生活水準の向上は過保護を、ほとんど必然的にもたらすことを述べ、それから脱出する方法や、祖父母との関係を考える。	同上
12	(2)「見えない父親」と子ども	現代の工業化社会のなかで、子どもたちから見えなくなる父親の存在、経済中心の生活のなかで子どものことを忘れる父親を問題にする。そしてそのような父親の回復なしには、子どもの問題行動の解決はありえないことを論じる。	同上
13	(3)母親による支配と管理	伝統的な母子関係の濃密さに加えて、ますます顕在化する母親、その母親によって先廻りしてすみずみまで管理される子どもの生活を述べそれが子どもに及ぼす影響る考える。	同上
14	(4)受験体制と家庭	社会全体にみられる受験体制の中で偏差値信仰にとらわれた家庭をとりあげる。そして教師とは異なるはずの子どもを見る親の目、子どもをとらえる勉強以外の多様な物指の必要性について考える。	同上
15	Ⅴ結び －新しい家庭教育の創造	本講座のしめくくりとして、社会・家庭・子どもをめぐる現代の問題状況のなかで、どのような形で家庭教育を再生させるか、その可能性をさぐる。そしてそれは、親自身の生き方の再検討をせまるものであることを指摘する。	同上

＝学　校　教　育＝

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では、学校教育の現状をふまえつつ、学校教育のあり方を理論的に深めていきたいと考えている。

全体の構成としては、1、2回で学校の紹介をした後3～6回を通して、学校の歴史的な系譜をたどる。7～10回で、学校の制度的な枠組を紹介した後、以下、各論の形で、学校教育の諸側面を検討する形をとりたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と学校	子どもの発達にとって、学校の果たす役割を〝いくつかの教育実践〟を紹介しつつ考えてみたい。	深谷昌志（放送大学教授）
2	日本の学校、その特色	諸外国の学校の姿との対比の中で、日本の学校の長所、短所をとらえ、問題を掘り下げていく。	同上
3	近代の社会と学校の成立	学校のあり方は社会の歴史的変化に対応して変わる。ここでは、近代学校をそれ以前にあった藩学や寺子屋などと対比して考えたい。	中野光（立教大学教授）
4	国家による学校教育の明暗	学校教育の発達とは何かを明治中期の教育政策を歴史的素材として、国家主義的な教育の明暗を解明してみたい。	同上
5	教育改造を求めた動き	大正デモクラシーの時代といわれた第一次大戦後の教育界に起った教育改造の動きを、画一化と個性との関連でとらえてみたい。	同上
6	戦後の教育の原点	敗戦を契機とした教育改造の動きを、6・3制の成立を中心に、原点に戻って考えてみたい。	同上
7	学校をめぐる法規	学校教育と法規との関連を子どもの学習権保障という立場から学校の実態にそくして考えてみたい。	下村哲夫（筑波大学教授） 深谷昌志

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学校経営の仕組み	学校の主体性を求める事が強い。主体的な学校づくりを目指すのに校長をはじめ教職員の協力関係をどう組織化したらよいかを考える。	下村哲夫 深谷昌志
9	教育内容と授業	学校の授業内容はどのようにして編成され、どこに問題があるのかを学力に関連させて考えたい。	同上
10	教育活動の展開	教科書、補助教材、クラブ活動、学校事故など、教育活動の展開に関連して生じるさまざまな問題をとらえる。	同上
11	学級集団の構造	小学校教育の中心は学級にある。そこで、学校の持つ意味を集団構造の視点からとらえてみたい。	深谷昌志
12	教師の仕事	専門職制との関連で、教職のあり方をとらえてみたい。特に教職の特性を研修のあり方に関連して考えたい。	同上
13	地域社会と学校	学校の役割を地域社会や家庭との関連で考えていく。教育と学校との違いも視野に置きたい。	同上
14	学校論の系譜	近代以降に限ってもさまざまな学校論が提起されてきている。そうした系譜を現代の視角から分析し跡づけてみたい。	同上
15	学校改革の可能性	学校改革の可能性を、諸外国の学校改革の状況を視野においてとらえてみたい。	中野光 下村哲夫 深谷昌志

＝ 地 域 社 会 と 学 校 ＝

〔主任講師：溝口謙三（東北福祉大学教授）〕

全体のねらい

学校は、国の政策による制度として普及発達してきた。しかし学校は異った地域社会の中にあり、子どもたちはその地域の中で生活し成長している。学校教育は、国の統制と地域社会の独自性とをどのように切結んでいくべきか。最近の社会と地域の変貌を背景にすえ、地域類型を軸にして、学校教育の在り方を多面的に考察する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	学 校 と 社 会	学校は、計画的な教育の場として、子どもたちを望ましい人間に形成し、社会人となることをねがう。子どもを受け入れる社会は、社会の進歩に役立つ人間を期待する。教育において、学校と社会はどのようにかかわるのか、その相互関係を考えて序論とする。	溝 口 謙 三（東北福祉大学教授）
2	学 習 と 社 会	人間は生まれた後に、多くの行動を学びとって人間と成っていく。その場は家庭、交友、学校である。これらの学習の場は一定の地域社会の中に在る。それが地域とどのようにかかわりまた支えられているかを理論的に考える。	同 上
3	教育における地域社会	地域社会とは、人間が生活する具体的な場である。教育においては、学校を中核として、地域社会をどう考え、どのような範囲ととらえるか。さらに最近の地域変貌が学校教育にどう影響しているかを検討する。	同 上
4	地域社会の中の教育	子どもは地域社会の中で生活し成長する。地域は、それぞれの伝統と条件にもとづいて慣習や規制や価値観などを〝仕込む〟。このような地域の教育力はどのようにはたらくのか。それが学校教育とどうかかわるのかを考える。	同 上
5	地域教育運動の歩み	地域と学校とを結ぼうとす動きは戦前からあった。さらに戦後は、新しい地域学校運動も起こった。これらの運動の歩みを通して、改めて地域と学校とのかかわりを見直す。	同 上
6	地域社会の変動と学校教育の変化	明治以来、国策としての近代学校制度は、それぞれの地域社会に支えられて発達してきた。最近の社会の変動と学校教育の変化によって、学校と地域との関係も変わり相互に離れてきたとされる。この事実を明らかにし、次の地域類型別の学校分析の仮説とする。	同 上
7	都 市 の 学 校	都市における子どもの生活と学校の様子を分析し、とくに過密とされる都市状況の中にある学校と地域の問題をさぐる。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	農村の学校	農村の子どもの生活と学校の実態を観察し、都市化といわれる中での学校のあり方をさぐる。	溝口謙三
9	へき地の学校	"恵まれない地域"とされるへき地は、さらに過疎化に苦しんでいるといわれる。しかし豊かな自然を温存するへき地では、マイナスの要因を逆転するきっかけが見出せないだろうか。へき地に成長する子どもたちと学校の様子をさぐる。	同　上
10	大きな学校・小さな学校	定員を定めない小・中学校では、大きな地域では子どもも多く学校も大きくなる。小さな地域では学校も小さい。学校規模の大小はどのように規制されているのか。またそれが学校教育にどのような影響を与えるかを考える。	同　上
11	学校統合と学校寄宿舎	学校の規模が規制され、とくに小さな地域の小規模学校が非効率とされると、統廃合がなされる。その結果、自宅からの通学ができなくなると学校寄宿舎に入ることになる。地域との関連で出てくるこのような学校の実態から、新しい教育の問題を考える。	同　上
12	大きい学級・小さい学級	学校規模の中に学級の大きさの問題がある。学級の大きさも法的に規定されてきたが、小さな地域では数人だけの学級も多い。学級はどれだけの大きさが適切か。ここから学校の集団教育の本質を考える。	同　上
13	複式学級	狭い地域でのごく小さな学校では、数こ学年を1学級に編成した複式学級になる。この"やむをえない"措置が固定化した現在の学級に多くの問題を投げかける。諸外国の学年別学級解体等を事例にしながら集団教育の意味を考え直してみたい。	同　上
14	地域社会と大学	"国"の政策として設置された大学は、戦後に「一府県一大学」の原則で再編された。しかし私立大学数ともからんで"地域"配置には大きな偏りがある。大学の本質から地域社会との関連性を考察する。	同　上
15	地域社会の生涯教育体系	いま構想されている生涯教育の体系を地域社会の基盤でとらえ、幼児保育、学童の校外活動、コミュニティ・カレッジ論などを、学校教育との関連でとらえて、地域社会と学校との関連の問題をしめくくる。	同　上

＝ 言 語 と 教 育 ＝

〔主任講師：村石昭三（国立国語研究所教授）〕

全体のねらい

人間の言語習得の問題に触れながら、言語発達に即した教育とはどうあるべきかを考える。このため言語の機能から始め、音声、文字、語彙、文法の諸能力の習得に触れ、表現、理解における創造性の問題までを扱う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	言語の機能	(1)伝え・伝わる (2)ことばの世界 (3)言い惜しみ、聞き惜しむ (4)ことばかけ、などに関する事例から、言語の機能とは何かを考える。	村石昭三（国立国語研究所言語教育研究部長）
2	音と声	(1)ことばの誕生 (2)リズムの世界 (3)音と声のひびき、などに関する事例から、子どもの持つ言語への直観力（言語感共）について考える。	同上
3	音から文字へ	(1)一音一字対応 (2)音と文字の有意味性 (3)ひらがなの機能、などに関する事例から、子どもにとって文字とは何かを考える。	同上
4	助詞の使い分け	(1)「も」と「は」 (2)未来年の文法 (3)助詞の習得 (4)助詞の修正 (5)文法への興味、などに関する事例から、機能語の問題を考える。	同上
5	語彙の習得ー好きな言葉ー	(1)好きな言葉 (2)「行く」と「来る」 (3)だんまりくらべ、などに関する事例から、語彙習得の順序性について考える。	同上
6	語彙の習得ー認知の方向性ー	(1)あべこべ (2)対義の複合語 (3)順行と逆行、などに関する事例から、認知の方向性について考える。	同上
7	語彙の習得ー助動詞ー	(1)助動詞はどれだけ (2)文化の変容と助動詞 (3)概念の発達と助動詞 (4)意味の構造化、などに関する事例から、概念形成とのかかわりについて考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	語彙の習得 ー概念の意味づけー	(1)仲間づくり (2)定義 (3)意味づけ、などに関する事例から、概念形成とのかかわりについて考える。	村石昭三
9	生活のことば	(1)保育に拾う (2)目主焼き (3)へのへのもへじ (4)ファンタジーの世界、などに関する事例から、生活のことばの意味について考える。	同上
10	絵本ー絵を読む	(1)絵を読む (2)話の先を読む (3)会話を読む (4)「見え」を読む、などに関する事例から、読みとは何かについて考える。	同上
11	ことば遊び	(1)ことば遊びとことばのしくみ (2)ことば遊びの特徴 (3)ことば遊びの種類、などに触れながら言語教育の中での意味を考える。	同上
12	ことばと創造性	(1)ことばの創造と子どもらしさ (2)創造性を育てる教育 (3)読みと創造性、などに関する事例から、創造性の意味を考える。	同上
13	話づくりと創造性	(1)ファンタジー (2)話づくりの技法などに関する事例から、文章表現と創造性の問題を考える。	同上
14	ことわざ・名言	(1)日本のことわざ (2)世界の名言などに関する事例から、言語生活における、ことわざ、名言の意味について考える。	同上
15	日本人の読み書き能力	(1)読み書き能力とは何か (2)日本人の読み書き能力などに関する国際比較や暦年調査の比較から言語と教育の問題を総括する。	同上

＝ 文 化 と 精 神 発 達 ＝

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

精神発達は、文化によって影響されるが、その文化は、逆に、精神発達によって影きょうされる、という仕組みになっている。こうした仕組みを前提にし、精神発達の望ましい発展についての考察を試みる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	文化とは何か	文化は、人間がつくるものであり、つくられると、いわゆる「ひとり歩き」すること、文化と文明の関係などの考察を通じて、文化とは何かの問題にアプローチする。	小口忠彦（発達と教育、放送大学教授）
2	文化の機能性と構造性	文化が、どのような構造のもとにどのように機能するか、について考察する。	同上
3	文化の生産性と防衛性	文化が、人間にとって、生産的であるか防衛的であるか、という特徴を重視する。	同上
4	文化の特殊性と普遍性	どのような文化にも、それぞれの特殊性があるが、同時に、それらに共通している普遍性がある点を重視する。	同上
5	精神発達 Ⅰ	精神発達の第1の観点。人類の立場。 個人主義的人間と、集団主義的人間との間の矛盾の問題が目立っている。	同上
6	精神発達 Ⅱ	精神発達の第2の観点。日本人の立場。 国際性への開放化の問題が目立っている。	同上
7	精神発達 Ⅲ	精神発達の第3の観点。個人の立場。 権威主義的傾向、独断主義的傾向、同調主義的傾向など、「逃避性」による傾向の問題が目立っている。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	未開社会と精神発達	いわゆる「未開心性」についての吟味を試みる。	小口忠彦
9	文明社会と精神発達	文明社会における能力開発はそれなりに評価するにしても、いわゆる「人間疎外」の問題にどう対処すべきであるか。	同上
10	乳幼児期と文化	初期学習による条件づけ。「刻因づけ」（刷りこみ）などをふくんだ初期学習による条件づけに文化がどうかかわるか。	同上
11	活動期と文化	ここで活動期とは、児童期、青年期、成人期をふくめているが、人間の生涯において最も活動する段階に相当している活動期に、文化はどのようにかかわるか。	同上
12	老年期と文化	人間の生涯における最終段階に相当している老年期に、文化はどのようにかかわるか。	同上
13	欲求と文化Ⅰ	生理的欲求、安全の欲求などの充足や欲求不満に、文化はどうかかわるか。	同上
14	欲求と文化Ⅱ	集団所属の欲求、愛情の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求などの充足や欲求不満に、文化はどうかかわるか。	同上
15	模倣と創造	文化遺産の継承と発展、あるいは文化の伝統と創造という問題は、つまりは、模倣と創造という問題である。この問題について考察する。	同上

＝青　少　年　文　化＝

主任講師：深谷昌志（放送大学教授）
　　：門脇厚司（筑波大学助教授）

全体のねらい

ひとくちに、青少年文化といっても、子ども文化と若者文化とでは実態も異なっているし、当然、分析のアングルも違ってくる。そこで、本講義では、子ども文化を前半、青年文化を後半で扱う形式をとることにした。文化論であるから、現実の姿を紹介すると同時に、そうした現像を理論的に深める点にも配慮することにした。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	青少年文化のとらえ方	青少年文化を、青年文化と子ども文化とに分け、それぞれの文化の特性を明らかにする。そして、青少年文化の現状を概観しつつ、次回からの内容を紹介する。	深谷昌志（放送大学教授） 門脇厚司（筑波大学助教授）
2	遊びの機能	子どもの人間形成にとっての遊びの意味を発達段階をふまえて考察する。続いて、「群れ型」から「孤独型」へ、遊びが変遷したことにより、子どもの発達にどのような歪みが生じたのかを掘り下げていく。	深谷昌志
3	玩具の変遷	さまざまな玩具を紹介しながら、子どもの心を豊かに育てる玩具はどういうものなのか。玩具の条件を考えていく。それと同時に、現代の玩具がそうした条件を備えているかどうかも検討していきたい。	同上
4	童話の世界	子ども雑誌を素材としながら、童話の成り立ちを紹介する。次いで、児童文学が低迷しているといわれる現代にふれ、童話が、これから先も、子どもの成長に欠くべかざるものなのかを考察していきたい。	同上
5	仲間集団のゆくえ	子どもの世界からギャング集団が失なわれ、現代の子どもは友をもたずに成長していく。そうした現状を視野に置きつつ、仲間集団の中で、子どもたちが身につけたものは何なのかを考えていく。	同上
6	テレビとのつき合い	テレビ抜きに、現代を語ることはできない。そうしたテレビとのふれ合いを、子どもたちはどうとらえているのか。子ども番組の変遷をふりかえりつつ、子どもにとっての望ましい視聴態度とは何なのかを検討していきたい。	同上
7	情報化社会の中で	テレビの他にも、マンガやゲームウォッチなど、子どもたちは、情報化社会の状況にとりかこまれて育っている。しかし、子どもたちに、間接体験の肥大と直接体経の縮小の傾向がみられる。そうした情報化社会の子ども文化を深める。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子ども文化の再生	子ども文化を再生するために、どういう方策が必要なのかを、遊び場や児童公園、キャンプなどと関連させて考えていきたい。なお、子ども文化は8回までで終り、次回からは青年文化を対象とする。	深谷昌志
9	青年期と青年	青年の行動特性を理解するには、少年期と成人期の狭間にある年齢段階に特存の行動特性と時代や社会の変化に敏感な年齢層としての青年集団に特徴的な行動とをみきわめておく必要がある。青年文化の前提を整理する。	門脇厚司
10	青年文化論の検討	近代日本の発展に果してきた青年の力は予想以上に大きなものであった。明治維新以来、青年は何を目指しどう生きてきたのか。ここ100年間の青年の活動を跡づけつつ、各時代に開花させた青年の文化を概観する。	同上
11	青年文化とその発生条件	現代青年の行動特性を理解するには、彼らを培ってきた時代的・社会的な背景を知っておくとよい。生活水準や学歴水準の上昇、核家族化や都市化、あるいは情報化やME（マイクロエレクトロニクス）化などが青年に与えた影響をみる。	同上
12	現代社会と青年文化	現代青年が志向する生き方ないしライフスタイルはどう特徴づけられるのか。また、そうしたライフスタイル志向を支えている価値観は何か、さまざまな調査の結果を整理しつつ、この点を明らかにする。	同上
13	現代の若者文化(1)	現代を生きる青年たちの生き方とそうした彼らが創りあるいは支えるさまざまな風俗や商品や産業などを3つに分けて紹介する。最初は、飽食する若者たちの姿をモノ（商品）、サービス、記号（情報）という側面から照し出す。	同上
14	現代の若者文化(2)	過剰なモノと情報とサービスにとりかこまれて、いま青年は飽きあきし退屈している。こうした若者が退屈しのぎにするさまざまな行いを紹介する。ばか笑い、スキーツ、セックス、音楽、ディスコ、そしてマリファナ、オカルトなどがそれである。	同上
15	青年文化の展望	群れてさわぎばか笑いする若者たちの心底も孤独だが、他人とのかかわりを避けひたすら自分の殻にこもろうとする若者も増えている。パソコン、TVゲーム、ウォークマン、個室などにこだわる自閉的な若者の姿と彼らの心象風景をみる。	同上

＝ 青 少 年 の 指 導 ＝

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

児童・生徒の指導のむつかしさが語られることが多い。子どもたちの成長のスタイルがことなってきたので、これまでの指導方法は有効性を失ないつつある。そこで、本講義では、青少年の指導のあり方を、青少年の実態をふまえつつ、現実的な対応も含めて総括的に堀り下げていきたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	指導とは(1) 人格の構造と発達	人格の構造を3つの領域に分け、教育作用として、よくわからせる、やり方を身につけさせる、やる気を育てるの3つを考える。また人格形成上の発達課題を幼児期から青年期までに分けてとりあげ、その達成のための方法をのべる。	坂本昇一（千葉大学教授）
2	指導とは(2) 指導の考え方	指導のねらいとしての自己指導の力の育成の意味、それを達成するためのアプローチ、すなわち子どもに自己決定を与える、存在感（自尊感情）を保証する、そして、人間的ふれあいを基盤にして行うの3つについて具体的事例で説明する。	同上
3	指導とは(3) 青少年の理解	青少年の理解のアプローチとして、共感的理解と評価的理解をあげる。前者については事例を中心にして説明する。後者は、主として客観化された検査を中心にする。たとえば、知能検査としてのビネー法や性格検査としてのロールシャッハ検査などを紹介する。	同上
4	指導とは(4) 指導の領域と内容	青少年が直面する問題を分類して7つの指導領域を示す。その中の適応指導と進路指導をとくにとりあげ、前者は帰国子女の問題などの例示により、後者は、学級指導の時間での進路指導のあり方を説明することにより、理解を深める。	同上
5	指導とは(5) 指導の機能と体制	生徒指導の組織と運営について説明し、さらに学校教育と社会教育の連携について、少年自然の家での活動やボランティア活動を例示して説明する。また、地域ぐるみの活動を展開するための組織・体制のあり方についても説明したい。	同上
6	学校の中で(1) 教師の仕事	青少年指導を実際に担うのは教師であろう。もちろん教師の主たる仕事が授業であるのはいうまでもないが、それと同時に教師は児童・生徒の精神面での成長にかかわりを持つ。生徒指導に関連させて、教職の意味を深めていきたい。	6～15は担当 深谷 明石要一（千葉大学助教授） 長野県岩村田小
7	学校の中で(2) 学級集団	学校の中の子どもたちは、教師から指導を受けるとともに、学級の友だちと時を過す。そうした友の存在は、子どもたちの学校での充足感と密接な関連を持つ。集団としての学級集団の特質を述べ、指導にあたっての留意点を指摘していきたい。	東京学芸大 児島 千葉市平山小 広森茂

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学校の中で(3) 学校の機能	学校は子どもにとって、生活の場でもある。ひとつの制度としての学校をどのように構成していったらよいか。学校のあり方を理論的に深めるとともに、将来の学校像の検討も進めていきたい。	角替弘志 （静岡大学教授） 静岡大学教育学部附属浜松小
9	学校の中で(4) 学力の構造	学校の主たる機能は学力をつけることだという。しかし、学力のとらえ方は、かならずしも一義的でない。中でも系統学習の中心の学力と生活単元を媒介とした学力とでは著しい対比を示す。そうした学力のとらえ方を整理し、理論化を図ることにしたい。	石井正司 （日本大学教授） 高山の市内の小学校
10	学校の中で(5) 学校文化	学校には、その学校なりのカラーがあり、そうしたカラーは児童、生徒の人間形成にインフォーマルではあるが、根強い影響を及ぼす。ここでは学校独自のカラーを学校文化ととらえ、その機能を多角的にとらえていきたい。	耳塚實明 （国立教育研究所） 村立（飛弾） 白川中学校
11	人間形成の観点から(1) 性差の形成	男らしさや女らしさをどう考えるのかは青少年指導にとって、中枢の意味を持つ。特に性差の縮小あるいは伝統的な性的分業意識のゆれ動きが目につく現在、学校の中で、性差をどう指導していったらよいのかを堀り下げていきたい。	神田道子 （東洋大学教授） 未定 （どこか家庭科の実践されている学校）
12	人間形成の観点から(2) 言語の社会化	現代の子どもたちはマス・メディアの中から育つ。そうした成長を、ここでは言語的な社会化の観点から堀り下げていきたい。特にバーンスタイン教授の言語的社会化理論を中心に、言語面での指導のあり方を比較教育学的な視野をまじえて展開していく。	萩原元昭 （群馬大学教授） 未定 （東京学芸大学帰国子女学級）
13	人間形成の観点から(3) 自然活動	子どもの成長に家庭は大きなかかわりを持つ。家庭の機能については、別の指導でもさまざまな形で扱われているが、ここでは子どもの人間形成の観点から父親や母親の役割を中心として、家庭の機能を問い直してみたい。	岡崎友典 （放大助教授） 親業トレーニングセンター
14	人間形成の観点から(4) 家庭の教育力	現代の子どもたちは、人工的な環境の中で成長し、自然とのふれ合いに欠く。その結果、生活体験などに乏しくなる。キャンプなどの指導が重要になるが、それは学校内での指導と異質なものであろう。自然活動プログラムを展開するさいの留意点を考えていく。	藤本浩之輔 （京大教授） 奈良県生駒での実験
15	人間形成の観点から(5) 人間形成のシステム	子どもの成長に関与する教育機関は学校に限らない。広い意味での社会教育機関も、人間形成にさまざまな影響を及ぼす。ここでは、そうした社会教育施設の持つ意味を学校と対比させながら洗い出し、人間形成のシステムを総括的にとらえてみたい。	元木健 （大阪大学教授） 天龍社会福祉センター

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	問題への対応(1)「症状の意味を考える」―偏食を例に―	子どもの問題行動を扱ってゆこうとする際に症状として表面に表われているものは一つの信号に過ぎず、その奥に真の意味がかくされていることが多い。食事行動の異常を例に、症状のもつ意味の多様性を考えてみよう。	深谷和子（東京学芸大学助教授）
17	問題への対応(2)「経過を見る」―ことばの異常を例に―	子どもは発達途上にある存在で時間と共に症状が少しずつ変化してゆくことが多い。早期に問題の所在を決めてしまうのでなく、経過を見てゆくことが大切である。遊戯観察の例なども紹介しながら発達の経過を見まもることの大切さを指摘する。	同上
18	問題への対応(3)「問題の根を探す」―登校拒否を例に―	同じ問題行動でも、その根には様々のものが関わっている。不登校（学校へ行かない）の例をひきながら、その根を掘り下げようとする試みの必要性を示す。	同上
19	問題への対応(4)「子どもを支える」―いじめを例に―	すべての問題行動の対応のしかたには治療者として共通に「子どもを支える」必要性がある。遊戯療法を例に使いながら子どもを支えることの意味を探ってゆきたい。	同上
20	問題への対応(5)「母親を支える」―母親面接を例に―	母親は子どもの最大の環境であり、かつ子どもに問題行動が生じた際に、重要な補助治療者の役割を果すものである。母親面接を通して、治療者はどう母親と関りこれを支えれば、子どもの問題行動の指導につながるか考えてみようとする。	同上
21	非行をめぐって(1)現状と背景	非行は第三のピークを迎えたといわれる。それと同時に、非行の幼稚化など、非行のさまがわりが説かれている。そこで、まず非行の実態をとらえ、その背景を探ってみたい。	青島文夫（科学警察研究所防犯少年部長）
22	非行をめぐって(2)非行の入口	非行といっても軽度のものから重度のものまでが含まれる。非社会性は、軽度な非行に属そうがここでは、そうした非行の入口的な症状をとらえその対応をまとめていく。	同上
23	非行をめぐって(3)女子非行	女子の非行は、女性らしさの形成にからんで、複雑な様相を呈する。ここでは、女子非行を例として、非行のメカニズムを掘り下げていきたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	非行をめぐって(4) 非行集団	非行というと、群れをなして、バイクをのりまわすツッパリグループがイメージにうかぶ。そうした非行集団がどういう特質を持ち、そして非行生徒が何故群れを組みたがるかなどを考えていきたい。	麦島文夫
25	非行をめぐって(5) 非行からの回復	ここでは、シンナー等の薬物乱用などを素材として、非行から回復（再生）するためにどういう対応が望まれるのかを、総合的にとらえていく。あわせて、諸機関との連携の必要性を説く。	同上
26	問題へのアプローチ(1) －精神分析－	精神分析の創始者フロイト、Sの考え方とその治療技法をわかりやすく紹介する。	小川捷之 （横浜国立大学教育学部教授） 乾吉祐 （慶応大学医学部講師）
27	問題へのアプローチ(2) －行動療法－	近年、アメリカを中心に盛んになった行動療法の基本的考え方と治療理論および治療技法についてわかりやすく紹介する。	小川捷之 中野良顕 （筑波大学助教授）
28	問題へのアプローチ(3) －カウンセリング－	来説者中心療法の創始者ロージャス、Cの人となりとその基本的な考え方、および、治療技法をわかりやすく紹介する。	小川捷之 飯長喜一郎 （お茶の水女子大学助教授）
29	問題へのアプローチ(4) －分析心理学－	ユング、C.G.の人となりとその考え方の基本について紹介し、その治療観および技法についてわかりやすく紹介する。	小川捷之 織田尚生 （放送大学助教授）
30	問題へのアプローチ(5) －箱庭療法－	ユングの分析心理学を背景にして生まれた箱庭療法についての基本的な考え方を紹介しあわせて人間の心が癒え、成長してゆくさまを具体的な事例にそくして提出し、検討してゆく。	小川捷之 織田尚生

＝カウンセリング＝

〔主任講師：佐治守夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

カウンセリング、教育相談、さらに広く、心理治療一般、（プレイセラピイ、グループセラピイ、成長グループの活動などを含む）、についての理論、及び実践に際しての重要なポイントを講ずる。

主な項目

(1) カウンセリング、心理治療とは何か

(2) 人格変化、人間的成長の様相

(3) カウンセラーの態度と技法

(4) 人間関係のもつ意味

＝　パーソナリティ論　＝

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学におけるパーソナリティ論で、解決を求められていたのは、従来としては、「知能＋性格」としての「よせ集め」の点であった、とまとめることができる。

この点を中心として、解決の方向づけを試みたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	パーソナリティとは	人間の「こころ」とは、の問題にアプローチする。 知情意にしても、意識と無意識にしても、知能と性格にしても、パーソナリティにかかわっており、「人格」とよばれている。	小口忠彦 （放送大学教授）
2	生産性と防衛性	パーソナリティの機能と構造として、生産性と防衛性について述べる。	同上
3	社会化と同化	パーソナリティの機能と構造として、社会化と同化について述べる。	同上
4	正常と異常Ⅰ	異常から正常へ、という順序をたどる。 この精神病理学的方法によれば、まず第一に指摘され、位置づけられるのは、精神病のなかでも特に注目される精神分裂病であり、次に、神経症・犯罪の類である。	同上
5	正常と異常Ⅱ	異常から正常へ、の順序のもとで位置づけられる正常な現象を分析する。 他律的、自律的、創造的という段階を設定することができる。	同上
6	自己修復	病識、病感、反省（自覚）などの現象が重要な位置を占める。自分の力で自分を制御することが可能かどうか、というところがポイントになる。	同上
7	自己実現	自己実現ということは、最広義には、精神病や、神経症、犯罪などをふくむが、限定していくことによって、可能性を「磨ぎ出す」という現象を指摘することができる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自己	どのように分析を進めても、「自己」(自分)としての存在を認め、これを前提にする必要がある。すなわち、パーソナリティは、「よせ集め」ではない。	小口忠彦
9	基本的人格構造	下部構造と上部構造という構造や、最頻的人格などの点について吟味する。	同上
10	人格類型	アイゼンク（Eysenck, H.J.）の見解を中心にし、従来の諸見解をまとめるようにつとめる。	同上
11	性善説	カウンセリング、心理療法で見解をまとめて立場としたロジャーズ（Rogers, C.R.)によって代表される。	同上
12	性悪説	フロイト（Freud, S.）による「死の本能」を中心とした見解である。	同上
13	非性悪説	性善か、中性であって、性悪ではない、という見解であり、マズロー（Maslow, A.H.）がその提唱者である。	同上
14	矛盾説	人間は、出生とともに、自然・人間との間に矛盾を生じ、この矛盾による不均衡のために、絶えざる均衡化を求める、という立場をとるフロム（Fromm, E.）に代表される。	同上
15	人格心理学	比較心理学、発達心理学、学習心理学、社会心理学、異常心理学などをまとめて、人間の「こころ」を科学的に説明しようと試みる。一般心理学、あるいは基礎心理学とは区別する必要がある。	同上

＝ 人 間 関 係 論 ＝

〔主任講師：三隅二不二（大阪大学教授）〕

全体のねらい

人間関係の三つのレベル、即ち対人関係、集団・組織、文化のうち集団・組織に重点をおく。集団力学として、集団規範の形成、同調と逸脱、競争と協同のダイナミックス等、又、組織の人間関係として、小集団活動、リーダーシップ、意思決定について述べる。実践面としては教師のリーダーシップ、事故災害予防と人間関係に及ぶ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	人間関係の科学	人間関係における親密な関係、即ち、夫婦、親子、友人関係から、集団や組織の人間関係、即ち、グループダイナミックス、組織心理学にわたる社会心理学の基礎概念と方法について述べ、人間関係の行動科学の特徴と限界について述べる。	三 隅 二不二（大阪大学教授）
2	対人関係の心理	二者関係、三者関係における人間関係のダイナミックスについて、社会心理学、グループダイナミックスの観点から考察し、ハイダー理論とその限界、社会的な交換理論とその限界などについて述べ、対人関係における公平性、平等性、そして公正とは何かを論ずる。	同 上
3	家族の人間関係	家族における人間関係、夫と妻の関係のグループダイナミックス、親と子供の関係、両親の子供に対するリーダーシップの客観的評定について触れ、また家族における葛藤の解決離婚、非行の問題にふれ、比較文化論的に家族における人間関係にふれる。	岡 堂 哲 雄（文教大学教授）
4	集 団 力 学	K．レヴィンによって命名されたグループダイナミックスの基本的視座を述べ、初期に行われた二つの実験、即ち、民主・専制・自由放任型リーダーの比較研究と、食習慣変容を目的とした集団決定の実験について述べてアクション・リサーチの意義にふれる。	三 隅 二不二
5	同 調 と 逸 脱	同調行動の発生機序、その実験的研究や現場研究として、ミルグラムの通行人の実験や、知覚判断におけるシェリフの自動運動の研究アッシュによる知覚判断の実験を述べる。又、集団における同調機能として、規範的影響と情報的影響を述べて逸脱過程の諸相にふれる。	同 上
6	競 争 と 協 同	日常生活における競争と協同がもたらす社会心理現象の分析を行う。とりあげる問題としてはドイッチ、シェリフらの実験、集団関係の葛藤処理の他、ゲーム場面を通じての競争と協同にふれ、最後に対人関係、集団関係における対立や紛争処理の方法と効果にふれる。	古 畑 和 孝（東京大学助教授）
7	偏 見 の 心 理	個人や少数者集団、弱者集団・民族に対する偏見がどのような発生機序で発生するか、そのメカニズムに対して論じ、その偏見の実態と、偏見解消への方策について、客観的立場から追求する。	白 井 泰 子（愛知県コロニー発達障害研究所主任研究員）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	組織における人間関係（Ⅰ）	近代組織としての近代官僚制のもつ組織論についてマックス・ウェーバーに即して述べる。そして、現在の視点より、今世紀初期に行われたホーソン工場実験から見出された人間関係の意義に触れて、その後行われた米軍兵士の研究と小集団の再発見について述べる。	三隅　二不二
9	組織における人間関係（Ⅱ）	第2次世界後の、ミシガン大学のＩＳＲで行われた産業モラールサーベイで見出された小集団、人間関係の意義にふれ、我が国で展開されているＴＱＣ、ＱＣサークル、自主管理活動にふれ、組織における小集団の意義と限界にふれる。	同上
10	リーダーシップ	リーダーの人物特性論の限界にふれ、リーダーシップ行動スタイルの研究にふれ、その方法論と、それにもとづく客観的研究、特にリーダーシップＰＭ論にふれる。リーダーシップＰＭ論については、企業、官庁、スポーツ集団等のＰＭ尺度とその妥当性にふれる。	同上
11	意思決定	アメリカ合衆国のハーウッド社で行われた集団決定に関する研究、三隅等が西鉄や某造船会社・海運会社で行った事故予防と組織開発のアクションリサーチ、フレンチとカッツの古典的実験、ムルダーの意思決定と権力格差短縮仮説等にふれる。	同上
12	教師のリーダーシップ	従来の教師論の研究史の展望、及び教師資質論について批判的吟味を行う。次に、教師のリーダーシップ行動に関する尺度作成の過程にふれその妥当性を吟味した上で、小学校・中学校・高等学校の担任教師、教科担当教師に見出された二つのリーダーシップを述べる。	同上
13	事故予防と人間関係	事故災害に関する心理学的研究にふれ、事故予防と人間関係に関する実証的データを示し、その関連について述べる。三隅等が行ったバス運転士の事故予防に及ぼすリーダーシップの条件と、集団決定法、造船・海運場面における事故予防の研究にふれる。	同上
14	ゲーム理論と人間関係	ジャンケンゲームの構造を述べ、ジレンマ・ゲームとして囚人のジレンマゲーム（ＰＤＧ）を説明し、ゼロ・サムゲームにもとづく対人関係の相互作用過程を述べ、集団関係や国際関係のパワーゲームに及ぶ。	戸田正直（北海道大学教授）
15	日本人の人間関係	日本人に関する実証的研究として、林知己夫等の日本人研究の概括を行い、文化人類学・社会学の立場、臨床心理の立場からの日本人論を相互比較して全体の結びとする。	林　知己夫（放送大学教授）

＝ 知 能 と 創 造 性 ＝

〔主任講師：田中正吾（神戸女子大学教授）〕

全体のねらい

ヒトの知能と脊椎動物の知能を比較し、知能の発達の諸様相とその理論、素質、環境論争を概説する。また知能検査の歴史、その理論と応用面について考察する。さらに知能と創造性がどのように人間の文化の発展に貢献してきたか、また人間が当面している諸問題の解決に知能と創造性の教育がいかに重要であるかを考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	知能とは何か	知能の定義、知能の種類としての具体的知能と抽象的知能を知能検査の演示により考える。また人間の文化が知能とどのような形でかかわっているかを考察する。	田中正吾（神戸女子大学教授） インタビュー 伊藤隆二 芳賀純
2	ヒトの知能・動物の知能	脊椎動物（アユ、ニワトリ、ネコ、イヌ、サル、チンパンジー、イルカなど）の知能実験を通して、知能的行動の進化のあとをたどり、ヒトの知能と脊椎動物の知能の相違を調べる。また脳の進化と関連にも言及する。	田中正吾 ゲスト 正井秀夫（大阪大学教授）
3	知能検査の歴史	ゴルトン、キャッテルなどビネー以前の知能検査の考え方に始り、ビネーとシモンの知能検査の作成、ターマンのスタンフォード・ビネー改訂知能検査、ウェクスラー知能検査などの歴史をたどり、教育、産業界などへの利用に言及する。	同上
4	知能検査の理論	知能検査における年令尺度の構成、年令尺度の性質、標準化とサンプルの理論、さらに知能検査の妥当性の問題、信頼性の算出法などを説明する。	同上
5	精神年令と知能指数	精神年令の意味と限界、知能指数の公式、知能指数の意味、知能指数の恒常性、教育や職業指導への意味について言及する。	同上
6	知能の発達 (1)	具体的知能と抽象的知能の発達の諸相を調べるとともに、言語の発達における知能の役割を述べ、知能の発達曲線（クロス・セクショナルとロンジチューディナル）の性質を述べる。	同上
7	知能の発達 (2) 遺伝か環境か	知能の発達におけるネィチャー・ナーチャー問題の論争、一卵性双生児による研究とその研究方法の限界について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	知能とパーソナリティ	パーソナリティーの定義と意義、パーソナリティ検査の種類を叙述し、パーソナリティと知能の関連を説明する。	田中正吾
9	知能と学業成績	数学、国語、理科、社会科、外国語などの知的教科の成績および図工、音楽科など芸術的教科の成績と知能検査成績の相関を調べるとともに、教授方法の採用如何によってこの相関関係が変ることを説明する。	同上
10	知能と教育	知能と知能検査に対するさまざまな批判に答えるとともに、教育における知能の正しい考え方、知能検査の正しい用い方、知能検査のもっている限界などを考える。	同上
11	科学の創造性	科学技術上の創造性がどのようにしてもたらされたか、科学者の基礎的トレーニング、仮説のたて方、問題解決の過程について述べるとともに、そのユニークな解決について考察する。また創造性の発達曲線と知能のそれとの比較を行う。	同上
12	美術の創造性	絵画など造型美術の創作過程における主題、構図、表現様式の基礎として、イメージの形成構造のダイナミックス、およびそのユニークさの原因とその社会的背景について考察する。	田中正吾 ゲスト 川崎春彦 （画伯）
13	音楽の創造性	ソナタ、交響曲、ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲などの作曲過程における第1主題、第2主題とそのヴァリエーションなどの考察を通じて、楽想の創造性を考える。	田中正吾
14	文学の創造性	小説などの創作過程における主題、表現様式、言葉の選択などの考察を通じて、作者の精神構造のユニークさと文学の関連性を考える。	同上
15	創造性と教育	科学教育、美術教育、音楽教育、文学教育の諸領域で創造性を伸ばすための個性に合ったカリキュラムの編成法、個別指導の方法、学級編成の問題点などについて検討する。	同上

＝認　知　と　思　考＝

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）〕

全体のねらい

認知心理学の主たる起源は、ゲシュタルト心理学におかれるが、その発達と展開には、情報理論、コンピューターの技術とプログラム、言語学、ピアジエの認知的発達理論に影響されるところが大であった。そして、最近においては、心理学の各領域に認知的なアプローチがみられるようになった。

本講義では、認知的アプローチの活発な記憶の研究を中心とし、さらに、推理による問題解決の問題にふれたいと思う。

主な項目

(1)　認知的心理学の歴史

(2)　情報処理系としての人間

(3)　感覚的記憶

(4)　短期記憶

(5)　長期記憶

(6)　数学的問題解決

＝ 教　育　評　価 ＝

〔主任講師：肥田野直（放送大学教授）〕

全体のねらい

教育評価は「点数をつけること」を意味すると考えられやすい。しかし、本来の教育評価は、児童・生徒の個性に応じた指導を行い、その実態に即して教育条件を改善するために必要な情報を集め、それぞれの目的に適した形で提供するものである。受講者の身近な経験を素材としながら、教育評価についての理解を深めたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育評価とは	「教育評価」にまつわる暗いイメージに代わる積極的意義を考える。評価を行う主体は誰か。評価の対象となる児童・生徒の諸特性や教育プログラム等の教育条件にはどんなものがあるか。評価は何のために行うのか。これらの枠組みを概観してみる。	肥田野　直（放送大学教授）
2	自己評価と動機づけ	評価を行う者が、自己理解・他者理解・相互理解を深めるために自己評価・他者評価・相互評価が行われる。これら三者の関係を考える。次に、評価によって生じる動機づけが外的動機づけから内面化された内発的動機づけに移る過程を考える。	同　上
3	学習過程の評価	今日的行動変容には結果を知ること、つまりフィードバックが必要である。プログラム学習のような個人学習から教室場面のような集団学習に至るまで、学習の各段階で行われる形成的評価の機能を考える。	同　上
4	学習結果の評価	一つの学習が完結するたびに、総括的評価が行われる。その評価基準のとり方によって到達度評価と集団内相対評価とがある。さらに個人内評価や診断的評価についても考えたい。	同　上
5	態度・習慣の評価	基本的生活習慣や学習態度の形成は家庭教育でも学校教育でも基本的な教育目標と考えられている。この態度・習慣の評価の方法や評価結果の解釈について考えてみる。	同　上
6	興味・意欲の評価	学習における興味・関心は学習指導上に必要な評価対象であり、職業に対する興味は進路指導にとって欠くことのできない評価対象である。また、達成動機の評価は生徒理解の一つの鍵となる。これらの評価の方法等について考えてみる。	同　上 宮　本　美沙子（日本女子大学教授）
7	適性の評価	適性という言葉は多様な意味をもっている。適性の中でも音楽才能などは幼児期から分化し早期教育の対象となる。また、進学適性や職業適性は青年期になって分化し、その評価は進路選択に大きな役割を果たす。	肥田野　直

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	性格の評価	児童・生徒の性格によって賞罰の効果が異なるなど、性格と指導法との間には密接な関係がある。暴力・いじめなどの問題行動に関連して欲求不満耐性が重視されている。人格形成を促す指導に有効な性格の評価法を考える。	肥田野　直 高橋一郎 （東京都荒川区立第6中学校教頭）
9	友人関係の評価	学校や地域社会の集団生活において、対人関係特に児童・生徒の友人関係が重要な意味をもっている。親や教師が友人関係を表面的にしか把握していないことが深刻な結果をもたらす例が少なくない。友人関係の評価方法について考えてみたい。	肥田野　直
10	学力テストの使い方	学力テストは学習の動機づけ（予告効果）や定着化に役立つが、テストのための学習という態度を育てやすく、テスト不安をもたらすなどの好ましくない影響を与える。学力テストの有効な使い方、児童生徒による自己採点、答案の返却方法などについて考える。	同　上
11	教育テスト・心理テストの意義と限界	教育テスト（学力テスト等）と心理テスト（知能、性格、適性テスト等）の正しい実施方法と結果の解釈法について考える。その例として教師の期待効果について述べる。	同　上 井上健治 （東京大学教授）
12	通知簿と指導要録	通知簿は学校ごとに工夫されているが、その例を若干紹介し、親と子が通知簿をどう見たらよいかを考える。また、公的記録である指導要録の評価の形式、特に学習の記録についての5段階の相対評価をめぐる諸問題を取り上げてみる。	肥田野　直
13	資格試験と選抜試験	評価は個人及び集団の指導の一環として機能するだけでなく、社会の組織の一部として機能する。社会制度としての資格試験と選抜試験の特徴と役割を検討し、制度化された教育評価の意義と問題点を考える。	同　上
14	学力調査	教育内容や教育制度を改善するために、実態特に学力水準の調査が行われている。国内及び国際的学力調査のねらいと方法について考えるとともに、調査結果をどう解釈すればよいかを考えてみる。	同　上 赤木愛和 （国立教育研究所研究室長）
15	教育評価をめぐる諸問題	知能指数（IQ）、学力偏差値、5段階相対評価、内申書、高校・大学入試など教育評価は社会問題として取り上げられ、論争が行われてきた。その問題の争点にはわが国の社会的、教育的風土が深くかかわっている。教育評価の立場からこの問題を考えてみたい。	肥田野　直

＝乳幼児の健康と心理＝

〔主任講師：平井信義（大妻女子大学教授）〕

全体のねらい

児童学pedologyの立場、子どもを心理学、教育（保育）学、保健学、文化論、障害児論（精神衛生）などさまざまな分野から研究しながらそれらを総合する立場から、とくに子どもと直接触れ合うなかで、子どもから学ぶ（禅の言葉：三尺の童子を拝す）姿勢で研究したわれわれの成果を中心に、からだと心の問題を講ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人格形成の理論と人間関係	発達的観点と教育的（治療教育的）観点に立って人格構造論および形成論を総括してみると、からだは心の環境であり、心すなわち人格は自発性と自己統制の能力を柱にしており、後者は思いやり（共感性）が育つことによって形成されているという結論に達した。	平井信義（大妻女子大学教授）
2	自発性（とくに意欲）の発達と育児・保育	自発性の発達に伴って意欲がさかんとなり、いきいきと遊ぶ子どもになるが、そのためには、いたずら（探索活動）、おどけ・ふざけ、反抗、けんかなどが大きな意味をもっているが故に、それらを抑圧しない育児・保育をいかに実現したらよいかを論ずる。	同上
3	共感性（とくに思いやり）の発達と育児・保育	思いやり（共感性）とは、相手の立場に立って相手の気持を汲む能力であるが、それは、大人（とくに母親）から思いやりを受けることによって発達する。それ故に、いかに思いやりのある母親になるための努力をしたらよいかを、育児・保育の具体性の中で述べる。	同上
4	言語発達・社会性の発達と育児・保育	言語発達には個人差が著しく、それは素因にもとずく面もあるが、乳幼児期の母子関係と密接な関係がある。また、社会性には友人関係の発達と生活習慣の自立があげられるが、前者は情緒の安定と自発性の発達と密接に関係している。後者は、決して急がないこと。	同上
5	知的発達と育児・保育	知的発達には個人差が著しく、それは素因による面もあるが、発達速度が関径していることを考慮すべきである。知能テストによって測定しようとする試みもあるが、誤りを犯しやすい。また、知的な面を優先させて育児・保育をすると、人格形成のゆがみを作る。	同上
6	身体発育と運動機能の発達と育児・保育	身体発育には個人差が著しく、それは栄養の条件によることもあるが、多くは素因にもとずくから、良否の評価は慎重でなければならない。また、運動機能の個人差は運動の機会が十分に与えられているかどうか、困難に挑戦する意欲が養われているかどうかと関係する。	同上
7	家族関係の育児に及ぼす影響	家族関係は、子どもの人格形成に及ぼす影響が大きく、夫婦関係が調和しているか否かが母親の育児を左右するし、さらに年寄りが同居している場合には、姑嫁の関係が母親の育児に影響する。また、年寄りの孫に対する態度も、人格形成を左右することがある。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	集団保育、幼稚園と保育所	集団保育の中で、とくに幼稚園と保育所の問題を取り上げ、両者のちがいを述べ、とくに保育内容や方法について、子どもの自発性(意欲)と思いやり（共感性）とを育てる望ましい保育について述べ、さらに小学校教育との相違について明確にする。	平井信義
9	児童福祉の理論と実践、施設	児童福祉には、健全育成の面と、心身に恵まれない子どもに対する保育・養護の面とがある。そのための施設およびその運営と理論的背景について講ずる。なお、世界で最も理想的養護施設であるＳＯＳ子どもの村での実践とその考え方を紹介する。	同　上
10	児童と環境、自然、文化財、社会環境	児童を取り巻く環境、とくに自然、それに代る児童遊園、文化機（遊具、玩具、ＴＶ、ラヂオ、絵本その他多数）について望ましいものを紹介するとともに、地域環境がどのように子どもの心身の発達に影響を及ぼしているか、われわれの研究を紹介する。	同　上
11	問題（こころとからだ）の早期発見と治療教育(1)	心身に問題をもっている子どもには、弱視（盲）児、難聴（ろう）児、言語障害児、肢体不自由児、病虚弱児、精神薄弱児、情緒障害児などがいるが、それらについて早期発見と早期療育の現状について述べ、今後の療育のあり方について考想を語る。	同　上
12	問題（こころとからだ）の早期発見と治療教育(2)	とくに心に問題のある子どもについて、さまざまな問題行動の原因と治療方法を述べ、とくに人格形成上のゆがみが育児・保育によって生じており自発性の発達不全や情緒の不安定によることを述べ、治療の方法としてとくに遊戯療法を紹介する。	同　上
13	思春期問題から見た乳幼児期	思春期以後の子どもの問題、例えば登校拒否、学習意欲の喪失、神経症、心身症、自殺企図、家出・非行などはすべて人格形成上のゆがみと考えてよく、その萌芽はすでに乳幼児期にある。その早期発見と対策について述べ、予防するための育児・保育を考える。	同　上
14	文化人類学と国際比較から見た育児	文化人類学は、とくに未開社会の研究によって、親子関係や育児および人格形成について、豊富な提案を行ってきた。また、育児や教育についての比較も、わが国の育児や教育を考える上でさまざまな示唆を与えてくれた。それらを紹介しながら、今後の育児を考える。	同　上
15	今日的課題（トピックス）	現在、世界に起きている子どもの問題のトピックを紹介する。例えば、アフリカなどの子どもの飢餓状態、アメリカで増加している親に虐待を受けている子どもたち、欧米での育児法の180度の転換、わが国にのみ多発している登校拒否などについて原因を考える。	同　上

＝児童の心理と教育＝

〔主任講師：東　　洋（白百合女子大学教授）〕

全体のねらい

精神の発達と、教育および社会環境的諸要因との相互作用を概説し、知能、学力、情意に関し最近数年間に急速に集積しつつある研究成果の分析に立って、発達と教育とに関する通説の若干を批判的に検討する。特に知的発達と自我の形成の問題に力点を置き、心理学を勉強しようとする者に発達・教育的視点を、又、教育に関心を持つ者に心理学的視点を提供することを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの精神発達をどうとらえるか	講座の導入として、子どもの精神発達についての概論。（特にそのさまざまな考え方について）	東　洋（白百合女子大学教授） 永野重史（国立教育研究所第3研究部長）
2	最初の一年	active な反応の発達、環境との相互作用、道具への反応などの問題も含む。	永野重史
3	親と子	出生前後から子どもへの期待、母性意識の形成、母子相互作用、愛着の形成、母親の仕事。	東　洋 上村菊朗（伊豆逓信病院小児科医師）
4	言葉の誕生	ジェスチュアや喃語からどのように形式的な面と機能的な面との両面において言語が発達するか。	永野重史 村石昭三（国立国語研究所言語教育研究部長）
5	知的能力、その概念と最近の研究	知能とはどういうものか。その知能検査と意味。	東　洋
6	子ども時代の始まり	赤ちゃんと子どもはどう違うか。子ども時代の発達課題。	永野重史
7	表象能力の発達	イメージの世界、イメージによる思考。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	言語と思考	言語と思考、言語発達における問題や異常。	永野重史
9	論理的思考と知識構造	表象的思考から具体的概念的思考を経て論証的な思考の能力が形成されるまで。	同上
10	子どもと友達	自己中心性からの脱却、競争と協力、友達関係のひろがり。	東洋
11	行動基準の形成と発達	社会は、その社会の成因としての行動の型を各個人について形成していく。つまり社会化の働きをもつ。この社会化の働きを行動の基準の形成との関係で考えてみる。	同上
12	自我の発達	依存から独立へ、心理的離乳の問題、児童期の精神衛生。	東洋
13	子どもから大人へ	１１、１２歳（小五）の段階での論理的思考力の発達や、社会関係、情緒面での諸問題	永野重史
14	教育と発達	課題によって、その学習に適切な発達上の時期があるという考え方の紹介と、それを教育上どう考えるか。	永野重史
15	健康な精神発達をたすけるために	すこやかな精神発達を助けるためにどういうことをすべきか。	東洋 永野重史

＝青少年の心理と教育＝

〔**主任講師**：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

「青年期」とは人生経過の中で、どのような意義、使命、役割をもつ時期なのであるか、また、どのような「問題」をかかえているかを、主として教育心理学・発達心理学・社会心理学等の諸分野の立場から多面的に検討し、青年教育のあるべき姿を展望する。

主な項目

(1) 青年心理学の歴史
(2) 青年期研究の方法
(3) 青年期の始まりと終わり
(4) 性 ― 青年の心とからだ ―
(5) 反抗 ― 人生の中の青年期
(6) 余暇活動 ― 青年の生活構造
(7) 仲間・友情 ― 青年の対人関係
(8) 学習 ― 青年の学力・人格形成
(9) 非　行
(10) 登校拒否・家庭内暴力・自殺
(11) 校内暴力
(12) 進路の選択 ― 学歴社会と青年
(13) 青年の生きがい等

＝障害児の心理と教育＝

〔主任講師：寺田　晃（東北大学教授）〕

全体のねらい

障害児の教育は、人間の尊厳を問い教育の本質にせまるものである。本コースでは、前半に総論として、まずそうした障害児がどんな子どもなのかと診断・判断の方法、研究法を検討すると共に、後半の各論では、障害の類型別に、心理の発達的特徴と教育の方法、福祉の在り方などを一連に考え、障害児への一般的理解を深める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	障害児とはどのような子どもか	障害児とはどのような子どもか、その定義と類型を主に心理学、社会学的、医学・生理学的な見地から総合的に解説する。障害児は、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱、虚弱、知能、情緒、学業不振、重複障害の各子どもである。	寺田　晃（東北大学教授）
2	障害教育の目的と歴史的発展	障害児に対する学校教育の理念と目的（目標）、普通教育とのちがい、特殊教育の現状などを述べ、あわせて障害児に関する研究、教育（養護）一般の歴史的なあゆみについて論ずる。	同　上
3	障害児の研究の課題と方法	障害児の病理（身体・諸器官、大脳ほか）、心理（認知、人格、情動、社会的行動ほか）の各分野にわたり、従来の研究とその傾性を概括し、現下の障害児教育・心理の研究の課題性を指摘する。	同　上
4	障害の原因と診断・判断	主に医学・生理学、心理学の見地で、障害児の心身に関する病理と障害の一般的様相を述べ、かつ医学、心理学による測定・評価の方法を説明することによって、科学的な診断の実際的技法と問題点とを解説する。	同　上
5	発達と障害（Ⅰ）発達の仕組みと機能	発達とは一般にどのような機構のもとに、どんな段階を経て展開するのかを個体発生の側面から検討し、従来の発達理論を各種紹介すると共に、発達に対処して障害がいかに位置づけられるものであるかを考察する。	同　上
6	発達と障害（Ⅱ）障害児と家庭・学校および社会	発達における親の役割と意義、障害にかかわる家庭的条件、親子関係の一般的状況、学校教育の意義、障害児の学校での行動状況などを考察することにより、発達と障害の特に２次的（環境的）な効果に言及し、家庭および学校での教育の適切な在り方を検討する。	同　上
7	感覚障害論（Ⅰ）視覚障害児の心理と教育	視覚障害児の身体、認知能力（感覚、知覚、思考ほか）、学習能力、人格、情動および社会的行動などを通じて、視覚障害児の心理的な発達と特徴を概観し、医学的所見をも加えて、主に盲学校教育の現状と最適化を検討する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感覚障害論（Ⅱ）聴覚障害児の心理と教育	聴覚障害児（言語障害を含む）の身体と認知能力（特に感覚、知覚、思考と言語との関連で）学習能力、人格・情動と社会的行動の各発達と特徴を把握し、主にろう学校教育の現状と最適化を考えることにより、感覚障害論をまとめる。	寺田　晃
9	身体・運動障害論(Ⅰ)肢体不自由児の心理と教育	主に医学・生理学、心理学の立場で、肢体不自由児の身体・運動の障害特徴をとらえ、認知能力、人格・情動等の発達をも論ずることにより、治療教育ならびに職業的リハビリテーションの現状と養護学校教育の最適化を考える。	同上
10	身体・運動障害論(Ⅱ)病弱児・虚弱児の心理と教育	前章とならび主に医学・生理学、心理学の見地から、病弱児・虚弱児の身体・運動上の障害特徴、ならびに心身発達の相互関連性を論じ、健常児への復帰、養護学校教育の現状と指導の最適化を考察し、身体・運動障害論をまとめる。	同上
11	精神発達障害論(Ⅰ)知能障害児の心理と教育	知能障害児の身体・運動、認知能力（思考と言語を中心に）、人格・情動ならびに社会的行動の障害特徴を述べると共に、特殊学級、養護学校および施設での教育・訓練・養育の現状と指導の最適化、社会適応等を論じる。	同上
12	精神発達障害論(Ⅱ)情緒障害児の心理と教育・治療	主に心理学、医学、社会学的な見地から、自閉傾向、登校拒否、施設症ほか情緒障害の子どもの心身の諸特徴を述べ、学校教育での現状と、家庭教育を含めた指導の在り方、教育相談等について考察し、精神発達障害論をまとめる。	寺田　晃 大山正博 （東北大学医療技術短期大学部教授）
13	学力障害論 ― 学業不振児の心理と教育	学業不振および学習障害の子どもの定義、診および類型を述べ、心理的（人格を中心）、境的（家庭、学校、社会）な側面からの特徴不振の原因を指摘し、学校教育および教育相を中心とした指導の効果、適切な措置の在りについて論ずる。	寺田　晃
14	心身障害児の福祉と生活	障害児の福祉の理念、福祉行政を含む福祉の構造および職員の養成などの形態を考察すると共に、重複（重症）障害を中心として、相談指導、症療育、施設療育、収容保護などの実践的問題を、医学、心理学、教育学その他の分野から論ずる。	同上
15	障害児教育の展望	第7章から第14章までの各種障害型の特徴を総括し、『“障害児”とは（そして“人間”とは）何か』を論及しつつ、障害児研究と教育の意義ならびに今後の問題点を展望する。	寺田　晃 新谷　守 （東北大学助教授） 大山正博

＝生　涯　教　育　論＝

－生涯教育学の成立をめざして－

〔主任講師：麻生　誠（大阪大学教授）〕

全体のねらい

生涯教育理念は、わが国でも漸次、教育政策や教育制度、教育組織、教育課程などに影響を及ぼすようになった。だが、生涯教育は、教育の自由と平等、学習と教育との間の矛盾に代表されるような二律背反的要素を内にふくんでいる。このような生涯教育理念を現代の教育現実と関連させながら、新らしい生涯教育学を構想してみよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生涯教育の理念	生涯教育は、人々の自己実現を達成させるために、人々の全生涯を通して人間的、社会的、職業的な発達を援助する教育の仕組みである。ややもすれば言葉だけの美辞句に終ってしまう恐れのある生涯教育理念を全体社会のなかに位置づけて総合的・統一的観点からとらえ直してみよう。	麻生　誠（大阪大学教授）
2	生涯教育の社会的背景	人間は「生涯にわたって学ばねばならぬ」ということは古くから言われてきた。この意味で、生涯教育は古き理念である。しかし、最近生涯教育論が唱導されてきたのはこの古き理念の新らしい意味を引き出すような社会的条件が発生してきたからである。	同　上
3	生涯教育と学習要求	生涯教育は、何よりも国民の生涯にわたる学習要求を前提としている。だが、あらゆる人間が生涯教育を享受しうる継続的な学習要求や学習能力を持っているものであろうか。この問題を考えてみよう。	同　上
4	日本の生涯教育のルーツを探る	生涯教育理念は、それぞれの社会や国によってこのニュアンスが異っている。その理由の一つは、国々の文化的、教育的伝統が異っているからである。わが国の生涯教育のルーツを幕末の教育書に探ってみよう。	同　上
5	教育政策のなかの生涯教育	わが国の国レヴェル、地方自治体レヴェルの教育政策のなかにどのような生涯教育課題がどのような文脈で現れてきているかを明らかにし、さらにその問題点を考えてみよう。	同　上
6	生涯教育と放送利用	放送は、生涯教育機会を社会に拡散させるのに大きな力を持っている。しかしまた、教育上無視できない限界をあわせ持っている。これらの限界を克服し、放送を生涯教育に生かす手だてを考えてみよう。	同　上
7	生涯教育を欧米に見る(I) －アメリカの生涯教育－	欧米の生涯教育政策・制度を概観しながら、生涯教育の教育政策や教育制度上の課題を考えていこう。まず、生涯教育の先進国といえるアメリカの生涯教育の特徴をみてみよう。	同　上 ゲスト 天野郁夫（東京大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	生涯教育を欧米に見る(II) ―イギリスの生涯教育―	イギリスでは、歴史的に学校卒業後、職業的継続教育が整備されており、他方、労働者教育運動から生まれた市民的成人教育があり、これらがイギリスの生涯教育の二本柱となっている。	麻生　誠 ゲスト 市川昭午 （国立教育研究所第二研究部長）
9	生涯教育を欧米に見る(III) ―スウェーデンの生涯教育―	福祉国家として名高いスウェーデンの生涯教育は学ぶべき点が多い。高等教育の開放、北欧の伝統的成人教育としての学習サークル有給教育休暇や奨学金政策などの種々な学習保障活動をみてみよう。	同上 ゲスト 市川昭午
10	生涯教育を欧米に見る(IV) ―ソビエトの生涯教育―	社会主義体制下の生涯教育の事例としてソビエトをみてみよう。そこでは、政府主導型、官僚制、画一性などのデメリットが生じやすい。これらが如何に克服されているのであろうか。	同上 ゲスト 川野辺敏 （国立教育研究所指導普及局長）
11	生涯教育の体系と行・財政問題	生涯教育論には、行・財政論が欠けていると批判される。誰でもが「何時でも何処でも学習できる」という生涯教育シュラムの行・財政的基盤を探り、生涯教育システムを確立するには、行政がどう変わるべきかを検討してみよう。	同上
12	地域社会と生涯教育	私たちの生活は、私たちの生活国としての地域社会を基盤としておこなわれている。このような地域社会のなかで地域住民に対してどのような教育機会が提供され住民の学習要求をどのように充足させているかを、一つの事例をとりあげて考えてみよう。	同上
13	発達課題と生涯教育	人間の発達過程のそれぞれの時期に現われる達成すべき課題を発達課題という。これらの課題を首尾よく達成することによって健康な人格が形成される。現代日本の発達課題とその解決に生涯教育のはたす役割を考えよう。	同上
14	成人教育学（アンドラゴジー）をもとめて	これまでの教育学は子どもを対象とするものであった。生涯教育の時代とともに、成人が対象とする教育方法論や教育課程論が必要となる。このような要請に答えて誕生した成人教育学（アンドラゴジー）である。その成果を紹介しよう。	同上
15	日本の生涯教育の必要性と可能性を求めて	わが国の生涯教育を支える三本柱である学校教育システム、社会教育システム、職業訓練システムの実態と問題点を明らかにし、生涯教育の必要性と可能性を考えてみよう。	同上

＝言　語　障　害＝

〔主任講師：内須川　洸（筑波大学教授）〕

全体のねらい

ことばによるコミュニケーションは、人間が社会生活上不可欠の機能である。この講座は、この機能に障害を示す人々の諸問題の理解を助けるよう言語障害学をやさしく解説した入門である。(1)言語障害の概説、(2)発達と言語障害、(3)人間関係と言語障害、(4)聴覚と言語障害を主柱として、各種の言語障害とその予防並に改善を論じた。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	言語障害とは	言語障害とは何か。定義の問題をコミュニケーションの立場から考察する。それに基づき８種に分類し、それぞれの言語障害について、出現率、障害の特性、問題点に関する解説を行う。合わせて今後１５回にわたる講義聴講に関するオリエンテーションを兼ねる。	内須川　洸（筑波大学教授）
2	言語障害の心理と教育	総論の第１に、人間の心理面から言語障害を考察し、そこに包含される　約側面か理解を深めるため、罰、欲求不満、不安、罪悪感、攻撃性の心理について解説する。さらに我が国の言語障害教育について、発展の経緯、現状、問題点、課題に関して紹介する。	同　上
3	言語障害の生理と病理	総論の第２に、ことばの連鎖（チェーン）、すなわち言語の特徴であるフィードバック過程を解説し、その面から障害の発生を考察する。とくに発声・構音・リズムの生理および病理を解説する。さらに言語の中枢過程である象徴機能と大脳の仕組の概要を述べる。	同　上
4	発達と言語障害	総論の第３に、言語の特徴の別の側面、発達について考察し、障害の発生の基礎条件としてのスピーチ・レディネスについて述べる。さらに言語発達に関連する諸要因を器質的、情緒的、環境的の３局面から考察し解説する。また、言語学習の原理を分りやすく述べる。	同　上
5	人間関係と言語障害	総論の第４に、言語機能面に着目して、その４大機能を解説するとともに、特にコミュニケーション機能における考察を深める。言語的・非言語的コミュニケーション、直接的言語関係・間接的言語関係、言語の二大様式、すなわち音声言語と文字言語の特徴を述べる。	同　上
6	言語発達遅滞児の理解	今回から言語障害の各論の第１に言語発達遅滞児をとり上げ、その理解を深めるため、発達の診断面を重点に論じる。遅滞の器質的・環境的・人間関係的諸要因について述べ、診断法について、観察法、各種検査法、分析法などにふれて解説する。	同　上
7	言語発達遅滞児の治療・教育	幼児を中心として言語発達遅滞児の言語治療法を解説する。これに関連して近年米国のコロラド大学で開発された集団内反応言語療法（INREAL）を紹介する。さらに言語発達を促進する聴きとり能（Listening Ability）開発法、人間関係改善法などについて述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	吃音児(者)の理解	吃音児(者)を診断・評価する方法について学習する。そのため言語・身体・心理の3側面の理解に必要な基礎知識を学び、重症度の判定法、吃音行動の観察法、検査法について解説する。吃音を幼児吃、学童吃、成人吃に便宜上区分し、それぞれの特徴を理解する。	内須川　洸（筑波大学教授）
9	吃音児（者）の治療・教育	吃音児(者)の治療・指導問題を中心として、幼児吃音・学童吃音・成人吃音の治療上の相異を概略述べる。また治療・指導上留意すべき点として、各種治療法の特性を紹介し、この使用計画の立て方を学ぶ。成人吃音の場合には、吃音者の生き方吃音の克服を重視する。	同　上
10	構音障害児(者)の諸問題	構音障害のさまざまな種類について、原因、言語症状、治療経過、予後などを紹介し、構音障害の診断手続を解説する。とくに構音テストの種類実施方法などにふれる。なお、口蓋裂児の言語治療も含めて、構音障害児の治療・指導法について解説する。	同　上
11	音声と音声障害の諸問題	音声の3要素、大きさ、高さ、音質について音響物理的特性を考察する。音声障害の発生を音声習得過程の不全と病理的原因から考察し、さまざまな種類の音声障害について解説する。また音声障害の評価法、改善・治療法の概要を解説する。	同　上
12	聴覚と言語障害	聴えの仕組を聴器の構造とその機能面について解説し、聴力や聴覚の障害が如何にして発生するか考察する。さらに難聴に伴う言語障害の特性や教育・指導法について概略を解説する。また我が国における"ろう教育"と"難聴教育"について述べる。	同　上
13	器質的言語障害と重複障害	器質的言語障害のさまざまな種類について解説し、そのうち特に脳性マヒによる言語障害、失語症、小児失語症について、障害の特性、言語治療の概略を解説する。また障害の重複化傾向、治療指導問題にふれるとともに重複障害児教育の問題を考察する。	同　上
14	人間生活と言語障害	講義のまとめの第1に、さまざまな人の生活の中で、言語生活の意義を考察し、その言語が障害されたとき示される「ゆがみ」や問題について論じる。第1に生活環境に生ずる多種雑多な変化について、第2にこれらに直面する言語障害者のリハビリテーションについて。	同　上
15	豊かな言語関係を育てる	まとめの第2は、言語が正常に学ばれるのに必要な言語関係や環境面の配慮や努力について学ぶ。言語障害の進行をくい止めたり予防する方策は何か、言語障害児を自然治療に導くことは可能か、言語生活をとりまく望ましい環境や人間関係の有り方、言語衛生を学ぶ。	同　上

＝ 犯 罪 と 法 ＝

〔主任講師：内藤　謙（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現体社会における犯罪現象に対して法がどのようにかかわるかを、近代刑法の展開という視点から講義する。犯罪とは何か、刑罰とは何かという基本的な問題の検討が中心になるが、現代社会が犯罪と刑罰について提起しているさまざまの問題を手がかりにして、できるだけ具体的に説明することにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	犯罪現象の基本動向	戦後の日本における犯罪現象の基本動向を最近の動向を中心に検討するとともに、犯罪現象の国際比較と犯罪原因論についても若干の考察を試みる。	内藤　謙（千葉大学教授）
2	犯罪現象と法の機能	国犯罪現象に対する法の機能を、犯罪現象は、法を超える領域とも、また、刑事法以外の法領域とも、かかわりをもっていることを視野に入れて、近代法の展開という観点から検討する。	同　上
3	犯罪の法的処理過程(1)――警察・検察庁の段階	現在の日本の刑事司法過程で、犯罪はどのように処理されているかという問題を、制度運用の量的事実の側面を中心に、警察・検察庁の段階について検討する。	同　上
4	犯罪の法的処理過程(2)――裁判所・行刑施設の段階	少年事件の特則犯罪の法的処理過程の問題を、制度運用の量的事実の側面を中心に、裁判所・行刑施設の段階について検討する。そして、少年事件の特別の処理過程についても考察する。	同　上
5	刑事法と国家	近代・現代の社会では、犯罪に対して刑罰を加える機能をもっているのは、国家だけである。このような国家刑罰権の根拠と限界をどのように考えるべきかを検討する。	同　上
6	罪刑法定主義	近代刑法の基本原理である罪刑法定主義の実質的・政治的根拠を考察するとともに、罪刑法定主義の内容と現代的意義について検討する。	同　上
7	刑法の機能	近代刑法の機能には、罪刑法定主義の反映である人権保障機能、および、法益保護機能がある。この法益保護機能の内容を検討し、現代の問題状況と刑法の機能について考察する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	刑法理論の系譜(1) －旧派刑法理論の形成と展開	近代刑法理論の展開過程を、ヨーロッパにおける市民社会の成立期に形成・展開された前期旧派理論、それに続くフランス新古展主義理論、ドイツ的な後期旧派理論について検討する。	内　藤　　謙
9	刑 刑法理論の系譜(2) －新派刑法理論の形成・展開と「学派の争い」	旧派刑法理論に対抗して１９世紀後半に形成・展開された新派刑法理論の内容と特色を検討するとともに、新・旧両学派の「学派の争い」とその後の動向について考察する。	同　上
10	日本刑法典の史的展開と現代刑法理論の基本動向	日本の旧刑法典・現行刑法典の成立とその特色を、刑法理論の系譜との関連で考える。そして、現代刑法理論の基本動向を、日本、英米、フランス、西ドイツについて概観する。	同　上
11	犯罪論の諸問題(1) －犯罪論の構成と構成要件該当性	刑法解釈学における犯罪の定義と犯罪論の構成について、その基本的内容と特色を検討する。そして、作為犯・不作為犯、因果関係を構成要件該当性の問題としてとりあげる。	同　上
12	犯罪論の諸問題(2) －違法性と責任	違法の実質、正当防衛、緊急避難、法令行為・正当業務行為を違法性の問題として検討する。さらに、故意・過失、責任能力、違法性の意識、期待可能性を責任の問題として検討する。	同　上
13	犯罪論の諸問題(3) －未遂犯と共犯、客観主義と主観主義	未遂犯に関連する問題と、共犯に関連する問題を検討する。そして、犯罪論における基本的な考え方の違いである、客観主義と主観主義の対立について考察する。	同　上
14	刑罰論の基本問題	刑法の根拠と限界の問題について、応報刑論か目的刑論かという従来の一般的論議を検討し問題解決の方向を考える。そして、刑罰の種類と内容について、日本の現行法を中心に考察する。	同　上
15	刑事政策の現代的問題	法制度の全面改正が問題になっているものとして、自　刑の執行内容と保安処分がある。この二つの問題について、改正作業の動向に注目しながら、検討する。	同　上

＝現　代　の　裁　判＝

〔主任講師：田宮　裕（立教大学教授）〕

全体のねらい

法は、六法全書の中から引き出され、裁判の過程を経て、「生きた法」となる。そのからくりを、裁判の担い手たる人の側面、国の制度としての側面、手続き過程としての側面から分析し、文化の一翼を構成する日本の裁判の特色を浮き彫りにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	現代日本の裁判	裁判は、普通理解されているよりは、はるかに人間くさい創造的活動だが、それだけに流動する社会の中で、多方面の社会的機能を果たす。現代の市民生活において、裁判の持つ意義と機能を、序論的に考える。	田宮　裕（立教大学教授）
2	裁判の担い手 (1) ― 裁判官 ―	裁判所の組織・構成、裁判官の地位・身分、司法権の独立、キャリアの裁判官制度が持つ問題点など、裁判所と裁判官にまつわる今日的課題を探る。	同　上
3	裁判の担い手 (2) ― 検察官 ―	ひとたび起訴すれば 99 パーセント以上の有罪率を誇る、刑事訴追の有能な法曹集団。検察官をぬきには日本の刑事司法は語れないが、その組織・活動とこれに対する法的規制を検討する。	同　上
4	裁判の担い手 (3) ― 弁護士 ―	弁護士は、いわば市民の困り事の相談役あるいは、法律生活上の病理現象の予防・治療にあたる「法の町医者」。現実にどのような役割を果たし、また、期待されているのだろうか。	同　上
5	民事訴訟の手続き	私人間の紛争を解決するための裁判手続きを解説する。行政訴訟、非訟事件、調停などにも触れる。裁判を実現するための強制執行や仮差押え・仮処分もとりあげる。	同　上
6	刑事訴訟の手続き	捜査→起訴→事実審理→判決→上訴などの概略を、順を追って説明する。家庭裁判所の少年審判は「刑事」訴訟ではないが、便宜上ここで解説する。	同　上
7	国民の司法参加	先進諸国では、ほとんど例外なく素人裁判官の制度がみられる一陪審や参審。戦前の日本にも、陪審があった。これらの制度の運用状況や問題点を紹介し、職業裁判官制度と対比しながら、国民と裁判の関係を考える。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	違憲審査制	戦後、アメリカにならって取り入れられた制度で、現行憲法のもとにおける司法の際立った特色を示す。これを支える政治理念を明らかにし、外国と比較しながら、制度のありかたを検討する。	田宮　裕
9	捜査と裁判	刑事事件では、裁判が始まるまでに、捜査をつくして犯人をあげ証拠を確保しておく必要がある。捜査は、真相を逃さぬためにも人権保障のためにも、公判に劣らず重要なので、近時制度上・理論上の発展がいちじるしい。この見地から、捜査と裁判のかかわりを考える。	同　上
10	証拠と事実認定	裁判の生命である事実認定をめぐる諸問題、とくに、裁判官の自由心証主義、証拠法則、科学的知見の応用、自白の取扱いなどを取り上げる。	同　上
11	迅速な裁判	「遅れた裁判は裁判の拒否に等しい」といわれるように、迅速性は裁判の生命。長くかかる裁判の現状とその背景にある問題点を明らかにする。	同　上
12	誤判とその救済	訴訟法規の大部分は、正しい裁判を願って作られたものだが、「人のわざ」としての裁判には、僅かであるが、誤判もでる。最近の再審事件の手掛りにえん罪救済制度について検討してみる。	同　上
13	「裁判好き」と 「裁判嫌い」	日本人は、権利　義務の観念で是非を明確にするよりも、義理人情による大岡裁きを好むといわれる。また、市民と裁判所の距離は大きく、その間に準法律家が活躍する。このような裁判の利用関係をめぐって、日本人の法意識の問題を考える。	同　上
14	裁判における正義 －日米の比較－	当事者主義の極致を示すアメリカでは、刑事事件でさえ、当事者の取引きが行なわれるが、日本の裁判手続きは、真実発見の理念に忠実だといわれる。このことを手掛りに、裁判文化の比較を試みる。	同　上
15	裁判と立法	判例による法形成の意義と限界を考える。裁判を法の形成とみる現実主義的立場は、法学にどのような影響を及ぼしたかを検討し、立法による法形成との相互関連に注目して、判例の役割を分析する。	同　上

＝日　常　生　活　と　法＝

〔主任講師：川井　健（一橋大学教授）〕

全体のねらい

日常生活において重要な役割を果たす民法が施行されて以来、すでに９０年近くになる。この間、民法はあまり改正されていないが、社会の変化はいちじるしい。法と社会のズレを調整してきた判例の変遷に留意しながら、現在の日常生活上の重要な問題をとりあげて、民法を説明したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	民法の意義	民法は、市民社会における財産や家族をめぐる紛争を解決する基準となる法であるが、民法典のほか判例法や慣習法があることを述べ、民法の解釈や民法の効力についても言及する。また、民法制定時の民法の原則が今日では修正されていることを指摘する。	川井　健（一橋大学教授）
2	権利とその主体	民法は紛争を解決する便宜的手段として、各種の権利を認めている。物権、債権などがそうである。そのような権利の実現の方法について述べたうえで、権利の主体である人についての法律上の問題を扱う。すなわち、自然人や法人をめぐる問題である。	同　上
3	契　約	財産取引では、契約が重要な役割を果たしている。契約自由の原則は、事実上約款により制約されており、公序良俗や強行法規の役割が増大している。契約の種類、契約の成立、代理、条件、期限のほか、契約以外の法律関係である事務管理、不当利得にふれる。	同　上
4	不動産の売買	土地・建物を売買した場合に生ずる所有権の移転や、所有権の移転を第三者に対して主張するために必要な登記について述べる。登記に関しては、どのような場合に登記が必要かという問題のほか、登記請求権や仮登記をも扱う。また、樹木・農作物の売買にもふれる。	同　上
5	動産、債権の売買	日常生活で頻繁に行われる動産の売買における所有権の取得の問題や、売主が無権利者であった場合の買主の保護の問題などをとりあげる。また、月賦販売やクレジット・カードを利用した場合の問題を扱う。さらに、債権の譲渡およびこれに関連する債務引受を扱う。	同　上
6	売買契約の履行	売買契約の履行としての売主の登記移転・引渡し、買主の代金支払などの義務をとりあげる。このような弁済に関連して相殺その他の債権消滅事由にふれる。売主と買主の義務の関係について同時履行、危険負担の問題を扱う。また、債権の消滅時効をも扱う。	同　上
7	売買契約の不履行	売主や買主が履行を怠った場合、履行が不能となった場合の強制履行、損害賠償、契約の解除の問題を扱う。損害賠償については、その範囲、過失相殺など、解除についてはその効果や事情変更による解除などをとりあげる。また、いわゆる受領遅滞の問題を扱う。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	売買と目的物の瑕疵	売買の目的物に、かくれたかし（瑕疵）があったことや、権利にかしがあったことを買主が知った場合における売主の責任の問題をとりあげる。売主のかし担保責任と、いわゆる不完全履行の責任との関係や錯誤との関係を述べ、また、保証書の問題をとりあげる。	川井　健（一橋大学教授）
9	借金を保証	金銭消費貸借契約が行われる場合につき、サラ金問題があり、これに関し、利息制限法や貸金業規制法があることを述べる。保証やこれに関連する連帯債務などの多数当事者の債権関係や身元保証にもふれる。また、借金の担保としての預金担保貸付などにもふれる。	同上
10	請負と委任	請負契約における注文者の保護の問題として請負人のかし担保責任の問題や約款の果たす役割などを述べる。委任契約に関しては、医師、不動産仲介業者、弁護士、司法書士などの注意義務や報酬請求権の問題をとりあげる。	同上
11	契約の無効・取消	錯誤、虚偽表示、心裡留保などによって契約が無知とされる場合や、詐欺、強迫によって契約が取消される場合の問題について、効果としての不当利得の問題をあわせてとりあげる。未成年者の行為の取消や、無権代理人の行為の問題も扱う。	同上
12	所有権	所有権がいわゆる物権の中心となる権利とされており、これを制限する各種の物権が法定されているほか、慣習法上の物権があることを述べる。物権的請求権やこれに関連する占有の訴、時効取得を含む所有権の取得事由や共有の問題を扱う。	同上
13	利用による所有権の制限	所有権を制限する物権である地上権、永小作権、地役権のほか、農村で重要な権利である入会権の問題をとりあげる。また、農地や動産の賃貸借による所有権の制限にもふれる。便宜上ここでいわゆる相隣関係による所有権の制限やマンションの区分所有を扱う。	同上
14	借家	民法の賃貸借の規定が大正１０年の借家法によって修正され、賃借権の物権化が認められたこと、また昭和１６年の借家法の改正によって賃貸借の解約を制限する基準として「正当事由」が導入され、その解釈に変遷があったことを述べ、あわせて住宅問題をとりあげる。	同上
15	借地	借家の場合と同様に、民法の賃貸借の規定が大正１０年の借地法の制定によって修正されて、借地人の保護がはかられ、また、明治４２年の建物保護法があることを述べる。また、現在の住宅問題や土地の有効利用のために、借地法のあり方の問題があることを述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	担保による所有権の制限	金銭債権などを確保する手段として、抵当権や質権などがあることを述べ、これらが所有権を制限する担保物権であることを説明し、担保物権制度の変遷を述べる。あわせて、留置権や先取特権のほか、譲渡担保、仮登記担保所有権留保などをとりあげる。	川井　健（一橋大学教授）
17	抵当	金融における債権の確保の手段としての抵当権について、その設定の要件や効果などを説明する。また、特殊な抵当としての共同抵当、根抵当、抵当証券、動産抵当などにもふれる。関連して、工場抵当法や企業担保法にも言及する。	同上
18	質	庶民金融として重要な役割を果たしてきた質権を説明し、実際界で、これに代わる役割を果たしている譲渡担保をとりあげる。	同上
19	過失責任と無過失責任	事故と被害の救済の問題について、民法は過失責任の原則を採用しているが、これを修正する無過失責任があり、また両者の中間のいわゆる中間責任がある。債権侵害、医師の責任、差止請求、安全配慮義務と不法行為との関係などをも扱う。	同上
20	人格権の保護	民法上の権利として、今日、人格権が重要である。情報化社会において、マスコミによる人格権の侵害の可能性がふえており、人格権の保護と言論の自由との調整の必要があることを述べる。具体的には、名誉、プライバシーの保護の問題をとりあげる。	同上
21	交通事故	交通事故が発生した場合の被害者を救済する法律として、民法を修正する自動車損害賠償保障法があり、この法律において加害者がどのような要件の下に責任を負い、また、保険金の給付が行われるかという問題をとりあげる。	同上
22	公害	イタイタイ病、四日市ぜんそく、水俣病などの公害に関し、裁判所がどのような判断を示してきたかということを説明し、大気汚染防止法、水質汚濁防止法、公害健康被害補償法などのあらましを述べる。日照、騒音問題にもふれる。	同上
23	欠陥商品と消費者保護	森永ひ素ミルク、サリドマイド、スモン、カネミなどにみられる欠陥商品による被害について、裁判所がどのような判断を示してきたか、また、どのような立法が進展しているかについて述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	損害賠償	事故が発生した場合の被害の救済としての損害賠償に関し、損害賠償の範囲、損害算定の基準時、過失相殺などの問題を述べる。また、得べかりし利益の喪失や慰謝料についての損害賠償請求権の相続の問題をも扱う。あわせて、補償や保険にも言及する。	川井　健（一橋大学教授）
25	結婚	家庭生活と財産の確保という観点から、まず家族についての民法の扱いを概観したうえで、婚姻についての要件や効果を、男女平等、個人の尊厳という原則との関連の下で検討する。また法律上の夫婦とはいえない内縁の問題をも扱う。	同上
26	離婚	近年における離婚件数の増大という現象に関し、日本の離婚法が世界の離婚法とどのように異なっているか、各種の離婚手続のうち、とりわけ裁判上の離婚において、日本の裁判所がどのような態度を示しているかを述べる。あわせて離婚後の子の監護の問題を扱う。	同上
27	親子	親子関係に関し、嫡出でない子の地位や、養子のあり方などについて検討する。養子に関しては、菊田医師事件にみられるような虚偽出生届の問題をとりあげる。あわせて、近時社会的に問題となっている人工受精子や体外受精子の問題にも言及する。	同上
28	親権・後見・扶養	親子関係の効果としての親権に関し、子の監護や子の財産の管理の問題を扱う。子の監護については、子の引渡請求の問題をとりあげる。親権に関連して後見制度を扱い、また、親族間における扶養の問題をとりあげ、社会保障との関係について言及する。	同上
29	相続	人が死亡したときの遺族の生活の確保の手段として財産の相続があることを述べ、相続人、相続分、相続財産などにふれたうえで、遺産分割を扱う。特別受益や寄与分にも言及する。あわせて相続回復請求権、相続の承認と放棄、財産分離などをも説明する。	同上
30	遺言	人が自由に財産を処分しうるという原則の延長として、遺言自由の原則があることを述べ、遺言には厳格な方式が必要とされることを説明する。また、遺言に似た死因贈与契約があることを述べる。あわせて一定の法定相続人に遺留分の権利があることを述べる。	同上

＝ 取引と企業の法 ＝

〔主任講師：竜田　節（京都大学教授）〕

全体のねらい

現代の経済活動の主な担い手は企業であり、企業をめぐる取引の法律関係を知ることは重要である。また、企業の多くは会社形態をとるから、代表者の権限など、組織の問題が企業の取引に深く関係する。これら企業の組織および取引は、広い意味の商法が定める制度に乗って動く。その基礎的な部分をわかり易く説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	企業と取引	企業がどのような取引を行っているかを概観し、その法的な仕組が主に契約であることを見る。契約その他取引の法律関係はすでに民法が定めているのに、企業が当事者になればどうして特別の定めが必要なのか、例を挙げながら説明する。	龍田　節（京都大学教授）
2	商品の流通	メーカーが原材料を仕入れて製造・加工し、でき上がった製品を消費者に届けるまでには多数の取引段階を経由する。企業の間で行われる商事売買の特色、販売店のいろいろな形態(卸・小売、委託販売、ブローカー)などについて検討する。	同上
3	運送と倉庫	商品の流通過程では運送と保管が重要な機能を持つ。トラック・鉄道、船、航空機などを用いる物品運送契約や、倉庫の寄託契約をめぐる法律問題、とくに船荷証券とか倉庫証券が発行されたときの法律関係を、ごく簡単に見ておこう。	同上
4	旅行	物が動くだけでなく人も動く。バス・鉄道、船、航空機などを利用するときの旅客運送契約、ホテルの宿泊契約、旅行代理店との契約などは、すべて企業との取引である。事故があればこれらの企業がどこまで責任を負うか、その他の法律問題を説明する。	同上
5	危険への備え	火災保険や運送保険など、いわゆる損害保険契約の仕組を簡単に見ておく。その中には自動車損害賠償責任保険のように、他人に損害を加えるかもしれない危険に備えるための責任保険とか、保険会社がさらに危険を分散するための再保険なども含まれる。	同上
6	からだと保険	貯蓄の性格が濃い生命保険にもいろいろの種類がある。掛け捨ての生命保険とか、損害保険に近い傷害保険や疾病保険も、身体に関係する点で共通している。契約者・被保険者・受取人の間の関係とか告知義務の問題などを概観しよう。	同上
7	約款に注意	保険、運送、銀行取引などには約款が使われる。その他でも消費者取引には約款を用いるものが多い。内容を知らなくても、あるいは存在すら知らなくても、約款が契約の一部になって当事者を拘束するのはなぜか、どの範囲までそのような扱いが認められるか。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	企業の名称	企業が取引の主体として現れるとき、自己を示すために商号を用いる。また、製品などを他と区別するために商標を使う。商号や商標の識別機能を確保し、不正使用などによって混同誤認が生じないように、どのような制度が用意されているかを見る。	龍田　節
9	取引をする権限	企業に働く人のうち、どういうポストにいる人がどの範囲でした行為が、契約などその企業との取引を成立させるのか。代表取締役や商業使用人の権限の範囲を述べるとともに、権限のない人がした行為についても企業が責任を負うのはどんな場合かを考える。	同上
10	トップ・マネジメント	企業の経営方針は誰が決めるのか。この問題を、株式会社とくに大規模の会社を中心に見てみよう。社長・専務などの代表取締役、常務会、取締役会などの会社機関が、それぞれどの範囲の事柄を決めることができるか、手続をふまなかったときはどうなるか。	同上
11	経営者の姿勢	取締役は会社の利益を犠牲にして私利を図ってはならないが、そういうことのしやすい地位にある。役員報酬の決め方、会社を相手に取引するときの手続、会社と同種の営業に従事することの制限その他、取締役の忠実義務にかかわる問題を考察する。	同上
12	経営者の責任	取締役はどの程度の注意を尽くして経営にあたらなければならないか。それを怠ったとき、誰に対しどのような責任を負うか。監査役についても同じような問題がある。これらの責任を、誰が、どのような方法で、いつまで追及することができるか。	同上
13	経営をチェックする	会社のためにならない行為を、取締役が故意にまたは不注意ですることがありうる。それが事前にわかれば防止を試み、事後にわかったときは是正をするために、どういうメカニズムが用意されているか。監査役制度を中心に概観してみよう。	同上
14	株主の声	取締役や監査役を選んだり、定款変更や合併など重要問題を決めるのは株主総会である。その招集や議事はどのようにして行われるか。また、株主総会に参加すること以外に、株主がその意見を会社の経営に反映させるにはどのような方法があるか。	同上
15	企業の資金	企業の運営に必要な資金を調達する方法には、株式や社債の発行のほか、借入金や内部留保などさまざまのものがある。株式・社債ともバラエティに富む。それぞれの長所と短所を比較するとともに、公正さを保つためどのような手続が要求されるかを見よう。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	株式の売買	株主になるために株式を手に入れる。その市場はどういう構造になっているか。株主名簿の名義書換はなぜ必要か。小さい会社で株式の譲渡が制限されている場合、それを売るにはどうすればよいか。これらについて商法や証券取引法の定めを概観する。	龍田　節
17	株式の配当と分割	株式に投資していれば配当などの形で収益が得られる。金銭配当のほかに株式配当もある。株式が分割されたり、無償交付が行われると株式数がふえる（逆に株式併合があると数が減る）。これらの措置について定められた手続や要件を説明する。	同　上
18	投資のリスク	株式に限らず投資や投機にはリスクが伴う。利得のチャンスが大きければ損失の危険もまた大きい。株式の信用取引、商品や債券の先物取引など、少ない資金で大きな儲けを狙うさまざまの方法が見られる。それらの制度の仕組をごくあらまし見てみよう。	同　上
19	会計と開示	株式会社は会計についてもこと細かに法的規制を受ける。資本と準備金、引当金、資産評価など基本的な問題を概観する。さらに、会計だけでなく重要な事項を公表することが要求されており、こうした開示（ディスクロージャー）制度の狙いと骨子を説明する。	同　上
20	会社を作る	会社にはどんな種類があり、それぞれどのような手続をふめば作れるか。一番複雑な株式会社に重点を置いて述べる。会社ができ上がると法人になるが、それはどういう意味を持つか。会社以外の企業形態の主なものについても簡単に触れる。	同　上
21	会社の変動	いったん成立した会社も、その組織などが大きく変動することがある。事業目的や商号の変更、本店の移転、会社の合併とか分割、営業の譲渡、別の種類の会社へ衣替えなどがこれにあたる。株主や債権者の利益を守るためそれぞれどういう手続が必要かを見る。	同　上
22	企業のグループ	企業が孤立して存在することはむしろ珍しい。株式の所有、役員の派遣、提携契約などの手段を使って、いろんな企業結合が形成される。どのような場合に親会社・子会社の関係が成立し、いかなる点について特別の規制を受けるか。今後の問題も含めて検討する。	同　上
23	倒産	事業が行詰まると企業は倒産する。そのまま解散することもあろう。解散すれば清算手続に入る。借金が返せないと破産とか特別清算になる。できれば企業を再建したい。会社整理、会社更生の手続、その関係で行われる資本減少など、あらましを説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	お金の流れ	売った商品の代金の回収、遠隔地への送金、資金の融通やその取立には、振替や為替のほか手形や小切手がよく用いられる。こうした金融取引のいろいろな手段、とくに約束手形、為替手形、小切手について、それぞれの仕組と機能を考察しよう。	龍田　節
25	手形の振出	手形や小切手を有効に振出すには、どういう事項を記載しなければならないか。署名は絶対に欠かせないが、会社が振出すときにはどんな注意が必要か。白地手形と無効な手形とはどこが違うか。このほか、手形や小切手の偽造・変造についても検討を加える。	同上
26	手形の裏書	手形や小切手を他人に譲渡したり、銀行などに取立を頼むような、流通の問題を扱う。盗難・遺失にあった事故手形の善意取得とか、商品代金を払わなくてよいはずだという抗弁を出せるか、などが難しい。ほかに手形割引と手形貸付にも簡単に触れる。	同上
27	手形の支払	手形や小切手は手形交換所を通じて決済される。その仕組、とくに不渡処分を説明する。無権利者に支払っても免責されるのはどんな場合か、持っている手形の支払が拒絶されたときはどうすればよいか、手形や小切手はいつ時効にかかり、その後どうなるかも考える。	同上
28	紙にのった権利	手形・小切手、株券、債券、船荷証券、倉庫証券などのように、権利が紙にのって流通するものを有価証券という。これらは借金の証文や単なる預り証とどこが違うのか。こういう証券を失ったとき、それでも権利を行使しようと思えばどうすればよいか。	同上
29	貿易のしくみ	外国の企業との間で行われる輸出・輸入の取引も、法的な形は売買契約が多い。しかし、通貨が異なり、売主と買主が遠く離れ、運送に長い時間がかかるため、特殊な性格がある。為替手形・船荷証券・保険証券に銀行の商業信用状を組合せた応用問題の一面を見る。	同上
30	企業法の歴史と特色	会社とか手形・小切手、それに各種の取引など、これまで述べてきた企業をめぐる諸制度はどのように発展してきたか。商法と呼ばれる法域はいつ頃どこで成立し、どのような歴史をたどってきたか。他の法域とくに民法にくらべいかなる特色を持つと考えられるか。	同上

＝日本の社会と法＝

〔主任講師：碧海純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義は専門科目である。しかし、60・61・62年度に提供される法律関係の諸科目の充実度に鑑み、この講義は専門課程における教養科目として構想されている。日本の法をサンクロニクに（比較文化的に）かつディアクロニクに（歴史的に）考察することを眼目とする。日本独特の社会構造と法との関係が基本問題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本法の特質Ⅰ 継受法としての現代日本法	法の継受は果して可能か。社会改革の手段としての法の継受。日本の近代化の一側面としての西欧法の継受。日本のばあいをテストケースとして考えると、法の継受は、一定の条件のもとでは、可能であり、かつ改革の手段として有効である。	碧海純一 （放送大学教授）
2	日本法の特質Ⅱ 大陸法系の秩序としての現代日本法	ヨーロッパ大陸法と英米法。第二次大戦後の占領時代に英米法の部分的継受が行われたが、それにも拘らず、現代日本法は大陸法系に属する。現代においては両法系の相互接近・融合が進んでいるが、日本ではこの過程が特に顕著である。	〃
3	日本法の史的展望Ⅰ ＜古代国家と律令の継受＞	7～8世紀に中国から継受された律令は日本の前近代法に絶大な影響を与えたが、中国と異なり制度と実態の間のズレが大きく、10世紀には早くも重大な修正を要するに至る。こうした律令法の継受と変容の過程を日本の古代国家の特質との関連において検討する。	碧海純一（放送大学教授） 植田信広（九州大学法学部助教授）
4	日本法の史的展望Ⅱ ＜武家社会の道理と法＞	武士が台頭する平安末期から戦国時代にかけての中世という時代は御成敗式目に代表される武家法の全盛期であり、日本史上かってない裁判による権利主張の盛んな時代でもあった。道理の法とも呼ばれる中世法の成立・展開過程及びその社会的背景につき考察する。	〃
5	日本法の史的展望Ⅲ ＜幕藩体制下の法と裁判＞	日本人の法意識の特質としてよく訴訟嫌い、権利意識の欠如等が指摘されるが、こうした特徴は中世以来の自立的な領主権力の否定を通じて成立した幕藩体制社会における法のあり方と密接な関連を有している。そこでの法や裁判の特質を中世との対比において考察する。	〃
6	日本の近代化と西欧法の継受Ⅰ 近代的法制度の成立	開国以来日本は西欧の文化・技術・学問等を急速に摂取し始めるが、法もまたそうして取り込まれていったものの一つであった。本章ではその西欧法および西欧式法制度が摂取され、日本が法に関してみれば一応の近代的体裁を備えるに至るまでの経違を概観する。	碧海純一（放送大学教授） 海老原明夫（東京大学法学部助教授）
7	日本の近代化と西欧法の継受Ⅱ 法典の編纂	西欧法の摂取という国家的大事業の中核を成したのは憲法・民法・商法などの法典の編纂である。大日本帝国憲法の成立、ボクソナードの民法草案とそれをめぐって生じた「法典論争」、その後の民法典編纂などにおける西欧法の影響を考察する。	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の近代化と西欧法の継受Ⅲ 学説の継受	西欧法が我国に与えた影響は西欧的法典の整備という事実にとどまらない。成立した法典の解釈に携わった法学がやはり西欧の、それも特にドイツの法学の影響を強く受けることになる。本章では日独の法学を比較しつつ日本の近代法学の成熟過程を眺めてみたい。	碧海純一（放送大学教授） 海老原明夫（東京大学法学部助教授）
9	近代日本法の成熟	我国が急速に工業化を遂げる中で近代法は次第に変質を被っていく。のみならず法学内部においても、理論的関心よりも判例研究などの実務的営為を重視する傾向が出現してくる。本章ではこうした点に目を向けながら、第二次大戦までの時期を概観する。	〃
10	第2次大戦後の立法改革Ⅰ	第二次大戦後の占領時代に、日本国憲法を中心として、重要な改革立法が制定・施行された。新しい憲法は、結局、日本の社会を根本的に変革することになった。民法・親族・相続編の根本的で、農地開放などは、憲法の精神の具体化を促進した。	碧海純一（放送大学教授）
11	第2次大戦後の立法改革Ⅱ	労働法の発展。経済法。その他を通じ、日本社会の「民主化」が進められた。いろいろな抵抗に遭いながらもこの過程は着実に進捗した。	〃
12	司法部の重要性の増大	戦前の大審院から最高裁判所へ。国家賠償法。マスコミにおける司法のイメージ。人権の実質化。	〃
13	高度成長期と法環境問題	いわゆる公害に関する世論の変遷。公害先進国としての日本における環境保護体制の整備。水質の保護。工場の排煙に対する規制。	〃
14	日本社会の特質と日本法Ⅰ	日本人の法観念。制度としての日本法はほぼ全面的に継受された西洋法である。しかし、日本の社会における法の実際の運用は独自の日本流のしかたである。たとえば、制度面では多数決によって運営すべき組織が、実際には根廻しと全員一致によっていることが多い。	〃
15	日本社会の特質と日本法Ⅱ	法というものが社会において機能する最も重要な場面は裁判である。しかし、民事事件に関して言えば、日本では、個人しだいではもとより、法人間においても、可能なかぎり政治を回避する傾向がきわめて顕著である。	〃

＝ 経 済 活 動 と 法 ＝

〔主任講師：来生　新（横浜国立大学助教授）〕

全体のねらい

現代の資本主義社会における国民の経済活動と行政との関係を法律学的に検討する。本来、資本主義は市場による非人為的な資源配分、自由な企業の理念を持つ。現代の資本主義社会がこのような古典的な資本主義理念にどのような修正を加えているのか、それが国民の福祉とどのように結び付くのかを法律学的に究明したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	資本主義経済における国家の役割（歴史的検討）	資本主義経済の特徴である市場の機能を検討し、近代資本主義成立時から現代に至るまでの国家理念の変遷を市場とのかかわりで考える。	来生　新（横浜国立大学助教授）
2	現代資本主義国家の経済的機能	混合経済とも呼ばれる現代の資本主義経済社会において、国家（行政）が果たすべき役割は何であるのか。市場の失敗、政府の失敗の理論との関係で、本講の基本的な視点を示しておく。	同　上
3	経済政策と法（理論的検討）	資本主義経済体制の下で国家がその経済的な責務を果たすべく行動する場合の手段にどのようなものがあり、それらの手段と法の関係をどのように理解すべきかを検討する。さらに現代のわが国の経済政策体系と法の体系を概観する。	同　上
4	市場機能維持のための法体系と独占禁止法	市場機能を維持するための法制度としてどのようなものがあるのか、その全体を概観する。その中から検討の対象として私法等ではなく、直接に市場機能の維持に向けられた行政的規制の法制度である独占禁止法を取り上げる。	同　上
5	独占禁止法の法目的と目的達成手段	「公正かつ自由な競争」の促進という法の直接目的と「一般消費者の利益を確保するとともに国民経済の民主的で健全な発展を促進する」という究極目的との関係をどのように解すべきかを、市場集中規制と経済力集中規制という観点や、法の「公共の利益」概念との関係で検討する。さらに公正取引委員会の組織と法目的達成手段について概観する。	同　上
6	独占禁止法の基礎概念の解釈	公正かつ自由な競争の概念の解釈を再度検討し、それを基礎に、事業者、一定の取引分野における競争の実質的な制限、公正競争阻害性といった独占禁止法の基礎概念について検討を加える。	同　上
7	市場集中の規制(1)	実際の審決例、判例等に即して、私的独占と不当な取引制限の規制の要件について検討する。独占的状態に対する措置、課徴金についても検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	市場集中の規制(2)	合併、株式の取得、不公正な取引方法等について審決、判例を素材にして検討を加える。	来生　新
9	経済力集中規制等	持株会社規制、金融機関の株式保有規制、株式保有の総量規制等の経済力集中規制と、同調的値上げの報告制度について検討する。	同　上
10	公益事業等に対する法規制と競争	独占禁止法の適用除外とされている公益事業等に対する法規制の具体的な内容を検討し、市場の失敗、政府の失敗の理論、規制緩和（DEREGULATION）の諸問題を検討する。	同　上
11	特　許　と　競　争	独占禁止法の適用除外とされている特許による独占の容認と競争の関係を考える。また情報化に伴うわが国の特許法、著作権法の問題をも概観する。	同　上
12	中小企業と競争	わが国における中小企業保護政策の概要を検討し、独占禁止法の適用除外との関係を踏まえて、競争と弱者保護の問題について考察する。	同　上
13	カルテル・産業構造の転換政策と法	不況カルテル、合理化カルテルや他の適用除外法に基づくカルテルの制度を概観し、その意義を検討する。また特定産業構造改善臨時措置法の政策的な意義を検討する。	同　上
14	輸出入取引と競争	貿易摩擦・国外との競争といった観点で、わが国および諸外国の輸出入取引の規制の制度を概観する。GATT、わが国の輸取法、アメリカのアンチ・ダンピング法、反トラスト法の域外適用等の実際についても検討したい。	同　上
15	物価安定の政策と法	国民の消費生活に直接にかかわる物価問題について政府の政策の体系がどのようになっており、それがどのような法制度として結実しているか、またそれらの諸制度の機能と競争のかかわりはどのようなものかを検討する。それを通じて現代の資本主義社会の経済政策と法の関係を総括し、まとめに代える。	同　上

＝国際社会と法＝

〔主任講師：横田洋三（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

相互依存関係の深まる今日の国際社会においては、いかなる国家もその国限りですべての生活上の必要を充足することはできない。しかし他方では、今日の国際社会は依然として複数の主権国家の併存を前提としており、多様性と不安定性がつねに基調となっている。こうした状況のもとでは、法を通じての秩序の確保が強く要求され、またその法のあり方には、国内社会とは異なる特異性が見られる。このことをふまえて、国際社会における法の意義と役割を、とくに日本とのかかわりを念頭におきつつ、考えることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	国際社会における法の意義	国際社会において、法が必要とされる事情を考察し、あわせて、国際社会の構造の特殊性からくる法の存在形態の特異性にも目を向ける。	横田洋三 国際基督教大学教授
2	国際社会を規律する法の種類	国際関係を規律する法には、国際法、国際私法、国際組織法など、さまざまなものがある。それらを個々に検討すると同時に、それらの法の相互の関係を明確にする。	同上
3	国際法の成立	国際関係を規律する法の中で中心的位置を占めるものが、国際法である。この国際法の成立のいきさつを、16、7世紀のヨーロッパにさかのぼって検討する。	同上
4	国際法の発達 (1) －実定国際法体系の確立－	初期の国際法は、自然法の強い影響下にあった。しかし、次第に科学的思考の影響を受け、実証法体系へと移行し、19世紀には、実定国際法体系が確立した。この間のいきさつと、その政治的社会的背景を考察する。	同上
5	国際法の発達 (2) －新国際法秩序の形成－	今世紀に入って、戦争の違法化、国際機構の発達、個人の地位の向上など、伝統的国際秩序を根底からゆるがす現象が生じ、それに伴って国際法体系も大きな変容を余儀なくされている。この間の事情を、一つの必然的歴史の流れとしてとらえる。	同上
6	国際法の基本問題	従来、国際法学者の間で、理論上争われてきた基本問題のうち、(イ)国際法の法的性質、(ロ)国際法と国内法の関係、(ハ)国際法の法源、の3つについて考察する。	同上
7	実定国際法規 (1) －国際法の定立に関する規則－	現行の国際法の諸規則の中から、国際法の定立に関する諸規則をひき出して、検討する。とくに慣習国際法の成立の問題と、条約の締結、効力、実効性などに関する諸規則を考察する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	実定国際法規　(2) ー 外交関係法 ー	国際法の中でも比較的古くから慣習法として形成されてきた外交関係に関する諸規定、とくに、大使、公使をはじめとする外交官の職務、特権、免除などについて検討する。	横田洋三
9	実定国際法規　(3) ー国家に関する 諸規則ー	国際法上の重要な主体である国家の成立、種類、領域、主要な権利、義務などについて検討する。	同　上
10	実定国際法規　(4) ー　戦争と法　ー	国際法成立の直接の契機を与えた戦争と国際法の問題について、戦争それじたいが合法か違法かという問題と、戦争が起った場合に当事者によって守られるべき規則は何か、という二つの側面から検討する。	同　上
11	個人と国際法	従来、国際法は、国家間の関係を規律する法として確立されてきたために、個人については直接規定することがなかった。しかし、最近は、個人の地位の向上とともに、個人について直接規定する国際法規則が増えてきた。これを考察する。	同　上
12	企業活動と国際法	近年、企業活動の国際化に伴い、国際法も企業活動や経済関係について、さまざまの規律を及ぼすようになった。こうした企業活動に関する国際法の諸規則を概観する。	同　上
13	国際機構と国際法	今日の国際社会は、国際機構の存在を無視しては語れない。これらの国際機構は、国際法を基礎として成立し、国際法に従って行動するとともに、みずから、内部に独自の法体系を形成している。こうした国際機構に関する諸法規を概観する。	同　上
14	日本と国際法	開国以後の近代日本のあゆみは、国際法と深くかかわっている。また、相互依存の進む中で貿易立国としての日本の将来は、国際社会とのつながりを無視しては考えられない。こうした観点に立って日本と国際社会のかかわりを、法的側面からとらえ直してみたい。	同　上
15	国際社会の将来と法	技術進歩と国際協力の進展に伴って、今後国際社会はますます複雑になることが予想され、そのために法に期待される役割もけっして小さくない。こうした、国際社会の将来を考えるうえで、法の果たすべき任務と条件を検討する。	同　上

＝ 労働問題と法 ＝

〔主任講師：萩沢清彦（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

現代社会において、労働問題はどのような意味をもっているか、どのようなことが問題となっているのか、労働問題を処理するためにどのような法制度が定められているのかを明らかにし、あわせて労働紛争の特殊性とその解決手段を解説して、国民生活と労働法との関係についての理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会と労働問代	(1)現代社会における労働の意義と、労働問題はなぜ発生するのかを明らかにし、(2)労働問題を処理する基本的な考え方、とくに憲法において労働問題に関してどのような理念がたてられているか、労働法はどのような内容と構造をもっているかを概説する。	萩沢清彦（成蹊大学教授）
2	労働契約の締結、労働条件の決定と内容	労働問題の中心となるのは、職場での労働条件である。労働条件について、どのような法律があるのか、具体的な労働条件はどのような方法で決定されるのか、労働条件としてはどのようなことが問題になるのかを概観する。	同上
3	労働契約と就業規則・労働協約	労働条件の決定については、現実的には就業規則と労働協約が大きな意味をもつ。就業規則はどのようにして定められるか、就業規則と労働基準法、労働協約はどのような関係に立つかなど、労働条件決定の基本的構造を明らかにする。	同上
4	賃金	賃金の額はどのようにして決定されるか、最低賃金法はどんなことを定めているのか、賃金の支払方法についてはどんな問題があるのか、欠勤やストライキのときの賃金はどうなるのか、企業倒産の場合の賃金は保障されるかなど具体的な問題をとり上げる。	同上
5	労働時間	労働時間制度に関する法制の現状、労働時間短縮問題の動向、年次有給休暇制度の改正問題など、最近の問題状況や将来の展望をも加味して解説する。	同上
6	女子・年少労働問題	年少労働者については、労働契約の締結と労働時間や危険有害業務の就労制限、女子については母体保護、労働時間、危険有害業務の就労制限のほか、男女平等問題について具体的に問題をとり上げる。	同上
7	労働災害	業務上の死傷病（労働災害）発生防止（労働安全衛生）、労働災害による被害の救済（災害補償）と労災保険のほか、民事上の損害賠償問題にもふれる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	解雇と懲戒	職場秩序の維持と懲戒問題、解雇の制限、解雇手続を取り扱う。	萩沢清彦
9	雇用の安定と新しい雇用形態	職業紹介、職業訓練、雇用保険事業、失業給付などの雇用安定制度と、新しい雇用問題としての臨時工、パートタイマー、労働者派遣事業をとり上げる。	同上
10	労働組合	労働組合の意義、種類、設立の手続、労働組合の事業、組合員の権利義務について概説する。	同上
11	団体交渉	団体交渉の意義と機能、団体交渉の手続、団体交渉事項、団体交渉拒否をめぐる紛争の解決手続ならびに労使協議制、経営参加問題をとり上げる。	同上
12	労働協約	労働協約の意義と機能、締結の手続、内容および主要な問題点をとり上げる。	同上
13	争議行為	憲法で争議権を保障した意義、争議権制度の現状と問題点、争議行為の種類と正当性、争議行為と賃金・年次有給休暇、争議行為と第三者および争議調整手続を概説する。	同上
14	労働委員会と不当労働行為制度	労働委員会の種類、構成、権限、不当労働行為の意義・種類および救済手続を概説する。	同上
15	労働問題の処理手続	労働基準監督署、労政事務所、公共職業安定所などの紹介と、労働紛争処理手続、とくに裁判所と労働委員会との関係を解説する。	同上

＝政治思想Ⅰ＝

〔主任講師：佐々木　毅（東京大学教授）〕

全体のねらい

政治思想は日本国憲法の前提にしている政治についての考え方を理解する上で重要な役割を持つ。従ってこの点に可能な限り注意しながら講義を進めると共に、近代の民主主義をめぐるさまざまな批判や問題点に言及し、それらを考えていくための素材を提供することを目的にしている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ヨーロッパ政治思想の伝統(1)	ヨーロッパの政治思想の骨組を形成する上でギリシャに生まれたポリスの政治学は絶大な影響力を持った。ここではプラトンやアリストテレスに言及しつつ、後代との関連で重要と思われる論点を網羅的に論ずる。	佐々木　毅（東京大学教授）
2	ヨーロッパ政治思想の伝統(2)	ポリスの政治学と並んでキリスト教や中世の伝統もまた見のがすことの出来ない重要な役割を持っていた。ここでも前回と同様の観点から、宗教的権威対世俗的権力、法の支配、立憲主義といったテーマに即して重要な論点を解明する。	同　上
3	マキァヴェッリの政治思想	近代政治思想の生誕期において何が政治の論点とされ、何が改革すべき問題とされたかを、主としてマキアヴェッリに即して吟味する。	同　上
4	宗教改革と政治思想の展開	ルター、カルヴァンによって認められた宗教改革がどのような側面において決定的な役割を果したかを、例えば、寛容の問題を織り込みながら、多方面から考察する。	同　上
5	主権論と絶対主義の政治思想	ボダンによって提起された主権という新しい概念が、折から興隆しつつあった絶対主義と結合しながら、王権神授説として定着していく過程を、その政治的意味に即して分析する。	同　上
6	ピューリタン革命の政治思想	近代政治原理の母胎となったピューリタン革命が、いかに多様な政治思想や新しい転換を含んでいたかを、重点的に取り上げ、解説する。	同　上
7	ホッブズの政治思想	伝統的政治学の革命的転換を行なったホッブズの政治思想を、それがいかなる意味で革命的であったかを、自然状態論、政治権力の成立論などに即して紹介する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ロックの政治思想	近代政治理論の父と言われるロックの自然法論、所有権論、社会契約説、革命論、寛容論などを紹介し、それを通して彼の政治思想の全体に接近することを試みる。	佐々木　毅
9	モンテスキューの政治思想	三権分立論で有名なモンテスキューは18世紀の政治思想家の中で最も奥行きの深い思想家である。ここでは三権分立論の背後にある政治自由についての見方のみならず、商業活動と政治、封建制、古代ポリスなどについての論述を検討したい。	同　上
10	文明社会と政治思想	18世紀ヨーロッパの人々は、彼らがそれまでの社会とは異った、物質的に豊かな文明社会に到達したと論じた。フランス啓蒙、スコットランド啓蒙などに見られるこれら文明社会論と、彼らの文明社会に対する評価、態度を問題にする。	同　上
11	ルソーの政治思想	文明社会のメカニズムに対決し、教育や政治の次元で新たな地平を開こうと苦悩したルソーの政治思想を、「学問芸術論」「不平等起源論」「社会契約論」を中心に紹介する。	同　上
12	アメリカ独立革命の政治思想	近代民主主義の制度化の一例としてのアメリカを取り上げ、ペインと「ザ・フェデラリスト」に見られる民主主義論の特徴を明らかにする。特に間接民主主義と権力分立とが中心テーマである。	同　上
13	保守主義の政治思想	アメリカやフランスでの革命に抗して、王権や貴族制に依りつつ旧来の体制の意味を説く一方、民主主義の問題点を鋭く指摘したバークやヘーゲルの政治思想を紹介する。	同　上
14	社会主義の政治思想	18世紀の二つの革命が政治革命であった点を批判し、その基礎にある文明社会そのものの革命を唱える社会主義の流れをマルクス等に焦点を当てながら講義する。その際、政治という営為の行方が重要なテーマとなる。	同　上
15	自由主義の政治思想	18世紀の二つの革命の原則を容認しつつも、その十分な機能を実現するためにはどのような条件が必要であるかを問題にしたトクヴィルミルを取り上げ、今日の政治理論への展望としたい。	同　上

＝ 政 治 思 想 Ⅱ ＝

〔主任講師：渡辺　浩（東京大学教授）〕

全体のねらい

近代日本社会とその政治の解明には、西洋渡来の制度文物だけではなく、それを受容し、しばしば変容させた日本の側の条件の理解が必要である。本講義は、徳川日本における政治思想の展開を解説することによってその一助となること、そして同時に、広く政治について考えるための刺激と素材を提供することを目標とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	時代の概観	徳川時代の日本、それはいかなる社会であり、そこにおける思想とはどのようなものだったのか。思想の背景をなす当時の社会・政治の状態を回顧しつつ、思想史の全体的な流れを解説し、以後の講義への展望を提供する。	渡辺　浩（東京大学教授）
2	儒学の政治思想	徳川時代の知識人の政治思想の主流は儒学である。その影響は次第に庶民にも及んだ。この回は、儒学の一般的な政治観を、君・臣・民・天・命・革命・禅譲・放伐・徳・修己治人等の観念に触れつつ、解説する。	同　上
3	武士と忠誠	武士が支配身分だったことは、中国・朝鮮等と対照的な日本史の顕著な特色である。この回は、戦国武士及び徳川時代の忠誠・規範意識とその影響を、「武士道」論や赤穂事件論にも触れながら、論じる。	同　上
4	武士と「仁政」	政治とは何か、特に、統治は誰のためになされるのかという問いへの答えは、決して自明でない。この回は、この問いに関わる徳川時代の人々の議論を紹介する。儒学の「革命」論はその一つの焦点である。	同　上
5	伊藤仁斎の政治思想	京の町人儒者、伊藤仁斎とその子東涯による新しい儒学、いわゆる仁斎学の内容を説明する。それは、真面目で暖かな思いやりの態度を全ての人の倫理として強調し、それを政治においても実行すべきだとするものである。	同　上
6	荻生徂徠の政治思想	幕府に近かった荻生徂徠は、天下国家を治めるために儒学があるとして独自の思想体系を構築し、それに基く政策論をも展開した。その思想は知識人の世界を一時席捲し、巨大な影響力を持った。この回は、その内容を説明する。	同　上
7	「家」と「天下」	徳川時代人が頭に描いた政治社会像は、しばしば、いわば過去から未来へ延びる筒状の「家」が無数にピラミッド状に積み上げられた構造を持つ。この回は、日本の「家」の特質を論じつつ、その倫理・政治思想との関連を探る。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	反文明とユートピア －安藤昌益－	文明は人類にとって恩恵であろうか。これを害悪と見、それを支える思想と対決し、太古の理想社会への復帰を夢みた人々もいる。この回は、賀茂真淵等にも触れつつ、特に安藤昌益の思想を解説する。	渡辺　浩
9	叛逆の論理 －山県大武・大塩中斎－	特に徳川時代人にとって、時の政治体制に正面から叛逆することは、知的精神的にも至難だった。しかし、自己の築いた思想を足場に、実際にそれを試みた人々もいる。この回は、特に山県大弐と大塩平八郎について論じる。	〃
11	「尊王論」の前提	徳川時代、天下様（将軍）と天子様（天皇）との関係はすこぶる曖昧で、これをめぐって種々の議論が発生した。それを経る内に、次第に、いわゆる尊王論が昂揚していったのである。この回は、その過程をたどる。	〃
10	華夷思想と日本国観	徳川時代人は、世界とその中における日本の位置について、いかに理解し、どう説明したのだろうか。この回は、中国渡来の華夷思想を一つの焦点としつつ、当時の対外観及びその関連における日本国観について論じる。	〃
12	村人達と「一揆」	1945年まで、「国体」は、日本の重要な政治用語だった。その直接の淵源は会沢正志斎・藤田東湖等の後期水戸学にある。本来徳川体制の維持強化を目指しながら、機能においてその墓穴を掘ったこの逆説的な思想を解説する。	〃
13	本居宣長の政治思想	いわゆる「もののあはれ」の文学論の首唱者、『古事記伝』の著者、伊勢国松坂の医師本居宣長の国学は、政治思想としても興味深く、かつ歴史的に重要である。この回は、本居宣長の政治思想の内容を解説する。	〃
14	「国体」の逆説 －水　戸　学－	徳川時代、人口の圧倒的多数は村人だった。彼等にとって、政治とは、正義とは何であったのか。興味深いがすこぶる難問である。そこで特に百姓一揆とその指導者の史料に材をとって例示的な説明を試みる。「世直し」騒動にも言及する。	〃
15	西洋観と「開国」	徳川時代人は、西洋をどう見ていたのか。洋学者を含めた当時の人々の西洋観とその変化をたどり、更にペリー来航以後の「開国」をめぐる諸議論を紹介・解説する。	〃

＝現代政治理論＝

〔主任講師：阿部　斉（放送大学教授）〕

全体のねらい

政治理論は、今日の政治的現実に適切な説明を与え、今後の政治的変化を的確に予測する上で、大きな役割を果たす。現代の政治理論は、大きく分ければ、ヨーロッパで発展した伝統的理論と、大戦後にアメリカで発展した行動論的理論とに分けられよう。以下、これら二つの流れの双方において、政治理論を概観することにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代国家の理論	19世紀までの代表的な国家理論である一元的国家論やマルクス主義的国家論との対比において、バーカーやラスキの唱えた多元的国家論を考察し、あわせて現代国家の理論的位置づけを明らかにする。	阿部　斉（放送大学教授）
2	マルクス主義の政治理論	マルクス主義は19世紀の代表的な政治理論のひとつであるが、今世紀に入るとともに、社会的経済的現実の変化に対応して、新たな理論的発展を遂げた。ここでは、レーニン、ベルンシュタイン、グラムシらの政治理論を検討する。	同上
3	自由主義の政治理論	自由主義は今日なお西欧の政治哲学の根幹を成している。現代の自由主義に大きな影響を及ぼしたトクヴィルやミルのほか、今日の自由主義哲学を代表するバーリン、アメリカ的自由主義の特質を解明したハーツの理論を検討する。	同上
4	エリートの理論	自由主義に対抗する理論としては、まずエリートの役割を強調するエリート理論をとりあげることができる。その代表的な例として、パレート、モスカの政治理論を紹介、また最近の例として、ミルズのパワー・エリート論をとりあげたい。	同上
5	大衆社会の政治理論	エリートと対抗関係に立つのは大衆であるが、大衆の政治的特性の分析も現代政治学の重要な課題である。大衆社会を分析した政治理論のなかから、ウォーラス、リップマン、デューイらの理論をとりあげ、それぞれの意義を明らかにする。	同上
6	政治権力の理論	戦後におけるアメリカ政治学興隆の出発点となったのは、メリアムの政治学であり、またそれを継承したラズウェルの政治学であった。ここでは、政治権力の理論に焦点をあわせながら、メリアムとラズウェルの政治理論を検討する。	同上
7	政治システムの理論	システム論は現代の政治学においても重要な役割を果たしている。政治学にシステム論を導入する上で先駆的役割を果たしたイーストン、構造―機能分析によってシステム論を展開したアーモンドらを紹介し、システム論の意義を検討する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	意思決定の理論(I)	第二次大戦後のアメリカ政治学の二本の柱は、権力論と意思決定論であった。ここではまず、意思決定論の一分野として、ノイマンとモルゲンシュテルンによって開発されたゲームの理論をとりあげ、その政治学的意義を明らかにする。	阿部　斉
9	意思決定の理論(II)	今日の意思決定の最も一般的な方式は、多数決である。しかし、この多数決はさまざまなパラドックスを持っている。なかでも最もよく知られているアローのパラドックスを中心に、多数決の問題点を追求したい。	同上
10	意思決定の理論(III)	組織内における意思決定の特質を究明したのはサイモンであり、それを発展させたのはリンドブロムであった。ここでは、サイモンの意思決定論やリンドブロムのインクリメンタリズムを紹介しつつ、政治的意思決定過程の特質を解明する。	同上
11	政治参加の理論	政治参加は現代民主政治の最も重要な特徴のひとつである。しかし、政治参加はけっして平等に行われているわけではない。だれが最もよく政治に参加するかを明らかにしたヴァーバ、ナイ、キムらの研究を通して、政治参加の問題点を探る。	同上
12	集団行動の理論	利益集団の圧力活動にみられるように、集団行動は、今日の政治過程における最も重要な要因のひとつである。集団行動の政治的意味について、古典的成果を残したベントレイから今日のオルソンに至る一連の研究を検討する。	同上
13	投票行動の理論	利益集団と並んで政治過程で中心的な役割を果たすのは、政党と有権者である。政党と有権者の行動様式に関する多くの理論のなかから、ここではダウンズの合理的投票行動論とサルトーリの政党論をとりあげ、それぞれの問題点を探る。	同上
14	民主主義の理論	ダールは、今日の民主主義の理論的分析を進めてきた政治学者の一人である。彼はより厳密な分析のために、ポリァーキーという概念を提起した。また、クリックは民主主義と政治との緊張関係を明らかにした。その紹介を通じて現代民主主義の問題点を探る。	同上
15	現代政治理論の課題	第2次大戦後のアメリカ政治学は、行動論的政治学とも呼ばれるが、行動論的政治学に対する最も鋭い批判を試みたのは、哲学者のアレントであった。アレントの批判を通じて行動論的政治学の限界を明らかにし、現代政治理論の課題を探る。	同上

＝現代の政治生活＝

〔主任講師：堀江　湛（慶応義塾大学教授）〕

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業構造の変動と政治生活	わが国における産業社会の変動がどのような政治問題を生み出し、全体として政治生活にどのような変化が生じたかを産業化、都市化、マスコミ、交通・通信、教育などに焦点を当てながら論じる。	堀江　湛（慶応義塾大学教授）
2	大衆の登場とマス・デモクラシーの課題	現代政治はまず何よりも大衆現象によって特色づけられる。そこでまず大衆とは何かを公衆・群衆と比較しながら明らかにした上で有権者の増大、マスコミの発達、政治的無関心などを論じる。	同上
3	技術化社会と政治	情報化社会とは何か。管理社会とは何かを明らかにしながら、特徴的な反体制行動の性格、米ソ両体制の収斂イデオロギーの終焉論、ユーロコミュニズムなどについて説明する。	芳賀　綏（東京工業大学教授）
4	現代社会の病理	巨大組織の発展、疎外、アノミーといった現代社会の病理が政治意識や行動にどのように現われているかを明らかにする。	堀江　湛（慶応義塾大学教授）
5	政治的社会化（対談）	人間がどのようにして政治的態度を身につけ政治的イデオロギーや価値観がどのように注入され、政治的態度はどのように変化していくか。さらに世代の断絶や社会化の新しい問題などについても論じる。	堀江　湛（慶応義塾大学教授） 芳賀　綏（東京工業大学教授）
6	政治的パーソナリティ	人間のパーソナリティやライフ・スタイルと政治的イデオロギーや意識・行動の関連について考察する。権威主義的パーソナリティ偏見の構造・若者や社会的少数派のアンデンティティの問題などにふれる。	堀江　湛（慶応義塾大学教授）
7	イメージ時代の政治行動	現代社会においてはイメージ選挙に代表されるように人々の政治行動は政治的イメージによって大きく左右される。政党や候補者イメージ、ステレオタイプ、イメージ言語などについて論じる。	芳賀　綏（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	政治参加とエリート	政治参加とは何か。現代政治においてエリートはどのような影響力を行使しているか。エリート民主政治との関連はどのようにとらえられるべきか。政治的リーダーシップの諸側面などについて論じる。	堀江　湛
9	現代政治と政党	現代政治において政党はどのような機能を果しているか。名望家政党から大衆政党への変質、政党政治家の社会的背景、政党の派閥などについて論じる。	芳賀　綏
10	政治活動と政治資金（対談）	新しい選挙運動の形態、金のかかる政治の実態、政治資金の公営化や政治資金の規制について論じる。	堀江　湛 芳賀　綏
11	利益団体の圧力行動と住民運動	現代政治における農協、医師会etcといった既成の利益団体と住民運動、市民運動にみられる新しい利益団体との性格の比較検討、街頭における大衆の圧力行動の考察を行う。	堀江　湛
12	投票行動の政治学	投票行動の科学的研究の発展のあとをふりかえり、基本的な分析の視角について紹介する。	同上
13	有権者を動かすもの	人々の投票意思の決定における社会的、心理的、政治的要因について分析し、争点の操作、マスコミの果す役割について論じる。	芳賀　綏
14	現代政治と無党派層の動向（対談）	いわゆる政党支持ばなれ、都市の多党化現象、若者の脱政治的傾向などについて考察する。	堀江　湛 芳賀　綏
15	選挙予測とマスコミ	選挙予測の方法について紹介、検討するとともにマスコミの与える影響力について論じる。	堀江　湛

＝ 現代の国際政治 ＝

〔 主任講師：神谷不二（慶応大学教授）
〃　：高橋和夫（放送大学助教授） 〕

全体のねらい

戦後の国際政治の展開を鳥瞰し、現代史を規定してきた諸要因を考え、さらにその将来を占ってみる。詳細な部分像ではなく簡潔な全体像を、事実の羅列ではなく分析のための体系的な枠組を提示したい。言いかえるならば学生自らが国際政治を考えていく上での案内図を描き出すことが本コースのねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第二次大戦後の世界	第二次大戦後の外交風景の中で特徴的なのは(1)米ソ超大国の対立と核戦略の展開、(2)アジア・アフリカの独立、(3)国際的な経済的相互依存の深化とその調整の問題が深刻化したことであろう。これらの点を中心に戦後の国際政治を概観し、コースの全体像を提示する。	神谷不二（慶応大学教授） 高橋和夫（放送大学助教授）
2	米ソ関係の展開(1) ヨーロッパの冷戦 アジアの熱戦 1945年―1953年	ドイツの分割占領から朝鮮戦争の終結までの時期を解説する。米ソ関係が大戦中の同盟から戦後の対決へと変貌を遂げる推移を振り返りその意義を考える。	同上
3	米ソ関係の展開(2) 板門店からキューバへ 1953年―1962年	朝鮮戦争以降キューバ危機までの米ソ関係を取り扱う。特に米ソが核兵器とその長距離運搬手段を保有したことの軍事的、政治的意味を探り、両超大国の核戦略の展開を考察する。	同上
4	米ソ関係の展開(3) 対決と交渉 1962年～	キューバ危機以降の米ソ関係を概説する。ニクソン・キッシンジャーのデタント（緊張緩和政策）、ソ連軍のアフガニスタン介入とレーガン大統領の登場によって始まった第二次冷戦期、そしてゴルバチョフ・レーガン頂上会談等を現代史の中に位置づける。	同上
5	アジア・アフリカの独立	世界の人口の大半を占めるアジア・アフリカ地域の独立とその後の苦悩を振り返りつつ、米ソの世界的対立を背景として推移してきた第三世界の動向に焦点をあてる。	同上
6	インドシナ戦争とASEAN（東南アジア諸国連合）	米ソ日中の利害の錯綜する東南アジアは、ベトナムの影響下のインドシナ半島諸国と西側寄りのASEANに二極分解した。この二極構造の成立までの過程を分析し、国際政治におけるこの地域の役割を論ずる。さらにその将来を展望する。	同上
7	中ソ対立と米中接近	共産圏の二大国間の対立は、米中の接近という事態を導き出した。この中ソ対立と米中接近の跡をたどり、モスクワ・ワシントン・北京間の外交的三角関係の将来を占う。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	戦後の貿易体制	戦後の日本、ヨーロッパの経済復興と発展を可能にした自由貿易体制の成熟と崩壊について説明する。また姿を現しつつある新しい貿易体制についても言及し、体制変革の要因を論ずる。	神谷不二 高橋和夫
9	ドル支配の没落と混乱 ブレトンウッズからフロートへ	戦後の貿易体制を支えてきた通貨制度、ブレトンウッズ体制の成立と発展、そしてその崩壊について述べる。また1970年代以降に採用された変動相場制、フロートの功罪について考える。	同上
10	多極化の時代	日本、ヨーロッパの経済発展により米国の隔絶した優位は過去のものとなり、世界は経済的には多極化の時代に突入した。この多極化を引き起こした要因を探り、その政治的意味を明らかにする。	同上
11	多国籍企業	戦後顕著になった企業の多国籍化の実態を解説し、その原因を考える。また多国籍企業が国際政治の場において果たす役割に関する論争の推移を紹介し、その将来を展望する。	同上
12	南北問題	先進諸国の生活水準の向上する中、第三世界の遅れが目立っている。そして後者の貧困の問題が国際政治の重要なアジェンダ（議題）となってきた。その実態と原因に関する論争を紹介し、次章への導入を計る。	同上
13	石油と国際情勢	世界経済を揺り動かしたOPECによる石油価格の値上げ攻勢と、その成功が誘発した第三世界の国際経済秩序の変革、つまりNIEO（新国際経済秩序）確立の要求について解説し、その政治的意味に光をあてる。	同上
14	国際機関	国際政治の力学の産物として国際連合及びその他の国際機関をとらえ、諸機関の成立と発展を解説し、その国際政治での役割りに評価を与える。	同上
15	宇宙船「地球号」の理想と地上の現実	戦後の国際政治を動かしてきた諸要因を再検討し、将来を展望する。また宇宙開発のもたらした人類は一体であるとの崇高な認識と国際政治の冷厳な現実を対比し、両者の融合の道を探る。	同上

＝ 日 本 の 政 治 ＝

〔主任講師：阿部　斉（放送大学教授）〕

全体のねらい

基本的なねらいは、日本の政治についての体系的理解を深めることにある。受講者はすでに日本の政治について断片的、部分的知識を持っていると想定されるが、それは必ずしも日本の政治を科学的客観的に理解していることを意味しない。そこで、この講義では受講者の日本の政治に関する常識を前提としながら、比較政治論および現代政治論の学習成果を活用しつつ、日本の政治の特性を明らかにしていくことにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	明治国家から現行憲法体制へ	政治と国家　明治国家の前近代性　明治国家の近代性　戦後の民主化　民主化政策の限界	阿部　斉（放送大学教授）
2	国会の機能	日本の議会　二院制議会の機能　議会の機能低下　代表制の二類型	同　上
3	日本の立法過程	立法部としての議会　日本の立法過程の特色 立法過程における官僚の役割　国会の立法機能	同　上
4	議院内閣制	近代デモクラシーと議院内閣制　日本の内閣制度成立と展開　国民主権と議院内閣制 一党優位政党制下の議院内閣制　議院内閣制と行政官僚制	同　上
5	福祉国家化と行政機能の拡大	福祉国家の登場　戦後経済発展と社会保障の拡充　福祉国家の進展と地方自治体　日本型福祉社会論と行政機能	同　上
6	日本の官僚制	官僚制の多様なイメージ　M・ウエーバーの官僚制概念　日本における近代官僚制の形成 原理の転換と公務員　行政指導と官僚制 官僚制の意思決定としての稟議制	同　上
7	審議会の役割	行政国家の進行と審議会　日本における審議会の発展　政策形成と審議会の組織・機能 政策決定システムの変化と審議会 私的諮問機関	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	利益集団と行政	社会集団の利益集団化　利益集団と政治文化・政治体制　「変則的行政国家」と利益集団　戦後政治における政党と利益集団　利益集団の多元的構造　日本型ネオ・コーポラティズム	阿部　斉
9	補助金の行政と政治	補助金の概念　行政実務上の補助金概念　補助金の規模と交付対象　交付決定の手続きと政治　自治体行政と補助金　補助金の改革	同上
10	日本の予算政治	予算の意義と機能　予算制度の概要　予算編成 ── 大蔵省と各省庁　予算編成 ── 復活折衝	同上
11	行政改革	概念の多義性　第一次臨時行政調査会　その後の行政改革　小さな政府論の台頭　第二次臨時行政調査会　政治シンボルとしての行政改革	同上
12	日本の政策形成過程	政策の概念　政策形成の主体　政策形成過程研究の焦点　「戦略的政策」と「実施政策」　「戦略的政策」の形成　「実施政策」── 官僚制と政権党	同上
13	日本の選挙制度	中選挙区制　参議院議員選挙　定数不均衡　選挙運動	同上
14	日本人の投票行動 (1)	デモグラフィと投票	同上
15	日本人の投票行動 (2)	政党支持　政党支持の長期的変動　政策争点と投票	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	日本の政党	自由民主党　日本社会党　公明党　民社党 共産党	阿部　斉
17	後援会組織	後援会の組織　後援会の活動	同　上
18	マス・メディアの政治機能	マス・メディアと政治　新聞の日本的特質 テレビと政治　マス・メディアと世論	同　上
19	地方自治の歴史	近代国家と地方自治　明治地方自治の論理と構造　都市化と工業化の影響　戦後改革と地方自治　戦後改革の裏面　高度経済成長期の地方自治	同　上
20	地方自治の現状	地方自治体の種別と二元的代表制　都市型社会と自治体の政策　地方の時代と中央集権	同　上
21	地方議会と地方選挙	地方議会の意義と役割　都市化と多党化の進行 政策形成と地方議会の行動　地方議会と市民	同　上
22	住民運動と市民参加	管理社会と参加デモクラシー　住民運動の噴出と政治文化　参加の制度化と自治体改革 市民参加と生活構造　市民的政治文化と市民参加	同　上
23	日本の民主主義	日本における民主主義の起源　大正デモクラシー　戦後の民主主義　日本的特徴 「官僚政治」の伝統と民主主義	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	日本の自由主義	日本における自由主義の起源　天皇制国家と自由主義　「私化」と自由　私的自由と自律的個人　経済的自由主義	阿部　斉
25	日本のナショナリズム	ナショナリズムの起源　明治国家のナショナリズム　超国家主義への移行　ナショナリズムの崩壊　今日のナショナリズム	同　上
26	保守主義の政治	保守と革新　日本人の保守性　革新勢力の伸張と停滞　保守政党の統治体制	同　上
27	日本の政治文化	「古層」と「執拗低音」　個人析出の類型 集合体コスモスと相即コスモス　タテマエとホンネ	同　上
28	日本人の政治意識	現行憲法体制の正統化拠政治的関心度 政治活動と政治参加　政党支持率と内閣支持率	同　上
29	平等化と平等主義	平等主義社会　日本における平等化　平等主義社会の政治　平等主義社会と差別　平等主義社会の教育	同　上
30	日本の政治的課題	政権交代の可能性　安全保障と自衛隊 大きな政府と小さな政府　差別の解消 政治教育	同　上

＝政治史 Ⅰ＝

〔主任講師：山口　定（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ第二帝制の成立から第二次世界大戦前夜にいたるヨーロッパ現代政治史のなかから、できるだけ現代的意味のあるテーマを選んで講述する。かつてのようにヨーロッパを「学びとるべき模範」とするのでもなく、また今日一部に見られるように、「かつての先進国」として軽く見るのでもなく、批判的摂取の対象として考え直してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ドイツ第二帝制の成立	1871年のドイツ第二帝政の成立は、現代ヨーロッパ政治史の起点であるばかりでなく、ビスマルクの強力な指導力とプロイセンの軍事力による「国民的統一」の達成、その後の目覚ましい産業の発展を考える時、「後発国型近代化」の一原型といえる。	山口　定（大阪市立大学）
2	イギリスにおける議会制民主主義の確立	19世紀の三回にわたる選挙法改革とそれを通じての近代政党の成立によって生まれる古典的議会制民主主義（ヴィクトリア期における議会政治の黄金時代）の諸相を明らかにし、それを可能にした社会的・経済的・文化的諸条件を考える。	同　上
3	第一次大戦前の労働運動と社会主義運動	イギリス労働党とドイツ社会民主党、それにフランスの三分裂（革命派、改良派、サンディカリズム）を比較しつつ、労働者政党の諸類型、労働運動、社会主義運動と政治のかかわりあいの歴史的特質について考察する。	同　上
4	「帝国主義」とその国内体制	イギリス、ドイツ、フランス三国の「帝国主義」政策の性格の違いをそれぞれの国の内政のあり方や社会構造の相違と関連させながら説明し、あわせて、第一次大戦の悲劇がなぜ起ったかをとくにドイツの対外政策の展開の跡を追いつつ明らかにする。	同　上
5	ロシア革命―後進国革命の悲劇―	ロシア革命がなぜ起ったのか、そしてそれが「社会主義」革命になったのはなぜなのか、また後進国で「社会主義」革命が成功したときにどのような問題が生じるのか、といった諸問題を、ツァーリズム・ロシアの政治・社会構造の特質の解明と関連させて考える。	同　上
6	イタリアにおけるファシズムの勝利	1922年10月のムッソリーニ内閣成立をファシズム型「直接行動の政治」の勝利と考えそうした事態の生じた原因を第一次大戦直後のイタリア政治の混乱に求めるだけでなく、イタリア統一（1861年）以後の政治の特質のなかに探る。	同　上
7	ヴァイマル共和制の不安定	第一次世界大戦と第二次大戦のあいだのいわゆる「戦間期」における「議会制民主主義の危機」の古典的事例とされるヴァイマル・デモクラシーについて、その不安定条件を比例代表を初めとする制度的諸要因と政党政治のあり方のなかに探る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	世界恐慌と社会民主主義	世界恐慌（１９２９年～ ）の衝害を最初に受けたのは、イギリスの労働党政権、ドイツの社会民主党中心の連合政権であった。そしてこれら社会民主主義政権の恐慌への対応の失敗と「スウェーデン・ニューディール」の成功との対比によって、一つの歴史的岐路を明らかにする。	山口　定（大阪市立大学）
9	保守派の恐慌対策	イギリスの労働党、ドイツの社会民主党が恐慌対策をめぐって坐折したのち、政権の座についたのはイギリスでもドイツでも保守派であった。イギリスではなぜ保守派が成功し、ドイツでは、保守派も坐折し、ファシズムにいたったのか比較しつつ考える。	同　上
10	ナチスの台頭と政権掌握	ドイツにおけるヒトラー内閣の成立（1933年1月）は巨大なファシズムの大衆運動の登場によって可能となったものであったが、この大衆運動の成立の条件と、それを支えた思想ならびに政権掌握時の諸事情を考察する。	同　上
11	ウェルサイユ体制の矛盾とその展開	第二次大戦は、ヴェルサイユ体制（第一次大戦の戦後処理）にはらまれた諸矛盾が、世界恐慌によって爆発した結果であると考えられる。ここではこの戦後体制の出発点での諸矛盾とそれに対する諸国の対応をドイツ問題を中心にして考える。	同　上
12	スターリン独裁体制の成立とその波紋	1929年以降のソヴェトにおけるスターリンの独裁権掌握とその後の暗黒政治の展開の背景には何があったのか、という問題を「一国社会主義」論と農業集団化を中心として「後進国革命」のたどった道という観点から考察する。	同　上
13	二つの人民戦線政府とその苦悩	１９３６年にスペインとフランスに相ついで成立した人民戦線政府は、前者は内乱と社会革命の狭間に立たされ、後者は経済政策の失敗とスペイン援助問題によって窮地に追いこまれる。その苦悩の実相を明らかにし、第二次大戦との関係を考える。	同　上
14	二つのファシズム体制 ― その虚像と実像	３０年代のイタリアとドイツにおけるファシズム体制のらん熟した姿はいまようやく解明の途上にある段階といってよい。その実相を明らかにしつつ、そこにあらわれた諸問題の現代的意義を考える。とくに軍拡と「破滅経済」に力点をおく。	同　上
15	ソヴィエト外交と宥和政策	ヒトラー内閣成立後、ソヴィエトは外交政策を転換し、国際連盟に加入し仏ソ相互援助条約を締結する。しかし、イギリス、フランスの宥和政策の展開は結局、スターリンとヒトラーの提携という逆転劇を通じて戦争への道を最終的に開いてしまう。	同　上

＝政　治　史　Ⅱ＝

〔主任講師：五百旗頭　真（神戸大学教授）〕

全体のねらい

明治維新から現在に至る日本政治外交史を講述する。はじめに、近代日本が背負うことになった基本的課題を総説し、ついで、時代区分しつつ歴史的展開をたどる。国内政治の変動を縦軸とし、国際環境の変化への対応を横軸として、両者の関連の中で近現代史を見て行きたい。古い時代に劣らず、新しい時期にも注意を払いたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	西洋文明の挑戦と対応 ー近代日本の基本問題(1)ー	西洋文明の挑戦に対する近代日本の対応の型をマクロに考察する。学習すべき西洋社会の力の秘密、日本の独自性を守る方途、価値観と政策論の双方における欧化主義と「日本への回帰」主義への分裂、および両者の時期的移行などを見る。	五百旗頭　真 （神戸大学教授）
2	地理的・歴史的条件 ー近代日本の基本問題(2)ー	近代日本が置かれた極東の島国という地理的条件の持つ政治的意味がどのように変化したかを検討する。また儒教的秩序観の支配する社会から、帝国主義時代の世界に船出した日本人の国際認識と自己認識の特徴は何であったかを検討する。	同　上
3	明治初期の「内治優先主義」	明治初期における近代国家形成の特徴を講述する。新政府は、一方で武力反乱を鎮圧し、他方で征韓論のような対外的冒険策を斥けて、国内統合を固めつつ新国家の基盤確立を計る。大久保利通を中心とする「内治優先主義」を検討する。	同　上
4	明治体制の成立	明治２２年の大日本帝国憲法を頂点とする明治体制の概要と問題点を講述する。明治立憲制は自由民権運動などにより内圧化された国際的潮流を反映しつつも、新政府内の諸要請を制度化していた。その長期的制度としての問題点を考察する。	同　上
5	日清・日露の時代 ー「帝国」としての発展ー	日清・日露両戦争発動の理由とその帰結を検討する。明治後半期の日本が、帝国主義的時代環境に対応する中で、予想をこえる戦勝をはずみとして、アジアにおける「遅れて来た帝国」に成長する過程を考察する。	同　上
6	「藩閥支配」から政党政治へ ー過度期の日本ー	近代日本史において政治の民主化は、ジグザグの中でも長期的底流であった。明治後半の対外戦争を終えたあと、その潮流は明白となる。大正政変の時期を中心に、新旧勢力が妥協しつつ新しい政治形態を模索する状況を講述する。	同　上
7	政党政治と国際協調 ー大正デモクラシーー	第一次世界大戦以後の時代は、通常、現代史と呼ばれている。それは、社会の民主化と国際化、科学技術の発展などを主要な特徴としている。日本の政治がこのインパクトをどう受けとめたかを、原敬の政治外交指導を中心に検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	軍部の時代 －1930年代－	ほぼ、順調に発展していたかに見えた政党政治が、なぜもろくも崩壊したのか。陸軍はいかにして軍部支配を押し進めたか。満州事変によって解き放れた「軍事発展ドライブ」と、二・二六事件を頂点とする「革新運動」を講ずる。	五百旗頭　真
9	「帝国」の破局	日中戦争が拡大する中で、対外軍事行動と国内の軍部支配が結合され、一つの体制が形成される。それを背景に、三国同盟から真珠湾攻撃に至る時期、日本外交は最も大胆であった。外面的な勇壮さと実質的な破局という背理を考察する。	同　上
10	対日占領政策	米国政府は敵国日本をどのように処理しようとしたか。処罰的破壊論と友好国としての再建論が米国内で対立する中で、非軍事化と民主化とを軸とする対日占領政策が形成される過程を検討する。	同　上
11	「通商国家」としての国際復帰	敗戦後の日本には、(1)民主化の徹底、(2)経済復興、(3)伝統的国家の回復、の三路線が競合し、それぞれの立場を代表する政権が現れた。その中で吉田茂を中心とする(2)の路線が主流をなし、日本は「通商国家」として国際復帰するに至る。	同　上
12	「55年体制」と政治危機	1955年に成立した戦後国内政治の基本的構成について概説する。「1½体制」を支えた政治基盤、政治的分極化、およびその帰結としての「60年安保」を検討する。	同　上
13	「通商国家」の発展 －1960年代－	安保闘争のあと政権についた池田勇人は、政治問題の回避策と経済的積極策を採り「通商国家」路線を定着させる。60年代の経済成長をもたらした国内的・国際的条件、およびその間における国内社会の変化を講述する。	同　上
14	「経済大国」の動揺 －1970年代－	政治・経済両面にわたる国際的激変が、70年代初頭の日本を襲い、「経済大国」の脆弱性が露呈される。国内でも多党化と保革伯仲状況が進展する。このような流動化の中で、日本の政治と経済がどう対応したかを検討する。	同　上
15	まとめ－日本政治外交の問題点－	明治以来、100年をこえる歴史の中で、我々は何を得、何を失ってきたか。現在、どのような歴史的地点に立っているのか。歴史的遺産と新しい国際環境は、我々にどのような課題を負わせているか。	同　上

＝政　策　科　学　＝

〔主任講師：吉村　融（埼玉大学教授）〕

全体のねらい

１９６０年代後半より急速に発達してきた新しい学問分野である「政策科学」ないしは「公共政策研究」について、その発展の過程、背景、思考のフレームワーク、政策研究の動向などを概観し、経済政策、医療政策、科学・技術政策等との関連性と貢献の諸様相について紹介し、政策科学研究に対する基礎的理解と今後の問題点を提起する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	政策科学研究の発祥とその背景	ア）政策科学研究に対する時代の要請消極的行政から積極的問題解決型行政への転換、予見的政策体系の確立。 イ）政策科学研究２０年の歩みと新しいパラダイム、社会科学研究における一連の現代化と方法論の革新。新しい研究組織と教育組織の発達過程。	吉村　融 （埼玉大学教授）
2	政策形成過程の革新と政策科学	ア）政策形成過程の構造化と、わが国における問題点。 イ）政策形成過程への科学的知識・知見の導入とその制度化。 ウ）法制定主義とその問題点。	同　上
3	社会科学政策の課題	ア）わが国における社会科学政策の立遅れ。 イ）行政府内における革新へのステップ。	同　上
4	政策過程の政治社会学	政策過程とは、政策決定と政策実施とを含む過程である。それについて、政治システムと環境、入力と出力、支持と要求、出力フィード・バックなどの基礎的な概念を政治社会学の観点から説明し、基本的な文献を紹介する。	綿貫譲治 （上智大学教授）
5	政策決定過程の諸アクター	予算編成と法冷制定の両方の場合について、また、日本の場合に焦点をおき、その主要アクターについて解説する。議会、政党、執行部（内閣、首長）、名省と自治体行政をとりあげ、それぞれの行動様式と機能について解説する。	同　上
6	行政における諸要因	主として政策実行の担い手としての行政について、その効果的機能に関連する諸要因をとり上げる。組織の効果的運営、情報の役割り、国民あるいは住民のニーズについての政治社会学理論の検討と問題点の指摘とを行う。	同　上
7	「経済政策」と政策科学的アプローチ(1) ー経済政策の目的ー	政府が経済政策を行なうのは、私的な経済活動だけでは必らずしも社会的に望ましい結果がもたらせないからである。これを、資源配分、所得分配、経済安定化の各観点から整理する。	野口悠紀雄 （一橋大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	「経済政策」と政策科学的アプローチ(Ⅱ) －経済政策の手段の選択－	経済政策の目的を達成するための手段には、規制、補助金、税など、さまざまなものがある。これらの手段の選択にあたり、いかなる評価基準を用いるべきかという、政策選択の基本理論を学ぶ。	野口悠紀雄
9	「経済政策」と政策科学的アプローチ(Ⅲ) －大きな政府か小さな政府か－	政府の果すべき機能についてはそれをできるだけ積極的に広げようとする考えと、逆にできるだけ限定化しようとする考えとが、従来から対立していた。これについて、代表的見解を紹介し、各国の事例をみる。	同上
10	医療と政治科学(Ⅰ) －医療において計画とは何か－	医療とは医学の社会適用であるといわれている。一種の社会システムとしての医療システムには、いままで、対策はあっても計画はなしといった傾向がみられた。ここではまず医療における計画とは何かを論ずることとしよう。	藤正巌 （東京大学助教授）
11	医療と政策科学(Ⅱ) －医療と科学技術進歩－	医療に科学技術の進歩が与えるインパクトは大きい。どのような科学技術が医療にどのようなインパクトを与え、さらに、どのように社会と政策上に影響を及ぼしたかを述べ、科学技術と人間生活のかかわりあいを考えよう。	同上
12	医療と政策科学(Ⅲ) －科学技術政策の現状－	医療費の高騰は、どの先進諸国においても解決を要する問題がある。ここでは、わが国の医療構造を経済面よりながめ、その未来を予測し、どのような問題が発生し、その解決策は何であるかを一つの政策科学の応用例として解いてみよう。	同上
13	政策科学と科学技術政策 (Ⅰ) －科学技術政策の現状－	日本における科学技術政策がどのように行われているかについて概観する。過去２０年間は、日本にとっては激動の時代であった。科学技術政策も大きな変遷を遂げた。そこで、科学技術政策の分野において起きた主要な変化について解説する。	児玉文雄 （埼玉大学助教授）
14	政策科学と科学技術政策 (Ⅱ) －技術革新に関する研究－	科学技術政策を政策科学的に分析する場合の基礎となるのは、技術革新に関する研究である。そこで、技術革新に関する最近の研究成果を紹介し、それらが科学技術政策に対して何を意味するかを考えてみる。	同上
15	政策科学と科学技術政策 (Ⅲ) －技術政策の今後の方向－	技術の面でも欧米諸国水準に追いついた日本において、技術政策も質的に変化しなければならない。そこで、あらためて、政府が技術開発に対して何ができるかを問い直すことにより、今後の技術政策のあり方を考えてみよう。	同上

＝ 近 代 経 済 思 想 ＝

〔主任講師：西部　邁（東京大学助教授）〕

全体のねらい

近代ヨーロッパの経済思想史の流れの中から、広く社会科学一般に大きな影響を及ぼした代表的人物を取上げ、それぞれの見解を《資本主義経済の運命》をどう把えたか、という観点から整理し、相互に比較しながらそれぞれの特徴を明らかにする。具体的には、資本主義の比較史的独自性を強調した、ヴェーバー。資本主義社会を文明社会として楽観したスミス。産業革命以降の諸問題に直面した社会改良家ミル。後進資本主義国の代弁者リスト。資本主義の終末と労働者階級の解放を展望したマルクス。混合経済への道を拓いたケインズ。資本主義の将来に独特の見通しを与えたシュンペーター。最後に現代の諸問題への経済思想からの展望が取上げられる。

主な項目

(1)　序
(2)　(1) ヴェーバー1
(3)　(1) ヴェーバー2
(4)　(1) ヴェーバー3
(5)　(1) ヴェーバー4
(6)　(2) スミス1
(7)　(2) スミス2
(8)　(2) スミス3
(9)　(2) スミス4
(10)　(3) ミ　ル1
(11)　(3) ミ　ル2
(12)　(3) ミ　ル3
(13)　(3) ミ　ル4
(14)　(4) リスト1
(15)　(4) リスト2
(16)　(5) マルクス1
(17)　(5) マルクス2
(18)　(5) マルクス3
(19)　(5) マルクス4
(20)　(5) マルクス5
(21)　(6) ケインズ1
(22)　(6) ケインズ2
(23)　(6) ケインズ3
(24)　(6) ケインズ4
(25)　(7) シュンペーター1
(26)　(7) シュンペーター2
(27)　(8) 現代の諸問題1
(28)　(8) 現代の諸問題2
(29)　(8) 現代の諸問題3
(30)　(8) 現代の諸問題4

＝経済発展論＝

〔主任構師：嘉治元郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

世界諸国および諸地域の長期的経適発展について、理論的ならびに実証的な分析を行なう。
主として市場経済の成立している経済における発展をとりあげる。
具体的には、我々にとって身近かな日本経済の長期的な変化について明らかにし、その将来を展望する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	経済発展とは何か	経済発展 economic development という言葉の意味を明うかにし、どのような尺度でそれを測るべきかを論じる。	嘉治元郎（放送大学教授）
2	発展段階説の概観	経済発展を幾つかの段階として歴史的にみる考え方について説明する。	〃
3	現代の経済発展論	現代の経済理論において、近・現代の経済発展がどのように論じられているかを明らかにする。	〃
4	経済発展の諸要因	経済発展をもたらす諸要因について概観し、それぞれの役割について概略説明する。	〃
5	人口動態と経済発展	人口の変化が経済発展とどのように関わっているかという点について論じる。	〃
6	投資と経済発展	各種の投資とその背後にある貯蓄とが、経済発展とどのように関わっているかという点について論じる。	〃
7	技術革新と経済発展	技術革新 innovation とは何かを明らかにし、それと経済発展とがどのように関わっているかという点について論じる。	〃

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	生産性の上昇	生産性という概念について明らかにする。そして生産性の上昇が経済発展において、どのような意味をもつかを説明する。	〃
9	経済発展と対外経済関係	一国の経済発展と、その国の対外経済関係とが、どのように関わっているかを説明する。	〃
10	経済発展と経済政策	市場経済の体制をとる国の経済発展に関する政府の役割について論じる。	〃
11	発展途上国 ― 南北問題	現代の国際社会における「発展途上国」の地位を論じ、それと先進国との関係、いわゆる南北問題について説明する。	〃
12	現代世界の経済発展 ― 東西問題	現代の国際社会には、市場経済の体制をとる国々と、計画経済の体制をとる国々とが併存しているが、この両者の関係、いわゆる東西問題について、経済発展の観点から論じる。	〃
13	日本の経済発展	過去一世紀の間、とりわけ第二次大戦後の期間における、我が国の経済発展について、理論的に証明する。	〃
14	先進国問題	既に高度に発展した国々の直面している経済問題について論じる。	〃
15	超長期の展望	世界経済の今後の発展について、超長期の展望を試みる。	〃

＝ 産 業 組 織 論 ＝

〔主任講師：植草　益（東京大学教授）〕

全体のねらい

産業組織論では個別の産業が特定の時点でいかなる構造をもち、その下で各企業がいかなる行動をとり、いかなる経済成果を実現しているかを分析するとともに、企業の行動や産業に対する公共政策がその産業の構造を長期的にどのように変化させてゆくかを解明することをねらいとしている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業組織論の課題と体系	まず産業とはなにかを説明し、そのなかで産業分類の方法について説明する。次に個別産業の分析の方法としての産業組織論の体系を説明し、さらに産業組織に重要な関連をもつ現代技術、産業構造、企業組織および産業に対する公共政策について概観する。	植草　益（東京大学教授）
2	産業構造の変化	産業組織論の具体的内容に入るまえに、産業組織論と重要な関連をもつ産業構造の変化と最近の技術革新の動向について論じる。ここではおもに戦後日本の産業構造の変化（重化学工業化、サービス化および情報化）と最近の先端技術開発の動向を論じる。	同　上
3	現代企業の組織	現代企業は所有の形態、企業規模、生産形態、企業結合の形態などにより、多様な形態に分類できる。それらの企業形態の分類を示すとともに、日本の企業組織の特徴をおもに産業組織との関連で考察する。	同　上
4	規模の経済性と範囲の経済性	現代の大企業はその主要製品について大量生産を実現するとともに、多品種にわたって垂直的、多角的に生産している。その実態を分析するとともに、その基礎としての規模の経済性と範囲の経済性について論じる。	同　上
5	売　手　集　中	産業組織論の体系に入って、まず売手集中についてその測定方法を示し、主要産業における売手集中の水準および時系列変化を説明する。さらに売手集中の水準を決定する要因について説明する。	同　上
6	製　品　差　別	製品差別の概念、製品差別を形成する要因、主要産業における製品差別の程度を論じ、さらに製品差別を形成する重要な要因としての広告についてその意義と問題点を論じる。	同　上
7	参　入　障　壁	参入障壁の概念、参入障壁の形成要因および参入阻止行動について論じ、現在の技術革新の進展過程で産業融合が進み、市場の国際化が進展するなかで、参入障壁が低下している実態に触れる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代企業の価格設定原則	現代の企業はいかなる価格設定原則を採用しているかを考えるため、価格設定原則に関する諸仮説を検討する。おもにフル・コスト原則、参入阻止価格、目標価格設定等を検討して長期利潤最大化仮説を論じ、それと売上高最大化仮説との異同を考える。	植草　益
9	寡占価格	現代の主要産業においては寡占が支配的市場形態である。寡占における価格形成について、クールノ以来の理論をサーベイし、現代における寡占の価格形成について論じる。また寡占における生産効率の向上と価格変化の実態に触れる。	同上
10	カルテルとプライス・リーダーシップ	寡占ばかりでなく原子的競争市場において各企業が協調的行動をとると、独占と同じ価格形成が可能となる。この協調形態の典型としてのカルテルとプライス・リーダーシップについて論じる。	同上
11	資源配分効率	特定産業における市場支配力や複数市場における多角的市場力が存在した場合には、資源配分効率が歪められる可能性をもつ。はたして現代において独占的市場支配力によって資源配分非効率が発生しているか否かを検討する。	同上
12	技術進歩	技術進歩は経済発展の原動力である。産業においていかに技術進歩が追求されているかを考えるため、技術進歩の概念、技術進歩の測定方法、技術進歩の基礎としての研究開発活動について概観する。	同上
13	独占禁止政策	これまでみてきたように、経済の成長・安定・進歩を実現するためには、市場機構にのみ全面的にゆだねておくことはできない。市場の不完全性による失敗が存在する。「市場の失敗」に対処するための産業に対する公共政策の1つとして独占禁止政策を論じる。	同上
14	直接規制政策	産業に対する公共政策の第2の形態としての自然独占分野（おもに公益事業）における政府の規制政策について、おもに価格規制のあり方を論じる。特に総括原価方式、限界費用価格形成、二部料金、ラムゼー方式などについて論じる。	同上
15	産業政策	産業に対する公共政策の第3の形態としての産業政策は多様な政策を含むが、おもに新産業の保護育成と衰退産業の構造調整について論じる。	同上

＝中小企業論＝

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）〕

全体のねらい

中小企業論の対象領域は、経済学、商業学、経営学などの研究分野にまたがっており、各専門分野の研究者の共同研究の対象とされることが多い学際的分野である。この科目は、1人の研究者の視点から、この学際的領域を総合的に把握しようとする1つの試みであり、専門科目の水準を保持しつつ、入門者にも分り易く、と願っている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	中小企業論の課題	中小企業論に対する視点には、経営的視点、政策的視点、研究的視点がある。中小企業論の課題は、研究的視点から国民経済における中小企業の全体像を客観的にとらえ、経営と政策の対応に役立つ基礎的認識を与えることである。	磯部浩一（放送大学教授）
2	中小企業問題の展開と政策の推移	わが国において中小企業問題が発生したのは、第一次世界大戦後であり、独占的な大企業や、百貨店などの大規模小売業の発展を契機としている。一部の中小企業の問題にとどまらず、経済全体の問題として認識が拡がり、政策が形成される。	同上
3	中小企業理論の形成	中小企業問題の発生は、伝統的な経済理論に対する疑問をひきおこす。何故、現実は理論どおりにはならないのか。また、問題の分析と対策の立案のために、これまでの理論でよいのか、こうして、中小企業をめぐる理論構築が進められる。	同上
4	中小企業の定義	中小企業とは何か、これが中小企業研究の出発点である。しかし、また、同じ問いが到達点においても問われる。中小企業は試験管の中で観察されるのではなく、動態的な国民経済の中で構造的な存在として追求されるのである。	同上
5	中小企業の地位と役割	日本の中小製造業は事業所得では99.5%従業者数では74.3%、出荷額では52.1%、付加価値額では56.9%（何れも昭和55年）と、きわめて大きな比重を占め、消費財の生産、大企業の下請、輸出、雇用の上で大きな役割を荷っている。	同上
6	日本経済の構造的特質と中小企業	日本経済の特質を、製品市場、労働市場、金融市場、資本市場において大企業と中小企業の相互関連の面において明らかにし、日本経済における中小企業の役割分担と、その問題性とを考察する。	同上
7	流通機構と中小企業	日本の流通機構を考察し、その問題点を明らかにしたうえで、中小工業の流通問題と、中小商業（卸売業、小売業）の流通問題を明らかにして、その対応策としての組織化にもふれる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中小企業の存立条件と存立分野	中小企業が大企業との競争に敗退してしまわないで、残存している条件は何か。また、ある分野では中小企業が成長しているが、その条件は何か、大企業の中小企業分野への進出は、如何に対応すべきか等の諸問題を検討する。	磯部浩一
9	中小企業の存立形態と下請・系列	多くの中小企業が大企業の外注あるいは下請企業として存在している。中小企業の下請としての存在形態は、どのような性質のものか。独立形態の場合とどこが違うのか。下請制の問題点は何か。その国際競争力における役割は何かなど。	同上
10	中小企業の経営者	中小企業の経営者は、創業者と継承者に区分される。創業者は他企業の営業あるいは製造の仕事に従事した経験をもち、独立開業したものであり、二代目等の継承者と、その意識行動には差がみられるが、所有経営者という点では同じである。	同上
11	中小企業の経営(1)	中小企業経営の特質を、企業規模の中小性について、経営管理、財務管理、マーケティングなどの諸側面において考察する。とくに大規模経営の利益、最適現換の利益などが主要な対象となる。	同上
12	中小企業の経営(2)	中小企業経営の特質を業種的側面から考察する。伝統的な地場産業における経営と、近代的工業型の業種の経営との比較考察、さらに、ベンチャービジネスについてもふれる。	同上
13	環境変化と中小企業	中小企業をめぐる経済的環境変化として、日本経済および国際経済の構造的変動があり、社会的環境変化として公害問題、都市化、さらには経済社会全体としての成熟化、高齢化、国際化等の諸要因と中小企業との関連、対応について考察する。	同上
14	中小企業の組織化	本質的には競争相手である中小企業の同業者が、何故、組合を作るのか、大企業と部品企業との系列化は、何故、中小企業の組織化には含まれないのか。中小企業者の組織化の本質は何かなどといって考察が行なわれる。	同上
15	中小企業政策	明治以来の産業政策の中心における中小企業政策の推移、とくに、第二次世界大戦後の政策形成過程を、独禁法や中小企業基本法などについて考察し、現段階における問題点を明らかにし、21世紀の中小企業ビジョンをもとりあげる。	同上

＝日　本　経　済　史＝
－　近　代　－

〔主任講師：三和良一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

近代日本の資本制社会は、前近代社会とくらべてどのような特質を持つかを考え、つぎに、近代の日本経済の発展過程を追う。そのなかで、(1)再生産の構造はどのように段階的な変化をとげたか、(2)構造変化と成長をもたらした要因はなにか、(3)日本経済の構造と成長力は他の諸国と比較してどのような特質を持つかを考えよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	資本制社会論	近代日本の経済史を学ぶための準備作業として、資本制社会の歴史的特質をまず明らかにしょう。ここでは、近代社会がそれ以前の社会とくらべると、経済成長率が極めて高いのはなぜであろうかという問題を中心に考えてみよう。	三和良一（青山学院大学教授）
2	幕末の経済と開港	封建社会としての幕藩体制は、開港以前の時期にすでに商品経済の発達とともに変質しつつあった。世界資本主義との接触によって、資本制社会への移行の前提条件が急速に熟していった。開港の経済史的意義を検討しよう。	同上
3	明治維新	明治維新は、どのような点で、近代資本制社会の誕生を促したと評価できるのか。土地所有制度の変化、「営業の自由」の保証の２点を中心に、地租改正・秩禄処分・その他の諸改革の内容を検討することにしよう。	三和良一 石井寛治（東京大学教授）
4	殖産興業と松方財政	おくれて近代化を開始した日本の場合、資本制経済を発達させる上で政府の果すべき役割は大きかった。資金・労働力・技術・企業者など必要な要素が社会的に形成される際に、殖産興業政策と松方財政は、いかなる効果を持ったであろう。	同上
5	近代産業の発達(1) －　軽工業　－	産業革命によって、資本制社会は本格的な再生産の仕組を確立させた。後進国日本の産業革命は、どのように展開したであろう。衣料品生産部門の中心である綿工業と外貨獲得のための輸出産業の中心である製糸業をまず検討しよう。	三和良一 高村直助（東京大学助教授）
6	近代産業の発達(2) －　重工業　－	資本制的再生産には、生産財の供給確保が不可欠である。日本は、ひとまず、生糸輸出が生産財輸入を可能にするというかたちで出発したが、軍事的要請から重工業の育成も重大課題であった。重工業・鉱業・運輸業などの発達を検討しよう。	同上
7	日清・日露戦争と日本経済	日清・日露の戦争は、それぞれ日本経済に大きな影響を与えた。金本位制を採用し、植民地を領有して資本主義列強の一翼に列するにいたった日本が、明治末期にどのような再生産構造を持ったか、地主制・財閥も含めて分析しよう。	三和良一 中村政則（一橋大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第1次世界大戦と日本経済	第1次世界大戦は、日本経済を新しい局面にみちびいた。先進諸国のアジアにたいする経済的圧力が弱まった時期に、日本は、輸出軽工業と同時に、重化学工業を拡大するチャンスをつかんだ。大戦ブームはなにをもたらしたであろう。	三和良一
9	1920年代	1920年代は危機の時代であった。企業は低い利潤率に悩み、日本経済は国際収支の激しい不均衡におちいり、労働争議・小作争議が多発して社会体制を揺り動かした。危機をもたらした原因はどこにあったのであろうか。	同上
10	昭和恐慌	危機への対応策として金解禁と緊縮政策を柱とする井上財政が登場した。日本経済のスパルタ式ハードトレーニングが開始された時、世界経済は大恐慌の時代に突入した。井上財政の経済史上の位置を確定しながら、昭和恐慌を分析しよう。	三和良一 武田晴人 （東京大学助教授）
11	高橋財政	井上財政のあとをうけた高橋財政の課題はふたつあった。日本経済を昭和恐慌から脱出させることと満州事変いらいの軍事費膨張にいかに対応するかである。「現代資本主義」の時代をひらきながら苦闘する高橋財政の姿を見よう。	同上
12	戦時経済	日中戦争から太平洋戦争へとつづく戦争の時代に、戦時動員を極端にまで進めた日本経済は、ついに再生産を維持できない状況におちいった。戦時経済の崩壊過程を追いながら、戦時統制が産業構造・金融構造に与えた影響を検討しよう。	三和良一 原朗 （東京大学教授）
13	戦後経済改革	日本を占領した連合国の基本政策は、日本の非軍事化であった。非軍事化政策の一環として、経済面でも、財閥解体・農地改革・労働改革を柱とする「戦後改革」が進められた。「戦後改革」は、日本経済をどのように変容させたであろう。	同上
14	経済復興	戦争経済の負と正の遺産を継いで日本経済は復興の途についた。占領政策の転換や朝鮮戦争の特需を手がかりとしながら日本経済は、戦前とは異なった再生産の構造を備えて再建された。復興のなかで高度成長の芽が育つのに注目しよう。	同上
15	高度経済成長	1950年代中頃から、日本経済は、日本近代史の上でも、国際比較の点でも、比類のない高度成長をとげた。IMF体制の安定・技術革新・資源の安定供給を前提にした高度成長の時代を分析し、つぎに新しく発生した諸問題を展望しよう。	三和良一 橋本寿朗 （電気通信大学教授）

＝ 欧 米 経 済 史 ＝

〔 主任講師：関口尚志（東京大学教授）
梅津順一（放送大学助教授） 〕

全体のねらい

比較史的な観点から、中世末以降の欧米諸国における資本主義経済の成立と展開の特徴を明らかにするなかで、1.近代資本主義の独自性、2.社会制度と経済発展、3.国民経済と世界経済、4.宗教意識と経済行為、5.産業革命の諸類型、6.資本主義の構造、といった諸問題を取り上げる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序 説	欧米諸国と日本との歴史的接触をたどりつつ、近代資本主義の世界史的意味を考え、資本主義の出発点となった中世ヨーロッパ経済の特徴を、徳川時代の日本経済と比較しつつ考える。	梅津順一（放送大学助教授）
2	商業革命とヨーロッパ経済	大航海時代を背景とする、ヨーロッパ経済の世界的進出と、東インド貿易と新大陸貿易の実態、ヨーロッパ的世界経済の変貌と南欧諸国の盛衰を考える。	同 上
3	北西ヨーロッパ諸国の台頭	16世紀末におけるオランダとイギリスの世界経済への進出とその背景、両国の国民経済の構造的特徴を考える。	同 上
4	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業	近代資本主義の発展における農村工業の役割に注目し、その展開の姿をたどりつつ、旧来の都市工業との抗争を考える。	同 上
5	近代ヨーロッパにおける国民国家と経済政策	イギリスとフランスの比較を通して、近代国家の経済政策の内容と、経済発展に対する影響を考える。	同 上
6	市民革命と資本主義の精神	イギリス市民革命の経済史的意味を考えるとともに、近代資本主義の発展の担い手となった社会層と宗教意識の問題を考える。	同 上
7	アメリカ植民地の経済的展開	南北アメリカ植民地の経済的展開の特徴を、本国経済との関わり、入植者の階層、植民地の経済構造などを比較しつつ考える。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イギリス産業革命の世界史的意義	イギリス産業革命が、市民革命、保護主義、中産的生産者層の広範な形成を背景とした、イギリス独自の個性的な産業変革であるとともに、その後の世界史の展開に、さまざまな意味で、決定的な影響を与えるものであったことを考える。	関口尚志 （東京大学教授）
9	産業化の波及と後進資本主義の経済構造	イギリス産業革命の影響下に展開する後進諸国の産業化を、アメリカ型（仏・米）とプロシア型（独・露・日）について検討し、後者のばあい、社会の近代化が不徹底ななかで産業化と経済成長がみられるなど、先進国にない独自な構造と問題をともなうことを考える。	同　上
10	19世紀の世界資本主義	「世界の工場」イギリスを頂点に、欧米諸国や非西洋諸地域を周辺に配して構成された19世紀の国際分業システムを検討し、自由貿易が経済強国に有利な体制であったことや、経済摩擦が政治的・文化的摩擦でもあったことを具体的に考える。	同　上
11	「大不況」と資本主義の構造変化	19世紀末「大不況」の実態と原因を検討し、長期にわたる価格の低迷と投資の沈滞のなかで、自由貿易体制が崩壊し、関税障壁と、これに保護された生産の集積、集中を土台に、独占と帝国主義の時代が到来した経緯を考える。	同　上
12	イギリスの産業的停滞とアメリカ型大量生産体制の展開	大不況からの脱出と20世紀初頭にかけての新興産業の抬頭の過程で、イギリス産業の相対的停滞と、ドイツおよびアメリカ産業の躍進が著しい。「イギリス病」の歴史的根源と、アメリカ型大量生産体制の歴史的基盤を、両国の社会構造を対比しつつ考える。	同　上
13	帝政ドイツ・旧ロシアの経済と社会	帝政ドイツの高度な技術的・経済的発展を、他面におけるドイツ社会の伝統的・コンカー的構成、およびこれを基盤とする「政治寄生的資本主義」の優位との関連で検討し、さらに、ドイツとの対比において、ツァーリ制ロシアの社会とその工業化の特質を考える。	同　上
14	ファシズムと世界大戦期の欧米資本主義	ファシズム、とくにナチズムの社会的基盤を、ドイツ革命・ウイマール民主主義、そのもとでのインフレ・高度成長・大恐慌という経済変動との関連でとらえ、また、両大戦前後の各国資本主義の動向を、「国家と経済」を焦点に考える。	同　上
15	近代化と現代資本主義	講義をふりかえり、欧米における近代「市民社会」形成史がいかに「現代資本主義」の構造と問題を深く規定しているかを考え、また、欧米「近代化」の歴史的経験に照らして、現代資本主義の世界システムに組み込まれた「低開発」諸国が直面する根本問題を考える。	同　上

＝財　政　と　金　融＝

〔主任講師：貝塚啓明（東京大学教授）〕

全体のねらい

通常のカリキュラムでは財政と金融とに分けて講義が行われるのに対して、ここではできる限り統一した形で内容を盛り込む。理論的な分析の応用という点で一貫性を保つが、なるべく具体的な問題にも話題が及ぶよう配慮する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	財政と金融 ―問題の例示―	経済は、生活を営んでいるわれわれのすべてを包み込んでいて、日常的であるため、かえってその全体像や問題の所在がはっきりしない。まず、話の糸口として、財政と金融によって大きな問題が生じた事例を示しておく。	貝塚啓明 （東京大学教授）
2	民間部門と公共部門	私企業体制を中心とする資本主義経済においても、政府は必要不可欠な役割をもっている。公共部門は長期的に拡大化傾向を示し、多様な活動を行っている。ここでは公共部門の拡大を統計から跡づけ、公共部門の行動原理を民間部門との対比で説明する。	同　上
3	財政金融と経済政策	公共部門の運営は政府が行っているのであるから、政府が政策目標を追いかけているすれば、当然経済政策としての側面をもつ。一般的な交換手段である貨幣は中央銀行によってコントロールされているから、当然経済政策の重要な手段となる。	同　上
4	日本の財政システム ―予　算―	公共部門の運営は、予算制度を通じてなされる。予算は、通常1年を単位としており、その年度の支出計画（才出の上限）と収入（才入）の見積りを示したもので、議会（国会）の議決を経て成立する。ここでは中央政府について予算の概要を説明する。	同　上
5	日本の財政システム ―租税と公債―	予算の才入面は、租税収入と公債収入に分かれる。ここでは、租税収入の構成と主たる税目の概略、および公債制度の概略を説明する。	同　上
6	日本の財政システム ―地方財政―	これまでの説明は、単一の政府を前　にして議論してきたが、現実の公共部門には、複数のレベルの政府が存在する。日本では、国、都道府県、市町村の三つの政府のレベルがあり、その相互関係は複雑である。	同　上
7	公共支出の役割	政府活動が必要不可欠になるのは、民間部門において市場の失敗が生ずるからである。特に社会のすべての構成員にとって共通に消費される財、サービス（公共財）が存在し、民間部門がこれを供給しえないことが最小限政府活動の存在理由となる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	多様な公共支出	現実の公共支出は、多様な内容をもっている。すなわち、防衛、警察、司法、一般行政などの純粋な公共財、一般道路（街路）、河川改修などの準公共財、さらには、高速道路、鉄道などの私的財に公共支出が支出され、また所得再分配のための移転支出がある。	貝塚啓明
9	公共支出と所得再分配	公共部門は、資源配分上必要な活動を行うとともに、所得再分配上も重要な役割をもっている。すなわち、その経済社会において必要最低限の生活水準を政府が保障し、そのために社会保障のシステムが機能している。	同上
10	租税体系	公共部門の財源調達のうちで大きな比重を占める租税をどのような形で課税するかは重要な問題である。どのような経済指標を基準にして課税するのが公平で中立的な課税方式であるのか。所得、消費、資産などが課税ベースとしてもつ長所・短所を説明する。	同上
11	所得税	現在、ラテン系諸国を除いて先進諸国の租税の中核をなすのが（個人）所得税である。簡単に所得税の仕組みと現行所得税がかかえる問題点を説明する。	同上
12	法人税	日本の国税収入においてかなり大きな比重を占める法人税は、法人利潤（法人所得）を課税対象（標準）とする。ここでは法人税の仕組みとその経済効果を説明する。	同上
13	間接税	転嫁することを前提として課税されるのが間接税である。現在の日本の税制では、特定の個別品目にのみ課税される個別消費税が主たる間接税である。ヨーロッパ諸国では、消費一般に広く課税される付加価値税が重要な税収入となっている。	同上
14	公債発行をめぐる問題点	日本の財政は、現在大幅な赤字を示し、これを公債発行によって調達している。公債発行は、経済を安定化させる役割をもつとはいえ、インフレーションの危険性、民間資金の圧迫、財政規律の低下をまねくという悪影響が生じうる。	同上
15	金融市場と金融取引	交換経済における貨幣と金融の機能を説明し、資金余剰部門から資金不足部門へ資金がどうように流れてゆくかを明らかにする。この流れを仲介するのが銀行をはじめとする金融仲介機関である。	岩田規久男（上智大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	日本の金融システム(1) —直線金融と 間接金融—	日本の金融市場における非金属部門を(1)公共部門(2)法人部門(3)個人部門(4)海外部門に分けて、これらの部門間を資金がどのように流れているかを説明し、その過程での各種の金融機関の役割や企業の資金調達の方法を具体的に説明する。	岩田規久男
17	日本の金融システム(2) —短期金融市場 と資本市場—	一時的な貨幣の過不足を調整する場である、短期金融市場と実物資産の蓄積のための資金を調達することを目的とする、資本市場について、それぞれの現状を説明する。	同上
18	貨幣の供給(1) —ハイ・パワード マネーの供給—	中央銀行の債務である現金通貨と民間金融部門が保有する中央銀行への預け金はハイ・パワードマネーと呼ばれ、一国の貨幣量を決定する重要な変数である。このハイ・パワードマネーがどのようにして供給されるかを説明する。	同上
19	貨幣の供給(2) —預金通貨と 信用創造—	一般的な交換手段である貨幣は現金通貨と預金通貨とから成る。ここでは、預金通貨が銀行によってどのように供給されるかを説明する。さらに、預金通貨が人々によって広く交換手段として用られるための条件を、金融自由化との関連で考える。	同上
20	貨幣需要と 利子率の決定	利子率は貨幣の供給と需要とによって決定される。ここでは、貨幣の需要はどのような要因に依存するかを説明した後に、流動性選好理論による利子率の決定メカニズムを明らかにする。	同上
21	マクロ経済と 金融財政(1) —ＩＳ・ＬＭ分析—	ＩＳ・ＬＭ曲線を説明した後に、中央銀行による貨幣供給量の調節が、国民所得に対してどのような影響を及ぼすかを明らかにする。	同上
22	マクロ経済と 金融財政(2) —インフレーションと 失業—	現代の経済は、インフレーションと失業の併存というスタダフレーションの問題をかかえている。スタダフレーションに対して金融政策は果して有効かどうかを検討する。	同上
23	マクロ経済と 金融財政(3) —国債と民間投資—	政府支出が国債の発行によって資金調達されると、民間の投資支出が締め出される、という国債の民間投資締め出し効果が、国債が大量に発行されている今日、大きな問題になっている。この効果が、どのようにして生ずるかを明らかにする。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	日本の銀行行動(1) —個別銀行の行動—	日本の金融政策は従来、銀行の行動に影響を及ぼすことを通じて行われてきた。そこで、銀行の行動を簡単なモデルを用いて説明する。	岩田規久男
25	日本の銀行行動(2) —インターバンク・マネー・マーケットの役割—	銀行間の資金の貸借市場であるインターバンク・マネー・マーケットは、金融政策の波及経路を知るうえで重要である。そこで、ここでは第24回の銀行行動の理論を用いて、日本のインターバンク・マネー・マーケットの機能を説明する。	同　上
26	金融政策	銀行行動の理論を用いて、日本の金融政策の波及メカニズムを明らかにする。また、今後、金融自由化が進むにつれて重要性を増すと思われる公開市場操作についても説明する。	同　上
27	日本経済と財政金融 —経済発展と財政金融—	これまでの講義を基礎に　現実の日本経済に即して財政金融の役割を説する。ここでは、明治以降の急速な日本の経済発展において、政府が財政面を通じて積極的にとった成長政策と間接金融優位の金融システムが経済発展に果した役割を検討する。	貝塚啓明
28	日本経済と財政金融 —インフレーションと財政金融—	財政金融政策の如何は、インフレーションの原因となりうる。第二次世界大戦直後のハイパー・インフレーション、最近の第一次石油危機直後のインフレーションは、財政金融政策をひきがねとしている。	同　上
29	日本経済と財政金融 —金融の自由化・国際化—	昭和50年度以降、国債の大量発行をきっかけに金融システムに大きな変化が生じている。この変化は、金融の自由化・国際化といわれることが多いが、ここでは自由化・国際化のもつ意義と今後の展望を示す。	同　上
30	日本経済と財政金融 —財政再建と行政改革—	昭和50年代に入って日本の財政は大幅な財政赤字を示し、財政再建が唱えられてきた。他方、行政改革が異る発想の下で進められている。ここでは、財政再建と行政改革における考え方の差異を説明し、公共部門の役害に即して、二つの政策の将来展望を示す。	同　上

＝社会学の理論Ⅰ＝

〔主任講師：塩原　勉（大阪大学教授）〕

全体のねらい

社会学は間口の広い、性格のつかみにくい学問である。げんに社会学の内部には様ざまな立場がある。しかし、社会学が全体として受入れ共有してきた基本的な考え方と理論がある。そのような考え方と理論の特色を明らかにしたい。いわば社会学原論である。なお後編Ⅱでは、現代社会学の内部の様ざまな立場について論ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会学の基本概念	ある学問の特色は、そこで活用される基本的な概念によく表われる。ミクロな社会現象をみるための概念から、マクロなそれのための概念まで、社会学の基本概念を紹介する。	塩原　勉（大阪大学教授）
2	社会的行為	1人の人間が他の人間とのかかわりで行なう社会的行為は、一切の社会現象の基本単位であり、社会学の基本概念である。社会的行為の仕組み、構成要素、タイプ、行為者などに言及する。	同上
3	社会規範と逸脱	社会的行為が実際に規則正しく行われるのは、人びとが社会規範にしたがうからである。しかし、他方では、規範の欠如や逸脱の発生も日常茶飯事である。社会規範の種類、アノミー、逸脱行動などに注目したい。	同上
4	社会的相互作用	2人以上、複数の人びとの間の相互行為は、社会的相互作用と呼ばれる。それはシンボリックな性格をもっている。象徴的相互作用と役割りについて考察する。	同上
5	社会的交換	社会的相互作用を具体的にみると、まず交換による結合が重要である。日常生活は無数の社会的交換の織りものである。社会的交換の諸相を明らかにし、交換から他のタイプの相互作用が派生する場合のメカニズムにも論及しよう。	同上
6	闘争と支配	社会生活は親和と結合のみではなく、対立と分離を含んでいる。まず闘争が社会生活に及ぼす影響を説明し、ついで支配服従という相互作用をとりあげ、正当支配と呼ばれるものが、どのように成立するかを分析する。	同上
7	意思決定と準拠集団	人間は不十分で不確実な情報の下で意思決定をしている。その場合、ある範囲の他者たちと自分ないし自分たちを比較することによって判断を下す。このような他者たちを、自分の準拠集団という。準拠集団の理論を論じたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会集団	社会生活は様ざまな集団によって構成され運営されている。社会集団は社会学のもっとも戦略的な概念である。社会集団とは何か、どのような集団類型が考案されてきたかを紹介する。	塩原　勉
9	組織の動態	集団の内部には、共同目標の達成のために諸活動を調整する組織がある。今日では、大きい組織は官僚制と呼ばれる仕組みを持っているが、現実には変形したり、目標さえも変化させたり、複雑な動きを示す。その動態をみよう。	同上
10	組織と環境	組織がダイナミックに動くということは、組織と環境との間に相互作用があるからである。組織の構造と環境条件との間に、どのような適合関係がつくられる傾向があるかを調べてみよう。	同上
11	社会構造	社会全体の構造をどのように把握するかは、巨視的社会学の大切なテーマである。複雑な構造をみるには、社会をいくつかの部分に分割したり、構造を組立てる構成要素を分析するという工夫が必要になる。社会システム論を役立てよう。	同上
12	階級と階層	全体社会は社会的資源の配分と人員の配置をめぐって構造化されている。配分と配置の構造は不平等と格づけによって特徴づけられており、対立をはらんでいる。不平等構造の問題を中心に取り上げる。	同上
13	社会変動	社会構造の変動は、社会変動と呼ばれる。社会がどこからどこへ変わってゆくかということは痛切な関心事であるから、社会学では多くの社会変動論が提唱されてきた。主要な変動論を、その社会的背景との関連で整理し紹介しよう。	同上
14	運動と計画	社会変動は自動的にすすむわけでない。なんらかの意図をもつ諸主体の作用をうける。社会学には集合行動という独特の運動概念があるが、この問題も含めて、社会変動の中の集団的な変動主体を論ずる。	同上
15	社会学の性格	以上の議論をふまえて、社会学とは結局どのような性格の学問なのか、を総括的に考えてみよう。あわせて社会学の方法についても触れよう。要するに、社会学論である。	同上

＝社会学の理論Ⅱ＝

〔主任講師：塩原　勉（大阪大学教授）〕

全体のねらい

前編『社会学の理論Ⅰ』では、社会学原論をとりあげた。本編Ⅱでは、社会学の主要な学説を紹介することにしたい。社会学の過去と現在という形をとり、前半で社会学の歩みをふりかえり、後半で今日の社会学の諸ラダイムを整理して、社会学のさまざまな考え方を全体として概観してみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	プロローグ：社会学の歴史	パラダイムの革命といった科学史の立場や、科学そのものを社会学的に分析しようとする科学社会学の立場から、社会学の歴史を眺めてみると、なにがみえてくるだろうか。	塩原　勉（大阪大学教授）
2	産業化への対応	社会学は市民革命と産業革命という激動の時代に誕生した。創成期の社会学を代表し、しかも対立しあう考え方をもったサン＝シモンとコントをとりあげてみよう。	田中清助（大阪大学教授）
3	社会の弁証法	産業革命の渦中からもうひとつの巨大な思想が形成された。それはコントのソシオロジーに対抗するマルクスの社会理論である。マルクスの社会認識について考えてみる。	同上
4	連帯とアノミー	社会学の第2世代の代表者のひとりはデュルケムである。彼によって社会学はどのように性格づけられ、そして市民社会はどのように診断されたのか、を考えてみる。	大村英昭（大阪大学助教授）
5	エートスと合理化	世界史の合理化をベースにして、経済・政治・宗教・その他、ほとんどすべての生活分野に言及した壮大な社会学をつくったのは、ヴェーバーであった。彼の社会理論を紹介する。	厚東洋輔（大阪大学助教授）
6	相互作用と流動社会	いちはやく流動社会の将来を見抜いていたのは、都会人ジンメルではなかったか。そして彼の社会学は米国のシカゴ学派に影響を及ぼした。ジンメルとシカゴ派について検討してみよう。	塩原　勉
7	知識とイデオロギー	人間が構築した概念やイデオロギーを研究する社会学は、ひろい意味で知識社会学と呼ばれる。この分野を代表するシェーラーとマンハイムをとりあげる。	徳永　恂（大阪大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	進歩の弁証法	１９３０年代に一群の社会学者がフランクフルト大学・社会研究所によって活動を始めた。ナチスに追われ亡命し抵抗し、戦後も多くの仕事をなし遂げた。フランクフルト学派の批判理論を紹介する。	徳永　恂
9	機能主義的世界	１９５０年代に最大の影響力をもった社会学者はパーソンズだった。彼は行為理論から出発して、機能主義と社会システム論を合体させた。パーソンズの社会学について検討しよう。	厚東洋輔
10	生活世界とドラマ	日常のミクロの相互作用や生活世界への関心が１９６０年代後半から強くなった。その中心には象徴的相互作用論とリアリティ構成の社会学がある。これらに特徴的な考え方をみてみよう。	井上　俊（大阪大学教授）
11	組織と運動	今日のフランス社会学を代表するクロジエの組織論とトゥーレーヌの運動論をとおして、現代フランスの社会学的思考の重要な諸側面を照射してみよう。	杉山光信（東京大学助教授）
12	構造化とパワー	今日の社会学はマクロな社会現象にも関心をもっている。イギリスの社会学者ギデンズの階級構造論やパワー論をとりあげ、あわせて現代イギリス社会学の動向をみてみよう。	宮本孝二（大阪大学助手）
13	世界の複雑性とシステム	斜陽のパーソンズ流システム論に対してパラダイム転換をはかり、システム論を再生しようとしているのはルーマンである。彼の社会認識とシステム観を点検する。	山口節郎（大阪大学助教授）
14	コミュニケーション行為と合理性	ルーマンの好敵手であり、フランクフルト学派第２世代の旗手はハバーマスである。真に人間を結合させるコミュニケーション行為の復権をめざす彼の批判理論を考える。	同上
15	エピローグ：現代社会学の課題	ポスト産業社会への移行期にある今日、社会学はどのようにして課題をみさだめ、自己革新をはかることができるだろうか。	塩原　勉

＝ 社会構造と社会変動 ＝

― 近代化の理論 ―

〔主任講師：富永健一（東京大学教授）〕

全体のねらい

マクロ社会学理論の視点から、産業化と近代化の解明に一貫した理論的説明を与えることがこの講義の目的である。産業化と近代化は西洋17世紀にはじまって世界をすっかり変えてしまった社会変動である。この社会変動の性質を、構造 ― 機能分析の視点（社会変動とは社会構造の変動であるから）に立ちつつ詳細に分析してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ 序論 産業化と近代化：問題の出発点	産業化と近代化というこの講義の中心概念（近代化の概念を広げて両者を一つにまとめることもできる）に定義を与え、これが起る前と後とで社会の構造が根底的に変わってしまった基本的事実をまず明らかにする。	富永健一 （東京大学教授）
2	産業化・近代化への「先発」と「後発」：日本の位置	日本は今日、先進国の仲間入りを果たしたけれども、もとをただせば産業化・近代化は西洋人が始めたもので、日本は文化伝播によってこれを輸入した「後発」国である。このことの意味について考える。	同上
3	Ⅱ 社会構造へのアプローチ 社会構造とは何か	以上2回を序論として、これから理論的考察に入る。産業化と近代化は社会変動の一つの形態である。そして社会変動とは社会構造の変動である。そこでまず社会構造とは何かという設問からはじめ、これに答えることから理論のいとぐちが始まる。	同上
4	社会のミクロ理論・対・マクロ理論	社会のミクロ理論とは行為理論であり、その主導概念は「個人の欲求充足」である。社会のマクロ理論とはシステム理論であり、その主導概念は「システムの機能要件充足」である。社会変動論はマクロ理論であるが、そのミクロ的基礎をまず明らかにしておく必要がある。	同上
5	マクロ理論の分析装置としての現代システム論	システムは環境の中で存続し、これに適応していくことによってシステムの境界を維持していかねばならない。産業化・近代化が人類にとって「パンドラの箱」（Levy）たるゆえんは、それがシステムの環境適応能力を飛躍的に高めたからに他ならない。	同上
6	構造と機能	構造概念は機能概念とペアをなす。構造が記述概念（事実がいかにあるかを述べる）であるのに対して、機能は説明概念（構造はなぜそのようにあるかを分析する）である。この2つの中心概念をむすびつけて構造 ― 機能理論の論理を展開する。	同上
7	Ⅲ 社会構造の構成諸要素 家族・親族の構造	社会構造の主要な構造的構成要素として第一に家族・親族をあげる。家族・親族はかつて人間のつくっている唯一の集団であった。現在はそれは多くの集団の中の一つにすぎなくなり、解体にさえ直面している。しかし近代化され産業化された社会においても家族はなくならない。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	企業組織の構造	産業化は経済をはじめて社会の他の部門から切離して独立させた。家計と経営の分離、それにともなう市場の成立がこれである。企業はその担い手であり、家計とのあいだを市場（消費財市場、労働市場、金融市場）によってむすばれている。	富永健一
9	地域社会の構造	地域社会（コミュニティ、ゲマインデ）も家族と並んで人類の歴史とともに古い社会の一つの形態であるが、産業化は農村共同体を解体することによって地域社会のあり方を変えてしまった。産業化された社会における地域社会は都市化されているが、しかし都市化しても地域社会はなくならない。	同上
10	社会階層の構造	19世紀ヨーロッパにおける初期段階の産業化は「階級」をクローズアップした（マルクスの階級闘争説）が、20世紀に入ってからの先進諸国ではホワイトカラー化と所得・教育・国信の平準化によって古典的な階級をすっかり変えてしまった。しかし階層そのものはなくならない。	同上
11	Ⅳ　社会構造の社会史 原始社会における社会構造	原始社会とは狩猟採取段階の社会である。そこでは家族・親族と地域社会はあるが、企業組織も国家組織もなく、社会階層は不平等の余地が少ないために僅かしか存在しない。だから原始社会の社会構造の分析は親族組織が中心となる。	同上
12	農業社会における社会構造	農業社会段階に入ると、国家組織がつくられて政治が独立するが、富・権力・威信の不平等度が大きくなるので社会階層が顕著になる。しかしまだ家計と経営が融合しているので企業組織は独立せず、従って市場も局地的なもの以外は未発達である。家産制と封建制が農業社会の二大類型をなす。	同上
13	産業社会における社会構造	企業組織と市場が家族から分離して経済が独立する。家族は多くの機能を奪われ、福祉国家段階以降においては病気のケアーや老人ケアーの機能も国家が引受けるようになる。機能分化の進行は「ゲマインシャフト」の最後のよりどころをもこわしつつある。	同上
14	Ⅴ　社会変動へのアプローチ 社会変動とは何か	社会変動に定義を与えるとともに、産業化と近代化が人類の歴史における最もいちぢるしい社会変動であることを明らかにする。ロックにはじまる市民社会の概念と、シモン、コント、スペンサーの産業社会の概念が、この西洋近代にはじまった社会変動を代表している。	同上
15	「進歩の理念」（イデー・ド・プログレ）	人間が歴史をつうじて進歩するという観念は啓蒙思想とともに生まれたもので、それ以前にはなかった。その意味で、パスカルにはじまりコンドルセにおいて完成する「進歩の理念」は、思想史上における最初の社会変動　であるといえる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	社会進化論	コンドルセーを受け継いだサンシモンは進歩の担い手を産業に求めた。これ以後スペンサーまで社会変動理論は産業社会論のかたちをとる。スペンサーはさらにこれをダーウィンの進化論とむすびつけて、社会進化論を19世紀後半の代表的な社会変動理論に仕立てた。	富永健一
17	史的唯物論	スペンサーと同時代のヨーロッパを生きたマルクスは、スペンサーと同じく社会発展を説明する理論を求めたが、マルクスはこれをヘーゲルの弁証法とむすびつけて、発展の原動力を内部矛盾に由来するコンフリクトによって説明する理論を構築した。	同上
18	近代化論	19世紀末から20世紀初頭にかけて、テンニエス、マックス・ヴェーバー、デュルケームらが前近代社会から近代社会への移行をそれぞれ独自の概念図式によって説明する壮大な社会学理論を立てた。これらの諸学説は、1960年代の近代化論を準備する背景となった。	同上
19	Ⅵ 社会変動の社会史 家族・親族の構造変動	近代化され産業化された社会における家族と親族の構造変動の方向性は、核家族化と親族組織の形骸化に集約することができる。その原因と結果を産業化・近代化と関連づけて説明することがここでの課題である。	同上
20	企業組織の構造変動	バーナードからピュー、ヒクソンらを経て、近年の「コンティンジェンシー理論」にいたる組織理論の流れは、企業組織の構造を環境のあり方と関連づけて説明する方向に動いてきた。この観点から企業組織の構造変動をどのように理論化することができるだろうか。	同上
21	地域社会の構造変動	マルクスは「ゲマインデ」を近代化とともに崩壊する歴史的カテゴリーとしてとらえたが、マッキーヴァーは「アソシエーション」と対比されるものとしての「コミュニティ」に普遍的なカテゴリーとしての位置づけを与えた。地域社会の構造変動はどのような方向をたどるのか。	同上
22	社会階層の構造変動	マックス・ヴェーバー以後の社会階層理論の発展は、20世紀に入ってからの先進諸国の現実を反映して、マルクス的階級一元論から離れ、階層的地位の多元性を強調する方向に進み、かつ統計的データ分析と密接にむすびついた実証性を特徴とするようになった。これについて考察する。	同上
23	Ⅶ 産業化・近代化はなぜ起ったのか 社会変動の動因	ガリレオからニュートンにいたる近代科学革命、これに誘発されて人間知識の神学的・形而上学的思考からの脱却を主張した啓蒙思想およびコントの実証哲学、王の専制の克服を求めるロックいらいの市民社会論、そのほか生活水準上昇欲求、教育の普及等々。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	「内在的」発展・対・「伝播的」発展	産業化と近代化を自力で達成した16世紀以後の西ヨーロッパ諸国に対して、この時期にまだ眠っていたアジア諸国は決定的なおくれをとり、19世紀後半以降西洋からの「文化伝播」つまり科学や技術の輸入によってそのおくれを取戻そうとした。この違いの意味について考えたい。	富永健一
25	産業化・近代化における西洋と東洋	マックス・ヴェーバーは産業化と近代化の結果を合理化としてとらえ、その合理化は「ただ西洋においてのみ」起ったとの有名な命題を述べた。では日本の場合をどう説明したらよいのか？　韓国、台湾、また将来の人民中国の場合は？　明らかにヴェーバーの65年前の命題は書きかえられねばならない。	同上
26	Ⅷ　日本社会における産業化と近代化 歴史的先行要件	中国では古代専制が基本的に変化せずに1912年まで続いたのに対して、日本は1192年鎌倉幕府の成立とともに古代専制が滅びて封建社会に移行した点で、西洋に類似する。また徳川時代、武士が封土から離れて都市に住んだことにより、都市化と商業化が進んだ、等々。	同上
27	明治維新の動因	構造－機能分析のテーゼによれば、一つの構造を変えなければならないと人びとが信ずるようになるのは、現行の構造がシステムの機能的要件を充足し得ないことが誰の目にも明らかになった場合である。この原理を明治維新にあてはめるとどういうことがいえるか。	同上
28	伝統的セクター・対・近代的セクターの二重構造：戦前の日本社会	産業化・近代化が「伝播的」発展をつうじて起るのが非西洋・後発社会の特徴であるが、そのような場合、産業文明は自国の文明でなく外来文明であるため、これを受けいれる人びととこれを排斥する人びとの二重構造ができ、これが内部対立を生む傾向がある。	同上
29	二重構造の克服と新しい構造変動：戦後の日本社会	敗戦によって親西洋主義（近代主義派）対反西洋主義（国粋主義派）の対立が一掃されたあと、財閥解体・農地改革・労働三法・教育改革など一連の「戦後改革」が行われたことが、戦前の古い構造をこわすことによって、戦後日本の高度産業化を可能にした。	同上
30	後発国の利点とその漸次的消滅	以上のことと並んで、後発国であったがゆえの利点もまた、戦後日本の高度産業化を可能にした要因であった。これについてはとりわけ、(1)若い人口構成、(2)親族組織内の互助機能、(3)生活水準上昇欲求が強いことによる勤勉の動機づけ、(4)近隣諸外国とのあいだの大きい格差、などの諸項目をあげたい。これらの利点はしかし、日本が先進国の仲間入りをするにつれて、しだいに消滅していく。	同上

＝ 地 域 社 会 学 ＝

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）〕

全体のねらい

地域社会の成立は比較的あたらしいが、原初的村落から都市にいたる、もろもろの地域社会には、歴史的背景や行政をふくめてそれぞれの特色がある。この番組は地域社会の構造・組織をあきらかにすることを目的とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会学への招待	マッキーヴァーによれば地域社会（Community）とは共同生活の行われる全地域、人びとが互いに関係し共同の社会的特性を示す環圏である。講義ではリンド、ワーナー、有賀喜左門、福武直らの研究をとりあげ、地域社会学とはなんであるかを考えていく。	加藤秀俊（放送大学教授）
2	農耕と定着	地域社会がつくられたのは、人類が農耕文明を成立させたときに始まる、といってよい。スキやクワの発明、栽培植物の発見などによって農耕生活そして定住生活がはじまった。さらに食糧の貯蔵が行われたとき、本格的な地域社会の形成がはじまったといえる。	同上
3	土地の神さま	共同体をつなげる原理のひとつは超自然の力であり、あるいは神々の力である。日本のムラにはかならず鎮守がある。建物をたてるときの地鎮祭や神楽、宮座、氏神など、そのまつりかたにもいろいろある。日本のどの地域も神によって　られているのである。	同上
4	地域と宗教	宗教集団が地域に深く根をおろし、人びとの生活に深くかかわっていることは多い。北陸地方の四県には、浄土真宗がゆきわたり、一年を通して行われる色々な宗教上の行事がこの地方独特の行事となっており、地域の人びとを一つの宗教的連帯感で結んでいる。	同上
5	水域と地域社会	水は人間生活の基本的資源である。日本列島はこまやかに張りめぐらされた水系が「流域圏」をつくり、そこを定住の場としてきた。河川には同一水系に沿って複数の地域社会が点在する。生活にとって欠かすことのできない水をめぐる地域社会の諸問題を考察する。	同上
6	現代の農村社会	宅地化が進むなかで営まれる現代の近郊農村は、畑を荒らすペットの問題など、いままで経験しなかったような新しい問題をかかえている。一方国の政策によって作られ、機械化された大規模な農業を営む大潟村では過剰作付けなどのあらたな問題を生んでいる。	同上
7	現代の漁村社会	黒潮の巨大な流れにそって宮古島ー枕崎ー土佐清水の漁村には「黒潮文化圏」が形成されている。かつお漁を生業として、かつおの一本づりや若者宿の風習など昔ながらの漁村のすがたを残しているところもある。また新しい形の漁業として養殖産業をとりあげる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	現代の近郊山村	現代の燃料革命によって木炭の需要がなくなり炭やきという山村の生業はほとんど姿を消し山村の社会は変わった。その中で昔とは違ったすがたで山村を再生しているところ、東京の奥多摩青梅市では村中の全てのものが観光と結びついて、東京のオアシス化している。	加藤秀俊
9	開拓地の地域社会	地域社会には、伝統的なものとどうじに、江戸中期以来ひとの住んでいない所をひらいて入植するというあたらしい地域社会づくりがみられる。江戸時代の新田開発がその一例であり、近代日本では北海道の屯田や小岩井農場の開発がある。それらを中心に考察する。	同　上
10	都市の近隣社会	都市のなかでもいわゆる近隣集団というかたちで町組はつくられてきた。とりわけ先進地域としての京阪地方では、町組の編成は早くからおこなわれてきた。ここでは京都鉾町の町組を中心に、血縁関係をこえた近隣結合について考察する。	同　上
11	村　と　町	社会全体が農業社会であった時代には日本人の大部分は農村生活者であった。商業が活発化し明治以降の工業化が振興するにつれて都市と農村という２つの地域が成立してきた。その歴史的経緯をふまえ都市と農村の相違を明らかにしかつ相互の関連を検討したい。	同　上
12	地域と広域行政	幕末に７万あった自然村は明治以降７千に統合された。明治以降の町村合併は日本の広域行政の始まりである。広域行政は行政側にとっては経費節減などの点で利点が多い。しかし地域住民にとっては役場や福利厚生施設が拠点集中するなどの不便が多い。	同　上
13	生活圏と定住圏	定住圏構想には水域・山系・盆地などの自然が深くかかわっている。それは都市の便利さと農山漁村がもつ自然のよさの両方を身近なものとしてくらしてゆけるような地域社会をめざして生まれた構想である。その例として岡山県津山定住圏をとりあげる。	同　上
14	再編成の諸相	過疎の地域を蘇生し豊かで快適な生活を可能にするためには、雇用の場と良質な居住環境を作らなければならない。通産省のテクノポリス構想は産業技術住空間が有機的に結びついた新しい町であり地元が主体的に進める新しいタイプの地域開発として注目されている。	同　上
15	主張する地域社会	自治省の調べによると、昭和60年度の下半期だけをみても、全国の地方自治体で500を越す催しが計画、実行されている。金沢市と川崎市での催しを例に、その個性を主張し、発想をさまざまな形で展開してゆく地方のエネルギーと実態を探ってゆく。	同　上

＝ 地 域 と 生 活 ＝

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間は、大地とはなれて生活することはできない。その大地に根をおろした人びとは、おのずから地域社会を形成した。この番組では自然的環境や風土の中での人びとのさまざまな生活のありかたを多様な角度からさぐる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会とはなにか	「地域」という観念それじしんにも文化的な差異があることを考慮にいれ、地域社会学の定義をこころみる。そのために、他の文化のなかで地域社会というのがどのような受けとめられかたをし、どういうふうに発生したか国際比較をしながらかんがえてゆく。	加 藤 秀 俊（放送大学教授）
2	盆 地 の 世 界	盆地はひとつのマイクロコスモスであるといえる。古くは大迫の縄文土器もあったように、盆地連合のような形で日本列島の内部は編成されていた。そういう日本の風景の原景として盆地はあるといえる。遠野を例に考察する。	同 上
3	杉 と 地 域 社 会	杉は日本特産の樹木で全国くまなく造林され、山地の地域社会の形成の重要な要因となってきた。ところが近年、外材の増加や代替材の開発、労働人口の減少などにより林業は低迷している。杉に支えられてきたいくつかの地域社会を例に山村復活への試みを考察する。	同 上
4	島 の 生 活	離島は閉ざされた地域社会である。それだけに、島の生活は連帯感によって結ばれており、三重県神島では毎年恒例の年越しから新年の行事がいまも昔からの伝統を守りながら行われている。また島では離島苦といわれる多くの不便をかかえて人々は生活している。	同 上
5	雪国と地域社会	日本の国土の三分の一ほどは世界的にまれな豪雪地帯である。この雪の中で少なくとも四カ月以上生活する人々は地域社会の中でこれまでさまざまな工夫をつみかさねてきた。しかし、単に雪とたたかうだけでなく、最近では雪を資源として利用しようとする動きもある。	同 上
6	市 と 鍛 冶 屋	地域社会相互間の交流の場所は伝統的にいくつも用意されてきたが、その中でもっとも重大なのはさまざまな物資を交換する市であり、また農作業にもっともかかわりの深い最初の工業製品として鉄製品の加工業すなわち鍛冶屋が発達した。コミュニティーの結接点を探る。	同 上
7	あたらしいコミュニティー作り	日本はいわゆる高度成長期をへて国民生活が飛躍的に向上したといわれる。それにともないより豊かで快適な日常生活を求める住民意識が高まった。地方自治体も住民参加によるコミュニティ作りにのりだしてゆく。地域の実情に応じたコミュニティ作りを展望する。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子どもと地域社会	日本の社会は小学校の学区を地域社会の単位として設定してきた。子どもたちの行動半径はおおむね学区によって規定されているし、また子どもをとりまく大人、とりわけＰＴＡ活動なども活発だ。こうした視点から、地域社会のなかでの子どもの役割をかんがえる。	加藤秀俊
9	女性と地域	個人と地域の結びつきは男性よりも女性のほうが日常的かつ直接的である。女性と地域は、住まいの環境、子どもの教育、福祉の面などで密接な関係にある。地域で活動している女性の姿をとおして、現代の女性と地域の問題をもう一度見直してみる。	同上
10	高齢者の役割	日本は本格的な高齢化社会に突入した。よりよい老後のための地域社会のありかたや、老後と地域社会の関連性を探る。村落の中での老人の役割についてもふれ、他に海外で活躍する高齢者たちの組織であるシルバーボランティアズを紹介する。	同上
11	のびる郊外	住宅の不足の解消と住宅の安定的な供給をめざして戦後の公団住他の建設は始まった。戦後からの住宅都市整備公団の歴史はそのまま住宅政策の歴史であり郊外住宅の歴史でもある。一方民間の住宅会社においても人びとのニーズにあった住宅づくりが進められている。	同上
12	地域のイメージ	人びとにとって住みたい町とか住みたくない町というように感じられる地域のイメージとは何なのか。また地域のイメージをよくしようとするシンボリックな操作の一つとして、分譲地の名前に「緑ケ丘」などいいイメージを与えるようなネーミングを行うことが多い。	同上
13	魅力ある町づくり	「いつまでもこの地域に住みたい」という地域定住の願望をみたす地域とは、自然・生活・生産環境の調和がはかられた地域であり、それは若者の地方定住条件を満たすものだ。魅力ある町づくりに創意を凝らしている地域を紹介し、魅力ある町づくりを考える。	同上
14	地域と文化施設	地方自治体によって多くの博物館や美術館が誕生している。しかしこれからの地域の文化施設は、もっと地域のもっている文化や歴史、社会特性にそくした、その地域独特の文化施設が望ましいであろうし、そうした文化施設はその地域の活性化にも結びつくであろう。	同上
15	地域社会と現代の祭	村々でむかしから行われてきた伝統的な祭に対して、最近行政が県や市単位で積極的に加わった、新型の祭が大規模に行われ、地域の祭として定着してきている。祭には生業に関係なく広い地域にわたって、多くの種々雑多な職業をもった人たちが集まってくる。	同上

＝マス・コミュニケーション論Ⅰ＝

―ジャーナリズムとマス・メディア―

〔主任講師：佐藤智雄（中央大学教授）〕

全体のねらい

マス・コミュニケーション論Ⅰでは、特にジャーナリズムを扱う。まずマスコミの概念を明らかにし、ニュースとは何かを問い、ニュース系情報がマス・メディア伝達の過程で生ずる諸問題をいろいろな角度から検討する。また現代のマスコミの機能への評価と批判を通じて、マスコミと日常的市民生活との関係まで考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マス・コミュニケーションとジャーナリズム	マス・コミュニケーションとは何か。マス（大衆）を対象とした情報伝達はどんな社会的要求から生じてきたか。要求された最初の情報はどんなものであったか。またジャーナリズムとはどんな現象をさしているか、などを考える。	佐藤智雄（中央大学教授）
2	マス・メディア産業とジャーナリズム	マス・メディア産業の特徴をとらえるためには、①メディアの普及度、②情報の有効消費度、③産業的な規模と構造、の3つの視点から総合的にアプローチする必要がある。そこで明らかにされる特徴はいかなるものかを検討する。	佐藤智雄 広瀬英彦（東洋大学教授）
3	ニュースの機能と構造	まずマスコミの伝達内容中に時事（ニュース）系情報をはじめ、4つの型に分ける。受け手にとってニュースとは何かを考え、受け手の生活圏との関わり方や、ニュース・ヴァリューのもつ意味の重要性を述べねばならない。	佐藤智雄
4	送り手の意識と行動	ニュースを選別するシステムであるマス・メディアは、どのような選別機構をもつか。そのなかでニュースのスクリーニングにあたるゲートキーパー（門番）たちは、いかなる基準と意識で、選別をおこなっているかについて説明する。	佐藤智雄 広瀬英彦
5	新聞ジャーナリズム	新聞は伝統的な活字メディアで社会的に大きな力をもったが、放送の出現で解説ジャーナリズムへと変化する。初期の新聞と大ジャーナリスト、新聞報道の問題点、読者の構造やステレオタイプの問題などにもふれる。	佐藤智雄
6	放送ジャーナリズム	ラジオ、テレビはニュース伝達の形を変え、受け手に速報、迫真、理解をもたらした。が、伝達時間の制限や迫真性からくる問題、電波使用による中立性への要求、またテレビ・ニュースの取材や解説の問題などをとりあつかう。	佐藤智雄
7	雑誌ジャーナリズム	雑誌は、こんにち、ますます多様化する読者の関心に照応して、タウン誌、情報誌など各種の新雑誌が登場し、細分化が進むとともに、マスコミ批判その他、ホットな議論による活性化もみられる。その変化の実相と特徴とを考えてみる。	佐藤智雄 広瀬英彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日常性のなかの擬似環境	受け手は日常性のなかで、目前の直接環境しか見えない。遠い匿名の世界を現前さすものがマスコミで、受け手は紙面や映像のうちで世界を環境に変えている。これが擬似環境。また偽似環境のもたらす問題はなにかも考える	佐藤智雄
9	欠陥報道	ニュース報道は正確で均衡をえたものでなければならない。だが、そういう報道内容に対し、欠陥報道とよぶべきものもある。不正確で不均衡な報道だ。欠陥報道は受け手の判断を誤らせ、不適応をひき起すもので、報道批判の原点となっている。	佐藤智雄
10	情報の流れとオピニオンリーダー	ニュース情報と行動の関係のなかで、情報の二段の流れや、新機具の採用時などの情報伝達機能を説明する。またニュース情報の流れを、影響の流れが区別する場合、そこで機能しているピニオンリーダーの問題を検討する。	佐藤智雄 飯田良明 (北海道東海大学助教授)
11	世論の動態	個人的意見が世論に発展していくときで、どんな発展過程があるか。また世論は民主政治や社会正義にどんな関係をもつか。さらに現代の世論はマス・メディアの普及で討論集団を衰退さすために操作を受けやすい、等々。	佐藤智雄 飯田良明
12	非常災害と環境監視	災害時情報とマス・メディアの関係や、メディア別の効果の検討、およびニュー・メディアの役割などを考える。災害のみならず予知情報の段階で予想される住民の心理的パニックの問題との関係などについても、事例を紹介し、検討する。	佐藤智雄 飯田良明
13	擬似ニュースとしての流言、デマ	作為、無作為を問わず、いろいろの形の擬似ニュースがある。無意図な流言飛語や、意図的なデマゴギーは代表的なもの。そういうニュース類似物の恐ろしさを説明し、メディアからクチコミの段階で影響力をもつ噂についても考えてみよう。	佐藤智雄
14	受け手の参加とアクセス権	こんにちマス・メディアから疎外されている受け手に、マス・メディアへの参加を保障するものとして、アクセス権、反論権などの新しい受け手の権利が主張されるようになった。これらの新しい権利の意義と問題とについて考える。	佐藤智雄 広瀬英彦 (東洋大学教授)
15	生活のなかのジャーナリズム	時事系情報の伝達現象が受け手の日常生活のなかに濃密な情報環境を構成し、適応の手段である情報に適応を余儀なくさせられている。そこからくる諸問題をとりあげていろいろと話しあい、この講義を総括する。（座談会）	佐藤智雄 広瀬英彦 飯田良明

＝マス・コミュニケーション論Ⅱ＝
－大衆文化とマス・メディア－

〔主任講師：佐藤智雄（中央大学教授）〕

全体のねらい

マスコミ論Ⅱでは、大衆文化を中心に扱う。まずマス・メディアのなかの文化の特殊性と、その背景にある大衆社会状況をみたい。ついで活字メディアの細分化現象と活字文化の現状を考える。さらに映画、ラジオ、テレビからニューメディアにいたる映像・音響文化を分析する。大衆文化の問題点を把え、その功罪に言及する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マス・コミュニケーションの内容	マス・メディアの複雑な伝達内容を時事、知識、娯楽、用務の情報系列に整理する。メディアの内容のくみあわせは多様だが、非時事系の情報量は増え、各系列の情報を、メディアが特別な文化に変えている点に注目したい。	佐藤智雄（中央大学教授）
2	背景としての大衆社会	マスコミの発達は大衆社会の成立と軌を一にするが、先世紀末から今の大衆社会は出現し、その中心的担い手は新中間層。大衆文化はかれらの文化として資本主義的な商品文化の性質をもち、メディアの伝達内容となることを説明する。	佐藤智雄
3	大衆文化の概念	まず文化とは何かを考え、基本文化と大衆文化に分ける。前者は知識や行為準則になるもの。後者は日常生活に楽しみ、能率、快適その他を求める一過性の消費文化が多い。両者の比較の上で大衆文化の特性を明らかにしたい。	佐藤智雄
4	メディアのなかの遊び	メディア接触による人びとの趣味・娯楽志向の動向を調べ、メディアに対する「利用と満足」の諸相とその問題点を取り上げる。さらに現代的行動様式としての「遊び」の特色について検討してみたい。	佐藤智雄 山本透（上智大学教授）
5	受け手としての消費者	マス・メディアが伝える大衆文化は、資本主義的な商品生産の原則に従いながら、シンボル商品として加工・製造されるから、大衆市場で受け手を消費者とみる。受け手もメディアに消費文化を期待する。そのしくみを考える。	佐藤智雄
6	出版と大衆文化	大衆社会の進展とともに、出版の世界も大衆化の道を歩み、手軽な娯楽本が伸長して、テレビの人気タレントの著書がベストセラーとなり、多様な大衆雑誌が氾濫している。この大衆文化の実相を明らかにする。	佐藤智雄 広瀬英彦（東洋大学教授）
7	新聞の変質	従来、言論機関としての機能を中心としてきた新聞も、大衆化・通俗化してエンターテインメイト機能を高め、ニュース報道も理性から情動に訴えるものとなった。この変質の実態を分析する。	佐藤智雄 広瀬英彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	映像化する活字メディア	テレビ時代を迎えて、活字メディアもビジュアルなものに変容してきた。劇画・コミックが隆盛をみせ、イラストや写真中心の雑誌が簇生し、論理的理解より感覚的認知にたよるものとなった。その変化のあとをたどる。	佐藤智雄 広瀬英彦
9	視聴覚文化の展開	メディア前史の源流にさかのぼる一方、今世紀あいついで登場した視聴覚文化としての「マス・アート」の系譜について、主として写真、映画およびレコード、ラジオの展開をたどる。	佐藤智雄 山本透
10	映像文化・音響文化の現在	生活のなかの映像文化（テレビやビデオ）と音響文果（FM放送、諸種の音響器機）について考え、また、マンガや広告を中心に若者に焦点をあてながら、そこにみられる現代性にふれていきたい。	佐藤智雄 山本透
11	環境としての映像・音響	こんにちの映像と音響の世界がつくりだす環境が、人間におよぼす影響など、功罪の面を検討し、現代社会における映像・音響環境の構造と特質について、大衆文化という視点から考えてみる。	佐藤智雄 山本透
12	ニューメディアの世界	いわゆるニューメディアは、多チャンネル、双方向通信、自由な情報検索など新しい技術的可能性を開いたが、そこで展開されるのは、豊饒、多彩な文化か、貧しい画一的な娯楽の世界か。その光と影をさぐる。	佐藤智雄 広瀬英彦
13	大衆文化と地方文化	基本文化と地方文化との関係を考え、強力なマスコミの流れとして襲う大衆文化の影響下で、地方文化のもつ意義とその将来性を問題にしたい。このときにマス・メディアの役割とはいったい、なんであろうか。	佐藤智雄
14	大衆文化の思想	大衆文化の思想を求めて、まずその成立過程を追う。さきの世紀末、1920年代および第二次大戦後の60年以降、そこにあらわれる大衆文化の思想とはなにか。	佐藤智雄
15	現代大衆文化の問題点	現代の大衆文化の存在意義を問いなおし、芸術との関係や大衆文化の通俗性を考え、正常な大衆文化の発展のために、受け手集団の問題を考えてみる。	佐藤智雄

＝技術史・技術論＝

〔主任講師：吉田光邦（京都大学名誉教授）〕

全体のねらい

社会や産業の構造をつくる主要な枠組としての技術の意味、またその歴史的な変化を紹介する。できる限り現実の産業史遺物、また歴史的テキストを紹介して、具体的な姿を示すことにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	技術の意味	代表的な中国、ヨーロッパの技術についての考え方を紹介。人類史のなかでの技術のあり方にはじまり、手工業時代から産業革命にみる技術の性格の大きな変化と、それによる社会的変化の問題、さらに第２次大戦後の技術革新にまで及ぶ。	吉田光邦（京都大学名誉教授）
2	日本の技術史 鉱業の場合	技術は自然資源の有効な利用をめざすところにはじまる。その１例として鉱業のあり方をテーマとする。日本各地の鉱業遺跡を具体的に紹介して、その歴史を説明。 安来和鋼記念館、生野銀山遺跡、相川鉱山博物館、岩手橋野高炉あとなどを例示、同時に中国のそれと比較する。	同上
3	〃		同上
4	日本の技術史 農業の場合	栽培農業は人工による食物生産技術として、人間の技術意識に大きく関連する。そのため、日本や中国では多くの農業テキストがつくられてきた。江戸期以来のそれらを紹介して具体的な様相を紹介。	同上
5	手工業	染職、陶磁器、木工、漆器など、日本には今も多くの伝統的な技術に支えられた産業が多く生きている。それらの実態を紹介しつつ技術の伝統を支える方法を考える。主として京都の手工業に例をとる。	同上
6	〃		同上
7	ヨーロッパの技術史 手工業	中世ヨーロッパの諸都市には、多くの職人ギルドがおり、工房も多く存在した。それらの実態と、技術の内容の紹介。テオフィルス、アグリコラなどの技術書の紹介を試みる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	錬金術	卑金属を貴金属に変えるという錬金術は、ヨーロッパの技術思想を語る重要なもの。ここから多くの化学的技術が生れた。その内容を紹介するとともに、中国の錬丹術を比較する。	吉田光邦
9	機械技術	機械とエネルギーの問題は、ヨーロッパの技術思想の重要な特徴である。永久運動は、つねにヨーロッパ技術の目標であった。ゾンカ・ラメリなどの技術テキストと、永久運動の分析。	同上
10	産業革命	技術革新は産業革命を生んだ主要要素のひとつである。蒸器機関による新エネルギーの発見と、その応用による産業と社会構造の大きな変化について述べる。	同上
11	技術教育	徒弟教育は手工業時代の重要な教育システムであった。それは東西ともに同じである。それはやがて学校システムによる教育体系として成長する。	同上
12	量産の技術	19世紀になって部品の相互可換性が高まるにつれて、量産システムが成立した。それは食品にはじまり、兵器、そして名高いフォードのシステムとなる。それは現代の大量消費の時代を生んだ。	同上
13	日本近代と技術	日本の近代化の一例面工業化は、ヨーロッパの技術の導入によって開始された。お雇い外国人とプラント輸入政策は、急速に近代工業技術を日本に定着させた。その実態を紹介する。明治村機械館などを例示。	同上
14	〃		同上
15	技術と社会	第2次大戦後の技術革新は、コンピュータ、ロボットなどを中心として、激しい勢いで展開し、それは多くの変化を社会や産業のなかに生んでいる。主として現代技術の問題を論ずる。	同上

＝ 産業技術の動向Ⅰ ＝

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

近年に顕著な先端的産業技術の動向の典型的な形態を取り上げて、それらの諸特徴と成果、その将来への可能性及び社会的・経済的ならびに文化的関連性について考察する。産業技術の進歩の意味、及び技術と社会とのかかわりにおいて見られる諸問題に講義の焦点があてられる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	先端技術－産業系への接近法	エレクトロニクス、新素材、バイオテクノロジー等における日本の先端技術とその産業化について、どういう方法で接近する必要があるか。つまり本講義の基本的な方法論を議論する。	黒沢一清（東京工業大学教授） 道家将達（同上）
2	半導体技術と電子系産業	半導体先端技術の特徴とその産業化における基本問題を考える。	黒沢一清 高橋清（東京工業大学教授）：対談者
3	第5世代コンピュータと産業	コンピューターの発達の技術論的性格、この領域における先端技術の問題点、第5世代コンピューターと産業、コンピューターの普及の産業活動に及ぼす効果等を考察する。	黒沢一清 東工大教授1人と対談を予定
4	ロボット技術と産業	ロボット技術の特徴と今日の問題点、ロボットの普及による産業生産力の発達、及びこれに伴う社会経済問題を考察する。	黒沢一清 長谷川幸男（東京工業大学教授）：対談者
5	エレクトロニクスと産業	エレクトロニクスの発達の産業生産力、及び産業経済、社会組織に及ぼす諸問題を考察する。	黒沢一清
6	アモルファス金属材料技術と産業	アモルファス金属材料技術の特徴、その産業化における基本問題を考察する。	同上
7	セラミクス技術と産業	セラミクス技術の近年における顕著な進歩のプロセス、その産業化の諸問題を考察する。	黒沢一清 境野照雄（工学院大学教授）：対談者

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	機能性有機材料と産業	先端技術における機能性有機材料の関連を考え、この技術の産業化と産業発達における基本問題を考察する。	黒沢一清 井上　隆 （東京工業大学助教授） ：対談者
9	新素材技術と産業	アモルファス、セラミクス、機能性有機材料等に代表される新素材技術の進歩と産業生産力、産業経済及び社会経済組織に及ぼす影響の基本問題を考察する。	黒沢一清 大森豊明 （ＯＨＴ技術事務所所長）：対談者
10	バイオテクノロジーの性格と発達	分子生物学、生命科学、及びバイオテクノロジーの発達の科学・技術論上の基本問題を考察する。	黒沢一清 対談者未定
11	バイオテクノロジーと農業	農業におけるバイオテクノロジーの発達の現況とそこにおける基本問題を考察する。	同　上 対談者未定
12	バイオテクノロジーと水産業	水産業におけるバイオテクノロジーの発達の現況とそこにおける基本問題を考察する。	同　上 対談者未定
13	バイオテクノロジーと工業(その１)	工業におけるバイオテクノロジーの発達の現況とそこにおける基本問題を考察する。	同　上 対談者未定
14	バイオテクノロジーと工業(その２)	同　上	同　上 対談者未定
15	先端技術と産業の総括	15回にわたる現代の先端技術、産業化及び産業の社会への影響についての諸問題を総括する。	同　上

＝産　業　社　会　学＝

〔主任講師：松島静雄（日本大学教授）〕

全体のねらい

今日の産業社会学は戦前の経営社会学、職業社会学等と異り、人間が人為的意図的に構成したアソシエーション、就中社会生活に重要な意味を持つようになった企業及び労働組合等の集団的特徴を分析する所に特色がある。ここでは従来の成果を示しつつ、主として企業経営、あわせて労働組合の集団的特徴を考えて行く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業社会学の性格	①戦前労働社会学、職業社会学等といわれたものの特徴、②今日の産業社会学の発生、③産業社会学の研究対象、④産業社会学の研究方法、⑤その主要内容は㋑企業、労働組合の組織、㋺組織と従業員、組合員の関係、㋩人間関係、㋥地域社会と企業・組合の関係、㋭企業と組合の関係、㋬日本の経済的特色等	松島静雄（日本大学教授）
2	企業と組織(I)	①アソシエーションとしての企業、労働組合は集団の構成に組織が先行、②組織の高度化、③最初の社会学的組織論としてのウエーバーのビウロクラシー論、④その内容㋑義務と権限の分配、㋺階層性の論理、㋩規則の優位性、㋥技術的有用性	同　上
3	企業と組織(II)	①フィヨールの組織論、②ライン・タイプとライン・スタッス・タイプ、③テイラーの組織論と職能組織、④組織の基本的性格、⑤組織の単位としての職位、職務、職種	同　上
4	企業組織と人間(I)	①組織人としての行動の要請、②内部の人間に公人と私人の態度の使い分けを求める、③組織の重層化の悩み、④文書主義のもたらす繁文縟礼、⑤形式合理性が求められるあまり、人間歯車となり集団目的が理解され難くなる。	同　上
5	企業組織と人間(II)	①組織の高度化と従業員の疎外感情の発生、②組織の顕在的機能と潜在的機能、順機能と逆機能、③マグレガーのX理論とY理論、④余暇志向の増大と感情の論理の恢復	同　上
6	人間関係論の発生とモラール	①ハーバード・グループとホーソン工場の実験ー照明実験、②労働科学への反省、③継電器の実験、④モラールの発見と労働観の変革、⑤インタビュー	同　上
7	人間関係とインフォーマルな組織	①巻線作業観察室の実験、②人間関係、③フォーマルな組織とインフォーマルな組織、④インフォーマルな組織の性格、⑤集団の実態としての人間関係	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	小集団論と行動科学	①組織と人間の関係、②経営哲学としての人間関係、③疎外の受け止め手、④小集団の研究とグループ・ダイナミックス、⑤行動科学の発生	松島静雄
9	リーダーシップ	①ヘッドシップとリーダーシップ、②リーダーシップ論、③目標達成機能と集団維持機能、④リーダーシップ成立の条件、⑤フォロアーの立場に立った見方、⑥企業のリーダーシップと組合のリーダーシップ	同　上
10	企業・労働組合と地域社会	①ホーソン工場の実験への反省、②労働組合、労使関係の研究、③ウォトーナー・ローのヤンキーシティ製靴工場のストライキの分析、④地域社会の企業経営への影響、⑤フォーマルな組織とインフォーマルな組織の統合	同　上
11	経営の日本的特質(I)	①集団主義的志向の強さ、②能率の論理より従業員の生活保障の論理の重視、③終身雇用の慣行、④定期昇給と年功賃金、⑤福利厚生の重視	同　上
12	経営の日本的特質(II)	①日本の「人間関係」、②職場運営の日本的特質、③大企業と中小企業の経営、④日本的経営の功罪、⑤経営組織の混沌化と強い帰属意識の発生、⑥特異な労使関係、⑦争議は多発するが極めて短期間で終結	同　上
13	日本の労働組合運動	①日本的経営の成立時期、②日本の組合運動の第1期の昂揚、③同第2期の昂揚、④そのことと日本的経営との関係、⑤労働組合の組織論的特色、⑥企業別組合の発生	同　上
14	技術革新と日本の企業	①ME化の進行、②オートメーションとメカトロニックスとの異同、③技術革新と労働の質の変化、④技術革新と職場組織の変質、⑤日本的経営と技術革新	同　上
15	日本的経営の今後	①従業員の高年齢化と高学歴化の進行、②能力主義化と年功昇進の変化、③人件費の増大と賃金制度の変革、④変化のない企業別組合と終身雇用の慣行、⑤日本における能力主義	同　上

＝産　業　地　理　学＝

〔主任講師：竹内啓一（一橋大学教授）〕

全体のねらい

地表において展開されている経済活動は、空間的位置関係について見る場合、全く無秩序に展開されているわけではない。また、国民経済というものは、その内部を生産要素がまったく自由に移動する均質な空間でもない。ある場所で、ある経済活動が営まれるのはどのような理由によるのか、そして、その経済活動は他の場所の経済活動とどのような関係をもっているのか、そして、このような関係を通じて空間の構造化、あるいは空間組織の形成がどのようにしてなされているのか、これらのことを理論と現実の分析とから考察するのが産業地理学である。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業と地理	産業地理学とは何かということを、経済活動がもっている空間的側面と、古くからの学問である地理学との関係から考える。それは経済学のみでなく、生態学、さらに文化誘科学と関連する一つの学問になるであろう。人間の経済行動はそのようなひろがりをもっているからである。	竹内啓一（一橋大学教授）
2	経済的地域分化	経済活動は、あらゆる場所で、質的にも量的にも均等に展開されているわけではない。その不均等な発展は経済的地域分化を生ぜしめ、国内的、国際的な地域問題をひきおこす。ここでは、経済的地域分化の諸理論を検討する。	竹内啓一 磯部啓三（成蹊大学講師）
3	中心地と地域の重層構造	経済地域内部が、また、経済地域相互がどのように組織されるかということを理論的に検討する。それは、さまざまなフローを結節的に組織する重層的な中心地体系の問題と密接に関連している。同時に、ここでとりあげられる理論が、現実の空間分析において、どのように活用されるかということも問題になる。	竹内啓一 磯部啓三
4	工業の地域的構成とその変動	工業活動の地域的分化を、いくつかの国民経済を事例にして考察する。その際、各国民経済の世界史的位置づけ、再生産構造の特色の理解を踏まえた上で、工業の地域的分化の実態の確認とともに、それを説明する諸理論の有効性と限界とを考える。	竹内啓一
5	農業の地域的構成	農業活動の地域的分化を、いくつかの国民経済を事例にして、前回と同様の観点から考察する。工業と比較しての広義の農業の特色を念頭に入れた上で、農業の地域分化を説明するための理論の有効性と限界とを考え、現代の農業、農村がかかえている諸問題にも言及する。	竹内啓一 石井泰介（明治大学文学部教授）
6	商業・サービス業の空間組織	第3章ではかなり抽象度の高い次元で重層的結節構造の形成を分析したが、ここでは、たとえば「身のまわり品」、「買いまわり品」の区別があるように、取り引きされる財貨、サービスをいくつかに分類しながら、その空間的移動が、国民経済、あるいは大部分圏内部でどのようにして重層的、階層的な空間組織を形成しているかを分析する。	竹内啓一 杉村暢二（文部省主任教科書調査官）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	通信・交通と空間組織	経済的行為としての財貨および人間の空間的移動が交通であり、通信は経済的行為としての情報の空間的移動であるが、空間組織形成において、通信は交通を代替することがある。交通、通信ともに原始時代から存在したが、近年の技術革新あるいは、情報革命によって、その産業としての性格が急速に変化してきている。また、交通、通信ともに、インフラストラクチャーに大きく負うが、同時に、これらの施設が大きな外部経済をつくり出す。以上の諸点がここで問題になる。	竹内啓一 青木栄一 (東京学芸大学教授)
8	労働力の空間的移動	生産諸要素の中で、労働力は中位の空間的可動性をもっていると考えられる。そのことによって生ずる諸問題を、主として空間的移動であると同時に社会的流動性の性格をもつものを中心に考える。具体的には農村から都市への移動、国際的な労働力移動について考察する。	竹内啓一 山本健児 (法政大学経済学部助教授)
9	国内の地域格差	国民経済を構成する諸地域の間の経済的格差について、いくつかの事例をもとにして考察し、これを説明するための諸理論の有効性と限界とについても考察する。ここでは、単なる所得格差には解消されえない国内諸地域間の不平等をも問題にする。	竹内啓一 山本健児
10	国際的な地域格差	国家の間の経済的格差には、産出高あるいは所得の水準のみでなく、さまざまな社会的ストックあるいは広義の福祉も考慮されなければならない。また、このような格差を専生産するメカニズム、国際的な格差形成の機構と恵まれない国の内部の社会構造、地域構造との関連も問題になる。	竹内啓一 古賀正則 (一橋大学社会学部教授)
11	都市における空間的不平等	都市は経済活動の装置であるとともに住民の社会生活の場でもある。しかし、都市空間内部においては、さまざまな理由によって階級間、階層間の格差には解消されえない空間的不平等が存在する。同時に階級間、階層間の不平等が、空間的な形をとって現象することがある。これらの問題について、理論的および政策論的考察をする。	竹内啓一 磯部啓三
12	権力と産業地理	政治権力はそれ自体さまざまな性格の空間組織を形成し、それを通じて、産業の空間的構成を規定するが、移動、立地などの空間的側面をもつ経済的意志決定にも直接的影響を与える。さらに、公共財、公共サービスの空間的配分あるいは立地を通じて生ずる外部経済もここでの考察の対象になる。	竹内啓一

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
13	エコロジーと産業地理	狭義の産業地理は、経済の論理によって構成される。その論理からすれば、経済活動に及ぼす自然の影響も、経済学のタームで表現されることになるが、人間の活動は、自然界の物質体謝の一部をも構成している。人間活動をそのような側面でとらえた論理であるエコロジーの論理とも結びついた広義の産業地理を分析する視点を考えるのがここでの課題である。	竹内啓一
14	文化と産業地理	観光関連産業やファッション産業のようにある特定の価値観にもとづく人間行動を前提にして成立している産業がある。ここでは、このような文化的価値観と産業との関連を、いくつかの事例をもとにしながら考察し、そこで有効な理論を吟味する。	竹内啓一 磯部啓三
15	経済体制と空間組織	分権的か集権的か、市場機構がどの程度まで重要な役割をになっているか、これらの点での経済体制の相違によって、経済活動の空間的関連の様子がどのように相違するかということを、地域政策のあり方をも関連させて考察する。	竹内啓一 古賀正則

＝産　業　と　情　報＝

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

近時企業環境の複雑化に伴い、経営に関する情報の重要性は、以前にも増して広く認識されるようになった。他面、情報の処理や伝達の技術も、目覚しい進歩を見せつつある。この時流に鑑みて、企業内外の技術情報を中心に、産業と情報の関連を概説する。また随時、社内技術者や一般産業人の情報に対する望ましい心構えにもふれる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	情報概論(1) 情報とは何か	情報の定義は今のところ確定していないが、情報一般およびビジネス情報についての若干の特徴を述べ、本講を進める上での一応のイメージないしコンセンサスの確立を試みる。	加瀬滋男 （放送大学教授）
2	情報概論(2) 情報活用	情報の探索と収集の具体的方法を講述する。その後、情報の収集から活用を経て、保管・管理に至るまでの実際的手法を解説し、改めて本講全体についての方向付けを行う。	同　上
3	情報の収集(1) 技術情報の種類	技術情報の種類を、形式・生産（発生）場所・加工度から分類し、それぞれについて概要を説明する。1次情報の種類と特徴に関しては、特に他の成書の論説を引用して詳しく紹介する。	同　上
4	情報の収集(2) 情報調査	情報収集に先んじて行われる情報調査の要点を論ずるとともに、2次・3次情報の効果的活用法を示唆する。そのため、国内・国外の主な総合情報機関や各種文献・資料の紹介も行う。	同　上
5	情報の収集(3) 情報検索	他書の論点を随所に援用しながら、情報検索の発展過程と内実について説く。次いで情報検索のオンライン・サービスを受ける場合の問題点を列挙し、受講者の他日の参考に供する。	同　上
6	情報の創出(1) 情報産出の意義	情報の公表・伝達に対する個人ならびに企業の責任は、研究・開発に対するそれと同等であること、および研究者や技術者も情報流通活動に積極的に参加すべきであることを力説する。	同　上
7	情報の創出(2) 新情報の産出例	最近新素材として脚光を浴びているニュー・セラミックスの重要特性でもある曲げ強さデータの解析を例に、新情報の創出を解説する。新しい素材とはやされながら、その強度解析の古さに挑戦する様相を述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報の創出(3) 関連情報への展開	情報は孤立した存在でなく、他の情報と何らかの関連をもつのが普通である。このことについて、前講で提起された新しい情報から、他の関連情報の産出へと展開されて行った事例を呈示する。	加瀬滋男
9	オフィス・オートメーション(1) ＯＡの内容	日米におけるＯＡの認識の違いから、ＯＡの真のあり方を考える。その期待される形態のＯＡの導入よりＬＡＮ（企業内情報通信網）およびＩＮＳ（高度情報通信システム）に説き及ぶ。	同上
10	オフィス・オートメーション(2) ＯＡ機器の活用	ＯＡ機器のうち主なものについて、活用面での留意事項を検討する。実際には、ファクシミリ、パソコン、オフコンその他現時点で新しい機器類の若干にも話を進める。	同上
11	情報の伝達(1) データ通信	高度情報化社会への足掛りとしてのキャプテン・システムをはじめ、データ通信サービスの要点を概説する。また電電公社によるDRESS（販売在庫管理サービス）とDEMOS（科学技術計算サービス）をも紹介する。	同上
12	情報の伝達(2) 高度情報通信 システム	先にふれておいたＩＮＳの具体的内容を詳述するとともに、光ファイバー・ケーブル伝送を中心に将来の高度情報通信を展望する。	同上
13	情報の伝達(3) 情報活動 （ＮＩＳＴに関して）	ＮＩＳＴ（科学技術情報流通システム）の経過を概説した後、ＮＩＳＴ構成機構とそれらの役割について説明する。そのほか、データベースについてもやや詳しく補説し、ＮＩＳＴ推進に関する７項目の提言を検討する。	同上
14	情報産業(1) 産業人と情報産業	特にわが国の中小企業における人たちが情報産業の動向を知ることの意義を強調する。その手掛りとして法律第９０号を細部にわたって解説し、また当該法律に基づく情報処理技術者認定試験にふれ、チャレンジ精神を鼓舞する。	同上
15	情報産業(2) 産業の情報化 と情報の産業化	近刊の『情報産業の将来像』に基づき、新情報産業の内容を考える。そのうち一般産業と最も関連が深くなると予想されるデータバンク産業、コンサルティング産業、エイジェント産業については、立ち入って論述する。	同上

＝産　業　と　企　業＝

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

産業という巨視的現象も、他方企業という微視的・主体的存在も、それぞれ専門的に研究され得る対象であるが、本講では、こうした産業と企業との、まさに相互作用領域をユニークな対象とし、そこに現われる生いきとした現象を把握する方法と理論とを与えようとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　論： 産業－企業系研究の方法	本講義の対象の特徴を明らかにし、これを把握するための方法について述べる。産業－企業系がある種の多元・重層構造をもった実体であることが述べられ、これを把握するための独特の方法論が展開される。	黒沢一清 （東京工業大学 教授）
2	産業－企業系の構造(1)	産業－企業系の内容を構成する“構造”を解明するにあたって、まずはじめに、最も抽象化された水準の構造としてのメタ構造を、人間と自然との相互作用系及び人間と人間との相互作用系との交絡構造として把握する。	同　上
3	産業－企業系の構造(2)	第２回で把握された産業社会一般の構造を、より具体的に、産業と企業との相互作用系として、すなわち、マクロな産業水準とマイクロな企業との相互作用として、重層的に把握する仕組みを解明する。	同　上
4	産業組織－企業系	ひとつの産業とそれを構成する企業との相互作用関係の在り方が生み出す産業組織の状態をいかに把握するか。その上で、業界に生起する諸問題が、現代産業社会ではどのように解決されてゆくか、を解明する。	同　上
5	産業－企業系の成果の構造連関	社会経済－産業－企業を結ぶ経済成果としての付加価値の性格を中心に、この系を一貫するような経済成果分析の方法を論じる。付加価値という概念が一般の通念とは違って、かなり複雑な構造を持つものであること、現代の産業－企業をまたがる分析や政策実践におけるこのカテゴリーの運用上に考慮すべき基本問題を論じる。	同　上
6	産業－企業系における生産性・収益性の関係とその分析	前章の議論に引き続き産業レベルの経済成果と企業の主体性を表現する経済成果とを統合・連結した成果分析体系を考える。	同　上
7	独占禁止政策と企業	独占禁止は、競争経済によって経済の活力と柔軟性との維持を目的とする政策として、市場経済体制の国々に実施されている。この政策のもとでいわゆる大型合併の例をとりあげる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	中小企業政策と企業	巨大企業の優勢とは対極的に、中小規模の企業は、その経済的・社会的劣勢のために、十分な生産力の拡充を達成し得ず、相対的に低い経済的社会的地位に追いやられる。ここに、産業的・社会的政策としての中小企業政策が提起される。	黒沢一清
9	中小企業の組織化・共同化	中小企業問題の自主的解決のひとつの道として、中小企業者による協同運動があり、これを制度的に支持する諸制度がある。制度と運動、及びそこにおける基本問題を考える。	同上
10	産業ー地域社会ー企業系	産業ー企業系の問題をここでは地域社会という場の上で、よりいっそう具体的に考察する。まず従来の工業立地論を反省してそれの現代的条件を考える。	同上
11	プロダクティヴィティ・スキームと産業ー企業系	生産性向上問題を社会経済ー産業ー企業系の上にひとつの体系として考える枠組みをプロダクティヴィティ・スキームという。これの世界的・日本的な経験を総括して、現代の基本問題を考える。	同上
12	労働生産性・賃銀および価格の関係をめぐる産業ー企業系の基本問題	前章までの議論を前提に、それらのより具体化された問題としてここでは生産性・賃銀及び物価の問題を取り上げる。	同上
13	伝統産業ー近代産業系における企業	わが国伝統産業と近代化された巨大産業との関係域は、現代日本産業におけるひとつの重要な典型的問題領域である。幾つかの産業を取り上げて論じる。	同上
14	産業と企業の国際競争力（その1）	日本産業及び企業の国際競争力とは何か。それらの計測論的な接近を試みる。まず最初は、国際諸機関が発刊している統計資料を活用して、先進産業諸国間及び発展途上諸国間の産業水準での比較研究を行う。	同上
15	産業と企業の国際競争力（その2）	ここでは企業レベルでの国際競争力の計測論的接近を試みる。	同上

＝ 産 業 と 資 源 ＝

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

産業と資源との交互作用域に発生している諸現象をどのように理解し、そしてその問題の解決のために、どのような方針を打ち出すことができるかを考える。この複雑きわまりない現象の背後に横たわる仕組みを明らかにし、それの動態を支配する法則性を解明し、産業活動における資源問題解決の洞察を与えようというのである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	産業―資源系研究の方法	産業資源問題とは一般にどういうものであるかを概観し、この問題を扱う学問的立場の特徴を述べる。メタ資源論がその一般的な立場である。	黒沢一清（東京工業大学教授）
2	産業―資源系の構造―その１：構造へのヴィジョン	世上一般にみられる資源問題の取り上げ方を吟味して、我々のメタ資源論のヴィジョンを示す。	同上
3	産業―資源系の構造―その２：メタ産業論のカテゴリー体系	我々のメタ資源論がその上に展開される理論的な土台としての、産業社会への最も根源の水準を認識するカテゴリー体系を与える。	同上
4	産業―資源系の構造―その３：資源、資源論のためのメタ構造とそのカテゴリー体系	前章の方法をより具体的に、資源問題の背後に横たわるメタ構造に応用し、展開する。	同上
5	産業―資源系の構造―その４：技術と資源の構造連関(1)	産業資源とは、産業の組織的・技術的状態を媒介として把握された資源である。そこで技術の構造及び資源の構造が解明されなければならない。	同上
6	産業―資源系の構造―その５：技術と資源の構造連関(2)	前回にひきつづき、資源概念の構造的内容の認識を深め、それによって資源問題の意味理解に進む。	同上
7	資源問題の基礎を支配する諸原理と関係	資源問題を支配する原理の複合性が、ある種の階統的な構造をもって仕組まれていることを解明する。エントロピー増大法則、エコロジー法則、人間社会を規律する法則などの関係である。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	無機系鉱物資源と産業	無機系鉱物をめぐる科学・工業・産業及び市場・消費の関係の仕組み、そしてそこに生起する産業資源問題を論じる。	黒沢一清
9	地下埋蔵の炭化水素系資源と産業	石炭・石油・天然ガス等の地下埋蔵の炭化水素資源をめぐる産業資源問題を論じる。いわゆる石油危機問題をどう理解すべきであるか。	同上
10	エネルギー資源と産業	産業の血液といわれるエネルギーの問題を、化石燃料問題・大自然エネルギー利用問題等に即して論じる。	同上
11	生物資源と産業	生物圏は、人間の生物的存在を支える直接の土台である。この生物再生産の循環系の中での、生物資源ー産業系の仕組みを考察する。	同上
12	企業における資源問題とそれへの適応運動 ーその1：経営生産力と経営資源	企業という産業の行動主体の立場での資源とは何であるかを考察する。まずは経営生産力と経営資源との構造を解明する。	同上
13	企業における資源問題とそれへの適応運動 ーその2：経営体の適応運動	産業水準及び社会の水準で生起している資源・エネルギー問題への企業の適応行動の姿を、経営者層の意識調査を通して考察する。	同上
14	資源と産業構造	資源と産業構造とは、資源問題を媒介に相互に作用しあう。第2次大戦後の事情のもとに展開した資源多消費型産業構造が、いまや資源節約型、高次加工型産業構造に転換しつつある。そこに生まれている基本問題を考える。	同上
15	総　　括	以上14回の講義を総括する。我々の研究方法の背景にあるヴィジョン、国際関係の中での日本の位置づけと債務、資源問題と環境問題の統一的理解。そして国土資源と国民資源という民族の主体性を支える資源への我々の実践、などがその軸である。	同上

＝産　業　と　環　境＝

－産業－環境系の構造論的解明－

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、産業とそれの環境との相互作用域を対象として、そこに生起する現象を構造的に把握し、問題の解決への洞察を得るための基礎能力を養うことを課題としている。産業と環境の問題を、産業にとっての環境としてだけでなく、同時に、むしろ人間にとっての環境の交叉域を、産業と環境というフィールドで問題にしようというのである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業－環境系研究の方法	産業と環境との相互作用域に生じる現象をその日常性において観察し、我われの研究対象の特徴を示し、かつはこのような現象を研究することの現代的な意義を考える。	黒　沢　一　清（東京工業大学教授）
2	産業社会のメタ構造	産業－環境系が、産業社会の中に占める構造的な位置を示し、これを把握するための方法としての構造論の概要を示す。まず最初として、産業社会の根源（メタ）構造を規定する。	同　上
3	産業社会のメタ原理	産業社会のメタ構造の規定を受けて本章では、そうしたメタ構造を規律している原理、すなわちメタ原理を論じる。	同　上
4	産業社会の一般構造	産業社会のメタ構造の内容を、多元・重層構造として描き、この一般的な意味内容を説明する。	同　上
5	Ｓ－Ｆスキームの論理と操作	実体－構造－形態－機能という４つの次元をもって構成されるＳ－Ｆスキームの論理と、これをオペレーションする方法を述べる。	同　上
6	産業－環境系の構造	以上に議論されてきた産業社会の一般構造をふまえて、いよいよ我われの産業－環境系の構造を確定しなければならない。ここでは人間－環境系の基礎の上に、この系と産業－環境系とが統一される構造が示される。	同　上
7	意味論的環境	環境を産業・人間にとって外的なモノ、と見る段階から、本章では、それを人間のターム.で意味理解されたモノと見る、つまり意味論的環境の議論に入る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人間－環境系の総合及び文化環境	前章の意味論の一般的理解の上に、ここでは人間－環境系の全体構造を示す。	黒沢一清
9	環境管理の原理	産業－自然環境系を支配する最も基本的な諸法則を規定し、それらの間の構造的関連性を明らかにする。法則の階層性と止揚関係である。	同上
10	海の産業とその環境問題	産業－環境系の視野からのユニークな産業分類を示し、まずその中の最も基本的産業としての海の産業の環境問題を議論する。海と人間を媒介する漁業の意義である。	同上
11	緑の産業と環境問題	緑の産業、すなわち林業のもつ環境論的諸問題の基礎を考える。森林と人間を媒介する林業の意義である。	同上
12	生命の産業と環境問題	以上の諸章では、人間の外的環境と産業との関連を主として議論してきたが、本章では人間の内的環境とこれにかかわる産業としての生命産業との関係を考える。医療及び医薬品産業である。	同上
13	産業－地域社会系	産業を一般的に取り上げてそれの環境問題を考察してきたが、本章ではそれらをさらに特定の地域の上でいっそう具体的に考察する。地域社会というフィールドが基礎である。	同上
14	人間－産業－自然コンプレックスのシステム・シミュレーション	住民、各種産業、自治体等の、具体的な地域における複合体。これこそが人びとの眼前に展開されている最も具体的な“環境”である。そこに現われる問題としての環境の背後にある構造をモデルに描き、これを用いて実験を試みる。システム・シミュレーションの意義と役割りについて論じる。	同上
15	産業環境系研究の総括と展望	本講義の全体を総括して、この講義から我われはいったい何を学んだのか、そしてそうした知識がこの社会でどういう意味を持つのか、我われはこれによって、どのような産業的・生活的課題を課されることになるのか、等を考える。	同上

＝ 経 営 管 理 Ⅰ ＝

―現代の経営―

〔主任講師：高宮　晋（産業能率大学長）〕

全体のねらい

現代は高度産業社会である。本講義は高度産業社会における現代経営の原理、あり方、方式を体系的にかつ具体的に明らかにしようとするものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	高度産業社会と現代経営	現代経営は高度産業社会における経営である。現代経営の特質、問題、課題を高度産業社会との関連で考察し経営学の課題を明らかにする。	高宮　晋（産業能率大学長）
2	経営学説の発展(1)	経営学説の発展を概観し、このうちの科学的管理法と人間関係論を述べる。両学説の特質、役割、ならびに限界を明らかにする。	同　上
3	経営学説の発展(2)	経営学説として、行動科学、社会的責任論、及び条件適応理論を述べる。行動科学は、今日支配的な学説であるので、とくにこれを中心に論ずる。	同　上
4	経営の概念と枠組み	まず、経営における基礎概念として、企業と経営の概念を明確にする。つぎに、経営における具体的活動の枠組みを提示して、それを説明する。	同　上
5	経　営　理　念	経営の目的・目標を明らかにした後、経営理念の内容を明らかにする。ここでは、利潤追求、人間尊重、社会的責任の統合が中心問題になる。	同　上
6	経営政策と経営戦略	経営政策の意義を明らかにし、さらに、現代経営の政策の動向を論ずる。また、経営政策は環境の中で実現されるものであって、経営戦略が展開する。	同　上
7	経営管理体制	経営管理の意義、体制、職能を解明する。とくに、経営管理は執行体制、監督体制と区別される体制であることが論じられる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	経営管理の原理	経営管理の原理として、(1)全体と個の統合、(2)合理性、民主性、社会性の統合、(3)職能説、(4)協働、(5)業務活動関係を述べる。	高宮　晋
9	経営管理のあり方	現代経営の経営管理のあり方は、分権的管理、革新的管理、目標による管理である。ここでは、この三つのあり方の特質を解明する。	同　上
10	経営組織	現代経営の経営組織の意義を述べ、経営組織が人間集団であると同時に職務体系であることを明らかにし、すすんで責任と権限・構造システム等の問題を解明する。	同　上
11	意思決定	経営管理行動は、(1)意思決定、(2)リーダーシップ、(3)環境適応である。本章ではこのうち、経営における意思決定の問題、とくに意思決定の方式及び意思決定をめぐる諸問題を論ずる。	同　上
12	リーダーシップ	経営におけるリーダーシップは、マネジメント・リーダーシップである。ここでは、マネジメント・リーダーシップのあり方、モチベーション等の問題を論ずる。	同　上
13	環境適応と戦略経営	経営はいかに環境に適応するか。戦略とは経営の環境適応の行動である。ここでは、環境適応システム、経営戦略、戦略経営の問題を解明する。	同　上
14	日本的経営	日本の経営は現代経営の問題をもつと同時に、いわゆる日本的経営の特質をもっている。ここでは、日本的経営の特質を明らかにし、それと現代経営との統合を論ずる。	同　上
15	現代経営の将来	最後に、現代経営の将来を論ずる。それは、(1)経営の人間化、(2)経営のコンピュータ化、(3)経営の社会化にあると考えられる。ここではこれらの点について、その将来を論ずる。	同　上

＝ 経 営 管 理 Ⅱ ＝

－経営管理技法の体系－

〔主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）〕

全体のねらい

経営管理Ⅰは、高度産業社会における現代企業の経営のあり方を、経営理念、政策・戦略、管理体制、組織、経営管理の原理等にわたって明らかにしている。それに続いて本講義では、企業経営の構造的体系に即しながら、経営管理の具体的手法を説明し、実践論としての経営管理の内容を理解してもらうことが、ねらいである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経営管理の機能と構造	一般に経営管理の機能は、企業活動の計画、組織、指導、統制であると説明される。まずそれぞれの内容を理解し、さらに対象領域別管理、物的・合理的管理と人的・社会的管理、経営構造管理と業務活動管理の考え方を説明する。しかも経営管理はそれらの総合化として初めて現実に機能することをのべる。	小 林 靖 雄（放送大学副学長）
2	経営管理の歴史的発展	経営管理発展の歴史を主としてアメリカについてのべる。すなわち１９世紀末からのテイラー・システム、フォード・システム、人事管理、予算統制、原価管理、人間関係論、統計的品質管理の展開と今次大戦後の新しい展開をのべ今日の経営管理が長年の歴史的発展の所産であり、今後の日本企業の経営管理の発展は国際交流によって得るところが大きいことをのべる。	同 上
3	経営管理組織(1)	経営管理組織は管理上の機能として静態面と動態面の両面から考察される。本章では、管理の全体を展望するため、静態的組織形態を、トップ・マネジメント組織、部門管理組織、事業部制組織委員会組織、プロジェクト・チーム等について、特徴的に考察する。	同 上
4	経営管理組織(2)	経営管理組織の動態面、すなわち組織形成の原則の問題をとりあげる。具体的には管理の限界、命令単一の原則、例外の原則、責任と権限の原則をとりあげ、それらの結合により組織がいかに水平的・階層的に分化し、かつ統合されていくかをのべ、あわせて近年の行動科学的考察の貢献をのべる。	同 上
5	経営戦略と経営計画(1)	企業が環境変化に適応するための経営戦略の問題を、主として多角化問題としてとりあげ、企業買収、子会社設立にもふれる。また長期の視点の考察を必要とする経営構造計画のうち、まずプロダクト・ライフサイクルの視点と製品計画、海外事業戦略について説明する。	同 上
6	経営戦略と経営計画(2)	経営構造計画のうち、技術研究開発計画、設備投資計画、要員計画をとりあげ、さらにそれらを織り込んだ長期経営計画の内容を概説する。その重要性は、第１５章の総合管理と密接な関連をもつ。	同 上
7	生 産 管 理 (1)	第７章と第８章とで、物的合理化を中心とする経営管理の内容をのべる。本章では、そのうち技術的管理、すなわち時間管理、品質管理、物量管理という、技術的生産管理の特徴を説明する。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生産管理 (2)	「かね」の数値、すなわち貨幣価値による評価数値に基づく経済的生産管理をとりあげる。具体的には原価管理の内容を説明するが、それは前章の技術的管理と密着して理解される必要がある。あわせて利益管理との関係にもふれる。	小林靖雄
9	労務管理 (1)	まずわが国企業の労務構造の特徴を統計により考察する。労務管理は経営を構成する人的従業員の管理であるが、本章では、まず経営内の従業員の物的な人事管理にはじまり、ついで人間関係論の抬頭、行動科学的考察との関連について論じ、今後の発展方向を考える。	同上
10	労務管理 (2)	技術的生産管理システムとしてのティラー・システムが、いかに賃金問題と結びついて展開されたかという問題を糸口として、賃金問題と労使関係、賃金と労働生産性との関係、終身雇用と年功序列賃金制度、その最近の変化についてのべる。	同上
11	マーケティング管理	企業が販売市場との接点において展開するマーケティング活動の管理を、需要予測、広告・宣伝計画、販売チャネル、物流システムの管理についてのべ、さいごに販売活動の統制の特質について説明する。	同上
12	財務管理 (1)	財務管理には、資本調達管理と、総合的経済的管理の２面があるが、本章は資本調達管理をとりあげる。まずわが国資本構成の特徴を、国際比較により明らかにし、ついで企業財務の基本原則をのべ、さらに長期資本調達、短期資本調達、収支計画における資金繰り管理におよぶ。	同上
13	財務管理 (2)	総合的経済的管理としての利益管理ついて、まず損益分岐図表を中心に、限界利益計画の内容を説明する。また、その利益計画との関連で、予算統制の内容を説明する。	同上
14	経営管理とコンピュータ	経営におけるコンピュータの利用は、生産面でのＮＣ工作機械の利用、ロボット化、Ｆ・Ｍ・Ｓの採用等でも著しいが、他方経営管理事務のコンピュータ化はいわゆるオフィス・オートメーション（Ｏ・Ａ）として展開されており、その内容と問題点をのべる。	同上
15	総合管理と日本の経営	前章までの経営管理の各面の内容を総合的経営管理の立場で統括する。その具体的内容は、実体的管理をともなった長期経営計画の策定とそのフォロー・アップとして把えられる。また日本の経営管理がもっている特長、日本の経営土壌との関係を考察し今後の努力の方向を考察して結びとする。	同上

＝人事・労務管理＝

〔主任講師：津田真澂（一橋大学教授）〕

全体のねらい

実務経験を欠く人々に人事労務管理を理解しやすいように講義することは非常にむずかしい。そこでこの講義では全体を3部に分け、第1部では企業経営全体の中における人事労務管理の役割を明らかにし、その上で第2部で人事労務管理の内容を説明する。また第3部で人事労務管理にとって重要なトピックを取り上げることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人事・労務管理の意義と課題(1)	開講にあたって（学習の意義） 人事労務管理の定義 人事労務管理の対象 人事労務管理の位置（経営のサブシステムとしての位置と役割）	津田真澂 （一橋大学教授）
2	人事・労務管理の意義と課題(2)	経営の組織と管理 経営システムの国際比較 人事労務管理の国際比較 従業員意識の国際比較	同上
3	日本の経営システム	日本の経営システムの性質 日本の人事労務管理の性質 日本の企業の性質 日本の企業経営の歴史（戦後）	同上
4	人事制度	人事労務管理の骨格としての人事制度 経営組織 資格制度と職位制度 人事評価制度 専門職制度	同上
5	人事配置	採用 配置 異動（出向をふくむ） 要員管理 昇進・昇格制度	同上
6	就業管理	教育訓練の意義と役割 教育訓練の体系と計画 教育訓練の実施と評価 管理者教育	同上
7	労働時間	労働時間の制度と種類 休日制度 休暇制度 労働時間の国際比較 女子・未成年者の労働時間	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人事評価	賃金・給与の意義 賃金・給与の種類 基本給、職務給、業績給、能率給 諸手当・賞与 人件費 賃金・人件費の国際比較	津田真澂
9	賃金・給与の管理	従業員福祉制度の意義 従業員福祉制度の種類 住宅制度－寮、給与住宅、持家制度 文化・体育・レクリエーション 中高年従業員の心身の健康の問題	同上
10	従業員福祉	解雇、日本の雇用慣行 定年制 退職金 企業年金 再就職制度	同上
11	定年管理と退職金制度	労使関係制度 労働組合 団体交渉と労働協約 企業内組合 労使協議制	同上
12	労働組合関係管理	職場の人事労務管理 職場集団の活動 小集団活動、ＴＱＣ、ＱＣサークル 欧米諸国の職場、勤労意欲	同上
13	従業員意識調査	従業員の高令化・高学歴化の問題の意義 人事労務管理の諸施策－役職定年制、能力主義管理、選択定年制、専門職制度、定年前教育、定年延長 公的雇用援助制度の利用 定年制の国際比較	同上
14	非常用従業員管理	情報技術革命の意義 情報技術革命の進展の状況と展望 情報技術革命の人事労務管理にあたえる影響	同上
15	人事・労務管理の今後の課題	臨時従業員の意義－臨時工、季節工、社外工 パートタイマーの管理 派遣社員の管理 最低賃金制の役割	同上

＝ 労 働 経 済 学 ＝

〔主任講師：古郡鞆子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

このコースではまず労働力の供給、需要、賃金決定のメカニズムに関する近代経済学の基礎理論を学ぶ。次に、現実の経済と労働市場に目をむけて、労働市場で実際に生じている諸問題を経済理論と結びつけて考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	労働力の構造と変動	経済的な生産活動は労働力の大きさによって規定される。ここでは労働力の測定方法、労働力の構造とその長期変動、労働力の高令化の問題等を検討する。	古郡鞆子（放送大学助教授）
2	労働力の供給Ⅰ 労働供給の分析	労働供給の量と質、労働供給の変動、労働と余暇の選択、労働供給曲線などを扱う。	同 上
3	労働力の供給Ⅱ 家計の労働供給	近年の労働市場における構造変化の一例として女子の労働参加の問題を家計の労働供給フレームワークの中で考える。また女子の労働供給と景気変動、税制などとの関係も考察してみたい。	同 上
4	労働力の需要Ⅰ 労働需要の分析	生産と労働、労働需要曲線、生産物市場および労働市場の競争条件と労働需要の関係、労働需要の弾力性などの問題にふれる。	同 上
5	労働力の需要Ⅱ 技術革新と労働需要	技術革新が雇用に及ぼす影響を理論面と実態面で考える。実態面では諸々の調査を通して最近におけるマクロエレクトロニクスの雇用効果についてみてみる。	一橋大学教授 小野 旭（放送）
6	労働市場と賃金決定	労働供給と労働需要の分析をふまえて、賃金水準や雇用量が決定されるメカニズムを説明する。	同 上
7	賃金と人的資本	労働力の質的側面である人的能力の問題をとりあげ、人的資本投資の理論、一般訓練と特殊訓練、内部労働市場と日本の賃金慣行等について言及する。	慶応大学教授 佐野陽子（放送）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	失業	失業を理解するために失業の定義や把握の方法を明らかにする。次に失業をその原因に従っていくつかのタイプに分類しながら失業と雇用の問題について考える。	古郡鞆子
9	不完全就業	不完全就業は、潜在失業の一形態として、概念的に顕在的失業と区別しなければならない。就業者のなかに潜在的失業者がいるという分析視点に立って、雇用情勢を判断する上での不完全就業の問題を考える。	中央大学教授 水野朝夫 （放送）
10	労働市場と労働組合	労働市場における組合の役割、日本の賃金決定方式、団体交渉の過程などについて言及する。	慶応大学教授 佐野陽子 （放送）
11	賃金格差	労働市場に存在するいろいろな形の賃金格差たとえば企業規模別、年令別、性別、産業別、職種別、地域別の賃金格差について検討する。	古郡鞆子
12	労働市場における差別	「生産性」が同じ2人の労働者が異なる賃金を受け取るのはなぜなのか。男女の賃金格差の問題を例にとって差別の経済理論を概観する。	同上
13	労働力の移動	労働市場の調整機能として労働力移動がはたす役割、労働力移動に関する理論、労働力移動の実態などをみてみる。	中央大学教授 水野朝夫 （放送）
14	マクロ経済における労働	国民所得とその労働への分配、フィリップ曲線、ケインズの理論と有効需要政策などマクロ経済学的観点からみた労働の問題を扱う。	一橋大学教授 小野旭 （放送）
15	経済発展と労働	経済発展に伴い産業構造が変化すると、就業構造も変わる。ここでは経済のサービス化に伴う新しい形の雇用の拡大、労働市場の構造変化などについてふれる。	古郡鞆子

＝ 経営分析と財務管理 ＝

〔主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）〕

全体のねらい

企業の資本調達および運用の管理という広い立場で財務管理を扱う。経営分析についてもこの財務管理との関連で考察する。基礎的、原理的考察を中心とするが、随所で、日本の企業の財務問題にもふれて説明する。本科目の履修には、会計学に関する基礎知識をもっていることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	財務管理の意義と経営分析	財務管理を、企業の資本調達とその運用に関する計画と統制と解釈し、その歴史的展開について概観する。特に近年の財務的意思決定を中心とする財務管理論の研究についてのべ、かつ経営分析を財務管理の解析手法として位置づけ、本講義全体の構成をのべる。	小林靖雄（放送大学副学長）
2	企業財務の基本原則	まず、わが国企業の財務構成の変化と特徴を、かなり長期にわたり、かつ諸外国との比較によって明らかにする。ついで企業財務に関する古典的原則を、財務流動性（財務均衡）の原則、財務安全性の原則、財務経済性の原則について説明し、かつその相互関連についてのべる。	同上
3	長期資本の調達	株式会社企業における長期資本の調達について、株式、社債、長期借入金による資本調達につき、その内容を説明する。	同上
4	短期資本の調達	短期資本の調達について、まず正味運転資本の概念を説明し、ついで短期借入金、買掛金、その他の短期負債による資本調達を説明する。	同上
5	内部資本（自己金融）問題	内部資本調達としては、留保利益と毎期の減価償却費が主要なものであるが、特に減価償却費に相当する部分の資金化とその設備投資への充当による“ローマン・ルフチ効果”について、その内容を説明する。	同上
6	資金の時間的価値	現在の1万円は、預金することによって1年後には1万円以上になっている。この資金の時間的価値の求め方を述べる。	古川浩一（東京工業大学助教授）
7	設備投資の意思決定(1)—割引現金利益法	資金の時間的価値を考慮した設備投資の経済的評価の代表的な方法として、割引現金利益法の考え方と計算方法を述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	設備投資の意思決定(2)―予測の不確実性と回収期間	設備投資には必ず伴う将来の不確実性を、投資計画の中でどのように取り入れ、評価していくかを考える。	古川浩一
9	経営分析の意義と発展	財務管理の手段として、経営分析がどのような意義を持っているかを述べ、その発展を辿る。	同上
10	資本収益性と生産性分析	経営分析の中心をなす企業の収益性を分析し、また価値的生産性を分析する方法を述べ、その意義を検討する。	同上
11	財務流動性と安全性分析	企業の短期的及び長期的な支払能力をみるための方法として、財務流動性と安全性を分析する方法を述べる。	同上
12	企業評価と資本市場	企業が資本市場でどのように評価されるかを述べ、財務管理における重要な概念である資本コストの意味を述べる。	同上
13	企業合併と財務	企業合併は企業間の提携よりも密接な結合で、当事者企業にメリットを与えると同時に、財務面でも難しい問題も投げかける。	村松司叙（成蹊大学教授）
14	為替変動と財務	今日では多くの企業が国際的活動を営み、そこで最初にぶつかるのが外国為替レートの変動問題であるが、この問題をとりあげる。	同上
15	日本企業の財務管理の課題	前章までの諸考察をまとめ、特に諸外国との比較により、日本の企業が直面し、かつ解決すべき財務管理上の問題点について説明し、むすびとする。	小林靖雄 古川浩一 村松司叙

＝ 企　業　と　会　計　Ⅰ ＝

管　理　会　計

〔主任講師：西澤　脩（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

企業会計には、財務会計と管理会計の二大領域がある。財務会計は、財務諸表を作成し、企業外部の利害関係者に報告することを目的とするのに対し、管理会計は、企業内部の経営者や管理者に必要な会計情報を提供することを目的としている。このような管理会計の全領域にわたって最新の原理と技法について論述する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	管理会計の意義	管理会計は、経営管理者が経営計画を設定したり経営統制を実施するのに有用な会計情報を作成し提供することを使命としている。このため、会計法規や貸借理論には必ずしも拘束されず、経営管理に最も役立つ会計が最善とされ、不断に進歩・改善が図られてゆく。	西澤　脩（早稲田大学教授）
2	経営分析と経営比較	管理会計は、企業の現状分析から着手される。その用具が経営分析で、その中心は財務諸表分析である。損益計算書や貸借対照表を分析し、経営成績や財政状態を診断するには、まず各種の経営比率を算定し（経営分析）、次に標準値や前期実績と比較する（経営比較）。	同　上
3	利益計画の設定	経営分析・比較の結果を参照して、次期における目標利益を決定し、それを実現するための売上高と費用の大枠を見積る。これが利益計画の設定である。ここでは、費用を変動費と固定費に分解した後、図表や算式を使用して、費用・売上・利益の相関分析を行なう。	同　上
4	資金計画の設定	利益計画が設定できれば、その資金面の裏付けを行なうため資金計画を設定する。資金の中心は現金資金であり、月次の資金繰計画を設定する。さらに運転資金の年間計画を設定するため、資金運用表を作成し、運転資金の調達源泉と運用先及び増減額を明示する。	同　上
5	予算管理の新展開	利益計画と資金計画が設定できれば、それに基づいて詳細な企業予算を編成し、その実現に努める。これが予算管理である。旧来の予算統制では、差異分析による責任追求を偏重したが近代予算管理では、予算目標達成の動機づけを重視することが肝要である。	同　上
6	設備投資の経済性計算	経常予算のほか資本予算も編成される。資本予算の焦点は設備投資の経済性計算であり、十分な経済性を確認した上で設備投資を決定すべきである。経済性計算では、特定の投資だけを対象とし、全耐用期間中の現金流入額を割引計算する手続が新たに必要となる。	同　上
7	在庫管理の諸方法	設備投資と並んで重要なのが在庫投資である。在庫投資の管理に当たっては、棚卸しを行なって、在庫の推移と有高を把握する。次いでＡＢＣ分析を試み、Ａ在庫には経済的発注数量や発注点を設定し、科学的に管理するがＣ在庫の管理は割愛する方が経済的となる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	販売業績の評価法	販売業績は、売上高の多寡ではなく販売利益の大小で測定し評価すべきである。そのためには、販売費分析を試み、製品や地域毎に売上総利益から販売費を控除して貢献差益を算出する。このような貢献差益法を使用すると、従来の純利益法の欠陥を排除できる。	西澤　脩
9	研究開発費の管理	新製品販売によって企業成長を図るには、研究開発を重視しその管理を徹底させるべきである。そのためには、研究開発の原価計算によって研究開発費の実態を把握した後、研究プロジェクト別に計画設定と予算管理を試み、最後に費用効果分析でその効率を測定する。	同　上
10	製造原価の管理	製造原価を管理しその削減に当たるには、製造原価計算の徹底が前提となる。原価管理を推進するには、実際原価計算のほか、標準原価計算、直接原価計算、標準直接原価計算が必要となる。その外、特殊原価調査によるコストダウンもぜひ推進すべきである。	同　上
11	物流費の管理	コストダウンの宝庫として、近年物流費の削減が社会的関心を集めている。輸送費や保管費などの物流費に対して、原価計算や予算管理や採算分析を適用すると、大幅な原価削減が可能となる。その結果、売上高を急増させたのと同一の利益効果が実現できる。	同　上
12	生産性分析と成果分配	投入と産出の比が生産性である。産出を付加価値で測定し、投入を人数で把握すると労働生産性が判明する。生産性が向上し、付加価値が増加すれば、その成果を関係者に分配すべきである。特にラッカープランを活用すると、生産性向上の意欲を高めることができる。	同　上
13	ゼロベース予算の導入	低成長時代の管理方式として、ゼロベース予算（ＺＢＢ）が登場した。従来の既得権主義による弊害を打破し、グランドゼロから予算を編成する方式がこれである。ＺＢＢを導入するとゼロ思考による経営革新が断行でき、マンネリ経営を排除することができる。	同　上
14	事業部制による利益管理	分権管理の完成形態として、事業部制が開発され実践されている。事業部を「会社の中の会社」として利益管理を行なうには、事業部制会計を導入し、事業部利益の形で業績を評価すべきである。そのため、新しい利益管理技法を開発し採用することが必要となる。	同　上
15	これからの管理会計	果たして管理会計は、２１世紀に向ってどのように発展してゆくだろうか。管理会計と隣接諸学との学際研究が強力に展開されることは疑いない。情報会計、意思決定会計、人的会計などがそれであるが、最も注目されるのは行動会計－特に動機づけ会計であろう。	同　上

＝ 企業と会計Ⅱ ＝
税　務　会　計

〔主任講師：富岡幸雄（中央大学教授）〕

全体のねらい

企業の会計には、財務会計と管理会計のほかに、税務会計がある。企業の税務会計は、課税の基準となる課税所得の計算、課税財産の評価を目的としている。この税務会計の仕組みと体系を、企業の組織形態と経営行動の実際に即応しながら具体的に論述する。その際に、企業の合理的な税務対策への役立ちをも配慮していきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	企業経営と税金問題―税務会計の意義と役割―	企業の経営において税金を無視することができないとともに、我が国の企業経理の実際は、税法規定や税務上の取扱から大きな影響を受けている。税金の意味と種類、企業の経営形態と所得課税の態様、法人税制の仕組み、企業経理と課税所得の計算の関係等を説明する。	富岡幸雄（中央大学教授）
2	営業活動と税務	企業の主たる経営活動である販売・請負・役務提供により獲得される収益の計上の仕方につき、それぞれの取引形態に区分して解明する。割賦販売・延払条件付販売、建設請負、不動産の仲介斡旋報酬、技術役務の提供報酬等については、特別な税務上の取扱がある。	同　上
3	財務活動と税務	企業の本業以外の活動である証券投資・金融投資・不動産投資等による収益の計上が問題になる。株式投資の法人間配当の無税をはじめ、貸付金利子、固定資産譲渡益、受贈益、債務免除益、受取保険金、還付金収入等については、課税上、特別な取扱がある。	同　上
4	在庫投資と税務	企業の在庫投資である商品・製品など棚卸資産の経理は課税上重要である。商品・原材料等の購入品の取得価額、製品　半製品・仕掛品等の生産品の製造原価による取得価額の決定、売上原価を計算するための在庫品の期末決算評価の仕方が問題となる。	同　上
5	設備投資と税務	企業の設備投資である土地・建物・機械装置など固定資産の経理も課税上重要である。固定資産の取得価額の決定、修理・改良等の支出の処理、通常の減価償却費の計算のほか、特別償却や投資税額控除など投資減税、特別の場合には圧縮記帳の経理処理がある。	同　上
6	人事給与費と税務	企業の支出する給与は、受給者の身分・給与の支給形態・経理方法により課税上の取扱が異なる。役員報酬・従業員給料、役員賞与・兼務役員賞与・従業員賞与、役員退職給与・従業員退職給与のほか、退職金共済、退職年金とともに、福利厚生費の解明が必要である。	同　上
7	販売促進費と税務	企業の支出する販売関係費は、その支出の態様、支出の基準、経理方法により課税上の取扱が異なる。売上割戻し・広告宣伝費・景品費・販売奨励金・情報提供料・現地案内費・諸種の会議費と、課税対象となる交際費とを区分することが重要となっている。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	特殊諸経費と税務	企業が支出し又は負担するもののうち、損金計上の時期・限度・制限につき多様なルールの存在する項目がある。試験研究費・開発費、新株発行費・社債発行費、営業権の取得費、貸倒損失、寄付金、租税公課、各種保険料、海外渡航費、損害賠償金等である。	富岡幸雄
9	引当金設定と税務	企業は適正な期間費用を計算するため見積将来費用を引当金として設定する。税法が損金設定を認めているのは貸倒引当金、返品調整引当金、賞与引当金、退職給与引当金、特別修繕引当金、製品保証等引当金である。ほかに、特別なものに価格変動準備金等がある。	同上
10	関係会社と税務	企業経営の発展は、その組織形態として、親子会社・系列会社・グループ会社を形成している。この関係グループ会社間には、特有な取引や資本取引があり、金銭・減価償却資産・土地等の賃貸借、人件費・管理費等の経費分担等をめぐる特殊な税務問題がある。	同上
11	国際活動と税務	経済の国際化の進展と国際的事業活動の拡大による国際税務問題が重大化している。海外に進出している日本企業に対する国際二重課税の排除、日本に進出している外国企業に対する課税、タックス・ヘイブンやトランスファー・プライシングの規制問題がある。	同上
12	同族会社と税務	少数の大株主により経営が支配されている同族会社はオーナー型企業が多い。この同族会社には、留保金課税・行為計算の否認・特別取扱ルールがある。会社役員間の金銭貸借、土地建物の貸借・売買など、課税上、問題となり特別に留意を要する課題が多い。	同上
13	個人企業と税務	個人企業は事業所得に所得税が課税される。事業所得の計算は、収入金額・必要経費とも法人企業とは異なっている。正確な記帳に基づく誠実な申告納税をする青色申告制度の精神と要件・特典、みなし法人課税制度の仕組み・課税上の理解が必要である。	同上
14	事業承継と税務	オーナー型企業の経営者の世代交代期を迎え企業相続に対する相続税が深刻な問題となっている。事業承継税制の創設による中小企業の相続税制の改善がなされ同族会社の株式評価方法・個人の小規模宅地評価が改正された。取引相場のない株式の評価が重要である。	同上
15	企業税制の改革問題―これからの税務会計の課題―	現行の税制・税務会計制度の問題点と改革課題を考える。現行の法人税制とその問題点、企業の経済的実態に適合するように法人税制を改革し中小企業税制と大企業税制の区分構築、税務会計制度の見直しによるタックス エロージョン（課税の侵食化）の解消をめざす。	同上

＝マーケティング＝

〔主任講師：大沢　豊（大阪大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングという言葉はいつ頃から使われ始めたのか、現在それは一般にどのように理解したらよいのか、さらに学問としてのマーケティング論は、どのように体系づけられるのかを明らかにし、その上で企業のマーケティング活動をとりまく環境と、意思決定者の直面する諸問題を理解し、分析していく上での基礎的な知識について論ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マーケティング思想の発生と展開	マーケティングという用語の発生のいきさつをたどり、それが企業の具体的な行動を指すものではなく、一つの理念であることを明らかにする。初期のマーケティング理念と現代マーケティング理念との差を、歴史的に検討する。	大沢　豊（大阪大学教授）
2	マーケティング論構成の視点	学問としてのマーケティング論を体系づけようとするとき、いろいろな視点に立ってそれを構成していくことができる。米国において一般的なマネジリアル・マーケティングもその一つであるが、もっとマクロな立場で議論を組立てていく。	同　上
3	マーケティング環境とマーケティング手段	マネジリアル・マーケティングの立場で企業のマーケティング活動をとらえようとするとき、マネジャーにとって与件として考えられなければならない環境と、意思決定の対象となりうる手段とを区別して考案するのが、もっとも便利である。	同　上
4	政府による規制 ―マーケティング環境その1―	自由主義経済を基幹とする国々では、何らかの形で競争を制限する行為を禁止する法律をもっている。世界各国の競争制限禁止政策を見るとともに、わが国の独禁法の沿革をたどり、その法律の意図するところを明らかにする。	同　上
5	同　上	不公正な取引方法に関する禁止規定、景品や表示の問題に対する規制の内容について、事例をあげながら考察する。	同　上
6	流通機構の形成と商慣習 ―マーケティング環境その2―	一企業の立場で、流通機構を変えていくことはできない。それは歴史的、風土的、あるいは法制的に影響を受けながら変遷をくりかえしていく。日米の流通機構の比較を通じて、日本の流通機構の特質を考察する。	同　上
7	同　上	日本的取引慣行として、どのようなものが挙げられるか。いくつかの事例を見ながら、取引慣行というものがその国の風土と深いかかわり合いをもっていることを明らかにする。大規模小売店舗に対する規制など、日本における国の流通政策の違いについて論じる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	市場と競争 ーマーケティング 環境その3ー	マーケティング担当者は、競争企業の意思決定を左右することはできない。競争市場での成果を記述するモデルについて概説する。	大沢　豊
9	消費者行動 ーマーケティング 環境その4ー	消費者はマーケティング担当者の最終目標である。その消費者は経済学で仮定するような合理的行動をとるとは限らない。しかもすべてが同質であるとはいえない。市場細分化は異質的な市場に対応する企業の適応であるといってよい。	同　上
10	情報の収集と分析 ー市場調査ー	意思決定に必要とされる情報は社内で得られるとは限らず、調査によってこれを入手しなければならないことが多い。市場調査技術は、対象の選択（標本調査論）と質問票の作成の両面で、プロフェッショナルな知識の上に成立っている。	同　上
11	情報の収集と分析 ー需要予測ー	将来の不確定な状況について、何らかの形で予測を行なうことが要求される。短期的な予測と長期的な予測とでは、自から異ったタイプの手法が適用される。コンピュータの発達によって予測技術は進歩しつつある。	同　上
12	新製品開発	現在の企業では、単一の製品またはサービスのみを提供していることは極めて稀である。製品開発は、市場細分化のための戦略と、多様化を目指した戦略とが考えられる。製品の特性をどう把えたらよいか、製品属性分析の手段にもふれる。	同　上
13	広告計画	広告実務においては、広告活動を他のマーケティング変数と切り離して論ずることが多い。ここではそれらの実務で多く利用される基準とその問題点を考え、同時により総合的な立場からの意思決定モデルに言及する。	同　上
14	価格政策と地域マーケティング	個々の企業にとって価格決定の自由度はその市場が競争的であるか寡占的であるかによって異なる。価格決定の実務的基準のいくつかを概説する。 地域マーケティングでは消費者の空間的行動を分析するためのモデルを考察する。	同　上
15	企業と消費者	ケネディ大統領による消費者の権利の保護の提唱以来、国や公共団体による施策がとられてきている。国や企業はその権利を保護する責任を負うと同時に、消費者の側でもそれに応じた知識を自ら身につける義務があろう。	同　上

経　営　組　織　論　(R)

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営組織の構造と行動に関する諸問題を理解してもらうよう努める。全体の前半部分は主として理論的命題の説明に充当し、後半部分は主として実践的課題の分析に向けている。現代が組織社会であることに留意することとともに、組織が変動する環境に主体的に適応する動態的システムであることを重視する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営組織の意義	経営組織がどのようなものであるかを概観する。説明のキーワードは、「経営」と「組織」であり、内容の特質を、個人と組織の関係、協動の意義と必要性、組織の要素などの点から論及する。	森本三男（青山学院大学教授）
2	経営組織論の発展と系譜	経営組織に関する研究がどのように発展してきたかを概観する。そのため、数種の学説分類をふまえた上で独自の分類を呈示し、それぞれの学説の内容を説明する。その際、諸学説が発展的系譜を形成していることに留意する。	同　上
3	経営組織の構造(1)	構造論は組織の解剖学であり、公式・静態的諸関係を問題にする。(1)では、構造の意味と設計原理を説明する。数個の原理について、その内容と問題点、組織に対する含意、批判者による批判点などを説明する。	同　上
4	経営組織の構造(2)	組織構造の具体的類型である組織形態について説明する。組織形態には種々のものがあるが、それらはたんに羅列的に存在するのではなく、一定の発展的関係をもっていることに留意する。	同　上
5	経営組織の行動過程	行動過程論は組織の生理学であり、公式な動態関係を中軸にするが非公式な人間関係のまつわる動的状況を問題にする。その状況を、意思決定、コミュニケーション、影響力、コンフリクト（葛藤）などの諸点からとらえてみる。	同　上
6	経営組織と環境	組織は、環境と相互作用することによって存続するオープン・システムである。このような組織にとって、環境とはどのようなものであるか、環境適応とは何をすることであるかを明らかにする。	同　上
7		組織有効性とは何かをまず明らかにする。つぎに、組織有効性に関するいくつかのモデルをとりあげ、それらの内容と問題点などる順次説明する。とり上げるモデルは、目標モデルとシステム・モデルに２大分される。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	経営組織の成長	組織には盛衰があり、成長が望ましい状態である。成長はどのようなことをさし、どのように測定するのかを理解する。組織成長についてもいくつかのモデルがあるので、それをとりあげて、内容と問題点などを説明する。	森本三男 （青山学院大学教授）
9	経営の組織戦略	組織の有効性を高めあるいは組織成長を実現するための基礎になるものは、組織戦略である。組織戦略の基本命題と、主要な戦略内容を説明する。戦略は、組織構造設計戦略と組織環境操作戦略に2大分される。	同　上
10	経営組織の環境適応	組織の環境適応について、主としてコンティンジェンシー理論（状況適合理論などと訳されることもある）の成果を用いて説明する。技術と組織構造、規模と組織構造の間に強い適合関係を認めるとする知見が多いが、その内容を紹介する。	同　上
11	経営組織の中枢機能	大規模経営組織における、戦略的適応の中枢となる部分をとり上げる。具体的には、経営者組織、戦略スタッフ組織、戦略的事業単位、研究開発組織などについて、その現状、問題点、およびあり方を検討する。	同　上
12	経営組織の動変化	もともと活動のシステムである組織において、なぜ動態化が問題になるのか、組織の硬直の原因はどこにあるのかを明らかにするとともに、動態化の具体的方法であるプロジェクト・チーム、小集団活動、社内ベンチャー等について説明する。	同　上
13	経営組織の人間化	人間の集合である組織において、非人間的現象もしくは人間性疎外がなぜ生じるのか、人間化とは基本的に何をすることであるかをまず理解する。その上で、職務拡大、職務充実、参加などの具体的方策を検討する。	同　上
14	経営組織の国際比較	組織の風土は、各国の文化的背景によって強く影響される。この章では組織の国際比較について方法上の検討を加え、ついで主として日本的特性の説明をおこなう。日本の経営組織は、部門的思考のような構造特性と、りん議的決定のような行動特性をもっている。	同　上
15	経営組織の国際化	国際化は、経営組織にどのようなインパクトを与えるであろうか。国際化によって各国別の特性は消滅するとの考え方（収れん説）と、新しい異質の風土が逐次創発されていくとの考え方がある。それらについて考察を加えてみる。	同　上

＝　経　営　戦　略　＝

〔担当講師：河野豊弘（学習院大学教授）〕

全体のねらい

経営戦略とは、企業が環境にどのように対応し、どのような製品やサービスを提供するかを決定することである。即ち製品構成を決定し、そのための新製品を開発し、後方への垂直的統合や前方への垂直的統合をどうするか、海外に子会社を設けるか否か、競争戦略をどう進めてゆくかなどを決定することである。

戦略的意思決定は前例のない一回限り意思決定であり、企業の業績に大きな影響を与える。そのような意思決定をどう行なうか、をこの科目では研究する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営戦略の概念と戦略的意思決定	経営戦略の必要性 経営戦略の体系 戦略的意思決定の特徴	河野豊弘 （学習院大学教授）
2	環境の分析―機会と脅威	重要な情報の選別 戦略情報の体系 情報源 収集と処理と伝達	同　上
3	自社分析―強みと弱み	強みと弱みの分析の体系 ＰＰＭ分析の例 分析の方法	同　上
4	基本目標の設定	目標・方針の体系 基本目標の水準の決定 戦略上の問題点	同　上
5	製品構成の決定と新製品開発	製品構成の類型 製品構成と業績 多角化と組織	同　上
6	〃	新製品開発の成功と失敗 開発のプロセス 開発の組織	同　上
7	垂直的統合	垂直的統合の意義 統合の原理	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	多国籍企業経営	多目籍企業経営の原理 適する領域 成功と失敗の要因	河野豊弘
9	競争戦略	競争の起る理由 競争の武器	同　上
10	〃	競争についての原理 競争の具体的展開	同　上
11	体質の強化	資源構造の領域 内的強化と外的強化 組織文化の変革	同　上
12	戦略の評価	評価の要素 評価の方法	同　上
13	実行計画	実行計画の要素 資源獲得と権力 センターの動員	同　上
14	戦略計画における 動機づけ	動機づけの原理 動機づけの実際 利害対立の解決	同　上
15	戦略計画と組織	トップマネジメント 企画部門 プロジェクトチーム 社内ベンチャー	同　上

＝生産管理とＯＲ＝

〔主任講師：秋庭雅夫（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

生産に当って、市場の要求に適合する製品の産出、材料・動力・設備などの効果的な活用、作業者の人間性尊重などの課題に応えるために、生産とその管理の活動を適切に計画し、運用していくための考え方、方式、方法を説き、また、それらを統合するシステムについて示す。さらに方法論としてのＯＲの概要を紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生産管理	生産とは何か。生産管理とはどのようなことをするのか、特性（品質、数量、時間、金額）の管理と作業（材料投入、工程稼働、製品産出）の管理とを組み合わせて考え方ととらえ方を示す。	秋庭雅夫（東京工業大学教授）
2	生産方式	生産管理のとらえ方に基づいて、各種の生産方式の区分体系の考え方を示し、また、それぞれの生産方式の特徴を説く。さらに、今までの生産方式の移りかわりと、現在の課題を示す。	同上
3	製品企画と品質管理	市場の要求を分析し、そこから製品に何が期待されているのかを導き出す方式とその結果を示す。さらに、管理図法、抜取検査など品質管理の基本を示す。	同上
4	工程分析	工程図記号に基づく工程図の作成方法を示し、生産工程の改善への活用方法を例示する。	同上
5	作業管理	作業分析、既定時間法、標準資料法などを示し、作業方法・時間の設定と標準化について説く。それに関連して、複式活動分析の考え方と活用のしかたを示す。	木村俊郎（国際協力事業団）
6	待ち行列と設備能力の決定	設備能力の決定問題について、待ち行列モデルと確率モデルの導入の必要性を説く。M／M／1型の待ち行列理論、一般の待ち行列問題についてモンテカルロシミュレーションによる方法について説く。	横山雅夫（放送大学助教授）
7	ラインバランシング	作業負荷を平準化するためのラインバランシングの手法について説く。ラインバランス効率、山崩しの考え方とともに、ジャックソンの列挙消去法および位置重み値を用いる方法について説く。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	線形計画法による生産計画	生産計画における意思決定の線形計画法によるモデル化をとりあげる。具体的解法の手段として、図式解法、シンプレックス法による解の求め方について説く。	横山雅夫
9	スケジューリング（ジョブ・ショップ・タイプ）	n個の仕事、m個の機械があるときにガントチャートによる可能な加工順序を示しながら、問題の意味を説く。また、ジョンソンの解法について例示する。	同上
10	スケジューリング（プロジェクト・タイプ）	プロジェクトに含まれる仕事の先行順位が与えられたときの進度管理を行なう手法としてPERTをとりあげる。アローダイヤグラム、日程計算、クリティカルパス、人員配置、3点見積り、時間短縮の求め方とその意味を説く。	同上
11	作業割当と輸送計画	線形計画法における最適割当ての問題、輸送問題をとりあげ、それらの実際的意味を解説するとともに、わずかの計算努力で解くことのできるハンガリア法などのアルゴリズムについて説く。	同上
12	資材調達	資材調達に関する各種資材発注方式について示す。また、それと関連して、在庫を持つ要因の分析とその排除の取組み方について説く。さらに、外注への考え方と管理の課題を示す。	秋庭雅夫
13	在庫管理	在庫要因の立場から在庫モデルおよび生産・在庫管理方式の考え方を整理する。また大量効果に基づく経済発注量の求め方、需要、リードタイムの不確実性に基づく発注点のシミュレーションによる求め方について説く。	同上
14	生産合理化	目標を重点的に展開して生産を合理化する方式、対策の体系的な選定について示す。	同上
15	生産自動化	生産自動化の構造を示し、トランスファ方式、群管理方式などの方式ならびに機器を例示する。さらに、自動化の経営効果とそこでの課題について説く。	同上 下地脩亮（末廣技研㈱社長）

経　営　科　学

〔主任講師：大澤　豊（大阪大学教授）〕

全体のねらい

企業が生産、販売、財務などのそれぞれの領域において合理的な意思決定をしようとすれば、企業経営を取りまく経済環境をはじめ、その決定に影響を与えをさまざまな要因を分析し、それらを表現する数量的なモデルを構築し、その上でいろいろな代案を検討することが必要である。この種のモデルがどのように役立つかを、数値例を使って、実際に電卓などを利用して計算しながら、具体的に議論していきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	「経営科学」という言葉は、一般にはオペレーションズ・リサーチ（ＯＲ）と同義語として扱われることが多い。本書では企業行動の経済分析も含めて、企業経営における意思決定の経済的側面に重点をおいたモデルに焦点を合わせ、数値例を実際に計算しながら理解していく。	大澤　豊（大阪大学教授）
2	生産関数	幾種類かの生産要素を結合することによって、製品が生産される。この際の生産要素の量と製品の生産量との関係を表現する関数が生産関数である。コブ・ダグラス型と呼ばれる生産関数が、実証的な分析ではしばしば採用される。	宮下藤太郎（青山学院大学教授）
3	需要関数	競争市場では、一企業の立場でその製品の価格を自由に決定することはできない。市場価格が与えられたとき、どれだけの需要があるかを示すのが需要関数である。需要の価格弾力性を使った指数タイプの需要関数がよく利用される。	同　上
4	企業行動モデル	生産関数、需要関数が与えられ、さらに企業の費用関数が示されれば、企業が利益を最大にするためには、どれだけの生産を行えばよいかが計算される。さらに資金制約がある場合にはどうなるかを考える。	同　上
5	広告の需要弾力性	需要関数に価格だけではなく、広告費の支出による影響をも含めてモデル化することも可能である。その場合の企業の最適政策を議論する。	同　上
6	線形計画 (1) 最適生産計画	生産計画の問題を、線形計画モデルによって定式化する。その場合、どのような仮定の上でモデルが構成されているかを検討する。	大澤　豊
7	線形計画 (2) 単体法による解法	線形計画の問題の基本的な解法としての単体法を、具体的な数値例によって、単体表と呼ばれる計算表を構成しながら、開設する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
7	線形計画 (3) 経済学的意味づけ	単体法によって得られた解のもつ意味を、単体表の最終段階で得られる条件を吟味しながら考える。	大澤　豊
9	線形計画 (4) 輸送問題とその解決法	線形計画の一つの特殊なケースである輸送問題について、説明する。また整数計画問題についても議論する。	同　上
10	ゲームの理論(1) 競争のもとでの合理的行動の分析		小山昭雄 （学習院大学教授）
11	ゲームの理論(2) ゼロ和2人ゲームとその解決法		同　上
12	統計的意思決定論(1) 不確実な条件下での意思決定の問題		同　上
13	統計的意思決定論(2) 情報の価値		同　上
14	シミュレーション(1) モンテ・カルロシミュレーション		大澤　豊
15	シミュレーション(2) システム・ダイナミックス		同　上

システム工学

〔主任講師：浅居喜代治（大阪工業大学教授）〕

全体のねらい

大規模・複雑なシステムの計画・設計・運用のためのシステム工学への理解を深めるために、まず、その発達の歴史・アプローチ・応用例を示したのち、次にアプローチの順に各段階での方法論を説明し、終りに最近の総合的な実際例を挙げて、系統的かつ具体的に講義を進め、システム概念の把握と、システム思考の基礎を与えようとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 システムとは	まず序論として、本講義の目的・意義・全体の構成について述べ、続いてシステム工学の対象であるシステムとはどういうものかを説明する。システムについては、その定義、種類、巨視的な特性などを、例を挙げつつ解説する。	浅居喜代治（大阪工業大学教授）
2	種々のシステム	まず、システムをハードシステムとソフトシステムとに分け、両者の関係について述べ、次に、構成要素や構成法などにより分類されるシステムを例示する。続いて、システム工学が対象としている現実のシステムを、例を挙げつつ説明する。	同上
3	システム工学とは	まず、システム工学の発達を歴史的にながめ、システム工学が複雑・大規模なシステムの計画・・設計・運用の技術として必要であることを述べ、次に、システム工学の考え方を、他の種々のシステム科学や技術と対比しつつ説明する。	同上
4	システム工学のアプローチ	前回でのシステム工学の考え方に基き、システム工学のアプローチを、例を挙げつつ説明し、かつアプローチの各段階で用いられる方法論について概説する。特に、以下の講義に含まれないシステム手法については、ここでその考え方を説明する。	同上
5	システムの表わし方（システム・モデリング）	システム工学のアプローチの初期の段階において、取扱うシステムを数式や図などによって表現するモデリングについて、考え方、一般的注意を述べ、さらに、数学モデルや図的モデルなどについて、例を挙げつつモデリングのアプローチを説明する。	平井一正（神戸大学教授）
6	種々のシステム・モデル	まず、システム・モデルを、表現形式・目的・表現特性から分類し、それぞれについて例を示しつつ概説する。さらに、代表的なモデルにつき、目的・意義を、その作り方とを例を挙げて説明する。	同上
7	構造モデルとグラフ	前回までに概説されたシステム・モデルのうち、特に大規模システムの構造を部分システム間のつながりとして表現する構造モデルについて述べ、次に、それの有力な方法論として、グラフ理論とグラフとについて例を挙げつつ説明する。	寺野寿郎（法政大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ファジィ・モデル	システム・モデルのうち、特に社会や企業のシステムあるいは人間行動などのモデルとしてファジィ・モデルを取り上げ、その意義・理論・種類などを例を示しつつ説明し、さらに、モデル作成上の問題点と注意とを述べる。	平井一正 （神戸大学教授）
9	システムの特性と解析 (1)	種々のシステムの基本的な特性のうち、ここでは、安全性・可制御性・可観側性・感度を取り上げ、それぞれの意義・モデルによる解析法を述べ、これらがシステムの計画・設計・運用上どのように取り扱われるのかに触れる。	寺野寿郎 （法政大学教授）
10	システムの特性と解析 (2)	種々のシステムの基本的な特性のうち、ここでは、信頼性・保全性・安全性などを取り上げ、それぞれの意義・モデルによる解析法を述べ、これらがシステムの計画・設計・運用上どのように取り扱われるのかに触れる。	同　上
11	良いシステムの求め方 （システム最適化）	前回の「システム解析」の結果に基いて、できるだけ良いシステムを求めるためのアプローチについて概説し、利用される種々の方法論を例を示しつつ説明する。さらに、このシステム最適化法の一部が、システムの最適運用にも用い得ることを示す。	浅居喜代治
12	シミュレーションと試行法	前回のシステム最適化法のうち、システムの目的を示す関数（目的関数）が数学的に定まらないときに用いられる計算機によるシミュレーションの手法を、例を挙げて説明し、さらに、シミュレーションのプログラムを作るのに必要な試行法について述べる。	同　上
13	システム・ダイナミクス	社会・都市・産業などの複雑・大規模システムの動的かつフィードバックの状況を示す構造モデルの方法論として、システム・ダイナミクスの考え方と理論とを説明し、さらに、この方法論に基づくモデリングの方法について述べる。	榛沢芳雄 （日本大学教授）
14	都市システムへの応用	システム・ダイナミクスに基づくモデルの応用例として都市システムを取り上げ、このモデルによって、地域開発の問題を用地・生産・雇用などの立場から考察するシミュレーションを試み、どのようにシステム計画を進めていけばよいかを説明する。	同　上
15	ＯＡ、ＦＡのシステムへの応用 ま　と　め	最近発達しつつあるオフィス・オートメーション（ＯＡ）ならびにファクトリー・オートメーション（ＦＡ）のシステムの計画・設計・運用に、システム工学をどのように適用すればよいかを、例を示しつつ説明する。 おわりに、以上１５回の講義の要約を行う。	浅井喜代治

＝人　間　工　学＝

― 工学的人間学 ―

〔主任講師：加藤一郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

機械と人間の類似性に着目し、人間について問いを発する。人間を工学的に観察しようというのである。有機体として複雑性と多様性とをもつ人間に対し動的システムモデルによるアプローチを試みる。その成果がロボットからサイボーグへと展開応用されていくことを示す。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	工学的人間学とは ― 人間尺度 ―	人間は工学とどのようにかかわってきたか。人間機械論から人間システム論に至る。"工学人間学"の系譜について述べる。工学的人間学が、人間の解明と福祉とに果す役割りを通じて、これからの展開に対する理解を深める。	加藤一郎 （早稲田大学教授）
2	ブラックボックスとしての人間 ― 自動人間 ―	思想的にデカルトに始まる人間機械論は、背景となる技術の進歩に支えられて変遷し近代に至っている。この自然観は人間を外部からながめ一種の機械として理解してゆくのが特長である。その歴史と現状について語る。	同　上
3	内側からみた人体 ―生理工学―	学問の分化が進むにつれて人間を内側から理解することに重心が移ってきた。レオナルドの解剖から近代の電気生理学に至る流れを新たに生理工学として現代的展開をみせようとしている。	同　上
4	脳のサイバネティクス ―人工知能―	人間の頭脳とコンピュータとの間には大きなギャップがある。しかしコンピュータによって人間の知能を一部代行させることはできる。ここでは人工知能の開発とそれによる脳機能の理解の試みについて述べる。	同　上
5	情報チャンネルとしての皮膚 ―官能検査―	皮膚感覚の特異説がしだいに根拠のうすいモデルとなりつつある。これを例として、仮説・検証のプロセスを示す。外界との代行情報チャンネルとしての応用や官能検査能力の人工化などを紹介する。	同　上
6	骨と筋のメカニズム ―人工関節・筋―	骨生成の電気機械的メカニズムをしらべ、形と機能について考える。筋についてはその構造特性など特有の性質をしらべる。これらの代替機器としての人工関節や人工筋についても紹介する。	同　上
7	身体リズムのメカニズム ― 電気刺激 ―	人間の体内では神経によって情報が伝達されている。したがって、神経に電気刺激を与えることにより、心臓、腸管などのリズムを制御し、あるいは痛みをおさえることなど、人工的に身体の制御を行うことができる。	内山明彦 （早稲田大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	血液循環系の メカニズム — 人工心臓 —	全身に血液を供給している循環系は、心臓→血管系→心臓→肺→心臓の一巡閉鎖回路をなしている。これらの構成している心臓、血管、血液流動のメカニズムを解説し、あわせて心不全の外科治療、人工心臓の現況について言及する。	土　屋　喜　一 （早稲田大学教授）
9	発声のメカニズム — 人工の口 —	我々は物を見て、その形を知り、意味を理解し、さらには美しい色彩にあふれた三次元の空間を知覚する。この巧みな視覚のしくみ — メカニズム — を主として機能的に解説する。さらに、このような機能に欠陥のある視覚障害者に対する技術補助の問題について議論する。	白　井　克　彦 （早稲田大学教授）
10	聴覚のメカニズム — 人工の目 —	言語が人間システムの中で持つ様々な特質について、言語の構造、言語の習得、思考と言語の関係などを見る。さらに、音声を発生する機構と、人工的に音声を発生する方法について述べる。	同　上
11	視覚のメカニズム — 人工の目 —	人間システムの中で、聴覚の果す役割を見る。生理学的に見た聴覚の機構と聴覚の複雑な心理現象について、今日の聴覚理論をながめ、それを工学の立場から考察する。さらに音声の認知と人工の耳の可能性について述べる。	大　頭　　仁 （早稲田大学教授）
12	手のメカニズム — 人工の手 —	手は人間である。感覚系、運動系ともに人間特有のシステムをもっていることが手の巧緻性と深く関連している。その巧緻性についてその機械的構造や運動制御についてしらべる。義手やロボットについて現状を人間機械システムの立場より述べる。	白　井　克　彦 （早稲田大学教授）
13	足のメカニズム — 人工の足 —	2足歩行の意義と問題点をさぐる。歩行運動の計測とそれに関連して正常と異常について考える。歩行の制御力学や歩行機械により足のメカニズムを解明し義足への技術波及に言及する。	同　上
14	内面からみた人間 — 心理工学 —	人間は心と体をもつ。心理学的知見をもとに人体における情報系と動力系について考察する。人間機械システムの評価の問題やバイオフィードバックなどを例に心と体の関係についてのべる。	加　藤　一　郎 （早稲田大学教授）
15	人間と機械の共生 —サイボーグ社会 —	工学的人間観はロボットモデルからサイボーグモデルへと移行してきた。近代合理主義がよりどころとしてきた知性偏重でなく、知性に感性を加えた新たな現代の価値観をサイボーグ社会という視点から探る。	同　上

情　報　工　学

〔主任講師：都倉信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

電子計算機の本質および実際を見極めるため、その仕組・原理・構成などをハードウェア、その利用法・プログラムなどのソフトウェア、ならびに応用技法等について基礎的な内容を講述する・あわせて、産業・社会における電子計算機の現状や将来への展望についても適宜言及する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	計算機概説	いま計算機はどのようなところで、どのように用いられているかを紹介しながら、計算機が多方面に活用されていること、計算機にもいろいろのものがあること、多くの職種の人々が関与していること等にふれ、計算機の分類などに話を進める。	都倉信樹（大阪大学基礎工学部教授）
2	計算機の構	典型的な計算機を例として、その構成をみる。計算機はそれぞれの機能を果たす装置から構成されているが、主要な装置について紹介する。また、ＣＰＵの内部がどのようなものから構成されているかを説明し、逆に、その設計法にも言及さる。	同　上
3	簡単な計算機Ⅰ	計算機は一見複雑極まりないが、実際は簡単な要素から組み立てられており、想像よりは簡単なものである。ゲート、フリップフロップなどの要素から出発して、主要な計算機回路を作っていく過程を説明する。	同　上
4	簡単な計算機Ⅱ		同　上
5	計算機の動作原理Ⅰ	基本的な回路を用いて、非常に簡単な、しかし、典型的な計算機の構成を考え、その動作を解説する。機械語命令、プログラム、アセンブラなどの概念を具体的な形で説明する。そして、プログラムに関するいくつかの基本的な概念を例示する。	同　上
6	計算機の動作原理Ⅱ		同　上
7	ＩＣ，ＶＬＳＩ，マイクロプロセッサ	最近の計算機の進歩は多くの関連技術の進歩に支えられている。計算機の技術を支える最も重要な技術であるＩＣやマイクロプロセッサについて、主に応用側から考えてみよう。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	プログラムの基本概念	プログラムを作るという作業について述べる。手順の表現法としての流れ図を紹介し、いくつかの典型的な例をもとにプログラムに関する基本的な概念を説明していく。	都倉信樹（大阪大学基礎工学部教授）
9	プログラミング言語	プログラミング言語について解説する。人間の言語との違いなども考えながら、計算機の言語の特質を考える。また、どのような言語が望ましいのか、どのような言語があるのかなどについても述べる。	同上
10	アルゴリズムⅠ	プログラミングの主要なステップのひとつはアルゴリズムの検討・設計である。いくつかの主要な例について、アルゴリズムの考え方およびその評価の仕方などを講述する。	同上
11	アルゴリズムⅡ		同上
12	ソフトウェアⅠ	ソフトウェアを作るという作業は単にプログラミングだけではないことを強調し、その内容と問題点を検討していく。特に大規模ソフトウェアを開発することのむずかしさとそれに対するいろいろの提案を紹介しよう。	同上
13	ソフトウエアⅡ		同上
14	計算機にできること、できないこと	これまでの論議を基にして、計算機の能力に関する基本的な問題に対し解答の一つを示す。またそれとの事項にもふれる。	同上
15	動向と展望・－さらに勉強するために－	この講義で扱った内容が情報工学全体の体系のなかに占める位置を示し、カバーしきれなかった事柄を示唆する。さらに、各人の興味に沿って引き続き勉強するための案内もしたい。	同上

＝ 計測と制御 ＝

〔主任講師：森　政弘（東京工業大学教授）
　　小川鑛一（東京工業大学助手）〕

全体のねらい

希望どおりの経過や結果や状態を得るために必要な操作をほどこすことを制御という。このためには現状や結果を計測することが必要で、計測なしには制御は成りたたない。本講義では、これらを踏まえて社会における計測制御の活躍状況の解説を背景に、計測制御を学んでゆくための必要最小限の工学的基礎事項を説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	もし計測と制御がなかったら ー計測・制御がなかったら世の中はストップー	計測がなければ、仕様に合った製品は存在しない。また生物にしろ機械にしろ目的を持つ動きを実現するためには、制御がなくては達成できない。この計測・制御がない場合とある場合を対比させ、いくつかの実例を示し解説する。	森　政弘（東京工業大学教授） 小川鑛一（東京工業大学助手）
2	生産と計測・制御I（加工組立ラインの実際） ー人間行動もシーケンス制御ー	加工組立ラインでは、さまざまな姿でシーケンス制御が活躍している。シーケンスの概念を人間行動を例に解説するとともに、機械運動や生産ラインとシーケンス制御について述べる。	同　上
3	生産と計測・制御II（プラント制御の実際） ー連続体の自動化がプロセス制御ー	プロセスとは、原料を受け入れ加熱、冷却などを行い、化学的、物理的な変換を施し目的とする物質を生産するシステムをいい、このための機械、装置全体をプラントという。ここでは、プラント各部の流量・温度などの制御につき述べる。	同　上
4	生産と計測・制御III（数値制御NCとロボットの実際） ーメカトロニクス入門ー	N．C．とロボットは、ディジタル計算機と制御技術が有機的に結合した結果今日のように発展した。NCは数値信号で工作機械を、ロボットは指令信号で腕や手をサーボ機構を介して制御する。本章では、NCとロボットの概要を述べる。	同　上
5	制御の基本方式（フィードバックとフィードフォワード） ー制御のすばらしさー	一般に制御といえばフィードバック制御（FB制御）を指すほどにFB制御は一般化している。このFB制御の本質を理解するため教室の温度制御を例に上げ温度調節係のおじさん物語を考える。また制御の名称分類用語についても触れる。	同　上
6	計測制御の基礎知識 ー制御理論の基礎の基礎ー	計測・制御は情報の流れを取り扱う学問といえる。この情報の流れを取り扱いやすくするため、制御ではいろいろと工夫がなされている。その基本的なものにブロック線図、伝達関数、ラプラス変換デジベルなどがあるので、解説する。	同　上
7	制御系の過度応答 ー入る信号・姿を変えて出る信号ー	時間関数として制御系の特性を表わすために、インパルス応答とステップ応答がある。これは、系にインパルスあるいは単位ステップ関数を入力し、その出力を解析するもので、系の特性を理論的、実験的に取り扱うのに有力である。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	安定・不安定の概念と条件 ー制御の安定・不安定ー	安定・不安定という概念は、物や人間の心に動きが伴う場合に現われる。物に動きがあって、はじめて制御が成り立つので、安定・不安定は制御工学にとって大切な概念である。制御系と物理系を対比させ安定、不安定現象を説明する。	森　政弘 小川鑛一
9	制御系の周波数応答 ー正弦波の魔力ー	制御系の特性を表わす別の方法に周波数応答がある。これは、系の入力に周期可変の正弦波を入れ、その出力応答の振幅と位相に注目して解析するものである。任意の時間関数は種々の周波数の正弦波に分解できるので、これらにつき述べる。	同上
10	制御装置 ー頭脳にあたる制御装置ー	制御対象に操作を加え希望通りにすることが制御であるが、この操作を指令するものが制御装置である。ここでは、プロセス制御の装置である調節計、およびサーボ機構の制御装置の基本としての補償回路について説明する。	同上
11	制御用機器 ー制御特有のハードウエアー	制御用機器は種類が多く、プロセス制御、シーケンス制御、サーボ機構、数値制御などとその名称分類によって使用制御機器も異ってくる。ここでは、プロセス制御とサーボ機構を例に取り上げ、その代表的制御機器について解説する。	同上
12	計測の話 ーなぜ測るのかー	科学の進歩と計測技術はお互に深い関係を保ち発展した。制御工学においても、計測技術なしには制御不可能である。本章では、物理量を測るためエネルギー変換型センサとエネルギー制御型センサについて説明する。	同上
13	センサ技術 ーセンサと頭は使いようー	センサの種類は非常に多く、また一つのセンサでも使用目的に応じ工夫を凝らすことにより、多岐にわれる応用が考えられる。ここでは、エネルギー変換型センサの一つである熱電対と抵抗線歪ゲージを取り上げ、その幅広い応用の一端を紹介する。	同上
14	最近の制御工学 ー理論の世界ー	制御理論はここ十数年の間にいちじるしい進歩をとげた。本章では工学における理論とは何か、その有用性、その背景、その体系の美などにつき、現代制御理論に主幹を置いて解説し、学問の世界をかい間見することにする。	森　政弘 古田勝久 （東京工業大学教授）
15	まとめ ーますます広がる計測・制御ー	上述の14章を総括し、要点を復習し、計測・制御の未来を展望する。 受講者に将来への希望を与え、勉学努力へのエネルギー源とする。	森　政弘 古田勝久 小川鑛一

＝ 設　計　工　学 ＝

― 解 析 と 総 合 ―

〔主任講師：阿武芳朗（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

本講では、設計の学問ならびに工業技術における位置付けとその意義、および設計の思考過程、行動実行過程、また、その評価、管理について論じ、社会に貢献し得る設計とはいかなるものかを会得させるための教養講義とする。前段（１～５回）は設計工学の基礎事項、中段（６～１２回）は、設計目的の具体化のための技術的基本事項を、後段（13～15回）は設計の評価ならびにその管理事項について述べる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	設計工学	設計を工業社会におけるエンジニヤリング的なアプローチからその位置付け、思考、実行過程を論じる。そのための基本を述べる。	阿武芳朗（東京理科大学教授）
2	設計と創造性	設計思考過程では、とくに総合において創造性が要求されるが、設計に要求される創造性の本質、技法について述べる。	同上
3	言葉としての図面(1)	人間が意志を他人に正確に伝える手段に言葉がある。３次元空間での物体の正確な情報は、図面によって伝達される。図面の基礎を述べる。	塚田忠夫（東京工業大学教授）
4	言葉としての図面(2)	製品に必要な性能、機能の考え方とその意味の伝達法について述べる。	同上
5	設計とコンピュータ（ＣＡＤ）	機械的作業を得意とするコンピュータと創造的思考とする設計者の相互の長所を結合すれば効率のよい設計が行える。このかかわり合いについて述べる。	同上
6	機械要素	次回以降に例示される設計構造の基礎知識として、種々の機械に共通して使用される部品の形態、機能、使用目的を述べる。	舟橋宏明（東京工業大学助教授）
7	解析と総合	設計にあらわれる二つの正反対の思考プロセス、すなわち諸支配因子を細かく分けて調べる解析と既存の知識を総合し、最適解を得る総合を述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	運動の変換・伝達(1)	機械を運動系としてとらえ、運動の変換・伝達の基本形式を示し、系内の物体の数や入力の数などの条件について述べる。	舟橋宏明
9	運動の変換・伝達(2)	機械運動系の入力および出力運動の量的関係について解析し、また所要の入出力関係を満足する運動系の総合を行う。	同上
10	材料と加工	材料の性質は、本来部品として完成された性能を目標に選ばれる、しかし素材料より加工を経るに従ってその材料の性質は変化する。このことを中心に材料と加工を述べる。	阿武芳朗
11	強度と剛性を考えた設計	機械の寿命の究極状態は壊れることである。予想される使用条件に耐え、くり返し力が働く条件で、強度と剛性を保障する設計を述べる。	塚田忠夫
12	精度設計	高精度機械では、その構成部品に非常に高い精度が要求される。機械全体の組合せ精度を損わずに、部品に適切な精度の配分をする考え方を精度設計と云う。	同上
13	設計と信頼性	機械が設計・製造・保全の過程を経て、その一生を終らせる迄に、夫々の過程での信頼性を高いレベルに保つ必要がある。設計の時点でこれらの信頼性を維持させる考え方を述べる。	阿武芳朗
14	設計と経済性	設計の時点で製造・保全に関する経済性を考慮に入れることを生産設計と云う、本講では生産設計について述べる。	同上
15	設計管理	設計部門の人事、技術、作業、設備全般に互り、生産工場における設計部門の管理の在り方について論ずる。	同上

＝　物　質　工　学　＝

主任講師：町田周郎（放送大学教授）
東　千秋（放送大学助教授）

全体のねらい

自然界に存在する物質（元素から化合物まで）のもつ各種の性質に関する基礎知識をもとに、自然界の物質を物理的、化学的および生物学的手法により人工的に処理し、人類に有効なエネルギーや材料として活用する過程について説明する。特に物質および材料の各種の性質の調べ方や新たに要望される性質とそれを生み出す手法等を現状における新材料・新技術等を例に解説する。

主な項目

(1)　地球をとりまく資源と物質

(2)　物質の分類と性質

(3)　物質から材料へ

(4)　材料発達の歴史

(5)　材料の生産手法

(6)　材料の試験法と品質管理

(7)　未来の材料（新材料、先端技術、未来予測）等

エネルギー工学（TV）

〔主任講師：丹生慶四郎（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギーの使用が、人間の生活や生産活動と密接に関係している事を、1日の生活、エネルギー使用の歴史エネルギー経済、エントロピーの立場から調べてみる。次にエネルギー資源について、今後の見通しを含めて考察し、最後に、各種エネルギー間のエネルギー変換に関し、詳細に調べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活とエネルギー	我々人間は、エネルギーを積極的に生活手段にとり入れる事で、他の動物の優位に立つことが出来た。1日の生活を振り返ってみると、いかにエネルギーの消費の上に、生活が成立しているかがわかり、資源のない我が国か、エネルギーの消費大国であることを知る。	丹生慶四郎（東京工大総合理工教授）
2	エネルギー使用の歴史	古代から、人は藉や炭、菜種油といった再生可能エネルギーを使用してきた。産業革命後は、仕石燃料（非再生エネルギー）を使用するようになり、エネルギーの消費量が1桁上って、社会制度も変改した。原子力エネルギーを含め、今後の検討を行う。	同上
3	自然エネルギー	エネルギー資源として、まず自然エネルギーに着目する。太陽エネルギーは莫大で、太陽熱発車、太陽光発車や、冷暖戻等に使用されているが、密度が低いので使用し難い。風力、海洋、地熱等の自然エネルギーの総量と、その利用の可能性をしらべる。	同上
4	原子力1 核分裂	原子力は、燃焼による熱エネルギーと全く異なって、原子核反応を利用するエネルギーで、まず核分裂の原子力が実用化している。鉱山資源のウランを用いた軽水炉をしらべ、高速増殖炉の開発の重要性を見る。又海水中のウラン資源にも　目する。	同上
5	原子力2 核融合	太陽エネルギーは、核融合反応でまかなわれており、太陽にならって、水　の同位体から核融合エネルギーを引き出して、これを使用しようとする試みが、行なわれている。核融合か地上で実現すれば、エネルギー問題は解決するが、それだけに困難性も高い。	同上
6	エネルギー経済	最後の日本は、経済復興のために、石炭と鉄鋼に傾斜投資を行い、繁栄のために、重化学工業へ生産の　点を置いた。エネルギーの消費は伸び、国民総生産も上った。エネルギー消費弾性値は1に近く、経済の振興には、エネルギーの消費が不可欠であることを知る。	同上
7	エントロピー1 視的考察と熱機関	実はエネルギーは種類が変　されても、総量は一定であり、エネルギー問題とは、エントロピー問題である。カルノーサイクルを導入して、熱機関の効率を調べ、熱エネルギーの劣化値として、エントロピーを定義する。熱力学の第1、第2法則を述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	エントロピー2. 微視的考察	エントロピーを、微　態数の対数で定義すると、エントロピーの概念を情報や経済まで拡張して使用出来ることになる。2　の石油危期で、先進国はエネルギー多消費産業を縮少し、消資源産業へ転換したが、情報の整備はエントロピーを下げ、合理的であった。	丹生　慶四郎 （東京工大総合理工教授）
9	エネルギー変換1 力学エネルギー	人間は生産活動でエントロピーを増加させており、エネルギー的に見れば、エネルギー　を行っているわけである。力学エネルギー同志、あるいは力学エネルギーから他のエネルギーへの変換について調べる。水力発電、水車、ポンプ、タービン等について述べる。	同　上
10	エネルギー変換2 熱エネルギー	産業改革以後、熱エネルギーから各種のエネルギーに変換する事が、人間社会における技術の歴史そのものである。この章では熱機関を詳細に調べてみる。オットーサイクル機関、ディーゼル機関、蒸気タービン機関等、多種類の熱機関が開発されている。	同　上
11	エネルギー変換3 化学エネルギー	化学エネルギーから熱エネルギーへの変換は、燃焼がその代表である。化学エネルギーを電気エネルギーに変換するのが、電池である。燃料電池についても述べる。化学エネルギーの生物エネルギーへの変換についても簡単にふれる。	同　上
12	エネルギー変換4 電気エネルギー	電気エネルギーから力学エネルギーへ変換するのが電動機である。電気エネルギーから抵抗代、アーク、電　誘導等で、熱エネルギーに変換して、加熱等に使用される。光エネルギーに変換されるのは、日常生活でなじみ深い所である。	同　上
13	エネルギー変換5 光放射系エネルギー	光起電力で光のエネルギーを電気エネルギーに変換する事は、最近しきりに利用される所である。放射線を用いて、電力を得ようとする試みもなされている。	同　上
14	エネルギー変換6 核分裂エネルギー	核分裂エネルギーを利用するために必要な各種の　原子炉の各要素、核燃料、燃料　覆材、減速材、制御棒、冷却材、　材等を調べ、原子炉の機能を見てみる。熱中性子炉、沸騰水型炉、加圧水型炉、ガス冷却炉、重水減速炉、高速増殖炉について調べてみる。	同　上
15	エネルギー変換7 核融合エネルギー	各種磁場閉じ込め方式装置、トカマク、ステラレータ、ヘソオトロシ、ミラー、ピンチ装置等、慣性閉じ込め方式装置、レーザー、相対的電子ビーム、軽イオンビーム、重イオンビーム等について述べ、核融合の　炉にもふれる。	同　上

＝流通と商業＝

〔主任講師：鈴木安昭（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

われわれの生活にも、また企業の生産活動にも、流通活動は不可欠である。その中心的な担手である商業は就業人口の二割余が従事している。そのような重要性にも拘らず流通や商業は十分理解されていないどころか誤解されてもいる。本講座ではそれらを理解するための基礎知識を平易に解説することを目的としている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	流通の社会的役割と流通機構	流通は必要悪で無くて済ませることができれば無い方が良いのだろうか。それとも流通は望ましい社会的役割を果しているし、今後も一層必要性を増してくるのだろうか。まず流通とは何かという基礎から始めよう。	鈴木安昭（青山学院大学教授）
2	流通機能(1)	流通の社会的役割の達成には流通機能が遂行される必要がある。社会的分業の結果として生産しない財は購入して所有権を入手しなければ消費できず、また購売を目的として生産が行われるが危険が伴うことも理解する。	同上
3	流通機能(2)	生産の地点と消費の時点それぞれに発生する。その懸隔（へだたり）をうめるためには、輸送され、保管されなければならない。またその過程で集められ、分割され、組合せがつくられる。	同上
4	流通機能(3)	消費に関する情報をもとに生産され、生産された商品に関する情報を伝達して消費の意欲を換起する。それに対して消費者から購入の意図が情報として伝達される。こうして情報を伝達することが流量の不可欠の要素となる。	同上
5	流通機能担当者の分化と統合	流通機能は多くの担当者に多様に分化して遂行されるとともに分化していたものが統一される。そこに参加するのは不可欠の生産者と消費者から中間商人としての卸売業者と小売業者、さらに輸送業者や広告業者など専門機能業者である。	同上
6	消費者と流通	われわれの生活にとって流通活動はどのような意義があり、また福祉とはどのような関係であるか、消費者の買物場所選択行動の基礎にあるもの、消費者の買物費用、そしてわれらが小売業に与える影響などを学ぶ。	同上
7	生産者と流通	生産者は財の生産に必要な原材料や機械・設備の購入に関して、そして生産した財の販売において流通機構と深いかかわりをもつのみでなく、生産した財の最終的な販売にいたるまでも管理の対象とするにいたった。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	商業の存立基盤	生産者と消費者の中間の部門として商業部門が存立し、しかもそれが存立するほうが社会的に合理的ある場合の根拠は何だろうか。さらに商業内部が多段階になる場合も考察しなければならない。	鈴木安昭
9	小売業の役割と機能	流通機構のうちわれわれ消費者にとって最も存在である小売業の果す社会的役割を確認し、その果している流通機能を整理してみよう。	同上
10	小売業の構造	小売業は多様な単位を構成要素として成立っている。その全体と変化の方向を握するために、それを規模別、業種別、地域別そして形態別に整理し、それらの変化を、環境諸要因とかかわらせて学ぶ。	同上
11	小売業の諸形態(1)	小売業の店舗、企業そして企業間の組織には多様な形態がある。百貨店、スーパー、専門店チェーン・ストア、中小小売業者、ボランタリー・チェーン、フランチャイズ・システム、商店街、ショッピング・センター、生活協同組合などの諸形態の特徴を知るばかりでなく、そのような諸形態がなぜ生ずるのか、同一名称で呼ばれていればそれらは同質なのか、新形態の出現についての試論にはどのようなものがあるかなどを論ずる。	同上
12	小売業の諸形態(2)		同上
13	卸売業の役割と機能	卸売業は一般的には小売業よりも理解し難いものである。ここでは卸売業が果している社会的役割とその機能を整理し、さらにその存立基盤に影響を与える諸要因を考察する。	同上
14	卸売業の構造と諸形態	卸売業には巨大な総合商社から、食品など業種別総合卸売業者、地場産業と密接に結びついた産地問屋、局地的な市場を対象とした零細卸売業者、輸出あるいは輸入を地域別品目別に扱う専門商社など多様な構成要素が存在する。	同上
15	流通・商業に対する公共政策	流通・商業のあり方に対して、政府や地方公共団体は公権力によって介入している。それらはより望ましい方向を目指して、民間の経済主体の行動を規制し、助成し、あるいは紛争の調整を行っている。	同上

サ　ー　ビ　ス　産　業　論　(R)

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
古郡鞆子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

われわれはサービス産業を、勿論1つの産業として研究する。然し、高度成長をへて成熟段階に達した現代産業社会には、産業構造の大きな変動が進展している。その変動要因の1つはサービス経済化である。われわれはサービス経済化の実態と意義を明らかにし、サービス経済化とサービス産業の関連とサービス産業そのものを研究する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	サービス産業分析の対象領域と方法	経済学説史においてはサービスの生産と消費は軽く見られてきた。それは不生産的労働とされ、商業も生産物に新らしい価値を付加するものでないとされた。現代社会においては、サービスの需要が家計内にとどまらず、産業需要として増大した。	磯部浩一
2	第三次産業の歴史的発展	第2次世界大戦後のアメリカをはじめとする高度経済成長は大量生産と大量消費を結ぶ流通産業と自動車、航空機による交通産業、すなわち第3次産業の飛躍的発展をもたらした。経済発展によってもたらされた第3次産業者と生産額の増大を広義のサービス経済化と見ることができる。	同　上
3	サービスの基礎的考察	経済成長は所得水準の上昇を通じて家計における「モノ」離れ、すなわち家計のサービス経済化をひきおこした。企業においても、デザイン、広告などの「モノ」ではないサービスの投入量が増大し、対事業所サービス業が発展した。これらは　義のサービス経済化である。	同　上
4	サービス経済化と産業構造	産業構造は基本的には最終消費構造を反映して変化する。家計と企業の消費行動におけるサービス経済化は、必然的に産業構造を変動させる要因として作用する。とくに、モノとサービス（情報を含む）の生産の内製・外製の再編は社会的分業の深化をもよらす。	同　上
5	就業構造のサービス経済化	経済発展は就業構造を変化させてきた。工業化につれて第1次産業の就業者構成化は急速に低下した。第2次産業の技術進歩は就業者構成比の上昇を抑え、第3次産業の就業者構成比を高める結果となった。とくに知　産業の就業者の増大は画期として重視された。	古郡鞆子
6	新しい雇用の拡大(1)	70年代の石油危機を契機とする資源ナショナリズムの　頭は、資源節約、エネルギー節約を必然　して、重厚長大産業の減量経営と多角化をもたらした。大企業の配置転換、出　等の方針は、内外製の再編成、事業所サービス業の領域を拡大させた。	同　上
7	新しい雇用の拡大(2)	第3次産業、とくにスーパーなど大規模小売業において、子育てを終えた家庭の主婦のパートタイマーの雇用を一典型とする女子の労働力化が急速に進展した。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	雇　用　政　策	産業構造の急速な変化に対応して、雇用確保のために雇用補助金、必要とされる技能を習得させるための補助金など各種の補助が行なわれている。	古　郡　鞆　子
9	サービス産業の分類	日本標準産業分類では、大分類１４業種中のサービス業は、中分類２３業種、小分類110業種に分けられる。サービス需要には伸びる需要と衰退する需要があり、それに応じて新しいサービス産業が成長し、古いサービス産業が衰退する。産業分類そのものが変化に対応しなくなる。	磯　部　浩　一
10	家計とサービス経済化	家計のサービス化は、狭義には有料のサービス支出の増大であり、　義には無料・低料金の公共サービス利用が拡大する現象である。サービスの外部化は、ア）家事労働を家計外サービスに代替、イ）モノ利用からサービスへ、ウ）モノ利用に伴う派生サービス者である。	古　郡　鞆　子
11	政府とサービス経済化	社会福祉を含む公共サービスは国家の独占的供給とされてきた。そこは市場原理ではなく共同消費の場である。財政危機は高福祉・高負担の原則、民間活力の利用として企業サービス及び家計サービスによる代替が一方向とされている。	同　　上
12	企業とサービス経済化	製造業におけるサービス投入の増大は、ソフト化とよばれる。同時に、生産工程以外の間接工程の効率化の増大と、この中の創造的効率性を高めるために、間接業務の両編成が進展し、対企業所サービス業の増大と発展がみられる。	磯　部　浩　一
13	サービス産業と成長業種	サービス経済化の意義について消極的と積極的の２つの評価がある。何れの評価をとるにしても、成長サービス産業が産業構造変化のリード役をしている実態は注目される。とくに、サービス経済化が、情報化と平行し、結合へと進む時にその重要度は否定されるべくもない。	同　　上
14	サービス経済の国際化	まずサービス経済化の進展について国際比較が必要である。次に、サービス経済の国際化をとり上げる。サービス収支（貿易外収支）のうちとくにサービス経済に関係の深いのは特許権使用料である。特術文献情報、クレジット、ビジネスの国際化が注目される。	同　　上
15	サービス産業の展望	サービス経済化の方向は、消費者のモノ離れ、生活構造の変化など需要面では今後も継続するであろう。供給面においても、製造業のソフト化は、サービス化を促進する方向で投資分野を確保するであろう。しかし、競争が激化することは必至であるとされている。	同　　上

交　通　と　通　信　（TV）

〔主任講師：岡野行秀（東京大学教授）〕

全体のねらい

一国の経済、世界経済の発展にとって、交通・通信は欠くことができない。国内的にも、また国際的にも、資源は地理的に偏在しており、これらの資源を有効に利用し、分業と協業を行なうためには、交通と通信の発達が前提になる。産業の発展と生活水準の向上にとって、交通と通信がどのような役割を果たすかを明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	交通と通信の役割	交通と通信は空間的に隔てられた経済活動を結びつける役割を果たしている。交通は、人および物を移動させる活動であり、通信は情報を移動させる活動である。両者は、相互に代替・補完的関係をもちながら、経済活動の地理的拡大ー市場の拡大ーに貢献する。	岡野行秀（東京大学経済学部教授）
2	交通の発達と経済発展ーなぜ、交通の整備が求められるかー	偏在する自然資源の活用、気候等自然条件によって地域的に異なる農水産物の商品化にとって交通の便は不可欠。交通の発達と産業活動の間の関係。（例）　原料立地から消費地立地への変化。	同　上
3	交　通　の　需　要	交通サービスの需要はどのようにして生ずるか。人・物の地理的移動の需要→そのための交通サービスの需要。交通サービスの需要の増加・減少要因はなにか。交通サービスの質の評価。	同　上
4	交通手段の特性・交通サービスの供給と費用	鉄道、自動車、航空、海運の各交通手段のサービスの特性。交通サービスの生産・供給の構造と費用構造の特徴。	同　上
5	運賃の決定・運賃・料金はどのように決定されるか	交通市場、運賃はどのように決まるか。なぜ運賃は完全に自由ではないか。運賃規制はどのように行なうか。	同　上
6	交通市場の変化；なぜ交通機関の盛衰が生ずるか	交通市場の変化；需要側の要因によるものと供給側の要因によるもの、（例）産業構造の変化、交通サービスの質の選好の変化、技術革新、費用構造の変化等	同　上
7	交通政策主要諸国の交通政策	国の交通政策。その目的、どのように関与するか、投資の配分、補助政策、公害対策等。欧米主要国の交通政策の小　。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	交通の将来	２１世紀の交通はどうあるべきか。技術革新の見通し、国土計画との関連。情報化時代の交通。	岡野行秀
9	通信の発達と経済社会	通信は経済社会の発展にどのように寄与して来たか。	南部鶴彦（学習院大学経済学部教授）
10	通信の需要	経済活動、社会活動にとっての情報交換の意義。経済活動・社会活動においてどのような情報が求められるか。情報伝達手段としての通信の質のニーズの変化。	同上
11	通信サービスの供給；通信手段とその特性	郵便、電報、電話、テレックス、ファックス等の通信サービスの供給に関する特徴、質の差異、費用構造。	同上
12	料金問題（政府規制）	なぜ料金を規制するか、料金水準とその構造の決定方式	同上
13	通信市場の変化と通信政策	技術革新、情報交換の需要の増大にとだなう通信市場の変化、通信政策の課題と実際。	同上
14	国際通信の問題点と国際通信政策	国際通信の問題点とその解決の方向。	同上
15	交通と通信の関係はどうなるか	急速な技術進歩にともなって交通と通信は一方で補完性を強め、他方でテレビ会議等によって人間の動き、情報システムによる物流管理など物の動きを節減させる。代替的関係を強めている。将来の方向はどうか。	同上（岡部行秀）

＝ 哲 学 的 人 間 学 ＝

〔主任講師：藤田健治（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

哲学的人間学は現在広汎に取り扱われている人間に関する諸科学の研究の基礎付けとして次第に脚光を浴びつつある新しい哲学の分野である。哲学の主要課題としては在存論・認識論等様々であるが、それ等は究極において「人間とは何か」という問いに答えようとする人間学の問題に帰著する。本書においては人間の根本的本質的あり方のうち、その主体的実質的あり方として「生命としての人間」「精神としての人間」「実存としての人間」とその活動形式としての「実践と観想」というあり方とを主軸として、それ等関係交錯から人生や歴史の諸相が如何に描き出されるかを究明することを目的とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学的人間学とは何か	世界観人生観の学としての哲学的思考の特質を芸術、宗教、科学のそれと対比して説明し、哲学の新しい分野として現在注目をあびている哲学的人間学の導入を試みる。	藤田健治（お茶の水女子大学名誉教授）
2	哲学的人間の課題・人間とは何か	人間とは何かという問いに対しては古来さまざまのアプローチが試みられ、現在でも自然科学、社会科学、人文科学などの分野でこの問題の解決にむかって努力が傾けられているが、実はその根底に哲学的人間学というものが無ければならないことを明らかにする。	同上
3	人間の根本的・本質的あり方	ではひとしく人間を主題にしながらも哲学的人間学と他の学問の人間研究との間にどのような相違があるかを考え、哲学的人間学が求める人間の根本的・本質的な規定の分析を試みる。	藤田健治 中埜肇（放送大学教授）
4	人間の活動的・形式的あり方	まず人間を形式の面からとらえるために、実践とか行為といわれるものの本質は「目的実現」にあり、認識とか知識とかいわれるものの本質は「意味表現」にあるという点で区別されると共に、この両面が現実生活では交錯する関係にあることを指摘する。	藤田健治
5	人間把握の認識論	従来の認識論が主として物一般についてのものであったのに対して、人間の立場からの認識論、すなわち人間自分にとって最も重要な対象である人間そのものをどのようにしてとらえることができるかという問題を考える。	同上
6	人間認識の目的達成の可能性と現実性	認識の目的である真理把握が達成されうるかどうかという可能性については、昔から懐疑論とか相対論に対して絶対論という見方があり、また真理把握の実際（現実性）については、その原理として矛盾律や理由律があり、またこれに対するものとして弁証法とか非論理的な無根拠の存在などが問題となるということを論ずる。	同上
7	人間の主体的・実質的あり方 生命としての人間	つぎに人間のありかたの最も基本的なものとして、自然的欲求の充足活動があるが、この欲望人を「生命としての人間」と名づけ、そのありかたを明らかにする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	精神としての人間	しかし、人間の活動は欲求の充足だけに尽きるものではない。「生命としての人間」の立場を越え、精神的な生きがいを求めて理想や理念を追求する活動の主体を「精神としての人間」としてそのあり方を考える。	藤田健治
9	続精神としての人間	理想や理念は真・善・美によって代表される精神的価値であり、その価値の実現が文化（科学・道徳・芸術）であるが、このような価値の分化とその相互関係、また価値間の比較と序列など価値体系に関する問題を考える。	同上
10	実存としての人間	私たちはまずかけがいのない「この私」として生きているが、この人間の個別性・主体性の根源にある「実存としての人間」を、とくにそれの最も顕著な現われとして宗教との関連において明らかにする。	同上
11	人間の本質的あり方の相互関係と統一、全人	以上に述べたのが人間存在の分析面である。これに対してその総合面として「全人」が成立するための本質的な法則関係、とくに全人の根本的現象である知・愛・幸福・職業などの哲学的な意義を解明する。	同上
12	歴史的社会の形成	これまでに考えた人間の本質を基礎として、さらに具体的に人間をとらえるためには集団的人間関係（空間的）と時代的発展（時間的）という二つの要素によって可能となる「歴史的社会」を考察する必要があるが、先ず人間の本質的あり方の集団化について考える。	同上
13	歴史的社会における個のあり方と歴史的社会の動態	個的人間がもつ歴史的社会に適応する生き方と歴史的社会から疎外される生き方とを基として歴史的社会の動態と動因とを究明する。	同上
14	歴史的社会を超えるもの	歴史的社会においてあり、あるいはそれに深く関わりながら歴史的社会を超えるものとされる実存と超越者もしくは超越的体験とさらに理念について論究する。	同上
15	歴史的社会における倫理の役割と世界史の究極目的	理念中歴史的社会の現実に最も直接的関わりをもつ道徳的理念の役割と実践の立場からする世界史の発展の目ざす究極目標の意義とを究明する。	同上

＝ 知識と学問の構造 ＝

－知の構築とその呪縛－

〔主任講師：大森荘蔵（放送大学教授）〕

全体のねらい

1つの中央構造線が現代学問の中央を貫いてこれを2つに分断している。自然科学と文化科学に、理科と文化に、そしてスノウの言う2つの文化に、更にこの分断は日常生活での人間観をも貫いている。この分断の基底には物と心の分裂があると私は考える。日本と西洋の両方にこの分裂の由来を尋ね、学問と人間観の一体性を回復することを試みる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	全体の予備的説明。西欧では16、17世紀の科学革命によって世界観の転換が始まった。これを「略画的世界観」→「細密世界観」への転換とみる。それが幕末維新期に日本で同じ転換を促した。これによって物の死物化、心身の分裂が生じた	大森荘蔵（放送大学教授）
2	略画的世界観	略画的とは精密な計測、表面的な論理的整合性にこだわらぬこと。そこでは天地人は一体として共感し、人間は神、霊、死者と共生し、過去と未来は現在に溶融する。動物、岩石も霊を持ち、物は生き生きとして死物ではない。	同上
3	日本における略画世界	古代神話、本居宣長の国学、江戸時代のインテリを支配した朱子学、そして基流思想としての仏教、における略画世界観について述べる。荻生徂徠、伊藤仁斉三浦梅園、等にも言及。そして幕末に強くなった洋学受容について。	同上
4	西欧古代中世における略画的世界観	イオニア自然学、アリストテレスに例をとる。細密世界観への起動力をもっていたデモクリストの原子論はアリストテレスの圧力で押えこまれた。更に細密化の始動としての天文学、静力学、解剖学にも触れる。	同上
5	略画の密画化その始まり	「円」信仰の呪縛からの最初の解放としてのケプラー、アリストテレス的神学に対する挑戦としてのコペルニクス地動説。細密数量描写としてのガリレイの動力学。連続量描写を可能とした微積分学。	同上
6	略画の密画化不可避の過程	ガッサンディによる古代原子論の復活。化学の領域での原子論の確認。それに基づいた「点描法」（原子論的描写）の進展。ラプラスの天体力学。それらにより物はほぼ死物と化した。一方神は遙か天上に死霊は街を歩きにくくなった。	同上
7	密画化と数量化	外部自然の細密描写が人体に及ぶとき人体の死物化が進行する。レオナルド、ベッサリユウスの解剖学。それがデカルトの「人間論」に至って人体は動物機械となる。当然「心」は分離独立し、「機械の中の幽霊」（ライル）となる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	密画の陥穽 －物の死物化－	だがデカルトの予想が現実化するには300年を要した。血液循環、呼吸、食物消化、発生と遺伝、これらの生命現象の細密描写が完成するまで紆余曲節があった。人体が死物体となるには手がかかったのである。	大森荘蔵
9	感覚的性質のストリップ	神経伝導、脳の機能の細密描写は今だに進行中である。しかしそれが完成しても心の機械化とはならない。逆に心はますます死物人体から浮き上り人だまのように浮遊している。心身の分裂は増大し現代人の迷いとなっている。	同上
10	二元論の構造的欠陥	西欧の密画世界観の受容は主として江戸期の医師によって行われた（例えば解体新書）。その時以来今日までその人間観が最も抵抗をうけたのは当然である。その抵抗の模様を観察する。	同上
11	二元論批判	無限の宇宙の細密描写を現実にはなしえない。そのため公理的方法に近い理論化が必要となる。その理論による説明とは何であるか。一方略画的描法をも併用せざるをえない社会人文科学における描写方法（デュルケム、ウェーバー、リッケルト）。	同上
12	原子論による密画描写	細密描写の基本は世界の時間的変化の描写である。この「変化」の概念を分析すると、可能な描法は原子論的描法と場描法としかないことを論証する。現代自然科学はまさにこの論理的選択可能性の枠内で展開してきたのである。	同上
13	人体の密画描写と知覚因果説	ここで残された現代の問題、心身問題に入る。まず生命論ではアリストテレスの形相としての霊魂論に還るべきと考える。それは上記の略画、密画両世界観の「重ね合せ」、「重ね描き」として理解できるからである。	同上
14	物と感覚の一心同体性	一方心の問題もまた上記二描法の「重ね描き」として理解しうる。密画世界観によって死物化された物はそれによって略画世界観でもっていた生命を取り戻すであろう。これを記憶、感情、想像、美的感覚等において説明する。	同上
15	自然の再活性化	一方、外界からの刺激による脳の興奮それによって生じる知覚像、という生理学の細密描法を批判、それに代えて「脳透視」の見方を提出し、幻像や十人十色を説明する。これによって両描法の「重ね描き」が完成し、心と物は昔の和合に返る。	同上

＝行為と規範＝

〔主任講師：黒田　亘（東京大学教授）〕

全体のねらい

自然的存在であると同時に社会的、政治的な存在である人間は、さまざまな規範に従いつつ、それぞれの個性に応じた価値の実現を目指して生きる。そういう人間存在の多面性を集約的に表現する“行為”について、基本的な諸概念と諸問題の分析を試み、実践哲学の基礎的な構想を固める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	行為について	この講義でとくに重要な意味をもつ諸概念につき説明し、全体の構想を述べる。	黒田　亘（東京大学教授）
2	規範について	いわゆる「自然主義の誤謬」をめぐって対立する諸立場につき説明し、問題解決の方向を探る。	同上
3	価値と規範	ルール懐疑主義に関する最近の議論を手がかりにして、「規範」の概念の分析を進める。	同上
4	「自然主義の誤り」について	行為に関する「理由づけ」ないし「正当化」の論理構造を問い、合理化の営みを支える「非合理」の所在を示す。	同上
5	実践的知識の構造	因果説の立場から行為の基本構造を論ずる。	同上
6	意志行為の分析(1)	「基礎行為」の概念について説明しながら、前講の論旨をさらに展開する。	同上
7	意志行為の分析(2)	同じく行為論の基礎概念である「人格」について説明し、これが行為に関する諸理論の総合の要となることを示す。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人格の概念	自由論と決定論の対立に関連してホッブズ、ロック、ヒュームの古典的見解を検討する。	黒田　亘
9	自由と決定	前講をうけて、自由と決定の問題を分析的に解明する。	同上
10	欲望と意志	古典的な「アクラシア」（意志薄弱）の説や倫理的快楽説などに論及しながら行為の「動機づけ」について考察する。	同上
11	快楽説をめぐって	ホッブズ、ロック、ルソーの古典的見解を相互に対照しつつ、基本的な問題点を指摘する。	同上
12	功利主義の検討	前講を踏まえ、さらにロールズ、ノジック等の所説を参考にしながら契約説の意義を考える。	同上
13	正義について	二つの概念の相互関係を考察し、法と道徳の境界に位する諸問題につき述べる。	同上
14	嘘と約束	行為の規範の合理的体系化を目指す理論の典型として功利主義の再評価を試み、現代におけるその理論的課題を考える。	同上
15	契約と功利	これまでの講義に基づいて実践哲学の基本構想をまとめる。	同上

＝ 文 化 人 類 学 ＝

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

文化人類学という学問を一言で定義すれば、世界の諸民族のもつ文化や社会について比較研究する学問だと言える。それらの特色を具体的・実証的にとらえていくところに特徴がある。本講においては文化人類学の諸分野における今までの成果を概観し、日本人、日本文化の問題や国際理解など、身近な課題にも眼をむけていきたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	文化人類学とはどんな学問か？	文化人類学の定義と歴史、この分野における基本的概念としての人種、民族等等……。	祖父江 孝 男（放送大学教授）
2	文化：人間の特質をめぐって	人間の特色である言語の存在、それによって生まれた文化の本質。文化はいつ頃生まれたかなど……。	同 上
3	文化の進化、文化の伝播	１９世紀の文化進化論、さらにそれに代って登場した伝播論。特に民話、伝説などの伝播の問題をめぐっての論争など……。	同 上
4	生 業 と 経 済	狩猟採集と農耕、牧畜。それぞれの生活形態とその歴史、殊に穀物農耕の出発、照葉樹林文化とナラ林文化の問題など……。	同 上
5	衣食住を考える	衣服の系統史、食生活のさまざまな形態と料理法の型。住居の型とその歴史など。	同 上
6	言語とコミュニケーション(1)	音声と音素、エティックの立場とエミックの立場。言語の諸系統。非言語的コミュニケーション（ボディ・ランゲージ）など……。	同 上
7	言語とコミュニケーション(2)	同 上	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	家族と親族(1)	一夫多妻制、一妻多夫制など婚姻の諸型、婚姻後どこへ住むかによる分類。父系制と母系制、配偶者選択における自主性の問題など。	祖父江　孝男
9	家族と親族(2)	同　上	同　上
10	超自然観と宗教	宗教の諸形態、アニミズムとアニマティズム、マナの問題。呪術、妖術、シャーマニズムなど。	同　上
11	民族芸術と音楽・芸能	さまざまな民族芸術、そして、音楽と芸能。生活と社会の環境が異なるにしたがい、どんな特徴を示しているかなど。	同　上
12	文化と心理・民族性	文化環境の影響によって生まれた国民性と民族性、特に日本人の国民性と県民性の分析、それらはどうして生まれたかなど。	同　上
13	文化変化と文化変容	文化変容と文化変容（アカルチュレーション）の具体例、特に日本では外来文化をどう受け入れたか、戦後日本の変化はどう変ったかなど。	同　上
14	国際理解と国際交流	他の文化をよく理解するための基本的態度、エスノセントリズムと相対主義と。国際交流の過程でおこるさまざまな問題点など。	同　上
15	エ　ピ　ロ　ー　グ	最後にあたり、文化人類学におけるさまざまな問題の総括と概観。最近の課題など。	同　上

＝ アメリカ論 I ＝

〔主任講師：猿谷　要（東京女子大学短期大学部教授）〕

全体のねらい

北米（アメリカ合衆国とカナダ）について、各方面からその特色を論ずる。北米はいま日本ともっとも深い関係をもつようになったが、その本質は必ずしもまだ十分に理解されてはいない。従来とかく断片的になりがちだったアメリカ論を、ここで十分にまとめて展開し、正確な理解を得られるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	歴史1 若い共和国の誕生	大航海時代のアメリカ大陸から始まり、植民地時代を経て、アメリカ合衆国が建国されるまでを概説する。とくに原住アメリカ人というべきインディアンの生活や、各植民地の特色、新しい共和国の性格や、これが世界史上に与えた影響などに重点をおく。	猿谷　要 （東京女子大学短期大学部教授）
2	歴史2 セクションの発展と衝突	独立直後のアメリカがしだいに地域的特色をもちながら、ついに南北戦争にいたるまでをのべる。産業革命をいち早くとり入れて資本主義社会へ向かう北部、奴隷制度を拡大する南部、フロンティアをおしすすめる西部、この三つの地域の利害対立を中心とする。	同　上
3	歴史3 世界的強国への発展	南北戦争を終って国内の統一をはかった後、資本主義が独占集中を生んで国外にも勢力を伸ばすようになり、米西戦争、第1次大戦を経て“アメリカの世紀”を実現するまでのべる。南部の従属とリンチの横行，西部フロンティアの消滅などをあわせて解説する。	同　上
4	歴史4 超大国の影響力と価値観の変動	第2次大戦後、世界最大の影響力をもつことになったアメリカは、新しい冷戦の時代に共産圏と対立する。一方国内では大恐慌、ニューディールなどを経て物質的な繁栄を謳歌するようになるが、1960年代には、黒人革命から始まる多様な価値観の変動を迎える。	同　上
5	政治・外交1 アメリカン・デモクラシーの特色	国内政治にみられる特色を、具体的な例をあげて説明する。合衆国憲法にみられる特色や二大政党の変遷、大統領選挙の仕組み、歴代大統領の評価、連邦政府と各州政府、アメリカの場合の保守と革新など、世界各国に大きな影響を与えた政治の特色を解説する。	阿部　斉 （放送大学教授）
6	政治・外交2 アメリカ外交の特色	19世紀を支配したモンロー主義がその後しだいに崩壊し、孤立から介入へ向かう変化を説明する。とくに第2次大戦後は国際政治の中心に位置し、新しい冷戦に対応して特色のある外交を展開するが、際立った影響力とその限界などについて解説する。	同　上
7	経済1 ドルが威信をもつまで	初めアメリカは経済的に貧弱な国としてスタートした。ドルの威信も極めて低いものだったが、くり返し起った経済恐慌をのり越え、1世紀あまりで債務国から債権国へ変貌し、ドルが全世界の通貨として威信を誇るようになるまでの経過を解明する。	嘉治元郎 （放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済2 当面するアメリカ経済の諸問題	1960年代に入ると、世界に君臨したドルの威信が低下しはじめ、いまアメリカの経済は実に多面的な難問題を抱えこんでいる。自由主義経済のチャンピオンとしてのアメリカが、いまどのような問題に直面して苦悩しているかを、具体的な例をあげて明らかにする。	嘉治元郎
9	社会1 多人種・多民族社会	アメリカ社会を構成する人種と民族は極めて多様であり、それがこの国を動かす原動力の1つとなってきた。多数派と少数派の形成、少数派を受けてきた苦難の過去、人種主義の後退と少数派の平等への闘いなど、国際関係にも影響を与えた変革の跡をたどる。	猿谷要
10	社会2 社会の特色を彩る諸要素	アメリカの地方分権はかなり強力で、各州自治がそれだけ徹底しているので、地域による特色もまた明瞭である。ここでは地域性の他に、暴力や犯罪、家庭の崩壊などのマイナス面や、ボランティアとして積極的に社会に貢献しようとするプラス面などを考察する。	同上
11	生活文化 アメリカ的生活様式	現在のような生活様式がほぼ固まったのは1920年代のことで、アメリカはこのとき世界最初の高度な大衆消費時代を迎えた。この原型を中心に、宗教のもつ役割、ジャーナリズムの発展、大衆文化の普及、平均的アメリカ人の懐ろ具合などを明らかにする。	同上
12	カナダ1 カナダ史の特色	アメリカのかげにかくれて、日本人のカナダ認識はいまだに稀薄である。しかし現実にはいま日本とカナダの関係は急速に深くなっているので、この回ではカナダの歴史を概説し、その特色を明らかにする。	同上
13	カナダ2 モザイク文化	カナダは早くからモザイク社会を標榜してきた。人種・民族の上からだけではなく、言語、宗教、文化などの面での多様性を説き、あわせて1977年に百年祭を迎えた日系移民の役割についても言及する。	同上
14	日米関係史	幕末のペリー来航から現在の貿易摩擦にいたるまで、日米関係の歴史を5段階に分けて説明する。移民の果した役割などについても触れ、あわせて日米相互の理解のギャップ、国際交流の諸問題など日米間の多様な面を探りたい。	同上
15	アメリカ論総まとめ	北米は中南米のラテン・アメリカに対してアングロ・アメリカとよばれるが、その特色を明らかにして、未来への展望としては、大西洋時代から太平洋時代への推移、ますます重要性を増すカリフォルニアの役割など、多角的にアメリカ像を浮かび上らせる。	同上

＝アメリカ論 II ＝

〔主任講師：増田義郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

ラテン音楽やマヤ、アステカ、インカ等の古代文明などによって日本に知られている中南米は、その歴史、文化において特色に富み、またその政治・経済・社会も、19世紀の独立期以来独特な歩みを示して、第三世界の中でも、他のアジア・アフリカ地域と全くことなった個性を持つ。その個性とはなにか。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乾燥地帯・高原・熱帯低地	まず、中南米の自然環境と、そこに人間がどのように適応して行ったかという問題を考える。われわれの日本の約54倍の面積を持つこの広大な地域は、実に多くのことなった自然環境を持つ。したがってそこに住む人々の生産や生活もさまざまである。	増田義郎（東京大学教授）
2	多様な民族 多様な言語	中南米の原住民は多くの民族に分れ、しかも15世紀末以来、ヨーロッパ、アジア、アフリカからの渡米者が定着して、多様な民族が今日の中南米を構成している。また言語も、スペイン語、ポルトガル語だけでなく、多数の原住民語を含み、状況は単純でない。	〃
3	アステカ・マヤ・インカ	中南米の原住民の歴史を、初期の狩猟民時代から15、16世紀の国家形成の時代まで概観し、中でもとくに高い文明段階まで進んだ、メキシコのアステカ、中米のマヤ、アンデス地方のインカについて、その建造物、都市、遺物を紹介しながら解説する。	〃
4	バロック文化の開花 ～植民地時代	15世紀末にはじまるスペイン、ポルトガルの植民地時代は、中南米にヨーロッパの文化がもたらされ、それに土着文化やアフリカ文化が融合して、ラテンアメリカ文化が形成された時期として、とらえられる。その新文化を、バロック文化の諸相において観察する。	〃
5	独立運動と共和国成立	19世紀はじめ、ナポレオンのスペイン、ポルトガル侵入を契機に、中南米に変動がおこり、結局のところ多くの地域に独立運動が誕生して、ひとつの帝国と多数の共和国が成立する。それらの消長を、背景にひかえたヨーロッパ勢力の決定的な影響力とともに理解する。	〃
6	クーデター・革命・民主主義	中南米諸国の現代政治史を、ポプリスモ（人民主義）運動の登場と挫折、軍事政権への転換、さらに最近の文民政権の回復という大きな流れとして把握したのち、中南米諸国の政治の基本的特色を、主に国民統合の遅れと、政治経済の過度の結合の二側面から論ずる。	恒川恵市（東京大学助教授）
7	中南米政治の争点 ～従属か、自立か	中南米諸国の直面する諸問題を、政党と政党制、軍部の政治介入、教会の新しい動き、経済的「従属」と自立、域内紛争と外国の介入など、さまざまな争点について論じることを通じて、中南米諸国における政治的安定と民主化の条件を考える。	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済発展の光と影	1930年代以降ラテンアメリカ諸国は工業化を推進したが、基本的には少数一次産品に依存する輸出構造を変えることは出来ず、一方貧しい農村は工業化からとり残され貧富の差が強まった。その要因を検討しつつ、ラテンアメリカの経済発展の特徴について解説する。	細野昭雄（筑波大学助教授）
9	累積債務とインフレ	1970年代には自由経済政策や積極的開発政策への政策転換による新たな発展が試みられたが、それは累積債務を急増させる結果となり、今日その利子支払いに追われ、失業は急増しインフレは加速している。この深刻な経済危機の構造と要因について解説する。	〃
10	躍動する新しい文化	今世紀における中南米の特色ある現象のひとつに文化活動がある。メキシコ革命の結果生れた新しい社会環境に、新しい壁画運動がおこり、中南米全体の造形美術の創造を刺激する。そして50年代末からは「ブーム」と呼ばれる爆発的な文学の創作活動がおこる。	増田義郎（東京大学教授）
11	メキシコ ～変革と伝統	まず、現代メキシコの基礎を作った「メキシコ革命」とカルデナス改革についてその歴史的経緯を説明する。そののち、中南米では、例外的な政治的安定下に進行する社会的・経済的変動を、伝統的文化を維持して生きる人々の生活の諸相を紹介しつつ解説する。	恒川恵市（東京大学助教授）
12	ブラジル ～未来の国	ブラジルは、多くの経済的政治的問題をかかえながらも、広大な国土と豊かな資源を有する21世紀の国として将来が期待されている。この魅力ある国を、知られるところの少いその劇的な歴史的展開をたどることによって理解して行きたいと思う。	増田義郎（東京大学教授）
13	ペルー ～砂漠・高原・熱帯林	古代インカ文明、副王領の中心としての植民地時代、そして19世紀の独立後の共和国時代の三つの相に分けてアンデス高原と砂漠の国ペルーの歴史をたどり、その雄大な自然や、各地に残る伝統的風俗や、特色ある都市生活を見る。	〃
14	アルゼンチン ～豊かさの中の停滞	肥沃で広大なパンパを有するアルゼンチンは欧州移民により開発され、有力な穀物と牛肉の輸出国となって一時大いに繁栄したが、政治の不安定などから、1950年代後半以降経済は長期的に停滞した。豊かな土地と資源を有しながら停滞におちいった要因を解説する。	細野昭雄（筑波大学助教授）
15	カリブ海地域 ～非ラテン的な中南米	コロンブスが最初に到着したのはカリブ海の島々であり、中でもサントドミンゴ島は、スペイン植民地時代初期の重要拠点であった。しかし植民地の重点が大陸部に移されるにつれ、カリブ海は、英・仏・蘭等の勢力の侵入するところとなり、複雑な様相を呈する。	増田義郎（東京大学教授）

＝ アジア論 I ＝

〔主任講師：浜口允子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

我々の属する東アジア世界は、一つの完結したまとまりを示す文化圏である。歴史的にみれば、それは、中国を中心とし、そこに周辺民族や国家が関わって形成された世界である。本講座は、その形成過程や特質を理解することを目的として、基軸をなす中国の政治・社会構造を歴史の中から考えていくものである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	東アジアとは	東アジア世界をどう考えるか。そこにおおよその位置づけを与え、それが中国を中心とした文化圏であることを明らかにする。本講座が、その政治・社会構造を理解することを目的としたものであることをのべる。	浜口允子（放送大学助教授）
2	自然的条件	自然は、その社会に固有な歴史が展開される舞台である。幾多の自然的条件の中から、その展開に大きく作用したと考えられる地理的位置など、いくつかの要素をとりあげ説明する。	同上
3	皇帝権力の成立 秦漢の時代 (1)	紀元前三世紀に秦の始皇帝が中国を統一してから、今世紀に至るまで二千年余の間、中国は一貫して皇帝権力を中核とした統一体として存続しつづけた。(1)は、そのはじめの過程を郡県制の成立を中心にのべる。	同上
4	皇帝権力の成立 秦漢の時代 (2)	短命であった秦を継いで漢は、四百年の長きにわたり統一国家を維持した。それは何によって可能であったのか。前漢の皇帝権力強化の過程と、やがてその中から力を蓄えてくる地方豪族の存在についてのべる。	同上
5	皇帝権力の展開 隋唐の時代 (1)	漢滅亡後の長い分裂期の中から、六世紀末、再び統一国家が生まれた。(1)では、この隋及び唐の集権化政策に焦点をあわせる。とくに均田制については、その変遷や、当制度の意味、貴族制との関連等を説明する。	同上
6	皇帝権力の展開 隋唐の時代 (2)	均田制・府兵制、租庸調制を中核とした隋・唐の律令体制は、八世紀中葉をさかいにして大きく崩れ、代って新しい制度と新しい担い手とが登場してくる。(2)ではとくに、この過程と、そこに作用した諸要因についてのべる。	同上
7	皇帝権力の確立 宋の時代 (1)	唐末五代の武人勢力の抬頭も短期間で終り、中国には再度統一国家が成立した。(1)ではこの君主独裁制といわれる宋の体制について、とくにその成立期を中心にのべる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	皇帝権力の確立 宋の時代(2)	十一世紀に行われた王安石の改革は、宋の体制の矛盾をつくと共に、何が皇帝権力の基盤であるかについて多くの示唆を与えている。この点を中心にしてみつつその後の社会について展望する。	浜口允子
9	財政基盤としての税(1)	統一権力が存立しうる基盤は、財政の安定度にかかっている。権力が納税対象をいかに把握したか、どこに財源を求めたか、という観点から各時代の税制の変化をみ、それが社会構造とどのように関わっていたかを考える。	同上
10	財政基盤としての税(2)	(1)ではとくに、租庸調制から両税法への移行についてのべる。 (2)ではとくに、宋代以降の商税や専売など間接税のはたした役割についてのべる。	同上
11	経済発展の諸相 農業	中国の中央集権体制は、その権力を支える経済的基盤の上にはじめて可能となったものである。そこで農業生産力の発展の歴史的推移と、それが何によってもたらされたものであったかを考える。	同上
12	経済発展の諸相 商業	農業と並んで、中国社会の基本的経済力を示す商業および手工業の発展を概観する。また宋代以降の都市や市場の形成などを通して中国社会のまとまり方を考える。	同上
13	経済発展の諸相 漕運	広大な中国にあって、物資をうごかし、情報をながし、人々を結びつけてきた社会・経済活動を支えるいくつかのシステムについて、その発展や特徴を考える。とくに水運のあり方についてのべる。	同上
14	人々の生活(1)	各時代の基本的生産関係によって、また各段階の政治、社会構造のどこに位置したのかによって、人々はさまざまな生活を送った。 (1)では、農村の人々、都市の人々の生活を考える。又農民運動についてもふれる。	同上
15	人々の生活(2)	二十世紀初頭、内外からの危機の中で皇帝権力は崩壊した。従って社会制度、社会体制としての皇帝は、その後存在しない。だが、その二千年余の歴史は、人々の意識や生活の中にさまざまな影響をのこしている。この点を考えてまとめとする。	同上

アジア論 Ⅱ

〔主任講師：和田久徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本をふくむ東アジアとその南に位置する東南アジアとは、古くから交渉があったが、日本との関係は近時とくに政治・経済・文化など各面で緊密化している。日本の将来にとって重視すべき東南アジアについて、諸民族の歴史とその特質を述べ、同地域の社会と文化の理解を深めたい。その際、日本とのかかわりに注意する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	諸民族の国家形成と東西交化交流(1)	初期の港市国家、東西海上交通の興隆、扶南王王国の成立など。	和田久徳（放送大学教授）
2	同 (2)	扶南の海上貿易と東西文化交流、林邑王国の独立、ビルマ・マレー・インドネシアの諸国など。	
3	シュリーヴィジャ王国と海上貿易 (1)	シュリーヴィジャヤの勃興、シャイレーンドラ朝の繁栄と仏教文化など。	
4	同 (2)	シュリーヴィジャヤの海上貿易政策、東ジャワのクディリと南インドのチョーラの挑戦など。	
5	古代クメール帝国の繁栄 (1)	クメール帝国の成立、クメール帝国の性格とアンコール建築群など。	
6	同 (2)	チャンパー王国の海上活動、モン人の諸国家など。	
7	新しい民族国家の発展	パガン朝のビルマ統一、ベトナムの独立など。	

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	ベトナム社会の発展	陳朝の民族文化、黎朝社会の拡張、チャンパーの衰退など。	
9	タイ系諸国の成立と展開 (1)	スコータイ朝の成立、セイロン仏教の受容など。	
10	同　　(2)	アユタヤ朝の発展、クメール国家の変　、ビルマの分裂など。	
11	ジャワ諸王国の展開	シンガサーリ朝の成立、マジャパヒト朝の発展など。	
12	マラッカ国とイスラム化	インドネシアのイスラム化、マラッカの展開、その海上貿易の繁栄など。	
13	東南アジアと東アジア (1)	初期の交渉、中国人の通商活動など。	
14	同　　(2)	中国人社会の成立、琉球王国の東南アジア貿易など。	
15	結　　び	15,6世紀の東南アジアと世界、現代に至る道など。	

ヨ　ー　ロ　ッ　パ　論　Ⅰ

〔主任講師：阿部玄治（放送大学教授）〕

全体のねらい

１０月革命は世界で初めてロシアにおいて社会主義国家をつくり出した。この国家は政治的には独裁政治を特徴とし、この独裁政治はツァーリズムの独裁と共通する面をもっている。経済状態の差異にかかわらず継承されている独裁の伝統を、本講義は探ろうとするものです。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	１９３０年代のソ連の印象	１９３０年代の世界経済恐慌下にすんでいた資本主義世界の知識人は、ソ連社会主義に関心をよせた。そこにはソ連の賛美と批判の双方がみられる。考察する人の立場がそれぞれ反映しているが、いずれが正しいと判断する十分な材料は入手できなわった。	阿部玄治（放送大学教授）
2	スターリンの　頭	レーニンの遺言は無視され、スターリンは書記長としての地位を利用して、競争者たるトロッキー、ジノヴィエフ、カーメネフ、ブハーリンらを追い落して、独裁的地位を握った。	同　上
3	スターリン独裁　そのⅠ	キーロフ暗殺を契機に、１９３０年代のスターリンの大粛清が始められた。西側で「見せ物裁判」と呼ばれた裁判が次々と行われた。これについてのスターリン　の記述は、スターリン批判まで世界共産主義に真実としてうけられていた。	同　上
4	スターリン独裁　そのⅡ	スターリン独裁にみられる独裁者の個性と独裁の機構、粛清の意味をさぐる。	同　上
5	レーニンからの遺産	スターリン独裁はレーニンのプロレタリア独裁論や共産党の組織論を継承し、これをスターリン流に　させたものであった。	同　上
6	帝政ロシアからレーニンへの遺産	レーニンが物心がついてくる１０才台はアレクサンドル３世の反動改革の時代だった。官僚や秘密警察の支配、言論統制、議会政治の否定など、レーニンのプロレタリア独裁と類似した政治が行われていた。	同　上
7	ピョートルの専制国家	スターリンは独裁者やヨートルとイヴァン雷帝に好意をよせたが、ピョートル大帝は、　大な官僚と常備軍、秘密警察、正教教会の頂点に立って、近代ツァーリズムの第１の祖先といえる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	キリスト教とマルクス主義	マルクス主義はキリスト教文明の中で成立した。そこにはキリスト教徒のもつ終末観、救世主への待望、異教、異端の　と共通する感情がみられる。	阿部玄治（放送大学教授）
9	ギリシア正教と君主制	キリスト教はローマ皇帝に公認されたとき皇帝を神の代理人として神格化し、他方ドミナトウス制を施して独裁者となった皇帝は、教皇や総主教より上位に立った。ビザンツ皇帝はこの立場に立ち続け、これは正教とともにロシアにとりいれられた。	同　上
10	専政君主制と封建的反抗権	ローマ帝国が早く滅亡した西ヨーロッパでは教皇権が強くビザンツ文化圏とは異る様相を示す。封建主従間では、ロシアと異り家臣の封建的反抗権の思想が認められており、王権神授説に基く絶対王政に反抗した議会政治の思想とのつながりがみられる。	同　上
11	モンゴル支配とロシア君主制	モンゴルの２００年にわたる支配は当然様々の影響をロシアに及ぼした。モンゴル支配とはどのようなものであり、ロシアの専制君主制にどのくらい影響を及ぼしたかをさぐる。	同　上
12	ロシア中央集権国家の成立	モンゴルの支配下に、モスクワ公国がロシア人の統合の中心となっていった。その過程特にイヴァン３世下において、封地の設定、ノヴゴロドの支配などによって、専制の基盤がつくり出されてきた。	伊藤幸男（山梨大学教育学部教授）
13	イヴァン雷帝の独裁　(I)	治世の改革、カザン　国の征服などにより自信をもったイヴァンは、リヴォニア戦争に突入したが、王朝の危機感などもあって、ツァーリ独裁のオプリチニナ支配をはじめた。	同　上
14	イヴァン雷帝の独裁　(II)	イヴァン雷帝独裁の象徴でするオプリチニナ支配の目的は何か、その実相はどうであったか、民衆や外国人のイヴァン雷帝観、ロシア観にどう影響したかを探る。	同　上
15	動乱時代とロマノフ朝下のロシア	イヴァン雷帝の独裁と戦争により衰退したロシアは、ポーランドなど外国　力に　りんされたにもかかわらず、その独裁体制（ツアリズム）の基礎がロマノフ朝下に確立した。	同　上

＝ アフリカ論 ＝

〔主任講師：川田順造（東京外国語大学教授）〕

全体のねらい

アフリカの姿を過去現在にわたってかなりくわしく、しかも全体像がつかめるような形で紹介する。写真、図版、ビデオ、録音（道具、衣服、楽器などの実物も）を豊富に使い、アフリカの姿がいきいきと視聴者に伝わるように工夫する。日本人との関係でのアフリカ、現在から未来へ向ってのアフリカについても十分考えるようにしたい。地域別各論では、それぞれの地域での現地調査経験の長い専門家を適宜ゲストに招いて、川田がきき役になり対談形式で他の地域と対比させながら次第に全体像が作られていくようにしたい。

主な項目

(1) アフリカとは

(2) 自然、資源

(3) 人種、言語

(4) 文化と歴史（総論）

(5) 文化と歴史（各地域別）北アフリカ

(6) 同、西アフリカ

(7) 同、エチオピア

(8) 同、東アフリカ

(9) 同、中部アフリカ

(10) 同、南アフリカ

(11) アフリカの都市

(12) 植民地支配下のアフリカ

(13) 独立国家

(14) 「未開」と「低開発」

(15) 日本とアフリカ

哲　学　思　想

（西洋近代の哲学思想）

〔主任講師：中　　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義はルネサンスに始まって１９世紀半ばにいたる西洋近代の哲学思想をその内容とし、哲学者の思想内容の細部に立ち入るよりも、哲学的な問題意識の流れを全体にわたって辿ることを目的とする。とくに世界（自然と人間）像および知識（学問）論の展開に重点を置く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	ル　ネ　サ　ン　ス	ルネサンス期の思想の特徴を「開かれた宇宙観」と「新しい人間像」という観点からとらえ、自然科学と人文主義の持つ思想的な意味をさぐり、さらに自然哲学と宗教的な神秘思想について考える。	中　埜　　肇（放送大学教授）
2	Fr．ベ　ー　コ　ン	「経験」にもとづく新しい学問の提唱者としてフランシス・ベーコンが展開した新しい知の構造（学問のプログラムと分類、イドラ論、帰納法など）について述べ、その意味と限界を考える。	同　　上
3	デ　カ　ル　ト	「普遍学」を構想し、その方法論の基礎を徹底的な懐疑によって達せられる「自我」（＝理性）の確実性に求めたデカルトの形而上学について述べ、その二元論的な世界観の問題点を探る。	同　　上
4	ホ　ッ　ブ　ズ	機械論の立場からする演繹な思考方法を、自然現象よりもむしろ人間社会の構造に向けたホッブズが、社会契約の必然性と国家権力の絶対性の思想に到達した過程を明なかにする。	同　　上
5	ス　ピ　ノ　ザ	「神に酔える無神論者」と称せられたスピノザの汎神論が実は絶対無限な神に対する信仰の論理的な帰結であったことを明らかにし、彼の思想が哲学の模範とされる理由を考える。	同　　上
6	ラ イ プ ニ ッ ツ	十七世紀において最大のスケールを持つ総合的哲学者であったライプニッツが、無限量で極微の実体「モナド」にもとづいて構想した連続的で調和的な世界像の本質を明らかにする。	同　　上
7	ロックと啓蒙思想	啓蒙思想の先頭に立つロックが十七世紀の独断的な理性論に対控し、近代的な知識論の出発として、初めて人間の認識能力を批判的に吟味し、経験主義の哲学を定礎した意味を探る。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	バークリ	ロックの知識論をさらに進めて、「在る」ことを「知られている」ことに還元する観念論の立場に達したバークリ僧正の信仰と思想を、同時代の思想との関連で考える。	中埜肇（放送大学教授）
9	ヒューム	ロックに始まる知識吟味作業の完成者であったヒュームが、経験主義の立場を徹底することによって懐疑論に接近したプロセスとその意味を、因果の問題などを手がかりにして考える。	同上
10	フランス啓蒙思想とルソー	イギリスに始まった啓蒙思想がフランスに入ってラジカルなものになった過程および文明と進歩に寄せる啓蒙思想の信頼を徹底的に批判したルソーの立場について述べる。	同上
11	ドイツ啓蒙思想とカント	啓蒙思想のドイツ的なあり方をフリードリヒ大王やヴォルフにおいて見たのち、啓蒙の精神を深めることによって独自の批判哲学を構想したカントの問題意識を『純粋理性批判』について考える。	同上
12	カント（つづき）	カントの批判哲学の発展を『実践理性批判』、『宗教哲学』および『判断力批判』に即してたどり、カント哲学の画期的な意味について考える。	同上
13	ドイツ観念論哲学	カントの哲学が後継者たちによって変容され、さらにフィヒテやシェリングの思考を通して一元論的な体系構成へと発展するにつれて、哲学がロマン主義の色彩を濃くしてゆく過程について述べる。	同上
14	ヘーゲル	ドイツ観念論哲学のみならず、近代の哲学思想全体がヘーゲルにおいて頂点に達したことを、彼の絶対理性（＝精神）の哲学とその方法である弁証法とについて考察する。	同上
15	ショーペンハウアー・キルケゴール・マルクス	ヘーゲルの絶対理性の哲学を徹底的に批判して新しい哲学的視野を開き、近代から現代への移行を実現した三人の思想家の思想内容とその歴史的な意義を考える。	同上

＝ 社 会 思 想 史 ＝

〔主任講師：城塚　登（東京大学教授）〕

全体のねらい

近代の民主主義国家・社会、資本主義社会を形成してきた人たちの社会思想、またそうした国家・社会のはらんでいる深刻な諸問題と対決し、その解決をめざした人たちの社会思想を考察し、現代の高度に発展した社会に生活するわれわれが、人間らしいあり方を確保するためには、どのような国家・社会をめざすべきかを考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近代的人間の登場	近代的な国家・社会は、資本主義経済の発展（産業革命）と市民革命を通じて出現したが、それを担った合理主義的人間はルネサンス期に登場した。マキァヴェリの社会思想を考察することによって、そうした合理主義的人間の社会観を見る。	城塚　登（東京大学教授）
2	個人の自立と自由	宗教改革の指導者ルターの宗教思想のなかには、内面的信仰を通じて神と結びつく個人の自立と自由、職業労働の意義が確認されるなど、近代社会を担う人間のあり方が示されている。それはカルヴィニズム、ピュウリタニズムに引継れる。	同　上
3	民主主義思想の成立(I)	イギリスの王権反対派が権力をにぎった「ピュウリタン革命」に出合ったホッブズは、個人の自然権から出発し、諸個人が社会契約によって国家・社会をつくったという考え方を提出した。そこに民主主義思想の基礎がある。その問題を考える。	同　上
4	民主主義思想の成立(II)	「王政復古」から「名誉革命」にいたるイギリスで、ロックは社会契約について考えを進め、社会契約によって公共的なものに権力を信託した民衆は、権力者が信託に反すれば解任・更送できるとし「主権在民」の考え方を確立する。	同　上
5	啓蒙思想の展開とロマン主義	ロックの思想はフランス、ドイツなどヨーロッパ各国の思想家に受けとめられ啓蒙思想として展開した。モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、カントなどの思想がそれである。その反動としてシュレーゲル兄弟らのロマン主義が現われる。	同　上
6	「市民社会」への反省	フランス革命が自由と平等をスローガンにかかげたにもかかわらず、流血と専制をもたらしたのを見たヘーゲルは、スミスが自由な活動に委せるべきだとした「市民社会」のあり方に反省を加え、国家が「市民社会」の活動を制御すべきだとする。	同　上
7	初期社会主義思想	イギリスで紡績工場を経営したオウエンは、労働者の生活改善に努めたが、さらに協同生活・協同労働の村を開設して社会主義を説いた。フランスでは科学者と産業者が社会の主導権をもつべきだと説くサン・シモンが現われる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	マルクスの人間解放思想	ヘーゲル哲学から出発したマルクスは、国家は幻想の共同体であるとし、市民社会の自己変革をめざした。そして資本主義の生産においては、労働者は生産物や生産活動から疎外されているとし、人間の自己疎外克服を人間解放の課題とする。	城塚　登
9	マルクスの共産主義思想	生産力に照応する生産関係を歴史の土台と考える唯物史観に立つマルクスとエンゲルスは、資本主義が生産力の発展の妨げとなっているとし、生産手段の社会化を中心とする共産主義革命を説く。また資本主義の経済学的解明をおこなう。	同　上
10	フェビアニズムと社会民主主義	1884年にイギリスの知識人が結成した「フェビアン協会」は、社会的善の実現をめざし、土地や資本の公有、社会福祉・保障の充実をめざす。ドイツ社会民主党もベルンシュタインが議会活動による労働者の権利拡大という路線を出す。	同　上
11	マルクス主義思想の展開	後進国であったロシアでマルクス主義を受けとめたレーニンは、資本主義が帝国主義の段階に達したとし、革命を指導し実現した。他方、西欧では、ルカーチのように、労働者階級の主体的自覚の形成が課題とされる。	同　上
12	合理化と官僚制の問題	社会の近代化を合理化の過程としてとらえたヴェーバーは、官庁・軍隊・会社・工場などの集団が官僚制の特徴を示すようになるとし、それに対し人間は対決しなければならないと説く。彼は社会主義社会も同じ運命にあると考えている。	同　上
13	大衆社会の問題	20世紀にはいり資本主義社会は産業的合理化を進めたが、それとともに非合理的行動や激情に走る傾向をもつ大衆が発言力をもつようになる。その病理を指摘したマンハイム、リースマンの思想を見て、ファシズムについても考える。	同　上
14	管理社会の問題	情報化社会といわれるように飛躍的に増大した知識・情報を統括し、人びとの生活全体を制御しているのは、国家と法人大企業の複合機構であるとするガルブレイス、組織された資本主義がはらむ新しい問題を指摘したハーバーマスを見る。	同　上
15	人間らしい社会をめざして	これまで学んできた社会思想を踏まえて、日本の社会の現状について考える。民主主義、官僚制、大衆化、管理社会などが、日本の特殊性とからみながら、さまざまな深刻な問題をひき起している。これにわれわれはいかに対処すべきか。	同　上

＝宗教理論と宗教史＝

主任講師：柳川啓一（国学院大学教授）
阿部美哉（放送教育開発センター教授）

全体のねらい

宗教学は、かつて、比較宗教学と称せられたように、特定の宗教を歴史的に明らかにするよりは、宗教一般を通じる理論を求めようとしてきた。本講義はその立場に立ち、宗教に強い関心を持つ人にのみならず、宗教を持たない人々の宗教理解の助けともなってほしいという意図をもって、テーマを編成した。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本人と宗教	一般に、日本人は無宗教であると云われる。ところが、科学、技術の発展した社会での中で、日本ほど宗教に満ちていたところは珍しいとも指摘される。この矛盾をどう解釈すればよいかが、この講義の序論となる。	柳川啓一（国学院大学教授）
2	宗教の規定―聖と俗―	宗教学は、もともと、ヨーロッパに成立した学問であり、キリスト教の伝統をになっている。しかし、他の宗教を含めた、宗教一般の解明を志した。その立場から宗教の規定の一例を、「聖と俗」の問題として取上げる。	同上
3	季節の祭	狩猟、牧畜、農漁業など、自然とのかかわりの深い生業においては、四季の移り変りごとに、祭が行われ、豊かな生産が祈られた。現代においても、この形式が生きている。祭は、人々をエクスタシーにまで高める作用をもっている。	同上
4	通過儀礼	人間の生涯においては、誕生、成人、結婚、死亡などの折目がある。このときに、新しい段階、状態になったことを確認する儀式が行われる。これを通過儀礼という。この儀礼の種類と意味についての研究。	同上
5	信仰治療	病気は、人生の苦しみのうち、耐えがたいものの1つである。宗教は、この解決にあたろうとした。俗信、呪術と呼ばれる治療儀礼もその試みである。さらに信仰によって病気がなおるということは何を意味しているか。	同上
6	修行	宗教は心の問題であるというが、心だけの問題ではない。「行」によって、自分の身体に一定の制約を与え、それを通して、精神の展開をはかろうとする。修行がこれである。神秘主義とも関連するところが深い。	同上
7	タブー	タブー（禁忌）は、何かをするなという戒しめであり、原始宗教から世界宗教においても普遍的にみられる。ただ、内容において、ユダヤ教の十戒、仏教の五戒のように、倫理にまで高められる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	戒律と道徳	宗教、ことに近代の宗教においては、道徳と分ち難くなっている。いかに生くべきかという日常倫理の問題が主になるからである。しかし、宗教には、道徳を超越する分野のあることも特徴である。	柳川啓一
9	信仰と宗教的世界観	宗教は、科学とは異なる次元の、宇宙観、世界観を持っている。その中心には、人格をもった神（または神々）、あるいは宇宙の法則がおかれている。これらの世界の描写を、いくつかの宗教を比較しながら研究する。	同上
10	生から死への移行	人間に死がなければ、宗教はなかったであろうといわれる。宗教のもつ世界観にも、死後の世界、すなわち来世が描かれている。まず、葬送儀礼を通して、生から死への移行がいかに考えられただろうか。	同上
11	祖先崇拝	１つの考え方では、死者は生者とのつながりが完全には切れず、お互いに助け合わねばならないという。日本の祖先崇死者供養にはこれが強い。近隣のアジアとの比較も必要になろう。	同上
12	天国と地獄	死後の世界は、生前の行いによって、行き場所が違うという考えもある。天国と地獄に分ける来世観は、各宗教において、精細に述べられており、ここでは、その一部を取り上げて見よう。	同上
13	宗教集団	宗教は、この世の外へ逃れることをすすめるだけではない。この世をそのまま受け容れることもあり、この世の批判、改革を志すこともある。その相違の理由の１つは、宗教集団（教会、教団）の理念の違いに基づく。	柳川啓一 阿部美哉（放送教育センター教授）
14	社会と宗教との関係	政治と宗教の関係は、祭政一致から政教分離にいたるまで、さまざまのタイプがある。とくに、近代における両者の関係に重点をおいて説明する。	同上
15	現代日本社会の宗教	現代は宗教の衰退する時代とよばれることは事実か。あるいは、宗教の内容が変わっているのか。日本における宗教にも触れて、全体のまとめをする。	柳川啓一

＝ 歴 史 の 理 論 ＝

〔主任講師：藤田健治（お茶の水女子大学名誉教授）
阿部玄治（放送大学教授）〕

全体のねらい

歴史の理論を取り扱う際、歴史観の歴史的変遷を主として古代から現代に到るまでを鳥瞰した。但し各時代におけるすべて歴史観に渉るわけに行かないので、代表的な人々のそれに限ることとした。その場合歴史学自身と共に歴史哲学者の歴史観を取り上げたのは、後者により体系的なものを見出すことが出来たからである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	歴史とは何か	序説として歴史自身は多く書かれ且読まれているが、その根本にある歴史の理論については、現在多くの学者の注目を惹いていないかに見える。そこで先づ歴史とは何かということから始めて歴史の理論的考察に対する関心を喚起する。	藤田健治（お茶の水女子大学名誉教授）
2	神話と歴史	神話は古代人の一つの世界観的表示である。神話を欠いた民族はかつてなかったし、それに当時の社会や文化の反映を見る事に異論はあるまい。日本神話は世界的に稀にみる独自なもので、これをギリシア神話と対比してその本質を明らかにする。	同上
3	古代ギリシアの歴史観	古代ギリシアの歴史観の代表として、ヘロドトスとトゥキュディデスをとりあげる。前者の物語風歴史、後者の実用的（教訓的）歴史と呼ばれる歴史記述の特徴を述べる。	阿部玄治（放送大学教授）
4	ヘレニズム・ローマ時代の歴史観 世界史の成立	ヘレニズムの世界市民主義、ローマの地中海世界統一のなかで、世界史への傾向が生じ、教父史学において世界史が成立する。世界史記述のための紀年法が確立するためにはなお数世紀を要する。	同上
5	中世の歴史観	中世の歴史家はキリスト教の神の摂理が歴史を貫くと考える。キリスト教の終末観と関連して、彼らは自分たちの時代を年老いた終末に近い時代と感じていた。そこに中世特有の時代区分も生ずる。	同上
6	近世の歴史観 ルネッサンス，ブルーノとヴィコ	ルネッサンスとなって、中世期的な歴史に神の摂理を見る思想から離れて行くが、しかしそれも一挙にという訳にはいかない。ブルーノの自然主義的世界観とヴィコの歴史主義的世界観とに焦点をあてて説明する。	藤田健治 阿部玄治
7	啓蒙主義・ロマン主義の歴史観とヘーゲル	十八世紀は啓蒙主義の時代と言われるが、すべてを合理的に証明しようとする反動として十九世紀にロマン主義が台頭する。そしてこの時代の総決算としてヘーゲルの歴史哲学が時代を大きく支配する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	反ヘーゲル的 歴史観 Ⅰ	ヘーゲルの一世を風靡した歴史哲学に対して十九世紀後半から反ヘーゲル的な潮流があらわれる。歴史哲学もランケ、ブルクハルト、ニーチェがそれぞれヘーゲルの歴史学に反対して新生面をひらく。	藤田健治
9	反ヘーゲル的 歴史観 Ⅱ	同じく反ヘーゲルの潮流の中にマルクシズムも位置する。その唯物史観として知られる下部構造と上部構造の規定関係は必ずしも普通解せられるように明らかではなく、生産力の概念もたびたび解釈を変える。	藤田健治 阿部玄治
10	生の哲学の歴史観	二十世紀初頭に盛んである科学論、自然科学と精神科学との境をどこで引くか、精神科学に特殊の方法はあるか等の疑問に答えるべく生の哲学があらわれる。それは歴史理論からやがて人間的生そのものの哲学理論へと移って行く。	藤田健治
11	現象学派の歴史観	フッサールの現象学自身が後期に「生の世界」を志向するが、シェーラーにおいて歴史的社会の動向の研究として知識社会学が生れ、さらにハルトマンにおいて精神的存在の問題として客観的精神論が展開される。	同上
12	実存主義の 歴史観 (1)	実存哲学はキルケゴールにおいて反ヘーゲルの立場を反歴史主義として現わしたが、ハイデッカーもサルトルもその哲学において歴史的世界との対決に進む。ハイデッカーの歴史哲学は時間性に基づいて展開される。	同上
13	実存主義の 歴史観 (2)	ヤスパースの構想は、軸時代を中心として描かれるが、歴史的世界を越えるものとして実存と超越者及び超越的体験を強調する。	同上
14	シュペングラーと トインビー 和辻と田辺	この時代の歴史学自体はシュペーグラーとトインビーにおいて代表される。彼等の文明批評は技術社会の到来や挑戦と応戦にみられる。日本の代表的歴史哲学者としては、和辻の「風土」と田辺の「種の論理」をとり上げる。その他ロシア史のカーやマイネッケのシュターツレゾン等語るべき点が多い。従来歴史哲学とみられた社会変動や進歩と変形の理論等に社会学心理学の新しい動きがみられる。	同上
15	歴史哲学の 基礎学としての 哲学的人間学	歴史哲学は畢竟するに人間の学である。そして又人間的生の哲学は究極においてその生の歴史的展開を求めざるを得ない。その意味で歴史哲学は人間学に帰着するのである。その意味の人間学は生命・精神・実存と観想・実践を主軸とした世界構造と動態の学でなければならない。歴史の理論は究極において人間的生を時間的に現実的に把えるものであると考える。	同上

＝ 記 号 と 人 間 ＝

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

記号に関連した事項をいくつか取り上げて論ずることを通じ、人間の世界を理解する上でどんなに記号に頼っているかを論ずる。記号について論ずるべきことは他にもいくらでもあるが、わかり易くすることを旨とするので、あまり手は広げない。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	さまざまな記号	ことば、表情、身ぶり、字、文章、数字、術語、論理記号、交通標識、絵、音楽、建物、貨幣、仏像、などといった例をあげながら、広い範囲で人間と記号とが関係していることを論ずる。	吉田夏彦（東京工業大学教授）
2	自然の中の記号	遺伝、神経系、生態系、にみられる記号の例をあげる。その働きが、人間のつくりだした記号の働きと、どういうところで似ていて、どういうところで似てないか、また、自然の中に、記号をあやつる心のあるかないか、などについて話す。	同 上
3	機械と記号	昔の道具、機械の中にみられる、記号伝達のしくみ、コンピュータを代表とする、最近の情報処理機器での記号の役割について話し、自然の中の記号と比較する。機械になぞられて自然を理解しようとする考え方についても論ずる。	同 上
4	通 信	遠く隔れたところに情報を送る時の記号の使い方を、古代ののろしの例から、最近の人工衛星の例にまで触れながら話す。ラジオやテレビについても論ずる。	同 上
5	解 読	古代文字、暗号、の解読の例から始め、考古学、歴史学、国際交流などにも触れながら、記号を手がかりにしてその表現しているものをさぐろうとする努力のことを話す。	同 上
6	常識的なみとり図	前回までの話をふまえ、記号が送り手から受け手に届くまでの過程についての常識的なみとり図のようなことを話す。つまり、送り手の心から、何段階の、記号の翻訳を通じて受け手の心に、情報が届くとするみとり図についてである。	同 上
7	誤 解	前回のみとり図の問題点として、誤解のことを取り上げる。特に、落語の「蒟蒻問答」を例にして、誤解に気が付かないという場合のことを論ずる。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	有用な誤解	古典を読んで理解することが、その著者の意図どおりのものであるという保証はないが、だからといって古典を読むことが無意味だということにはならない。この例をひきながら、誤解の有用性とでもいうべきものについて話す。	吉田夏彦
9	コミュニケーション	前二回で論じた事項をふまえ、記号をとおしたコミニケーションとはどんなものかについて考える。伝承、儀礼といったものの意味、また、世代や性の違うものの間で話がかようとはどういうことか、などについても話す。	同上
10	記号のひとりだち	記号自体が重要なものとなっている例を、抽象美術、音楽、数学、数理科学、の例をひきながら話す。話好きな人間や一人で深く考えている人間も、案外、記号に魅せられているのかもしれないといったことについても論ずる。	同上
11	抽象と記号	普通名詞や数詞の働を緒として、抽象的なものを指す記号が、人間にとって、極めて重要なものであることを論ずる。特に、多くのものをまとめたものを、また一つのものとして扱う時の記号の働きをとりあげる。	同上
12	論理	記号表現の意味をできるだけはっきりさせようとする手続きとしての論理について述べる。論理は、根本概念、定義の手続き、根本前提論証の手続きを与えることによって提示される。	同上
13	複数のモデル	論理学の成果によって、蒟蒻問答がいわば人間の宿命であることがわかる。しかし、このことは、かえって、記号が有用であることを示してもいる。7回、8回で論じたことを、論理学的に見直す回となる。	同上
14	世界と知識	人間の知識は、記号によって体系化される。このことを、自然科学の例で考える。そうして、世界も、人間にとっては記号化されることを論ずる。自然科学とは正反対にみえる神秘主義も似たことをしているのではないかということを、象徴ということに触れて論ずる。	同上
15	まとめ	記号についてよく論ぜられるものでありながらここでは取り上げなかった問題のいくつかとその難点に軽く触れた上で今までの話を振り返り、また、今後更に勉強したい人はどうすればよいか、などということについて話す。	同上

＝ 構 造 と 解 釈 ＝

〔主任講師：渡辺二郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

「構造と解釈」という主題のもとでは、様々なことが考えられよう。しかし本講義は、「人間の探究」という専攻領域の中での「哲学」分野の専門講義である。したがって、問題は、「人間」のあり方の「構造」を哲学的に「解釈」して取り出すことにあると考えられる。むろん、東西の思想史すべてが、究極的には「人間とは何か」に答えようとした試みの全部であったと言えようが、ここではとくに、近現代のドイツ哲学の遺産を継承して、人間の「生と実存」の「構造」を「解釈」した卓越した諸成果を踏まえながら、人間の内面的な体験世界に光を当ててみたい。志向性、世界内存在、ニヒリズム、弁証法、自由などが、主要テーマとなろう。

主な項目

(1) 主題（生と実存）への現象学的反省という方法	志向性の構造と解釈（フッサールに即して）
(2) 意識の志向性の構造	
(3) 真理の概念	
(4) 世界内存在への着眼	世界内存在の構造と解釈（ハイデッガーに即して）
(5) 本来性と非本来性	
(6) 非力さの構造	
(7) ニヒリズムの問題現象と系譜	ニヒリズムの構造と解釈（ニーチェに即して）
(8) ニーチェの問題意識	
(9) 永遠回帰の嘔吐と肯定	
(10) 自己と世界と他者	弁証法の構造と解釈（ヘーゲルに即して）
(11) 他在における自己還帰	
(12) 他者と歴史	
(13) 自由と不自由	自由の構造と解釈（シェリングに即して）
(14) シェリングの自由論	
(15) ドイツ観念論と現代	

＝美術史と美術理論＝

〔主任講師：友部　直（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

今日、精神的な豊さを求めて、美術への関心が高まっている。この番組では、単なる美術の通史ではなく、トピックを含めて、映像的な魅力を通して、学習者を美術の世界へひきこむようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	美術とは	精神内容を、形・色・様式など、視覚の性質を通して、全体を包括する人間について語る。	友部　直 6月23日
2	日本 ～彫刻(1)天平彫刻～	写実的で荘厳な天平彫刻を通して、日本的な造形とは何かを考える。白鳳・平安前期にもふれる。	宮次男 7月21日
3	日本 ～彫刻(2)鎌倉彫刻～	運慶一派に代表される鎌倉彫刻を通して、写実性とたくましい表現力の豊かな美について語る。	〃
4	日本 ～絵画(1)仏画～	法隆寺・室生寺・醍醐寺・鳳凰堂などの仏画を通して、日本の仏画がどう展開したかを語る。	宮次男 8月4日
5	日本 ～絵画(2)絵巻物～	源氏・信貴山・伴大納言・鳥獣戯画の四大絵巻を中心に、絵巻物の魅力を語る。	〃
6	中国(1) ～皇帝の墓陵～	秦始皇帝の兵馬俑、馬王堆漢墓の副葬品を通して、秦漢時代の美術を見る。仰韶文化・殷周文化にもふれる。	東山健吾 8月11日
7	中国(2) ～石窟寺院～	ガンダーラ、西域より伝来した仏教美術の中国化を、主として石窟寺院に現存する仏像、彫刻を通して語る。（六朝・隋唐の美術）	東山健吾 8月18日

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中国 (3) ～水墨画と陶磁器～	水墨画と陶磁器をとおして、五代、宋、元、明、清の美術について語る。	東山健吾 8月25日
9	西洋 ～王墓と神殿～	古代エジプトやメソポタミアの神殿や墓を通して、古代芸術の精神を語る。	友部直 6月23日
10	西洋 ～神殿と劇場～	パルテノン神殿やコロッセウムを通して、人間を規範とした哲学と芸術を完成させた古代ギリシア・ローマの精神を語る。	友部直 9月8日
11	西洋	ロマネスクとゴシックを中心に、大聖堂を通して、キリスト教文化の精神の輝きについて語る。	〃
12	西洋 ～絵画～	人間の知性が芸術の源泉となり、神におきかわったルネサンスの精神を、レオナルド・ラファエロ・ミケランジェロを通して語る。	友部直 9月22日
13	西洋 ～ヨーロッパの宮殿～	17～18世紀にかけて、バロックからロココへの美術の変遷について語る。	〃
14	西洋 ～新しい視角～	市民社会の成長から、第2次大戦までの美術の変遷を、印象派と後期印象派を中心に語る。	友部直 10月6日
15	まとめ		〃

＝音楽史と音楽論＝

－日本の音楽に世界の音楽を投影する－

〔主任講師：柴田南雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

ＴＶの特性を生かし、教室で教科書をなぞるようにでなく、縄文・弥生の石笛や琴にはじまり、古典音楽から現代音楽まで、各地の遺跡のロケや邦楽・洋楽の実演もとりまぜ、しかも東西音楽の通史となるよう話を進める。同じ時代に、日本と中国、日本と西洋でどのような音楽が行なわれていたか。つねにそれらを比較考察しながら話をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	外来音楽と日本人	太古から今日まで、日本列島にはどのようなヒトが、どのような音楽を持ち込んだか。仏教伝来と共に入った音楽を消化する過程と、西洋文明とともに入った音楽を消化する過程との類似点や、日本と西洋の音楽史におけるサイクル現象の存在を指摘する。	柴田南雄（放送大学教授）
2	音楽文化の深層を探る	旧石器時代、欧州大陸にどんな楽器があったか。日本の縄文時代の石笛の出土品を紹介、その音色や用途から能楽の横笛との関連を考える。オリエント、エジプト、ギリシア、インド、中国には古代にどのような音楽があったか。	柴田南雄 笹森建英（弘前大学助教授）
3	祭祀の音楽	弥生時代。古墳時代（ほぼＢＣ300年～ＡＤ600年）の間に用いられた土笛、銅鐸、琴などの出土品と復元品を紹介、あわせて中国（儒教）や西欧（キリスト教）のこの時期の音楽の状況をしらべる。	同上
4	制度化と学習	飛鳥時代と奈良時代（６世紀～８世紀）における大陸からのさかんな音楽の輸入、とくに大宝律令で制度化された＜雅楽＞について。西欧ではグレゴリウス大法王による聖歌の集大成と、各地に聖歌学校の設立を見た。	柴田南雄 高橋大海（東京芸術大学助教授）
5	芸術音楽の胎動期	平安時代（９世紀～12世紀）には、楽制の改革により輸入音楽が定着し（雅楽）独自な曲種が発生（今様）しはじめる。西洋ではゴシック様式の大聖堂が多声音楽の発生源となる。	柴田南雄 桜井茂治（国立音楽大学教授）
6	諸国を行脚する音楽	鎌倉時代と南北朝（13世紀・14世紀）が対象で、平曲が起り田楽、猿楽の流行をみる。西欧でもトルバドゥールなど騎士階級からの吟遊歌人が起こる。また音楽理論の整備とともに、多声音楽がますます発展する。	柴田南雄 横道萬里雄（元東京芸術大学教授）
7	ルネサンス	室町時代、安土・桃山時代（15世紀・16世紀）に、世阿弥による能の確立、キリシタン音楽、三味線の琉球からの輸入を見る。西欧ではルネサンス多声声楽の花が咲き、遠近法に見合う機能和声の音感が確立する。	柴田南雄 戸口幸策（成城大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	キリシタン音楽	1549年ザビエルは日本上陸と共にミサの歌を信徒に歌わせた。数種の楽器も入り、少年使節は欧州各地でオルガンを演奏、帰って信長にきかせている。禁教徒も隠れキリシタンの祈り歌（オラッシャ）は今日まで伝承している。その実情を紹介する。	柴田南雄
9	東と西のバロック音楽	江戸時代の前半、元禄をへて享保の終り（1735年）頃までは上方が優勢で、箏曲、薩摩琵琶、三味線楽、長歌、尺八、義太夫節などが市民の生活に支えられて競い咲く。西欧ではバロック音楽の時代（1600年頃～1750年頃）。	同上 平野健次 （独協大学教授）
10	古典派・ロマン派	江戸時代の後半、宝暦から文化文政をへて幕末まで。前記に誕生した曲種の拡充が行われるが新味に乏しい。これに反し西洋では古典派・ロマン派音楽が西洋音楽を一気に頂点に導く。	柴田南雄
11	無からの出発と隆盛の絶頂	明治政府の音楽教育政策は西洋音楽を基本とした。伝統邦楽の活力は衰退しこれに反して西洋音楽はヴァーグナーの楽劇に代表される隆盛の極にあった。第1次大戦までを対象に考える。	同上
12	両大戦間の状況	日本ではようやく西洋音楽様式の創作がはじまる一方、邦楽はますます背景に後退する。西欧で「古典派・ロマン派」の最後の段階としての新古典主義（新即物主義）の時代を迎える。シェーンベルクの12音音楽もその思潮の中から生まれる。	同上
13	第2次大戦後の作曲界	第2次大戦を境に作曲の様式は大きく変わる。世界の諸民族の音楽をとり入れた、単純で即興的なものからの再出発。邦楽器への再認識もその一環である。電気音響装置やコンピュータの作曲への導入。	同上
14	第2次大戦後の演奏界	現代は作曲不振、演奏上位の時代である。また作曲の時代様式と演奏の時代様式の間にはあきらかに平行関係が認められる。20世紀初頭に遡るレコード録音から典型的な事例をあげて比較する。	柴田南雄 横道萬里雄 （元東京芸術大学教授）
15	未来の展望	今日、日本人はどのような音楽を好んでいるか。人々は何を音楽に求めているか。今、音楽とは何か。これからの音楽はどのような形をとるであろうか。ビートリーの諸芸術循環説などを紹介する。	柴田南雄

＝文芸史と文芸理論＝

〔主任講師：轡田　収（学習院大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの古典古代から近代に至る文学の生産とそれに対する理論ないし学的反省との関係を捉えていく。この視点をとると、時代により、言語圏ないしは国により、実践と理論とは独特な相互関係をもつことが明らかになろう。それによって、一国の文学史のみを見ることではえられない各言語文化の特異性、浮き彫りにされよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	実践と理論	ヨーロッパにおける文芸の歴史と理論との関係はどのように捉えられるか。	三島憲一（東京大学助教授）
2	古典古代(1) ―ギリシャ―	ギリシァ悲劇とアリストテレスの語学。	岡道男（京都大学教授）
3	古典古代(2) ―ラテン―	ラテン的世界の始まり。 ホラーティウスの語学。 クウィンティリアーヌスの修辞学。	同上
4	中世(1) ―ラテン的世界としての中世―	ラテン的世界としての中世。	南大路振一（大阪市立大学教授）
5	中世(2) ―フランス―	中世の文学と理論。フランスの場合。	新倉俊一（東京大学助教授）
6	中世(3) ―ドイツ秘められた詩学―	中世の文学と理論。ドイツの場合。	平尾浩三（東京大学教授）
7	中世(4) ―イギリス―	中世の文学と理論。イギリスの場合。	安東伸介（慶応義塾大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	俗語文学の栄光 —イタリア—	ダンテの『神曲』。イタリア・ルネサンス文学とその文芸観 —「国民文学」の誕生。	河島英昭 （東京外語大学教授）
9	近代文学への道(1) —フランス—	フランス16・17世紀の文学と文学理論。 デュ・ベレェ『フランス語の擁護と顕揚』から。	成瀬駒男 （国学院大学教授）
10	近代文学への道(2) —イギリス—	『詩の擁護』（フィリップ・シドニィ）はなぜ必要だったか。 イギリス・エリザベス朝の文学と文学観。	児玉久雄 （学習院大学教授）
11	近代文学への道(3) —ドイツ—	遅れてきた国民ドイツ17世紀の詩学と文学。	轡田収
12	小説の興隆	理論を内包した文芸ジャンル。 楽しませ、ためになり、さらに社会批判も行なう小説と近代市民社会との関係。	轡田収 （放送大学講師）
13	文学と天才	市民社会と天才（ジェニー）の文学。 想像力と創造性の美学。	大貫敦子 （放送大学助教授）
14	文学と国民意識 —ドイツを例に—	文化的民族的アイデンティティを支える文学の役割。 市民社会における文学の受容と文学についての学問の成立。	轡田収
15	社会と文学の自律性	文学における「近代」の問題。 アヴァンギャルド以後の理論と実践。	三島憲一

民　族　音　楽　(R)

〔主任講師：柴田南雄（放送大学教授）
　　徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

民族音楽学の近年の研究成果を踏まえ、ヒトと音楽のかかわりから生じる根源的な諸問題を考える。また、それらの問題と関連する諸民族の音楽の　　なるべく　富に紹介するが、たんなる鑑賞の素材としてではなく、それが属する文化の文脈の中でいかなる意味を持っているかを明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	総　　論	本講義に対する主任講師の基本的な考え方を明明らかにする。民族音楽研究の歴史と現状に触れ、今後の各回のテーマの概要を説明する。	柴田南雄（放送大学教授） 徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）
2	音楽と呪術 アフリカ	術と音楽のかかわりは古く、また研究対象としても、早くからとり上げられていた。諸民族のシャーマンリズムと結びついているが、ここでは主としてアフリカを例にとることとする。	イエロース（国立民族学博物館助教授）
3	音楽と神話 パプア・ニューギニア	例えば、神話に登場する鳥の鳴声に範をとった旋律が、日常生活においてどのような役割を果すか、といった問題をいとぐちに、音楽と象徴、音楽と神話の関係を扱う。	山田陽一（島根大学専任講師）
4	音楽と構造 トルコ・イラン・ギリシャ	諸民族の音楽の中には、複雑精緻な音楽理論の体系が成立しているものがあり、これについて適当な実例を引用しつつ述べる。	植元一（東京芸術大学助教授）
5	音楽と文化変容 シルクロード	音楽が諸国を流転する間に、異文化と出会い、さまざまな変容が生じる問題を主としてシルクロードを例に扱う。なお、声と楽器の関係にかんしては第6回のテーマに連続する。	同　　上
6	音楽と楽器 東南アジア	ハードウェアたる楽器と諸民族およびその音楽との関連を、フィリピンはじめ東南アジア各地を例にして扱う。	山口　修（大阪大学助教授）
7	音楽と祭り 中国・日本	日本・中国（華僑を含む）における祭りの特性を論じ、その音楽的表現を通じて東洋音楽の本質を追求する。	上参郷祐康（東京芸術大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	音楽と演劇 インド、インドネシア	ラーマヤナ劇その他を主な例にとり上げ、音楽における演劇の意味を追究する。	小西正捷 （立教大学教授）
9	音楽とパフォーマンス インドネシア、日本	音楽とそれを演奏する人間、およびその集団について、身体運動ないし人間相互の関係など、そこに生起するさまざまな問題を考える。	中川　眞 （京都市立芸術大学講師）
10	音楽と社会 イスラエル、アラブ	ユダヤ人社会における音楽の役割を明らかにし、その宗教生活における音楽の意義とともに考える。アラブ世界との対比にも触れる。	水野信男 （兵庫教育大学教授）
11	音楽と伝承 ヨーロッパ、日本	伝象、学習に付帯して生起する広汎な問題を通じて音楽の本質解明を試みる。音楽と言語の微妙なかかわりについても論じる。	徳丸吉彦 （お茶の水女子大学教授）
12	音楽と記録 アイヌ、エスキモー、マジャール	フィールドワークの意義と実際に触れ、あわせてその歴史的経過に触れる。（ピウスツキのカラフト・アイヌ古語の録音、バルトークによるマジャール（ハンガリー）民謡の録音と採譜などの先駆的な例をも紹介する。	谷本一之 （北海道教育大学教授）
13	音楽と都市文化 南北アメリカ	都市の大衆が、主としてマス・メディアを通して受容するポピュラー音楽の世界について論じる。	鈴木道子 （国立音楽大学非常勤講師）
14	音楽と技術	電子音響機器（レコード、ラジオ、ＴＶなど）が諸民族の音楽をどのように　したか、将来はどのように変わることが予測されるかを論じる。	柴田南雄 （放送大学教授）
15	音楽と世界観	２０世紀には世界観の表明としての音楽が芸術音楽にも、ポピュラー音楽、民族音楽にも見られる。	同　上

＝ 日 本 言 語 文 化 論 ＝

〔主任講師：古田東朔（放送大学教授）〕

全体のねらい

言語文化というとき、種々の扱い方が考えられよう。しかし、ここでは、日本語自体を対象とし、特に近代語が種々の作品とかかわりあいながら、どのように形成されてきたかをながめていく。文学作品はもちろん、論説・翻訳・読本などを通して、話しことば・書きことばの問題点とその形成過程について取りあげる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の言語文化	全体の序説。明治期における書きことば（漢文訓読調・和文調）、話しことば（標準語・方言）、言文一致等々の問題が、政治・文化上の動きに応じて、どのように意識され、具体化されていったか。それらについての概観を行う。	古田東朔（放送大学教授）
2	古代語と近代語	まず日本語の歴史について大きく見ておく。古代語と近代語に大きく二分されるが、それは係り結びの有無、二段活用の一段化に認められる、この外、音韻・敬語などの違いについても、合せて見ておく。	古田東朔 築島裕（東京大学教授） 坂梨隆三（東京大学助教授）
3	江戸語から東京語へ	江戸時代のことばのうち、上方を中心とするものを上方語、江戸を中心とするものを江戸語ということがある。特に後期の江戸語から明治期の東京語に至る過程、特色について見る。現代のことばの基礎となったものだからである。	古田東朔
4	「国語」意識の成立	日本の近代国家としての成立は、必然的に「国語」の意識を確立させるようになった。話しことば、書きことばにおいて、問題として考えられたことは、どのようなものであったか。それらの数々について取りあげる。	同上
5	方言と標準語・共通語(1)	明治以後、全国に共通に理解される標準的なことばとは、どのような理由から考えられたものであったか。また問題点はどこにあったか。江戸末期からの話しことばの実態と、その際の主張、政策等について、まずながめておく。	同上
6	方言と標準語・共通語(2)	前回のあとを受け、特に国語調査委員会による全国の音韻・口語法の調査（明治36）と、その影響について見る。その結果が口語の標準となる『口語法』編集に活用され、他方、方言研究の進展をうながしてきたことについて話し合う。	古田東朔 徳川宗賢（大阪大学教授）
7	口語と文語	「口語」といい、「文語」という。しかし、それはどのようなものをさしていうのか。外国語との接触による日本語文法の再検討から始まり、やがて「文語」と「口語」という大きい枠が定められていく過程を見ていく。	古田東朔

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	言文一致の動き(1)	話しことばと書きことばを一致させようとする「言文一致」の運動は、明治になって盛んになる。江戸期の作品において、話しことばはどのように扱われていたか、幕末期から明治初期にかけての言文一致の主張や試みはどうであったのか。	古田東朔
9	言文一致の動き(2)	「言文一致」は小説だけに限られるものではない。前回を受け、三遊亭円朝の人情噺が速記により活字化され、『浮雲』に影響を及ぼした過程、その他の小説における試み、加えて小学校読本の談話体の文章などについて見る。	同上
10	漢語・文語調の位置(1)	文語調は、長く書きことばにおいて正式のものとされてきた。それは、どのように用いられてきたか。まず、漢語の使用についてながめておき、ついで江戸期から明治初期の小説・論説・翻訳など、漢文訓読調の文章を見る。	同上
11	漢語・文語調の位置(2)	前回のあとを受け、明治期の漢文訓読調・和文調・その他文語調の小説のいくつかについてながめる。そして、当時文語調の占めていた位置について考えるとともに、口語と文語の文章の違い、以後の文章の大きい傾向についても見る。	同上
12	訳語による新しい世界	西欧との交渉、理解のため、訳語の試みがお互いになされてきた。室町期・江戸期・明治前期において、和語・漢語による訳語がどのように用いられ、相互の文化が理解され、新しい世界が紹介されていったか話し合う。	古田東朔 進藤咲子 （東京女子大学教授） 鈴木英夫 （茨城大学教授）
13	言葉の登録	近代を切り開いていった言葉の数々は登録され、位置づけられていく。従来からのもの、新しい訳語なども含めた和語・漢語その他が、どういう観点からまとめられていったか。三つの辞書を取りあげ、その苦心のあとをたどる。	古田東朔
14	近代の敬語	対人関係の意識が、ことばにどうあらわれるか。かつての身分・地位によるものから人格の尊重へ、丁寧表現の増加へという傾向が見られるが、それらの主張や、実際の例、調査結果などについて見ていく。	同上
15	言語文化のみかた	これまでのまとめを行う。まず、ことば自体についてこれまでの資料による扱いについてながめ、ついで階層・地域・教育・男女差などによるみかた、さらに異文化を理解するためのことばの働きなどについて見ていく。	同上

＝和　文　古　典　Ⅰ＝

―万　葉　の　世　界―

〔主任講師：稲岡耕二（東京大学教授）〕

全体のねらい

万葉集の広さ・豊かさは、口誦の歌謡から記載の文学へ転化した前後の、さまざまな歌のすがたを記しとどめていることに因る。歌謡の音楽性や集団性、作者未詳歌の等質的類歌性を基盤としながら、長歌・短歌・旋頭歌など多様な歌体を利用して、個性的文学へ、どのように道が開かれて行ったかを探る。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	うたと文字との交渉	文字に記されることによって、歌はどう変らざるをえなかったか。諸外国の例をも参照しつつわが国におけるうたと文字との交渉の歴史を考える。	稲岡耕二（東京大学教授）
2	初期万葉の相聞歌 ―その源流―	鏡王女・藤原鎌足・久米禅師・石川郎女などの贈答歌の特徴を理解するとともに、その源流を考える。	同　上
3	国見歌の表現	明天皇御製と伝えられる歌および記紀の国讃め歌・国見歌を読み、その表現が時代とともにどう変っていったかを考える。	稲岡耕二 神野志隆光（名古屋大学助教授）
4	口誦の歌人・額田王	近江遷都の時の歌や熱田港出航の時の歌の性格を理解するとともに額田王の歌人としての性格を考える。	稲岡耕二
5	天武朝と人麻呂歌集	謎の多い人麻呂歌集および人麻呂の生涯について、さまざまな問題点を探る。	同　上
6	人麻呂と中国文学	柿本人麻呂の表現に中国文学の影響がどのようにあらわれているかを探る。	同　上
7	私的挽歌の創造	天智朝の挽歌とくらべて、人麻呂の時代には新しい性格の挽歌が作られるようになった。それは、どのようなものでどこに文学としての新しさがあったか。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	反歌の歴史	反歌は、はじめどのような形であったのだろうか。反歌史を整理しつつ万葉集における反歌の魅力と、史的展開を理解する。	稲岡耕二 神野志隆光
9	旅人と憶良 （その一）	中国文学の影響が深まるとともに、思想や趣味の上にも個性的分化の傾向が強まった。梅花歌や松浦河の歌などをとおして、旅人と憶良の対蹠的な性格を理解する。	稲岡耕二
10	旅人と憶良 （その二）	旅人と讃酒歌と憶良の志賀白水郎歌の構造を吟味し、その成り立ちを考える。	同上
11	赤人と自然	赤人の表現の特徴を検討し、作者の性格および叙景歌を生み出した時代的背景などとの関連を考える。	同上
12	伝説歌人・ 高橋人麻呂	伝説歌とは何か、また、虫麻呂はなぜ伝説を歌ったのかなど、虫麻呂をめぐる諸問題を考える。	同上
13	東歌・防人歌と その性格	東歌は、はたして民謡なのか、防人歌はどのような場で作られ、蒐集されたのかなど、東歌・防人歌の謎を探る。	稲岡耕二 遠藤宏 （成蹊大学教授）
14	作者未詳歌の世界	大量の作者未詳歌に見られる豊富な類歌性は何を意味するのか。万葉集の底辺を形づくる等質的な共感の世界を探る。	同上
15	万葉の終焉 ―家持の孤独―	家持秀歌の特徴と、末期万葉的な性格を理解する。	稲岡耕二

＝ 和 文 古 典 Ⅱ ＝

－ 王 朝 の 文 学 －

〔主任講師：秋山　虔（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

400年にわたる平安王朝の文学の主たる担い手は平安京の貴族たちであったが、彼らによって創出された諸形態の文学の高度の達成は、後世に規範的意味をもちつづけ、日本的美意識の源流となった。そうした王朝文学の形成・展開の姿をさまざまの視角から追求する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	王朝文学の始発	平安遷都にはじまるこの時代の文化はまず大々的な唐風謳歌に特徴づけられるが、そのことの意味と、その唐風がしだいに和様化していく過程を説く。	秋山　虔（東京女子大学教授）
2	『古今集』とその時代	万葉文学と様式を一変した古今集文学形成の過程を、その背景の考察とともに日本文化の自立の様相として促える。	久保田　淳（東京大学教授）
3	物語文学の誕生－『竹取物語』と『伊勢物語』－	口誦のモノガタリから仮名散文の虚構文学としての物語へ。その経過を探りつつ物語文学の本質は何かを考える。	秋山　虔
4	日記文学の成立と展開－『土佐日記』と『蜻蛉日記』－	物語文学と並んで仮名散文の日記文学の成立してくる事情を、和歌との関わりその他の要因から考えてみる。また日記文学によって、いかに人間の内面世界が掘り起こされるに至ったかを明らかにする。	同　上
5	虚構物語の成熟と基盤	当時の物語の制作・享受の実情を説明し、現存する長篇物語の宇津保物語の成立の意義を考える。	同　上
6	『後撰集』、『拾遺集』の位置	漢詩に代って公的文学の座を獲得した和歌は、貴族たちの私的生活感情を託す表現手段としてどのように機能したか。また歌物語との関わりあいや後代に及ぼした影響なども考えてみる。	久保田　淳
7	清少納言と『枕草子』	日本人の美意識に規範的意義をもつ枕草子の特質と作者清少納言の個性を、政治的文化的背景のうえに考察する。	秋山　虔

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	紫式部と『源氏物語』の世界㈠	源氏物語の作者紫式部の人間形成と源氏物語創作の意義を考え、三部作と考えられる源氏物語の第一部世界の主題や構造を説明する。	秋山　虔
9	紫式部と『源氏物語』の世界㈡	源氏物語のⅡ・Ⅲ部の世界の推移、主題の展開の様相を説明し、物語文学としての独自の達成についてその意義を考える。	同　上
10	『源氏物語』以後	源氏物語がその成立の時期から後代にかけてどのような影響を及ぼしたか、更級日記の作者菅原孝標女の源氏享受をはじめ、長短篇の物語群の様相をながめてみる。	同　上
11	女流歌人と『後拾遺集』	和泉式部・赤染衛門などの女流歌人の輩出した後宮文学の開花を受けて撰ばれた後拾遺集の時代背景を明らかにし、同集の成立が王朝和歌史の屈折点に位置する理由を明らかにする。	久保田　淳
12	和歌文学の革新－『金葉』『詞花』『千載』の時代－	古代王朝文化とは矛盾するものをはらむ院政文化の性格と浄土教の浸透が和歌文学にいかなる影響を及ぼしたか、歌人層の変化、詠歌の場の変質などの諸相を追求する。	同　上
13	歴史物語の諸相－『栄花物語』と『大鏡』－	歴史的事実を素材とする、いわゆる歴史物語栄花物語・大鏡などの成立の意義を考え、それぞれに描き出される世界について説明を加える。	多田一臣（千葉大学助教授）
14	説話文学の誕生－『日本霊異記』－	説話文学の世界は、貴族を中心とする王朝の文学のいわば周縁に位置している。最古の説話集である日本霊異記を取りあげながら、説話文学誕生の史的意義を考える。	同　上
15	『今昔物語集』の世界	今昔物語の厖大な説話群を統一するものは何であったのか。説話内容の分析を通じて、その世界認識のありかたについて考える。	同　上

和　文　古　典　Ⅲ

〔主任講師：久保田　淳（東京大学教授）〕

全体のねらい

四百年に及ぶ中世文学の展開を、各時期の政治的社会的事件、文化思潮などと関連づけながら、具体的作家や作品に即して、明確に跡づける。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	王朝から中世へ	中世文学はいつから始まるか、それは保元の乱、源平の動乱など、政治的社会的事件とどのように関わるものか、それは王朝文学とどのように異ったものであるかという問題を考察する。	久保田　淳（東京大学文学部教授）
2	新古今時代　Ⅰ	いわゆる新古今時代の文学史的概念について説明し、「新古今和歌集」の成立、その特色、後代への影響などを考察する。	同　上
3	新古今時代　Ⅱ	「新古今集」の代表的歌人である西行・藤原定家、同集の影響下に成長した源実朝などの文学活動について述べ、さらにほぼ同時期に信仰の世界で大きな足跡を残した法然、親鸞、明恵、道元などの法語文学についても言及する。	同　上
4	鴨長明とその周辺	「方丈記」を中心に、「発心集」「無名抄」など、鴨長明の多面的な作家活動について述べ、長明が影響を受けたと相像される平康頼の「宝物集」、また影響を及ぼした慶政の「閑居友」などにも論及する。	三　木　紀　人（お茶の水女子大学学教育学部教授）
5	軍記物語の世界Ⅰ	「将門記」「陸奥話記」など、初期軍記の問題を概説したのち、「保元物語」「平治物語」について論ずる。	栃　木　孝　雄（千葉大学文学部教授）
6	軍記物語の世界Ⅱ	「平家物語」の世界、その　立、語り物としてまた読み物としてのその　の問題などを考察し、「承久記」、史論書「　抄」「六代勝事記」にも言及する。	同　上 同　上
7	説　話　の　時　代	平安後期から中世に及ぶいわゆる説　時代を概観し、「宇治拾遺物語」を中心に、「古事記」「十訓抄」「古今著聞集」「沙石集」「三国伝記」など、説話集の世界を説き明かす。	三　木　紀　人

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	京と鎌倉	鎌倉幕府の開設に伴って生じた京都と鎌倉との交流が文学にどのような影響を及ぼしたかという問題を考え、「海道記」「東　紀行」「うたたね」「十六夜日記」などの記行文学、さらに「とはずがたり」その他の女房日記についてその中世記特色を論ずる。	三角洋一（東京大学教養学部・助教授）
9	南北朝動乱期の文学	大覚寺　・持明院　の両　送立の経緯を概叙し、「太平記」を中心として、「増鏡」「神皇正統記」などの歴史文学、「玉葉和歌集」「風雅和歌集」「新葉和歌集」などにも論及する。	久保田　淳
10	兼好とその前後	「従然草」の著者であり、二条為世の和歌四天王の一人でもある尊好の文学を中心に、彼に影響を及ぼした「一言芳談」などの法語文学、ほぼ同時代を生きた二条良基の文学活動などについて考察する。	三木紀人
11	中世芸能の世界Ⅰ	王朝から続いている今様雑　の文学的所産、「梁塵秘抄」、　年、早歌などから、小歌時代の「閑吟集」「宗歌小歌集」、その他田歌など、歌謡系列の文学を中心に述べる。	橋本朝生（山梨大学教育学部・助教授）
12	中世芸能の世界Ⅱ	能・狂言・幸若など、演劇系列の芸能の文学としての特色を述べる。放送に際しては、テープによって若干実演を聞かせる。	同　上
13	物語の変	「松浦宮物語」「我身にたどる姫君」など中世前半の擬古物語が、中世後半に至って次第に御伽草子へと変　してゆく過程を辿る。「無名草子」「風葉和歌集」「義経記」「曽我物語」などにも言及する。	三角洋一
14	中世の心と言葉	国語の変化が中世文学の展開とどのように関るかを、多くの事例から探る。とくに室町時代の和歌・連歌・五山文学・抄物・キリシタン文学などの意義について述べる。	山口明穂（東京大学文学部・教授）
15	中世から近世へ	俳諧の連歌・初期狂歌・古浄瑠璃・説経・隆小歌などを取り上げつつ、戦国時代から安土桃山時代を通じて、中世の文学はどのようにして近世的なものへと移り変っていったかを辿づける。	久保田　淳

＝ 和　文　古　典　Ⅳ ＝

― 近世の文学 ―

〔担当講師：清登典子（成蹊大学非常勤講師）〕

全体のねらい

庶民文学、町人文学といわれる日本の近世文学の成立、および展開の様相を、代表的な作家、作品に目を向けながら跡付け、わが国の近世文学の特質につき考察してゆく。

主な項目

(1) 近世文学の胎動、中世から近世へ

(2) 揺籃期の近世文学Ⅰ

(3) 揺籃期の近世文学Ⅱ

(4) 揺籃期の近世文学Ⅲ

(5) 元禄期の文学Ⅰ

(6) 元禄期の文学Ⅱ

(7) 元禄期の文学Ⅲ

(8) 元禄期の文学Ⅳ

(9) 天明期の文学Ⅰ

(10) 天明期の文学Ⅱ

(11) 天明期の文学Ⅲ

(12) 文化文政期の文学Ⅰ

(13) 文化文政期の文学Ⅱ

(14) 文化文政期の文学Ⅲ

(15) 近世文学の特質

漢　文　古　典　I　（TV）

〔主任講師：頼　惟勤（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

日本において作られた漢詩・漢文について、江戸後半期を取り上げて諸作品を講読し、関連事項に及ぶ。これによって、日本漢学の日本文化において占める役割りが若干なりとも解明できることを目指すものである。各回とも講義の糸口を原則として頼春水『師友志』から取り、兼ねてその人の諸作品と関連分野とに及ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	柴野栗山と素読吟味	柴野栗山（1736 － 1807）江戸昌平　の儒官。寛政の学制改革に当った。ここに至るまでに、漢籍の訓読の普及があったことを見逃がすことはできない。五山以後、江戸期の訓点・訓法の二三の事例を挙げる。	
2	尾藤二洲と白楽天の詩	尾藤二洲（1747 － 1813）昌平　の儒官。晩年に白楽天の詩を好み、同僚の古賀精里との間で応酬した。その間の経緯を概観する。	
3	古賀精里と通信使	古賀精里（1750 － 1817）昌平　の儒官、肥前・佐賀の出身。曽て林述　に従い、対島に赴き、朝鮮通信使に応接した。九州は漢学にとっての先進地域で、著名な儒教者が多く、また長崎には唐話（中国語）に熟達した人びとがいた。	
4	岡田寒泉と実学の実践	岡田寒泉（1740 － 1816）昌平　の儒官。のち関東の諸郡に出て代官となった。実学とは本来、実践躬行の学問の意味で、矢子学がその代表である。寒泉の学問がすなわちそれである。	
5	服部栗斎と江戸市井の漢学	服部栗　（1736 － 1800）江戸の麹湲書院の主。麹湲書院そのものは純粋に市井の漢学塾ではないが、そのような塾での基本的な教養がどのようにして養われて行ったかを取り上げる。	
6	若槻幾　と京儒	若槻幾　（1744 － 1826）京の聖護院村に住み、その学行が幕府当局に認められて表彰されたこともあったという。	
7	中井竹山と懐徳堂	中井竹山（1730 － 1804）大坂の懐徳堂の主。弟の履軒も著名な学者で、この兄弟の学問は広般な影響を世に与えた。	

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	葛子琴と混沌詩社	葛子琴（1739 － 1784）大坂の医にして且つ詩人。片山北海が主催する混純詩社の中で、その才名を称せられた。	
9	趙陶　と黄檗僧	趙陶　（1713 － 1786）長崎に生れる。父・は唐人。黄檗僧となり、還俗後、江戸・大坂・堺に転住。兼ねて全国を旅行した。僧侶の漢学に対する寄与は甚だ大きい。また道教的なものも案外に日本文化の中に侵透しているといわれる。	
10	飯岡義　と家庭教育	飯岡義　（1716 － 1789）大坂の儒医。曽て石門心学（大坂の尊性堂）を修めた。その子女に対する教訓は極めて熱心であった。	
11	菅茶山とその周辺	菅茶山（1748 － 1827）備後・神辺の詩人。京あるいは江戸において儒者文人と広く交った。詩人であると同時に、『福山志料』の纂修に関予し、随筆の分野でも著々である。	
12	高芙蓉と書画　刻	高芙蓉（1722 － 1784）江戸時代の　刻を芸術的水準にまで高めた。このころ漢の金印が出土したこともあって、漢の方寸印に倣った印が作られた。池大雅・福原五岳らのことにも言及する。	
13	平賀中南と赤穂義士	平賀中南（1722 － 1792）安芸出身の儒者。大潮に学び、のち京坂に住んだ。『天野屋利兵衛伝』の刊行にちなみ、刻書のことにも言及する。	
14	長久保赤水と地理天文	長久保赤水（1717 － 1801）水戸藩彰考館の学者。『大日本史』の地理志を纂修した。伊能忠敬の測量・麻田剛立の天測も注目すべき業績であった。	
15	細井平洲と親藩の学問	細井平洲（1728 － 1801）尾張藩明倫堂督学。以上のほか紀州藩の学者としては高瀬学山・川合春川、詩人としては祇園南海を挙げる。支藩西條候の儒臣・山井崑　は特に著名である。	

漢　文　古　典　Ⅱ

――中国小説史への視点――

〔主任講師：大塚秀高（放送大学助教授）〕

全体のねらい

中国は三千年に及ぶ悠久の歴史を持っており、小説の歴史もこれに応じて長い。しかし同じ漢字を使いながら、小説という言葉の意味内容は時に応じて違いを見せる。この小説概念の変遷を、小説がそれに立脚した物語の伝統に目配りしつつ、春秋戦国の時代から清代まで追跡し、かつ中国小説の日本への影響についても触れたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	小説と物語 史家と方士たち	萬言と小説　小説と小説家　史官と方士　史記と漢書　鴻門の会　陸賈と楚漢春秋　史書と演義小説　春秋と国語　方士の語った小説	大塚秀高 （放送大学助教授）
2	志怪から伝奇へ 史家と読者に於ける変化	志怪と五行・　緯思想　類書と古小説鈎沈　捜神記と干宝　曹丕と劉義慶　サロン文人と物語の伝統　伝寄の誕生　古鏡記と遊仙窟　物語の場	同　上
3	仏教と説教 応験記と遊行僧	応験記の成立　応験記的性格の志怪　金剛経応験記の流行　唐臨と冥報記　宋・明に於ける金剛経応験記　洪邁と夷堅志　鬼国母　文芸の担い手としての僧侶　転変と転経　説経と文芸	同　上
4	二都の夢 新たな「小説」の誕生	志怪にみる仏教の影響　六朝貴族社会の崩壊　俗講と市人小説　京と臨安　東京夢華録と夢粱録　瓦子と勾欄　説話四家　講史書と「小説」緑　新話と醉翁談録	同　上
5	神話の没落 から五通へ	霊怪の門庭　汀州と山魈　独足の山魈　山海経図　夔一足鼛陽・　巨人　山都と猿　畢方・水客・その他　淫神五通　財神五通	同　上
6	類書から通俗類書へ 伝奇小説の変遷 そ　の　一	種本と話本　文言の伝奇と白話の伝奇　宋代の小説集　二つの醉翁談録　鴛鴦灯と紅　密約張生負李氏娘　類書と通俗類書　明代後期の通俗類書　伝奇小説の長篇化	同　上
7	短篇小説だった水滸伝 長篇小説の育たぬわけ	水滸伝成立史　梁山泊と百八人の好漢　宣和遺事　水滸の盗賊たち　好漢の銘々伝　水滸伝と「小説」　梁山に上れなかった好漢たち　白話小説と作者	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	法家と小説家の間 公案概念の変遷	酔翁談録の公案　明末の公案小説集　判決から捜査へ　疑獄集と折獄亀鑑　棠院比事と棠院比事物語　捕物帳と余象斗　名裁判官物語　万歴時代	大塚秀高 （放送大学助教授）
9	包龍図の登場 講唱文芸のとりで	民衆に愛された包公　包公の実像と虚像　包公を巡る民間信仰　包公説話と「小説」　有名無名の判官たち、宝をめぐる物語　説唱詞話から説書へ　公案小説から侠義小説へ	同　上
10	幽霊さまざま 伝奇小説の変遷 そ の 二	元末明初　剪灯二話愛愛しの幽霊　祟る幽霊　王魁負心と灰骨匣　自刎と怨念　彷徨える幽霊　取殺す論理と取り締まる論理　鴛湖誌余雪窓談異と幽怪詩譚	同　上
11	話本から小説へ 輯佚と創作	洪　の清平山堂　熊龍峯四種小説と通俗類書　発跡変泰話本と紅白蜘蛛記記　三言百二十篇の素性　馮夢龍　柳七官人像の変化	同　上
12	伝奇から小説へ 貞潔と女性の運命	劉小官雌雄兄弟　男装の目的　女性の孝と貞　劉方三義伝　梁山伯と祝英台　心堅金石伝　霞箋記に於ける改悪　嫌疑と恥辱	同　上
13	白蛇伝の登場 民衆のはぐくむもの	馮夢龍の白蛇伝　西湖の怪の物語　白蛇の物語　嫉妬と蛇　白蛇伝の成立　白娘子の解放	同　上
14	金瓶梅から紅楼夢へ 才子佳人小説と佳人の男装	中国小説史上の才子佳人小説　長篇伝奇との関係　才子佳人小説と金瓶梅　金瓶梅と四大小説　万暦の気風　春秋配と呉江雪　佳人の男装　風流配と鴛鴦譜　紅楼夢　文康の児女英雄伝	同　上
15	さまざまな小説 清末小説に至る流れ	杜騙新書　照世杯　応挙を題材とする小説　受験百態　儒林外史　李宝嘉の官場現形記　劉の老残遊記　李漁の小説　清代小説の多様性	同　上

近　代　文　芸　I

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代文学における成熟期－１９１０年代－の作家（漱石・鷗外・荷風・谷崎・志賀・有島・藤村・秋声・芥川・啄木ら）と時代との関連、主要作品の構造と分析を行なう。１９１０年代の自然主義・反自然主義との対応、作家の芸術と実生活のかかわりを把握。また「白樺」「早稲田文学」「新思潮」「青華昏」など主要雑誌の検討。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「白樺」の出発 －大正文学の－ 発　端　(1)	武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らの「白樺」の前史と「白樺」初期の特色の究明。明治の「公」に対する大正の「私」の意識。文学と美術との接点。志賀の初期の日記・ノートなどの検討。「お目出度さん」と「かんかん虫」と「網走まで」の作品分析。	
2	「三田文学」をめぐって －大正文学の 発　端　(2)	「三日文学」創刊号における永井荷風の「紅茶の後」の魅力と荷風の文学意識の検討。大逆事件における荷風を中心とする「三田文学」「スバル」関係者（佐藤春夫ら）の反応。「早稲田文学」との対比。パンの会の動向（これも美術と文学とが関連）。	
3	谷崎潤一郎の出現 －大正文学の－ 発　端　(3)	谷崎潤一郎の最初期の戯曲と小説の分析、「刺青」と「秘密」などが中心。潤一郎と漱石とのかかわり－とくに「門」をめぐって－。 「白樺」との差（「白樺」の場合は漱石では「それから」が軸となる）	
4	啄木と大逆事件 －明治の終篇－	啄木の代表的日記「ローマ字日記」の分析。「九月の夜の不平」から「　子と口笛」に至る啄木の大逆事件への反応の点検。白秋の「思ひ出」との批較。鷗外の大逆事件への反応との比較。啄木と現代（寺山修司などを含めて）。	
5	漱石文学の魅力 －「夢十夜」「それから」「門」を中心に－	１９１０年前後の中期の漱石の作品分析。とくに「夢十夜」における作品の意味づけ。漱石とその門下生及び後進の文学者との関連、漱石の初期作品（「　　」や「草枕」など）と中期作品の内容と文体の相違。	
6	漱石文学の魅力 －「道草」と「明暗」を中心に－	漱石の晩年の二つの長編み説をこまかに分析し、一般によく知られている他の　作品よりさらに意味があることに力点をおく。	
7	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	「暗夜行路」のプラスの評価とマイナスの評価をめぐって、作品の魅力をさらに精細に検討する。最初は「序詞」と前篇の構造、伏線、文体の面からはじめる。その前身である草稿の類（私小説「時任議作」といわれているもの）も検討の材料に用いる。	

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	後篇の展開と「大山」体験の意味をさぐる。数多くの志賀研究史とつきあわせ、この作品の影響と受容の歴史もあわせて考える。	
9	「或る女」の検討－有島文学の特色－	「暗夜行路」と対比しつつ、有島の「或る女」の構造を分析する。前後篇をあわせて行ない、この作品の時代背学となった明治３０年代についても考えていく。また「白樺」に連載した前篇にあたる「或る女のグリングス」との対比も行なう。	
10	藤村と秋声－「家」と「あられ」をめぐって	第二次「早稲田文学」の特色を検討しつつ、「家」の構造と「あらくれ」（「新世帯」など他の作品も含む）の構造を比較検討する。自然主義文学の特質、とくにその執拗なねばり強い人生とのかかわりに力点をおく。	
11	花袋と白鳥－「田舎教師」と「何処へ」をめぐって	花袋における人生の苦劇と「田舎教師」との関連。回想集「東京の三十年」も材料に用いる。白鳥の人生観と「何処へ」との関連。明治３０年代の青年と４０年代の青年の意識の差に注目。白鳥の回想集「自然主義文学盛衰史」も材料に用いる。	
12	文学史における大正５年（1916）の意味－近代と現代の接点－	鷗外の晩年の歴史小説の検討。ついで宮嶋貞夫の「抗夫」、中條百合子の「貧しき人々の群」をあわせ眺め、白樺派、　美派の全盛、自然主義文学者の執拗な奮　をも視野に入れ、漱石の死（１２月９日）でしめくくられる大正５年の層的な位置づけと行なう。	
13	「青華沓」「寄蹟」「近代思想」の問題点－冬の時代と女性運動－	平塚雷鳥らの「青　」の出発と展開。広津和郎らの「寄蹟」の出発と特質。大杉栄、荒畑寒村らの「近代思想」の冬の時代における仕事の意味。堺利彦の「へちまの花」、土岐哀果（善）の「生活と芸術」にも言及。	
14	芥川文学の特質－短編小説－の問題点	独歩や直哉を経て芥川において短編小説の魅力が発揮され、梶井基次郎・井伏鱒二らに引きつがれていく。初期の作品群を中心にする。第三次・第四次「新思潮」の検討もあわせ行ない、菊地覚・久米正雄・豊島与志雄らとの比較も考える。	
15	「赤い鳥」「新しき村」「種蒔く人」の対比－ユートピアとプロレタリア文学－	鈴木三重吉の「赤い鳥」の運動、武者小路の「新しき村」の運動は同じ１９１８（大正７）年。この二つの根底にあったものをさぐり、ついで１９２１（大正１０）年よりはじまる「種蒔く人」の意味を探究する。	

＝イギリスの言語文化＝

〔主任講師：橋口　稔（東京大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの時代から２０世紀の現代まで、主として文学作品をとおして、イギリス文化の諸相を歴史的に辿ってみようと思う。短いものであっても英語のテキストを読むことを交えながら、イギリスの言語文化の特質を明らかにしたいと考えている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	英語の歴史	古英語から中英語を経て、近代英語に至る英語の変遷の歴史を辿り、近代英語の特徴を、主として語彙の点から考察する。	橋口　稔（東京大学教授）
2	シェイクスピアⅠ	イギリスのルネサンスを時代的背景のもとに考察し、シェイクスピアを生みだすにいたるエリザベス朝演劇の特質を、劇場や舞台の面からも考えてみたい。	同上
3	シェイクスピアⅡ	分っている範囲においてシェイクスピアの生涯を説明し、その上でシェイクスピアの作品の本質を考えてみたい。	同上
4	欽定訳聖書	ジェイムズ一世の指示によって作られ、1611年に刊行された欽定訳聖書について考えながら併せてイギリスの宗教について考察を加えたいと思う。	同上
5	ミルトン	ピューリタン革命にも自ら積極的に関与したミルトンの生涯について考えながら、『失楽園』がイギリス文化の中でどのような意味を持つかを考察したいと思う。	同上
6	ロビンソン・クルーソウ	イギリスの海外進出という背景を考察にいれた上で、デフォーの『ロビンソン・クルーソウ』という物語が持ついろいろな意味を考えてみたい。	同上
7	近代小説に見る生活Ⅰ	フィールディングの『トム・ジョウンズ』とオースティンの『高慢と偏見』に描かれた、カントリー・ハウスの生活をとおして、ジェントリー階級に対する考察を行なう。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ロマンティシズム	１８世紀末から１９世紀初頭にかけてのロマンティシズムの動向を、ワーズワースを初めとする詩人たちの作品に即して考えてみたい。	橋口　稔
9	近代小説に見る生活Ⅱ	ジェントリー階級の子弟が学ぶパブリック・スクールの有様をヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』によって見た上で、貧しい階級の子供の実態もディケンズの小説を通して見てみたいと考えている。	同　上
10	ヴィクトリアニズム	ヴィクトリア朝の風潮をテニソンの詩に代表させて考えた上で、ヴィクトリアニズムに対する批判も取り上げて考察しようと思う。	同　上
11	ブルームズベリー・グループ	ストレイチー、ウルフ、ケインズ等をメンバーとする私的な集まりであったブルームズベリー・グループを通して、1900年代から第一次世界大戦を経て1920年頃までのイギリス文化の変化について考察する。	同　上
12	T.S.エリオットとD.H.ロレンス	アメリカに生れてイギリスに帰化したエリオットと、炭坑夫の子供として生れたロレンスを取り上げて、イギリス文化の問題を考えてみたい。	同　上
13	オーデン世代	W. H. オーデンを中心とする1930年代に活躍した詩人、作家たちの世代を取り上げて、第一次大戦後から第二次大戦にかけてのイギリスの文化の動向を考える。	同　上
14	第二次世界大戦後Ⅰ	第二次世界大戦後のイギリス文化の新しい動向を、1950年代に登場してきた詩人たちと小説家たちを取り上げて考えてみる。	同　上
15	第二次世界大戦後Ⅱ	同じ第二次大戦後の動向を、劇作家たちを取り上げて考察し、さらに現代イギリスの文化を展望し、日本とイギリスの関係を考えて結びとする。	同　上

＝アメリカの言語文化＝

〔主任講師：本間長世（東京大学教授）〕

全体のねらい

毎回英文のテキストをもとにして、アメリカ文化の各側面を取り上げ、全体としてアメリカ文化の特色の理解が深まることを目指す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アメリカ人になること	移民の国であるアメリカ合衆国で、人びとがいかにしてアメリカ人となり、英語を学び the American Way of Life を身につけていたかをあとづける。	本間長世（東京大学教授）
2	合衆国の建設	13の植民地がイギリス本国に反逆して独立し、連邦共和国を建設した過程をふり返り、啓蒙思想に基づくアメリカの建国の理念を探る。	同上
3	ヨーロッパとアメリカ	日本でひとくちに、“欧米文化”と言うことが多いが、ヨーロッパ文化と区別されたアメリカ文化というものはあるのかという問題を考えてみる。	同上
4	アメリカの詩	アメリカの代表的詩人ウォルト・ホイットマンの詩をはじめ、いくつかの詩を通じてアメリカ的想像力ともいうべきものを探る。	同上
5	アメリカのナショナリズム	アメリカのナショナリズムに神秘性を与えたといわれるリンカーンの演説を中心に、アショナリズムとインターナショナリズムの関連まで説明する。	同上
6	アメリカの黒人	自由と平等の国であるはずのアメリカで奴隷制の下にしいたげられてきた黒人の、解放へのたたかいをふり返り黒人のアメリカ文化への貢献を考える。	同上
7	西部の開拓	アメリカ精神は開拓の最前線であるフロンティアで形成されたといわれる一方で、アメリカ大陸では自然とのたたかいが厳しく、文化が洗練されるのが遅れたともいわれる。アメリカ史におけるフロンティアの意義を論じてみたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	アメリカのフォークロア	アメリカの代表的な“フォーク・ヒーロー”の一人ジョン・ヘンリーの英雄像が、鉄道建設の労働者たちの間で歌われた歌をもとにしてつくられた経緯をたどり、アメリカのフォークロアの特徴を説明する。	本間長世
9	大恐慌とニューディール	史上かってない大恐慌がアメリカ社会にもたらした悲惨と、ルーズヴェルト大統領のリーダーシップの下でのニューディールの成果を論ずる。	同上
10	ワスプ対エスニック・アメリカ	アメリカ人の主流だったWASPに対してethnic Americansが挑戦し、アイルランド系のケネディ大統領が誕生したことの文化史的意義を論ずる。	同上
11	アメリカの南部	南北戦争後のアメリカ南部が独特のイメージを抱かれた歴史を訪ね、カーター大統領出現に及ぶ。	同上
12	アメリカのユーモア	外国の言語文化を理解するにはユーモアを理解し得ることが極めて重要で、ある。アメリカ的ユーモアの味わいを、漫画にも触れて観賞したい。	同上
13	アメリカのミュージカル	ミュージカルはアメリカのユニークな舞台芸術である。代表的なミュージカルを取り上げ、いかなる点でアメリカ的かを解明する。	同上
14	アメリカの食物	料理は生活文化の中で重要な地位を占める。アメリカの料理はおいしくないという“通説”を吟味する。	同上
15	未来への展望	アメリカ人は未来に対して楽観的だと言われるが、近年のアメリカ人は未来に対して無関心だったり未来を恐れたりしているといわれる。アメリカ文化の未来を展望してしめくくりとする。	同上

＝ドイツの言語文化＝

主任講師：辻　　理（放送大学教授）
主任講師：三島憲一（東京大学助教授）

全体のねらい

日本におけるドイツ像の成立をふりかえった上で、ドイツ文化がアイデンティティーを獲得したとされるゲーテ時代と、そのゲーテ時代の文化を政治的統一のためのイデオロギーと化してゆく１９世紀後半の状況を対比、時には政治的な遅れの故に、高度の内省的、批判的文化を作り出してゆくドイツ独特のメカニズムを解読する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本とドイツ	何が日本人にとってドイツの文化であるか。	辻　理（放送大学教授） 三島憲一（東京大学助教授）
2	ニュルンベルク市に見るドイツ史	ニュルンベルク市を一例としてのドイツ史概観。	同上
3	啓蒙主義 (1)	ドイツ啓蒙主義の特殊性。	同上
4	啓蒙主義 (2)	イマヌエル・カント。	木田　元（中央大学教授） 三島憲一
5	ゲーテ時代 (1)	Sturm und Drang と『若きヴェルテルの悩み』。	辻　理 礪田　収（学習院大学教授）
6	ゲーテ時代 (2)	フランス革命とドイツ観念論哲学。	木田　元 三島憲一
7	ゲーテ時代 (3)	ロマン派と歴史意識の発生。	辻　理 三島憲一 礪田　収

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	19世紀 (1)	芸術時代の終焉。ハイネとマルクス。	欅田 収 辻 理 三島憲一
9	19世紀 (2)	市民生活とその批判（ニーチェとショーペンハウアー）。	辻 理 三島憲一
10	19世紀 (3)	ビスマルク時代。都市の膨張。	同上
11	世紀末文化	学の興隆と新しい芸術。	同上
12	1920年代 (1)	ワイマール共和国とベルリン。	山本 尤（京都府立医大教授） 木田 元 三島憲一
13	1920年代 (2)	共和国の解体とナチスの抬頭。	辻 理 三島憲一 山本 尤 木田 元
14	戦後 (1)	戦後史の物語るもの『ボンはワイマールではない』。	辻 理 三島憲一
15	戦後 (2)	戦後史とその総括。	辻 理 山本 尤 木田 元 欅田 収 三島憲一

＝フランスの言語文化＝

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語はフランス文化を形成する基本的要素であり、それ自体世界に誇る文化財となっている。フランス語がいかなる場で用いられ、歴史的にどう成立したか、言語芸術がどうなっているかをフランス語を知らない人にもわかるように説明し、フランス語の美しさを守る心を日本語の美しさを守る心と関連させて考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	フランスという国 —序論—	フランスとはどういう国であるか、フランスに関して人の持つイメージに触れながら、フランスの地理と歴史について基礎的な事柄を学ぶ。	福井芳男 （放送教育開発センター教授）
2	フランス語はどこで、どんな風に話されているか	フランス諸地方の方言、また特殊なブルトン語、バスク語に触れる。後半では世界のどこでフランス語が使われているか（ベルギー、スイス、ケベック、アフリカなど）を見る。	同上
3	食べる楽しみ、話す楽しみ	料理を味わいながら、話をする、会話を楽しむ、これがフランス語をうけつぎ、また洗煉させる源泉であった。そして名高いフランス料理とはいったいどういうものか。	同上
4	言葉は遊び —社交、ギャラントリー—	言葉はまた人間の飾りにもなる。巧みに言葉を操り、社交を楽しむ、そしてサロンなどで女性たちを楽しませる。こういったことが、いかにフランス語を磨かれたものとしたか。	同上
5	言葉は武器になる —マス・メディアと政治家のフランス語—	フランス語に変貌を強いているのは、ジャーナリズムであるが、ここでフランス語はどう使われているか、フランス歴代政治家がいかに名文家であったか。	同上
6	フランス語を守り伝える —学校教育と辞書—	フランス語の純粋さを守るのは、学校教育である。ここでどういう風にフランス語を教えているか、さらに辞書はどういう発展をとげたか、辞書がフランス語の護持にいかに役立ったかも示す。	福井芳男 井村順一
7	フランス語の誕生と中世文化	ラテン語がカエサルのゴール政治により入ってから、フランス語が成立する過程と、それとともに中世の文化がいかに花さいたかを述べる。	福井芳男 新倉俊一

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ヴェルサイユ宮の栄光 —近代フランス語の確立—	17世紀古典主義時代に確立したフランス語について、そして18世紀全ヨーロッパに輝いたフランスの栄光を語る。	福井芳男
9	パリに生きる人たち —現代のフランス語—	現代フランス語のさまざまをそれを使う人たち、場所などとの考察とともに述べる。	同上
10	明快さと深さは矛盾しない —散文の美しさ—	パスカルを中心にして、フランス語の明快さとは何か、それを駆使して人間の心の奥へ迫った思想家たちに触れる。	同上
11	魂の深い淵から —詩の美しさ—	ボードレールを中心に、フランス語の詩の形、美しい詩の形の発見、さらにそこから人間の魂の幸福をいかに歌い上げたかを考察する。	同上
12	人間の心をたずねて —小説の伝統とマルセル・プルースト	プルーストを中心に、人間の心の奥をたずねるフランス小説の伝統と、そして「書くこと」の意味を追求する近代・現代小説の流れとを考える。	同上
13	人間の運命に対して —喜劇と悲劇—	フランス演劇の典型として、喜劇のモリエール、悲劇のラシーヌをとりあげ、古典の伝統、フランス演劇の伝統について考える。	同上
14	映像、旋律と言葉を結んで —映画とシャンソン—	大衆芸術としての映画と言葉とのかかわり合い、そしてフランス映画の楽しみ、民衆の心を歌うシャンソンなど、現代の言語芸術について考える。	同上
15	日本とフランス —2つの言語文化の触れ合い—	フランス人の日本観、日本語観の変貌、日本人のフランス文化、フランス語観の変遷を通じて、深いところでの日仏文化交流の道を考える。	同上

＝ロシアの言語文化＝

主任講師：木村彰一（東京大学名誉教授）
：川端香男里（東京大学教授）

全体のねらい

ロシア文学は、他の外国文学以上に日本人にとってなじみ深い文学であるが、それは19世紀のロシアの大作家たちが日本でよく読まれたおかげである。これらの作家をとりあげて、新しい光をあて、かつその前の時代、後の時代とのつながりを考えて、ロシアの言語文化の諸相を明かにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	『イーゴリ軍記』	世界文学史上の傑作の一つとされている『イーゴリ軍記』をとりあげ、それと同時に、その時代の背景、ロシア文化の成り立ちを展望する。	木村彰一（東京大学名誉教授）
2	ピョートル大帝とエカテリーナ女帝	ピョートル大帝に始まりエカテリーナ女帝に至るロシア近代化・西欧化の激動の世紀 — 18世紀 — を文学の面から見てみる。	直野敦（東京大学教授）
3	プーシキン Ⅰ —その歴史的位置—	プーシキンはロシア近代化の一世紀の総決算として歴史の上に登場し、文字通り19世紀ロシア文学の黄金時代のとびらを開いた。ここでは、まず文学言語、文学意識、国民意識の面でのプーシキンの画期的な独創性を考える。	栗原成郎（東京大学助教授）
4	プーシキン Ⅱ —その主要作品—	プーシキンの多種多様な作品を、その劇的な生涯をたどりつつ、説明する。	栗原成郎
5	『エヴゲーニイ・オネーギン』	プーシキンの代表作『エヴゲーニイ・オネーギン』をとりあげ、プーシキン文学の魅力について語る。	木村彰一
6	ゴーゴリ	ゴーゴリというきわめて特異な作家を通してロシア文学の持っている不思議な特質 — 芸術と思想の相克、リアリズムと幻想的な要素の混淆等 — について考える。	川端香男里（東京大学教授）
7	ドストエフスキイ Ⅰ —その時代と生涯—	プーシキン、ゴーゴリという二人の先達の後に、ツルゲーネフ、ゴンチャロフ、ドストエフスキイ、批評家ベリンスキイらが続々と姿を現わす。ドストエフスキイが現われて来たこのような文学環境、時代背景をまず考えて見る。	直野敦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ドストエフスキイⅡ —その主要作品	ドストエフスキイの波瀾にみちた生涯と、作品の歴史を展望する。	直野　敦
9	ドストエフスキイⅢ —『罪と罰』—	ドストエフスキイの代表作『罪と罰』を読み、この作品の意味、魅力をさぐる。	木村彰一
10	トルストイⅠ —その生涯と作品—	19世紀ロシア最大の小説家トルストイはおそらく世界的に最も広く読まれた作家の一人である。しかしトルストイは決してやさしく読める作家ではない。その創作の秘密を、その作涯をたどりつつ解説する。	川端香男里
11	トルストイⅡ —その思想—	トルストイの同時代、および後代への影響は文学の面にとどまらず、むしろ思想的な面で大きかった。同時代の他の思想家たちや社会主義者たちと比較しながら、トルストイの思想について考える。	同上
12	チェーホフⅠ —その小説—	ロシア小説の黄金時代は1870年代に終わりを告げるが、チェーホフはガルシン、コロレンコなどと共に、新しい短篇の時代を築く。リアリズムの時代の最後の栄光を担い、同時に20世紀を準備したチェーホフの独自性を解き明す。	島田陽 （東京大学助教授）
13	チェーホフⅡ —その演劇—	今日にまでおよぶチェーホフの影響のうち、最も大きなものは「演劇」である。チェーホフ劇の成立とその本質について考えてみる。	同上
14	ロシア革命と 詩人たちⅠ	20世紀初頭から1920年代までは、ロシア文化がプーシキン時代についで活況を呈した時代であった。しかし、それは同時に戦争と革命の時代でもあった。マヤコフスキイを中心にすえてこの時代と文化のあり方を考えてみたい。	同上
15	ロシア文学 —その過去と現在	詩人は、激動の時代にあって、芸術と政治の相克に悩む — その典型的な例としてエセーニンとパステルナークをとり上げ、文学と政治というソビエト文学に固有な問題に光をあててみる。	同上

＝西　洋　古　典＝

〔主任講師：久保正彰（東京大学教授）〕

全体のねらい

古代ギリシア・ローマ時代（紀元前700年頃～西暦500年頃まで）に活潑に開花・結実した、叙事・叙情詩、喜劇・悲劇、歴史記述、旅行記、伝記、弁論・対話文などの諸種の文芸作品に直接に触れることによって西洋古代の言語、思想、芸術、生活についての理解を深めると同時に、古代人が打立てた世界の認識や人間・社会の自己把握、またさらに芸術・造形上の基本的約束ごとが、歴史の陶汰を蒙りつつもなお、中世・ルネサンス・近世を経て今日まで生きている部分があることを、具体的に紹介しつつ、現代人の中に息づく古代の生命を再認識してみたい。

主な項目

英雄叙事詩の世界；抒情詩人たち―原型とバリエーション；演劇の発詳、成立、伝承、古代歴史記述の目ざすところ；ギリシア・ローマ人の伝記文学、古代の文芸論；ことばと人間、等

＝ 物 理 科 学 史 ＝

〔主任講師：村上陽一郎（東京大学

全体のねらい

物理学の史的な展開を、力学的分野に絞りながら、概観することによって、近代科学の中心的な柱となった物理学の特徴を理解し、併せて、西欧の歴史的な流れについても、はっきりした見透しを与える一助とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	科学史とはどういう学問か（1）	科学という概念の多義性。科学と哲学。過去は現在の原型ではない。科学と宗教の対立（？）。真理の蓄積史観。	村 上 陽一郎（東京大学教授）
2	〃（2）	啓蒙主義的歴史観の克服。地動説はつねに同じではない。全体論的アプローチの提案。	同 上
3	歴史の流れの概観（1）	古い時代区分。その問題点。中世とは何か、暗黒の中世観、新しい中世観。科学革命論の登場、その問題点。新しい時代区分の提案。	同 上
4	歴史の流れの概観	古代の学術（ギリシャ、ローマ、ビザンツ、イスラム）。12世紀以降のルネサンス。大学の発生からニュートンまで。啓蒙主義の特質と聖俗革命。19世紀以降の科学の制度化と科学者の誕生。	同 上
5	ギリシャ的宇宙観の意味	天体現象として何が観測されたか。暦の意味。ギリシャ的記述様式。地球は丸い。	同 上
6	なぜ太陽中心説は捨てられたか	地球中心説、周転円モデル、太陽中心モデルの可能性、年周現差。	同 上
7	アリストテレスの運動学	太陽中心説の否定の力学的原因、力学的思考法。二つの世界。完全な運動。不完全な運動。強制的運動。媒質の役割。慣性的運動。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	中世の自然学	ビザンツ科学の成果、ピロポノスの解釈、「理想状態」、イスラムの運動学。	村　上　陽一郎
9	12世紀ルネサンス後の展開（1）	スコラ学的な世界。ビュリダンのインペトゥス理論、マートン学派。「ルネサンス」への道。	同　上
10	〃（2）	「ルネサンス」とプラトニズム。新プラトン主義。動的世界観。ヘルメス主義。	同　上
11	〃（3）	カバラ主義。錬金術。占星術。神秘主義と科学。コペルニクスへの道。	同　上
12	コペルニクスの登場	コペルニクス革命の意味。太陽中心主義。ルターとコペルニクス。コペルニクスと新プラトン主義。	同　上
13	ブルーノとコスモスの崩壊	ブルーノと神秘思想。原子論の発想。宇宙の無限性。地球の相対化。コスモスの崩壊。空間の意味構造。	同　上
14	ケプラー的世界像	太陽崇拝、占星術。神秘思想。三法則。太陽からの力。宇宙の和声。運動力学への道。	同　上
15	ガリレオの辿った道（1）	ガリレオの生涯。望遠鏡。裁判。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	ガリレオの辿った道（2）	地動説と天動説。ガリレオの相対性。円運動とガリレオ。円慣性。落下法則。	村　上　陽一郎
17	デ　カ　ル　ト	デカルトの力学。慣性原理。「遠心力」。ものと延長、機械論的構図、物質から力を剥奪する。	同　上
18	ニュートンの登場	ニュートンの生涯、ロイヤル・ソサイエティ。フックとの出会い、フックの誘い。『プリンキピア』の誕生。	同　上
19	ニュートンの力学	逆2乗法則。万有引力。錬金術。動的世界像。ケプラー法則の解決。	同　上
20	デカルト的世界像とニュートン的世界像	神の全知、全能性。時計細工としての世界。神は自然に縛られる。遍在性としての神。反機械論。理神論へ。	同　上
21	啓蒙主義と聖俗革命	自由思想家。理性信仰。神の棚上げ。理神論から無神論へ。百科全書派。フランス革命、アメリカ建国。自分の手と神の手。	同　上
22	機械論的力学的世界像の成立	原子論の論理。第一性質と第二性質。還元主義。デカルトのプログラムへのニュートンの包摂。	同　上
23	ラプラスの魔	啓蒙主義と数学者。ラプラス。決定論。ラプラスの魔。古典力学的世界像。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	力学的世界像への反動とロマン主義	反近代。ゲーテ。「力」の概念。生物への関心。	村上陽一郎
25	科学と技術の融合	エコール・ポリテクニーク。産業革命。蒸気機関。熱。エネルギー。カルノー。熱力学の第一法則。第二法則。ファラディ。電磁場。マクスウェル。	同上
26	相対論への道	光の現象。波動説と粒子説。星の光行差。対エーテル系速度。マイケルソン＝モーリーの実験。ローレンツ＝フィッツジェラルドの短縮。	同上
27	アインシュタインと現代物理学	運動体の電気力学。M＝M実験との関係。特殊相対論の意味。時間と空間。同時性。	同上
28	量子力学とミクロな世界	原子から素粒子へ。理論上の難点。ボーア、ハイゼンベルク。決定論の崩壊。生物への関心。神はサイコロを振らないか。	同上
29	現代科学の位相（1）	科学の制度化。大学の改革。リービッヒの化学研究室。TH。東京帝国大学と工学部。＜scientist＞の登場。職業化と専門化。ハーヴァードとMIT。	同上
30	〃（2）	物理帝国主義。還元主義。分子生物学。新しい力学の可能性。科学批判。	同上

＝ 生 命 科 学 史 ＝

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学助教授）〕

全体のねらい

全体を3部にわけ、1～9回を「生命科学史の基本知識」として、科学の歴史をどう見るべきか、総論的に解説する。10～19回は「生命科学史の個別分野」とし、いくつかの話題をえらんで各論的に生物学の流れを文化史的に展望する。20～30回は「生命科学史の担い手たち」ということで、生物学史上の人物列伝をあつかい、個人を研究にかりたてる情熱の源泉をさぐりたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	科学史の見方	科学史を学ぶうえで最も必要なことは、時代によって「常識」がちがうことである。それをわきまえ、過去の業績の評価にさいし、学説自体の当否よりも、そこへ到達するまでの過程を重視しなければならない。	筑波常治（早稲田大学助教授）（対談相手 坪郷佳芙子）
2	生物学の思想と方法	現代科学は生命のはたらきを、化学現象としてとらえる。また研究の手段としては、数字、数式、記号を重んじる。そういう態度の由来を、先駆者の例にそって説明する。	同 上
3	博物誌と生命論	生物学にはふたつの源泉がある。身のまわりの多様な生物たちへの関心がそのひとつであり、もうひとつは生命の正体への探究である。そしてこのどちらもが、実用目的とつよく結びついていた。	同 上
4	生物学とキリスト教	ヨーロッパで成立した科学は、一面でキリスト教と対決しつつ、同時にその影響をつよくうけ、多くの文化遺産を継承して発達した。とくに後者の側面をとりあげて、文化知識の連続性をあきらかにする。	同 上
5	探検が開いた世界	探検によって未知の新世界が開かれる。それとともに多くの生物の存在が新しく知られる。そして生物学の歴史に、新しい流れがくわわることになった。	同 上
6	顕微鏡が開いた世界	未知の新世界は、遠くはなれた海のかなたにだけ存在したのではなかった。意外にもすぐ身近にまだあったのである。それをあきらかにしたのが、顕微鏡の発明であり、さらにこれに付随するさまざまな技術であった。	同 上
7	医学と生物学	医学と生物学には深い宿縁が存在している。病苦からの解放をねがう努力が、生命現象にかんするいくつもの謎を解きあかした。同時にその関係史には、人間の“業”ともいえる多くの問題が露呈されている。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	農業における生物（Ⅰ）	農業もまた人間と生物を結びつける大きな舞台である。農業の起源とくに作物や家畜が有史以前に育成されたいきさつについて、科学の立場から考察し、まだいかにわからないことが多いかをあきらかにしたい。	筑波常治 （対談相手 坪郷佳芙子）
9	農業における生物（Ⅱ）	農業には自然を遵重する態度とならび、自然につよく逆らう側面が宿命的につきまとう。両者の調整こそ農業の成否をわけるともいえる。いわゆる有害生物と人間とのかかわりあいをとおして、この問題を考察したい。	同　上
10	生命観の変遷（Ⅰ）	生命とは何か？　これは人間にとって最大の関心事のひとつだ。科学以前の生命観と、近代科学の生命観とは、どうちがっているのか。その推移の過程を、社会的な背景とあわせてたどり、さらに生命観の生活一般におよぼす膨大な影響を解説する。具体的にいえば「生気論」「機械論」とそれぞれ呼ばれている生命観の内容を歴史的に説明し、人間が無自覚のうちにその制約下でくらしているさまを、功罪両面にわたってあきらかにしたい。	同　上
11	生命観の変遷（Ⅱ）		同　上
12	生命観の変遷（Ⅲ）		同　上
13	分類学の理想と現実（Ⅰ）	生物の種類をわけるのが分類学である。要するに鑑別さえできればよいのだろうと思われがちだが、とんでもない。理想に近い分類体系を完成するには、ゆたかな哲学的思考が不可欠なのである。分類方法の変遷を、思想史的にたどるのが講義のねらいである。そしてじつは理想的分類の実行が、いかに至難であるかをあきらかにしたい。	同　上
14	分類学の理想と現実（Ⅱ）		同　上
15	個体発生の秘密（Ⅰ）	発生学の歴史を講義する。性への関心も、生物学を発達させる大きな要因であった。子供はどのようにして完成されるのか、親と子が似るのはなぜか、容易に観察できない生体深部でのできごとであり、神秘性を感じさせる問題であ	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	個体発生の秘密（Ⅱ）	った。これをめぐって「前成説」と「後成説」の対立がおこった。そして発生学の歴史は全体として、観察的科学から実験的科学への進歩の軌跡をあざやかに描きだしている。	筑波常治 （対談相手 坪郷佳芙子）
17	進化の思想（Ⅰ）	進化論は――現代科学をささえる諸学説のうちでも――とくに絶対視されがちであるが、じつはかなりあやふやさを内包した主張なのである。それは科学のなかでもっとも思索と想像に依存せざるを得ない分野であり、それゆえに時代ごとの社会環境に大きく支配される。したがって科学と社会のつながりを知るには絶好であり、同時に科学が絶対的ではなく、相対的真理にほかならないことを理解するのにも有効である。さらにまた科学のもたらした罪業の面も、進化論の歴史をとおして浮かびあがってくる。	同　上
18	進化の思想（Ⅱ）		同　上
19	進化の思想（Ⅲ）		同　上
20	古代最高の生物学者	アリストテレスはふつう哲学者としてだけ有名だが、同時にすぐれた動物の研究をなしとげ、古代・中世をつうじて最高最大の生物学者といわれている。生物学の歴史にまず登場する重要人物の生涯と業績を紹介する。	同　上
21	博物誌をまとめた人々（Ⅰ）	博物誌ははじめ上流階級の人びとによって発達させられた。その富裕な財力がこれをささえ、絵画をともなう大著がまとめられた。とくに古代ローマで、注目される業績が生まれた。	同　上
22	博物誌をまとめた人々（Ⅱ）	博物誌の研究はしだいに発達し、１８世紀に絶頂をきわめた。そこに至る歴史上の人物として、ゲスナー、アルドロヴァンディ、ビュフォンなどの活動が重要であった。	同　上
23	博物誌をまとめた人々（Ⅲ）	貧困から身をおこしたリンネ、自然観察と文学を結合させたイギリスの作家たち、生物学の主流と対立したファブルなど、近代から現代にかけての博物誌の動向をさぐる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	異端的な研究者たち	中世的魔術を信奉するパラケルスス、「ふしぎなメガネ」をひたすらのぞきつづけたレーウェンフク、そして狂気にみちた人々、だがかれらも科学史の重要な担い手であった。	筑波常治 （対談相手 坪郷佳芙子）
25	思索と実証の対立	想像力にたよって進化論を主張したラマルク、実証精神にもとづきそれを否定したキュビエ。同時代のフランスを代表する生物学者を比較して、科学とは何かを考えたい。	同　上
26	不幸が贈った幸運	ダーウィンの生涯は科学史上の人物のうちでも最も幸福なものに見える。しかしその成功をもたらした原因をさぐると、かれをとり巻くさまざまな悲劇が浮かびでてくる。不幸を転じてすぐれた学説に結びつけた個人的事情を解明してみたい。	同　上
27	門外漢ゆえの大発見（Ⅰ）	遺伝の法則の発見者として、メンデルの名は不朽である。生物学史における最も重要な人物のひとりにちがいない。ところがかれの生涯をみると、むしろ物理系の諸分野に知識が深く、生物学は素人に近かった。そしてじつは素人なればこそ、専門家の気づかぬ部分に着目して、違大な発見をなしとげることが可能だったのである。	同　上
28	門外漢ゆえの大発見（Ⅱ）		同　上
29	自然発生説をめぐる攻防（Ⅰ）	自然発生説が出現し、否定されるまでの過程を調べると、科学研究における事実と推理、すなわち実験と理論のあいだの複雑な関係がよく理解できる。同一の実験で同一の結果を得ても、それから同一の学説が成立するとは限らないのである。それをあきらかにするとともに、19世紀を代表する生物学者のひとりパスドゥールの業績を紹介する。	同　上
30	自然発生説をめぐる攻防（Ⅱ）		同　上

＝宇宙の構造と進化＝

〔主任講師：小尾信彌（放送大学教授）〕

全体のねらい

太陽系、銀河系、銀河宇宙と階層化し、多様化している現在の宇宙の特徴や構造から、それが形成された100数十億年の歴史についての理解を深める。専門分野の講師によって、各分野の最前線の研究にもふれる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙と宇宙論	• 宇宙と宇宙論 • 宇宙の構造と進化 • 内容の展開について	小尾信彌
2	宇宙探究の歴史Ⅰ ー開かれた無限宇宙	• 宇宙論とは • 「閉じた有限宇宙」からの脱却 • 開かれた無限宇宙	佐藤文隆
3	宇宙探究の歴史Ⅱ ービッグバンの発見	• 宇宙のモデル • 星の進化と元素の起源 • 新しい観測手段 • 進化する天体と宇宙 • ビッグバンの発見 • 宇宙と人間	〃
4	光学天文台Ⅰ	• 望遠鏡 • 位置観測 • 撮像観測 • 測光観測	小小平桂一
5	光学天文台Ⅱ	• 天体の観測 • 光と電波（電磁放射） • 天体が放つ放射とその観測	小尾信彌
6	宇宙の現状Ⅱ	• 光が伝える天体の情報 • 原子のエネルギー状態 • 原子のスペクトル • スペクトル線の幅 • 太陽や恒星の連続スペクトルー熱放射 • 電波天体の連続スペクトルー非熱的放射	〃
7	宇宙の現状Ⅲ	• 宇宙の階層構造 • 超銀河団と銀河団 • 銀河 • 恒星 • 冷たい天体	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	光学天文台 Ⅱ	• 分光器 • 低分散分光観測 • 高分散分光観測 • 干渉計観測	小平桂一
9	相対論的宇宙論 Ⅰ	• 運動の相対性 • 光の特殊性 • 特殊相対論 • ローレンツ変換 • 特殊相対論の実験的裏付け	江里口良治
10	相対論的宇宙論 Ⅱ	• 加速度運動と慣性力 • 一般相対性原理と等価原理 • 重力理論としての一般相対論 • 一般相対論の検証	〃
11	相対論的宇宙論 Ⅲ	• ニュトン的宇宙論 • 宇宙原理 • 膨張宇宙 • 宇宙の地平線 • 膨張宇宙の密度と温度	〃
12	相対論的宇宙論 Ⅳ	• 重力の強さと時空の歪み • シュワルツシルド時空中の運動 • 事象の地平面とブラックホール • ブラックホール候補 • ブラックホールの蒸発	〃
13	初期の宇宙進化 Ⅰ	• ビッグバン宇宙確立史 • 宇宙の初めの1000秒の出来事 • 宇宙黒体輻射	池内了
14	初期の宇宙進化 Ⅱ	• 宇宙の大規模構造 • 銀河形成の2つのシナリオ • おわりに	〃
15	電波天文学 Ⅰ —電波による宇宙の観測	• 電波と光 • 電波望遠鏡 • 野辺山の45m電波望遠鏡 • 野辺山の五素子電波干渉計 • まとめ	海部宣男

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	電波天文学 I －電波でみた宇宙	• 宇宙における電波の発生 • 星間分子雲からの星の誕生 • 銀河中心核と宇宙ジェット	海部宣男
17	恒星の誕生	• 恒星進化論 • 星間ガス雲 • 恒星誕生のダイナミックス • 星間塵と星間分子 • 星の誕生の現場 • 主系列星への収縮	杉本大一郎
18	恒星のエネルギー源と主系列星の寿命	• 恒星のエネルギー源は何か • 原子核融合のエネルギー • 恒星の内部構造 • HR図と主系列 • 主系列星の寿命	〃
19	巨星への進化と死	• 巨星への進化 • その後の進化と原子核反応 • 恒星の死	〃
20	星の進化論の意義	• 極限状態の物理 • 物質世界の歴史 • 恒星はなぜ進化する	
21	恒星進化の残骸 I	• 観測されている超新星 • 大質量星の爆発するタイプ２の超新星 • 白色　星が爆発するタイプ１の超新星	野本憲一
22	恒星進化の残骸 II	• 超新星の残骸 • 中性子星	〃
23	大気の外からみる宇宙 －X線天文学	• 大気の壁 • X線の空 • X線星の正体 • つぶれた星－中性子星とブラックホール • X線パルサーとX線バースト • 人工衛星「はくちょう」と「てんま」 • かに星雲 • 銀河系外のX線源	小田稔

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	銀河の進化と元素Ⅰ	• 銀河進化の基本的物理過程 • 星間物質の物理状態 • 分子雲からの星生成 • 巨大バブルの形成	池　内　　了
25	銀河の進化と元素Ⅱ	• 星生成の基本データ • 星の進化のデータ • 放出されたガスの混合過程 • 銀河の進化と重元素 • おわりに	〃
26	太陽系の構造と起源　Ⅰ	• 太陽系の構造 • これまでの太陽系起源論	中　澤　　清
27	太陽系の構造と起源　Ⅱ	• 惑星の形成過程 • 木星型惑星の形成 • 地球の形成・進化 • 太陽系内小天体の起源	〃
28	生命のはじまりと惑星の進化	• 生命と物質 • 生命の起源 • バンスペルミア • 生命の歴史 • 生命構成物質の合成 • 惑星環境と生命	大　島　泰　郎
29	地球外生命を探る	• 太陽系に生命を探る • 太陽系外の生命 • 銀河系内における文明社会 • 地球外文明探査 • 地球外文明への送信	〃
30	まとめとこれからの学習	• さらに勉強したい人に • 自分でいろいろ考える	小　尾　信　彌

＝太陽系の科学＝

〔主任講師：小尾信彌（放送大学教授）〕

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や、個々の天体の性質等について、最近までの研究成果をふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	研究の歴史	導入として全15回のカリキュラムを述べ、つづいて古代やギリシャ時代から太陽系天文学発展の歴史を概観し、現代の探査機による太陽系探査にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。	小尾信彌（放送大学教授）
2	太陽系の全体像	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	〃
3	地球の運動に伴う現象	自転や公転、歳差など地球の運動に伴って見られる諸現象は、1年の季節、時刻や時間等を通じて古来われわれの生活や自然の認識に大きくかかわってきた。これらについて学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）
4	月、惑星の現象	月や惑星に見られる諸現象は、古くから天文学が発展し、宇宙の構造（太陽系のモデル）を形成するのに大きな役割を果たしてきた、これらについて学び、さらに日、月食についてもふれる。	〃
5	惑星運動の法則の発見	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（東京大学理学部教授）
6	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは面積速度の法則（第2法則）について、3の諸側面を学ぶ。	〃
7	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第3法則を導く	万有引力の法則からは、2体の運動について公転の平均距離と公転周期のあいだに、いわゆる第3法則が導かれる。ここでは3の導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	堀　源一郎（東京大学理学部教授）
9	惑星以外の天体の運動	地球をまわる月、一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	〃
10	摂動	現実の太陽系においては、惑星や衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降発展した摂動について学ぶ。	〃
11	地球型惑星	水星、金星、地球、火星、さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理化学的な性質を学ぶ。	村山定男（国立科学博物館理化学研究部長）
12	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の成果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。木星型惑星に属する衛星について学ぶ。	〃
13	彗星と隕石	彗星に関する物理化学的な知識、構造等に関する知識も、1985～86年のハレー彗星の観測を通じて大きく進んだ。ここでは彗星やそれに伴なう流星等について学ぶ。また、隕石についての諸研究の成果についても学ぶ。	〃
14	太陽と惑星	太陽やその活動についての研究も、最近の宇宙探査を通じてめざましい進展が見られる。また、太陽放射やその活動が惑星など太陽系の諸天体に及ぼす影響等についても新知見が得られている。ここでは、それらの成果について学ぶ。	桜井邦朋（神奈川大学工学部教授）
15	これからの太陽系	太陽系についての研究がこれからどのように進展していくかについて、さまざまな側面から、理論的な研究や観測、探査等の進展と可能性について話し合う。	〃

＝地球の科学Ⅰ＝

―固体地球―

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球は固体地球・水圏・気圏の３つの大きな層圏から構成される。そのうち、固体地球について説明する。最近数十年間における固体地球に関する研究の進展はいちじるしいものがある。それらの内容についても説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	固体地球の構成	固体地球は球状の層圏から構成される。地表から地心へ向って、地球表層、マントル、外核、内核から構成される。地球表層としては地殻、あるいは地殻とマントルの最上層部で構成されるプレートという岩石圏がとり上げられる。これらについて学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
2	地球の物理的性質	地球はほとんど球形であるが、若干形がずれている。このような地球の形状について学ぶ。また、地球には重力、地磁気が存在する。これらについて学ぶ。さらに、他の天体との関係で、地球には潮汐現象がある。また宇宙線がふりそそぐ。これらについて学ぶ。	〃
3	内因的作用による地表の変化	地球内部の諸要因によって生じる変化が、地表まで達して変化を与えることがある。それは火山であり、地震によって生じる断層であり、また隆起や沈降である。これらの事項について学ぶ。	〃
4	外因的作用による地表の変化	地表は大気の温度変化を受けたり、結氷・融氷による膨張・収縮の作用を受けて風化する。また流水の作用によって侵食されて堆積物を生じる。堆積物は運搬され堆積される。また大陸氷河の消長によって海水準が変動し、相対的な隆起・沈降が起る。これらを学ぶ。	〃
5	火成岩	地球表層の内部およびマントルの内部では固相の物質の一部がとけてマグマとなっている。マグマが冷却固結したものが火成岩である。火成岩には深成岩、火山岩およびその中間の岩石がある。また酸性岩、中性岩、塩基性岩、超塩基性岩の別がある。これらを学ぶ。	〃
6	堆積岩	地表とくに海底に堆積した堆積物は、長年月の間に続成作用を受けて堆積岩になる。礫・砂・泥が固化した砕屑岩、生物源の生物岩、化学的に沈澱した化学的堆積岩、さらに火山源の火山性堆積岩がある。これらについて学ぶ。	〃
7	変成岩	火成岩、堆積岩が地下深所である条件下での圧力・温度のもとにおかれると固相を保ったままで内部の原子配列が変化し、別種の岩石となることがある。これを変成岩という。変成岩もときに別種の変成岩となることがある。これらについて学ぶ。	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	相対年代と絶対年代	地層中には化石が含まれることが多い。それらの中には生存期間の限られた示準化石がある。地質時代はまず主としてこれら示準化石によって区分された。これを相対年代という。一方、放射性同位体によって岩石の年代を測定して絶対年代が組まれた。これらを学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
9	地質調査と地質図	地球表層の岩石分布や構造は地質調査によって解明される。地質調査には、地表の調査、ボーリング調査、空中からの調査がある。こうした調査の結果は地質図にまとめられる。地質調査の方法および地質図の読み方も含めてこれらの事項を学ぶ。	〃
10	プレートの動態	地球の表層は数枚のプレートによっておおわれている。これらのプレートは相対的に運動しているものも多い。プレートは中央海嶺中軸部で新生し、潜没帯でひとつのプレートの端は潜没して地球内部へ沈んで消失する。こうしたプレートの動態について学ぶ。	〃
11	潜没帯	ひとつのプレートが隣り合う他のプレートの下へ潜没する場所では潜没帯が形成される。潜没帯では地形的には海溝が形成され、潜没面に沿って地震が多発する。また潜没面のある範囲でマグマが形成され易く、その部分は火山帯となる。これらについて学ぶ。	〃
12	古生物の進化	地球表層に生物が芽生えたのは海洋が形成されてからある期間を経た頃であった。先カンブリア代の終り頃から骨格をもつ生物が増加し化石として残るようになった。これら古生物は進化しつつ変化してきた。その変化のあり方について学ぶ。	〃
13	造山運動	隣り合う2つのプレートが押し合う場合、主として圧縮力がはたらいて、プレートの境界は近で変形が起る。これを造山運動という。造山運動に伴って山脈が形成されることも多い。造山運動のあり方についてはその考察に変化があった。これらの事項について学ぶ。	〃
14	地球表層の変遷	地球表層はその形成の初期から核になる部分を中心としてその周囲で造山運動をくり返しつつ伸張し大陸の部分が拡張してきた。一方、大陸は分裂・移動した痕跡も残している。このような地球表層の変遷のあり方について学ぶ。	〃
15	地下資源の利用	地球表層には金属資源や石油・石炭・天然ガス等の地下資源が賦存する。また地下水も資源のひとつと言える。これら地下資源の在り方とその利用について学ぶ。	〃

＝地球の科学Ⅱ＝

― 日 本 列 島 ―

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

私達が生活の基盤をおく日本列島について、地球科学的な視点からその本質を追及する。日本列島は太平洋とアジア大陸の境に位置する弧状列島で、環太平洋変動帯の一部である。日本列島は典型的な変動帯で、火山帯、地震帯を伴い、地史的にも多くの変動を経験した。これらのことについて学ぶ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本列島の特徴	日本列島は本州を中心とし南北方向に長くのびた大小の島々よりなり、アジア大陸の東端に位置し、太平洋およびフィリピン海に面する。環太平洋変動帯の一部を占める。このような日本列島の特徴について学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
2	日本の地質	日本列島は幾つかのプレートが接し、せめぎ合う場所に位置する。そのため、地質は複雑である。そのような複雑な日本列島の岩石の分布の様相と地質構造の大勢について学ぶ。	〃
3	日本の気象	日本列島は南北方向に長く、気象の在り方も場所によって大きく変る。しかし、全般的には中緯度の偏西風帯に位置し、気象は西から東へと移ってゆく。高気圧、低気圧、前線はいずれも東進する。台風は別の経路をたどる。これらの事項や気候について学ぶ。	〃
4	日本をめぐる海	日本列島は周囲を海にめぐらされている。南方からは黒潮や対馬暖流が北上し、北方からは親潮が南下する。このような日本周辺の海流について学ぶ。また、海水の性質について学ぶ。さらに日本周辺の波浪、津波について学ぶ。	〃
5	日本列島とプレートの動き	日本列島は大局的には太平洋プレート、ユーラシアプレートおよびフィリピン海プレートが接する場所に位置する。アメリカプレートの西端も北海道東部までのびている可能性もある。これらのプレートの動態について学ぶ。	〃
6	日本周辺の海底	日本周辺には太平洋、フィリピン海、東シナ海、日本海、オホーツク海などの外洋、縁海が分布する。これらの海底にはさまざまな地形的特徴が見られ、また堆積物や基盤の岩石についても多くの知見が得られている。これらの事項について学ぶ。	〃
7	日本の地震	日本列島ではその周辺からはじまる潜没面が列島の下部に達している。そのため日本列島は地震帯に重なっている。これら地震帯で発生する地震の発生機構などを考究しつつ地震帯の特性について学ぶ。また地震予知の在り方についても学ぶ。	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の火山	太平洋底は日本海溝をへて東北日本の下へ、また伊豆・小笠原海溝をへてフィリピン海の下へ潜没する。フィリピン海底は西南日本の下へ潜没する。これに伴って日本列島には多くの火山が分布する。これら火山の諸々の特性について学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
9	日本の古生代・中生代	日本列島で発見された最古の化石は古生代オルドビス紀に属する。また最古の岩石は約20億年前のものである。そして日本列島の各地に古生代、中生代に属する岩石が分布する。一部には先カンブリア代と推定される岩石が分布する。これらのことについて学ぶ。	〃
10	日本の新生代	古第三紀の日本は比較的静穏な時期で浅海がひろがり主要炭田が胚胎した。新第三紀は変動の激しい時期でグリーンタフなどの形成をみた。第四紀には海水準の変動があり海岸線が前進・後退をくり返した。このような事項について学ぶ。	〃
11	日本の地下資源	日本列島はモザイクを集めたような複雑な地質構造を有する。そのため広大な面積を占める地下資源の分布は見られぬ。そのかわり、各種の金属資源、非金属資源がスポット的に分布する。とくに黒鉱は注目される。地下水資源も含めてこれらの事項について学ぶ。	〃
12	日本の海陸境界	日本列島は狭長な国土に対して長大な海岸線を有する。その海岸線には岩石海岸、砂浜海岸、内湾に面した干潟海岸の別がある。また、氷期、間氷期にともなう海水準の変動で海岸は前進、後退をくり返し、大陸棚を形成した。これらのことについて学ぶ。	〃
13	日本における地球科学の進展	日本が西欧の科学を全面的にとり入れ始めたのが百年余り前からである。地球科学の分野においてもそのことは同様であった。そしてこの一世紀余の間に日本列島に関する地球科学的研究も著るしい進展をみた。その経過について学ぶ。	〃
14	関東地方の地史	日本列島の中でも一例として関東地方をとり上げ、より詳細な地史を学ぶ。関東地方は日本列島の中でも最も広大な関東平野とそれをとり巻く山脈地帯、および伊豆、三浦、房総の半島によって形成される。そこで生起した地史的な経緯について学ぶ。	〃
15	日本列島と人間生活	私達は生活の基盤を日本列島においている。従って、日本列島の地学的特性と私達の日常生活とは、きわめて多くの点について深い結びつきがある。こうした関連性についていろいろの視点から学ぶ。	〃

＝ 地 球 像 の 変 遷 ＝

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球についての人々の理解の深まりの歴史を紹介するとともにいろいろな時代（例、古生代）における地球の姿を再現する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙観の変遷Ⅰ ーギリシャ的な宇宙観の特色ー	古代文化圏の中で宇宙に関する特徴的な見方（例えば地球説、太陽中心説、地球中心説などを含む。）を持っていたギリシャ人達の宇宙に対する見方を探る。	奈須紀幸（放送大学教授） 村上陽一郎（東京大学助教授）
2	宇宙観の変遷Ⅱ ー近代的な宇宙観の形成ー	ギリシャ人の宇宙観がビザンツ・イスラムを経て中世ヨーロッパに伝えられ17世紀に科学的な宇宙観の誕生を迎える事情とその後の展開を探る。	同上
3	固体地球研究の進展	現在知られているところでは、固体地球は層状構造をしている。このような構造の解明はどのように行われてきたのか。また、存在する物質はどのようなものと推定されているのかを学ぶ。以前人々は地球の内部についてどのように想像していたのかという点についても触れる。	奈須紀幸
4	大気研究の進展	船乗り達の経験、天気図上に見られる気団、前線、高・低気圧、高層気象観測で発見された惑星波、ジェット気流などが地球規模の大気大循環像に組み込まれてきた。その変遷をあとづける。	奈須紀幸 浅井富雄（東京大学教授）
5	海洋研究の進展 ー海洋循環を中心にー	海洋の顕著な現象である循環に焦点を合わせ、有史以来の海洋循環像の変遷を概観する。海洋循環の研究は、未だ未解決の問題が多く残されており、その解明は今後に待たれる。最近の研究に力点をおいて述べると共に、将来の研究をも展望したい。	奈須紀幸 寺本俊彦（東京大学教授）
6	地質時代の確立	いろいろな時代に形成された地層や岩石を、どのように正確に識別し、順序正しく時代区分できるかが、地球の歴史を学ぶ第一歩となる。化石を使ったり、放射性同位元素を用いたりして、次第に地質時代が確立されてゆく。	奈須紀幸 浜田隆士（東京大学教授）
7	大陸の研究の進展	陸地は太古の昔から同じ形の陸だったのであろうか。ヒマラヤのような高い山地から、なぜ海の生物の化石が見出されるのであろうか。陸の研究のためには、陸地そのものの調査だけではなり立たないことがわかってきた。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	大洋底研究の進展Ⅰ －調査技術の進歩による解明－	近代の深海底の研究は、19世紀後半のチャレンジャー号世界周航に始まる。その後、音響測深の進歩、底質採取法の進展、地震波による解析の進歩によって大洋底の姿は次第に明らかにされていった。その過程について学ぶ。	奈須紀幸
9	大洋底研究の進展Ⅱ －海洋底拡大の概念の確立－	ウェゲナーの大陸移動説の見直しと深海底研究の進展、特に中央海嶺系の連続性の発見は大洋底拡大という概念を生み、やがてプレートテクトニクスの概念の誕生にまで発展した。その経緯について述べる。更にチャレンジャー号の深海掘削による上述の概念の検証に言及する。	同上
10	古生代の地球	地球上に生物が出現し、化石として大量に見出されるようになってから後を顕生累代といいその前半が古生代である。植物が初めて陸上に進出し、海中では三葉虫が栄えた。古生代の海陸分布は現在と大きく異なり、気候もまったく違っていた。	奈須紀幸 浜田隆士
11	中生代の地球	古生代から中生代への移り変わりは、生物界の激動期であった。アンモナイトと恐竜の全盛をほこる中生代の地球は、古生代とどのように違っていたのであろう。そしてその恐竜達はなぜ中生代の終わりに姿を消してしまったのであろうか。	同上
12	新生代の地球	新生代は、現在地球上に見られる大山脈が形成され、現代型の生物が発展した時代である。ここでは、現在の地球上の自然景観や生物界がどのようにして出現してきたか、また、新生代末の氷河時代の実態がどんなであったかを学ぶ。	奈須紀幸 鎮西清高 （東京大学助教授）
13	日本の古生代・中生代	化石や測定年代をまとめて組みあげられた日本の古生代・中生代の有様は、地球史の中でどのように位置づけられるのであろうか。フズリナやアンモナイトからわれわれは何を学べるのだろう。日本列島はやはり昔も列島の形をしていたのであろうか。	奈須紀幸 浜田隆士
14	日本の新生代	化石や岩石の測定年代からまとめられる日本の新生代の有様はどのようなものであったか。さらに、古第三紀、新第三紀、第四紀と分けて調べた場合の日本の姿はどのようなものであったかを学ぶ。	奈須紀幸 鎮西清高
15	日本列島周辺の海底の姿	現在の日本列島の姿を支えている周辺の海底の姿は一体どのようなものか。大陸棚の存在に着目し、古久慈川の埋積谷の形成過程や大陸棚について学ぶ。またチャレンジャー号の海底掘削によって発見された東北日本沖の親潮古陸について述べる。	奈須紀幸

＝大気と海洋＝

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球をおおう大気、および固体地球表面の７割をおおう海洋の本質を知るために、色々な専門分野にわたって学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	大気の構造	気温・湿度・気圧・風向・風速などは絶えず変化している。とりわけ、高さに伴う変化は大きく、例えば、数千kmの高低緯度間の気温差はわずか１０kmの高度差によって体験できる。地球規模でみた大気の平均構造の実態を把握し、以下の各章の理解に役立てる。	浅井富雄（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
2	大気の熱収支	大気運動のエネルギー源は太陽である。地球に降り注ぐ太陽放射エネルギーが大気中をどのように伝達され分配されたか、その道筋をたどり一方、地球も宇宙空間に向けて熱放射エネルギーを放出して、大気・地球系のエネルギーの収支が成り立っている。大気の熱平衡について考察する。	同上
3	雲と降水	水蒸気の凝結や昇華、水滴の凍結などによって微細な水滴や氷晶が空気中に形成される。それらの粒子は併合過程を経て、雲粒から雨滴へと成長する。雲や降水の形成にいたる微視的物理過程について述べ、さらに、雲と降水の巨視的動態にもふれる。	同上
4	対流と局地風 －大気運動その１－	４、５章では主に大気の運動を扱う。最初に地球大気の運動のしくみとその特徴を要約し、次に、中・小規模の運動として地表面付近に形成する対流混合層と水平の温度差によって生じる海陸風や山谷風をとりあげる。	木村龍治（東大・海洋研・助教授） 奈須紀幸
5	低気圧と台風 －大気運動その２－	日々の天気は高・低気圧の動向に大きく支配されている。大規模な運動として、長大な前線を伴う温帯低気圧と巨大な渦巻きの熱帯低気圧（台風）に焦点を合わせ、それらの構造や発達のしくみについて記述し、さらに、これらの気象現象と大気大循環とのかかわり合いについてもふれる。	同上
6	気候の変動	地球上に大気が生成して以来、大気の状態は絶えず変動をくり返しながら今日にいたっている。気候変動のしくみについては不明な点が多いが、これまでの気候変動の実態とその原因、とりわけ海洋の果たしている役割について述べ、最後に人間活動の気候変動におよぼす影響についてふれる。	浅井富雄（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
7	大気研究の歴史	日常身近かな天気の変化から地球規模の大気大循環にいたるまで、気象についての我々の知識や考え方がどのようにして養なわれ育ってきたかを、その発展の節目に重点をおいてふりかえり、併せて国際協力のもとで維持・展開されている世界の気象観測や予報の現状を示す。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	海洋探究の歴史	海洋の科学的探検の時代から現今の海洋実験の時代までにわたり、主として海洋と海底の構造と運動の面から探究の成果を概観し、海洋の科学へと誘うよすがとする。	寺本俊彦 （東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
9	海洋の大循環	海洋の物理現象の中でも特に顕著な海洋大循環について、その成因、構造について説明し、それらを更に深く理解する上で必須な課題である人工衛星からの観測や深層の循環の観測について述べ、関連する重要なトピックスである海洋－大気系の大規模変動や海洋温度差発電についてふれる。	同　上
10	波と潮汐	海洋では常に沖から岸に向って波が打ち寄せている。この波はどこで作られ、どのような性質があるのか、実験を行って説明する。特殊な波として、高潮と津波に触れる。次に潮汐のメカニズムと水理模型による瀬戸内海の潮流の研究について述べる。	木村龍治 （東大・海洋研・助教授） 奈須紀幸
11	海洋の物質循環	生物の活動を通じて、いろいろな元素が循環している。酸素、炭素、窒素に注目して、海の中に残された生物活動の軌跡をたどることによって、その動き、特徴などについて探る。生物生産や沿岸の富栄養化の問題との関係についてもふれる。	服部明彦 （東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
12	海洋の生態系	海洋の生物は大小の部分生態系に分れ、200 m以浅の浅海系には植物の光合成活動があるが深海系では微生物と動物のみとなる。沿岸域と外洋域とでは種類も生物量も異なるが、近年、内湾の有機汚濁が外洋にはみ出す傾向がみられる。	堀越増興 （元東京大学教授） 奈須紀幸
13	深海底の生いたち	深海底は中央海嶺で生れ、横に数cm／年の速さで移動しながらしだいに深さを増してゆく。海底が生れる場所には多数の割れ目があり、熱水が噴出して重金属を析出させていたり、溶岩が露出している所もある。マリアナトラフなど島弧の背後（陸側）にも小規模ながら海底が生れつつある海域がある。	小林和男 （東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
14	深海底の沈み込み	海溝は世界中で最も深い場所であるが、海洋のへりに細長く並んでいる。深海底はここから斜めに陸の下に沈み込んでいる。その形は深発地震や地震の波の伝わり方から確認されている。海溝の地形や沈み込みのようすは地域によって異なっていて、地震の起こり方や火山活動の歴史にも関係をもっている。	同　上
15	大陸棚の生いたち	大陸の周辺には海底傾斜のゆるやかな大陸棚がひろがっている。その外線の水深は、ほぼ120～140 m程度である。このような海底地形が生じたのは氷期・間氷期の繰返しに対応した海水準変動が原因であることが判明した。その経緯について説明する。	奈須紀幸

＝生態学概論＝

〔主任講師：岩城英夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

個体ー個体群ー群集の各レベルにおける生物と無機的環境、生物と生物との関わり合いを具体的事例をあげて講義し、生物的自然の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびその動的平衡についての理解を深める。講義を通じて生態学の基本的原理と概念を理解させ、また環境問題に対する生態学の視点も述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生態学とは ー序論ー	生態学とは何か。この講義の導入部として生態学の対象、方法および環境要因の捉え方などについて述べる。	岩城英夫 （筑波大学教授）
2	生物と光環境	生態系のエネルギー源である太陽光の分布と季節変化は生物の生活に大きな影響を与える。生物と光要因との関係を、光と植物の光合成・成長、光と動物行動との関連を中心に述べる。	同上
3	生物と温度環境	生物は種類により異なる温度限界と耐性温度を持っている。温度環境は地球上の場所により異なり、これに応じて生物の生活期間や分布が決められていることを述べる。	同上
4	生物と大気環境	大気の成分中、二酸化炭素は植物の光合成作用の制限要因になりやすい。酸素は水生生物の生活を制約する。生物と大気要因との関係を説明し、風や大気汚染の影響についても触れる。	同上
5	生物と水環境	陸地における水の分布と植物の水収支について述べ、植物の生育や分布にとって水が重要な制限要因であることを説明する。	同上
6	生物と土壌環境	植物の生育は土壌の物理的・化学的性質によって影響を受ける。一方、植物や土壌生物の存在は土壌の形成に大きな役割を果していることを述べる。	同上
7	気候と植生の分布	温度と降雨量の地理的分布に応じて、地球上にはさまざまなタイプの植物群系が分布している。生活形と気候条件との関係、過去の気候変化に伴う植生の変遷についても触れる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	個体群の成長と調節	生物の集団（個体群）における個体数は、有限の環境において無限に増加することは不可能である。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、その機構についてまず理論的に述べ、ついで実例を見ながら論じる。	藤井宏一（筑波大学助教授）
9	動物の密度効果と“なわばり”	有限の環境下において動物の個体数が増加すればいつかは過密の状態に達する。このような過密状態に対する動物の対応の仕方について論じる。また、過密を避ける機構、特に“なわばり”について、例を用いて論じる。	同上
10	競争と“すみわけ”	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か。その機構についてまず理論的に取り扱い、さらに、種間競争の結果として起こる“すみわけ”について、観察例を用いて説明する。	同上
11	植物間相互作用	植物の種内競争と種間競争の仕組みについて述べる。まず同種の植物間で起こる競争密度効果と自然間引について述べ、次に異種の植物間の競争の機構について説明する。	岩城英夫
12	捕食と、食うもの食われるものの関係	食うものと食われるものの関係（捕食関係）は生物群集内における生物相互作用の中でも一番重要な関係の一つである。まず捕食関係の動態に関する理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食関係の果す役割について説明する。	藤井宏一
13	絶滅と安定性	局所的に見た時、ある特定の生物種がその場に長期にわたって存続するとは限らない。その絶滅の機構は何か。生物種の生物群集の中での役割を論じつつ、各生物種の絶滅の可能性、そして群集そのものの安定性について論じる。	同上
14	植物の繁殖戦略	植物には一年生・多年生、草本・木本などさまざまな生活の仕方があり、それぞれ特徴的な成長・繁殖様式をもっている。異なった環境下でこれらの生活様式がどのような生態的意義をもつかについて説明する。	岩城英夫
15	生物群集の構造と組成	生態系の性格を決める上で最も重要なのは植物群落の種類組成と空間構造である。群落構造は生態系の微環境に影響し、また動物の分布もそれに対応して独特の群集構造を形成することを述べる。群集構造の季節的変化についても触れる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	生　態　遷　移	植物群落の種組成や構造が時間とともに変化する過程を遷移という。一次遷移、二次遷移の系列と最終的に到達する極相について述べ、遷移の機構について説明する。	岩　城　英　夫
17	植生の攪乱と更新	伐採など人間の干渉によって植生が破壊された時、二次遷移の過程により植生はまた回復する。この回では、人間の干渉と遷移との関係を二次林や草原を例にして述べる。	同　　上
18	物　質　生　産	生態系のエネルギーの流れにおいて植物（生産者）が果している役割を論じ、地球上の各種生態系による一次生産力とその効率について述べる。	同　　上
19	食物連鎖と栄養段階	生物群集において、捕食関係は何段にも積み重なっている。上位種の存在は下位種に依存する。即ち上位種は下位種からのエネルギー獲得によってのみ存在可能となる。群集構造をこのような観点から見た時、どのような全体像が考えられるかを論じる。	藤　井　宏　一
20	デトリタスと分解者	生態系の中の死んでいる有機物の堆積量はきわめて大きい。この回では、生物の遺体や排出物を分解する分解者の役割について述べる。	岩　城　英　夫
21	生物地球化学的循環	生物体を構成する元素は生物体と環境の間を繰り返し循環して使われる。この回では、地球的規模で循環する炭素、窒素、水の動きと、その循環系に対する人間活動の影響について述べる。	同　　上
22	栄養塩類の循環１ （森林）	陸上生態系、特に森林生態系内における栄養塩類の生物学的循環について説明し、森林伐採など人間による干渉が循環系をどのように攪乱するかを述べる。	同　　上
23	栄養塩類の循環２ （水界）	湖沼や水界をとりあげて、主な生元素（N、C、S、Pなど）で構成される栄養塩類の循環を、特に水界を構成する媒質である水の性質に着目しながら紹介する。気体型（N、C、Sなど）と沈殿型（Pなど）の循環を比較し、それぞれの特徴を考える。	高　橋　正　征 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	生態系の発達と安定性	遷移の進行に伴って生態系の特性は次第に変化する。遷移の途中段階と発達段階における生態系の構造・機能面の特徴を、エネルギー流、物質循環、種の多様性、系の安定性などについて比較して論じる。	岩城英夫
25	農業生態系1（エネルギー流と循環）	農業生態系は人為的につくられた生態系として、自然の生態系とは違った特徴をもっている。この回では、農業生態系におけるエネルギーの流れと物質循環系の特徴を近代的農業と伝統的農業と対比しながら説明する。	同上
26	農業生態系2（害虫防除の生態学）	人為的に作り上げられた農業生態系の中では競争、捕食関係のような生物相互作用が最も顕著に現われてくる。人間の目的を阻止しようとする害虫を防除するために、生態学的知識がどのように利用されてきたかを実例をあげて論じる。	藤井宏一
27	都市生態系	都市という人工的な生態系の中では気候環境も生物相もかなり変化する。この回では、都市化に伴う動植物相の変化について実例を挙げて説明し、また生物指標を用いる環境診断についても述べる。	岩城英夫
28	生態系の利用と環境保全	人間は生態系に依存し、生物資源を利用して生きている。生態系を良い状態で保存し、荒廃しないように利用、維持、管理し、自然と人間の共存をはかることが環境保全の目的である。この回では生物資源の適正利用と自然について述べる。	同上
29	環境汚染の生態学	生活環境保全のための科学（環境科学）への生態学的手法導入の意義を述べ、特に大気汚染の植物影響と緑地の大気浄化機能について説明する。また水質汚濁、土壌汚染についても触れる。	戸塚績（国立公害研室長）
30	人類と生態系ーまとめー	これまでの講義のまとめとして、生態系と人間生活との関わりあいについて、人口増加、食糧不足、環境破壊などの問題に触れつつ、多面的に論じる。	岩城英夫

＝現代資源論＝

〔主任講師：山口梅太郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

資源問題が論議されている割りには、鉱物資源について、例えば、鉱物資源と人間とのかかわり合いや、資源の分布や資源量の問題、資源を獲得し、利用するための技術、更に、わが国としてどう対応すべきかといったことがあまりにも知られていない。このセミナーでは鉱物資源の諸問題を、その開発と利用を中心に、技術的側面から概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	鉱物資源と文明	•道具の使用　•青銅器の発達　•鉄の時代 •資源とその利用	山口　梅太郎
2	成成の限界	•成長の限界　•石油20年説　•資源の価格と消費	〃
3	資源の有限性について	•地殻中の元素　•再生不可能な資源	〃
4	鉱床の分類と成因	•鉱床　•埋蔵(鉱)量と資源量　•鉱床の形成 •鉱床の分類　•マグマ鉱成床　•堆積成鉱床	武内　寿久禰
5	貴金属、非鉄金属資源	•金　•銀　•銅　•鉛・亜鉛	〃
6	構成材用金属資源	•鉄　•マンガン　•アルミニウム　•チタン	〃
7	鉄合金用金属資源	•錫・タングステン・モリブデン　•ニッケル・クロム　•コバルト	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	先端技術に必要な鉱物資源	•希土類（RE） •核融合発電 •リチウム（Li） •ベリリウム（Be） •ニオブ（Nb） •シリコン（Si）	武内 寿久禰
9	核燃料鉱物資源	•原子力発電に必要な地下資源 •ウラン鉱床の形成 •ウラン資源の偏在と資源確保 •放射性廃棄物の処分	〃
10	非金属鉱物資源	•近代産業を支える非金属資源 •石灰石 •ダイヤモンド •リン鉱 •蒸発岩 •粘土鉱物 •沸石 •流黄	〃
11	エネルギーと文明	•はじめに •エネルギー需要の推移と現状 •エネルギー需給の将来予測	冨永博夫
12	エネルギー資源	•はじめに •化石燃料資源 •核燃料資源	〃
13	天然ガス	•はじめに •天然ガスの探査、開発、生産 •LNGの生産と輸送 •LNGの用途 •LNGの冷熱の利用 •天然ガスのメタノールへの変換利用	〃
14	石油	•はじめに •石油の鉱床 •石油の探鉱 •石油の開発と生産 •石油の強制回収 •海底石油の開発	〃
15	石炭	•はじめに •石炭の成因と分類 •石炭の生産と供給 •石油の利用技術の開発	〃

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	オイルサンド	•はじめに　•オイルサンド資源の埋蔵量 •オイルサンド鉱床の特性　•採収技術 •ビチュメンの精製	冨永博夫
17	オイルシェール	•はじめに　•オイルシェールの資源埋蔵量 •オイルシェールの性状　•採掘と乾留の技術 •精製プロセスと製品	〃
18	わが国の鉱物資源とその確保	•日本は資源のない国ではない　•鉱物資源の輸入　•資源確保の方策	山口梅太郎
19	鉱物の探査と評価	•鉱床探査の必要性　•山相学　•地質調査 •物理探査　•地化学探査　•試錐　•数理地質学の応用　•海外における探査	武内寿久禰
20	鉱山の開発　(Ⅰ)	•合理的な開発	山口梅太郎
21	鉱山の開発　(Ⅱ)	•坑内採掘　•採鉱法　•坑内環境の整備	〃
22	鉱山の開発　(Ⅲ)	•特殊な方法による鉱物資源の採取　•採掘作業のロボット化	〃
23	鉱石の処理　(Ⅰ) ー処理のフローー	•鉱石の事前処理　•フルイ分けおよび分級	井上外志雄

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	鉱石の処理　(Ⅱ) ー物理的分離の原理と方法	・比重選別　・静電選別　・磁力選別　・色彩選別	井　上　外志雄
25	鉱石の処理　(Ⅲ) ー物理化学的分離の原理と方法	・浮遊選別	〃
26	鉱石の処理　(Ⅳ) ー製　錬	・乾式製錬　・湿式製錬	〃
27	海から得られる鉱物資源	・溶存鉱物資源　・陸上から海底へ連続する鉱床　・海底の堆積鉱床　・深海底熱水鉱床	山　口　梅太郎
28	未利用資源とリサイクル	・未利用資源　・低品位資源の開発　・自然エネルギーの利用　・廃棄物利用　・リサイクル ・再資源化の問題　・再資源化の技術	井　上　外志雄
29	資源開発における情報処理	・探査情報の処理　・鉱山開発とＯＲ手法 ・原料の配合とプラントの自動制御	〃
30	資源開発と環境問題	・資源開発に伴う自然環境の破壊　・資源利用と環境保全との調和	山　口　梅太郎

＝現代物理学Ⅰ＝

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

物理学は20世紀のはじめの30年間に大きく変った。それまでの、ニュートンの力学とマクスウェルの電磁気学を二本の大黒柱とした古典物理学が、相対性理論と量子力学に席をゆずったのである。この講義では、その必然性をしらべ、変革の深さを測って、現在の物理学の動きを見定めたい。探究は依然つづいているのだから。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	力学的世界観	古典物理学の二本の大黒柱の一方をなしたニュートン力学の構造を復習する。それは、初期条件と力の法則、運動方程式の三つ組を骨として未来を決定論的に予言する。一時は、これによって宇宙の万象を運動に還元して捉えきることができるとさえ思われたのだが？	江沢　洋（学習院大学理学部教授）
2	電磁場と光	第1回に引きつづき、古典物理学のもう一方の大黒柱であったマクスウェルの電磁気学の構造を復習する。ここでは、力学の主役であった粒子にかわって「場」が登場するが、初期条件と運動方程式から未来を決定するという論理は変わらない。光も場の伝播である。	〃
3	相対性理論	光の本性の追及から時間と空間の概念の根本的な再検討が必要になり、相対性理論が生みだされた。それは同時にマクスウェルの電磁場の法則に潜んでいた美しい対称性をあらわにすることであり、それを力学にも及ぼすとニュートンの法則を変革することにもなった。	〃
4	電子の発見と物性の電子論	ニュートンの力学は、けた別の面から、物質の基本的構成要素の発見にともない構造の変革を迫られることになる。はじめ電子があらゆる物質に共通な構成要素と知れたときにはその運動を力学と電磁気学で解析すれば物質の電気的〝光学的性質は理解できそうで……。〟	〃
5	放射能の発見	物質の構成要素の発見は、新現象の発見に裏打ちされながら進んだ。連鎖反応である。放射能の新らしさは次の3点に要約される：不変と信じられていた元素の壊変をともなうこと、真空放電や化学反応に比べてエネルギーが桁はずれに高いこと、偶然事象であること。	〃
6	原子核の発見と原子の安定性	放射能のもたらす高エネルギー粒子を物質に打ちこんで探針とし内部構造をさぐる研究が原子核の発見に結実した。しかし、微小な原子核をはるか離れて電子がとりたこむという構造は、古典物理学にしたがうかぎり安定に存在し得ない。これは物理学にとって難問だ。	〃
7	量子の発見	物質が光を放出したり吸収したりする現象においても古典物理学は窮地に追いこまれていた。プランクは熱した物体のだす光の色の問題で光はエネルギーの定まった塊であると考えざるを得なくなり、マクスウェル理論との折り合いに悩んだ。光は粒子なのだろうか？	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	原子の模型と対応原理	アインシュタインは力学的振動のエネルギーも不連続だとして、固体比熱の謎を解いた。電磁気学と力学の両方に現われた古典物理学の限界を、ボーアは原子の模型に集約した。原子の世界は古典物理の世界と対立するが、互いの移行関係にも注目せねばならない。	江沢　洋（学習院大学理学部教授）
9	行列力学と波動力学	ボーアの対応原理の数学的含意をハイゼンベルクは行列力学として取りだした。他方、シュレーディンガーは、波動と粒子の対立を物質粒子にまで押し拡げたド・ブローイーの飛躍を数学的に整備して波動力学を発見した。二人の主張は方法論上でも鋭く対立していた。	〃
10	量子力学的世界像	行列力学と波動力学とは、見かけの相違にもかかわらず、一つの体系の二つの異なる表現であることがわかり、量子力学に統一された。その世界像は、古典物理学におけるそれと根本的にちがっている。粒子は位置と速度の両方を同時にもつことができず、波動は……。	〃
11	原子の構造と化学結合	量子力学によって、原子の構造は歯車仕掛けの機械などと同じように精密に計算できるようになり、周期律をはじめとして諸性質の謎が解けた。原子たちが互いに結合して分子を作る仕組みもわかり、化学は物理学の翼下に入った。いまや分子の設計も可能である。	〃
12	物性物理学	電子と原子核が多数 — 一億の一億倍のそのまた一億倍といった個数 — 集まった系の物理的な振舞いも量子力学で計算し予言することができる。こうして、固体の電気的性質の理解が進んだ。これがトランジスタの発明を生み、今日のエレクトロニクスをつくった。	〃
13	原子核の内部	原子　分子・固体の構造の解明に成功した量子力学も原子核の内部には適用できないのではないかと思われた時期もある。その多くの謎も中性子の発見と中性微子の仮説で解けた。量子力学は放射能の謎であった本質的偶然性を説明し、核種ごとの安定・不安定も解明。	〃
14	素粒子の世界	原子核のベータ放射能の特徴的スペクトルから中性微子の存在が推論されたのに続いて、湯川秀樹は原子核をひとかたまりに結び合わせている力の特質から中間子の存在と性質を推論し、量子物理学に新分野を開いた。今日では素粒子の内部構造が議論されている。	〃
15	場の量子論	量子力学は光と電子の相互作用の問題から始まったが、いまやその理論は相対性理論の要請にもあう形に美事に整備され、実験とも他に類を見ないくらいよく一致している。しかし、この理論には本質的な欠陥があり、それを克服する多くの努力は未だ成功していない。	〃

＝現代物理学 II ＝

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

現代物理学 I で得た量子力学的世界に対する理解を、より現代的な話題に即して深める。テレヴィ放送を生かすため、最先端の研究をしている実験室の訪問を多くしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	結晶	物質は粒子の集まりだという認識が現代物理学の出発点である。それらの粒子は、原子なら直径にして百億分の一メートル、原子核ならその十万分の一、そんなに小さい粒子たちのことがどうしてわかったのか？　雪の結晶からはじめて考えを進めてみよう。	江沢　洋 実験 黒田登志雄 北大、教授 低温研
2	電子と原子核の発見	電子も原子核も、机の上にのる小さな手づくりの実験装置で発見された。しかも古典物理学をあやつって！　どんな実験とどんな論理がつかわれたのか振りかえって、これからの勉強の足場を固めよう。	江沢　洋
3	光の本性	光は波であるといわれ、また粒子であるといわれて、歴史上に争いが続いてきた。それを現代の眼で見たらどうなるか？　実験をしながら考える。	江沢　洋 実験 窪田健二 お茶の水女子大 助手　理・物理
4	電子に見る粒子性と波動性	電子も、しかるべく舞台を設定すれば波のような振舞いを見せてくれる。では、そのとき粒子らしさはなくなってしまうのか？　最近、技術が非常に進んで、位相のよくそろった電子の波がつくれるようになったので、美事な実験がお目にかけられると思う。	江沢　洋 実験 外村　彰 日立　基礎研 主任研究員
5	原子の量子力学	原子の内部では電子の波動性が顕著に現われる。その理解に立つと、原子内部の電子たちを操り人形のように自在に動かすことができる。たとえば化学的に不活性といわれている希ガマの原子も、そのなかの電子を操って化合させることができるのだ、その実験。	江沢　洋 実験 小谷正博 学習院大　教授 理学部　化学教室
6	分子の構造	原子たちの化学結合の仕組みを明らかにしたことは量子力学の大きな成果の一つである。つまり、分子のなかは量子力学の世界、そこをX線や電子線で見たらどう見えるのか、そこに見える姿は何をわれわれに語っているのか、コンピューターの画像と対照して説明。	江沢　洋 実験 飯島孝夫 学習院大　教授 理学部　化学教室
7	量子力学的な運動とは (1)	原子や分子の「定常状態」では、電子が運動していないわけではないが、それは見えない。量子力学の世界にも運動があらわになる現象もあるので、それが特に顕著なものを取り上げて、コンピューター・アニメーションで見ていただく。まずは、トンネル効果など。	江沢　洋 （コンピューター・アニメーション）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	量子力学的な運動とは (2)	前回の続き。散乱、光の放出と吸収。	江沢　洋 （コンピューターアニメーション）
9	固体の中の電子	結晶のなかでは原子が規則的に、周期的に並んでいるので、そこを走る電子は周期的な力をうける。この場合、量子力学によると、電子は原子たちに散乱されることなしに直進することができる。その様子から電気の良導体、半導体、絶縁体の区別も生ずるのだ。	江沢　洋 実験 森垣和夫（交渉中） （東大　教授　物性研）
10	半導体	現代のエレクトロニクスは半導体の量子力学的な特質をフルに利用している。特に、強い電場をかけてその表面に電子たちを押しつけた系（MOS素子）は、電子の密度を人が意のままに制御することのできる理想的な「実験室」である。基礎物理学から応用まで。	江沢　洋 実験 川路紳治 （学習院大　教授　理学部化学教室）
11	相転移	固体や液体は、温度をゆっくり変えてゆくと体積や電気伝導度など性質がなだらかに変化する。しかし、水が氷になるときのように、特別の温度では性質がガラッと変わる。これが相転移である。そのとき原子の世界では何が起っているのか？　アニメーションを混えて。	斉藤基彦 （東大　助手　教養学部物理教室） 実験 湊 （凸版印刷）
12	極低温	温度というのは、原子の世界のざわめきの指標である。温度を下げてゆきながら原子たちのざわめきの変化を聴いてみよう。そのとき電気低抗などの物性はどう変ってゆくか？　極低温に達すると電気抵抗がストンと0になる。これは超伝導状態への相転移である。	江沢　洋 実験 吉広和夫 （電子技術総合研究所）
13	超流動	極低で液体ヘリウムが相転移をおこし粘性を失なう現象。そのとき、流体の常識に反するさまざまの舞いが見られる。これらも、しかし、ちゃんと量子力学の法則にしたがい、起るべくして起っていることなのである。そうわかるまでには何十年もかかったのだが。	江沢　洋 実験 小林俊一（東大教授） 池畑（東大助教授） （理学部物理教室）
14	高エネルギー現象	素粒子の内部構造や相互作用を研究するには、それらを高いエネルギーで衝突させて反応を見る。エネルギーが高いほど微細な世界が見えるというのが物質の波動性の帰結である。そのため年々、加速器が巨大化する。その実験の現場に行ってみよう。	江沢　洋 実験 高橋嘉右 （高エネルギー物理研究所教授）
15	宇宙の成り立ち	20世紀の物理学は原子から原子核の内部へ、そして素粒子の構造へと極微にむかって進んできたが、核反応が星の進化と元素の生成に関わり、さらに最近では素粒子の対称性や反応が宇宙の始まりに関わることがわかって、極微が極大に結びついた。	江沢　洋 実験 海部宣男(交渉中) （野辺山云宙電波観測所） 杉本大一部(交渉中) （東大教授、教養学部）

＝物質の科学Ⅰ＝

〔主任講師：田丸謙二（東京理科大学教授）〕

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	空気 (1) －気体の概念と発展－	空気が気体として認識されてから、どのようにその実体が明らかにされて来たかの歴史を述べる。気体が原子や分子から形成されているという概念に到達した実験的・理論的根拠を明確にする。理想気体、実在気体と臨界現象についての関連にもふれる。	朽津耕三（東大 理・教授） or 近藤保（東大 理・助教授）
2	空気 (2) －成分と性質－（その1）	気体の巨視的な性質を示す状態方程式が、微視的な性質から気体分子運動論を用いてどのように説明されるかについて述べる。気体粒子間に相互作用が存在するとき、理想気体の状態方程式がどのようになるかを示し、臨界現象などを説明する。	朽津耕三（東大 理・教授） or 近藤保（東大 理・助教授）
3	空気 (3) －成分と性質－（その2）	空気の成分分子による発光、吸収スペクトル回折現象などについて述べる。電波天文台によって観測された星間分子のスペクトルなどを示す。このようなスペクトルを解析することによって、どのように分子の構造や内部状態が解明されるかを示す。このような解析の基礎となる量子力学的な理論を平易に解説する。	朽津耕三（東大 理・教授） 海部宣男（東大 理・助教授）
4	空気 (4) －その反応－	空気中で一番重要な燃焼反応について、原子・分子の立場から説明する。	土屋荘次（東大 教養・教授）
5	空気 (5) －その反応－	環境化学の立場から、光化学スモッグの発生に関連した光化学反応の初期過程を考察する。このような反応過程理解の基礎となる簡単な反応理論（あるいはモデル）について、平易に解説する。	〃
6	空気 －現在の進歩と将来－	現在、これら分子の構造や反応の研究はどこまで進んでいるか、最新の話題は何かについて概観する。レーザー、分子線、質量分析器などを用いた最新の研究例を紹介し、どのような方向を研究しようとしているか、そのねらいなどについて述べる。	R. N. Zare（スタンフォード大・教授） 朽津耕三（東大 理・教授） 土屋荘次（東大 教養・教授） 近藤保（東大 理・助教授）
7	存在状態と物性の特徴	地球と宇宙における水の存在様式と量について述べ、次に近代科学の発展とともに水に関する知識とその利用がどのように進んできたかを概説する。水が特殊な物性をもつ化合物であることを類縁化合物との対比から明らかにする。	田隅三生（東京大学理学部教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	状態図と水溶液の性質	水蒸気、水、氷の状態図とクラウジウスークラペイロンの式、蒸気圧降下、沸点上昇、共沸、凝固点降下、寒剤、溶解度、電離、PH、移動度、当量電導度などについて概説する。	田隅三生（東京大学理学部教授）
9	水分子と氷の構造	自由分子としての水分子の分子構造とその決定法、氷の結晶構造とその決定法、水分子の電子構造と双極子モーメント、水素結合の本質について述べる。重水についてもふれる。	〃
10	水の構造と界面現象	液体としての水の構造とその研究法について述べ、物性との関連性を考察する。粘性、表面張力、単分子膜、ミセル形成、界面活性剤の作用などを概説する。	〃
11	生体物質とのかかわりあい	生体物質、とくにタンパク質と生体膜の構造と機能が水の存在とどのようにかゝわりあっているかを考察する。	〃
12	食塩 (1) 結晶構造をきめる	結晶の構造、また結晶をつくっている分子の構造はどのようにしてわかるかを食塩を例として説明する。波の回折の原理を学んだあと結晶によるX線の回折の実例を見る。	小谷正博（学習院大 理・教授）
13	食塩 (2) 弾性と振動	結晶の中で原子や分子は静止しているわけではない。熱は物質の中で振動としてたくわえられているし、また音は物質のなかを波として伝わってゆく。このような振動やまた物体に力を加えたときに起る弾性変形が原子間の力とどのように関係しているかを述べる。	〃
14	食塩 (3) 光学的性質	食塩は目に見える光に対しては透明であるがある波長の赤外線に対しては強い吸収を示す。また食塩の屈折率は波長によって異る。光が物質を通りぬけるときに起るこれらの現象がどのように物質の構造と結びつけて理解されるかを解説する。	〃
15	ソーダと塩素	食塩は化学工業における主要な原料の一つでソーダ灰、か性ソーダ、塩素などの無機薬品がつくられ、ガラス製品、繊維製品、医薬品、などの製造、上水道の滅菌など広く利用されている。ソーダと塩素の製法と利用について説明する。	笛木和雄（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	白金の王—鉄 —転位論—	i）鉄は諸々の金属の中でも最も重要な位置を占める。ii）鉄の特徴を合金化、相変態、焼入性、加工性、集合組織、等で述べる。iii）鉄と鋼の定義。iv）鉄の結晶構造。v）現代製鉄法の概要、鉄鉱石の還元による銑鉄の製造と酸素精錬による鋼の製造法を簡単に述べる。	田中智夫 川崎製鉄㈱エンジニアリング事業部研究開発センター所長
17	鉄の強度 —鉄の百面相—	i）鉄の塑性変形挙動と降伏強度、引張強度の定義。ii）クリープ強度、疲労強度の概念。iii）理論強度と実際の材料強度との離。iv）転位論の概要。転位モデルによるすべり変形。Zranck-Read源、部分転位と交叉すべり、多結晶体の構造と降伏のメカニズム、等を述べる。	〃
18	鉄合金	i）鉄合金の成り立ち。ii）状態図の熱力学と状態図の読み方。iii）鉄－炭素2元状態図とその重要性。iv）相変態の概要。拡散変態と非拡散変態、特にマルテンサイト変態の特徴を述べる。v）連続冷却変態図。vi）各種熱処理法。vii）ミクロ組織と機械的性質の関係。	〃
19	鋼の高機能性の代表例	合金設計と製造プロセス制御により機能性の高い鋼を作ることが出来る。i）低温靱性の優れた鋼－脆性破壊のメカニズムと低温靱性。ii）形状記憶合金－熱弾性マルテンサイトの利用。iii）集合組織制御－（111）集合組織による深絞り用鋼とGoss方向による方向性珪素鋼。	〃
20	炭素 (1) —混成軌道—	有機化合物の中心元素である炭素原子の結合様式をSP^3、SP^2、SP純成軌道について説明する。これらの結合をもつ典型的な化合物、ダイヤモンド、グラファイトの性質、興味ある点をとりあげる。	池本勲 （東京都立大学・理学部教授）
21	炭素 (2) —分子内部回転と回転異性体、幾何異性体—	炭素－炭素の単結合および2重結合のまわりの内部回転について説明し、内部回転ポテンシャルの形、ポテンシャル障壁の高さと回転異性体、幾何異性体の存在との関係を明らかにする。鎖状分子、合成および天然高分子、生体高分子の分子構造との関連にもふれる。	
22	有機化合物の多様性	有機化合物の主な骨格は炭素と水素からできているが、これに、酸素、窒素、硫黄、リンなどのいわゆるヘテロ原子が加わることにより、真に有機化学の特徴である有機化合物の多種多様性が実現できることを、原子団、官能基などの概念によって系統的に説明する。	野田春彦（放送大学教授） 田隅三生（東京大学教授）
23	光学活性体の有機化学	右手型と左手型という、立体的・空間的な分子構造の差異によって生ずる光学異性体の世界を、糖、アミノ酸、抗性物質など身近な例から題材をとりあげて解説する。あわせて、分子模型の使い方、絶対配置の表示法、光学活性体の作り方などについても解説する。	武井尚 （東京工業大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	生体を構成する有機化合物	炭水化物、タンパク質、アミノ酸、脂質、核酸など、生物体を構成する主要物質の構造とその役割を明らかにし、これらの物質に対する有機化学的な研究方法と、その成果および生命化学における今後の役割について展望する。	畑辻明（東京工業大学教授）
25	分子を彫る	有機化学は、生命の合成能力に対する畏敬・あこがれ・挑戦というような気持が入り混って発展してきたが、近年において、独自の合成手法の発展も著しい。多種多様な有機化合物をいかに自在に合成できるようになったか、その最新の手法と考え方を解説する。	向山光昭（東京大学教授）
26	高分子の特徴	繊維、プラスチック、ゴム等日常生活に欠かせない材料として数多くの合成高分子物質が使われている。一方、核酸、タンパク質、多糖は生物にとって必須の高分子物質である。これらの用途、機能にとって高分子であることはどんな意義があるのかを考える。	井上祥平（東京大学工学部教授）
27	高分子の構造と性質	高分子物質の性質の特徴の一つは、熱的性質、力学的性質、電気的性質などの物理的性質にあり、これが用途の基礎ともなっている。ここではこれらの性質が高分子化合物の分子構造、および分子の集合体の構造とどのように関連しているかを考える。	〃
28	高分子をつくる	高分子化合物はどのようにして合成するか、その分子の大きさはどのような要因で決まるか、分子の構造を制御するにはどんな方法があるかを考える。また実際の高分子材料をつくるに当たって、フィルムや糸はどんな方法で成型・加工するかについても触れる。	〃
29	高分子の反応	高分子の化学反応によってまったく新しい高分子をつくり出したり、部分的反応によって性質を変化させたりすることができる。ここでは高分子の化学反応の特徴とその応用について考える。物理的性質の特徴と化学反応性を組合せた機能性高分子の例にも触れる。	井上〃祥平
30	まとめ		田丸謙二（東京理科大学教授）

＝ 脳 と 行 動 ＝

〔主任講師：伊藤正男（東京大学教授）〕

全体のねらい

脳の研究は、現代生物科学の極めて重要な課題の一つであり、その医学上の応用や人工知能開発への波及効果に対する期待も大きい。この講座では、現在自然科学の手法を動員して行われている脳の研究の成果をもとに、脳の構造とその働き方の仕組みを解説する。更に、脳と行動の関わりを考察し、脳と心の問題に言及する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	脳の働き	脳とは一体何であろうか。動物の行動に現われるその複雑で精妙な働きは如何にして生まれるのであろうか。そして、どのようにして脳は遂には我々の精神の担い手になるのであろうか。現代の自然科学はこれらの問いにどう答えるのであろうか。	伊藤正男（東京大学教授）
2	ニューロン	脳は膨大な数のニューロンから成っている。ニューロンは電気信号を発生し、伝播させ、特殊な化学物質を分泌して相互に情報を伝え合う。ニューロンとニューロンの間をつなぐシナプスは脳の働きにとって最も重要な微細構造である。	同上
3	脳の構造	多数のニューロンとその突起が集まって核と呼ばれる集塊を作り、また、美麗な皮質構造を作る。脊髄、延髄、小脳、橋、中脳、間脳、大脳と呼ばれる脳の各部分は、それぞれ特徴のある構造をしており、脳の働きの上で違う役割を分担している。	同上
4	反射系	脳の働きのもっとも底辺にあるのが反射である。われわれの日常行動には数多くの反射が含まれている。多数の反射をうまく組合わせて実施する働きは脳に特有のものである。反射における信号の伝わり方を調べてみよう。	同上
5	脊髄下降路	延髄より上位の中枢から脊髄へ何本もの下降路が降りていく。これら下降路の信号は、自動車のギアのように脊髄で行われている反射を活動させたり、停止したり、種類を切り換えたりする働きがある。代表的な下降路の構造と作用を調べる。	同上
6	小脳	小脳は直接、あるいは脊髄下降路を介して間接に反射系につながり、反射の働きを正確な、円滑なものにする。環境状況に応じて反射を適応的に修正したり、多くの反射活動の協調をとるのも小脳の役目であり、所謂運動学習の中枢となっている。	同上
7	大脳基底核	大脳の深部にある幾つもの核の集合体で、運動の自動的な制御の中枢である。これが病気で侵されると、いろいろな型の不随意運動が起ってくる。大脳基底核は運動制御における自動的な安定装置の役を担っているようである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感覚系	皮膚、目、耳、鼻、舌で受けたいわゆる5感の情報は神経信号に変えられて上位の中枢へ送られる。脳はどのようにしてこれらの情報を分析し、われわれが身を置いている外界のイメージを脳の中に作り出すのであろうか。	伊藤正男
9	随意運動	われわれは意のままに運動を行うことができるが、その仕組みはどうなっているのであろうか。大脳の運動領野で生まれた司令信号が脊髄に送られて運動を引き起す過程を分析してみる。	同上
10	情動	われわれの感情の根底にあるのは、外界からの刺激に対する生物学的な価値判断である。益になるものは喜びを、害になるものは怒りや怖れを引き起す。この価値判断機構は視床下部にあり、大脳辺縁系に助けられて働くと思われる。	同上
11	本能行動	摂食、飲水、性行動など本能的な行動は情動と密接な関係があり、大脳辺縁系、視床下部が中枢として働く。視床下部を中心に広がる報酬系、罰系とよばれる脳の領域には行動の結果に対して報酬が与えられたか否かの判断機構がある。	同上
12	睡眠と覚醒	通常の睡眠はノンレム睡眠と呼ばれるがこれが時折レム睡眠と呼ばれる別の型に切り変わる。覚醒とこれら2型の睡眠のリズムが作り出される脳内の仕組みについて考えてみよう。合せて脳内にある生物時計のはたらきを調べてみよう。	同上
13	記憶と学習	脳の記憶装置は、使い方によって信号の伝わり方が変化する可塑性シナプスにより作られている。最近、幾つかの可塑性シナプスの働き方が判ってきた。これらのシナプスが神経回路網に組込まれて脳の学習機能が生まれる。	同上
14	大脳連合野	大脳皮質の感覚野、運動野の間を占める連合野は動物が高等になるにつれて発達し、人間では大脳表面積の大半を占めるに至る。ここに言語野が生まれ、認識、思考、直観的判断、行動のプログラミング、自我意識などの高次機能が含まれる。	同上
15	脳と心	反射に始まって大脳連合野まで、脳の構造と機能について一歩一歩登ってきたが、最後に「脳と心」の問題を考えてみよう。われわれの心は果して脳の働きとして最終的にとらえうるであろうか。	同上

＝ 生 命 の し く み Ⅰ ＝

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

生物はさまざまな物質からできている。これらの物質の働きによって、生物の活動が支えられている。この点をいくつかの例によって示し、これらの生体内物質の特徴的な性質と機能を説明し、生化学の基礎的な内容を紹介する。特別な予備知識は必要ではないが、初歩的な化学の用語を理解できることが望ましい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生体に含まれる物質	タンパク質、脂質、糖など、生物をつくり上げている物質の主な特徴と構造について説明する。これらの物質の構成成分であるアミノ酸、糖について解説し、それらが結合して高分子物質となることを取りあげる。	木 原 弘 二（慶応義塾大学教授）
2	生体内の高分子物質	タンパク質、核酸、多糖類について、その構造、とくに立体的な分子の形をとりあげて、これらの物質の働きとの関係を説明する。今後の話題となる具体的な例について考える上で基礎となる知識を述べる。	野 田 春 彦（電気通信大学教授）
3	栄養のとりこみ	食物の形で体内に入った物質が消化され、化学的な変化を受けて、身体の成分として組み入れられたり、エネルギー源として分解されたりしている。これらの反応の説明を通して、酸素の働きについて述べる。	木 原 弘 二
4	代 謝 ― 遺伝病(1) ―	身体の中で起こっている化学的な変化は、すべて酵素の作用によって進行している。この酵素に欠陥があると、その反応が進行しないために、さまざまな障害が生じる。この酵素の欠陥が遺伝的に決定されている二三の例を紹介する。	同 上
5	タンパク質の構造	酵素の外にも、大切な働きをしているタンパク質が多数存在している。ヘモグロビンは、酸素を結合して運ぶタンパク質で、その遺伝的に異常な形に変ったために生じる障害の例として、鎌型赤血球貧血症について説明する。	同 上
6	呼 吸 の し く み	生物のさまざまな活動は、すべてエネルギーを消費して進行している。これらのエネルギーの源泉は、細胞内での糖と脂肪の酸化的分解によって得られている。この分解過程は多数の酵素による反応段階を経て進み、各段階での産物が、別の物質の素材として利用される。	同 上
7	エネルギーの利用	呼吸によって得られたエネルギーは、ＡＴＰの形で、細胞のさまざまな活動に利用されている。細胞内への物質の吸収、筋肉の収縮、神経における刺激の伝達などを例として、ＡＴＰのエネルギーが利用されているしくみを説明する。	丸 山 工 作（千葉大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	タンパク質合成	タンパク質は、どの個体においても、毎日合成されている。このタンパク質合成反応のしくみを説明し、遺伝子としてのDNAが、タンパク質の構造、つまりアミノ酸の結合順序を決定している点を紹介する。	木原弘二
9	調　　節	タンパク質はつねに合成されているが、すべての種類のタンパク質が合成されているわけではない。状況に対応して、一定のタンパク質が合成されたり、合成が停止したりするしくみが働いている。この例を通して、調節といわれている生体の働きの一面を紹介する。	同　上
10	脂　　質 — 遺伝病(2) —	細胞が合成している物質には、細胞の構造に大切な糖や脂質があるが、これらの物質の分解が正常に進行しないために、早期に死亡したり発育異常を招くことがある。粘液多糖類蓄積症、糖脂質蓄積症を紹介する。	同　上
11	生物界における元素の循環	すべての生物界の有機物質は、もともと太陽からの光のエネルギーを、植物が利用して、二酸化炭素を糖に変える光合成反応にもとづいてつくり出されたものである。この反応と窒素化合物の生物界での利用、分類の過程について述べる。	同　上
12	細胞と細胞膜	細胞は、核、ミトコンドリア、小胞体などさまざまな構造が含まれていて、それぞれ機能を分担している。これらの存在にとって、膜構造が基本的なもので、膜の構造、その働きについて紹介する。	長野　敬 （自治医大教授）
13	細胞の増殖とDNAの複製	タンパク質の構造を指定しているDNAは、細胞の分裂とともに、同一の分子が均等に子孫の細胞に伝えられてゆく、このDNA分子が、同一の構造を維持して合成されていくしくみについて解説する。	木原弘二
14	遺伝子工学	最近話題になっている遺伝子工学の現状を紹介するとともに、遺伝子を意のままに組み換えたり、大腸菌で増殖させたりする技術を紹介し、ヒトの遺伝子のDNAの構造がいくつかの例で明らかにされていることを述べる。	同　上
15	物質系としての生命	全体のまとめとして、生命現象は、生物特有のタンパク質、DNAなどの物質の存在なしには考えられないこと、その機能の遂行に必要なエネルギー、および情報の役割にもとづいていることなどから、物質と生命の関係を改めて考察する。	木原弘二 長野　敬 野田春彦 丸山工作 （対　談）

＝ 生 命 の し く み Ⅱ ＝

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

“生命のしくみ — 化学の立場Ⅰ”で一通り学んだ点を基礎知識として、これらの知識の根拠を改めて確かめ、また、補充発展させることを目的としている。主に、個々の独立した問題を取り上げて、基礎的な紹介では触れることのできなかった点を検討し、現代の生化学が直面している問題を二・三紹介する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	物質観と生命観	物質についての考え方をギリシャ時代から中世、近代へと辿り、その間、生物の働きについて生命に特有な力やしくみが考えられてきたことを紹介し、現代での考え方と対比させてみる。	木原弘二（慶応義塾大学教授）
2	有機化学の確立	18世紀末ごろから、多数の有機化合物が発見され確認されてきた。19世紀初頭は、無機化合物の研究が華々しい成果を挙げていた頃で、無機物質と有機物質との区別が明確になり、その後の生化学の発展の方向が確かめられていった。	同 上
3	尿酸と痛風	尿酸は、精製され確認された有機化合物の最初のものの一つである。この物質の血液中濃度が高いと、痛風の発作がおこる。ヒトという生物に特有の二つの事情が、この病気の起こるための条件となっている点を解説する。	同 上
4	ビタミンC	私たちの健康な生活には、適量のビタミンを摂取する必要があるが、ビタミンの必要性が明らかにされてきた研究の歴史は、物質を研究する上での考え方を教えている。ビタミンCを例にして、この点を紹介する。	同 上
5	コラーゲン	ビタミンCの欠乏で、もっとも影響を大きく受けるのは、コラーゲンである。このタンパク質は、特殊なアミノ酸が含まれている点、アルファ・ラセン構造が主構造となっていない点など、標準的なタンパク質と異なっている。	同 上
6	ＡＢＯ型物質	赤血球の表面には、さまざまな血液型を決定している物質が存在している。血液型については、ＡＢＯ型が最初に発見された（1801）。しかし、この型を決定している物質が確認されたのは約半世紀後で、この例について糖脂質の研究を紹介する。	同 上
7	組織移植適合性抗原	腎臓移植などの臓器移植の際に問題になるのは、移植片に対する拒絶反応である。この免疫現象には、白血球の細胞膜表面の抗原が関係していて、その抗原型はきわめて多数で、A、B、C、D、DRの5群に分類されている。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	タンパク質の細胞内分解	タンパク質は、赤血球などの場合のように、細胞全体として分解される場合の外にも、細胞の内部で絶えず分解されている。細胞内タンパク質が分解される過程では、それぞれのタンパク質は異なった速さで分解され消失していく。	木原弘二
9	アンチ・トリプシン	白血球の働きのためには、タンパク質を加水分解する酵素が必要であるが、その過剰な作用を防ぐために血液中には、タンパク質分解酵素を阻害するタンパク質が存在していて、このタンパク質の遺伝的変異型の人では肺気腫が起こりやすい。	同上
10	酵素活性の調節	酵素の活性は精妙なしくみで調節されている。肝でのグリコーゲンの分解と合成に関係している酵素系と、窒素を含む化合物の合成の出発点ともいうべきグルタミン合成酵素を例として取り上げる。	同上
11	ホルモン放出因子	ホルモンによるさまざまな身体のしくみの調節について、そのホルモンの産生が視床下部から放出される別のペプチドによって支配されている。副腎皮質刺戟ホルモン（ＡＣＴＨ）の放出因子などについて述べる。	同上
12	水	生物体の大部分は水である。水という物質はきわめて特別な物質で、この特殊性が生物の示すさまざまな現象の基盤となっている。そのため、水の補給は生命の維持に不可欠であり、この点をきわだった形で示しているのが脱水症状である。	同上
13	ヘモグロビン遺伝子	ＤＮＡ分子を切断し、適切に結合し直す方法を用いて、動物、とくにヒトの遺伝子を純粋にすることができるようになり、その構造を究明することが可能となった。ヘモグロビン遺伝子を例として、この分野の研究の現状を紹介する。	同上
14	放射線の作用	放射線の作用には、さまざまな型があるが、ＤＮＡ分子に対する影響が、もっとも詳細に研究されている。細胞には、生じたＤＮＡ分子の損傷を修復するしくみが具わっている。大腸菌と、ヒトの培養細胞を利用して得られた成果を紹介する。	同上
15	生命と物質	これまでの講義全体をふりかえって考察し、物質についての研究から、生命現象が究明されてきた成果をまとめて考察してみる。このことは、とりもなおさず、生命についての考えを改めて整理することになるであろう。	同上

＝ 集 団 遺 伝 学 ＝

〔主任講師：松永　英（国立遺伝学研究所長）
　　五條堀孝（国立遺伝学研究所）〕

全体のねらい

集団遺伝学は、個体の集まりである集団を対象として、その遺伝的構成がどのような法則に支配され、時とともにどのように変化していくかを追求する学問で、究極的には生物の進化機構の解明を目的としている。この学問は現在、高度の数学的理論体系を軸として各種生物集団における観察結果（とくに分子レベルの変異）の解析と理論の検証を行っている。本講義では、放送大学の趣旨にのっとり、集団遺伝学のあらましの一端をできるだけ平易に、そして人間とのかかわりを念頭において、解説してゆきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	遺伝の基礎	遺伝の基礎となる実態と概念－例えば遺伝子染色体、ＤＮＡ等－を的確に把握させる。特に、有核細胞のＤＮＡにおける遺伝子の一般的構造等、分子レベルの知見を強調する。	松永　英（国立遺伝学研究所長）
2	任意交配集団と近親交配	遺伝子プールや遺伝子頻度の概念やハーディ・ワインベルグの法則を理解させる。また、個体間或いは遺伝子間の遺伝的近さを測る近縁係数や近交係数を紹介する。	同　上
3	量的形質の遺伝	分り易い実例を示しながら、量的形質とはどんな形質かを理解させ、それに寄与するポリジーンの意味を把握させる。また、量的形質の遺伝率やしきいモデル等にも言及する。	同　上
4	突然変異	突然変異が遺伝的変異を起こす最も基本的な機構であることを理解させ、いろいろなタイプの突然変異があることを紹介する。特に、ＤＮＡレベルでの最近の知見も示す。	五條堀　孝（国立遺伝学研究所助手）
5	自然淘汰	適応度の定義を理解させ、形質レベルにおいて如何に自然淘汰が働いているかを、工業暗化等の例を上げて説明する。また、有名な淘汰モデル－超優生モデルや頻度依存型淘汰モデル－を紹介し、その現実性を議論する。	同　上
6	集団の変異Ⅰ －形態レベル蛋白質レベル－	集団内変異の保有機構をめぐるフィッシャー・ライト論争、そして蛋白質多型現象をめぐる中立説論争を紹介しながら、多型現象の生物的・進化的意味合いを議論する。	同　上
7	集団の変異Ⅱ －ＤＮＡレベル－	組み換えＤＮＡ技術等の進歩により、遺伝的変異が直接ＤＮＡレベルで見れることを理解させる。特に、制限酵素やＤＮＡ配列決定法を用いた研究で、核内ＤＮＡやミトコンドリアＤＮＡの変異が多く発見されていることを示す。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	分子進化Ⅰ －蛋白質分子からみた進化－	1960年代に始まった分子進化の研究が、蛋白質のアミノ酸配列データの集積によって成功し分子時計という有用な概念が出されて来た過程を紹介する。	五條堀　孝
9	分子進化Ⅱ －ＤＮＡ配列からみた進化－	ＤＮＡ配列決定法の改善により、この６～７年間に、ＤＮＡ配列データが爆発的に増加した現実を踏まえ、アミノ酸配列データからでは分からなかった新しい分子進化学的知見を紹介する。特に、多重遺伝子族の進化の重要性を示す。	同　上
10	分子進化Ⅲ －分子進化と分子生物学－	分子生物学上の最近の発見－例えば、偽似遺伝子や可動遺伝子などーの進化的意義を考察する。また、遺伝子変換と協調的進化の関係といった最近の知見も紹介する。	同　上
11	人　種　の　分　化	ヒトの皮膚色等の例を上げながら、人種というのがどのように分化し、そしてその分化がいつ頃起ったかを議論する。その際、蛋白質多型のデータを利用した根井の遺伝的距離という量の有用性を紹介する。また、その分化と適応の関係も考察する。	松　永　英
12	日本人の遺伝的特徴Ⅰ －正常形質－	蒙古系人種としての日本人の遺伝的特徴を紹介し、日本の近隣集団とどのくらい遺伝的に日本人が近いかを議論する。そして日本人の起源についても言及する。	同　上
13	日本人の遺伝的特徴Ⅱ －先天奇形や遺伝病－	日本人の遺伝的特徴を遺伝病理学的観点から紹介する。また、近親婚による先天奇形発生率等の最近の動向や国際結婚の増加等に注目しながら、日本人集団における遺伝的構成の将来を議論する。	同　上
14	集団遺伝学におけるこれからの問題	組み換えＤＮＡ技術やＤＮＡ配列決定法の更なる発展が予想される現在、集団遺伝学的に興味ある問題のうち、どれが解決可能で、どれが不可能かを広範囲に議論する。	五條堀　孝
15	遺伝学からみた人類の未来	現代医療技術の目ざましい発達により、悪い遺伝子をもつ個体が生残る。つまり『個体としての利益と生物種としての利益の矛盾』が今、人類集団に問われている。遺伝学的知見が、この原理的矛盾にどのような解決を与えることが出来るかを、いろいろな角度から検討する。	松　永　英

＝ 動 物 の 行 動 ＝

〔主任講師：河合雅雄（京都大学教授）〕

全体のねらい

動物は単細胞のアメーバから、人間に近い類人猿まで、非常に大きな拡がりをもっている。ここでは動物の行動を系統と進化の軸にそってとらえてみる。そしてそのことを動物の生活や社会を背景にして展開し、行動のメカニズムを探りながら、生命活動の具体的な表出としての行動の意味を考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	原生動物の行動	動物の行動を、どのような立場でとらえるかについての基本路線を説明する。まず単細胞で他の動物とはまったくちがった構造をもつ原生動物がいかに巧みに行動するか、またそのしくみは？について述べる。	河合雅雄（京都大学教授） 日高敏隆（京都大学教授）
2	昆虫の行動	チョウは異性や花を求めて飛び回る。彼等の行動がおこるしくみを実験と観察によって解析しつつ、生得的行動解発機構（IRM）、リリーサー、動機づけ、欲求行動など、動物行動学の基本的知識を彼等の生活との結びつきの中で理解する。	日高敏隆
3	社会性昆虫の行動	昆虫の中でもアリ、ハチ、シロアリはいわゆる社会を作って生活をする。この“社会”の中での彼等の行動は驚異的である。また、保護色や擬態はそれ自体が驚くべき現象であるが、行動が組合わさってこそその効果が発揮される。	同上
4	鍵刺激のさまざま	魚、両生類、爬虫類の行動ではどのようなものがリリーサーになっているだろうか？いろいろな実験例をあげながら、斗争、採集、防御などの行動について、生得的行動解発機構の理解を深める。	同上
5	鳥の行動と刷りこみ	鳥の行動は巣作り、育児などが加わって、相当に多岐にわたっている。しかしそれらの行動も基本的には生得的解発機構によっておこる。ただし鳥類では、よく知られているとおり、刷りこみというふしぎな現象がみられる。	同上
6	哺乳類の母子関係	哺乳類の行動の特徴のひとつに母子関係の緊密さがあげられる。草食有蹄類ではそれがとくに著しい。奈良公園のシカを中心にそれを観察する。また、攻撃とその抑制行動についても述べる。	河合雅雄 朝日稔（兵庫医科大学教授）
7	肉食獣の哺食行動	肉食獣は餌をねらって生活せねばならない。そのため同じ種のなかでも対立する面と協力を必要とする面が生じる。また餌を襲う行動にもいろいろな型がみられる。また、攻撃とその抑制行動について、肉食獣の特徴的行動をとりあげる。	朝日稔

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	嗅覚の世界	嗅覚は重要な感覚で、多くの哺乳類は嗅覚にたよって生きている。また、皮膚腺の分泌物や尿などは通信手段ともなっている。いくつかの例から“匂いづけ”行動の意義を探ってみよう。	朝日　稔
9	鳴き声と超音波	イヌの遠吠え、ゾウのトランペットなど、遠距離通信に用いられる鳴き声、さらにコウモリやイルカの超音波など、音の世界での哺乳類の行動を調べる。	同　上
10	霊長類の社会行動	霊長類社会を成立させているいくつかの原理のうち、主なるものとして順位制、血縁制、リーダー制があげられる。そのことについてふれ特に順位制の問題をとりあげ、攻撃行動と社会的調整行動、あいさつ、分配行動などを解析する。	河合雅雄
11	霊長類の性と繁殖行動	霊長類の性行動、その発現と抑制機構、性関係、性周期子殺しについて述べ、インセスト（近親相姦）の問題ともあわせて種族維持行動としての性行動の意味を考える。	同　上
12	霊長類の育児行動と発達	霊長類の特徴は、成長期間が長いことである。例えば、チンパンジーは5歳まで母子関係は密接である。育児に関する母と子、他個体の行動を子供の発達と関連してとらえる。	同　上
13	霊長類のコミュニケーション	ニホンザルは37種の音声を使ってお互いのコミュニケーションを行っている。その他多様な身振りによるコミュニケーション活動もある。それらについて述べチンパンジーの言語習得の問題にもふれる。	同　上
14	霊長類の文化的行動	文化は従来人間だけに特有の現象とされてきたが、動物にもそれが見出されることがわかった。道具の使用と製作などを含めた文化行動を紹介し、文化とは何かという問題を考える。	同　上
15	葛藤行動とだまし行動	三人の講師が各々の分担講義をもとにし、動物行動の見方、意味のさぐり方、個体維持と種維持の関連性などについてのてい談をし、全体のまとめを行う。	河合雅雄 朝日　稔 日高敏隆

＝ 植 物 の 生 理 ＝

〔主任講師：増田芳雄（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

植物は動物と異り、自栄養（光合成）の機能をもっており、これが地球上の全生物の生命を支えている。また植物は環境要因に対応する能力を備えている。植物の形態形成と生理的機能は遺伝子のもつプログラムに従って発現されるが、それは環境要因にも強く影響される。このような植物に特徴的な構造と機能の調節について、植物ホルモンの役割にもふれながら、主として個体の水準において解説したい。

(1) 植物の体制と頂端分裂組織

(2) 葉の役割　Ⅰ気孔と水分経済

(3) 葉の役割　Ⅱ光合成－明反応

(4) 葉の役割　Ⅲ光合成－暗反応 C_3 C_4 とCAM植物

(5) チッ素固定

(6) 植物ホルモン

(7) 器官相互作用と頂芽優勢

(8) 屈性と運動

(9) 細胞成長と細胞壁

(10) 分化と全能性

(11) 植物と環境ストレス　Ⅰ水、温度

(12) 植物と環境ストレス　Ⅱ傷害、微生物

(13) 遺伝的性質と生理的機能

(14) リズムと花成誘導

(15) 光形態形成とフィトクロム

＝植物と菌の系統と進化（TV)＝

〔主任講師：西田　誠（千葉大学教授）〕

全体のねらい

植物と菌の起源と進化を生活史と比較形態学を通じて考察する。系統分類における形質についてもふれる。植物については、特に陸上植物の進化の方向とその必然性を地質時代の環境との関連において考えようとするものである。本講では菌は動・植物にてい立する第3の生物群として扱う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	藻類の分類と分類形質	紅藻・褐藻・緑藻は古い時代に分類された呼び名であるが、色が違うと光合成産物や生殖細胞の形態なども異ることがわかり、色による藻類の分類は自然分類と評価されるようになった。藻類の分類形質は植物界全般にも適用できる。	千原光雄（筑波大学生物科学系教授）
2	紅藻と褐色の生活環	藻類の生活環の様式は多様である。紅藻には2世代型と3世代型があり、褐藻には同形世代型、コケ型、シダ型、後世動物型がある。 動物型の生活環をもつホンダワラ類は藻類の中で最も高度に分化した体制をもち、陸上の高等植物に比較できる藻類である。	〃
3	緑藻の系統と生活環	緑藻は、1.陸上植物に連なる系統群、2.淡水に分布する緑藻、3.海に生育する系統群の3つに分類できる。生活環の様式は、1と2では単相型で、これはコケ型、シダ型の始原型と思われる。3には同形世代型、コケ型、シダ型、後生動物型がある。	〃
4	植物の上陸1 緑藻の細胞学	現生植物の細胞構造や細胞器官の複製機構の比較研究（特に細胞分裂、核分裂の微細構造、鞭毛装置構造など）によって浮び上ってきた祖先の植物像を紹介する。また、陸上に生育圏を拡大することができた条件を細胞レベルで解説する。	堀　輝三（筑波大学生物科学系助教授）
5	植物の上陸2 緑藻の生理化学	現生の緑色植物にみられる光合成を中心とした物質代謝系の多様化が、それらの植物が出現したと推定される地球上の環境（酸素、二酸化炭素濃度など）の変化に対しどのように適応し、エネルギー獲得様式を進化させてきたかを考察する。	猪川倫好（筑波大学生物科学系教授）
6	コケとシダ（造卵器植物）	水中で単相で生活する緑藻や車軸藻から進化した緑色植物としてコケとシダをとらえる。水中から陸上へと生活圏をひろげる過程でおける造卵器の形成と退化、機械組織・フラボノイドの発達、水の欠乏に対応する気孔や通道組織の発達などを解説する。	水島うらら（上野学園大学短期大学部教授）(61年4月1日付の定) 西田誠（千葉大学理学部教授）
7	葉の進化	テロム説による葉の進化を解説。ハナヤスリ科（シダ類）の裸葉と実葉が示す葉の立体的構成を大葉進化の中途段階に留るものとして理解し、茎頂と葉の形態形成様式から茎と葉のちがいを論じ、維管束植物の茎頂分裂組織の進化を紹介する。	今市涼子（玉川大学農学部講師） 西田誠（千葉大学理学部教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	花と種子1 種子の成立	石炭統の種子化石から、テロムが大胞子のうを包み、珠皮となり、胚珠が成立する過程を推論する。いっぽうシダ植物の前裸子類からソテツ系統と球果類系統へと進化したという推論を材解剖学の上から考察する。	西田　誠 （千葉大学理学部教授）
9	花と種子2 花の構成	花は短縮したシュートであり、おしべは小胞子葉、めしべは大胞子葉であるとするゲーテの変態論にはじまり、ゴノフィル説による花の器官学的解釈までを紹介する。いっぽう、花の原型を地質時代のソテツ類、針葉樹類に探り、花々二系列のあることを紹介する。	田村道夫 （神戸大学理学部教授） 西田　誠 （千葉大学理学部教授）
10	被子性	心皮（大胞子葉）が胚珠包んでめしべを形成するのが被子植物の特徴である。その前ぶれは裸子植物に見られる。被子性は種子の保護と散布に役立つ。いっぽう、心皮説では説明困難なめしべの解釈についてはゴノフィル説がある。	田村道夫 （神戸大学理学部教授）
11	重複受精	被子植物の生殖細胞の行動の特徴は、1.精核（精子）が花粉管により胚珠まで送られること。2.2個の尤核のうち、1つは卵核と合体して胚をつくり、他は極核と合体して内胚乳をつくることである。これらの発生学的性質を裸子植物と対比させて説明する。	山下貴司 （お茶の水女子大学理学部助教授）
12	菌の形質と分類(1)	菌は動物界・植物界に対応する菌界の生物である。これは生物群の系統進化の考察の結果であるが、その考察は後に行うことにしてここではやず、菌界に二つの亜界 — 原核菌亜界（細菌の仲間）と真核菌亜界（かび・きのこの仲間）があることを述べる。	寺川博典 （東京医科歯科大学名誉教授）
13	菌の形質と分類(2)	次に、原核菌亜界の分類上重要な形質と分類群5門について述べ、従来の一般的分類法との比較を行う。さらに、真核菌亜界に含まれる菌の重要な形質と分類9門について述べ、それぞれの特徴に基づいて、従来の系統進化の考え方との比較を行う。	〃
14	菌の系統進化	従来、菌は下等植物とされるか、または真核菌類を動物界・植物界に対する菌類界として原核菌類は別界に含められた。しかし菌の起原と進化を考察すると、原核菌類と真核菌類とは一界をなすものであり、生物界は動・植・菌の三界からなる（生物三元論）	〃
15	まとめ	1. 藻類と菌類 いわゆる二毛菌と褐色鞭毛藻類、菌類と藻類をめぐって 2. 被子植物の起源をめぐって	寺川博典 （東医歯大名誉教授） 千原光雄 （筑波大生物科学系） 田村道夫 （神戸大・理） 西田　誠 （千葉大・理）

＝ 動 物 の 進 化 ＝

〔主任講師：丸山工作（千葉大学教授）〕

全体のねらい

生物の進化の経過、その多様性、その仕組みについて現在の生物科学がどのようにみているをを各専門家を通じて解説する。とりわけ、分子進化論の最近の進歩は、生物進化に新しい見地をひろげており、ヒトの由来についても考えなおさせている。ごく基本から、新知見にいたるユニークなシリーズ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生物の進化とは	生物の進化の概論	丸山工作（千葉大学教授）
2	ガラパゴスの動物相	ダーウィンの進化論を育くませた原点ーガラパゴス諸島のさまざまな動物相について映像を通じて述べる。	八杉龍一（科学史家）
3	生命の起源	生命の起源についていろいろな考え方と実験的アプローチを紹介する。	野田春彦（放送大学教授）
4	中立分子進化説	生命を荷なっている物質 —DNA、RNA、タンパク質の分子進化から、生物進化を論じた中立分子進化説の提唱者自身が解説する。	木村資生（遺伝学研究所教授）
5	分子進化からみた系統樹	分子進化にもとづいて、動・植物のたどってたき系統を論ずる。	堀寛（名古屋大学助手）
6	動物の系統樹	さまざまな動物の系統樹について、最新の知見にもとづいてわかりやすく述べる。	蒲生重男（横浜国立大学教授）
7	細胞器官の起源	ミトコンドリアや葉緑体の起源について、単なる説ではなく、現存の移行過程についての実験例にふれながら述べる。	石川統（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	種の分化	200万種にのぼるといわれる種はどのようにして分化してきたのか、化石などの証拠をもとにして解説する。	浜田隆士（東京大学教授）
9	行動の進化	多様な動物の行動の進化を要領よくまとめて論ずる。	日高敏隆（京都大学教授）
10	原生動物	たった1個の細胞で生活する原生動物の生活史を述べる。	内藤豊（筑波大学教授）
11	無脊椎動物	主として洞穴動物を例にとって、環境への適応について述べる。	上野俊一（国立博物館室長）
12	脊椎動物	骨の形態の進化を通じて、サカナからヒトへの道をたどる。	養老孟司（東京大学教授）
13	ヒトの進化(1)	ヒトの由来を主として化石や形態比較を通じて述べる。	埴原和郎（東京大学教授）
14	ヒトの進化(2)	ヒトの由来を遺伝子進化から最新のデータから論ずる。	長谷川政美（統計学研究所室長）
15	生物進化を論ずる	いままでの講義内容をもとにして、進化をどう理解するかを論じて、しめくくる。	野田春彦（放送大学教授） 丸山工作（千葉大学教授）

＝統　計　学　特　論＝

主任講師：林　知己夫（放送大学教授）
　　：鈴木　達三（統計数理研究所教授・主幹）

全体のねらい

この特論では、統計学の基礎において極めて肝要な意味を持つ情報量規準の理論をとりあげ、統計モデルの選択という基本的問題と関係付けて話を進める。もう一つは、実際問題において今日要請の高い統計的社会調査法の理論と応用の問題をとりあげることにした。両者は一見異るが思想的に相通ずるものがある。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
第1部　情報量規準と統計モデル			
1	情報の抽出と統計モデル	統計学で利用される確率的構造は、データから必要な情報を抽出する方法を作り出すための統計モデルである場合が多い。統計モデルのこのような用い方を事例によって解説する。これに関連して尤度ならびに最尤法の概念について説明する。	赤池弘次（統計数理研究所教授、主幹）
2	統計的検定とモデル選択	統計的検定については種々の誤解があり、概念上の混乱が見られる。データに基づいて特定の統計モデルを選択する問題との関係を調べることによって、統計的検定の困難点を明らかにする。特に尤度比検定について論じる。	同　上
3	エントロピーと情報量	熱力学的エントロピー概念の確率論的考察を行なったボルツマンの業績を紹介し、これが確率分布の間の隔たりの自然な尺度としての情報量概念の本質を明らかにするものであることを述べる。これと尤度概念との関係について解説する。	同　上
4	モデル選択と情報量規準ＡＩＣ	情報量を用いた統計モデルとデータとの適合度を測るために、情報量規準ＡＩＣが導入された。ＡＩＣの基礎にある考え方を説明し事例によってその実用性を示す。特に検定によるモデル選択との対比を通じてＡＩＣの特色を明らかにする。	同　上
5	ベイズモデルとその応用	未知のパラメータに対して先験分布とよばれる確率分布を想定する統計モデルがベイズモデルとよばれる。このようなモデルに基づく推論の特長を情報量を用いて明らかにする。特に、尤度概念の適用によって実用的なデータ処理法が得られることを示す。	同　上
第2部　統計的社会調査法			
6	標本調査法の発展Ⅰ	「確率論・統計学」において標本抽出理論の基本を述べたが、ここでは通常用いられるシステマティック標本抽出、多相抽出法、比推定法　不等確率抽出法、エリア抽出法の問題について述べ、さらにパネル調査、標本ローテーションに関する諸問題を述べる。	林　知己夫（放送大学教授）
7	標本調査法の発展Ⅱ	よく利用される全国規模の層別二段抽出による標本調査を例にとり達成精度の計算および地域抽出法による実績精度の計算例をのべる。さらに面接調査、自記式調査、電話調査等各調査方式の特色および利用可能な補助資料に応じた標本調査計画を具体的に説明する。	鈴木達三（統計数理研究所教授、主幹）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	調査文作成と調査票の構成	調査目的に沿った質問文作成と調査票の構成について標本設計、調査誤差の問題　利用可能なデータ解析の諸技法、分析における考え方等をふまえて説明する。以下の時系列比較、国際比較方法論においてのべる調査等を具体例としてとり上げ説明する。	鈴木達三
9	調査における誤差の諸問題	調査においては、その対象、分野により固有の誤差があるが、一般的には標本抽出に関する諸誤差のほか、調査不能による誤差、調査法による誤差、回答者による誤差がある。これらを数量的に評価し、調査の全体の精度を考えるための基本事項を説明する。	林　知己夫
10	回答誤差のモデル化	調査実施過程における誤差のうち、回答者に関連するものを具体的に述べ、さらに回答結果の信頼性について考える。個人の回答の不確定性をどのように考えるかいくつかのモデルについて述べる。	鈴木達三
11	データ構造と統計的推論	得られたデータの性格をまず把握することの重要性を説明する。つぎに　多次元的データの関連性を通して、データ構造をさぐり出す方法について述べ、これから統計的推論をどのように導き出すかを説明する。	林　知己夫
12	時系列比較方法論Ⅰ	継続データは時系列変動をみることによって事象の兆候を鋭敏に示すものであるので、どのようにしてこれを探り出すかを説明する。これは、マクロ的な見方に基くことが適切なこともあるし、ミクロ的な構造を通して見ることが有効なこともある。	同　上
13	時系列比較方法論Ⅱ	継続調査データを実際に分析することによって個別の調査データでは分らなかったことが具体的に示される。マクロ的な見方の例として、時系列分析、コウホート分析をとり上げ、ミクロ的な見方として質問項目の相互関連分析の例をとり上げて説明する。	鈴木達三
14	国際比較方法論Ⅰ	ここでの国際比較としては、統計的調査による意識の国際比較の問題をとりあげる。標本抽出の方法、質問文の作成のあり方、マクロ的なデータ分析の効用と限界、考えの筋道の比較の重要性などについて説明する。	林　知己夫
15	国際比較方法論Ⅱ	国際比較調査においては、国内調査では目立たない技術的な点も重大な問題となる。また具体的な分析手法も慎重な取扱いが必要となる。これらの点を実施例に則して具体的に説明し　分析にとり上げる質問の組合せを選択することにより分析結果の有用性が高まることを示す。	鈴木達三

＝ データ解析法 ＝

〔主任講師：林知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

データによる現象解析法をデータ解析法と名付ける。どのようにデータをとり、どのようにデータを解析して情報を取り出すかの方法を言う。これは、データを解析するための基礎的な考え方の上に構築される数理的方法である。データを取得する方法は別に講義があり、ここでは、データを解析する方法、特に数量化について述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	データとは何か	以下の講義では、統計学の基礎的知識を前提とする。この講義の学習の仕方について説明する。 データとは何か。これは単なる数字の羅列ではなく、それが出現した背景が重要である。こうした点について述べる。	林　知己夫 （放送大学教授）
2	グラフ化の重要性	データ解析では、データを基にさぐりながら情報をつかみ出すことが大事で、このためには、データをグラフ化していくことが基本である。こうしたことに関連した考え方や方法についての基本を説明する。	同　上
3	データにおける質と量	データは究極的には数量によって表現される。しかし、測定や計測によって得られる標識には、つまり「なま」の測定は、数量である場合と質的な分類である場合とがある。これらについての性格を述べる。	同　上
4	相関について	データ間の関連性の最も単純なものを説明する。質的データの場合の関連性、数量的データの関連性。この特殊な場合で重要なものが相関係数で、これについて説明し、さらに相関の諸相について言及する。	同　上
5	重相関関係について	多数の変量の間の関係をみるものとして、重相関関係がある。まず、重相関関係数の意味について説明し、新しい概念である偏相関係数について説明する。ここで、多次元的なデータ処理の考え方を習熟させるようにする。	同　上
6	多次元空間における分散	一次元におけるデータの散らばりを表わす分散から出発し、多次元空間におけるデータの散らばりを表わす一般化分散に言及し、この意味について説明する。	同　上
7	判別の測度についてI	判別とは何か、について説明し、これを表現するための測度を説明する。それぞれの測度のもつ意味や特色について説明する。判別の概念と距離の概念との関連性について説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	判別の測度について Ⅱ	前講の続き。	林　知己夫
9	距離と一般化分散	多次元データを分析するに際して、ユークリッドの距離、一般化分散の特色に基づいて、どう使い分けていくのが適切かについて説明する。	同上
10	多次元データ分析の重要性	以上の基本を踏まえて多次元データ分析の方法に進むが、ここで多次元分析が、いかに現象解析に対して重要な意味をもつかについて説明する。	同上
11	測定誤差の意味 I	多次元データ分析の方法を説明する前に、測定誤差がデータ分析に対して与える影響について述べる。まず、測定したものが数量である場合について説明する。	同上
12	測定誤差の意味 Ⅱ	前講の続きで、測定が質的なもの、カテゴリー反応として表現されるのでカテゴリカル・データというが、この場合についての測定誤差の問題を取扱う。	同上
13	データ解析における数量化	データ解析における数量化の位置について説明する。その前に数量化とは何か、その発生について述べる。これがデータ解析の基本理念であることを説明する。数量化の基本が理解できればその考え方で各種のデータ解析が可能となる。	同上
14	数量化の基本概念	数量化における測定・計測したことの表現と基本的二つの立場について説明する。こうしたことが、数量化を超えて広い意味のデータ解析の基本となっていることを示す。	同上
15	外的基準が数量である場合の数量化 I	数量化 I 類と呼ばれる方法で、これについて詳細に説明する。これは、形式的には、重相関関係の拡張となっている。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	外的基準が数量である場合の数量化Ⅱ	前講の続き。	林　知己夫
17	外的基準が分類である場合の数量化Ⅰ	外的基準が分類である場合の数量化を説明する。数量化Ⅱ類と呼ばれ、形式的には線型判別関数の拡張となっている。	同上
18	外的基準が分類である場合の数量化Ⅱ	前講の続き。	同上
19	外的基準のない場合の数量化、パタン分類の数量化Ⅰ	外的基準のない場合の数量化の一つであるパタン分類の数量化、数量化Ⅲ類と呼ばれる方法について説明する。どうしてこの方法が発生したかについて説明する。	同上
20	パタン分類の数量化Ⅱ	この数理的構造について説明し、解り易いモデルについてその解釈を示す。	同上
21	パタン分類の数量化Ⅲ	種々の応用法について説明する。	同上
22	外的基準のない場合の数量化、e_{ij} 型の数量化Ⅰ	二つのものの間の関係が数量で示されているが厳格な意味でメトリカルでない場合の数量化の方法である。二つのものの間の関係を基にする諸方法のなかで位置付けて説明する。この場合、関係は親近性、非親近性を表わすものとする。	同上
23	e_{ij} 型の数量化Ⅱ	理論的構造と応用法について説明する。さらに、これを発展的に応用した例について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	一対比較法の数量化	一対比較法の諸方法の説明とガットマンによる一対比較法の数量化について述べる。数量化の方法発展の礎となった考え方を中心に据えて説明する。	林　知己夫
25	一対比較法における矛盾と数量化	一対比較法では矛盾がよくおこる。A＞B、B＞C、しかしA＜Cという関係である。＞はより好ましい、好ましくないという事を示す。この従来の取扱いと、数量化による別角度からの取扱いを述べる。	同　上
26	多次元尺度解析法 MDS（Multi-Dimensional Scaling）I	二つのものの間の関係を基にして、要素の空間的位置付けを求める方法で、e_{ij}型数量化と関係が深い。二つのものの関係が、親近性、或は非親近性をあらわす順位もしくは順位のついた分類で表現されている場合について述べる。	同　上
27	MDS　II	二つのものの間の関係表現が、単なる分類、いわゆる名義尺度である場合について述べる。	同　上
28	三つの要素の間の関係に基づく数量化	三つの要素の間の関係が数量であらわされているが、厳格な意味でメトリカルでない場合の数量化について述べる。これはe_{ij}型数量化の拡張となる。	同　上
29	PARAFAC モデル	三つの要素の間の関係が数量で表わされている場合のデータ解析法としてタッカーの三相因子分析があるが、これは二つのものの間の関係に帰着し、本質的なものではない。ここでは、Parallel Factor Analysis（PARAFAC）について述べる。	同　上
30	分類と クラスター化	分類は科学における最初の重要な操作である。分類を通しての情報抽出は不可欠の考え方である。このための統計的方法としてのデータに基づくクラスター化による分類について述べる。但し、これは外的基準のない場合の方法である。	同　上

＝数値計算とデータ処理＝

〔主任講師：石田正次（統計数理研究所第4研究部長）〕

全体のねらい

まずプログラミング言語BASICを用いて数値計算の基本的な手法を習得する。次に最小二乗法を中心に、相関、曲線の当てはめ、移動平均など実用的な問題の計算法を学習する。最後は大型コンピュータによるファイル処理の初歩をPL/Iを用いて練習する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	数値計算と計算機	古い数表やいろいろの計算器具を示しながら数値計算の歴史を簡単に述べる。次に現在使用されている各種のコンピュータを紹介し、その構造を説明する。	石田正次（統計数理研究所教授）
2	プログラミング言語	BACIC、FORTRAN、ALGOL、PASCAL COBOL、PL/I、APLなどいろいろなプログラミング言語の特色を簡単な実例で説明する。	同上
3	BACICの基本(1)	マイクロ・コンピュータ（FM－7）を使ってプログラミング言語BASICの説明をする。PRINT命令、計算式など。	同上
4	BACICの基本(2)	BASICの文法とプログラムの基本的な型の説明をする。	同上
5	BACICの基本(3)	BASICの説明、FOR文と合計の計算など。	同上
6	数値計算の基本(1)	逐次近似法の話。算術平均と幾何平均の関係を使って逐次近似法により平方根の計算をする。	同上
7	数値計算の基本(2)	級数転開による関数の近似。マクローリンの級数を使って円周年の計算をする。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	数値計算の基本(3)	数値積分。台形式とシンプソン式。円の面積の計算をする。	石田正次
9	数値計算の基本(4)	BASICに組み込まれている各種の関数の説明。三角関数、対数関数、乱数など。 計算精度と計算スピードの話。	同　上
10	数値計算の基本(5)	消去法による連立一次方程式の計算プログラムを作る。	同　上
11	最小二乗法(1)	最小二乗法の考え方。最小二乗法による平均と分散の意味づけ。	同　上
12	最小二乗法(2)	直線の当てはめの話。回帰直線と相関係数。	同　上
13	最小二乗法(3)	回帰直線のまわりの分散と相関係数の関係。	同　上
14	最小二乗法(4)	曲線の当てはめ。多項式を当てはめるプログラムを作る。	同　上
15	移動平均(1)	直線の当てはめと単純移動平均。曲線の当てはめと加重移動平均。曲線のスムージング。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	移動平均 (2)	時系列データの分析。周期性と自己相関係数。コレログラム。	石田正次
17	差　　分 (1)	差分でみた多項式と指数関数の性質。	同　上
18	差　　分 (2)	差分方程式による生長のモデル。	同　上
19	偶然性の処理 (1)	測定と誤差の話。系統誤差と偶然誤差。	同　上
20	偶然性の処理 (2)	偶然の性質と確率論。分布。中央極限定理。	同　上
21	偶然性の処理 (3)	確率モデルと乱数の話。	同　上
22	ＰＬ／Ｉ (1)	BACICからPL／Ｉへ。PL／Ｉでの基本的な約束。BASICとPL／Ｉとの類似点と相異点。	同　上
23	ＰＬ／Ｉ (2)	ＰＬ／Ｉによるプログラミングの練習。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	ＰＬ／Ｉ　(3)	ＰＬ／Ｉによるプログラミングの練習。	石田正次
25	データ・ファイルの話	大量データの処理。データ・ファイルの種類。データ・ファイルを使ったプログラム。	同　上
26	集計と作表(1)	アンケート調査の集計。単純集計と多重集計。	同　上
27	集計と作表(2)	ファイルの事前処理。数値データと文字データ。	同　上
28	集計と作表(3)	実際のデータ・ファイルを使った集計のプログラム。	同　上
29	集計と作表(4)	東京（日本）、ナンシー（フランス）、フライブルグ（ドイツ）の三つの調査結果を使っての国際比較。	同　上
30	ま　と　め	これまでの講義のまとめ。これからの勉強の進め方。	同　上

放送大学放送番組と印刷教材各章との対応一覧

印刷教材題名	放送番組
1章　数値計算と計算機	第1回　数値計算と計算機
2章　プログラミング言語	第2回　プログラミング言語
3章　BASICプログラミングの練習	第3回　BASICの基本(1) 第4回　BASICの基本(2) 第5回　BASICの基本(3)
4章　逐次近似法	第6回　数値計算の基本(1)
5章　級数による関数の近似	第7回　数値計算の基本(2)
6章　数値積分	第8回　数値計算の基本(3)
7章　関　　数	第9回　数値計算の基本(4)
8章　最大最小と並べ換え 9章　連立1次方程式	第10回　数値計算の基本(5)
10章　平均と分散	第11回　最小二乗法(1)
11章　直線の当てはめ 回帰直線と相関係数 12章　曲線の当てはめ	第12回　最小二乗法(2) 第13回　最小二乗法(3) 第14回　最小二乗法(4)
13章　自己相関係数と移動平均	第15回　移動平均(1) 第16回　移動平均(2)
14章　差分と差分方程式	第17回　差　分(1) 第18回　差　分(2)
15章　分　布 16章　誤　差	第19回　偶然性の処理(1) 第20回　偶然性の処理(2) 第21回　偶然性の処理(3)
17章　PL／I入門	第22回　PL／I(1) 第23回　PL／I(2) 第24回　PL／I(3)
18章　PL／Iによるプログラム例	第25回　データ・ファイルの話 第26回　集計と作表(1)
19章　集計と作表	第27回　集計と作表(2) 第28回　集計と作表(3) 第29回　集計と作表(4)
20章　数値計算雑題	第30回　まとめ

＝現代数学特論１＝

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

数学の性格を統一的にとらえるやりかたの一つに、論理の基本概念と集合論の基本概念だけをもとにし、他のすべての数学的な概念を、次々と定義していくというのがある。このやりかたを知ってもらうことを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	数学と論理学とがともに古代ギリシャに発する学問であることをのべ、論理の基本概念と集合の概念とが、ともに、日常生活でつかわれていることばに内在している、ごく親しみやすいものであることをも示す。	吉田夏彦 東京工業大学教授・放送大学客員教授
2	命題論理	命題論理の推論の形式とトートロジについてのべる。	〃
3	関係と変項と全称	述語論理への橋渡として、テーマにかかげた三つの概念について説明する。	〃
4	述語論理の推論 1.	述語論理の推論の形式について解説する。	〃
5	述語論理の推論 2.	4のつづき。	〃
6	メタ理論と公理論	メタ理論と対象理論との区別、および公理論の性格についてのべる。	〃
7	モデル	モデルの概念について説明する。	〃

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	完全性定理	完全性定理について解説する。	吉田夏彦 東京工業大学教授・放送大学客員教授
9	一階の自然数論	一階の述語論理によって形式化される自然数論についてのべる。	〃
10	矛盾	矛盾についてのべ、集合論の公理化の必要についてのべる。	〃
11	証明論と不完全性定理	不完全性定理と、その数学の基礎論への影響についてのべる。	〃
12	公理的集合論	集合論の公理系のいくつかを紹介し、ＺＦＳ集合論の基礎についてのべる。	〃
13	数学的構造	位相空間法や、簡単な代数系などを例にとって、構造の概念について解説する。	〃
14	数の概念	順序数、自然数、整数の概念がどのようにして定義されるかをのべる。	〃
15	集合論のモデル	集合論の公理の独立性を論じ、この概論の持つ、数理哲学的な含蓄にふれる。	〃

＝現代応用数学 (R)＝

〔主任講師：伊理正夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

現在の社会において実際に応用され役に立っている数理的手法を、数学的な立場から整理して講じる。しかし数学的な厳密性をあまり強調しすぎないように注意し、なるべく実際に手法が使われている場面における動機づけを重視し、かつ具体的な問題に直面したときにそれをどう扱うべきかの行動指針をも与えるよう努める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	数と量と次元 ― 数の体系	自然数（個数を数える）、整数（引算ができる）、有理数（割算ができる、比がとれる）、実数（大小関係に"隙間"がない）、複素数等の数の体系の復習と、それぞれの実生活との関連における意味、役割の指摘。	伊理正夫（東京大学 教授）
2	数と量と次元 ― 物理量の表現	次元と単位；ＳＩ単位系、有効数字；"…、T、G、M、K、h、da、c、m、p、n、…"の記号；数学記号や量記号のＪＩＳ；人・日、円／人、kg／台、等々の便宜的な"次元"記法。	〃
3	数と量と次元 ― 物理量の演算	純粋な数と次元付の数（＝量）；量の間の積等可能性〔乗除算による単位の変換の規則。加減算は同次元の量の間のみ可能であるという公理〕；行列・ベクトル算における次元の役割〔行列Ａ＝(aij)の要素aijの次元は〔i〕／〔j〕の形でなければならないこと〕	〃
4	システムの数学 ― 線形システム1：入出力関係 因果関係	多入力・多出力関係として把握される多くの実際的な例をあげる。入出力の各成分が属する環、体〔実数（瞬時値）、複素数（定常振動等）時間関数の環とそのconvolutionと商体としてのMikusinski 演算子〕；重ね合せの原理；行列表現、基底。	韓 太舜（専修大 教授）
5	システムの数学 ― 線形システム2：線形代数の基本的諸概念（その1）	行列式、一次独立、階数、固有値、等々について極く原理的な計算手順つきで概説する。前回の例に即して例をあげる。	〃
6	システムの数学 ― 線形システム3：線形代数の基本的諸概念（その2）	同 上。	〃
7	システムの数学 ― 線形システム4：自由度の束縛と部分空間、商空間	出力を出さない入力（Ker）、実現される出力（Im）；同じ出力を出す入力；いくつかの出力端子からの出力が0になるように束縛したときの入出力関係〔(ABCD)から(A−BD^{-1}C)を作る話〕	〃

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	システムの数学 ― 離散システム1：グラフ・関係・順序	連結関係、因果関係を表すグラフ。グラフの連結性、強連結性；k連結成分（k=1、2、(3)）、強連結成分；無サイクルグラフと半順序；木と補木。例としては、道路網、通信網、持株関係、投入産出行列、group dynamics（交友関係）、等々なるべく多種類。	佐藤　創（専修大　助教授）
9	システムの数学 ― 離散システム2：最大流とマッチング	最大流問題とその解法；マッチング問題とその解法。（できれば既約分解、DM分解にもふれる。）	韓　太舜（専修大　教授）
10	システムの数学 ― 離散システム3：最短絡と最小木	最短絡問題とその解法。最小木とgreedy algorithm（マトロイド？）	〃
11	システムの数学 ― 離散システム4：差分方程式	行列の既約分解；DM分解とその応用。	佐藤　創（専修大　助教授）
12	システウの数学 ― 連続システム1：常微分方程式モデル（その1）	常微分方程式の形にモデル化される各種の現実的な例。初期値問題、境界値問題、固有値問題、過渡解析、定常解析、演算子法、Fourier変換。	〃
13	システムの数学 ― 連続システム2：常微分方程式モデル（その2）	安定性、振動（非線形の場合を含む）。惑星運動、Van der Pol型の振動、……。	〃
14	システムの数学 ― 連続システム3：偏微分方程式モデル（その1）	放物型、楕円型、双曲型の偏微分方程式とその形に定式化される典型的な物理現象。できれば非線形の例も取り入れる。	〃
15	システムの数学 ― 連続システム4：偏微分方程式モデル（その2）	前回の例の解法 ― 極く一部（変数分離型も扱うか？）	〃

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	システムの数学 — 最適化　1： 数理計画法	最適化問題とは；線形計画法、非線形計画法と例（生産計画、最適設計、等々）	韓　　太舜舜 （専修大　　教授）
17	システムの数学 — 最適化　2： 積形計画問題の解法	単体法の概要。	〃
18	システムの数学 — 最適化　3： 確率モデル	在庫管理、取替、待行列、信頼性。	佐藤　　創 （専修大　助教授）
19	システムの数学 — 最適化　4： 変分法	待行列、信頼性	〃
20	情報処理の数学 — 数値情報処理1： 数の表現と誤差	浮動小数点数、計算機の中での数の表現、誤差とその伝播。（2進法、16進法についても簡単に触れる。）	星　　守 （千葉大　助教授）
21	情報処理の数学 — 数値情報処理2： 統計計算、補間、補外	平均、分数の計算法。補間法、補外法。	〃
22	情報処理の数学 — 数値情報処理3： 数値微分、数値積分	数値微分、数値積分の原理と基本的な公式、およびそれらの使用上の注意。	〃
23	情報処理の数学 — 数値情報処理4： 線形計算（その1）	線形方程式系の解法（LU分解法）	〃

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	情報処理の数学 ― 数値情報処理5：線形計算（その2）	最小二乗法（正規方程式を使わない方法について触れるか？）	星　守（千葉大　助教授）
25	情報処理の数学 ― 数値情報処理6：非線形方程式・代数方程式	Newton法。	〃
26	情報処理の数学 ― 数値情報処理7：常微分方程式	初期値問題の解法。Euler法、修正Euler法、Runge ― Kutta法。	〃
27	情報処理の数学 ― 数値情報処理8：偏微分方程式	放物型方程式の解（陽解法とその安定性、陰解法）。楕円型方程式の解（Divichlet問題の差分解法のみ）。	佐藤　創（専修大　助教授）
28	情報処理の数学 ― 非数値情報処理1：算法の複雑度とデータ構造	計算複雑度、データ構造。数値情報処理の各種の例を眺め直す。疎行列表現法の例も。	星　守（専修大　助教授）
29	情報処理の数学 ― 非数値情報処理2：ソーティング	ソーティングの算法。使用上の注意。	〃
30	情報処理の数学 ― 非数値情報処理3：グラフと地図の表現	計算機の中でのグラフの表現、地図の表現。	韓　太舜（専修大　教授）

＝ 生 理 と 心 理 ＝

主任講師：中川大倫（放送大学教授）
本間日臣（放送大学教授）

全体のねらい

心理学は人や動物が、それぞれの生活環境の中において、いかに適応するかを課題としており、一方、生理学は、肉体的機能に関する科学として、肉体の器官や組織において行われる諸過程の法則性を明らかにしようとする。そこで、両方の関係を取り上げようとすれば、ある種の心的過程に対応する有機体内の正確な生理学的過程が、いかに提示されうるかが中心課題となろう。この対応関係の提示は、行動の理解に有効であり、また、異常行動の理解と精神衛生への道をも開くものと考えられる。本講の視点は以上の点におかれる。

主な項目

(1) 情報の受容と処理過程

(2) 覚醒水準

(3) 高次精神作用と生理学的基礎

(4) 心身症の様相と治療

＝都市問題と都市政策＝

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）
阪本一郎（放送大学助教授）〕

全体のねらい

都市問題を理解し都市政策を検討するためには、都市が複雑な大規模システムであり都市を構成する種々の要素が相互に関連しあっていることについての認識が必要である。今日の都市がかかえる代表的な課題をとりあげ、都市そのものへの理解を深めつつ、過去の政策や新たなアイデアの検討を通じて、都市に迫られている選択を明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	地域経済の変貌	戦後における地域経済の構造変化の実態を、人口と所得を手がかりとしてつかみ、脱農と都市の社会淘汰がどのようにして展開したかを明らかにする。あわせて人口比・ターン現象の意味をさぐりたい。	伊藤善市（東京女子大学教授） 佐貫利雄（日本開発銀行設備投資研究所副所長）
2	日本の工業化と都市化	明治維新以後の日本の歴史は、工業化と都市化の歴史であった。日本の工業化の特徴をさぐり、特に戦後においては、工業化と都市化とがの両面であることを多くの事実によって明らかにする。	伊藤善市 加藤寛（慶応義塾大学教授）
3	向都市性を規定する要因	都市のごみごみした生活はごめんだ、と言われながら、なぜ人々は都市に集まってくるか。ここでは職場という経済的要因のほかに、いろいろの非経済的要因について、理論的・実証的に吟味する。	伊藤善市 清水馨八郎（千葉大学教授）
4	地域格差は縮少したか	現段階における地域開発の政策課題として、過密、過疎、格差、環境という四つの問題がある。ここでは、地域格差を測る方法とその実態を明らかにし、格差縮小の政策手段と効果について吟味する。	伊藤善市 西岡久男（青山学院大学教授）
5	過密都市と過大都市	過密都市と過大都市の違いを明らかにし、前者が入れものと中味との間の社会的バランスを後者が都市の適正規模論を問題にしていることを論証し、過密是正のための政策について解明する。	伊藤善市 菊竹清訓（東京女子大学教授）
6	山村、離島の過疎問題	過疎地域とは、人口が大幅に減少したために社会生活を営むことが困難となった地域をさす。ここでは、過疎の実態を明らかにし、過疎対策の諸類型とその効果について、広い視野から比較検討を加えたい。	伊藤善市 大城常夫（琉球大学教授）
7	地域開発と環境の創造	現在、工業化と都市化の進行に伴い、公害問題をはじめとする環境破壊が深刻化している。ここでは、開発がよりよき環境の創造と両立させるために、なぜ発想の転換が必要であるかを論じたい。	伊藤善市 鈴木忠義（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	開発理念の変遷	戦後における日本の開発政策の理念を類型化し、それが戦後における日本経済の復興、自立、高度成長、高密度、高福祉社会の建設、人間居住の総合的環境の創造という歴史的課題と対応していることを解明する。	伊藤善市 阿部統 （東京工業大学教授）
9	三全総の特質とねらい	ここでは、三つの全国総合開発計画の特質を比較検討し、第三次全国総合開発計画が、なぜ定住構想をうち出したかを明らかにする。また、21世紀における地域政策について長期展望を行う。	伊藤善市 下河辺淳 （国土庁事務次官）
10	国土利用計画と地価問題	地域開発政策は、国土の有効利用面積を拡大するが、土地の効用を高めるために地価を上昇させる。この利益を公平に分配するための政策を明らかにし、国土利用計画法のねらいと効果について吟味する。	伊藤善市 日下公人 （長銀開発第一部長）
11	地域開発と交通問題	交通・通信体系の整備は地域開発の必要条件である。これに地域住民のやる気が加わって十分条件が満たされる。ここでは、総合交通システムについて論じ、波及効果と逆流効果について解明する。	伊藤善市 角本良平 （交通評論家）
12	地方中堅都市の育成	過密、過疎、隔差、環境という政策課題にこたえるためには、地方中堅都市を育成することが必要である。それが果すべきいろいろな役割について解明する。	伊藤善市 吉田達男 （地域振興公団幹事）
13	地域開発と中小企業	人間は職場のないところ、職場に通勤できないところに定住しない。ここでは、地域開発が中小企業に与える影響は何か。また、成長業種をどのようにして育てるかについて解明する。	伊藤善市 清成忠男
14	経済開発と社会開発	地域開発政策の究極のねらいは、住民福祉の向上を図ることにある。したがって、経済開発は、そのための手段にすぎない。ここでは、福祉の意味を明らかにし、社会開発のプログラムについて解明する。	伊藤善市 松原治郎 （東京大学助教授）
15	美しい都市づくり	はじめに都市が「みやこ」と「いち」という基本的機能をもっていることを明らかにし、都市に期待されている安全性、快適性、利便性、芸術性について論じ、美しい都市づくりの意義を論ずる。	伊藤善市 内藤錦樹 （交通公社主任研究員）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	大都市の成長と衰退		
17	都市の土地利用の動態		
18	土地問題と住宅問題		
19	土地問題の背景		
20	土地政策の検討		
21	商業業務地区の再開発		
22	高密市街地の整備		
23	郊外住宅地の整備		
24	居住環境の改善と負担		
25	コミュニティ活動の役割と発展		
26	都市生活上の弱者への配慮		
27	交通混雑への対応		
28	都市廃棄物処理の考え方		
29	都市の安全の費用		
30	新たな都市の運営をめざして		

＝人口・食糧・資源Ⅰ＝

－人口・資源－

主任講師：岡崎陽一（厚生省人口問題研究所）
深海博明（慶応義塾大学教授）

全体のねらい

人類にとって、基本的に最も重要である人口と資源の問題を対象として、その本質や問題所在を明らかにした上で、世界と日本におけるこれ迄の問題展開、現状そしてその将来を筋を通して分析する。さらに一般にいい立てられている人口危機や資源危機が本当に差し迫り重大化しているのかどうか等のその虚実を検討し、人類が快適にかつ永遠に生存していけるようにするためには、どうすべきかを考究してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	世界の人口	過去から現在に至る期間に地球上の人口がどのように増加してきたかを概観し、産業革命後の一つの増加期と第2次大戦後の人口爆発の意義を説明する。将来における世界人口の増加の予測についても述べ、人口問題の重要性を指摘する。	岡崎陽一（厚生省人口問題研究所所長）
2	開発途上国の人口	開発途上国の人口爆発の原因を高出生率と低死亡率の両面から説明し、ついで人口増加が経済社会開発の障害要因となる事情について考える。さらに人口増加抑制のための政策について説明する。	同上
3	先進国の人口	先進国の人口が多産多死から少産少死に転換した過程を概説し、出生率低下のメカニズムと死亡率低下の原因を説明する。ついで人口都市集中の問題ならびに人口老齢化の進行に伴って生じている諸問題について考える。	同上
4	日本人口の動向	日本人口の長期間にわたる動向を概説し、とくに明治以降の人口増加と第2次大戦後の変化について説明する。出生率と死亡率の低下、それに伴う年齢構成の変化と将来人口見通しについて考える。	同上
5	日本における地域人口の変化	人口都市化は明治以降進行しているが第2次大戦後とくに急激になった。しかし最近地域開発の推進、産業構造の変化によりUターン、Jターンなどの変貌があらわれている。これらの状況を分析し、将来望ましい人口分布はどうあるべきかについて考える。	同上
6	高齢化社会の問題	わが国は今後、西欧諸国が経験しなかったほどに急速かつ深刻な高齢化社会をむかえようとしている。その原因と実情について説明し、さらにその中で発生する諸問題、中高年人口問題高齢者対策などについて説明する。	同上
7	資源問題入門	資源問題とは一体何なのかを正面切ってとりあげ、まず問題の本質や真の所在、その基本的決定要因、その課題および問題の範囲・対象を明確化する。さらに資源の定義やその分類・整理をも考える。	深海博明（慶応義塾大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	資源問題の展開過程	まず有史以来現在に至る世界資源問題の大きな展開過程を概観し、次に日本に重点をおいて、明治維新以来の展望過程を考察する。さらに1960年代以来の資源問題の新しい登場ないし挑戦の展開をとらえて分析を行い、資源問題の現段階をも解明する。	深海博明
9	資源危機の虚実	種々提起されている資源危機論を対象に、その分類・整理を大胆に行うとともに、地球資源や環境の物理的枯渇が差し迫っているのかどうかを、地球の資源力や埋蔵量の検討等から、大きく評価・判断し、さらに現在の危機の基本的性格（人為的危機）を明示する。	同上
10	石油・エネルギーのケース・スタディ	1973年の第1次石油危機以来、最大の関心の対象となった石油エネルギーをとりあげ、ケース・スタディを行う。1980年代に入って危機論から楽観論への問題状況の転換が何故生じたのか、石油枯渇は何時重大化するのか、石油・エネルギー危機をすでに乗り切ったと楽観視できるのかどうか等を検討する。	同上
11	世界の資源需給の構造	世界の資源の賦存・供給と需要・消費の偏在性を考察し、それと関連させて世界資源需給の動向とパターンを総合的に分析する。さらに国際大資本の存在と今後の役割、そして世界資源貿易や資源市場についても説明する。	同上
12	日本の資源問題の特徴・特殊性	日本は世界で資源最稀少国といわれているが、本当にそうなのかどうか、何故稀少国なのにこれだけ豊かな経済活動や生活を営めるのかの問題意識に中心をおいて、世界の資源循環に占める日本の地位・特徴・特殊性を分析する。	同上
13	資源問題の理論分析	社会科学とくに経済学に重点をおいて、資源問題はこれまで理論的にどのように分析されてきたのか、現段階でどんな新しい分析が展開されつつあるのか、資源問題の十分な理論的解明は可能なのかどうか、資源問題のもつ根本的な挑戦とは何か等を考察する。	同上
14	資源政策の体系と方向	資源問題解決のための政策は、どのような基本目標なり基本前提の下に、どう立案・実施されていくべきかの問題を、総合的戦略と具体的戦術との双方から体系的に分析を加える。	同上
15	今後の展望と対応のあり方	今後世界と日本の資源問題はどのように展開していくのか、その将来を決定する要因は何か、危機を回避するためにはどんな発想の転換なり対応策が必要であるかを、日本に中心をおいて考究し、各自の問題として真剣に受け止め、解決に努力する必要性を指摘する。	同上

＝人口・食糧・資源Ⅱ＝

－人口・食糧－

主任講師：安川正彬（慶応義塾大学教授）
唯是康彦（千葉大学教授）

全体のねらい

有限の地球にふえ続ける人類が生存していく道は厳しいものがある。そこでの焦点は、人口増加と資源・食糧とのバランスをどのように図るかにある。後期の授業では、とくに人口と食糧に課題をもとめて考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	経済社会と人口変動	経済社会の発展と多産多死から少産少死にいたる人口転換過程と対比を考える。	安川正彬（慶応義塾大学教授）
2	人口変動の仕組み	第一次産業から第三次産業への構造変化にかかわる人口移動の姿を検討し、人口転換との関連を加えて人口学の基本をさぐる。	同上
3	人口学説と時代的背景	人口と経済の学説の変遷をたどり、その時代的背景を概観する。	同上
4	適度人口を測る	一国の適度人口はいくらか。それはどのように測ることができるか。適度人口をめぐる学説と計測の可能性をさぐる。	同上
5	人口増加と経済成長	人口増加は経済成長へのプラス要因かマイナス要因か。経済成長論を通じて、先進国と発展途上国との対比を検討する。	同上
6	有限の地球と人口	人類生存への道は、人口の将来に何を目標に置くべきか。有限の地球への認識を強調して、静止人口を目標設定とする必要を強調する。	同上
7	人口と食生活	人口が増加する場合はもちろんのこと減少する場合も食糧消費は増加することがある。それは生活水準が向上するからであり、そこにはいろいろな段階がある。	唯是康彦（千葉大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	地球の食糧供給能力	世界は長期的に食糧消費の増加傾向にあるが、地球はこれに適応できるのだろうか。植物の光合成能力と環境条件から潜在生産力の推定を行う。	唯是康彦
9	開発途上国と緑の革命	人口爆発の震源地は開発途上国であるが、その食糧供給はどのようにしてなされるか。緑の革命は一つの希望であるが、そこにはまた多くの問題が山積している。	同　上
10	世界の水産資源	食糧原料の一端を担う水産業は日本人にとってとくに重要であるが、地球の有限性のために供給制限が発生し、それが200海里問題として顕在化している。	同　上
11	食　糧　戦　略	世界の食糧問題は決して長期問題にとどまることなく、現在の貿易構造に投影されて、国際政治と密接な関係をもつようになった。その有効性と影響は何か。	同　上
12	日本の食糧自給率	不安定な世界の食糧需給関係の中にあって、日本の食糧自給率は国際的にみてきわめて低いといわれる。自給率の考え方、現状の実態その問題点と対策について述べる。	同　上
13	アグリビジネスと食品価格（農業関連産業）	食糧需給の不安定性は具体的には価格水準とその変動に反映されるが、この点で原料生産と最終消費をつなぐアグリビジネスが、重要な役割を果す。	同　上
14	農業政策と財政負担	食糧の安定供給は世界にとっても日本にとっても重要であるが、他面で消費者は安い食糧を欲しているし、供給者はそれで生計をたててゆかねばならない。その点で農政の在り方が究明される。	同　上
15	生態系・技術・人口	食糧生産は生態系と密接な関係をもっており、その関係の中から技術体系が確立してくるし、食生活も成立してくる。食糧と人口の関係もここに基礎を置くことになる。	同　上